

Tohoku Gakuin University
Faculty Activities Report

2023

東北学院大学
教員業務・活動報告書

2022

東北学院大学

2023(令和5)年8月31日

東北学院大学
教員業務・活動報告書
2022

東北学院大学
2023 (令和5) 年8月31日

凡 例

1. 業績の範囲

- ・2022年4月から2023年3月までとする。

2. 掲載対象

- ・2022年4月1日現在で本学に在職するすべての専任の教育職員を対象とする。

3. 掲載順序

- ・文学部（英文学科、総合人文学科、歴史学科、教育学科）、経済学部（経済学科、共生社会経済学科）、経営学部（経営学科）、法学部（法律学科）、工学部（機械知能工学科、電気電子工学科、環境建設工学科、情報基盤工学科）、教養学部（人間科学科、言語文化学科、情報科学科、地域構想学科）の順とし、さらに教授（嘱託教授含む）、准教授、講師、助教別に五十音順とした。
- ・各教員から提出された区分別に、年代の古い順から掲載した。なお、教育活動、研究活動のいずれにおいても時期が複数年にわたる場合には、活動の開始時期を基準として年月日順に記載し、学会等及び社会活動については、就任年月日順に記載した。

4. 掲載内容

- ・掲載内容は、すべて本人からの報告によるものである。
- ・大学院の授業担当の有無は、2020年度に開講された授業のものである。
- ・教育活動の区分は、1. 教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）、2. 作成した教科書、教材、参考書、3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等、4. その他教育活動上特記すべき事項とした。
- ・研究活動の区分は、A. 学術書、B a. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度あり）、B b. 学術誌に掲載した学術論文（審査制度なし）、C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文、D. 一般著書・論文・エッセー（専門分野）、E. 一般著書・論文・エッセー（専門分野に関連する領域）、F. 書評・論評（専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等）、G. 学会における研究発表、H. 翻訳（学術書や原典等）、I. 特許とした。
- ・共著（論文）の場合、該当頁数の記入にあたって、本人の分担箇所を特定できる場合は、その頁数を記載した。
- ・芸術分野や体育実技等の分野の教員は、著書・論文等以外の展覧会・演奏会・競技会等での発表のうち、特に顕著な業績と認められるものについて記載した。

教員一覽

学長

教授

大西晴樹

文学部

英文学科

教授

石橋敬太郎

植松靖夫

大石正幸

豊島孝之

那須川訓也

バックレイ フィリップ

福士航

古川弘子

吉村富美子

准教授

井出達郎

大沼仁美

森山盛吉

総合人文学科

教授

川島堅二

木村純二

椎名雄一郎

出村みや子

原田浩司

吉田新

准教授

田島卓

講師

大門耕平

藤野雄大

渡邊有美

歴史学科

教授

小沼孝博

河西晃祐

菊池[柳谷]慶子

楠義彦

佐川正敏

櫻井康人

佐藤義則

下倉涉

辻秀人

永田英明

七海雅人

政岡伸洋

渡辺昭一

准教授

金子祥之

杵淵文夫

竹井英文

講師

多賀良寛

教育学科

教授

稲垣忠

加藤卓

紺野祐

佐藤正寿

長島康雄

村野井仁

ロング クリストファー

渡辺通子

准教授

大友麻子

清水遥

清多英羽

高橋千枝

助教

松本進乃助

経済学部

経済学科

教授

アレイ ウィルソン

伊鹿倉正司

泉正樹

大塚芳宏

小沼宗一

倉田洋

篠崎剛

白鳥圭志

千葉昭彦

舟島義人

前田修也

若生徹

准教授

板明果

稲見裕介

小見林陽介

谷野可子

田野穂

松前龍宜

宮本拓郎

講師

塩見由梨

白井大地

望月理生
共生社会経済学科
教授

石川真作
郭基由煥
熊沢由美
黒坂愛衣
佐藤藤滋
佐藤藤康純
仁

准教授
小宮友根
齊藤康則
佐久間香子
谷達彦
宮地克典
講師
武藤敦士

経営学部
経営学科
教授

岡田耕一郎
折橋伸哉
小池和彰
齋藤善之
佐久義浩
佐々木郁子
菅山真次
鈴木好和
根木一志
松岡孝介
松村尚彦
村山口貴俊
教

准教授
秋池篤
古賀裕也
竹内真治
堀彦

講師
板橋慶明
萩原丈男
窪田嵩哉
宋元旭
棚橋則子

法学部
法律学科
教授

阿部未央
石垣茂光
井上義比古
遠藤隆幸
大窪雄誠
菊地雄介

木下淑惠
黒田秀治
近藤藤雄
齋藤木く
佐々木く
佐藤藤英
佐藤藤久優
陶田久利
辻田芳
富田田雄
中村須拓
三宮川尚
横田尚昌
准教授
三條秀夫
玉井裕貴
内藤裕貴
羽田さゆり
松浦陽子
講師
井坂正
松原俊介

工学部
機械知能工学科
教授

魚橋慶子
小野憲文
梶川伸哉
加藤陽子
城戸宏
熊谷章
齋藤正
星藤修
松浦朗
矢口寛
准教授
岡田宏
佐瀬一
濱西伸
李

電気電子工学科
教授

岩谷幸雄
大小佳文
郭澤哲海
川又義国
金呉藤文
佐藤敏
嶋井正
土井修
栞原明

准教授
 桑野聡子
 佐々木義卓
 鈴木木仁志

環境建設工学科

教授
 李相勲
 井川雅望
 石川雅美
 櫻井一弥
 鈴木道哉
 武田三弘
 中沢正利
 中村寛治
 韓連熙
 宮内啓介
 山口晶

准教授
 崎山俊雄
 千田知弘
 恒松良純
 三戸部佑太

情報基盤工学科

教授
 淡野照義
 石上忍夫
 加藤和正博
 神永古有学
 郷田有利光
 志子木利則
 鈴木川英機

准教授
 門倉博之
 木下勉幸
 木村敏太郎
 物部寛太郎

講師
 深瀬道晴
 森島佑佑

教養学部

人間科学科

教授
 大迫章史
 片瀬一男
 加藤藤健博
 神林博二
 黒須憲
 坂本憲讓
 櫻井研三
 宍清水隆之
 鈴木幸裕
 仙田幸努
 千葉智子則

萩原俊彦
 原野義彦
 福野幹輝

准教授

井川純 一人
 泉山靖 造
 岡崎勘 宏
 金井嘉 重
 小林海 涉
 東海林 美
 坪田益 大
 吉田雄

講師
 白倉 瞳

言語文化学科

教授

秋葉勉
 アンドリューズ デール
 今井奈緒子
 金永 昊
 小林 陸
 佐伯 啓
 信太 光 郎
 下津塚 信 也
 塚本内 昌 德
 坂谷基 和
 松谷世 英
 楊部 友 子
 渡部

准教授

井上正 子
 巖谷陸 月
 岸浩介 介
 金亨 貞
 城山拓 也
 高橋直 彦
 原貴 子
 房賢 嬉

フリック ウルリッヒ

翠川博之
 李文景楠
 李承赫

講師
 佐藤真紀
 宮本直規
 門間俊明

情報科学科

教授

石田弘 隆
 伊藤 之
 坂本 伸
 菅原 研
 杉浦 樹
 武田敦志

牧松松	野尾本	梯行章	也雄代
准教授			
岩片佐高土星村	田方藤橋原野上	友紀子	江篤幸子樹志
地域構想学科			
教授			
岩伊菅高平增松柳和	動藤久間原野橋吹子原井田	志晶政真岳信喜	乃文広枝彦二彦正悟也春
准教授			
天遠大目柳	野藤澤代澤	和史邦英	彦尚仲康明

教員業務・活動報告

学

長

2022年度							
所属	経済学部 経済学科	職名	教授	氏名	大西 晴樹	大学院の授業 担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概 要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・ 共著 の別	発行又は発表の年月 (西暦)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要			
IV 学会等及び社会における主な活動							
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
VI 学内における管理運営に関する諸活動							

教員業務・活動報告

文 学 部

英 文 学 科

総 合 人 文 学 科

歴 史 学 科

教 育 学 科

2022年度							
所属	文学部 英文学科	職名	教授	氏名	石橋 敬太郎	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		<ul style="list-style-type: none"> ・すべての授業で、学科課程における必要性という観点から到達目標を見直す。 ・『イギリス演劇Ⅰ』と『英米思想史Ⅰ・Ⅱ』において、学生の理解に資する講義資料を作成する。 					
今年度の進捗状況		上記目標について、授業がわかりにくいとの学生の要望に応じて、より授業がわかりやすい講義資料を作成した。小テストなどの結果から、学生の理解が向上したことにより、ある程度の進捗がみられた。					
来年度の進捗目標		・上記の目標については、さらに講義内容と配布資料の改善により、学科課程の目標到達に向けた教育活動に努める。					
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
『英国三兄弟の旅』におけるペルシャとキリスト教国との同盟のゆくえーシャーリー兄弟が見たサファヴィー朝ペルシャー		単著	2023年3月	東北学院大学英語英文学研究所紀要(47)		石橋敬太郎	pp.23-42
『島の王女』におけるキリスト教信仰ーポルトガル人による異教徒の改宗と植民地化		単著	2023年2月	東北学院大学論集ー英語英文学ー(106)		石橋敬太郎	pp.33-49
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		・初期近代イギリス演劇のうち、イスラーム教徒のカトリック改宗に関する作品が執筆・上演された背景について、当時の公文書等の歴史資料から明らかにする。					
今年度の進捗状況		演劇作品が執筆された当時のイスラーム世界を取り巻く国際情勢から、カトリック改宗に関する事情が明らかになってきたため、おおむね進捗があったといえる。					
来年度の進捗目標		イスラーム教徒を扱った最後の演劇作品マッシンジャー作『背教者』から、イングランドのカトリック改宗の問題を明らかにし、当時の宗教事情の一端を明らかにする。					
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要		
IV 学会等及び社会における主な活動							
2023年3月				なぜシェイクスピアの『ヴェニスの商人』にモロッコ王が登場したのか 講師			
2023年1月				イギリスにおける公共圏の発達とジャーナリズム 講師			
2022年6月				なぜシェイクスピアの『ヴェニスの商人』にモロッコ王が登場したのか 講師			

2021年4月～	日本シェイクスピア協会 委員		
1987年4月～	日本英文学会東北支部 会員		
1987年4月～	日本シェイクスピア協会 会員		
1987年4月～	日本英文学会 会員		
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	文学部 英文学科	職名	嘱託教授	氏名	植松 靖夫	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
福島県東稜高等学校の2年生に講義		2022年12月14日～2022年12月14日		福島東稜高等学校「特別進学コース」2年生の生徒さんに本学の教室にて「英文と日本文の書き方」をテーマに講義を行なった。			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要			
IV 学会等及び社会における主な活動							
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
VI 学内における管理運営に関する諸活動							

2022年度							
所属	文学部 英文学科	職名	教授	氏名	大石 正幸	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
授業内容に興味を持たせると同時に、学生の自発的な学習を促すための工夫		2020年4月～		学修低下の著しい学生に理解力の涵養のため、理解が進むことを実感できる指導をおこなっている。問題設定と解を自分でおこなわせ、さらに、茫漠とした解を文字化することを通して理解の整理を促している。			
授業内容の理解を促進するための工夫		2020年4月～		毎回の授業の冒頭から半分ほどまでを、復習に当て、前回の授業の概略を述べ、授業終了時には次回のための下準備を伝える。			
論文作成および研究の指導		2020年4月～		大学院において、論文作成と研究遂行に必須の基礎的事項の指導を細かくおこなっている。			
授業内容の理解を定着させるための授業以外の時間を利用した工夫		2020年4月～		授業とは別の時間を(オフィスアワー等を利用し)随時受け付け、学生個人の興味と習熟に沿った始動をしている。			
授業内容の組み立てに関する工夫		2020年4月～		問題設定と判断材料、論理的帰結を常時意識させるようにし、項目中心ではなく大きな議論の枠組みで感上げることを意識させている。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要			
IV 学会等及び社会における主な活動							
2004年～			日本英語学会				

1983年～	日本英語学会 会員		
1982年～	日本語学会 (The Linguistic Society of Japan) 会員		
1981年～	Generative Linguistics in the Old World (GLOW) 会員		
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	文学部 英文学科	職名	教授	氏名	豊島 孝之	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
反転授業		2022年10月～		大規模講義科目において、予習としてオン・デマンド講義ビデオを視聴させ、教室講義では再度詳説・追加事例を加えて授業を展開している。			
学生の習熟度を見極めながら授業を行っている。		2018年～		必修、専門、選択などの科目の性質に応じて、授業形態、学生の興味・習熟度に応じて、授業の進度、説明、練習の分量・方式を試している。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
オン・デマンド講義ビデオ		2020年4月～					
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要			
科学研究費補助金 基盤研究(C)(一般)		2021年度～2023年度	個別(研究代表者)				
IV 学会等及び社会における主な活動							
2021年7月～2022年6月				日本学術振興会 特別研究員等審査会/卓越研究員候補者選考委員会/国際事業委員会 専門委員/書面審査員/書面審査員・書面評価員			
2018年7月～				日本言語学会 会員			
1994年1月～				Linguistic Society of America 会員			
1990年11月～				日本英語学会 会員			

V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			
1. 大学院文学研究科英語英文学専攻主任 2. 英語英文学研究所所長 3. 中央図書館委員 4. 教職課程センター所員 5. 文学部英文学科AO面接委員			

2022年度							
所属	文学部 英文学科	職名	教授	氏名	那須川 訓也	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2021年度教育功績等優秀教員賞受賞		2022年7月20日		2021年度に実施された授業改善のための学生アンケートのほか、シラバスや教員業務活動報告などの資料に基づいて総合的に評価し、教育活動において優れていると認められた教員を表彰するものである。			
論文作成、および、研究発表の指導		2022年4月1日～		大学院において、論文作成、および、研究発表の仕方について、きめ細やかな指導をしている。			
授業内容全体の組み立てに関する工夫		2022年4月1日～		学生のレベルや興味を把握し、それらを授業に反映させる目的で、独自の事前調査を初回の授業でおこなっている。			
業内容の理解を定着させるための授業以外の時間を利用した工夫		2022年4月1日～		授業とは別の時間を設け、音声・音響解析装置を使いながら、学生個人にきめ細やかな指導をしている。			
授業内容の理解を促進するための工夫		2022年4月1日～		毎回の授業の冒頭で、復習という意味で、前回の授業の概略を必ず述べ、授業終了時にはその回のまとめをおこなっている。			
授業内容に興味をもたせると同時に、学生の自発的な学習を促すための工夫		2022年4月1日～		授業の要点をまとめたプリントや関連資料を配布し、それに沿って授業をおこなっている。授業内容の理解を深めるように、グループ活動および学習発表の機会を設けている。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
Oishi, M. & K.Nasukawa. Introduction to English Linguistics. Llun Press.		2022年4月1日～2023年3月31日					
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
東北学院榴ヶ岡高等学校「榴ヶ岡TGタイム英語研修」の講師を務めた。		2023年2月10日～2023年2月10日		東北学院榴ヶ岡高等学校で、「英語らしい発音: /t/の発音について」と題する大学模擬授業(60分)を行った。			
現在の課題・目標		①授業時間以外での学生とのコミュニケーションの時間を大切にし、学生からのさまざまな相談に応じる。 ②「音韻論II」の授業用ハンドアウトを改善する。 ③「英語学演習III・IV」の授業用ハンドアウトを改善する。					
今年度の進捗状況		上記目標①については、授業評価アンケートで好評価を得ることができた。 上記目標②については、「音韻論II」の授業用ハンドアウトを改善することで、より分かりやすい授業を展開することができた。 上記目標③についても、「英語学演習III・IV」の教材を改善することで、より理解しやすい授業を展開することができた。					
来年度の進捗目標		①今年度に引き続き、授業時間以外での学生とのコミュニケーションの時間を大切にし、学生からのさまざまな相談に応じる。 ②「English Phonetics I・II」「音韻論I」の授業用ハンドアウトを改善する。 ③「英語学演習I・II」の授業用ハンドアウトを改善する。					
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							

[05] 音韻素性 [39] 軟音化現象 [23] Harris, John (1994) English Sound Structure, Blackwell. [24] Harris, John & Edmund Gussmann (1998) Final codas: why the west was wrong. Structure and Interpretation: Studies in Phonology, edited by Eugeniusz Cyran, 139-162. Lublin: Folium.『言語理論・言語獲得理論から見たキータームと名著解題』	分担執筆	2023年3月	開拓社	那須川訓也	pp.10-11, 78-79, 184-186, 187-189
第3章 音声言語と手話言語における音韻特性の種類と言語機能障害『手話が「発音」できなくなる時: 言語機能障害からみる話者と社会』	共著	2022年9月	ひつじ書房	那須川訓也(石原和, 菊澤律子 編)	pp.55-64
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)					
A PpF approach to vowel height harmony and ATR harmony	共著	2022年4月	Sapporo University, Phonological Externalization, 7	Nasukawa, Kuniya & Nancy C. Kula	pp.81-95
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
Challenging a widely-accepted account of vowel metathesis in Nagoya Japanese with no reference to precedence	共著	2022年8月	Ravignani, Andrea, Rie Asano, Daria Valente, Francesco Ferretti, Stefan Hartmann, Misato Hayashi, Yannick Jadoul, Mauricio Martins, Yoshei Oseki, Evelina Daniela Rodrigues, Olga Vasileva, Slawomir Waciewicz (eds.), Proceedings of Proceedings of the Joint Conference on Language Evolution (JCoLE)	Nasukawa, Kuniya & Shin-ichi Tanaka	pp.550-552
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)					
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)					
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)					
G. 学会における研究発表					
音節主音的の子音の音韻表示	共同	2023年3月	第18回音韻論フェスタ(Online)	大沼仁美, 那須川訓也	
Stress assignment and linear order in English affixation	単独	2023年2月	The 13th Workshop on the Phonological Externalization of Morphosyntactic Structure (PHEX13)(Sapporo, Online)	Nasukawa, Kuniya	
Challenging a widely-accepted account of vowel metathesis in Nagoya Japanese with no reference to precedence	共同	2022年9月	Joint Conference on Language Evolution (JCoLE)(Kanazawa)	Nasukawa, Kuniya & Shin-ichi Tanaka	
終助詞の音響的特徴と自閉スペクトラム	共同	2022年8月	自閉スペクトラム症(ASD)における言語と共感機能(仙台)	那須川訓也, 宋歌, 木山幸子	
Representing nasal vowels in Precedence-free Phonology	共同	2022年5月	The 29th Manchester Phonology Meeting(Online)	Nasukawa, Kuniya & Phillip Backley	
H. 翻訳(学術書や原典等)					
I. 特許					
現在の課題・目標	①進化言語学の枠組みで、非時系列音韻(Precedence-free Phonology)を用いて諸音韻現象を分析する。 ②様々な音韻表示理論を比較し、分節内構造と韻律構造の相関関係について探究する。 ともに、来年度も国内外の機関誌や学会で、今年度の研究成果をさらに発展させたものを報告できるように努める。				
今年度の進捗状況	上記目標①については、その研究成果を国内外の機関誌や学会で発表した(「研究活動」を参照)。 上記目標②についても、その研究成果を国内外の機関誌や学会で発表した(「研究活動」を参照)。 補足: 東北学院大学2022年度研究功績等表彰者(2023年1月受賞)。				

<p>来年度の進捗目標</p>	<p>①今年度の研究成果をもとに、進化言語学の枠組みで、非時系列音韻 (Precedence-free Phonology) をさらに発展させ、音韻構造構築過程について探求する。 ②今年度に引き続き、様々な音韻表示理論を比較し、分節内構造と韻律構造の相関関係について探究する。ともに、来年度も国内外の機関誌や学会で、今年度の研究成果をさらに発展させたものを報告できるように努める。</p>		
<p>Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</p>			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
<p>科学研究費補助金 基盤研究(C)</p>	<p>2022年度～2026年度</p>	<p>共同(研究代表者)</p>	<p>一般言語学における生成文法理論の見地から、語(形態素)を構成する音韻表示がどのように構築され、それがどのように音声的に具現化されるかを、理論的かつ実証的に明らかにすることを目的とする。従来、言語機能の統語部門は形態・統語表示のみを構築する演算装置であると考えられてきた。これに対し本研究では、音韻表示も統語部門で構築され、統語表示の外在化過程と同じ仕組みで、音韻構造も音声的に具現化(例 線形化、強勢付与、分節音弱化)されるということを理論的に明らかにすると同時に、諸言語の音韻現象を参照・分析し、考案モデルの妥当性を言語類型論的、言語獲得論的、通時的角度からも検討する。</p>
<p>科学研究費補助金 基盤研究(B)</p>	<p>2022年度～2024年度</p>	<p>共同(研究分担者)</p>	<p>生成文法のミニマリスト・プログラムに基づき、統語(計算)部門で作られる構造(集合)が、どのように音声に写像されるかを、理論的・実証的に明らかにすることが目的である。線型順序のない統語構造に基づいて強勢と韻律が決定され、その特徴によって語順や「移動」などの「統語的」特徴が決定されるという新しいモデル Structure-Phonology-Order (SPO) を提案し、統語と音韻のインタフェース(外在化)を理論的に明らかにするとともに、英語史コーパスおよび世界の言語の包括的なデータベースを検証することによって、このモデルが歴史的にも言語類型論的にも正しいことを実証する。</p>
<p>科学研究費補助金 新学術領域研究(研究領域提案型)</p>	<p>2020年度～2022年度</p>	<p>個別(研究代表者)</p>	<p>人間言語の起源は、語彙項目を対象とする回帰的併合操作の出現にあるとされる。従来この操作は、音韻範疇に対しては適用されないと考えられてきた。しかし、本研究では、音韻範疇(素性)を対象とする併合操作が「語彙化過程」において存在する、ということ、様々な音韻現象の分析を通して明らかにする。これにより、併合操作が適用される言語学的対象物の種類は、従来想定されていたものよりも多種である可能性が生じる。以上を遂行するにあたり、昨年度に引き続き、研究全体を以下の3種類の部門(A部門: 形態素内音韻属性の語彙化過程の解明、B部門: 極小主義的音韻素性の探求、C部門: 回帰的階層構造の音声的線形化の探求)に分け、それぞれの研究課題に関する文献を調査し、それらの理論上の争点を明確にすることを試みた。その上で、極小論の研究指針に合致するモデルの構築を行った。</p>
<p>科学研究費補助金 基盤研究(S)</p>	<p>2019年度～2023年度</p>	<p>共同(研究分担者)</p>	<p>主語(S)が目的語(O)に先行するSO語順がその逆のOS語順に比べて処理負荷が低く母語話者に好まれる傾向があることが報告されている。しかし、従来の研究はSO語順を基本語順にもつSO言語を対象にしているため、SO語順選好が個別言語の基本語順を反映したものなのか、あるいは人間のより普遍的な認知特性を反映したものなのかが分からない。この2種類の要因の影響を峻別するためには、OS語順を基本語順に持つOS言語で検証を行う必要がある。そこで、本研究では、SO言語とOS言語を比較対照することによって、人間言語における語順選好を決定する要因ならびに、「言語の語順」と「思考の順序」との関係を明らかにする。</p>

科学研究費補助金 基盤研究(A)	2019年度～2023年度	共同(研究分担者)	日本語の文末助詞(ね、よ等)には、言語における対人コミュニケーション情報が集中的に出現する。例えばたった一文字の違いである「いいね」と「いいよ」は、適切に使用しないと問題となりえる。これに対応するかのように自閉症者は文末助詞(特に「ね」)をあまり使用しないことが知られている。本研究では終助詞が社会的な情報を生み出す脳メカニズムを検討し、自閉症者の言語運用上の問題の支援に繋がる知見を見出す。
科学研究費補助金 基盤研究(A)	2019年度～2022年度	共同(研究分担者)	
IV 学会等及び社会における主な活動			
2021年7月～2022年6月	日本学術振興会 科学研究員等審査会専門委員、卓越研究員候補者選考委員会書面審査員及び国際事業委員会書面審査員・書面評価員 審査・評価、査読		
2021年4月～	日本音韻論学会 副会長		
2021年4月～2022年8月	日本言語学会 広報報委員長		
2019年9月～2022年8月	日本言語学会 広報報委員		
2018年4月～	日本言語学会 評議員		
2017年11月～	Generative Linguistics in the Old World (GLOW) 査読委員		
2017年7月～	文部科省委託 小学校英語教科化に向けた専門性向上のための講習の開発・実施事業「平成30年度東北学院大学小学校教員のための中学英語免許取得認定講習」(英語音声の仕組み) 講師		
2016年1月～	John Benjamins 査読委員		
2015年12月～	Glossa 査読委員		
2015年5月～	Lingua 査読委員		
2013年9月～	Journal of Linguistics 査読委員		
2012年11月～	Manchester Phonology Meeting (mfm) 査読委員		
2012年11月～	Manchester Phonology Meeting (mfm) 諮問委員会委員		
2012年10月～	Old World Conference in Phonology (OCP) 査読委員		
2010年10月～	The Linguistic Review 査読委員		
2008年10月～	Congreso Internacional Phonetics and Phonology in Iberia (PaPI) 科学評議員		
2005年9月～	Restrictive Phonology Research Group (RPRG) 理事		
2005年～	Restrictive Phonology Research Group (RPRG) 会員		
1998年～	Generative Linguistics in the Old World (GLOW) 会員		
1997年～	日本音韻論学会 会員		
1993年～	日本言語学会 会員		
1993年～	Linguistic Association of Great Britain (LAGB) 会員		
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			
2020年4月～ 2021年4月～ 他	東北学院大学大学院文学研究科長 東北学院大学学術研究会『論集』編集委員		

2022年度							
所属	文学部 英文学科	職名	教授	氏名	バックレイ フィリップ	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
論文作成, および, 研究発表の指導		2022年4月		大学院において, 論文作成, および, 研究発表の仕方について, きめ細やかな指導をしている。			
授業内容の理解を促進するための工夫		2022年4月		毎回の授業の冒頭で, 復習という意味で, 前回の授業の概略を必ず述べ, 授業終了時にはその回のまとめをおこなっている。			
授業内容に興味をもたせると同時に, 学生の自発的な学習を促すための工夫		2022年4月		授業内容に興味をもたせるために, マルチメディア機器を利用している。また, それらの機器の使用方法を具体的に指導している。			
授業の進め方, および, 授業内容をよく理解させるための工夫		2022年4月		授業の要点をまとめたプリントや関連資料を配布し, それに沿って授業をおこなっている。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要			
IV 学会等及び社会における主な活動							
2008年10月～			Congreso Internacional Phonetics and Phonology in Iberia (PaPI) 科学評議員				
2005年9月～			Restrictive Phonology Research Group (RPRG) 理事				
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等			

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	
VI 学内における管理運営に関する諸活動	

2022年度							
所属	文学部 英文学科	職名	教授	氏名	福士 航	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
出張講義		2022年10月21日		出張講義「英文学とジェンダー」を宮城県立角田高等学校で行った			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要				
IV 学会等及び社会における主な活動							
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等				
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
VI 学内における管理運営に関する諸活動							

2022年度							
所属	文学部 英文学科	職名	教授	氏名	古川 弘子	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
授業で扱うテーマについての理解を深める工夫		2022年4月～2023年3月		「学生の疑問や感想、要望を授業内容に取り入れたり共有したりする工夫」でも触れたが、受講生の関心を探り、それに寄り添った授業内容を提供したり、理論的な事柄を説明する際には学生がイメージしやすい具体的な事例を数多く紹介したりしている。また、配布資料に加えて映画やYouTubeなどの動画、外部ウェブサイトなども活用することで、視覚的にも理解を促進させる工夫を行っている。さらに、マナバの「レスポンス」機能を使って授業中にグループワークの成果を共有したり、それを見ながら発表してもらったりすることで、受講生の理解度が進んだだけでなく、受講生の主体性が高まる非常に大きな効果も見られた。			
学生の疑問や感想、要望を授業内容に取り入れたり共有したりする工夫		2022年4月～2023年3月		毎回の授業後に、受講生にはマナバの「アンケート」機能を使って授業中に考えたこと、疑問、感想や要望を送ってもらい、次の授業の最初に他の受講生と共有している。この活動は受講生が授業を通して考えたことを整理し、言語化する力を養う効果があった。そして、疑問や質問にはその都度、回答をしたり、関連情報を提供して受講生と考察を深めたり議論を行ったりしているため、学びを深める効果もあった。さらには、受講生からの要望もできる限り授業内容に反映させ、受講生の問題意識や興味と授業内容が重なるような工夫を行っている。			
学生が主体的に授業に参加し、自分で課題を見つけ、考え、ことばで伝える力を養うための工夫		2022年4月～2023年3月		ディスカッション、個人でのプレゼンテーションやグループでのプレゼンテーションなどの「アクティブ・ラーニング」を可能な限り授業に取り入れている。これらの活動を通して、受講生には「①考えながら学ぶこと、②学んだことをもとに自分で課題を見つけること、③その課題に対する自分の意見を整理すること、④整理した意見を言語化して他者に伝えること」の4点を授業中に積極的に行ってもらい、主体的な授業参加を促進している。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		<ol style="list-style-type: none"> 1. 学生が主体的に授業に参加し、自分で課題を見つけ、考え、ことばで伝える力を養うための工夫を行う。 2. 学生の疑問や感想、要望を授業内容に取り入れたり共有したりする工夫を行う。 3. 学生で扱うテーマについての理解を促進させるための工夫を行う。 					
今年度の進捗状況		<ol style="list-style-type: none"> 1. ディスカッション、個人でのプレゼンテーションやグループでのプレゼンテーションなどの「アクティブ・ラーニング」を可能な限り授業に取り入れた結果、受講生が「①考えながら学ぶこと、②学んだことをもとに自分で課題を見つけること、③その課題に対する自分の意見を整理すること、④整理した意見を言語化して他者に伝えること」の4点について力を養うことができた。また、毎回自分にとっての小さな目標を立てて授業に臨むように促した結果、各受講生が設定した目標を目指して主体的に授業参加をするようになったことが、マナバの「アンケート」機能を使って毎回送ってもらっている感想を読むと分かった。 2. 上記の通り、受講生にはマナバ「アンケート」機能を使って授業中に考えたこと、疑問、感想や要望を送ってもらった。この内容を次の授業の最初に他の受講生と共有した結果、受講生が授業を通して考えたことを整理し、言語化する力を養う効果があった。また、他の受講生の意見を知ることで、多様な視点や意見への気づきがあり、受講生の学びをさらに深める効果もあった。そして、疑問などには回答をしたり受講生と一緒にさらに考えたりしたこと、学びを深める効果があった。さらには、受講生からの要望も可能な限り授業に反映させることで、受講生のより主体的な授業参加がみられた。 3. 受講生が日常生活でなじみのある映画やYouTubeなどの動画、外部ウェブサイトなどを必要に応じて活用することで、授業で紹介する理論的なことや概念的なことがらについての理解を促進し、身近な事例と結び付けて考えることができるようになった。加えて、マナバの「レスポンス」機能を使って授業中にグループワークの成果を共有したり、それを見ながら発表してもらったりすることで、受講生の理解度が進んだだけでなく、受講生の主体性が高まる非常に大きな効果も見られた。 					
来年度の進捗目標		来年度も今年度同様、上記(1)～(3)の目標達成のために努力していく。また、新学部新学科での教育が始まるため、新学科へ入学してきた学生の興味や問題意識に合うような授業内容を提供できるように工夫していきたい。					
II 研究活動							

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)					
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)					
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)					
G. 学会における研究発表					
女性はどう訳されてきた？	単独	2022年12月	日本大学国際関係学部国際教養学科学術講演会(日本大学国際関係学部)	古川弘子	
翻訳が提案した女性器名称の可能性を探る:『からだ・私たち自身』翻訳の意図と読者受容から	単独	2022年9月	日本通訳翻訳学会第23回会年次大会(Zoom)	古川弘子	
H. 翻訳(学術書や原典等)					
I. 特許					
現在の課題・目標	<p>1. まず、科研で採用された計画を基に、Our Bodies, Ourselvesの翻訳テキスト『からだ・私たち自身』(The Boston Women's Health Book Collective、ボストン女の健康の本集団訳、1988/1984版の日本語訳)と『女のからだ』(The Boston Women's Health Book Collective、ボストン女の健康の本集団訳、1975/1973版の日本語訳)を研究対象として、①起点テキストと目標テキストの精読を通して定量・定性分析を含む比較分析、②翻訳の意図や翻訳の背景、読者受容についての調査、③2つの翻訳テキストの出版当時の日本と世界の状況についての調査、の3点について行う。</p> <p>2. 次に、江戸時代に朝鮮との外交と貿易に貢献した朝鮮通詞と、朝鮮通詞に強い影響を与えた江戸時代の儒学者・雨森芳洲についての論文を執筆する。具体的には、彼が設立した朝鮮通詞養成校「韓語司」、近世の多文化主義者ともいえる雨森の思想、通詞教育で「誠信の交わり」を唱えた背景に焦点を当てて論じる。</p> <p>3. 加えて、女性の言葉が日本語にどう訳されてきたのかについて、これまで行ってきた定量・定性分析を振り返りながらまとめる。</p>				
今年度の進捗状況	<p>1. Our Bodies, Ourselvesの翻訳テキストの①については前年度に引き続き、より詳細な比較分析を行った。②については翻訳者のインタビュー、新聞、雑誌、ミニコミ誌、アンケート等による調査を行った。③については新聞、雑誌、ミニコミ誌、インターネットによる調査を行った。これらの研究成果は、日本通訳翻訳学会第23回会年次大会(Zoom)にて「翻訳が提案した女性器名称の可能性を探る:『からだ・私たち自身』翻訳の意図と読者受容から」と題して口頭発表を行うことができた。</p> <p>2. 江戸時代の朝鮮通詞と雨森芳洲については、Tsūji, Interpreters in and around Early-Modern Japan (Palgrave, 2023, 共著)で発表できることになった。</p> <p>3. 女性の言葉がどう訳されてきたかについては、日本大学国際関係学部国際教養学科学術講演会にて「女性はどう訳されてきた？」と題して講演(招待)を行った。</p>				
来年度の進捗目標	<p>来年度の目標は、以下の5点である。</p> <p>1. Our Bodies, Ourselvesと『女のからだ』、『からだ・私たち自身』の比較分析をさらに進める。</p> <p>2. 『女のからだ』、『からだ・私たち自身』の翻訳の意図や翻訳の背景、読者受容、当時の時代背景についての調査をさらに進める。</p> <p>3. 女性のからだに関する他のテキストの日本語訳の分析などを進める。</p> <p>4. 1-3についての研究成果を論文にまとめる。</p> <p>5. Tsūji, Interpreters in and around Early-Modern Japanの校正を進める。</p>				
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)					
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要		
科学研究費補助金 科学研究費補助基盤研究(C)	2020年度～2024年度	個別(研究代表者)			
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動					
2022年～	認定NPO法人ウィメンズ アクション ネットワーク (NPO法人WAN) 会員				
2012年～	日本通訳翻訳学会 (JAITS) 会員				

V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	文学部 英文学科	職名	教授	氏名	吉村 富美子	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
英文読解をガイドするためのハンドアウトを配布<英語コミュニケーション講読I>		2022年4月～		英文読解を、リスニング→概要理解→詳細理解→表現の練習とインプットからアウトプットに段階を踏んで練習できるようにハンドアウトを作成し、配布している。			
プロジェクトの学生による振り返りの実施 <Academic Writing III・IV> <英語コミュニケーション演習I～IV>		2020年4月～		学生に行わせたプロジェクトについては、詳細な振り返りシートを作成し、それに記入させることで、自分の活動やライティングプロセスの振り返りを行わせ、どのくらい努力をしたか、自分の得意・不得意は何か等自分の特徴を確認させた。			
教員独自の学生による授業評価の実施 <英語コミュニケーション演習I～IV>		2020年4月～		学部で実施する学生による授業アンケートに加えて、授業の効果を測定するために教員自身が考案したアンケートを実施し、授業改善に役立っている。			
授業中に学生による相互評価(peer evaluation)などの活動を取り入れた <Academic Writing III・IV>		2020年4月～		学生同士が書いた英文の途中原稿を読み合っ、お互い批評をしたり補助したりする相互評価を授業中に取り入れている。			
個別指導の実施 <Academic Writing III・IV>		2020年4月～		さまざまなジャンルの英文ライティング課題をいくつかのプロセスを分けて、一つひとつの課題を丁寧に行うことで、最終的にはまとまった英文を書けるように指導している。学生には各学期3つのプロジェクトを課したが、学生の書いたfinal draft一つひとつは分析的評価表を用いて評価しコメントも書いて学生に返却して質問を受け付ける等の個別指導を行った。			
学生によるプロジェクト実施 <英語コミュニケーション演習I～IV>		2020年4月～		学生に各自興味のあるトピックについてonline情報を探して読み、その内容を自分の言葉で言い換えたり要約したりして発表原稿を作成し、presentation sessionsでその内容を英語で説明してもらった。Presentation sessionsでは、司会(chair)、発表の評価(evaluation)、時間計測(timer)等の会議に必要な役割も英語で行わせている。さらに、話し言葉を書き言葉に再度書き換えさせ、引用のルールに従ってレポートを作成させた。学生の活動が中心だが、教員は工程表作成、実施確認、途中原稿へのフィードバック等を行いプロジェクトが円滑に行われるようにガイドした。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
2022年度小学校教員のための中学英語免許認定講習(英語コミュニケーション)		2022年9月10日		2022年9月10日(土)・9月17日(土)の2日にわたって8コマの英語コミュニケーションの講習を行った。			
4. その他教育活動上特記すべき事項							
2022年度 教員採用試験対策講座 英語I 1時間目:英語教師に必要な英語力 5時間目:ライティング力の育成)		2022年6月7日～2022年7月5日		2022年6月7日と7月5日(いずれも火曜日の6校時)に教員採用試験対策講座の(1. 英語教師に必要な英語力)(5. ライティング力の育成)の講座を担当した。			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
なぜアカデミックイングリッシュを学ぶべきなのか 講義要旨		単著	2023年3月	東北学院大学, 東北学院大学論集: 英語英文学, 106		吉村富美子	pp.65-73

アカデミックイングリッシュの学習法	単著	2023年3月	東北学院大学,『東北学院大学論集』英語英文学』106, 106	吉村富美子	pp.1-32
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)					
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)					
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)					
G. 学会における研究発表					
Effectiveness of Academic English instruction on EFL reading	単独	2022年11月	48th Annual Conference on Language Teaching and Learning & Educational Materials Exhibition(Fukuoka International Congress Center, Fukuoka.)	Fumiko Yoshimura	
H. 翻訳(学術書や原典等)					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)					
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要		
科学研究費補助金 英語の名詞化に着目した指導が英文読解と読解への自信に与える影響に関する研究	2020年度～2022年度	個別(研究代表者)	アカデミックイングリッシュの大きな特徴の一つに名詞化(nominalization)がある。名詞化により英文は読みにくくなるが、名詞化には情報をまとめて論理展開に寄与するという働きもある。この名詞化に着目した指導を行うことで、学生の英文読解力が高まったり英文読解への自信が深まるかを実証研究によって検証することが本研究の目的である。		
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動					
2019年6月～		若草プロジェクト賛助会員(若草プロジェクト賛助会員)			
2018年5月～		全国語学教育学会 会員			
2010年3月～		TESOL International Association 会員			
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動					
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等		
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動					

2022年度							
所属	文学部 英文学科	職名	准教授	氏名	井出 達郎	大学院の授業 担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
自らの問いと向き合う力の養成		2022年4月～		こちらから問題を与えるだけでなく、自らで問題を発見し、それに向き合う授業づくりを目指した。「演習」では、こちらから基本となる情報を伝えるほかは、テキストがどのような問いを含み、またそれを読む自分たちのどのような問いと関係しているかについて、自ら考える時間を設けた。「アメリカ小説」「アメリカ演劇」「文学」の授業では、各回に自らの考察を書いてもらい、その次の授業でよいと思えるものを共有した。			
学生同士における学びの促進		2022年4月～		教員と学生の間だけでなく、学生同士の間でも双方向の学習が行われるような授業づくりを試みた。「英語II」では、全員がプレゼンテーションを行い、聞いている側もその感想を英語で述べるという試みを行った。「演習」では、担当者がプレゼンテーションを行い、それを受けて学生同士で少人数のグループをつくり、それぞれの意見をまとめあげてミニ・プレゼンテーションを行った。「アメリカ小説」「アメリカ演劇」「文学」の授業では、学生からのコメントを授業のはじめに共有した。			
学生との双方向の授業づくり		2022年4月～		学生と双方向の関係で行われる授業づくりに努めた。「英米文学概説」「英語II」「文学」の授業では、毎回まとめと感想を含んだ小レポートをmanabaで提出してもらい、その次の授業でこちらのコメントを付すかたちでフィードバックを行った。「演習」の授業では、未翻訳のテキストを分担して訳したものを提出してもらい、こちらで添削を行い、ポイントを解説した。			
自らの問いと向き合う力の養成		2021年4月～		こちらから問題を与えるだけでなく、自らで問題を発見し、それに向き合う授業づくりを目指した。「演習」では、こちらから基本となる情報を伝えるほかは、テキストがどのような問いを含み、またそれを読む自分たちのどのような問いと関係しているかについて、自ら考える時間を設けた。「アメリカ小説」および「アメリカ演劇」では、各回に自らの考察を書いてもらい、それに関連する文献なども自分で見つけながら、最終的に自分独自のエッセイを完成させるようにした。			
学生同士における学びの促進		2021年4月～		教員と学生の間だけでなく、学生同士の間でも双方向の学習が行われるような授業づくりを試みた。「英語II」では、全員がプレゼンテーションを行い、聞いている側もその感想を英語で述べるという試みを行った。「演習」では、担当者がプレゼンテーションを行い、それを受けて学生同士で少人数のグループをつくり、それぞれの意見をまとめあげてミニ・プレゼンテーションを行った。「アメリカ小説」および「アメリカ演劇」の授業では、学生からのコメントを授業のはじめに共有した。			
自らの問いと向きあう力の育成		2020年～		こちらから問題を与えるだけでなく、自らで問題を発見し、それに向き合う授業づくりを目指した。「演習」では、こちらから基本となる情報を伝えるほかは、テキストがどのような問いを含み、またそれを読む自分たちのどのような問いと関係しているかについて、自ら考える時間を設けた。「Academic Writing」では、エッセイとして書く内容を自分たちで決定させ、それに関連する文献なども自分で見つけながら、最終的に自分独自のエッセイを完成させるようにした。			
学生同士による学びの促進		2020年～		教員と学生の間だけでなく、学生同士の間でも双方向の学習が行われるような授業づくりを試みた。「英語II」では、全員が英語でプレゼンテーションを行い、聞いている側もその感想を英語で述べるという試みを行った。「演習」では、担当者が英語でプレゼンテーションを行い、それを受けて学生同士で少人数のグループをつくり、それぞれの意見をまとめあげてミニ・プレゼンテーションを行った。			
学生との双方向の授業づくり		2020年～		学生と双方向の関係で行われる授業づくりに努めた。オンデマンド形式の授業では毎回まとめと感想を含んだ小レポートを出してもらい、その次の授業でこちらのコメントを付すかたちでフィードバックを行った。「Academic Writing」の授業では、学習支援システムmanabaで書いたものを提出してもらい、こちらからの添削をコメントをつけて返却した。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							

4. その他教育活動上特記すべき事項					
現在の課題・目標	①学生に対するフィードバックを一人ひとりに近いレベルで行える工夫をする。 ②学生自身が自分の問いを発見するための手助けをする。 ③学生同士がお互いに刺激し合えるような環境をつくる。 ④専門科目の授業内でも英語による発言やレポート作成の機会を増やす。				
今年度の進捗状況	①対面授業に移行する中、ここまで使ってきたZoomの録音機能やmanabaのレポート機能を活用し、様々な形式で一人ひとりの成果をより見やすいかたちにすることができた。 ②「演習」やにおいては、未翻訳の短編作品を分担して翻訳し、最終的に一つの作品の日本語訳を完成させるという形式に定着させることができた。「英語II」においては、英作文を発展させるかたちでプレゼンテーションにつなげ、インプットからアウトプットへの移行を抵抗感なく行えるようにした。「英米文学概論」「アメリカ小説」「アメリカ演劇」「文学」においては、各回に自身の考察を書く時間を設けた。 ③「英語II」や「演習」の授業において、学生同士がお互いのプレゼンテーションについて意見を交換する時間を設けた。講義形式の他の授業においては、提出されたものを次の授業で共有した。 ④「英語II」において、manabaを用い、各回のまとめを英語で書く時間を設け、またこちらからも英語でフィードバックを行った。				
来年度の進捗目標	①大人数の講義においてもmanabaを活用し、特にオンデマンド形式の授業において、決まった学生だけでなく、それぞれの学生から意見を汲み取れるような工夫をする。 ②すでにある程度論じられている古典的な作品に加え、未翻訳の作品を積極的に取り入れることで、「いま」という時代における問いを発見できるような授業づくりをする。 ③一人ひとりの発表の機会を増やすとともに、特に普段自ら発言できない学生がどのようにしたら発言しやすくなるか、あるいはどのようにしたら周りに意見を伝えるかたちにできるかについて引き続き考えていく。そのために有効なmanabaの活用の仕方を探っていく。 ④英語でのアウトプットに有効なテンプレート的な表現や言い回しを紹介し、英語へのアウトプットに対する苦手意識の克服を図っていく。				
II 研究活動					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)					
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)					
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳(学術書や原典等)					
I. 特許					
現在の課題・目標	①「モダニズム期のアメリカ文学におけるケアの契機としての傷つきやすさ」をまとめる。 ②F. スコット・フィッツジェラルド作品における「時間的な傷つき」という主題から考える。 ③ヘンリー・ミラー作品を「非の潜勢力」という主題から考える。				
今年度の進捗状況	①それぞれの作家の論文を大きな文脈においてまとめる作業を進めることができた。 ②国内でワーク・イン・プログレスを行うとともに、来年度に国際学会で発表することが決まった。 ③関連する文献をそろえ始め、準備作業を進めることができた。				
来年度の進捗目標	①「モダニズム期のアメリカ文学におけるケアの契機としての傷つきやすさ」をまとめる。 ②フィッツジェラルド作品における「時間的な傷つき」について国際学会で発表を行い、海外のジャーナルに論文として投稿する。 ③ヘンリー・ミラー作品を「非の潜勢力」という主題から論じたものを、論文として投稿する。				
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)					
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要		

科学研究費補助金 基盤研究(C)	2021年度～2023年度	(研究代表者)	伝統的に個人の自律性に重きを置いていたアメリカにおいて、とりわけその自己のあり方が国家および個人レベルで大きく揺らいだモダニズム期の文学作品群に注目し、個人の自律性の理念からは否定的に克服すべきものとされてきた「傷つきやすさ (vulnerability)」のモチーフを拾い上げ、それが他者への「ケア (care)」という積極的な意味の物語を生み出してきたことを浮き彫りにする。
------------------	---------------	---------	---

IV 学会等及び社会における主な活動

2020年4月～	日本 F. スコット・フィッツジェラルド協会 編集委員会
2019年4月～	日本ロレンス協会 編集委員会
2017年4月～	日本 F. スコット・フィッツジェラルド協会 大会・研究会準備委員会
2014年4月～	日本アメリカ文学会
2013年4月～	日本英文学会
2012年4月～	日本アメリカ文学会

V 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

VI 学内における管理運営に関する諸活動

--

2022年度							
所属	文学部 英文学科	職名	准教授	氏名	大沼 仁美	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		<ul style="list-style-type: none"> - 個別相談の頻度が高く、授業準備以外にさらに上乗せして対応時間を捻出している。 - 小テストなどの希望が多いが、科目によっては対応できない。そのため、ルーブリック等の導入で対応したが、学生に理解してもらえていない。 					
今年度の進捗状況		<ul style="list-style-type: none"> - 授業時間外でも学生からの個別相談に応じて、学習や学生生活がスムーズに行えるよう相談に応じた。 - 多様な観点からの評価を取り入れるべく、試験的にルーブリックを作成した。 					
来年度の進捗目標		<ul style="list-style-type: none"> - 個別相談でよくある質問等は、前もって文書にして学生に提示する。 - 評価方法の告知を複数回行う。 					
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
音節主音的子音の音韻表示		共同	2023年3月	第18回音韻論フェスタ(Zoom meeting)		大沼仁美・那須川訓也	
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		音節主音的子音について、論文を作成する。					
今年度の進捗状況		上記目標については、内容の概要を決定し、下調べに取りかかった。					
来年度の進捗目標		上記目標については、研究会で報告したのち論文をまとめる。					
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要		
IV 学会等及び社会における主な活動							
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場 所	開催年月日(西暦)		発表・展示等の内容等		
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
VI 学内における管理運営に関する諸活動							



2022年度							
所属	文学部 英文学科	職名	准教授	氏名	森山 盛吉	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要			
IV 学会等及び社会における主な活動							
2022年11月～2022年11月			アメリカ1800年代の詩を読む(出前授業) 講師				
2022年7月～2022年7月			アメリカの19世紀の詩人Phillip FreneauとWilliam Cullen Bryantを読む:「あわれ」を中心に(東北学院大学 多賀城市連携公開講座) 講師				
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
VI 学内における管理運営に関する諸活動							

2022年度							
所属	文学部 総合人文学科	職名	教授	氏名	川島 堅二	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		昨年に引き続き、コロナ禍に対応したオンラインによる授業方法の開発					
今年度の進捗状況		オンデマンド授業、オンタイム授業ともに安定的に運用できるようになった。オンラインによる課題の提出と評価、成績の評価も安定的に実施できるようになった。					
来年度の進捗目標		コロナ禍の終焉も見え始め、授業方法も対面にほぼ戻るので、コロナ禍において実施した遠隔授業方法の何を残すかを精査しながら、コロナ禍以前よりもスキルアップした対面授業を実施する。 とくにオンデマンド授業で作成した視聴教材を活用し、反転授業の可能性を探る。					
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
『徹底討論!問われる宗教と”カルト”』		共著	2023年1月	NHK出版		島菌進, 釈徹宗, 若松英輔, 櫻井義秀, 小原克博, 川島堅二	pp.3-169
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		宗教の社会問題化に対応する「宗教リテラシー」および「宗教病理学」について研究を進める。					
今年度の進捗状況		『キリスト新聞』の連載記事(宗教リテラシー向上委員会)の分担執筆を担当し、社会問題化している宗教現象(新使徒運動、統一教会など)について記事を書いた。3月の基督教会東北支部会では「宗教病理学」について研究発表を行う。このテーマで学術雑誌にも論文投稿を準備している。					
来年度の進捗目標		引き続き社会問題化している宗教について「宗教リテラシー」や「宗教病理学」の観点から研究を進める。					
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要		
IV 学会等及び社会における主な活動							
2020年9月～				日本脱カルト協会顧問 委員			
2016年9月～				日本基督教会			
2005年4月～				日本宗教学会			
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			
総合人文学科長、教養教育センター部門長			

2022年度							
所属	文学部 総合人文学科	職名	教授	氏名	木村 純二	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		着任5年目となり、担当科目の授業内容・配布資料など、おおよそ整備することができており、その内容の学生への見せ方、学生からのコメントのフィードバック方法などを確立し、より一層の理解の定着を図ることが現在の目標である。また、担当授業は2022年度中にすべて対面実施となったが、コロナウィルス感染に関わり授業を欠席する学生は少なからずいるので、そうした学生への学修機会の提供を適切に提供できる体制を整備することが課題である。					
今年度の進捗状況		手書きでの板書からパワーポイントの表示に切り替えることで、学生が見やすい板書作りを目指し、凡ての担当科目で板書用のパワーポイントを作り終えた。また、前年度までグーグルフォームを用いていた学生の授業コメントをmanabaのレポート機能に切り替えることで、学生が統一的に授業情報を管理・閲覧できるシステムを構築した。さらに、やむを得ない理由で欠席した学生への学修機会の提供として、毎回の授業を動画で記録し、オンデマンドで視聴させる体制を確立した。全体として、授業運営は計画通りの進捗である。					
来年度の進捗目標		来年度は、コロナウィルスの感染症対策による各種の規制がほぼなくなると予想されるので、学生にテキストや資料を読ませるなど、コロナ以前に実施していた学生の主体的な授業参加を取り戻し、いつもの授業の活性化を図ることが目標である。					
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
歌謡としての「みたま」(五)		共著	2023年3月	東北学院大学宗教音楽研究所、『東北学院大学宗教音楽研究所紀要』第27号		木村純二	pp.20-27
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		1. 和辻哲郎に関する単著の執筆・刊行 2. 武士道書『葉隠』に関する共同の論文集の執筆・編集・刊行 3. 日本の「徳」の思想に関する英文の共同論文集の執筆・刊行					
今年度の進捗状況		1. 現在鋭意執筆中で、予定通り進行している。 2. 自分の編集代表者となり、共同執筆者とのzoom編集会議を開催して執筆依頼を済ませた。 3. アブストラクトを作成・提出し、海外出版社と協議の上、出版の了承を得た。					
来年度の進捗目標		1. 執筆を完了し、科研の出版助成を申請する。 2. 出版社を確定し、原稿を集め、具体的な出版時期を確定する。 3. 原稿を提出し、出版する。また執筆内容に基づく共同のワークショップを日本倫理学会で実施する。					
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
IV 学会等及び社会における主な活動			
2019年10月～		日本倫理学会年報編集委員会	
2017年4月～		日本倫理学会	
2008年11月～		日本思想史学会 会員	
2004年4月～		東北哲学会 会員	
1997年4月～		日本倫理学会 会員	
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			
入試委員			

2022年度							
所属	文学部 総合人文学科	職名	教授	氏名	椎名 雄一郎	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
キリスト教学「キリスト教と文化」のYouTube活用		2022年9月1日～2023年1月4日		キリスト教学Cではオルガンの歴史とその文化をとりあげている。毎回のテーマについて、YouTubeの様々な動画を使用し、授業前後に視聴することにより、より理解を深めることができるようにする。			
キリスト教学「キリスト教と現代社会」における双方向授業		2022年4月1日～2022年7月31日		毎回、一つのテーマについて、あらかじめ学生からの意見を集約し、授業時にその意見を紹介しつつ、さらに学生グループでディスカッションし、各回の問いに対して、学生自身が個人、グループの両方で考察する授業			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
ヨーロッパ音楽史		2022年4月2日～2023年3月31日		ヨーロッパ音楽史を最新の研究を生かした教科書を作成			
キリスト教と音楽		2022年4月1日～2022年7月31日		キリスト教と音楽についての教科書は、日本語では出版されていない。毎回の授業テーマに沿った教科書を作成した。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		「ヨーロッパ音楽史」、「キリスト教音楽」の2つ授業においては最新の研究成果を反映し、また各科目の多様な分野を取り扱うようにする。「キリスト教学」、「聖書を学ぶ」、「キリスト教の歴史と思想」では、基本的な事柄を踏まえつつ、どのように学生に内容を伝えるか様々な方法で授業をおこなう。					
今年度の進捗状況		「ヨーロッパ音楽史」、「キリスト教音楽」の2つ授業においては、最新の研究を取り入れた教科書を作成した。キリスト教関係授業では、個人の考えをまとめることと、グループワークを併用した授業を実験的におこなった。100人を超える授業においてもグループワークが可能なおこなった。					
来年度の進捗目標		「ヨーロッパ音楽史」、「キリスト教音楽」では、最新の研究を盛り込みつつ、さらに事前事後学修用の教材(特に映像資料)を研究する。キリスト教系授業では、学生への効果的な問いかけと、グループワーク内容について、さまざまな方法を試す。					
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
書評「作曲家◎人と作品シリーズ 久保田慶一著『バッハ』」	単著	2022年4月	日本キリスト教団出版局, 礼拝と音楽(193)	椎名雄一郎	pp.38-38		
G. 学会における研究発表							
バッハのオルガン観—ミュールハウゼン・オルガン改修計画書をめぐって—	単独	2023年3月	日本オルガニスト協会東日本支部交流会(東京芸術劇場)	椎名雄一郎			
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		J.S.バッハ時代の楽器としてのオルガンの研究を通して、バッハのレジストレーションがどのようになものであったかを研究する。J.S.バッハのオルガン作品研究においては、まずは自由作品についてまとめ、出版を目指す。					

今年度の進捗状況	楽器としてのオルガン研究として、日本オルガニスト協会東日本支部交流会において「ヨーロッパ音楽史」、「キリスト教音楽」の2つ授業「バッハのオルガン観—ミュールハウゼン・オルガン改修計画書をめぐって—」を口頭発表し、東北学院大学キリスト教文化研究所紀要に投稿する。バッハのオルガン作品研究については、各曲の解説をまとめている。		
来年度の進捗目標	楽器としてのオルガン研究では、ミュールハウゼン以降のバッハの携わった楽器、オルガン検査の内容から、バッハのオルガン観をさらに研究する。オルガン作品研究では、2023年度中の出版を目指し、各曲の解説の確認と、バッハの生涯をまとめる。		
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動			
2022年4月～		横浜みなとみらいホールオルガン委員会 専門委員	
2022年4月～		秋田アトリオンホールオルガン講座特別講師 講師	
2022年4月～		日本基督教団讃美歌委員会 実務委員	
2021年5月～		日本オルガニスト協会 副会長	
2021年3月～		日本音楽学会 会員	
2013年9月～		ピティナ(一般社団法人全日本ピアノ指導者協会) 会員	
1994年5月～		日本オルガン研究会 会員	
1993年5月～		日本オルガニスト協会 会員	
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
パイプオルガンリサイタル	習志野文化ホール	2023年2月	J.S.バッハ、F.メンデルスゾーン、J.ブラームスの作品とJ.S.バッハ〈シャコンヌ〉BWV1004のオルガン編曲
椎名雄一郎パイプオルガンリサイタル「バッハへのオマージュ」	那須野が原ハーモニーホール	2022年12月	J.S.バッハ、F.メンデルスゾーン・バルトルディ、J.ブラームス、M.レーガーのオルガン作品
オルガンコンサート	日本基督教団西千葉教会	2022年6月	ドイツ・コラール(教会歌)によるオルガン作品と、J.クーナウ《聖書ソナタ第1番》「ダヴィデとゴリアテ」
現在の課題・目標	J.S.バッハを中心として、「バッハ以前」と「バッハ以降」をテーマとして演奏曲を構成する。とくにバッハ以降の19世紀ドイツの作品について、レパートリーを拡大する。		
今年度の進捗状況	「バッハへのオマージュ」と題して、バッハ、メンデルスゾーン、ブラームス、レーガーと19世紀ドイツのオルガン作品がどのようにバッハの影響を受けて作曲されたかを、聴くことができるプログラムで演奏会をおこなった。また東北学院宗教センターの「水曜礼拝」では動画でJ.ブラームス『11のコラール前奏曲集』の抜粋を録画し、公開した。		
来年度の進捗目標	6月にバッハ以前の北ドイツバロック時代の3人の作曲家ブクステフーデ、ベーム、ブルーンスの作品による自主リサイタルをおこなう。また19世紀以降の作品ではシューマンのオルガン作品について、さらに分析しつつ演奏する。		
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動			
就職キャリア支援委員として11月の保護者懇談会を学科長とともに担当した。入試業務、オープンキャンパスの他、大学礼拝では説教、奏楽を担当した。			

2022年度							
所属	文学部 総合人文学科	職名	教授	氏名	出村 みや子	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概 要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要			
IV 学会等及び社会における主な活動							
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
VI 学内における管理運営に関する諸活動							

2022年度							
所属	文学部 総合人文学科	職名	教授	氏名	原田 浩司	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
講義資料のDX化		2022年4月～2023年1月		コロナ禍も3年目に入り、リモートにも直ちに対応できるよう、教材資料をすべてパワーポイントで作成した資料に切り替えた。配布資料もすべてデジタル化し、各自が端末からダウンロードして閲覧、印刷できるようにした。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
講義に則したパワーポイント資料の作成		2022年4月～2023年1月		講義内容に即したパワーポイント資料を作成し、manabaをとおして、デジタルデータとして、受講生に配布した。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
中高大一貫教育事業 入学前教育プログラム 宗教の講話		2023年2月10日		東北学院大学の大学礼拝とキリスト教学の特徴について、東北学院のスクールモットーである「LIFE LIGHT LOVE」に関連付けて解説する講義を行った。			
現在の課題・目標		効果的な講義様式の確立。					
今年度の進捗状況		コロナ禍におけるリモート講義はオンデマンドでの実施となり、研究室で自撮り録画となり、パソコンの画面に向かって話しかける講義となった。90分の講義時間と内容をどのように効果的に工夫することができるか、課題が残った。また、対面授業でも、感染状況を鑑み、グループワークを回避したため、コロナ禍における「アクティブ・ラーニング」にも課題が残った。					
来年度の進捗目標		コロナ禍がいまだに収束しないなか、今年度の取り組みの反省点を改善し、学習効果を高める講義づくりを模索していく。					
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		スコットランド宗教改革に関連する研究を深化させると共に、実践神学的な観点を踏まえて、その研究領域を広げていくこと。					
今年度の進捗状況		昨年度から取り組んできた『(スコットランド信仰告白)による信仰入門 歴史・本文・講解』の編集・執筆により、8月に一麦出版社から刊行することができた。また、この編集の過程から生まれた新しい研究課題として、「ジョン・ノックスの「もう一つの信仰告白」～ノックス没後450周年を記念して」を上梓した(『人文学と神学』19号)。					
来年度の進捗目標		16世紀のスコットランド宗教改革の研究として、昨年同様、これまで手付かずの対象があるため、それらに照明を当て、研究し、その成果を公開していきたい。昨年度から取り組んだロバート・ブルースの説教集についても刊行を目指して取り組んでいく。					
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
IV 学会等及び社会における主な活動			
2022年9月			対面相談員育成・スキルアップセミナー(宮城県 自死対策補助金事業) 講演「大学生たちが向き合う自死の問題～学校の現場からの声～」(対面相談員育成・スキルアップセミナー(宮城県 自死対策補助金事業)) 講師
2011年6月～			日本基督教学会 会員
2010年4月～			日本基督教団の諸教会での主日礼拝の奉仕(説教・聖礼典の執行) 講師
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	文学部 総合人文学科	職名	教授	氏名	吉田 新	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
参加型授業への工夫		2022年4月1日～2023年3月31日		今年度は在外研究のため記載事項はない。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		①オンライン授業においても、参加型授業を可能か模索したい。 ②コロナ感染症の収束後、フィールドワークを取り入れた授業を提供したい。 ③次年度も、「総合人文学の基礎」において、卒業論文を意識させる授業運営を行いたい。 ④「新約聖書概説」の教科書作成の執筆に取り組みたい。 ⑤初年次も「キリスト教学」(「聖書を学ぶ」他)で使用する教科書の執筆に取り組みたい。					
今年度の進捗状況		①今年度は在外研究のため授業を担当していないが、次年度では再び参加型授業を可能か模索したい。 ②今年度は在外研究のため授業を担当していないが、次年度ではフィールドワークを取り入れた授業を提供したい。 ③今年度は在外研究のため授業を担当していないが、次年度では「総合人文学の基礎」において、卒業論文を意識させる授業運営を行いたい。 ④「新約聖書概説」の教科書作成の執筆を始めている。 ⑤「キリスト教学」(「聖書を学ぶ」他)で使用する教科書の執筆を始めている。					
来年度の進捗目標		①次年度では再び参加型授業を可能か模索したい。 ②次年度ではフィールドワークを取り入れた授業を提供したい。 ③次年度では「総合人文学の基礎」において、卒業論文を意識させる授業運営を行いたい。 ④「新約聖書概説」の教科書作成の執筆に取り組みたい。 ⑤「キリスト教学」(「聖書を学ぶ」他)で使用する教科書の執筆に取り組みたい。					
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
BasisBibelと聖書翻訳の未来	単著	2022年10月	New 聖書翻訳, 8	吉田新	pp.59-75		
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		①『ペトロの第一の手紙』の釈義を発表し、全体の総括に取り組む。 ②和訳聖書翻訳史の研究 和訳聖書翻訳に関する歴史資料の分析を進める。 ③初期キリスト教における殉教論について、使徒教父文書を中心に研究を前進させる。					
今年度の進捗状況		①『ペトロの第一の手紙』の釈義を完了し、次年度の出版のための準備を進めた。 ②これまでの調査をまとめる作業を終えたため、次年度以降の研究書出版の準備を進めた。 ③③の研究を①の研究書と統合するように準備を進めた。					

来年度の進捗目標	①『ペトロの第一の手紙』の釈義の書籍化を実現する。 ②和訳聖書翻訳史の研究 和訳聖書翻訳に関する歴史資料の分析を進め、次年度以降の書籍化をめざす。 ③『ペトロの第一の手紙』におけるメタファーに関する研究を開始する。		
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動			
2021年9月～		日本聖書翻訳研究会 会員	
2021年9月～		日本聖書翻訳研究会 書記	
2017年4月～		日本基督教会東北支部幹事 会員	
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	文学部 総合人文学科	職名	准教授	氏名	田島 卓	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
manabaの掲示板を活用した双方向学習支援		2020年9月1日～		学生の学習状況を確認し、遠隔授業で欠落しがちな学生相互のつながりの構築のために、各階の小レポートに替えて、掲示板に小レポートと同程度の文章を投稿してもらい、学生相互のやりとりを活性化した。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		<p>①専門教育科目(「旧約聖書概説Ⅰ・Ⅱ」「旧約聖書神学Ⅰ・Ⅱ」「旧約聖書釈義Ⅰ・Ⅱ」)におけるテキストの精緻な読解技法の伝達、内容の高度化を引き続き行う。</p> <p>②「旧約聖書概説Ⅰ・Ⅱ」におけるアクティブラーニング促進。欧米圏で用いられている先進的な教科書の意欲的な導入を図る。</p> <p>③「聖書を学ぶ」「キリスト教学」において、学生同士が知的刺激を与え合う環境を促進する。</p>					
今年度の進捗状況		<p>①専門教育科目(「旧約聖書概説Ⅰ・Ⅱ」「旧約聖書神学Ⅰ・Ⅱ」「旧約聖書釈義Ⅰ・Ⅱ」)におけるテキストの精緻な読解技法の伝達、内容の高度化を引き続き行う。 →部分的に改善している。ただし、テキスト読解の実戦に関しては、興味・関心の程度が低い学生の参加が促すための工夫や課題の出し方に検討が必要である。</p> <p>②「旧約聖書概説Ⅰ・Ⅱ」におけるアクティブラーニング促進。欧米圏で用いられている先進的な教科書の意欲的な導入を図る。 →今年度は特に「旧約聖書概説Ⅱ」において、RTTP(Reacting to the Past)というロールプレイング形式の授業を取り入れ、学生の積極的な参加を促すことができた。</p> <p>③「聖書を学ぶ」「キリスト教学」において、学生同士が知的刺激を与え合う環境を促進する。 →今年度は、キリスト教系科目以外における学生の関心の所在をヒアリングするための時間を取り、その結果を利用して授業に繋げていくための工夫を行った。そのため学生の参加意欲に一定程度の向上が見られた。</p>					
来年度の進捗目標		<p>①専門教育科目(「旧約聖書概説Ⅰ・Ⅱ」「旧約聖書神学Ⅰ・Ⅱ」「旧約聖書釈義Ⅰ・Ⅱ」)におけるテキストの精緻な読解技法の伝達、内容の高度化を引き続き行う。</p> <p>②「旧約聖書神学Ⅰ・Ⅱ」において、専門性を維持しながら、学生のアクティブラーニングを促す。</p> <p>③「聖書を学ぶ」「キリスト教学」において、学生同士が知的刺激を与え合う環境を促進し、ディプロマポリシーにより適合した授業展開を図る。</p>					
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
「旧約聖書と破局」『福音と世界』2023年4月号』		単著	2023年3月	新教出版社		田島 卓	pp.30-35
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							

現在の課題・目標	①イザヤ書53章を中心とした、イザヤ40-55章の成立史について、特にFortschreibungモデルの理解を深め、批判的検討を行う。 ②①に基づく、「僕の詩」テキストの哲学的解釈・文芸批評的意義を検討する。		
今年度の進捗状況	先行研究の批判的読解を進め、カノンの解釈と編集史的研究の隔たりについて、一定の見解を得た。		
来年度の進捗目標	引き続き、イザヤ書の「僕の詩」テキストについて、神殿詠唱者集団を中心とした成立モデルを検討する。また、『哀歌』やエレミヤの「告白録」テキストの成立についても同様の検討を行う。		
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動			
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	文学部 総合人文学科	職名	講師	氏名	大門 耕平	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
ICTを活用したペーパーレス化及びアクティブ・ラーニングに関する取り組み		2022年4月～2023年3月		manabaを用い、講義内容の理解を深めることを目的として、PPT形式の講義資料を作成し、講義後に共有した。これにより、講義中の「ノートをとる」ための時間が軽減され、アクティブラーニング(ディスカッションやグループワーク)を促進することが可能となった。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
城北埼玉高校Summer programでの講義		2022年7月26日～2022年7月26日		キリスト教における戦争論および善いサマリア人についての講義を行った。			
福島西高校での出張講義		2022年6月15日～2022年6月15日		キリスト教における戦争論をテーマとした出張講義を行った。			
現在の課題・目標		①キリスト教教養科目において、アクティブラーニングを導入し、深い学びを実現する。 ②論文指導において、研究手法などを教示し、主体的で意欲的な研究活動を促す。 ③教職科目の担当において、理論と教育現場を結び付けた学びを提供する。					
今年度の進捗状況		①アクティブラーニングとしてディベートや議論、クイズ形式での教育活動を実施し、積極的な参加を得られた。 ②論文指導において、データ分析、アンケート調査という手法での卒業論文の作成の指導をした。 ③教職科目において、理論の学びだけではなく、現場での教育実践について資料や映像を用いた学びを提供することができた。					
来年度の進捗目標		①より主体的で意欲的な学びを提供するためにアクティブラーニングの導入を拡大していく。 ②研究手法をより多く提供し、いろいろな手法での卒業論文の作成を促す。 ③教職科目の担当において、学校現場との連携を構築し、理論と教育現場を結び付けた教育が提供できる環境を整えていきたい。					
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
中学校期における道徳性の発達の傾向を測定する尺度の開発		共著	2022年6月	「宗教と社会」学会機関紙(28)		大門耕平, 宇多川千帆	pp.17-31
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
Longitudinal Survey of Correlations Between Comfortable with the School-environment and Academic Achievement in Junior High School.		共同	2022年12月	The 15th Eco-Energy and Materials Sciences and Engineering Symposium (EMSES 2022)(Thani Pattaya)		Kohei Okado, Noriyuki Kida, Akihiko Goto	
学校いごこち度アンケートを用いた生徒支援の実践		共同	2022年11月	日本教育実践学会第25回研究大会(仏教大学)		大門耕平, 駒田淑久, 来田宣幸	
部活動指導におけるケガ予防プログラムの効果の検証		共同	2022年8月	日本応用心理学会第88回研究大会(京都工芸繊維大学)		伊藤将史, 大門耕平, 来田宣幸	

中学生の道徳性の発達についての研究	共同	2022年8月	日本応用心理学会第88回研究大会(京都工芸繊維大学)	大門耕平, 来田宣幸	
H. 翻訳(学術書や原典等)					
I. 特許					
現在の課題・目標	①学校教育についての研究 ②日本の近代化における宣教師の功績についての研究 ③キリスト教教育についての研究				
今年度の進捗状況	①3件の学会発表をおこなった。また、8件の研究について倫理審査を受けた。 ②滋賀県庁をはじめ多くの機関との連携を作ることができ、資料収集を行うことができた。 ③宗教性(道徳性)についての論文を掲載することができた。				
来年度の進捗目標	①倫理審査を受けた研究について、継続的に研究をつづけ、学会や論文での発表を行う。 ②日本の近代化における宣教師の功績についてまとめ、学会や論文での発表を行う。 ③宗教性(道徳性)の発達について継続的な調査を実施し、学会や論文での発表を行う。				
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)					
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要		
IV 学会等及び社会における主な活動					
2022年5月～2023年3月		日本応用心理学会第88回大会 実行委員会委員			
2021年10月～		「宗教と社会」学会 会員			
2016年5月～		日本応用心理学会 会員			
V 芸術分野や体育実技等における主な活動					
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等		
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
VI 学内における管理運営に関する諸活動					

2022年度							
所属	文学部 総合人文学科	職名	講師	氏名	藤野 雄大	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
「東北学院の神学」をめぐる一考察ー20世紀前半における東北学院と日本基督教会東北中会との衝突を通して	単著	2023年3月	東北学院史資料センター年報(8)	単著	pp.37-47		
19世紀初頭のアメリカにおけるリヴァイヴァリズムの歴史的展開ー「旧新」二つの方法の対立	単著	2023年2月	人文学と神学(20)	単著	pp.17-44		
マーサーズバーグ神学の起源とドイツ改革派教派新聞Weekly Messengerー19世紀アメリカのキリスト教会における教派新聞の意義ー	単著	2022年6月	東北学院大学キリスト教文化研究所紀要(40)	単著	pp.1-17		
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
Mercerburg Theology and Tohoku	単著	2023年3月	Proceedings of the International Seminar Lancaster Theological Seminary and Sendai, Japan May 10th-11th, 2022(1)	単著	pp.31-43		
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
「19世紀アメリカのプロテスタント諸教派における分裂と再一致」	単独	2022年9月	日本基督教学会(東北学院大学)	発表者			
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要			
IV 学会等及び社会における主な活動							

2020年9月～	基督教史学会 会員		
2019年9月～	日本基督教学会 会員		
2019年6月～	Mercersburg Society 会員		
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	文学部 総合人文学科	職名	講師	氏名	渡邊 有美	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概 要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		コロナ禍における2年目の授業への対応					
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標		脱コロナ禍における教育活動の軌道修正					
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		科研費2年目における研究調査の続行					
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標		最終年のリサーチ目標への達成					
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要			
IV 学会等及び社会における主な活動							
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
VI 学内における管理運営に関する諸活動							

2022年度							
所属	文学部 歴史学科	職名	教授	氏名	小沼 孝博	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
動画コンテンツの活用		2021年4月～		オンライン授業への対応のなかで、対面型の授業より、動画コンテンツを積極的に取り入れた授業実践した。			
専門購読の授業内容の刷新		2019年4月～		3年生対象の専門購読では、今年からツングース系言語の一つであり、清王朝時代の「国語」であった満洲語の文献購読を開始した。文字・文法の説明をできるだけ簡略・短期におさえ、実践的な文献購読にスムーズに入れるよう、テキスト・授業内容を調整した。			
演習科目でのレポート採点		2019年4月～		3年生の総合演習の授業では学期末に字数制限を設定したレポートを、2年生後期「研究・発表の技法」では輪読テキストの要約文を課している。それらはすべて添削をおこない、コメントを付して返却し、受講者は修正稿を再提出することになる。添削および評価のポイントは、課題の内容が的確にまとめられているかとい点だけではなく、文法・構成・論理展開など日本語の文章としての正確さに力点を置いている。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
オンライン授業用教材の調整と刷新		2021年4月～		昨年度実施したオンライン授業の反省点をもとに、教材(授業ビデオ、配付資料)の調整と刷新を行った。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
清代乾隆朝扎哈沁之動態	単著	2022年12月	Oyirad Studies (衛拉特研究), 8	小沼孝博著(那日蘇訳)	pp.8-26		
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
ムッラー・ムーサー・サイラーミーの史的探求: 『ハミード史』序論の検討から	単著	2023年3月	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 野田仁編『近代中央ユーラシアにおける歴史叙述と過去の参照』	小沼孝博	pp.71-91		
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
<新刊紹介>「Loretta E. Kim, Ethnic Chrysalis: China's Orochen People and the Legacy of Qing Borderland Administration.」	単著	2022年12月	満族史研究(21)	小沼孝博	pp.83-84		
<新刊紹介>「新免康編著『ユーラシアにおける移動・交流と社会・文化変容』(中央大学政策文化総合研究所研究叢書30)」	単著	2022年12月	『内陸アジア史研究』, 37	小沼孝博	pp.44-45		
G. 学会における研究発表							

乾隆四十二年の扎哈沁旗再編	単独	2022年12月	満文文献与清史研究国際学術 研討会(Online)	小沼孝博	
清朝の対中央アジア国書に関する基礎的研究 —テュルク語文面とその作成者たち—	単独	2022年8月	2022年度明清史夏合宿(同志社 大学(ハイブリッド形式))	小沼孝博	
H. 翻訳(学術書や原典等)					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)					
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要		
科学研究費補助金 文部科学省科学研究費補助金(基盤研究B)	2020年度～2024年度	共同(研究分担者)			
科学研究費補助金 文部科学省科学研究費補助金(基盤研究B)	2020年度～2023年度	共同(研究分担者)			
競争的資金等の外部資金による研究 第48回 (2019年度)三菱財団人文科学研究助成	2019年度～2022年度	共同(研究分担者)			
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動					
2022年6月～		満族史研究会			
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動					
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等		
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動					

2022年度							
所属	文学部 歴史学科	職名	教授	氏名	河西 晃祐	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
オンデマンド型キャリア教育の実施		2020年～		3年次前期科目「近現代日本と東アジア」の講義に際して、3年生の就活支援のために「就活動画」を作成し、学生への就活支援を行った。			
オンライン・アクティブ・ラーニングの一環として、一次史料解説の課題を提示し、毎回提出させている。		2020年～		毎回の講義中に、アクティブ・ラーニングの一環として、一次史料に関する課題を提示し、周囲の学生らと話し合いながら課題解決に至る時間を設け、必ず課題を提出させている。			
オンデマンド型講義動画の作成		2020年～		コロナウィルスの流行により、大講義はオンデマンド型講義となったので、映像・画像資料などを取り入れた講義動画を作成した。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
オンデマンド型講義動画の作成		2020年～		前期に2本、後期に1本の講義動画を作成した。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要			
IV 学会等及び社会における主な活動							
2017年4月～		日本植民地研究会 理事					
2017年4月～		日本植民地研究会理事(日本植民地研究会理事就任(現在に至る))					
2009年4月～		岩沼市史編纂 委員					
2007年4月～		NPO法人宮城歴史史料保全ネットワーク 理事					

2007年4月～	東北史学会		
2007年4月～	NPO法人宮城歴史史料保全ネットワーク理事(NPO法人宮城歴史史料保全ネットワーク理事就任(現在に至る))		
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	文学部 歴史学科	職名	教授	氏名	菊池[柳谷] 慶子	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
地域の歴史・文化財調査と成果報告の実践		2016年6月～		「総合演習Ⅰ」「同Ⅱ」では仙台市宮城野区新浜地区の復興まちづくりを支援する取り組みに参加し、地区内の石碑調査、および生活文化の聞き取りをおこない、その成果を町内会主催の学習会で報告した。また教養学部平吹ゼミと合同で新浜の自然と歴史をたどる現地巡見を行い、町内会が主催するフット・パスやワークショップの開催に協力する活動を展開した。これらを振り返り記録するパワーポイントをその都度、ホーイ記念館のコラトリエで作成しており、全体を通してアクティブラーニングを全面展開する授業としている。			
史跡・文化財を巡見する学外実習およびゼミ旅行の実施		2016年6月～		「総合演習Ⅰ」「同Ⅱ」では日本近世史を学ぶアクティブラーニングの一環として仙台北下の武家地・町人地の痕跡をたどる市内巡見、および江戸の史跡を巡る研修旅行などを実施してきた。事前・事後の学習にはホーイ記念館のコラトリエを活用しており、当日の巡見と合わせて学生の自主的な学びの促進を図っている。			
教員自身の個々の授業での「学生による授業評価」の実施		2010年7月～		学部で実施する「学生による授業評価」に加えて、独自に授業の効果と達成度を調べるアンケートを実施し、自己点検をおこなっている。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
毎時間の配布資料の作成		2010年4月～		講義、専門史料講読ともに市販の研究書をテキストや参考書に用いるほか、テーマに合わせて独自にプリントを作成し、教材として配布している。			
パワーポイントによる視覚教材の作成		2010年4月～		講義科目では独自に撮影した史跡、文化財、古文書等の写真を中心にパワーポイントを作成し、視覚的に理解を深めるための教材としている。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		<ul style="list-style-type: none"> ①4年生全員が期日までに卒論を完成できるように、授業計画を立て、個々の進行に応じた指導を行う。特に史料解説の助言に力を入れる。 ②仙台市新浜地区での歴史調査は契約講の史料解説を中心に進める。12月の現地での報告会をめざす。また復興まちづくりを支援する活動を継続して行う。 ③ホーイ記念館のコラトリエを有効に使い、学生相互の交流を増やせるように努める。 ④就職活動の体験談は3年生に大きな刺激を与えており、学年を超えた交流の機会とする。 ⑤大学院生の指導は研究課題の設定と史料収集が順調に進むように助言する。 					
今年度の進捗状況		<ul style="list-style-type: none"> ①1名を除いて全員が1月中に例年通りの形式で卒論を提出することができた。残る1名が最終試験期間での提出をめざして奮闘中である。3年生に向けての卒論報告会も開催して成果を伝えることができた。 ②契約講の史料解説を半分ほど終え、これをもとにグループで分析を行い、成果を12月の現地の学習会で地元の方々に聞いていただくことができた。町内会が開催するフットパスに数回参加し、行事の支援を行うことができた。 ③ゼミ生の学年を超えた交流のためにホーイ記念館の施設を有効に活用している。 ④就職が内定した4年生数名に3年ゼミで活動の報告をしてもらったほか、全員のアンケート調査の結果を3年生に伝えている。継続した取り組みにより今年度も大半がほぼ希望通りの進路を決めることができた。 					
来年度の進捗目標		<ul style="list-style-type: none"> ①4年生全員が期日までに卒論を完成できるように、個々の進度に応じた適切な指導を行う。特に史料解説の助言に力を入れる。 ②3年ゼミで行う仙台市新浜地区での歴史調査は契約講の後半部分の史料解説を進め、町内会を中心に聞き取り調査も実施する。成果を12月の現地学習会で報告することをめざす。またフットパスへの参加により復興まちづくりを支援する活動を継続して行う。 ③ゼミ活動と卒論作成を中心に3年・4年のゼミ生が交流する機会を継続して設ける。 ④就職活動を支援する取り組みとして内定した学生、希望する職種についての卒業生の活動を伝える機会、また4年生から3年生に体験を伝える機会などを継続して設ける。 ⑤大学院生の指導は修士論文の完成に向けて史料解説、論述が順調に進むように助言する。 					
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							

『江戸のキャリアウーマン—奥女中の仕事・出世・老後』	単著	2023年3月	吉川弘文館	柳谷 慶子	pp.1-272
高齢者と医療『医学史事典』	分担執筆	2022年7月	丸善出版	坂井建雄・小曾戸洋ほか156名	pp.660-661
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)					
「御城使」としての奥女中—選任と役務の検討を中心に	単著	2022年9月	国立歴史民俗博物館研究報告(235)	柳谷 慶子	pp.193-225
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)					
文化文政期の盛岡藩政と奥女中	単著	2023年1月	北の歴史から(8)	柳谷 慶子	pp.65-85
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)					
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)					
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)					
G. 学会における研究発表					
暮らしのなかの海岸林の松葉	単独	2023年3月	シンポジウム「震災被災地の自然・暮らしと復興研究報告会」(仙台市)	菊池 慶子	
H. 翻訳(学術書や原典等)					
I. 特許					
現在の課題・目標	①科学研究費助成事業(基盤研究C)で課題とした海岸林の歴史研究については史料収集と現地調査を進め、成果をまとめる。 ②大名家奥女中に関する執筆を順調に進めて完成させる。 ③近世ジェンダー論, 家族論, 環境史に関して依頼されている原稿の執筆, 講演の準備を進める。				
今年度の進捗状況	①鳥取県米子市・鳥取市, 千葉県銚子市での調査による関係史料の収集はほぼ順調に進んだ。宮城県内の海岸林再生地での調査をもとに研究会, 講演で成果を報告している。 ②女性の武家奉公としての奥女中の働きに着目した書籍を刊行することができた。 ③ジェンダー論に関して4つの依頼された講演を終えた。複数の原稿を仕上げ校正段階にあるが, なお期限を過ぎた原稿が残り, 着手を急がなければならない。				
来年度の進捗目標	①科学研究費助成事業(基盤研究C)で課題とした海岸林の歴史研究は最終年度を迎えるので史料収集の整理, 報告書の作成, 論文執筆に取り組む。 ②近世ジェンダー論, 家族論に関して依頼されている原稿を執筆し, 講演を準備する。				
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)					
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要	
科学研究費補助金 基盤研究C	2021年度～2023年度	個別(研究代表者)		日本近世における海岸防災林の生育管理と資源利用に関する研究	
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動					
2020年3月～			比較家族史学会 理事		
2019年11月～			秋田県文化財保護審議会 委員		
2012年4月～			宮城県文化財保護審議会 委員		
2007年4月～			NPO法人宮城歴史資料保全ネットワーク理事		
2004年12月～			東北都市学会 会員		
2004年12月～			ジェンダー史学会 会員		
2001年～			東北史学会 評議員		
2000年4月～			日本民俗学会 会員		
1990年4月～			女性史総合研究会 会員		
1987年10月～			東北史学会 会員		
1986年6月～			宮城歴史科学研究会 会員		

1982年4月～	総合女性史学会 会員		
1981年4月～	比較家族史学会 会員		
1978年4月～	歴史学研究会 会員		
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	文学部 歴史学科	職名	教授	氏名	楠 義彦	大学院の授業 担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
ヨーロッパ中近世社会史(オンデマンド)		2020年4月～2022年		ヨーロッパ中近世社会史の講義をオンデマンドで受講できるように動画を作成した。			
パワーポイントの利用(新型コロナへの対応でZoomを用いて行う)		2020年～2022年		従来、パワーポイントを利用してきたが、今年度は新型コロナへの対応のため、Zoomを通じての画面共有で行った。「ヨーロッパ史専門講読Ⅲ」の授業で、エリザベサン・セクレタリイ・ハンドの文字の判読を指導するために補助的に使用している。			
パワーポイントの利用		2018年～		「ヨーロッパ史専門講読Ⅲ」の授業で、エリザベサン・セクレタリイ・ハンドの文字の判読を指導するために補助的に使用している。			
授業評価の実施		2017年4月1日～		学科で決定したすべての授業で実施している。			
独自に作成した資料の配布		2017年～		「ヨーロッパ中近世社会史」の授業で、授業内容を図式的に理解できるように工夫している。特に一人ひとりが資料を読み取った結果を、少人数のグループで検討させ発表させている。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
ヨーロッパ中近世社会史の教科書『魔女のヨーロッパ史』の作成		2022年7月13日～		楠義彦『魔女のヨーロッパ史』KDP(アマゾン直販)、2022年、全235頁、1700円(税別)。ISBN 978-8-8401-9039-5			
東北学院大学文学部歴史学科編『大学で学ぶ東北の歴史』		2020年～		コラム4「日本地震学会とイギリス人の地震観」95-96頁			
授業内容のレジュメの作成と配布		2010年1月～		学生の理解を深め定着させるために、授業での板書とは別にレジュメを配布している。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
2020年度から実施するTGベーシック科目「読解・作文の技法」の授業案に基づき、マナバのプロジェクトを積極的に利用し、学生相互の意見交換を促した。		2020年5月1日～2022年		本来、多人数での授業をグループワークで行う予定が、新型コロナへの対応ができなくなった。代替策としてマナバのプロジェクトを用い、受講生を9プロジェクトに区分して、随時用いれるプロジェクト内の掲示板として活用した。オンタイムで教員側からコメントや提案をし続け、授業の充実につながった。			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセイ(専門分野)							
『魔女とネコ』	単著	2022年9月	Amazon	楠 義彦	pp.1-125		
『魔女のヨーロッパ史』	単著	2022年8月	Amazon	楠 義彦	pp.1-230		
E. 一般著書・論文・エッセイ(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							

G. 学会における研究発表			
H. 翻訳(学術書や原典等)			
I. 特許			
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
IV 学会等及び社会における主な活動			
2019年4月～2023年3月		西洋史研究会 西洋史研究会理事	
2019年4月～2023年3月		西洋史研究会 理事	
2018年～		西洋史研究会理事(西洋史研究会理事)	
2014年1月～		学際魔女研究会会員(学際魔女研究会会員)	
2014年1月～		学際魔女研究会 会員	
1997年～		東北史学会	
1986年4月～		西洋史研究会 会員	
1986年～		日本西洋史学会 会員	
1986年～		西洋史研究会会員(西洋史研究会会員)	
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	文学部 歴史学科	職名	教授	氏名	佐川 正敏	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
教員自身が1986年～1998年に文化庁奈良国立文化財研究所(現独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所)で研究員・主任研究官として飛鳥地域や藤原宮・京跡、平城宮・京跡の発掘調査と研究に従事した経験を授業に活かしている。また、東・北アジアを中心とする国内外の遺跡で毎年実施してきた考古学的調査・研究の成果、その際に撮影した映像資料に基づいて作成し、更新しているパワーポイントを授業教材として使用している。		2020年4月1日～		考古学概説Ⅰ(1年)、基礎演習Ⅰ(2年)アジアにおける国家の誕生(3年)、考古学実習Ⅰ(2年)、考古学実習Ⅱ・Ⅲ(3年)、考古学総合演習Ⅰ・Ⅱ(3年)、考古学の諸問題Ⅱ(3年)、考古学論文演習Ⅰ・Ⅱ(4年)、考古学の諸問題Ⅲ(4年)、及び大学院講義科目で実施			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要			
科学研究費補助金 日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究(A)		2021年度～2025年度	共同(研究分担者)	モンゴルのウイグル可汗国地方官衙遺跡であるシャルツ・オール1遺跡の発掘調査と出土瓦磚の調査及びその中国・ロシアとの比較研究			
科学研究費補助金 日本学術振興会科学研究費補助金・国際共同研究強化(B)		2019年度～2022年度	共同(研究分担者)	中国歴代都城の考古学的調査・研究と日韓古代都城・都市遺跡との比較研究及び国際シンポジウム(中国先秦都城遺跡の考古学的研究)等の調整			

科学研究費補助金 日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究A	2018年度～2022年度	共同(研究分担者)	モンゴル国ホステイン・ボラグ3遺跡の匈奴時代瓦窯跡の共同発掘と瓦磚の調査・研究、及び中国漢代との比較研究
IV 学会等及び社会における主な活動			
2018年4月～	岩手県一関市骨寺村荘園遺跡指導委員会 委員		
2018年4月～	岩手県「平泉の文化遺産」世界遺産拡張登録検討委員会 委員		
2016年11月～	国史跡 鳥海柵跡(岩手県金ケ崎町) 整備委員会 委員		
2016年11月～	国史跡 上人壇麿寺跡(福島県須賀川市) 整備委員会 委員長		
2016年4月～	山形県高島町日向洞窟調査指導委員会 委員		
2012年6月～	長野県茅野市尖石遺跡縄文文化賞審査委員会 委員		
2010年3月～	福島県南相馬市国指定史跡「泉官衙遺跡」調査・整備検討委員会 委員		
2004年6月～	日本旧石器学会会員 会員		
2000年9月～	中国社会科学院古代文明研究センター 客員研究員		
1998年5月～	宮城県考古学会 会員		
1998年2月～	古代瓦研究会 会員		
1990年4月～	日本考古学協会会員 会員		
1989年9月～	日本中国考古学会 会員		
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	文学部 歴史学科	職名	教授	氏名	櫻井 康人	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
考える力の向上		2021年4月～		演習において自由討論の機会を極力多く設けることで、学生の考える力の向上を図っている。			
考える力の向上		2020年4月1日～		演習等において、学生が自発的に自分の考えを発言し、そして他の学生がそれに対する自分の考えを述べられるような雰囲気を作ることに努めている。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
日本人初のエルサレム巡礼者		単著	2023年3月	ヨーロッパ文化史研究, 24	櫻井康人	pp.21-32	
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
教皇ウルバヌス4世の十字軍政策(下)		単著	2023年3月	東北学院大学論集 歴史と文化(旧歴史学・地理学), 67	櫻井康人	pp.97-119	
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
「十字軍と「キリストの騎士」」「エピソード・トピック 映画『キングダム・オブ・ヘブン』『つなぐ世界史1 古代・中世』		分担執筆	2023年3月	清水書院	岡美穂子責任編集	pp.156-163	
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要			
IV 学会等及び社会における主な活動							
2019年4月～			西洋中世学会常任委員 会員				

2007年4月～		東北史学会評議員 会員	
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	文学部 歴史学科	職名	教授	氏名	佐藤 義則	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要			
IV 学会等及び社会における主な活動							
2019年4月～			国公立大学図書館協力委員会・大学図書館著作権検討委員会顧問 委員				
2014年6月～			宮城県図書館協議会 委員(会長)				
2013年12月～			国立国会図書館科学技術情報整備審議会 委員				
2008年7月～			一般社団法人ALFAE(アジア・太平洋 食・農・環境 情報拠点)相談役 委員				
2006年7月～			American Society for Information Science & Technology. 会員 委員				
2005年4月～			国立国会図書館カレントアウェアネス編集企画委員会 委員				
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							

来年度の進捗目標	
VI 学内における管理運営に関する諸活動	

2022年度							
所属	文学部 歴史学科	職名	教授	氏名	下倉 渉	大学院の授業 担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概 要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・ 共著 の別	発行又は発表の年月 (西暦)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要			
IV 学会等及び社会における主な活動							
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
VI 学内における管理運営に関する諸活動							

2022年度							
所属	文学部 歴史学科	職名	嘱託教授	氏名	辻 秀人	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
リモートを活用した講義展開		2021年4月1日～					
2. 作成した教科書、教材、参考書							
manabaを活用した学生とのコミュニケーション		2021年4月1日～					
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
『灰塚山古墳の研究』	単著	2022年12月	雄山閣	辻 秀人	pp.1-302		
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
(1)総説	単著	2022年12月	日本考古学年報74	辻 秀人	pp.11-6		
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
高輪築堤から近代化遺産の保存を考える	単著	2022年11月	近代化遺産シンポジウム金沢2022	辻 秀人	pp.9-12		
福島県喜多方市灰塚山古墳の調査成果	単著	2022年11月	『戸塚山137号墳シンポジウムーよみがえる置賜の女王ー』	辻 秀人	pp.1-6		
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要				
IV 学会等及び社会における主な活動							
2020年7月～2024年5月		日本考古学協会会長 企画立案・運営等					
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等				

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	
VI 学内における管理運営に関する諸活動	

2022年度							
所属	文学部 歴史学科	職名	教授	氏名	永田 英明	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
博物館情報・メディア論の授業として、学生による展示紹介動画の製作実習を実施した。		2020年9月～					
演習科目に於いて、木簡の製作とこれを活用した展示の作成などの実習の要素を積極的に採り入れ、アクティブラーニングの要素をとり入れた。		2020年9月～					
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
三関の設置ー畿内東隣地域と王権『講座畿内の古代学IV 軍事と対外交渉』	共著	2022年9月	雄山閣	永田英明ほか	pp.102-121		
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
『東北史講義 古代・中世編』	共著	2023年3月	筑摩書房	柳原敏昭, 堀裕, 相沢秀太郎, 吉田敏, 鈴木琢郎, 大堀秀人, 永田英明, 渡邊俊, 黒瀬にな, 泉田邦彦, 黒田風花, 熊谷隆次, 鈴木拓也, 吉野武, 片岡耕平, 白根洋子, 永井隆之	pp.71-89		
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要				

IV 学会等及び社会における主な活動			
2020年～		郡山遺跡・陸奥国分寺跡等調査指導委員会 委員	
2017年～		NPO法人宮城歴史資料保存ネットワーク理事	
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	文学部 歴史学科	職名	教授	氏名	七海 雅人	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
ゼミにおいて博物館や遺跡の見学会・研究ミニ旅行・調査実習活動などを行っている。		2010年4月12日～2023年3月21日		松島町雄島海底板碑群の調査と東北学院大学博物館における展示作業、中尊寺境内の見学会と薪能運営のボランティア活動、鎌倉市・横浜市ミニ研修旅行、仙台市・石巻市の板碑群をめぐるツアー、東北歴史博物館などの見学。			
ゼミにおいて卒業論文を編集したデータ・ファイルを作成している。		2010年4月12日～2023年3月20日		ゼミの4年生が作成した卒業論文について、あらためてその内容を整理させ、書式を統一した上で版下を作成し、PDFファイルにしてゼミの受講生へ配付している。			
授業内容をまとめたプリントを配布している。		2010年4月12日～2023年1月16日		授業の内容を整理したプリントを作成・配布し、教材として利用している。このプリントの内容は、授業評価により得た受講生の意見を参考にしながら修正・吟味を行っている。			
学習事項の理解促進のために授業内容を整理する。		2010年4月12日～2023年1月16日		授業のはじめに前回の内容をふりかえり、おわりに今回の内容をまとめ、各回授業内容の整理をおこなっている。あわせて、授業テーマ全体の中における各回の位置づけを明確にしている。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
市民企画会学習サロン(福室市民センター)の講師		2023年1月17日		「もう一つの松島―「鎌倉殿の13人」の世界と知られざる中世の霊場―」を担当した。			
仙台明治青年大学学習会(太白区市民センター)の講師		2022年10月5日		「中世松島の世界―観光客が知らないもう一つの松島・よみがえる中世の霊場―」を担当した。			
山元町ふるさと歴史学習会(邑史会)の講師		2022年7月27日		「鎌倉殿の13人とふるさとの歴史」を担当した。会場:坂元地域交流センター			
仙台市老壮大学(福村市民センター)の講師		2022年5月25日		「鎌倉時代の仙台・歴史の探究」を担当した。			
現在の課題・目標		①オンデマンドによる講義科目について、受講生が負担なくビデオを視聴し、より関心をもてるような教材の研究を進める。 ②ゼミ活動について、見学会やフィールドワークを再開し、大学博物館における雄島海底板碑群展示の充実をはかる。 ③ゼミにおける卒業論文の作成・課題研究と就職・進学活動との両立に関して、オンラインによるオフィスアワーの活用なども組み込みながら、より丁寧な学習・進路に関する指導をこころがけ実行する。					
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
『『北上市史 資料編古代・中世』』		分担執筆	2022年11月	岩手県北上市		菅野文夫,	pp.340-392
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							

G. 学会における研究発表					
「宮城県の板碑—松島町雄島海底板碑群の紹介を中心に—」	単独	2023年2月	板碑が語る中世の石巻シンポジウム(石巻市マルホンまきあーとテラス)	七海雅人	
「松島町雄島海底板碑群の概要」	単独	2023年1月	石造物科研成果報告会(大阪歴史博物館)	七海雅人	
「14・15世紀陸奥国南部における武家拠点の展開」	単独	2022年11月	「武家拠点科研」大阪研究集会「中世後期から近世初頭における武家拠点形成の研究」(大阪歴史博物館)	七海雅人	
H. 翻訳(学術書や原典等)					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)					
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要		
科学研究費補助金 科学研究費補助金 基盤研究(B)	2019年度～2021年度	共同(研究代表者)	「平泉仏教文化の諸相とその社会的基盤に関する資料学的研究」		
科学研究費補助金 科学研究費補助金基盤研究(A)	2018年度～2022年度	共同(研究分担者)	「デジタル技術による金石文史料の研究資源化と学融合的歴史叙述への応用研究」		
科学研究費補助金 科学研究費補助金基盤研究(B)	2018年度～2021年度	共同(研究分担者)	「中世後期から近世初頭における武家拠点形成の研究」		
科学研究費補助金 科学研究費補助金(基盤研究(A))	2015年度～2021年度	共同(研究分担者)	「石造物研究による中世日本文化・技術形成過程の再検討—東アジア交流史の視点から—」		
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動					
2023年2月	花巻市史編さん委員会 委員				
2021年4月～	名取市文化財保存活用地域計画策定協議会 委員				
2021年4月～2023年3月	特別名勝松島保存活用計画策定会議 構成員				
2020年9月～	歴史科学協議会 全国委員				
2019年4月～	宮城県文化財保護審議会(松島部会) 委員				
2017年1月～	仙台市文化財保護審議会 委員(2021年3月から副会長)				
2016年12月～	北上市史編さん古代・中世部会 中世班委員				
2013年6月～	東北学院大学中世史研究会 会長				
2013年5月～	相馬市史 調査執筆員				
2009年4月～	東松島市文化財保護審議会 委員(2020年4月から副会長)				
2007年4月～	NPO法人宮城歴史資料保全ネットワーク 理事				
1996年～	東北学院大学中世史研究会 会員				
1996年～	歴史科学研究会 会員				
1995年9月～	宮城歴史科学研究会 委員				
1995年～	日本史研究会 会員				
1993年～	宮城歴史科学研究会 会員				
1992年～	日本古文書学会 会員				
1992年～	史学会 会員				
1992年～	歴史学研究会 会員				

1990年10月～		東北史学会 会員	
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	文学部 歴史学科	職名	教授	氏名	政岡 伸洋	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
学生からの質問、感想に対するコメントの実施		2020年9月～		授業に対する学生のニーズは多様化しており、これには配慮しつつも限界がある。そこで、講義科目では、授業終了後に質問や感想を出席カードの裏に任意に書かせ、次の授業の冒頭でコメントしてきたが、教員とのコミュニケーションや講義科目に対する関心を深められるようで、学生には好評であった。そこで、オンデマンド授業となった今年度の民俗学概説Ⅱでは、出席確認のResponを自由記述にし、質問や感想を書いてもらい、その内容についてコメントした動画を、次の授業の際に講義内容とは別にアップして見てもらうようにしたところ、教員とのコミュニケーションがとれているといった実感を持ってもらえたようで、非常に好評であった。			
フィールドワークを実施する科目において、新型コロナウイルス感染拡大への対策を考慮した内容を試みた。		2020年9月～2023年3月31日		これまで歴史学科3年生配当科目「民俗学実習Ⅱ」「民俗学実習Ⅲ」では、アクティブラーニングの手法も参考にしつつ、受講生が直接現地へ赴き、民俗調査を経験してもらうことになっているが、今年度は新型コロナウイルスの感染拡大のため、遠距離の移動や合宿形式での実施は難しいことから、フィールドを大学から歩いて行ける仙台城下町とし、文献調査および巡検を中心に行うことにした。インタビューが出来なくても、現地を歩くことでさまざまな情報を得ることができることを受講生も気づいてくれたようで、新たな発見も多く、感染対策をしつつディスカッションも行うことができ、試行錯誤の連続であったが、それなりの成果は出せたのではないかと思われる。新型コロナウイルス感染拡大が落ち着くまでは、今後もいろいろと工夫しつつ、より良い経験をしてもらえるように試行錯誤を重ねていき、いずれは仙台市教育委員会との地域連携事業にできればと考えている。			
オンデマンド授業において、できる限り対面授業の雰囲気を出すよう心掛けている。		2020年9月～2022年9月26日		新型コロナウイルス感染拡大により、これまで大教室で行われてきた民俗学概説Ⅱの授業について、オンデマンド授業へと変更を余儀なくされた。これについて、全国的にマスコミ等で学生がオンライン授業で非常にストレスを感じていること、対面授業を希望する声が多いことなどが報道され、本学においても同様の傾向が見られたことから、テキストを事前に配布しつつ、これまでの対面授業の雰囲気に近づけるため、動画の撮影の際に、あえて顔を出して画面の向こうの学生に語り掛けるように心がけ、あまり完璧に編集するのではなく、日常会話的な雰囲気を出しつつ、Zoomのホワイトボードを使用して、できる限り板書を行うようにするなど、工夫を凝らすことにした。初めての試みで最初は不安であったが、学生からは好評であった。			
前回の授業内容の確認の実施と授業理解の促進		2019年～		毎回新たな講義内容に入る前に、前回の授業内容を簡単に解説し、学生の理解に配慮している。			
学生からの質問、感想に対するコメントの実施		2019年～		授業に対する学生のニーズは多様化しており、これには配慮しつつも限界がある。そこで、講義科目では、授業終了後に質問や感想を出席カードの裏に任意に書かせ、次の授業の冒頭でコメントしているが、教員とのコミュニケーションや講義科目に対する関心を深められるようで、学生には好評である。			
フィールドワーク実施する科目において、地域との連携を深めている		2019年～		歴史学科2年生配当科目「民俗学調査入門Ⅰ」、3年生配当科目「民俗学実習Ⅰ」「民俗学実習Ⅱ」では、アクティブラーニングの手法も参考にしつつ、受講生が直接現地へ赴き、民俗調査を経験してもらうことになっているが、2005年度より県立博物館や市町村の教育委員会、私設博物館、また地元の郷土研究会等とも提携し、調査を実施している。その際、学芸員や技師の方々がボランティアで参加してくれているが、学生たちもさまざまな専門分野からのアドバイスが受けられ、学問的関心を深められるようである。また、その成果は発表会や調査報告書の刊行により、地元への還元も行っている。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							

オンラインにて、秋田中央高等学校の出張講義を担当した。		2022年7月4日～2022年7月4日			
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
II 研究活動					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)					
東北学院大学博物館所蔵 西村家生活関連資料調査中間報告書—コロナ禍における「民俗学実習」教育研究活動の記録—	共著	2023年2月	東北学院大学論集 歴史と文化(68)	政岡伸洋, 加藤寛, 真柄佑, 福澤光稀	pp.1-76
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)					
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)					
G. 学会における研究発表					
宮城県南三陸沿岸の契約講と日常の暮らし	単独	2023年3月	日常の暮らしと社会伝承研究会「研究集会」(島根県)	政岡伸洋	
我妻和樹監督作品『波伝谷に生きる人びと』からみえる映像民俗誌の意義と課題(担当:コメント『波伝谷に生きる人びと』からみえる映像民俗誌の意義と課題)	共同	2022年12月	国立歴史民俗博物館共同研究「映像による民俗誌の叙述に関する総合的研究—制作とアーカイブスの実践的方法論の検討」研究会(千葉県)	我妻和樹, 政岡伸洋	
民俗学で考える日本の祭り—京都祇園祭の場合—	単独	2022年11月	第2回教育研究ワークショップ「日本の歴史・文化・社会 日本を学ぶ、日本語で学ぶ」(ウズベキスタン・タシュケント)	政岡伸洋	
パネルディスカッション:「京都民俗」の“これまで”と“これから”(個別報告「新たなる萌芽～独自の学風の形成に向けて～」を担当)	共同	2022年10月	京都民俗学会第346回談話会 京都民俗学会40周年記念シンポジウム①「京都民俗」の40年(京都(オンライン))	内田忠賢, 村上忠喜, 政岡伸洋, 土井浩, 島村恭則, 三隅貴史	
从日常生活的角度来思考灾害的应对—以民俗学的视角出发(日常の暮らしのあり方から考える災害への対応)	単独	2022年8月	灾害历史的跨学科探索“灾害与历史”第六届高级研修班(中国(オンライン))	政岡伸洋	
H. 翻訳(学術書や原典等)					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)					
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要		
IV 学会等及び社会における主な活動					
2016年5月～		現代民俗学会			
2015年12月～		京都民俗学会 会員			

2014年9月～	ひょうご部落解放・人権研究所 会員
2010年10月～	岩手民俗の会 会員
2010年6月～	民俗芸能学会 会員
2007年10月～	日本民俗学会
2005年1月～	環境社会学会 会員
2004年6月～	東北民俗の会 会員
2004年4月～	東日本部落解放研究所 会員
2003年4月～	日本村落研究学会 会員
2003年4月～	徳島地域文化研究会 会員
2002年12月～	文化経済学会 会員
2002年4月～	日本社会学会 会員
2001年5月～	現代韓国朝鮮学会 会員
2000年8月～	韓国・朝鮮文化研究会 会員
1998年10月～	比較日本文化研究会 会員
1995年2月～	沖縄民俗学会 会員
1995年2月～	沖縄民俗学会 会員
1994年6月～	日本文化人類学会 会員
1994年4月～	部落解放・人権研究所 会員
1991年11月～	比較家族史学会 会員 会員
1988年4月～	京都民俗学会 会員 会員
1988年3月～	日本民俗学会 会員
1988年1月～	近畿民俗学会 会員

V 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

VI 学内における管理運営に関する諸活動

--

2022年度							
所属	文学部 歴史学科	職名	嘱託教授	氏名	渡辺 昭一	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		コロナ感染対策にもとづき、平常に戻りつつあることから、対面での教育活動を優先していく。研究の成果・卒業論文の作成と就職活動を両立させることを目指す。					
今年度の進捗状況		コロナ感染対策により、オンラインおよび対面の半々の活動であったが、4年生の卒論提出、就職も無事終了した。3年生についても、卒論と就活の準備に向けた指導を行った。					
来年度の進捗目標		昨年以上に対面を重視していくことから、よりきめ細かい指導を行う予定でいる。					
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
ケネディ政権の「危うい」パキスタン外交—1961年7月ケネディとアユーブ・ハーン的首脳会談をめぐって		単著	2023年3月	歴史と文化, 67		渡辺昭一	pp.63-96
2021年度西洋史研究会大会共通論題「ブリテッシュ・ワールド—帝国の紐帯とアイデンティティ」開会の辞、討論		単著	2022年11月	西洋史研究, 51		勝田俊輔	pp.100, 165-101, 187
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
イギリス帝国支配とインド鉄道		単著	2022年4月	歴史, 138		渡辺昭一	pp.132-134
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		科学研究補助金基盤C(代表: 渡辺昭一)と基盤B(代表: 矢後和彦(早稲田大学))と基盤B(代表: 竹内真人))の3つの課題を同時に遂行すること。					
今年度の進捗状況		3つの科研課題の追求に専念してきたが、一次資料の収集を行いつつ、その成果の一部を論文として発表できた。また、研究会での中間報告を行った。					
来年度の進捗目標		3つの科研課題を引き続き追求していく。その成果を公開講演会などで、発表していく。					
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)		個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要	
科学研究費補助金 科研費基盤(B)		2021年度～		共同(研究分担者)		グローバル債務の歴史的構造—成長と開発の国際連関—	
科学研究費補助金 日本学術振興会・科学研究費補助金(基盤C)		2021年度～		共同(研究代表者)		南アジア冷戦下の国際援助と軍事的自立化の研究	

科学研究費補助金 科学研究費 基盤B	2020年度～	共同(研究分担者)	ブリティッシュ・ワールドの共通意識と紐帯に関する総合的歴史研究
IV 学会等及び社会における主な活動			
2018年4月～		国際武器移転史研究所 研究員	
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	文学部 歴史学科	職名	准教授	氏名	金子 祥之	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
マイクロリズムにもとづく民俗調査		2020年9月～		コロナ禍のため、課外活動が大きな制約を受けた。フィールドワークといわれる現地調査による学習機会が失われてしまった。それを補うため、「民俗学調査入門Ⅱ」「民俗学総合演習Ⅱ」では、感染状況を見計らいながら、マイクロリズムの考えにもとづく非接触型の現地調査を実施した。			
オンデマンド型講義の提供		2020年4月～		「民俗学概説Ⅰ」「民俗学の諸問題Ⅱ」の講義用にyoutubeチャンネルを開設し、オンデマンド授業に対応した学習機会を提供した。毎回の小課題を通じ授業内容の理解度を確認し、次回の講義においてフィードバックを行なった。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
檜枝岐の暮らしと民具(一) 一福島県南会津郡檜枝岐村における板倉保管資料の調査から		共著	2023年2月	歴史と文化(68)	金子祥之, 増藤雄大, 庄司貴俊	pp.93-225	
原発災害被災地における集落共同の変質—集落祭祀に関する村規約の分析から		単著	2022年11月	社会学年報(51)	金子祥之	pp.7-19	
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要			

科学研究費補助金 若手研究	2021年度～2024年度	(研究代表者)	本研究では、何ゆえに極小集落が存続し続けることができたのか／あるいはできているのかを、民俗学的なアプローチにより明らかにする。すなわち、人口規模が極端に小さな集落が発揮するレジリエンスを、生活者の立場から解明する。現代の日本社会では、人口規模の小さな集落は統廃合の対象としてみなされ始めている。たしかに極小集落には、のちに廃村に至るものがあり、存続可能性が乏しいように見受けられる。しかしながら、小規模であるにもかかわらず、存続し続けてきた集落があることも確かである。本研究では、小さな集落のレジリエンスを通時的・共時的に分析し、生活者の立場からとらえた村落社会の存続論を展望する。
---------------	---------------	---------	---

IV 学会等及び社会における主な活動

2021年11月～	日本村落研究学会 理事
2021年6月～	福島県民俗学会 幹事
2021年6月～	環境社会学会 理事
2021年6月～	福島県民俗学会 会員
2021年6月～	環境社会学会 研究活動委員会委員
2020年5月～	現代民俗学会 編集委員
2017年11月～	日本村落研究学会 ジャーナル編集委員
2017年7月～	檜枝岐村教育委員会檜枝岐村民俗史編さん委員会 専門員(民俗)
2017年6月～	環境社会学会 会員
2015年11月～	日本村落研究学会 会員
2014年5月～	現代民俗学会 会員

V 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

VI 学内における管理運営に関する諸活動

2022年度							
所属	文学部 歴史学科	職名	准教授	氏名	杵淵 文夫	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
卒業論文の研究テーマに関する個人面談		2020年4月1日～		<p>前年度に引き続き、今年度も「ヨーロッパ史総合演習Ⅰ・Ⅱ」の所属学生および「ヨーロッパ史論文演習Ⅰ・Ⅱ」の所属学生を対象に、卒業論文のテーマ選択に関する個別相談を実施した。今年度は、新型コロナウイルス流行のためZoomも活用した。一人当たり平均2回程度で、1回あたりの平均面談時間は20分であった。新型コロナウイルスの流行により、総合演習と論文演習をZoomで実施することが増えたため、学部3・4年生それぞれの卒論研究を進めさせる代替的な方法として、この個別相談を継続した。</p> <p>その結果、3年生はテーマ選択については学生それぞれの進度にバラツキは出たものの、最終的にはどの学生も卒業論文のテーマを設定することができた。</p>			
少人数の授業における学生コメント一覧の作成・配付		2020年4月1日～		<p>少人数の演習型授業「基礎演習Ⅱ」、「ヨーロッパ史総合演習Ⅰ・Ⅱ」、「ヨーロッパ史論文演習Ⅰ・Ⅱ」等では、学生が発表した後に、他の受講学生の意見感想を知ることができるようにしている。授業時間内に全員が意見を言えなかったり、口頭では言いにくい内容も多々あると推測されるため、2021年度もこれを継続した。</p> <p>具体的には、授業内の発表に対して意見や批判を書かせて、それを一覧の形式で取りまとめ、次回の授業で配付した。これによって、発表学生は教員や一部学生の意見だけでなく、他の学生が自分の発表についてどのように考えているかを知ることが出来るようになり、次回の発表にフィードバックするようになった。</p> <p>なお、2021年度は新型コロナウイルスの流行拡大もあり、記入では主にインターネットツールの(Respon)を活用した。Responの設定等では相応の時間と労力が掛かってしまうものの、記入内容の取りまとめと各学生への配付の作業では負担が軽減された。</p>			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
教材「第一次大戦開戦に関する史料」		2020年4月1日～		<p>「基礎演習Ⅱ」の共通テーマとして第一次世界大戦の勃発原因研究を設定した。受講学生が、大戦の勃発原因について一次史料を使って分析できるように、関連史料を邦語訳して授業で活用した。</p> <p>その史料としては、大戦勃発研究において最も重要視されているものを選び出した。対象としたのは、サラエヴォ事件(1914年6月28日)後からオーストリア=ハンガリー共通閣議(1914年7月7日)までのドイツとオーストリア=ハンガリーの公文書、手記、手紙等である。</p> <p>授業では、場面ごとに5つに区分して史料を分析させ、学生同士で史料の解釈を議論させた。その成果として、受講学生それぞれがオーストリア=ハンガリーが開戦の方針を固める経緯を考察したレポートを提出した。</p> <p>歴史上の重要史料に触れることはとても好評であったため、この取り組みは次年度も継続する予定である。</p>			
学術研究の手続きに関する教材の開発		2020年4月1日～		<p>学術研究を進める際に踏まなければならない手続きを総括的にまとめた資料を加筆修正した。2018年度以来続けている取り組みであるが、学生が問題関心および研究目的の提示、先行研究の紹介と批判、研究課題の設定、研究方法の取捨選択を、実例に基づきつつ理解できる内容になるよう工夫している。「基礎演習Ⅱ」、「ヨーロッパ史総合演習Ⅰ・Ⅱ」、「ヨーロッパ史論文演習Ⅰ・Ⅱ」で活用した。</p>			
「卒業論文の書き方」(東北学院大学生向け)の執筆		2020年4月1日～		<p>学生が卒業論文の執筆に取り掛かる際に参照するためのマニュアルとして「卒業論文の書き方」を、2015年度以来作成している。2020年度は文献収集の方法が学生にわかりやすくなるよう加筆修正した。2021年度も、「ヨーロッパ史総合演習Ⅰ・Ⅱ」の3年生および「ヨーロッパ史論文演習Ⅰ・Ⅱ」の4年生に配付し、卒業論文研究等で活用させた。</p>			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							

学内の遠隔授業サポートチームへの参加	2020年4月13日～	<p>新型コロナウイルスの流行により、2020年4月13日に学科長の要請により学内の遠隔授業サポートチームの構成員となった。</p> <p>4月15日にはそのミーティングに参加し、オンライン授業の実施方法について情報を共有した。オンライン授業に関する学科教員、学部生・大学院生からの質問にも対応した。4月末には、前期授業の実施方法に関するアンケートに従事した。4月15日と5月7日には歴史学科独自のオンライン授業の講習にも参加した。さらに、7月以降は後期授業の実施形態調査に協力した。</p>
「研究・発表の技法」の授業計画の作成	2020年4月1日～	<p>新型コロナウイルスの感染拡大で前期の授業がオンラインになったために、学部1年生は学友も作れず大学に入学した実感を持っていないというメンタル上の深刻な問題が生じた。そのため、学科長が「研究・発表の技法」の担当教員数(コマ数)を増やして、対面授業で実施する計画を策定した。</p> <p>当初の授業計画とは状況(特に受講人数)が大きく変わることとなったため、当初計画にもとづきつつ授業計画を立て直す必要が生じた。そこで、この授業の計画を修正するとともに、担当教員への説明のための資料を作成した。毎授業の30分前に教員控室に集合し、授業内容の説明と調整を担当した。</p>
学生の就職活動の支援	2020年4月1日～	<p>「ヨーロッパ史総合演習」と「ヨーロッパ史論文演習」の所属学生を対象として、就職活動の支援を行った。例年のような、「就活情報交換会」、「OB/OG社会人生活報告会」、「模擬面接」、「就活個別相談会」は実施できなかったものの、適宜、履歴書やESの書き方講座、SPIの講座、就活の進め方講座を実施し、就職活動に関する情報をManabaやメールで断続的に提供し続けた。これらを通じて3年生は次年度の就職活動に向けて、準備を進めるとともに意識を高めた。</p> <p>その他に、3・4年生の履歴書やESの添削依頼や進路相談にも対応した。</p> <p>2021年度は新型コロナウイルスの流行によって新卒採用の状況は厳しさを増したものの、ゼミ所属4年生12名中11名が秋の時点で内定を獲得できていた。次年度も就活支援を継続する予定である。</p>
新入生(来年度学部1年生)の履修指導の準備	2019年～	<p>新年度入学生のオリエンテーションにおける履修指導の準備を行った。グループ主任らとの打ち合わせ(3月22日、3月27日)に出席し、学生協力者(オリエンテーションリーダー)と準備の協議を行った。このほか、履修指導の動画(1年生向け、2年生向け2種類、3年生向け2種類)を作成し、Manabaで公開した。</p>
現在の課題・目標	<p>昨年度設定した「来年度の進捗目標」は以下の通りであった。</p> <p>①「ゼミ関連」: 新型コロナウイルスの流行状況をにらみつつ、授業計画の改善を進める。2022年度は、「総合演習Ⅰ・Ⅱ」において「第一次世界大戦の勃発原因」を共通テーマに設定し、ゼミ全体として研究を行う。「論文演習Ⅰ・Ⅱ」においては、所属学生が卒業論文に向けて着実に研究を進められるように指導をする予定である。</p> <p>②「ゼミ以外の授業」: 新型コロナウイルスの流行を考慮し、特に1年生と2年生に関して学生が授業に安心して専念できるように留意する。また、ヨーロッパ史に強い関心をもつ学生に応えられるように授業内容を改善する。</p> <p>③「授業以外のサポート」: 学業との両立の観点から、3年生および4年生の進路選択に関する支援を継続する。</p>	
今年度の進捗状況	<p>①. 新型コロナウイルスの流行下での授業実施方法も定着し、計画通りに進められた。「ヨーロッパ史総合演習Ⅰ・Ⅱ」の学生は、第一次大戦勃発論の基礎文献としてF. フィッシャー『世界強国への道』をグループワークで検討し、重要な学説を把握できた。「ヨーロッパ史論文演習Ⅰ・Ⅱ」の学生は卒業論文計画にもとづいて研究を進め、卒業論文を完成されることができた。</p> <p>②. 進捗した。学部1年生向けには、「研究・発表の技法」は例年通り対面で実施し、今年度も担当クラスでは成績不振者を比較的少なく抑えることができたと思われる。また、ヨーロッパ史に関心を持つ学生向けに、「基礎講読Ⅱ」の実施方法を変更してドイツ語文献を読解した。</p> <p>③. 予定通りに進捗した。学部3年生には自己分析、履歴書ES作成、就活の進め方等について指導を行った。学部4年生には、進路選択に関する個別相談や書類添削などの指導を粘り強く行った。4年生はおおむね希望に沿った内定を得て、進路を確定させることができた。</p>	
来年度の進捗目標	<p>①「ゼミ関連」: 2023年度は、「総合演習Ⅰ・Ⅱ」において「第一次世界大戦の勃発原因」を共通テーマに設定し、ゼミ全体として研究を行う。「論文演習Ⅰ・Ⅱ」においては、所属学生が卒業論文に向けて着実に研究を進められるように指導をする。</p> <p>②「ゼミ以外の授業」: 新型コロナウイルスの流行を考慮し、特に1年生と2年生に関して学生が授業に安心して専念できるように留意する。また、ヨーロッパ史に強い関心をもつ学生に応えられるように授業内容を改善する。</p> <p>③「授業以外のサポート」: 学業との両立の観点から、3年生および4年生の進路選択に関する支援を継続する。</p>	
II 研究活動		

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)					
ユリウス・ヴォルフの中欧構想と人種観:全ドイツ連盟との比較において	単著	2023年2月	歴史と文化(67)	杵淵文夫	pp.3-30
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)					
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)					
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳(学術書や原典等)					
I. 特許					
現在の課題・目標	<p>昨年度設定した「来年度の進捗目標」は以下の通りであった。</p> <p>①. 前年度のオーストリア＝ハンガリーの「工業家クラブ」の分析結果を論文にまとめ学術誌に投稿する。これと同時に、世紀転換期オーストリア＝ハンガリーにおける農業団体の通商利害に関する分析を進める。</p> <p>②. ブランディング事業で課題としていた「ユリウス・ヴォルフの中欧構想と民族観」の研究結果を論文にまとめる。</p> <p>③. 大学授業と連携する形で、「第一次世界大戦の勃発原因」の研究に着手する。今年度は、大戦の勃発原因に関して、特にバルカン戦争以降のドイツとオーストリア＝ハンガリーのバルカン外交政策に関する先行研究の状況の把握を継続する。</p>				
今年度の進捗状況	<p>①. 進捗したが、目標は達成できなかった。「工業家クラブ」や「農林業利害擁護総本部」の機関誌の読解を進めるにとどまり、論文を完成させて学術誌に投稿するには至らなかった。</p> <p>②. 完了した。執筆した論文は『歴史と文化』(2023年2月刊行予定)に掲載された。これによって、ブランディング事業関連の活動は完了した。</p> <p>③. 多少進捗した。七月危機におけるオーストリア＝ハンガリー側史料の読解を進めた(オーストリア＝ハンガリー側の覚書、フランツ・ヨーゼフとコンラートの謁見、ホヨスの回想録等)。また、マクミーキンの研究書『July 1914』を読解し、基本的な研究状況の把握を進めた。</p>				
来年度の進捗目標	<p>①. 科研費の研究課題を進展させる。具体的には、オーストリア＝ハンガリーの「工業家クラブ」と「農林業利害擁護総本部」の史料分析の結果を、それぞれ論文にまとめて学術誌に投稿する。</p> <p>②. 将来的な研究のための準備として、大学の授業と連携する形で、「第一次世界大戦の勃発原因」の研究を進める。七月危機の史料および現在の主要な研究書を読解する。</p>				
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)					
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要		
科学研究費補助金 基盤研究(C)	2022年度～	個別(研究代表者)			
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動					
2020年～	西洋史研究会 評議員				
2019年4月～	東北史学会 評議員				
2019年～	東北史学会				
2012年4月～	東欧史研究会 会員				
2010年4月～	東北史学会 会員				
2008年4月～	ドイツ資本主義研究会 会員				
2007年4月～	社会経済史学会 会員				
2004年4月～	西洋史研究会 会員				
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動					
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等		
現在の課題・目標					

今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	
VI 学内における管理運営に関する諸活動	
<p>○教務委員(2017年度～2022年度) 教務委員として、編入学生オリエンテーションへの出席(4月1日)、新入生オリエンテーションへの出席(4月4、6日)およびその動画や資料作成の準備(4月1-3日)、「研究・発表の技法」の授業計画の策定と準備(9月～2023年1月)、教務委員会および同メール審議への参加(5月23日-6月2日、7月11日、7月25日、10月17日、11月28日、2023年2月6日、2月28日-3月3日)、前期と後期の試験実施および成績評価方法の周知(7月、1月)、カリキュラム改訂およびカリキュラムマップに関する作業(4月～2023年3月)、2023年度科目「研究・発表の技法」のシラバス作成、歴史学科ウェブページの校正(2023年3月)、学科学生の履修指導資料(履修指導の手引き、履修モデル)の作成(2023年3月)、2023年度編入学生の単位読み替えの準備作業(2023年3月)を行った。</p> <p>○大学要覧編集委員(2020年度～2022年度、2023年1月12-25日) 大学要覧(シラバス)編集委員の竹井英文准教授とともに、歴史学科の2023年度『大学要覧』の校正(アジア史およびヨーロッパ史)作業をおこなった。</p> <p>○時間割調整委員(2017年度～2022年度、2023年2月16日) 2月6日～2月15日にかけて時間割の問題点(例:資格科目や必修科目等のバッティング等)の事前調査を行った上で、時間割調整会議(2023年2月16日)に出席し、2023年度の科目の開講校時の調整などを行った。</p> <p>○TG-folio委員(2022年度) TG-folioの前回会議に出席した(5月12日、6月9日、7月21日、10月21日、11月21日、12月26日、2023年2月9日)。学科会議においてTG-folioについて報告するとともに、ポートフォリオに関わるカリキュラムマップや学科の運用方針の原案を作成した。</p> <p>○文学部・歴史学科点検評価委員(2017年度～2022年度) 文学部および歴史学科の点検評価委員会のメール審議(2023年2月2日～9日)に参加した。</p> <p>○教職課程センター所員(2017年度～2022年度) 2021年度は教職課程センター所員会議およびメール審議(2022年5月12日、11月10日、2023年1月25日、2023年2月22-27日)に出席した。</p> <p>○ヨーロッパ文化総合研究所主事(2022年度) 2022年度は東北学院大学ヨーロッパ文化総合研究所主事として、研究所の計画実施に従事した。本年度は、研究所事務アルバイトの募集、公開講演会の講師との交渉(福山大学村上亮准教授、福岡女子大学馬場優教授)との折衝、公開講演会の司会および運営協力(5月14日、10月22日、12月17日)に従事した。また、6月30日と10月6日には研究所統廃合作業委員会に、2023年1月17日には2023年度の予算ヒアリングに出席した。</p> <p>○大学案内編集委員(2016年度～継続) 2022年度は東北学院大学の『大学案内2023』の歴史学科担当の編集委員を務めた。『大学案内2023』の第2版の校正に従事し、大学案内編集委員会(7月21日)、およびメール審議(2023年2月17-21日)に参加した。主に取材リストの調整や人選(4年生、既卒者)、原稿の校正作業(1月～2月)などを行った。</p> <p>○総合型選抜の面接委員(2020年度～継続) 2022年度は面接委員として、総合型選抜の入試に従事した。面接委員として、A日程面接(9月29日)、および推薦入試の調査書評価・総合型選抜の二次面接(11月17日)を担当した。</p> <p>○一般入試問題(世界史)作成主任、校正委員、採点委員(2015年度～継続) 2022年度は、一般入試の「世界史」の問題の作成(大問2つ)、世界史分野の問題の取りまとめ、校正(初校:10月11-12、14日、再校:10月31日、11月1日、11月2日、三校:12月5-7日、四校:12月19-21日、下見:1月18日)、研究室待機および採点(2022年2月1-3日、3月3日)に従事した。</p> <p>○オープンキャンパス個別相談の担当 2022年度はオープンキャンパス(7月30日)において個別相談を担当した。</p> <p>○2023年度ヨーロッパ史分野の授業担当者の調整(2015年度～継続) 2023年度のヨーロッパ史分野の授業科目の担当者について、資料を準備した上で、9月6日に調整の話し合いを行った。非常勤講師への依頼等を決定の上、決定内容を学科長に報告した。</p>	

2022年度							
所属	文学部 歴史学科	職名	准教授	氏名	竹井 英文	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
ゼミにおける地域史研究活動の実践		2021年4月～		仙台市周辺にフィールドを定め、城館跡の縄張調査、古文書・古記録の調査、石造物や古道の調査、古絵図の調査を行い、総合的に地域史を研究する活動をしている。これまで利府町・松島町をフィールドに調査し、研究成果を『東北文化研究所紀要』に掲載している。2021年度は昨年度から続けている東松島市域を引き続き研究をした。			
「古文書学Ⅰ」の授業における工夫		2021年4月～		古文書に記された文字を解説・読解するだけでなく、①本物の古文書を使っての実演・解説、②パワポによるカラー画像を使用した解説、③古文書のコピーを配布して折り方・封の仕方を学生に体験してもらう、④サインである花押を実際に書いてもらい、かつ自分オリジナルの花押を作ってもらう、などのことをした。2020年度以降のオンライン授業時も、動画を通じて対応できた。2021年度は対面が再開したため、再び対面で実施できた。			
城館跡での縄張図作成会の実施		2021年4月～		学生有志と仙台市周辺の城館跡の縄張図(平面プランを表した図)の作成会を随時実施している。自ら図を描くという作業を通して、城館の構造を身をもって理解すると同時に、遺跡そのものから歴史・地域を考える手法を学んでもらっている。2021年度は仙台市の松森城跡などで実施した。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		①さまざまな視点、幅広い視野から歴史を考えることができる能力の育成 ②きちんとした日本語で論理的な文章が書ける能力の育成 ③授業以外の時間における学生とのコミュニケーションを図る ④少人数授業におけるアクティブ・ラーニングを推進する ⑤フィールドワークの充実					
今年度の進捗状況		①前年度に引き続き「日本史概説Ⅱ」「歴史の中の東北」などの講義で、前後の時代との関係や日本列島・東アジアレベルとの関係などに適宜触れ、意識的に取り組んだ。 ②manabaやGoogleドライブを通じて授業課題の要約文・レポートにコメント・添削・返却するなどして対応した。 ③ゼミの運動会や合宿を実施できたので、昨年度より大幅に進捗した。 ④ゼミをさらに3つのグループに分け、課題を与えてきめ細かい指導ができた。 ⑤東松島市での調査など、昨年度より大幅に多く実施することができた。					
来年度の進捗目標		①引き続き今年度と同様に行いたい。 ②読書習慣を身につけさせるため、おすすめ本の読書リレーを実施する。 ③コロナ前のような活発な課外活動を行いたい。 ④グループの課題・目標をより明確にし、着実に成果を挙げられるよう工夫したい。 ⑤コロナ前のように、現地調査をより多く実施したい。					
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
『『新編北上市史』資料編古代・中世』	編纂	2022年11月	岩手県北上市	北上市史編さん委員会	pp.1-678		
『杉山城問題と戦国期東国城郭』	単著	2022年9月	戎光祥出版	竹井英文	pp.1-454		
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
仙台市内の戦国期城館―陸奥国名取北方富沢館の研究―	単著	2022年12月	東京堂出版、『城郭史研究』, 41	竹井英文	pp.41-58		
天正十年前後の下野国の政治情勢に関する一考察―那須資晴の家督相続を中心に―	単著	2022年11月	『千葉史学』, 81	竹井英文	pp.14-33		

Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)					
《史料紹介》 夷塚文書(長江月鑑齋由緒書)	単著	2022年12月	『東北学院大学東北文化研究所紀要』(54)	竹井英文	pp.7-25
城郭関係史料から小田原北条氏を考える	単著	2022年9月	戎光祥出版,『杉山城問題と戦国期東国城郭』	竹井英文	pp.387-418
縄張編年論・大名系城郭論に関する覚書:補遺	単著	2022年9月	戎光祥出版,『杉山城問題と戦国期東国城郭』	竹井英文	pp.71-92
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)					
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)					
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)					
G. 学会における研究発表					
お城のお堀―近世城郭の社会史―	単独	2022年8月	東海古城研究会城郭セミナー(愛知県名古屋)	竹井英文	
H. 翻訳(学術書や原典等)					
I. 特許					
現在の課題・目標	<ul style="list-style-type: none"> ①中近世移行期東国の政治史を研究する。 ②ゼミ活動と連動して、仙台市周辺の中近世移行期の地域史研究を行う。 ③東国の城郭関係史料を収集・調査し、個別研究を進めつつ、単著を出版する ④東北地方の中世城館関係史料を網羅的に収集し、データベースを構築して公表する。 ⑤委員として活動している各地の城跡・自治体史に関する研究を進める 				
今年度の進捗状況	<ul style="list-style-type: none"> ①下野国の政治史に関する論文を発表した。 ②今年度で4年間にわたる東松島地域に関する研究を終えた。 ③2冊目の学術書である『杉山城問題と戦国期東国城郭』を無事刊行できた。個別論文では、仙台市内の城館に関する論文を発表した。 ④「東北地方における中世城館関係史料集成―福島県編その1―」を刊行した。 ⑤『新編北上市史』資料編古代・中世が無事刊行した。各種委員会にも対面・オンライン双方で参加した。 				
来年度の進捗目標	<ul style="list-style-type: none"> ①引き続き、東国政治史の個別研究を進めていく。 ②東松島地域の研究成果を論文としてまとめ発表する。 ③編著3冊を刊行予定なので、その来年度中の刊行を目指す。 ④引き続き史料収集・調査を進め、福島県編その2を刊行したい。 ⑤『相馬市史』の通史編が刊行予定である。引き続き各種委員会に参加し、調査研究・各種指導を進めていきたい。 				
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)					
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要	
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動					
2018年6月～		茨城県中世城跡総合調査委員会 専門委員			
2018年3月～		杉山城跡跡整備検討委員会(埼玉県嵐山町教育委員会) 委員			
2017年4月～		相馬市史編さん中世部会 執筆委員			
2016年12月～		北上市史編さん委員会古代・中世部会 委員			
2013年10月～		岩櫃城跡保存整備委員会(群馬県東吾妻町教育委員会) 委員			
2013年8月～		笠間城跡調査指導委員会(笠間市教育委員会) 委員			
2012年11月～		静岡県伊豆の国市史跡等整備調査委員会(菰山城跡整備部会) 専門委員			
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動					
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等		
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					

VI 学内における管理運営に関する諸活動

1. AO面接委員
2. 文学部将来構想委員会委員
3. シラバス編集委員会委員
4. 時間割調整委員
5. 文学部点検評価委員会委員
6. 全学教育課程委員会委員
7. 学務部副部長

2022年度							
所属	文学部 歴史学科	職名	講師	氏名	多賀 良寛	大学院の授業 担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
漢文読解の実践的トレーニング		2022年～		漢文法基礎から白文の講読にいたる系統的な漢文読解トレーニングの講義を実施した。高校までに習得した漢文能力のバラツキを考慮しつつ、クラス内で取りこぼされる受講生が出ないように、講義の進度に最大限注意を払った。また中国正史の日本伝をはじめ、日本が題材とされた漢文をテキストとして取り上げることで、受講生が漢文により親近感をもてるよう工夫を行った。			
大学における新しい東南アジア通史講義の試み		2022年～		大学生にとって馴染みのない東南アジアの通史を、海域史やグローバルヒストリーの視点を取り入れることで、わかりやすく伝える講義を実践した。講義では図版をふんだんに盛り込んだスライドを用いたが、webclassを通じ教材を事前頒布することで、受講生が予習のうえ講義に臨めるよう工夫を行った。			
東南アジア史をテーマにしたアクティブラーニング形式の授業実施		2022年～		基礎演習Ⅱにおいて、東南アジア史をテーマにアクティブラーニングを取り入れた授業を実践した。日本語で書かれた最新の東南アジア通史をテキストとし、グループワーク形式でレジュメ作成およびディスカッションを行った。またグループ内および各グループ間での情報共有を円滑化するため、manabaなどwebclassの機能を最大限活用した。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
漢文読解に関する教材作成		2022年～		漢文読解能力の習得のため、1.基本的な漢文法および句法の学習→2.訓点のついたテキストの読解→3.白文の読解の3段階からなる教材を作成した。			
東南アジア通史に関する授業教材の作成		2022年～		古代から近代にいたる東南アジア通史の授業教材を、パワーポイント形式で作成した。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		学生との対話を図りながら、双方向型の授業を構築する					
今年度の進捗状況		授業中に学生からの積極的な発言がみられるなど、一定の進捗がみられた					
来年度の進捗目標		グループワークを積極的に導入し、教員—学生間だけでなく、学生同士でのコミュニケーションの機会を増やす					
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
タイソンの乱を経てベトナムの南北統一へ『アジア人物史 第8巻 アジアのかたちの完成』		分担執筆	2022年12月	集英社		多賀良寛, 今井昭夫, 川口洋史, 北川香子	pp.337-382
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							

The Opening of Treaty Ports and its Economic Consequence in the late 19th Century Vi t Nam	単独	2022年10月	International conference “FROM THE PORT TO THE WORLD: A Global History of Indochinese Ports”(オンライン)	Taga Yoshihiro	
State Integration and the Fiscal Administration in the First Half of Nineteenth Century Vietnam	単独	2022年10月	The 5th Asian Association of World Historians Congress(オンライン)	Taga Yoshihiro	
H. 翻訳(学術書や原典等)					
I. 特許					
現在の課題・目標	英語による研究成果発信を増やす				
今年度の進捗状況	国際学会で英語による口頭発表を複数回行うなど、十分な成果がみられた				
来年度の進捗目標	19世紀末ベトナムとヨーロッパ世界との接触を、ベトナム・フランス双方の資料をもとに分析する				
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)					
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要		
科学研究費補助金 研究活動スタート支援	2022年度～2022年度	個別(研究代表者)			
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動					
2017年4月～	日本ベトナム研究者会議 会員				
2016年4月～	社会経済史学会 会員				
2013年4月～	東南アジア学会 会員				
2013年4月～	史学会 会員				
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動					
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等		
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動					
AO委員 入学試験問題〔世界史〕作成委員 入学試験問題〔世界史〕校正委員					

2022年度							
所属	文学部 教育学科	職名	教授	氏名	稲垣 忠	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
教育現場へのインターンシップの実施・運営		2022年4月～		文学部教育学科2年次科目「学習支援実践(インターンシップ)」にて、仙台市内の小学校および宮城県内の小学校に学生を派遣し、子どもとの関わりや学習支援について学ぶ授業の運営を担当した。			
ループリックの活用		2020年～		「研究・発表の技法」において、ラーニングコモンズが作成したライティングループリックを学生に紹介し、レポート作成の際に参照するよう指示した。また、成績評価においてライティングループリックの一部を活用した。「教育工学実習」では学生自身がループリックを作成する学習活動を取り入れた。			
学習支援システム(eラーニング)の活用		2020年～		教材公開、レポートやコメントの収集等が行える学習支援(eラーニング)システムmanaba courseを利用し、情報提供の効率化と学習評価との統合、学生へのフィードバックの充実等を図った(担当全科目)			
デジタルポートフォリオの活用		2020年～		教職課程履修学生の学習履歴を把握できる「manaba-folio」を用いて学習履歴に基づく学習支援や授業中の課題提出、指導を行った(教職実践演習)			
参加型授業の実践		2020年～		ワークショップ、ポスターセッション等参加型の学習活動を取り入れ、学習者の主体的な参加と協働を促す指導を実施した(教育の方法と技術、教育方法、ICT教育論、情報教育論、教職実践演習、メディアリテラシー教育論)			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
明海大学FD研修会講師		2023年3月8日					
文学部FD研修会講師		2022年6月3日		学修者本位の教育のための_x000b_インストラクショナルデザイン_x000b_ _x000b_ TG-folioは何を支援するのか			
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		①「教育の方法と技術」「教育方法」が教職コアカリキュラム対応のためICTの活用に関する内容を盛り込むこととなったため、テキストの改訂とともに授業内容の再構築を行う ②「ICT教育論」について変更したテキスト内容をいかに授業内容の工夫 ③「学習支援実践」についてこの2年、コロナ禍により開講できなかったが、2022年度については開講方法を模索する					
今年度の進捗状況		①については新規のテキストを作成・出版するとともに、シラバスを改訂し、実践した。 ②については変更したテキスト内容をいかに、ジグソー学習やクラウドサービスの体験等を取り入れた授業を実施した。 ③については仙台市教育委員会、塩竈市教育委員会の協力を得て、インターンシップを実施することができた。					
来年度の進捗目標		①新規に2名の大学院生を迎えるため、修士論文の指導について特に計画的に取り組む ②eポートフォリオ「TG-folio」がはじまるため、ゼミ指導等で活用する ③五橋キャンパスの学習環境をいかにした取り組みを実践する					
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
『教育の方法と技術 Ver.2: IDとICTでつくる主体的・対話的で深い学び』	編者(編著者)	2022年12月	北大路書房	稲垣 忠, 深見 俊崇, 寺嶋 浩介, 市川 尚, 菅原 弘一, 成瀬 啓, 小林 祐紀, 森下 孟, 佐藤 靖泰	pp.1-249		

ポストオンラインの学習環境を考える『学習情報研究2022年5月号』	単著	2022年5月	学習情報研究センター	稲垣忠	pp.14-17
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)					
探究と個別最適な学びをつなぐ学習環境の構築と評価	共著	2023年3月	教育メディア研究, 29(2)	稲垣忠, 三浦隆志, 佐藤和紀, 久保田航, 関崎秀一	pp.43-55
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
教科横断型のスキルの育成状況を可視化するカリキュラムマネジメントシステムの開発	共著	2023年3月	教育システム情報学会2022年度第6回研究会研究報告集	小笠原歩夢, 松本章代, 後藤康志, 豊田充崇, 泰山裕, 稲垣忠	pp.印刷中
カリキュラムマネジメントシステムを活用した校内研修プログラムの開発	共著	2023年3月	日本教育メディア学会研究会論集, 54	稲垣忠, 松本章代, 豊田充崇, 後藤康志, 泰山裕	pp.印刷中
情報技術・情報社会に主体的に関わる児童の育成 ～サービス・イノベーション体験に基づくプレゼンテーションを通して～	共著	2023年3月	日本教育メディア学会研究会論集, 54	菅原弘一, 稲垣忠, 佐藤優衣, 石井里枝	pp.印刷中
教師の指導意図と情報活用カリキュラム	共著	2023年3月	日本教育メディア学会研究会論集, 54	後藤康志, 稲垣忠, 豊田充崇, 松本章代, 泰山裕	pp.印刷中
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)					
GIGAスクール構想を経て見えてきたいま、描きたい未来『教職研修2023年2月号』	共著	2023年2月	教育開発研究所	平井聡一郎, 稲垣忠 (担当:共著, 範囲:	pp.34-39
エンゲージメントとPBL『教育科学国語教育12月号』	単著	2022年12月	明治図書出版	稲垣忠	pp.12-15
教育データの利活用により、学習者・学校・行政はどう変わるのか『ViewNEXT2022・12月号』	単著	2022年12月	ベネッセコーポレーション	稲垣忠	pp.20-22
地域と学校の学びをICTでつなぐ『地域づくり2022年10月号』	単著	2022年10月	地域活性化センター	稲垣忠	pp.15-17
『探究する学びをステップアップ! 情報活用型プロジェクト学習ガイドブック2.0』	編者 (編著者)	2022年8月	明治図書出版	稲垣忠	pp.1-152
個別最適な学びにおけるデータ利活用と評価『学習情報研究2022年7月号』	共著	2022年7月	学習情報研究センター	益川弘如, 稲垣忠	pp.14-19
社会科教育で探究する学びを実現する! 情報活用型プロジェクト学習『教育科学社会科教育2022年6月号』	単著	2022年6月	明治図書出版	稲垣忠	pp.30-33
『GIGA完全対応 学校アップデート+(プラス)』	共著	2022年5月	さくら社	堀田龍也, 為田裕行, 稲垣忠, 佐藤靖泰, 安藤明伸	pp.50-56
各教科の授業で探究的な学びを『学校とICT2022年4月号』	単著	2022年4月	Sky株式会社	稲垣忠	pp.10-17
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)					
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)					
G. 学会における研究発表					
教科横断型のスキルの育成状況を可視化するカリキュラムマネジメントシステムの開発	共同	2023年3月	教育システム情報学会(JSiSE)2022年度第6回研究会(オンライン)	◎小笠原歩夢, 松本章代, 後藤康志, 豊田充崇, 泰山裕, 稲垣忠	
中学校におけるデータに基づいた情報活用能力のカリキュラムマネジメントの試み	共同	2022年11月	日本教育メディア学会 第29回 年次大会,(愛知)	稲垣忠, 齋藤暢	
情報技術・情報社会に主体的に関わる姿勢を育む授業の開発 ～企業等との連携を図った授業づくりを通して～	共同	2022年11月	日本教育メディア学会 第29回 年次大会(愛知)	菅原弘一, 稲垣忠, 佐藤優衣, 石井里枝	pp.4

情報活用能力の育成に資することを意図した中学校各教科版情報活用能力ベーシックの提案	共同	2022年11月	日本教育メディア学会 第29回 年次大会(愛知県)	小林 祐紀, 秋元 大輔, 稲垣 忠, 岩崎 有朋, 佐藤 幸江, 佐和 伸明, 前田 康裕, 山口 眞希, 渡辺 浩美, 中川 一史	pp.4
クラウド版学習者用デジタル教科書と通信帯域に関する一考察	共同	2022年10月	第48回全日本教育工学研究協議会 全国大会(愛知県)	坂本新太郎, 稲垣 忠	pp.4
情報活用能力の育成を目指したモジュール型情報学習の効果	共同	2022年10月	第48回全日本教育工学研究協議会 全国大会(愛知県)	荒谷達彦, 稲垣忠	pp.4
分散配置と貸出管理を支援する図書システムのデザインと評価	共同	2022年10月	第48回全日本教育工学研究協議会 全国大会(愛知)	榎原 央, 三宅 貴久子, 稲垣 忠	pp.4
情報活用能力の育成状況の可視化に関する調査	共同	2022年10月	第48回 全日本教育工学研究協議会全国大会(愛知県春日井市)	◎稲垣忠, 松本章代, 泰山裕, 後藤康志, 豊田充崇	

H. 翻訳(学術書や原典等)

I. 特許

現在の課題・目標	<ul style="list-style-type: none"> ①研究協力を得るモデル校を確保し、カリキュラムマネジメントシステムに関する実証を行う。 ②引き続き各地の教育委員会、学校と連携する。小学校～高校段階まで幅広く取り組む。 ③書籍の出版とともに、現在執筆中の論文を投稿する ④学習環境に関する研究動向をレビューし、デジタル・フィジカルの両面に渡るデザイン枠組みを構築する
今年度の進捗状況	<ul style="list-style-type: none"> ①については仙台市内の小中学校1校ずつをモデル校とし、カリキュラムマネジメントシステムの実証を行なった。 ②については、仙台市、宮城県、山形県、青森県、秋田県、福島県、北海道、茨城県、東京都、愛知県、静岡県、石川県、大阪府、兵庫県、奈良県、三重県、島根県、香川県、大分県等での教員研修をオンライン・対面で延べ1000名以上を対象に実施した。これらの研修に関する研究発表、雑誌記事等の執筆を行った。引き続き各地の教育委員会、学校と連携する。 ③については、3冊の書籍の出版、1本の論文(査読付)の採択の他、雑誌・研究会で報告した。 ④については、学会の重点活動領域と連携し、レビュー論文をまとめつつある
来年度の進捗目標	<ul style="list-style-type: none"> ①カリキュラムマネジメントシステムの改善、モデル校における研究を継続し、成果を論文として投稿する ②引き続き各地の教育委員会、学校と連携し、いくつかの成果を学会、雑誌等に投稿する ③学習環境に関する研究動向をレビューした論文を投稿する

III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
科学研究費補助金 基盤研究(C)	2020年度～2022年度		
科学研究費補助金 基盤研究(C)	2020年度～2022年度		
科学研究費補助金 基盤研究(C)	2019年度～2022年度	共同(研究代表者)	

IV 学会等及び社会における主な活動

2022年8月～	次期 SIP(戦略的イノベーション創造プログラム)課題候補「ポストコロナ時代の学び方・働き方を実現するプラットフォームの構築」有識者
2022年8月～	日本教育工学会 編集委員会特集号編集長
2022年7月～	山形県小国高校「新時代に対応した高等学校改革推進事業」運営指導委員
2022年4月～	仙台市教育委員会確かな学力育成プラン検討委員会 副委員長
2022年4月～	仙台市教育委員会仙台市GIGAスクール推進協議会 委員長
2021年10月～	日本教育方法学会 会員
2021年8月～	文部科学省初等中等教育段階のSINET活用実証研究事業 委員
2021年6月～	経済産業省産業構造審議会臨時委員聖武流通情報分科会教育イノベーション小委員会 委員
2021年5月～	文部科学省「児童生徒の情報活用能力の把握に関する調査研究」企画推進委員
2021年4月～	みやぎDUAL-COREハイスクールネットワークコンソーシアム 副委員長
2021年4月～	宮城県教育委員会個別最適な学びに関するモデル事業 アドバイザ

2021年4月～	教育メディア学会 研究委員会委員長
2020年7月～	一般財団法人ジャパンアートマイル 理事
2020年6月～	文部科学省委託事業「ICT活用教育アドバイザー」の活用事業 アドバイザー委員
2020年4月～	日本教育工学会 評議員
2020年4月～	日本教育工学会 重点領域学習環境部会長
2019年6月～	文部科学省「デジタル教科書の効果・影響等に関する実証研究事業」副委員長
2019年5月～	日本教育情報化振興会情報活用能力の授業力育成事業 委員
2018年9月～	経産省「未来の教室」実証事業教育コーチ 委員
2017年10月～	CRET(教育テスト研究センター)教育テストの評価・解説・活用研究 委員
2017年1月～	CRET(教育テスト研究センター)教育テストの評価・解説・活用研究委員 委員
2012年4月～	仙台市教育委員会「教育の情報化研究委員会」有識者委員
2012年4月～	NHK 学校放送番組「歴史にドキリ」番組委員 委員
2012年4月～	教育メディア学会 理事
2010年7月～	仙台市教育委員会 仙台版『たくましく生きる力』育成プログラム開発検討会議委員 委員

V 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

VI 学内における管理運営に関する諸活動

- ①ラーニングcommons副所長
- ②高大接続教育専門委員会委員
- ③知的財産委員会委員会委員
- ④FD推進委員
- ⑤学長特別補佐(教学改革担当)
- ⑥DX推進委員会 eポートフォリオ部会長

2022年度							
所属	文学部 教育学科	職名	教授	氏名	加藤 卓	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
初等教科教育法(算数)の授業内容の改善と向上		2019年10月～		初等教科教育法(算数)の授業において、新学習指導要領による幼児教育から高学年に至るまで算数の教育内容と指導方法について指導した。また、よくある学習のつまずきに対してどのように対処すればよいかを指導した。また、模擬授業を通じ、指導案の作成力と実践的な指導力を育成した。			
算数概説の授業内容の改善と向上		2019年4月～		算数の授業において、事前学修に進んで取り組ませ、幼児教育から高等教育に至るまで数学の系統を俯瞰できるように、広範な内容を指導した。			
読解・作文の技法の授業内容の改善と向上		2018年4月～		読解・作文の技法の授業において、記述力を向上させるワークシートを複数作成し、繰り返し学生に記述させることを通じて、記述スキルを向上させた。また、JIS規格に則った校正の技能を習得くさせることができた。			
研究・発表の技法の授業内容の改善と向上		2018年4月～		研究・発表の技法の授業において、特に、プレゼンテーションのスライドに必要な基本的項目を明確にして詳細に指導を行い、また、プレゼンテーションの技能も的確に向上させることを行った。			
教員独自の学習活動に関する詳細なデータを集め、的確な評価を行っている。		2018年4月～		出席確認、授業への準備物、事前学修、発言などについて、授業中にバーコードリーダーを活用してデータを収集・蓄積し、形成的評価と指導に生かし、学生の努力を的確に反映する学期末評価を行っている。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
「教員採用試験対策講座」(正規教育課程外)のイントラネットサイトの作成・運営		2019年5月～		「教員採用試験対策講座」(正規教育課程外)を欠席した受講生や後日さらに学習したい受講生が、自学・自習に取り組めるように、イントラネットサイトの作成・改訂に努め、学習環境の構築を図った。			
現在の課題・目標		<ul style="list-style-type: none"> ・教育学科1学年, チューター7名の学生の修学・生活指導 ・教育学科2学年, チューター6名の学生の修学・生活指導 ・教育学科3学年, チューター1名の学生の修学・生活指導 ・担当講義での学生の実態に応じた授業内容の改善と充実 					
今年度の進捗状況		<ul style="list-style-type: none"> ・教育学科1学年, チューター7名の学生の修学・生活指導を進めた。 ・教育学科2学年, チューター6名の学生の修学・生活指導を進めた。 ・教育学科3学年, チューター1名の学生の修学・生活指導を進めた。 ・オンタイム授業を中心に担当講義での学生の実態を把握するよう努力し、講義内容を充実させることができた。 					
来年度の進捗目標		<ul style="list-style-type: none"> ・教育学科1学年チューター・2学年チューター6名・3学年チューター6名・4学年チューター1名の学生の修学・生活指導を進める。 ・対面中心の授業形態で効果的な授業を行う。 ・教職実践演習, ICT教育実践, 授業づくり実践 I の講義をさらに充実させる。 ・採用試験対策講座を通して、学生の数学の問題解決力をさらに高める。 					
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
小学校の算数科における記述・論述力に関する具体的な教育内容・計画について		単著	2023年3月	数学教育学会 2023年度 春季年会予稿集		加藤 卓	pp.★-★

カテナリー曲線に関する数学的活動と教育内容	単著	2023年2月	東北学院大学教育学科論集(5)	加藤 卓	pp.35-42
「割合」はなぜ難しいか?	単著	2022年9月	数学教育学会 2022年度 秋季例会予稿集	加藤 卓	pp.31-33
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)					
授業でのICT機器の効果的な利用方法について	単著	2023年2月	宮城県私立中・高等学校国語科研究会 令和4年度 研究収録	加藤 卓	pp.3-16
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)					
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)					
数学とロゴス	単著	2023年2月	東北学院大学教育学科論集(5)	加藤 卓	pp.95-97
G. 学会における研究発表					
小学校の算数科における記述・論述力に関する具体的な教育内容・計画について	単独	2023年3月	2023 年度数学教育学会春季年会(中央大学 理工学部(東京都文京区春日1-13-27))	加藤 卓	
「割合」はなぜ難しいか?	共同	2022年9月	2022年度数学教育会 秋季例会(北海道大学)	白石和夫,森 園子,熊倉啓之,加藤 卓	
H. 翻訳(学術書や原典等)					
I. 特許					
現在の課題・目標	<ul style="list-style-type: none"> ・論述・記述力を育成する教育内容・教育計画の開発と国内外での学会発表 ・新型コロナの影響で実施できないため、教育内容・教育課程に関する理論研究 ・科学研究費助成事業の研究課題のまとめ 				
今年度の進捗状況	<ul style="list-style-type: none"> ・論述・記述力を育成する教育内容・教育計画の開発と国内での学会発表を行うことができた。 ・新型コロナの影響で実施できなかった学校での実践研究の調整まで進めた。 ・科学研究費助成事業の研究課題のまとめを進めている。 				
来年度の進捗目標	<ul style="list-style-type: none"> ・新型コロナの影響で実施できなかった学校での実践研究の実施 ・科学研究費助成事業への新たな研究課題の申請準備 				
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)					
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概 要	
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動					
2020年3月～	数学教育学会 学会誌編集委員				
2020年2月～	日本STEM教育学会 会員				
2019年10月～	数学教育学会 幼稚園・小学校部会担当				
2019年4月～	数学教育学会 代議員				
2004年～	数学教育学会 正会員 会員				
1998年7月～	遠隔数学実践教育研究会 企画立案・運営等				
V 芸術分野や体育実技等における主な活動					
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等		
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動					

2022年度							
所属	文学部 教育学科	職名	教授	氏名	紺野 祐	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
講義形式科目の毎授業終末における小レポートの活用		2020年4月1日～		アクティブ・ラーニング型授業のひとつの展開として、講義形式の授業すべてにおいて、授業終末に manaba の「レポート」機能を活用して小レポートを書かせている。その内容をA4判プリント1枚程度にまとめ、翌週の授業冒頭で扱い、復習と発展的学習に役立っている。またこれは、学生個人の評価(関心・意欲・態度)にも反映される。			
予習促進のための調べ学習「事典課題」の導入		2014年4月～		テキストを使用する講義においては、予習の確実な促進のために、テキストにおける語句の意味やその背景および関連する事項等について、辞書類やウェブを使用・利用した調べ学習「事典課題」を行わせている。その成果の写しを各セメスターで2回回収し、取り組み状況を確認したうえで、成績評価に組み込んでいる。			
「道德の時間」の授業のビデオ参観による授業づくりの理解の促進		2014年4月～		教職課程の授業「道德教育研究」では、「道德の時間」の授業づくりの要点を理解させるため、同授業のビデオを提示し、進行に合わせて解説を加えることで、学生による授業づくりの理解を促進している。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		<ul style="list-style-type: none"> ①一時間の授業において、前時終末時の小レポートに基づく復習内容と当日・当時の学習内容とをより有機的に連携させ、授業としての一体感を強める。 ②授業終末における小レポートについて評価上のルールを定め、受講生にはそれを意識させた小レポート作成を求める。 ③演習形式科目において、受講者の必要に応じてフィールドワーク的な要素を組み込み、学習の広がりと深まりをはかる。 					
今年度の進捗状況		<ul style="list-style-type: none"> ①受講生の小レポートに基づき毎時「コメントから」のプリントを作成し、その復習内容を当日・当時の学習内容に関連させる導入を意識的に行ったことから、上記の目標はおおむね達成されたと見られる。 ②受講生が小レポートを作成する際のガイダンスをオリエンテーション時にいねいに行ったところ、形式的に問題のない小レポートが増加した。このことから、上記の目標はおおむね達成されたと見られる。 ③教育学科専門教育科目「教育学演習Ⅰ」「Ⅱ」および「卒業研究Ⅰ」「Ⅱ」を担当したが、本年度は受講生の興味・関心がフィールドワーク的な学修に向かなかつたことから、上記の目標は達成されなかった。 					
来年度の進捗目標		<ul style="list-style-type: none"> ①講義形式科目においては、受講生が即時的な学習内容を視覚的に把握しやすくするため、Windows OneNote を用いた授業進行を基本とする。 ②講義形式科目においては、評価の観点別の点数配分を見直すことにより、受講生の学修成果のより公平な評価を試みる。 ③2023年度も教育学科専門教育科目「教育学演習Ⅰ」「Ⅱ」および「卒業研究Ⅰ」「Ⅱ」を担当するため、ゼミ生の興味・関心に応じて、フィールドワークに基づく卒業研究の作成を支援する。 					
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
「教育」の定義の分析と再構築に関する研究(4)		単著	2023年2月	東北学院大学教育学科論集(5)	紺野 祐	pp.11-33	
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							

H. 翻訳(学術書や原典等)			
I. 特許			
現在の課題・目標	①教育人間学の新たな展開について、これまでの研究を単著としてまとめる。 ②人間の道徳性に関する自然主義的な研究に着手する。		
今年度の進捗状況	①教育という営み・活動が原理的に有する利他性の実際的なあり方について、論文「『教育』の定義の分析と再構築に関する研究(4)」にまとめることができた。このことから、上記の目標の一部は達成できた。 ②「自然主義」の概念について、本研究課題においてその意味および射程を確定するための資料収集を開始した。		
来年度の進捗目標	①4本の論文からなる「『教育』の定義の分析と再構築に関する研究」は22年度内にひとつのまとまりを見たが、その研究過程で新たな課題も浮かび上がってきた。次年度は本研究の「補遺」として、i)「教育の目的」の確定と、ii)教育の対象にかかる現実的な考察とをまとめる。 ②「自然主義」の概念を確定するために、いっそうの資料収集を進める。		
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
IV 学会等及び社会における主な活動			
2012年9月～	東北教育哲学教育史学会理事・編集委員 会員		
2003年8月～	日本教師教育学会 会員 会員		
1990年4月～	東北教育哲学教育史学会 会員 会員		
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			
文学部長(2021年4月～)			

2022年度							
所属	文学部 教育学科	職名	教授	氏名	佐藤 正寿	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
実務家教員として小学校教員の経験を生かした取り組み		2020年～		「現代教職論」「学級経営論」「学級経営・生徒実践」「初等教科教育法(社会科)」において、小学校教員の経験をもとにした具体的な資料等を提示し、グループワークの助言に生かした。			
参加型の講義		2020年～		ワークショップ型の学習活動を1コマに間に複数回取り入れ、学習者が主体的・対話的に学ぶ環境づくりに努めた。			
講義のねらいと評価の明確化		2020年～		全ての講義において冒頭に講義のねらいを提示し、本時間のゴールを的確に示し、終盤ではねらいが達成できたかどうかの自己評価を学生に行った。			
書き込み式テキストの作成		2019年～		「読解・作文の技法」において、書き込み式テキストを毎回作成し準備をした。課題とそれに対する回答部分、ノート部分がミックスされたオリジナルテキストであり、A4版で4～6の内容となった。			
視聴覚機器を用いた教材の提示		2019年～		視覚的効果を目的として、教材やポイントとなる内容をプレゼンテーションソフトや動画を使って提示を行った。			
参加型の講義		2019年～		ワークショップ型の学習活動を1コマに間に複数回取り入れ、学習者が主体的・対話的に学ぶ環境づくりに努めた。			
講義のねらいと評価の明確化		2019年～		全ての講義において冒頭に講義のねらいを提示し、本時間のゴールを的確に示し、終盤ではねらいが達成できたかどうかの自己評価を学生に行った。			
学校現場のフィールドワークを生かした学び		2019年～		「現代教職論」「研究・発表の技法」において、小学校での一日学校体験や授業参観等のフィールドワークを行い、その経験を事後のレポートにまとめさせた。			
視聴覚機器を用いた教材の提示		2018年～		視覚的効果を目的として、教材やポイントとなる内容をプレゼンテーションソフトや動画を使って提示を行った。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
情報を収集し、ねらいを明確にした授業開きを『社会科教育 2022年4月号』	単著	2022年4月	明治図書	佐藤正寿	pp.4-9		
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
音を使った社会科教材の可能性『東北学院大学教育学科論集 第5号』	単著	2023年2月	東北学院大学	佐藤正寿	pp.90-91		
小学校社会科教科書における伝統や文化の内容と実践の可能性	単著	2023年2月	東北学院大学教育学科論集, 5	佐藤正寿	pp.77-82		

確かな学力を保障する！多様な学びを活かした授業デザイン 社会科の授業研究の蓄積をヒントに『社会科教育2023年1月号』	単著	2023年1月	明治図書	佐藤正寿	pp.4-9
社会科授業のユニバーサルデザイン研究のヒント	単著	2022年8月	授業UD研究, 13	佐藤正寿	pp.72-79
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)					
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)					
G. 学会における研究発表					
小学校社会科教科書の内容をもとにした和文化教育実践の可能性	単独	2022年11月	第19回和文化教育全国大会(京都市)	佐藤正寿	
H. 翻訳(学術書や原典等)					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)					
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概 要	
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動					
2022年12月～	仙台市立北六番丁小学校学校運営協議会 委員				
2022年12月～	仙台市立七北田小学校学校運営協議会 委員				
2022年12月～	仙台市立将監小学校学校運営協議会 委員				
2022年4月～	NHK学校放送委員(小学校5年社会科) 委員				
2022年～	富山県小矢部市立蟹谷小学校校内研究会指導講師 講師				
2022年～	岩手県岩泉町立岩泉小学校校内研究会指導講師 講師				
2022年～	奥州市立胆沢愛宕小学校校内研究会指導講師 講師				
2021年12月～	仙台市立泉松陵小学校・松陵中学校学校運営協議会 委員				
2021年～	北海道石狩教育研修センター 小学校社会科教育理論研修会 講師 講師				
2021年～	社会系教科教育学会 会員				
2021年～	日本カリキュラム学会 会員				
2021年～	台北日本人学校校内研修会指導講師(台北日本人学校校内研修会) 講師				
2020年～2022年	仙台市立北六番丁小学校 学校評議員				
2019年～	NPO法人全国初等教育研究会セミナー講師(NPO法人全国初等教育研究会セミナー) 講師				
2019年～	仙台市立北六番丁小学校校内研究会指導講師(仙台市立北六番丁小学校校内研究会) 講師				
2019年～	日本教育情報学会 会員				
2019年～	盛岡市立中野小学校校内研究会指導講師(盛岡市立中野小学校校内研究会) 講師				
2019年～	和文化教育学会 会員				
2019年～	NHK学校放送番組(Eテレ「社会にドキリ」,メディア学習) 委員				
2019年～2022年	仙台市立七北田小学校 学校評議員				
2018年～	日本学級経営学会				
2017年～	日本授業UD学会UDカレッジ 指導講師 企画立案・運営等				
2017年～	日本授業UD学会				

2016年～	日本教育工学会 会員		
2016年～	全国社会科教育学会 会員		
2016年～	日本社会科教育学会 会員		
2015年～	岩手県立総合教育センター特別支援講座講師(岩手県立総合教育センター特別支援講座) 講師		
2015年～	岩手県中学校授業力向上研修会(中学校社会・免許状更新講習) 講師(岩手県中学校授業力向上研修会(中学校社会・免許状更新講習)) 講師		
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	文学部 教育学科	職名	教授	氏名	長島 康雄	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要			
IV 学会等及び社会における主な活動							
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
VI 学内における管理運営に関する諸活動							

2022年度							
所属	文学部 教育学科	職名	教授	氏名	村野井 仁	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概 要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
観点別評価の実施		2021年4月1日～		担当科目の評価に関しては、評価の観点ごとに評価規準(到達目標)を明示し、総合的な評価を行っている。教職科目、英語科目については課題ごとにルーブリックを作成し、形成的評価に活用している。			
協同的学習の実施		2021年4月1日～		演習、英語科目および教職科目において、グループ活動を取り入れ、学生が主体的に協同学習を行う機会を作っている。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
高等学校用文部科学省検定教科書英語コミュニケーションCrossroads編集・執筆		2016年4月～		Genius English Communication I-III改訂版及びCrossroads English Communication I-III(大修館書店)の編集・執筆(編集代表)			
講義資料ハンドアウトの作成		2013年4月1日～		担当するすべての科目において配付資料を作成し活用している。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
2022(令和4)年度 東北学院大学小学校教員のための英語指導力向上研修講座講師(中学英語免許取得認定講習)		2022年12月3日～2022年12月10日		小学校教員のための英語指導力向上研修講座(中学英語免許取得認定講習)の講師を2日間務めた。			
宮城県佐沼高等学校英語科研修会講師		2022年7月13日		宮城県佐沼高等学校英語科研修会で授業助言者と研修会講師を務めた。			
仙台育英学園高等学校令和4年度第1回Brush Up研修会講師		2022年5月25日		仙台育英学園高等学校の英語科研修会において講師を務めた。			
文部科学省検定済教科書の編集		2020年4月1日～		小学校外国語検定教科書New Horizon Elementary English Course 1-2及び中学校外国語検定教科書New Horizon English Course 1-3(東京書籍)の編集協力者、高等学校外国語(コミュニケーション英語I-III)検定教科書Genius English Communication改訂版I-IIIの編集代表を務めている。			
現在の課題・目標		<ul style="list-style-type: none"> ・講義・演習では一方的な知識注入型の講義ではなく、理解し、考え、そして伝える力を伸ばすよう協同学習的な活動を取り組んで指導方法を工夫している。 ・到達目標を明確に示し、妥当性の高い評価を行うようにしている。 ・学生の学ぶ意欲高めるため、教材・授業形態を工夫している。 					
今年度の進捗状況		<ul style="list-style-type: none"> ・学生の授業評価結果から判断して、講義・演習での工夫は一定の成果を上げていることがわかった。 ・全ての科目においてある程度妥当性の高い評価を行うことができた。 ・学生の授業評価結果から判断して、学生の学ぶ意欲高めるための工夫は一定程度成果を上げていることがわかった。 					
来年度の進捗目標		<ul style="list-style-type: none"> ・講義・演習において、理解し、考え、そして伝える力をさらに伸ばすよう指導方法を改善する。特に学生の自律性を高める支援をしていく。演習、卒業研究の質を高める。 ・到達目標を授業内容に合わせて再度見直し、さらに妥当性、信頼性、実用性の高い評価を行うようにする。 ・学生の学ぶ意欲をさらに高めるため、協同学習、プロジェクト型学習を取り入れて教材・授業形態を工夫する。 					
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセイ(専門分野)							
教室第二言語習得研究と英語指導法—文法運用力を育てる指導過程の提案—		単著	2023年3月	くろしお出版, 第二言語習得研究の科学3 人間の能力		村野井仁	pp.123-141

E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)				
高等学校外国語科用文部科学省検定済教科書Crossroads English Communication I『高等学校外国語科用文部科学省検定済教科書Crossroads English Communication I』	編者 (編著者)	2022年4月	大修館書店	村野井仁, Marcel Van Amesvoort, 大田悦子, Lara Promnitz-Hayashi, 松尾美幸, 矢野賢, 前田昌寛, 西室雅央 pp.1-160
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)				
G. 学会における研究発表				
H. 翻訳(学術書や原典等)				
I. 特許				
現在の課題・目標	1 第二言語習得に関する単行本出版企画を進める。 2 CLIL及び文法習得についての研究を進める。			
今年度の進捗状況	1 第二言語習得に関する単行本出版企画を準備中である。 2 CLIL及び文法習得についての研究成果の発表準備をしている。			
来年度の進捗目標	1 第二言語習得に関する単行本を執筆する。 2 CLIL及び文法習得についての研究成果をまとめ、論文発表する。			
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)				
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要	
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動				
2019年～	大学英語教育学会(JACET) 東北支部副支部長			
2018年3月～	小学校英語教科書New Horizon Elementary(東京書籍) 編集協力者			
2016年～	高等学校検定教科書英語コミュニケーションI-III Crossroads(大修館書店) 編集委員会 編集代表			
2003年～	アジア英語教育学会 会員			
2002年～	日本第二言語習得学会 会員			
2001年～	文部科学省検定教科書中学英語New Horizon English Course(東京書籍) 編集協力者			
1987年～	大学英語教育学会(JACET) 会員			
V 芸術分野や体育実技等における主な活動				
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等	
現在の課題・目標				
今年度の進捗状況				
来年度の進捗目標				
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動				
副学長(総務担当) 教学組織改編推進室長 ワンダーフォーゲル部部长				

2022年度							
所属	文学部 教育学科	職名	教授	氏名	ロング クリストファー	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
講義の工夫		2005年～		講義形式の授業において、学生の理解及び興味関心を高めるため、映像・動画などを取り入れたパワーポイントを作成するように工夫した。			
学生の研究及び研究発表の指導		2005年～		個人又はグループによる独自の研究プロジェクト及び英語による研究結果発表の指導により、専門的な知識のみならず、学生の英語によるコミュニケーション能力の向上に努めた。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要			
IV 学会等及び社会における主な活動							
2005年～		国際行動学会 会員 会員					
1998年～		社会言語科学会 会員 会員					
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							

来年度の進捗目標	
VI 学内における管理運営に関する諸活動	

2022年度							
所属	文学部 教育学科	職名	教授	氏名	渡辺 通子	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
国語科教育におけるアクティブラーニング型授業の工夫		2022年4月～		教員養成における国語科教育の在り方について、受講者が実践の場で活用できるようにするために、言語活動を組み入れる指導方法で実施している。国語教育は母語を中心とする教科であり、言語が子供の認知能力や思考能力の育成に結びついていることを重視するためである。			
アクティブ・ラーニング型の授業作り		2022年4月～		これまで進めてきたワークショップ型授業やグループごとの課題探究学習を継続して組み入れた授業づくりを心掛けた。また、15回のうち最低1回は、授業の事前学習や事後学修に資するようmanabaのプロジェクト機能を活用する会を設定した。2022年度より前面对面授業に戻ったが、一部受講生にはZoomによる受講があった。教室と遠隔地とで、同時進行で授業を進めることにはよりスムーズに進める工夫を要する。			
学修意欲の喚起と主体的学修のための工夫		2022年4月～		大学提出のシラバスとは別に、日程表や進め方、レジュメ様式を提示した授業用のシラバスを作成し提示することで、受講生の主体的学修を促している。			
manabaコースを活用した授業づくり		2022年4月～		manabaコースの活用は年度ごとに増えている。本年度は個別指導機能を活用することで、受講生とのコミュニケーションが増えた。但し、詳細な確認事項等はオフィスアワーで再確認している。前々年度からの継続課題は、①正確・公正な出席の確認と、②評価対象としての提出物増加に伴う授業評価の公正性・妥当性・客観性をどのようにするか、まだどのようにして効率化を図るかである。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
言語活動中心 国語概説【改訂版】—小学校教師を目指す人のために— 学文社		2022年～		第13章 コミュニケーションの力【改訂】担当			
新たな時代の学びを創る 中学校高等学校国語科教育研究		2020年～		IV3-1-1「思考力、判断力、表現力を育てる授業作り 話すこと・聞くこと」執筆(2019. 全国大学国語教育学会編 東洋館出版社)			
国語科重要用語辞典		2019年～		第4部「【歴史】57 話すこと・聞くことの指導」執筆(2015. 高木まさき・寺井正憲・中村敏雄・山本隆春編、明治図書出版)			
小学校教育課程実践講座国語		2019年～		「7章2節 汎用的な言語能力の育成」執筆担当(2017. 樺山敏郎編 ぎょうせい)			
言語活動中心 国語概説—小学校教師を目指す人のために—		2018年9月15日～		初等教育に必要とされる日本語に関する基礎知識である科目「国語」について、小学校教員養成のためのテキストとして開発した。「13章 コミュニケーションの力」執筆担当(2018. 岩崎淳・木下ひさし・中村敏雄・山室和也編、学分社)			
『教職エッセンシャル』(学文社)		2013年8月～		2013年度より新規開講の「教職実践演習」(4年次後期対象)に対応した教科書である。Part4-2執筆担当。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
2022年度教育学科連続公開講義第4回「言葉による見方考え方を働かせる国語科教育—荻谷夏子さんと問い直す「ことば」の教育—」		2022年11月19日		公開講座の全体テーマについて、国語教育に関わる「言葉による見方考え方」をテーマに荻谷夏子氏と対談形式で実施した			
仙台市教育センター研修講座「小中高の接続を踏まえた国語科の授業の在り方」		2022年11月18日		仙台市教育センターにおいて、仙台市及び宮城県内の小中高及び大学生を対象に、通信ツールの変化に伴う学びの変化を確認し、ICT時代の課題について検討した。			
宮城県総合教育センター講座 令和4年度国語科研修会(小中高領域 話すこと・聞くこと)「小中高を通して育成する話すこと・聞くことの資質能力—コミュニケーション・ツールの進化から考える「話すこと・聞くこと」の授業づくり—」		2022年11月9日		宮城県総合教育センターの講座において、県内の小中高の教員を対象に、今求められる小中高を貫く話すこと・聞くことの資質能力とは何かについて研修を実施した。			
高大連携事業「俳句の可能性—俳句、ハイク、Haiku—」		2022年11月4日		榴ヶ岡高等学校2年生を対象に、俳句創作を実施し鑑賞することで、グローバル社会における俳句を通したコミュニケーションについて話した。			

4. その他教育活動上特記すべき事項					
教員採用試験対策講座「国語」を担当した		2019年4月～			
鹿嶋市小中一貫教育検討委員会アドバイザーを務めた		2015年11月24日～		小中一貫教育を推進していく上でのグランドデザイン構想についての助言をした。	
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
II 研究活動					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)					
近代学校成立以降の言語教育カリキュラムにおける話し言葉教育の変遷—1872年から1951年まで—	単著	2023年2月	東北学院大学教育学科論集, 5	渡辺通子	pp.51-76
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)					
言葉による見方考え方を働かせる国語科教育—荻谷夏子さんと問い直す「ことば」の教育—	単著	2023年2月	東北学院大学教育論集論集, 第5	渡辺 通子	pp.98-100
言葉遣いの学習指導に関する研究の成果と展望	単著	2022年9月	溪水社, 国語科教育学研究の成果と展望 III	渡辺 通子	pp.356-363
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)					
『若菜集』の頃—藤村と仙台・東北学院大学『花美術館』	分担執筆	2022年9月	花美術館, 79	渡辺 通子	pp.9-15
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)					
G. 学会における研究発表					
柳田国男の話し言葉教育論の独自性	共同	2022年5月	第142回 全国大学国語教育学会ラウンドテーブル(東京)	有働玲子, 平林久美子, 小川雅子	
H. 翻訳(学術書や原典等)					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)					
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要		
IV 学会等及び社会における主な活動					
2018年～		小中一貫教育推進委員会小中一貫教育推進委員会アドバイザー 助言・指導			
2015年11月～		鹿嶋市小中一貫教育検討委員会アドバイザー 委員			
2014年7月～		第17～24回白鳥省吾賞審査員(第17～24 回白鳥省吾賞審査員) 寄稿			
2014年～		第16 回～ 白鳥省吾賞審査員 委員			
2013年4月～		読書学会 会員			
2009年9月～		日本教育学会 会員			
2002年4月～		日本教科教育学会 会員			

2001年4月～	国語教育史学会
2001年4月～	コミュニケーション学会 会員
1998年4月～	早稲田大学国語教育学会 会員
1996年4月～	全国大学国語教育学会 会員
1995年4月～	日本国語教育学会 会員

V 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

VI 学内における管理運営に関する諸活動

--

2022年度							
所属	文学部 教育学科	職名	准教授	氏名	大友 麻子	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		学生とのコミュニケーションを大切にし、円滑な教育活動が行えるように努める。					
今年度の進捗状況		チューターやゼミ担当教員としてそれぞれの学生と個人面談を行うなど概ね順調に進捗していると思われる。また、今年度は国際交流部副部長として派遣交換留学生と関わり、本学での受け入れ状況の現状と課題を知ることができた。					
来年度の進捗目標		卒業論文、教育実習、留学については、学生が長期的な見通しを持って取り組むことができるよう、より緊密なコミュニケーションを図る。また、より良い国際交流の在り方を検討し、可能なものから実行したい。					
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		日本語と英語の対照研究を進め、成果をまとめる。					
今年度の進捗状況		今年度は認知言語学の枠組みにより、日本語と英語の言語構造、および文化面を含めた比較対照を行った。					
来年度の進捗目標		本年度までに収集した日英の絵本のデータ等を用いて、引き続き日英対照研究を行う。					
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要		
IV 学会等及び社会における主な活動							
2022年10月				出張講義講師 講師			
2022年9月～2022年10月				小学校教員のための中学英語免許取得認定講習講師 講師			
2022年8月				中学校・高等学校英語科研修会 助言・指導			
2020年7月～				大学英語教育学会東北支部 紀要編集委員			
2018年11月～				東京書籍 中学校英語教科書NEW HORIZON編集協力者 委員			
2018年4月～				大学英語教育学会 会員			
2018年～				Australian Linguistic Society 会員			
2015年4月～				小学校英語教育学会 会員			

2015年4月～		日本児童英語教育学会 会員	
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			
1. 国際交流部副部長 2. 教職課程センター運営委員 3. キャンパス禁煙化推進委員 4. 大学要覧(シラバス)編集委員 5. 時間割調整委員			

2022年度							
所属	文学部 教育学科	職名	准教授	氏名	清水 遥	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
連携協力協定に基づく「イングリッシュ・キャンプin美里」		2022年～					
連携協力協定に基づく「みやこ・イングリッシュキャンプ」		2022年～					
教員採用試験対策講座		2020年～2022年					
東北学院大学免許法認定講習		2018年6月1日～		中学校英語免許取得認定講習において講師を務めている。			
宮城県小学校外国語活動・外国語研修会		2018年～		講師を務めた。模擬授業を参観し、合評会にて講評を述べた。			
宮城県中学校・高等学校英語科研修会		2018年～		講師を務めた。模擬授業を参観し、合評会にて講評を述べた。			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要			
科学研究費補助金 日本学術振興会 萌芽研究		2022年度～	共同(研究分担者)				
科学研究費補助金 日本学術振興会 基盤研究(B)		2022年度～	共同(研究分担者)				
科学研究費補助金 日本学術振興会 基盤研究(C)		2022年度～	共同(研究代表者)				

科学研究費補助金 日本学術振興会: 科学研究費補助金(基盤C)	2020年度～2022年度	共同(研究分担者)	
科学研究費補助金 日本学術振興会: 科学研究費補助金(基盤C)	2019年度～2022年度	共同(研究分担者)	
IV 学会等及び社会における主な活動			
2022年4月～		外国語教育メディア学会 会員	
2021年4月～		東北英語教育学会 東北英語教育学会研究紀要宮城支部査読員	
2021年4月～2023年3月		大学英語教育学会 学術出版物選考委員	
2018年6月～		日本児童英語教育学会 会員	
2018年4月～		小学校英語教育学会 会員	
2015年4月～		東北英語教育学会 会員	
2007年4月～		日本語テスト学会 会員	
2007年4月～		大学英語教育学会 会員	
2006年4月～		全国英語教育学会 会員 会員	
2006年4月～		関東甲信越英語教育学会 会員	
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	文学部 教育学科	職名	准教授	氏名	清多 英羽	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
双方向の授業実践		2020年4月1日～		パワーポイントの動画を作成した。学生のレポートを講義ごとにフィードバックした。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		教職課程を履修する学生のために、最新の学問的知見を教授し、教師としての基礎づくりを支援すること。					
今年度の進捗状況		教育学科及び全学の教職課程の学生にうち、多くの学生が教員採用試験に合格した。					
来年度の進捗目標		より一層、豊かで質の高い教員養成が可能になるように、教授内容を見直し、より学生から支持される講義を目指すこと。					
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
学校ビオトープを活用した教育の「意義」の検討		単著	2023年2月	東北学院大学教育学科論集(5)	清多英羽	pp.43-50	
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		学校ビオトープと道德教育に関する研究を進めること。特に、学校ビオトープを道德教育の教材とみなし、どのような可能性があるのかを明らかにすること。					
今年度の進捗状況		学校ビオトープに関する基礎資料を収集し、道德教育との繋がりについてある程度の道筋をつけることができた。					
来年度の進捗目標		学校ビオトープにおける教育実践を研究対象とし、幅広い取り組みを考察することによって、道德教育の教材としての可能性を追求すること。					
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要			
科学研究費補助金 若手研究		2022年度～	個別(研究代表者)				
IV 学会等及び社会における主な活動							
2023年1月～2023年1月				子ども環境管理士資格試験・面接員			
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等			
現在の課題・目標							

今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	
VI 学内における管理運営に関する諸活動	
入試部副部長として入試の運営全般において中心的な役割を果たした。	

2022年度							
所属	文学部 教育学科	職名	准教授	氏名	高橋 千枝	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
発達支援の専門性を育てる様々な形のスーパーバイジョン		共同	2022年8月	日本臨床発達心理士会第18回全国大会(遠隔)	臨床発達心理士認定運営機構SV資格認定委員会		
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要			
IV 学会等及び社会における主な活動							
2021年6月～			日本臨床発達心理士運営機構スーパーバイザー資格委員会 委員				
2018年4月～			仙台市保育スーパーバイザー事業 委員				
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
VI 学内における管理運営に関する諸活動							



2022年度							
所属	文学部 教育学科	職名	助教	氏名	松本 進乃助	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
仙台市立上杉山通小学校吹奏楽部指導支援		2021年5月22日～		仙台市立上杉山通小学校吹奏楽部の楽器指導の支援			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要				
IV 学会等及び社会における主な活動							
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等				
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
VI 学内における管理運営に関する諸活動							

教員業務・活動報告

經 濟 学 部

經 濟 学 科

共生社会経済学科

2022年度							
所属	経済学部 経済学科	職名	教授	氏名	アレイ ウィルソン	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要			
IV 学会等及び社会における主な活動							
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
VI 学内における管理運営に関する諸活動							

2022年度							
所属	経済学部 経済学科	職名	教授	氏名	伊鹿倉 正司	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概 要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
毎回の講義の進め方における工夫		2010年4月1日～		講義ではパワーポイントを使用することで、学生がノートを取りやすい配慮を行っている。また、90分間の講義中に5分間の休憩時間を設けることで、学生が集中して受講できるような工夫を行っている。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
地域金融と銀行業の再編		単著	2023年2月	有斐閣, 入門金融論	伊鹿倉正司	pp.233-250	
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
キャッシュレス決済で得るもの, 失うもの		単著	2022年10月	世界経済評論IMPACT(2720)	伊鹿倉正司	pp.1-2	
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要			
IV 学会等及び社会における主な活動							
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							

VI 学内における管理運営に関する諸活動

2022年度							
所属	経済学部 経済学科	職名	教授	氏名	泉 正樹	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
卒業論文集の作成		2022年		4年生向けの演習において、卒業論文集を作成した。各自でテーマを選択し、中間報告会での検討を経て修正を施したのちに卒業論文集として執筆者に配布した。			
授業理解の促進		2020年～		毎回の授業の冒頭で、前回の復習とその回の概略を説明し、授業終了時にはその回のまとめと次回の予告を行った。			
学習事項の定着		2020年～		講義系の科目では、各単元の終了時にeラーニング・システム「manaba」を利用した「振り返り」を実施し、学習事項の定着を図った。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
授業スライドの作成		2020年～		講義科目「資本主義経済入門I・II」で使用するテキストに準拠するパワーポイントスライドを作成した。			
授業スライドの作成		2020年～		TGベーシック科目「地球社会を生きる」において、授業中に使用するスライドを作成した。これは、超長期の観点から「グローバリゼーション」についての解説を行っているManfred B. Steger [2009] Globalization, Oxford University Pressなどを参考にしたものである。また、社会的再生産と市場についての基礎的な導入を行って、経済のグローバル化が意味することの理解を促すスライドを作成した。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
高校での模擬講義		2022年9月3日		尚志高等学校において「労働について考える」と題した模擬講義を行った。			
現在の課題・目標		①講義「資本主義経済入門I・II」の理解度を測定できる方策を考える。 ②演習系科目における効果的なレジュメ作成・発表の指導。 ③「地球社会を生きる」の教材の改善					
今年度の進捗状況		①については、manabaを活用して、授業内で複数回の小テストを実施して成績評価を行なった。 ②LMSを活用して、受講者間での共同作業が行えるようにした。 ③については、現在、私自身が研究を進めている「グローバリゼーション」を捉えうる方法を紹介するスライドを作成した。					
来年度の進捗目標		①については、成績評価の方法についてさらに検討を行う。 ②については、LMSを活用したレジュメの共同作成をさらに展開する。 ③については、最新の動向も取り入れて教材を更新する。					
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
デジタルテキスト作成の一手法についての覚書: 計算貨幣論の計量テキスト分析に向けて	単著	2023年2月	東北学院大学経済学部デイスカッションペーパーシリーズ	泉 正樹	pp.1-30		
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							

コメント:海大汎『貨幣の原理・信用の原理:マルクス=宇野経済学のアプローチ』(社会評論社、2021年)	単独	2022年8月	マルクス経済学の現代的課題研究会(SGCIME)夏季研究会(オンライン開催(@Zoom))	泉 正樹	
H. 翻訳(学術書や原典等)					
I. 特許					
現在の課題・目標	①近年の「自動化」を念頭において、労働の原理的考察を行う ②資本主義が歴史的に発展する構造を定式化する ③計量テキスト分析に着手する				
今年度の進捗状況	①については、関連文献を読み進めることができた。 ②については、関連文献を読み進めることができた。 ③については、テキスト洗浄を行ってテキスト計量に着手し、ディスカッションペーパーを作成した。				
来年度の進捗目標	①近年の「自動化」を念頭において、労働の原理的考察を行う ②資本主義が歴史的に発展する構造を定式化する ③計量テキスト分析を行う。				
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)					
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要		
科学研究費補助金 基盤研究(C)	2022年度~2024年度	共同(研究分担者)			
IV 学会等及び社会における主な活動					
V 芸術分野や体育実技等における主な活動					
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等		
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
VI 学内における管理運営に関する諸活動					

2022年度							
所属	経済学部 経済学科	職名	教授	氏名	大塚 芳宏	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
データサイエンスにおけるBYODの実践		2021年4月1日～		カオス時系列解析の講義では、近年、データサイエンス分野で普及されているPythonを実践形式で行った。履修者にはPCやタブレットを持ってきてもらい、その場で統計分析を行ってもらうものである。受講生が所有するPCのスペックに隔たりがないようにGoogle社が提供するColaboratoryを使用し、高度な統計分析を体感してもらう環境を整備した。			
計量経済学 I・II(データ解析・計量経済学)は講義資料、資料で用いたデータをeラーニングシステムmanabaで公開し、復習及び受講生が自宅学習できるよう環境を整備した。		2020年～					
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
新たな景気動向指数の特徴と提案		単著	2022年10月	東京財団政策研究所 Review		大塚芳宏	pp.1
G. 学会における研究発表							
地域別景況感におけるコロナ禍の影響と波及効果の推定		単独	2022年9月	統計関連学会連合大会(成蹊大学)		大塚芳宏	
An empirical study about recession and the COVID-19 pandemic in Japan		単独	2022年7月	The 6th Eastern Asia Chapter of the International Society for Bayesian Analysis(Feng Chia University)		Yoshihiro Ohtsuka	
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
IV 学会等及び社会における主な活動			
2021年10月～2024年3月			エビデンスに基づく政策立案(EBPM)に資する経済データの活用 学術調査立案・実施
2018年4月～2024年3月			東京財団政策研究所「リアルタイムデータ等研究会」メンバー (2018年4月～2019年3月)(東京財団政策研究所「リアルタイムデータ等研究会」メンバー (2018年4月～2019年3月))
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	経済学部 経済学科	職名	嘱託教授	氏名	小沼 宗一	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
授業内容の記憶への定着と授業理解の促進		2022年4月1日～2023年3月31日		「経済思想史入門」・「経済思想史」を遠隔授業(オンデマンド授業)で実施した。音声付きスライドの動画ファイルをグーグルドライブにアップし、大学共有のURLをmanabaのコンテンツへ公開した。大学のアカウントを使いストリーミング再生することができるように工夫した。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要			
IV 学会等及び社会における主な活動							
2021年4月～2023年4月			仙台地方裁判所委員会 委員				
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
VI 学内における管理運営に関する諸活動							

2022年度							
所属	経済学部 経済学科	職名	教授	氏名	倉田 洋	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
教員独自の「学生による授業評価」の実施		2022年		学校で実施する「学生による授業評価」に加え、教員自身で考案したアンケートを実施し、よりよい授業となるよう検討している。			
プレゼンテーション、レポート・論文の書き方についての指導		2022年		1年生対象の総合演習、2年生対象の演習Ⅰ、3年生対象の演習Ⅱ、4年生対象の演習Ⅲにおいて、プレゼンテーションを効果的に行う方法、レジュメの作り方、レポート・論文の書き方についての説明と実践を行っている。 演習Ⅰ・Ⅱでは外部のプレゼンテーション全国大会、演習Ⅲでは他大学との合同ゼミに参加し、学生は発表の経験と客観的な評価を受ける経験をえられる。			
学習した事項の定着と授業理解の促進		2022年		前期は講義動画を配信して授業を行うオンデマンド形式の授業、後期は対面とオンタイムを組み合わせたハイブリッド形式の授業を行った。オンデマンド形式の授業では、受講生がポイントを絞れるよう「学習ガイド」を提示する、学生が集中してどうが見られるよう、動画をポイントごとに分割する、動画視聴後に小テストを行う、質問・コメントに対して1週間ごとにまとめて回答するなどの工夫を行った。ハイブリッド形式の授業では、対面授業をレコーディングし、後で内容を確認できるような工夫をした。いずれの形式でも、学生に空白のある資料を配布し、授業内で空白部分を記入する方法をとっている。この方法により、学生が集中して説明を聞くことができるようにしている。このような工夫から、学習した事項の定着、授業理解の促進に努めた。			
学習した事項の定着と授業理解の促進		2020年～		講義動画を配信して授業を行うオンデマンド形式の授業を行った。授業では、受講生がポイントを絞れるよう「学習ガイド」を提示する、集中して見られるように動画をポイントごとに分割する、動画視聴後に小テストを行う、質問・コメントに対して1週間ごとにまとめて回答する、といった工夫を行い、学習した事項の定着、授業理解の促進に努めた。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
「ミクロ経済学Ⅰ・Ⅱ」講義動画		2020年～		経済学科3・4年生向け「ミクロ経済学Ⅰ」、「ミクロ経済学Ⅱ」の講義動画。Youtubeを用いて配信を行っている。			
「ミクロ経済学Ⅰ・Ⅱ」講義資料		2020年～		経済学科3・4年生向け「ミクロ経済学Ⅰ」、「ミクロ経済学Ⅱ」のパワーポイント教材。受講生には穴埋め形式の教材を配信し、受講中に完成してもらう形をとっている。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Domestic product standards, harmonization, and free trade agreements	共著	2022年8月	Springer Nature, Review of World Economics, 158(3)	A.Yanase H.Kurata	pp.855-885		
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							

E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)				
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)				
G. 学会における研究発表				
Agreements on Product Standards in a three-country model of international oligopoly	共同	2022年6月	2022年度日本応用経済学会春季大会(熊本大学)	A.Yanase Y.Lin H.Kurata
H. 翻訳(学術書や原典等)				
I. 特許				
現在の課題・目標				
今年度の進捗状況				
来年度の進捗目標				
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)				
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要	
科学研究費補助金 科研費基盤(C)	2021年度～2023年度	個別(研究代表者)		
IV 学会等及び社会における主な活動				
2022年4月～		宮城県名取北高等学校 学校評議員会 学校評議員		
V 芸術分野や体育実技等における主な活動				
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等	
現在の課題・目標				
今年度の進捗状況				
来年度の進捗目標				
VI 学内における管理運営に関する諸活動				

2022年度							
所属	経済学部 経済学科	職名	教授	氏名	篠崎 剛	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
オンデマンド講義		2020年～		オンデマンド講義において、Zoomで録画をし、学生のフィードバックに出来る限り対応した。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
パワーポイント教材の作成		2014年4月～		国際経済学にて学ぶ内容を授業前に学生が予習できるようパワーポイント資料をHPにアップロードしている。			
国際経済学の講義ノート		2010年4月～		国際経済学の講義ノートのパワーポイント教材。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
演習での懸賞論文への参加およびインターゼミナールへの参加		2020年～					
学内外のインターゼミナールへの参加		2017年～		学内での同学部、他学部のゼミまたは他大学とおこなわれるインターゼミナール(全国インターゼミナール大会)へ参加し、学生の成長に資する経験をさせるようにしている			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
Emission Standards Versus Emission Taxes with Foreign Firms	共著	2022年6月	New Frontiers of Policy Evaluation in Regional Science	Minoru Kunizaki	pp.115-126		
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
水道事業における広域的統合と料金水準	共同	2022年6月	生活経済学会(オンライン)	足立泰美, 篠崎剛			
公教育をめぐる政府間の共有責任と戦略的相互依存: 階層並列的なPolitical Agency Modelによる実証分析	共同	2022年6月	日本地方財政学会(京都府立大学)	田中宏樹, 篠崎剛			
水道料金体系における戦略的相互依存関係	共同	2022年6月	日本地方財政学会(京都府立大学)	足立泰美, 篠崎剛, 齊藤仁			
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							

来年度の進捗目標			
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
科学研究費補助金 科学研究費(基盤C)「政治体制と長期の経済成長プロセスの整合性に関する研究」	2018年度～	共同(研究代表者)	本研究では、政治体制の違いが経済成長に与える影響について、経済成長経路上での政治体制(独裁主義から民主主義へ)の変容の在り方とその望ましさを明らかにするものである。そのため、初めの二年間において、経済成長モデルに基づく政治制度の変容の分析および政治家の振舞いに関与し、行動経済学的視点を導入した分析を行ったうえで、最終年度にこれらを統合し、より現実的な政策提案を行うことを目指す。
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動			
2023年1月～		大槌町上下水道等審議会 審議委員	
2022年12月		日本地域学会 理事	
2021年9月～		仙台市スポーツ推進審議会 委員	
2019年8月～		Association of Cultural Economics International 会員	
2007年～		日本地域学会 会員	
2007年～		生活経済学会 会員	
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	経済学部 経済学科	職名	教授	氏名	白鳥 圭志	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		前近代日本経済史講義内容のアップデート 地球社会を生きるの講義内容をアップデートした。					
今年度の進捗状況		古代史の最新研究を踏まえて、前近代日本経済史の講義内容をアップデートした。 最近のトピックスを踏まえて、地球社会を生きるの講義内容をアップデートした。					
来年度の進捗目標		特になし					
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		①加藤博一橋大学名誉教授が主催する両大戦間期におけるエジプト・日本の経済交流史研究に参加させていただき、アレクサンドリア金融市場と横浜正金銀行出張所との関連についての研究を進めている。②さらに、1980年代における国鉄改革に関する研究を進めている。					
今年度の進捗状況		①については、史料収集を進めている。②については、学会誌への投稿を目指して、原稿取りまとめの作業を行っている。					
来年度の進捗目標		上記①については、文科省に提出する研究成果報告書分担部分の執筆を行う。②については、学会誌への投稿を行い、掲載を目指す。					
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要			
IV 学会等及び社会における主な活動							
2022年6月～2022年6月			朝日新聞「be」から取材を受けて、記事作成に協力した 取材協力				
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							

VI 学内における管理運営に関する諸活動

研修休暇明けの関係上、入試業務関係を除き、これといった業務はなかった。

2022年度								
所属	経済学部 経済学科	職名	教授	氏名	千葉 昭彦	大学院の授業担当の有無	無	
I 教育活動								
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要				
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)								
演習3年生のエクスカージョン実施		2016年～		いくつかのグループに分けて仙台市内の街なか(旧奥州街道・東北大学片平キャンパス・国分町通り・広瀬通り・一番町通り・壱弐参横丁など)を歩き、現地で町の成り立ちや変遷を解説				
講義において、前回の内容の理解確認と評価方法の工夫		2010年4月～		地域経済論と経済立地論の講義で確認の小テストなどを行い、その次の講義で解答確認を行い、前回講義内容の理解の確認を行っている。また、その採点結果を年間評価に反映させる。2020年度からは前期・後期ともに遠隔授業だったので、小テストを5回、レポート課題5回実施した				
4年生演習卒業論文		2010年4月～		4年生では調査を踏まえた卒業論文の作成を義務付けている。なお、終了後は論集として編集・発行。				
3・2年生の演習において1年間で10冊以上の書籍のレポートを提出させ、添削のうえ返却		2010年4月～		主に文献要約を行わせ、添削返却するが、それが一定水準に達するまで再提出を繰り返し、文献の理解が確実になるように指導する。なお、学生の多くがある程度充分な内容把握が出来るようになった段階で、自らの意見を論理的に記述するようなレポートへと課題内容を移行。				
2・3・4年生演習合宿		2010年4月～		年間2回の合宿(春季および夏季に3泊4日)を2年生～4年生が合同で行い、3年生は夏にインゼミレポートの中間報告、3年生春は各自の卒論テーマの検討、4年生夏は卒論中間報告、4年生春は卒論報告を行う。また、合宿地周辺地域でのフィールドワーク・エクスカージョン(2010年夏山形県山形市・2010年冬宮城県石巻市・2011年夏岩手県八幡平市および盛岡市・2011年冬福島県会津若松市および喜多方市・2012年夏岩手県花巻市)を実施。なお、合宿の日程・場所等については基本的には学生が企画・運営。ただし、2020年度と2021年度はコロナの影響で合宿を行うことが不可能だったので、夏季休業中と春季休業中にそれぞれ2日間学内で上記のことを行った。				
1年生総合演習 I でのディベートトレーニング		2010年4月～		特に1年生後期に次年度以降の演習に備えて、ディベートを実施。「フリーターの是非」や「レジ袋有料化の賛否」「原発再稼働賛否」などの身近なテーマや社会問題を取り上げ、主張の論理性にウエートを置いて話をすることを指導。なお、それぞれの意見に対して論理的な反論も試みる。				
1年生総合演習 I でDVD/VTRの活用		2010年4月～		経済学科に入学した新入生が必ずしも経済問題に強い関心を持っているわけではない。そこで、関心喚起を目的として時節を考慮したDVD/VTRを利用。				
2. 作成した教科書、教材、参考書								
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等								
4. その他教育活動上特記すべき事項								
東北自治研修所での講義		2014年8月～		東北の自治体中堅職員を対象とした中堅職員研修(各90分授業を10回)を行い、様々なアクティブラーニングの方法を通じて、各自治体の問題の所在や解決の方向性を検討。				
現在の課題・目標								
今年度の進捗状況								
来年度の進捗目標								
II 研究活動								
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)		発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書								
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)								

Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)					
南三陸『読みたくなる「地図」地方都市編①』	共著	2022年6月	海青社	千葉昭彦	pp.30-31
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)					
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)					
G. 学会における研究発表					
「自然災害論」と地域経済	単独	2022年12月	日本地域経済学会金沢大会(日本)	千葉昭彦	
H. 翻訳(学術書や原典等)					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)					
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概 要	
IV 学会等及び社会における主な活動					
2022年12月		仙台市立仙台高等学校学校運営委員 委員長			
2021年11月～		日本地域経済学会 常任理事(連携・交流委員長)			
2021年8月～		角田高校サマーカレッジ 農村の経済問題は農業で理解できるのか 講師			
2021年7月～		東北学院榴ヶ岡高校 高大一貫教育説明会 講師			
2021年6月～		東北地理学会 評議員			
2021年3月～		東北学院高校プレカレッジ 地域経済入門 世界遺産登録と地域経済 講師			
2020年4月～		日本地理学会 代議員			
2015年11月～		日本地域経済学会 理事			
2012年5月～		学都仙台コンソーシアム企画部 部長			
2012年5月～		経済地理学会 編集委員			
V 芸術分野や体育実技等における主な活動					
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)		発表・展示等の内容等	
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
VI 学内における管理運営に関する諸活動					

2022年度							
所属	経済学部 経済学科	職名	教授	氏名	舟島 義人	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
受講生の理解度に応じた授業の実施		2020年4月～		e-ラーニング(respon)を活用して分からない点を確認し、受講者の理解が不足している点を重点的に講義している。			
授業時間外の学習の促進		2020年4月～		授業の補足資料を学習支援システム(manaba course)を使って配布し、授業時間外の学習を促している。			
学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進		2020年4月～		講義形式の授業においても、学生が自ら考える演習の時間をとっている。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
経済数学講義ノート		2022年9月～2022年12月		経済学部2年生向けのスライド			
マクロ経済学講義ノート		2022年4月		経済学部3・4年生向けのスライド			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
出張講義		2022年10月		宮城県利府高等学校において、「GDPと経済厚生」と題した講義を行った。			
現在の課題・目標		前年度に引き続き課題は次の点である。 ①学生が数学を使って経済分析を行えるようになる。 ②大人数講義における学生の主体的な学びを促進する。					
今年度の進捗状況		上記の目標①については、経済数学や演習の授業において、経済学で基本となる数学を解説した。目標②については、e-ラーニング(respon)を活用することで、受講生各自が問題意識を持って受講できるように努めている。					
来年度の進捗目標		上記の目標①については、受講生の理解度に応じて説明を工夫する。目標②については、引き続きe-ラーニング(respon)のより効果的な活用方法を模索する。					
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Efficiency and group size in the voluntary provision of public goods with threshold preference	単著	2022年9月	Research in Economics, 76(3)	Yoshito Funashima	pp.237-251		
Economic policy uncertainty and unconventional monetary policy	単著	2022年6月	Manchester School, 90(3)	Yoshito Funashima	pp.278-292		
Effects of unanticipated monetary policy shocks on monetary policy uncertainty	単著	2022年5月	Finance Research Letters, 46(Part A)	Yoshito Funashima	pp.102326		
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							

現在の課題・目標	①論文“How Does Economic Policy Uncertainty Respond to Permanent and Transitory Shocks?”を学術雑誌に掲載する。 ②論文“Where to Go: The Japanese Government’s Travel Subsidy during COVID-19”を学術雑誌に掲載する。 ③論文“Media-created economic uncertainty”を学術雑誌に掲載する。
今年度の進捗状況	上記の目標①～③について、いずれも査読付き学術雑誌に投稿中である。
来年度の進捗目標	上記の目標①～③については、必要な改訂作業を行いつつ、査読付き学術雑誌に掲載されることを目指す。新たな研究テーマに着手する。

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
科学研究費補助金 基盤研究(C)	2021年度～	個別(研究代表者)	新聞報道やツイッターなどのメディアのデータベースに基づき、経済政策の不確実性や経済的な感情を定量化する試みが精力的になされている。作成された指標を用いた実証分析では、経済政策の不確実性が高まることや経済活動に関する消極的な感情は、マクロ経済に負の影響を及ぼすことが指摘されている。本研究では、オールドメディアと近年急速に普及したソーシャルメディアの違いに着目し、マクロ安定化政策が経済政策の不確実性や経済的な感情に及ぼす影響を明らかにする。
科学研究費補助金 基盤研究(C)	2018年度～	共同(研究分担者)	1990年代から2000年代にかけて発生した貿易不均衡(Global Imbalance)の原因を探る。アメリカ国内の要因で経常収支が悪化する場合と対外要因で悪化する場合を識別し、どちらの要因がアメリカの経常赤字に貢献するかを明らかにする。

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

--

2022年度							
所属	経済学部 経済学科	職名	嘱託教授	氏名	前田 修也	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要			
IV 学会等及び社会における主な活動							
1980年～2022年			経済統計学会会員 会員				
1977年～			日本統計学会会員 会員				
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
VI 学内における管理運営に関する諸活動							

2022年度							
所属	経済学部 経済学科	職名	教授	氏名	若生 徹	大学院の授業 担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
演習における小テストの実施および計算問題の解法指導		2020年4月～		学生によるテキスト講読,議論,研究報告のほか,何れも独自の小テストを実施して,学生の思考能力を充実させる。また,計算問題の演習と解法指導を通じて数学的分析力を高める。			
授業評価対象外科目に関するアンケート		2020年4月～		授業の改善のために,授業評価対象外科目「総合演習」に関して,アンケートを実施した。			
講義の理解を深めるための工夫		2020年4月～		基礎知識の繰り返し学習により,現実問題の解決に応用できる学力を向上させるために,下級学年あるいは担当授業での既習事項であっても,反復を恐れずに教授し,応用のきく必須基礎学力を身につけさせる。			
演習履修者のための就職・進路指導		2020年4月～		就職活動を間近に控えている学生の求めに応じて,進路指導を実施した。			
演習履修者のための進学指導		2020年4月～		進学の準備をしている学生のために,進学指導を実施した。			
演習における小テストの実施および計算問題の解法指導		2020年4月～		学生によるテキスト講読,議論,研究報告のほか,何れも独自の小テストを実施して,学生の思考能力を充実させる。また,計算問題の演習と解法指導を通じて数学的分析力を高める。			
2. 作成した教科書,教材,参考書							
都市経済学,都市空間経済学ならびに基礎経済学のための講義用スライド		2020年4月～		パワーポイントを用いて講義用スライドを作成し,学生の講義内容の理解を容易にする。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表,講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所,発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
IV 学会等及び社会における主な活動			
1989年4月～		応用地域学会 会員	
1988年4月～		日本交通学会 会員	
1988年4月～		日本地域学会 会員	
1984年4月～		日本経済学会 会員	
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	経済学部 経済学科	職名	准教授	氏名	板 明果	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概 要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
所得格差を測る『「格差社会論(第3版)」』	分担執筆	2023年3月	同文館出版	熊沢由美, 佐藤康仁, 板明果, 阿部裕二, 王元, 郭基煥, 佐藤純, 谷達彦	pp.14-21		
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
スマート社会における食生活の実証分析	共同	2022年12月	エコデザイン・プロダクツ& サービスシンポジウム2022(日本(大阪大学))	◎鷺津明由, 板明果, 居又義			
Results of a fact-finding survey on the sustainable diets and smart food services: a case of Japan	共同	2022年10月	EcoBalance 2022(日本)	◎Yiyi Ju, Ayu Washizu, Sayaka Ita			
最適な地域潮流がもたらす効果の産業連関分析: 地域間次世代エネルギーシステム分析用産業連関表の応用	共同	2022年9月	環境科学会2022年会(日本(オンライン))	◎鷺津明由, 板明果			
日本における1990年から2020年までの家計消費による炭素排出インベントリーの時間的変動	共同	2022年7月	第9回 気候変動・省エネルギー行動会議 BECC JAPAN 2022(日本(オンライン))	◎板明果, 鷺津明由			
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要				

その他の補助金・助成金 公益財団法人鹿島学術振興財団 研究助成	2021年度～	共同(研究分担者)	
科学研究費補助金 基盤研究(B)	2021年度～	共同(研究分担者)	
IV 学会等及び社会における主な活動			
2021年4月～	宮城県行政評価委員会 委員		
2018年4月～	宮城県行政評価委員会大規模事業評価部会 委員		
2016年10月～	宮城県情報公開審査会 委員		
2016年1月～	宮城県再生可能エネルギー等・省エネルギー促進審議会 委員		
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	経済学部 経済学科	職名	准教授	氏名	稲見 裕介	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		教育に携わるに当たって、 1. 学生の能動的な取り組みを促すこと 2. 丁寧に講義を行うこと 3. 幅広い内容を取り上げることが目標にしている。					
今年度の進捗状況		今年度の進捗状況は以下の通りである： 1については、講義時間中に学生自ら問題を解く時間を設けることができたため、進捗がみられた。 2と3については、昨年度と比較して、改善がみられた。					
来年度の進捗目標		来年度を迎えるにあたり、 1について、さらに学生が主体的に取りめるよう講義内容を変更する予定である。					
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		研究活動に関しては、主に、以下の三つのことに取り組んでいる： 1. Patent buyouts under incomplete informationの研究を進めること 2. Properties of the equilibrium revenues in buy price auctionsの改定作業を進めること 3. Buy price auctions with resale opportunitiesの研究を進めること					
今年度の進捗状況		今年度の進捗状況は以下の通りである。 1については、論文の執筆作業を行っている。 2については、論文を国際学術雑誌に再投稿する予定である。 3については、論文の改定作業を行っている。					
来年度の進捗目標		来年度は、 1と3について、引き続き、国際学術雑誌に投稿できるよう論文を改定することを行う予定である。					
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要		
IV 学会等及び社会における主な活動							
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	経済学部 経済学科	職名	准教授	氏名	小林 陽介	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
manabaを活用した双方向型授業		2020年5月～		課題提出フォームに質問・感想欄を設け、manabaを通じて返答する。多かった質問・意見については次回授業時に紹介し、全体で共有・フィードバックを行う。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
パワーポイント資料(オンデマンド型授業用)		2020年5月～		オンデマンド型授業用のパワーポイント資料。アニメーション機能を活用して学生が1つ1つじっくりと読み進められるように工夫している。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		学生が現実の経済社会の動きに興味を持てるような授業となるよう心掛けている。					
今年度の進捗状況		今年度は授業資料に時事的な内容を含めるよう意識した。					
来年度の進捗目標		今年度の取り組みを継続するとともに、さらなる内容の充実に努めたい。					
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
新型コロナウイルス感染症の流行と金融資産累積の関係について		単著	2022年9月	日本証券経済研究所, 証券レビュー, 62(9)		小林陽介	pp.1-10
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		グローバル金融危機(リーマンショック)後の米国金融の変化に焦点を合わせて研究を行っている。					
今年度の進捗状況		今年度は金融資産残高の増大と政府・中央銀行の政策との関係について論文をまとめた。					
来年度の進捗目標		来年度は米国におけるシャドバンクの変質について検討を進めたい。					
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要		
IV 学会等及び社会における主な活動							
2022年10月～			経済理論学会 第71回大会準備委員				
2022年4月～			経済理論学会 幹事				
2021年～			証券経済学会 理事				
2020年4月～			公益財団法人日本証券経済研究所 客員研究員				
2019年～			証券経済学会 プログラム委員				

2012年～	証券経済学会 会員		
2010年～	経済理論学会 会員		
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			
東北産業経済研究所シンポジウム「地方金融機関の地域課題への新たな取組み」において総合司会を担当した。			

2022年度							
所属	経済学部 経済学科	職名	准教授	氏名	谷 祐可子	大学院の授業 担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概 要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
授業理解確認の小テスト		2018年4月～		ほぼ毎回の授業(講義)の終わりに、内容確認の小テストを実施した。			
学習事項の記憶への定着と授業理解の促進		2010年4月～		授業の冒頭で前回復習および今回概略説明を行ない、授業終了時に今回まとめを行なった。			
演習レポート・論文の添削・返却・指導		2010年4月～		各演習の課題レポート等を添削・返却・指導した。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
講義・演習で使用する補助教材の作成		2010年4月～		講義および演習で使用する補助資料・配付資料を作成した。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・ 共著 の別	発行又は発表の年月 (西暦)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Local knowledge in a forestry development project of 1980s Burma.		単著	2022年	International Review of Environmental History, 8(2)	Tani, Y.	pp.171-197	
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要			
IV 学会等及び社会における主な活動							
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							

来年度の進捗目標	
VI 学内における管理運営に関する諸活動	

2022年度							
所属	経済学部 経済学科	職名	准教授	氏名	田野 穂	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
講義内容の理解促進のための課題の提示		2022年4月		3年次以降コース科目「日本経済論」と「日本産業論」では、300字以上のミニッツペーパーを毎回課した。優れた内容のミニッツペーパーについては、講義の冒頭で紹介およびコメントし、受講者の意欲向上と双方向的な関係構築を図った。また、コメントにおいては、受講生自らが講義内容をふまえて現代的な課題を見出す、型に無理にはめた内容にならないように心掛けた。			
講義内容の理解促進のためのレジュメを毎回配布。		2022年4月～		3年次以降コース科目「日本経済論」と「日本産業論」では、講義内容の要点を示したレジュメを毎回配布した。配布資料において、受講生が口頭説明等を書き加えすように、余白を出来るだけ広くなるように工夫した。			
講義内容の理解促進のためのレジュメを毎回配布。		2022年4月～		2年次配当科目「日本経済入門」では、講義内容のポイントを示した穴埋め形式のレジュメを毎回配布した。とくに、初学者を念頭に置いて基本用語等を丁寧に説明するように工夫をした。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
レポートの作成に関する教材を作製。		2022年4月～		総合演習においてレポートを作成するうえで必要なスキル(レジュメの作成, 読書, 政府統計データベースの活用, レポートの作成)について説明した教材を適宜作成した。			
レポートの作成に関する教材を作製。		2019年4月～		総合演習においてレポートを作成するうえで必要なスキル(レジュメの作成, 読書, 政府統計データベースの活用, レポートの作成)について説明した教材を適宜作成した。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							

V 芸術分野・体育大会等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	経済学部 経済学科	職名	准教授	氏名	松前 龍宜	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
みずほ学術振興財団「第63回懸賞論文」学生の部でゼミの学生論文が入選		2021年7月1日～2022年5月1日		みずほ学術振興財団「第63回懸賞論文」学生の部でゼミの学生論文が2等入選。ゼミの学生である佐藤優伎さん(4年)、菅悠介さん(3年)、菅原泉有希さん(3年)の3人で分析に取り組み、佐藤さんが代表して論文を執筆。この論文では、非伝統的金融政策の役割と弊害について定量的に検証。構造ベクトル誤差修正モデルによる分析の結果、2013年以降の量的緩和が、景気や物価を喚起させる役割を果たしていた一方で、代表的な暗号資産であるビットコインの価格を高騰させていた可能性を検出し、非伝統的金融政策が、景気・物価の安定化という役割と同時に、バブルの醸成という副作用をもたらしたことを実証した。			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要		
IV 学会等及び社会における主な活動							
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場所	開催年月日(西暦)		発表・展示等の内容等		
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							

来年度の進捗目標	
VI 学内における管理運営に関する諸活動	

2022年度							
所属	経済学部 経済学科	職名	准教授	氏名	宮本 拓郎	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要			
科学研究費補助金 基盤研究(C)		2022年度～2024年度		公共調達市場シェアが大きく、中でも自治体が占める割合は高いが、自治体のグリーン購入・調達はあまり進んでいない。また、データの活用可能性の問題もあり、研究もあまり行われていない。本研究は、日本の全自治体の9割以上回答としている環境省のアンケート調査データを用いて、国際機関などにグリーン購入実施の強力な推進力として認識されているグリーン購入・調達に関する方針(策定)がどの程度グリーン購入・調達を促進するのかを明らかにする。また、方針策定などの取り組みと環境負荷削減効果・調達費用削減効果との関係性をデータ分析によって明らかにする。			
IV 学会等及び社会における主な活動							
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等			

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	
VI 学内における管理運営に関する諸活動	

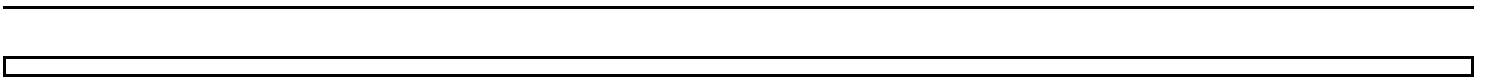
2022年度							
所属	経済学部 経済学科	職名	講師	氏名	塩見 由梨	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
responを活用した双方向でのフィードバックの導入		2020年4月1日～		responを活用して教員→学生、学生→教員の双方向でのフィードバック機会を設定した。具体的には、教員→学生の取り組みとして、クlicker機能を利用して学生がコメントや投票のかたちで意見を出す機会を多く用意し、それに対して次回の講義で教員からのリプライを行なっている。また、学生→教員の取り組みとして、アンケート機能を利用して教員独自の授業内容に関するアンケートを実施し、学生からの講義内容への希望や感想のフィードバックを得ている。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		学生の関心に合わせた講義内容の改善、授業内試験の実施方法の工夫および実施後のフィードバックの充実					
今年度の進捗状況		昨年度の授業時に実施したアンケート結果を踏まえ、講義内容を一部修正した。今年度も同様にアンケートを実施するため、さらに次年度の改良に役立てたい。授業内試験は、前期はリモート、後期は対面で実施した。リモートの試験では昨年度の反省を踏まえ、事前にくり返しアナウンスすることで混乱なく実施できた。また後期からは講義は対面に移行したが、試験については遠隔授業時と同様に試験後に解説の動画を作成して提供した。					
来年度の進捗目標		試験の解説については、授業が対面になってもあった方がよいという意見を得たため、次年度以降も引き続き提供することにした。授業内容をさらに改善するとともに、対面に移行することを想定して、双方向のやりとりができる機会をとりいれる工夫を考える。					
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		ジェイムズ・ステュアートに関するこれまでの研究成果をまとめ、出版に向けた準備を進める。経済原論について、恐慌・景気循環に関する研究発表をおこないフィードバックをもとにさらに考察を深める。					
今年度の進捗状況		ステュアート研究の原稿の加筆・修正を終え、資金獲得のため東京大学学術成果刊行助成に応募し、現在審査中である。恐慌・景気循環論については、8月に「経済原論と現代資本主義」研究会、10月に経済理論学会第70回全国大会にて論題「支払不能と債務の清算」として研究発表を行った。そこでのコメントを受けて、現在は原稿を修正中である。					
来年度の進捗目標		刊行助成金の獲得のため引き続き情報収集するとともに、出版社と原稿の校正作業を進める。また、ステュアート貨幣論に関する作成中の論文、および現在修正中の恐慌・景気循環論の論文を書き進め、とくに後者を学会誌へ投稿したい。					
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
IV 学会等及び社会における主な活動			
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			
AO面接委員、情報処理センター委員、総合ネットワーク管理委員会、学科ガイド作成委員、学科会議書記			

2022年度							
所属	経済学部 経済学科	職名	講師	氏名	白井 大地	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概 要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
教員独自の「学生による授業評価」を実施		2021年4月1日～		学部で実施する「学生による授業評価」に加えて、授業の効果を測定するために教員自身が考案したアンケートを実施している。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要				
IV 学会等及び社会における主な活動							
2012年～		Econometric Society 会員					
2012年～		American Economic Association 会員					
2012年～		The Munich Personal RePEc Archive (MPRA), Editor 委員					
2006年～		日本経済学会 会員					
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等				
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							

来年度の進捗目標	
VI 学内における管理運営に関する諸活動	

2022年度							
所属	経済学部 経済学科	職名	講師	氏名	望月 理生	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		<ul style="list-style-type: none"> 特に演習を受講する学生一人一人に対する、きめ細やかな対応 学生がより講義内容に興味関心をもてるようなトピックスやコンテンツの充実 					
今年度の進捗状況		<ul style="list-style-type: none"> 演習の受講生に対し、フィールドワークの進捗等の細やかな確認と助言を実施した 興味関心を高めるため、歴史上の話題に触れる際、当時の写真や新聞記事等を引用し、身近なものとして触れる機会を提供した 					
来年度の進捗目標		<ul style="list-style-type: none"> 今年度の取り組みを継続するとともに、学生にとってより充実した教育を目指したい 					
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		第二次世界大戦後日本における東北開発に焦点を当て、研究を実施している					
今年度の進捗状況		団体史や企業史などの収集および史料の収集を行った					
来年度の進捗目標		来年度は東北開発促進計画の形成・成立について、研究会発表および学会発表を目指し、史料の整理検討を進める予定である					
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要		
IV 学会等及び社会における主な活動							
2022年9月～2022年11月			2022年度前期(4-9月期) 景況調査 調査担当, 報告書執筆				
2022年3月～2022年5月			2021年度後期(10-3月期) 景況調査 調査担当, 報告書執筆				
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場所	開催年月日(西暦)		発表・展示等の内容等		
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
VI 学内における管理運営に関する諸活動							



2022年度							
所属	経済学部 共生社会経済学科	職名	教授	氏名	石川 真作	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
レスポンの活用		2020年～		授業理解と取り組みの測定のため、レスポンを活用。			
manabaシステムを活用した双方向的な授業展開		2017年4月1日～		manabaシステムを利用して、講義中にコメントを受け付けるなど双方向的な授業展開を行っている。			
授業理解のための映像資料の活用		2015年4月1日～		時事に即した授業内容理解のため、ニュースやドキュメンタリーなどの映像資料を使用。			
演習におけるフィールドワークの実施を通じたアクティブ・ラーニングの実践		2015年4月～		多文化共生をテーマとする演習において、実情理解のために外国人支援活動現場で参与観察を実施。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
ドイツ現地調査(2018、2019年度)に見るマイノリティの社会統合の現状と課題ードイツ:ライプツィヒ		共著	2022年12月	国際文化研究科論集(30)		石川真作 大河原知樹	pp.55-64
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
既存移民による難民支援活動		単独	2023年3月	公開講演会「欧州難民危機からコロナ禍・ウクライナ紛争までードイツ・ハレの難民・移民について振り返るー」(オンライン)		石川真作	
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)		個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要	

科学研究費補助金 基盤研究(C)(一般)	2021年度～2024年度	個別(研究代表者)	本研究は、ドイツ在住トルコ系移民各世代の、トルコとドイツ双方での動向を現地調査することにより、第1世代が築き上げたトランスナショナルなネットワークやリソースをどのように活用し、さらに次世代にどのように継承しようとしているのかを捉える。それによって、国際環境の変化、生活状況の変化、世代の進行によって、移民の行動様式はどのように変化するかを明らかにし、グローバル化の進行に伴うヒトの流動の最新状況を捉えることを目的とする。
科学研究費補助金 基盤研究(B)	2021年度～2024年度	(研究分担者)	旧東独地域の移民・難民の社会統合を目指した諸施策の現状と課題、課題克服の模索を冷戦終結後の同地域の社会背景を踏まえて検証する。旧東独地域は、旧西独地域と難民・移民との関わり方に違いがみられ、反移民・難民政党や極右運動への支持も高い。しかし、旧東独の自治体では、統一後の人口減も踏まえ、移民・難民の社会統合を独自に模索している。日本同様に少子高齢化社会のドイツは、2012年に人口増に転じた。その要因の一つが移民・難民の存在で、彼らに対する政策が、自治体の人口動態にも影響している。コロナ禍は、難民・移民の状況に大きく影響しているが、その中のドイツの状況の解明は日本への示唆となろう。

IV 学会等及び社会における主な活動

2020年2月～	宮城県多文化共生社会推進審議会 委員
2018年4月～	塩釜国際交流協会 会員
2008年10月～	移民政策学会会員 会員
2002年6月～	日本移民学会会員 会員
2001年4月～	日本中東学会会員 会員
1993年4月～	日本文化人類学会会員 会員
1993年1月～	日本イスラム学会会員 会員

V 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

VI 学内における管理運営に関する諸活動

--

2022年度							
所属	経済学部 共生社会経済学科	職名	教授	氏名	郭 基煥	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概 要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
身の回りの問題と社会学の理論的な思考をリンクさせる		2022年4月～2023年2月		新聞記事をめぐって意見を交わす中で、理論的な見方を伝える			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		学生が現在の国際問題をナショナリズムの理論を基に分析できるようにする					
今年度の進捗状況		具体的事例の説明がいささか多すぎたかもしれない					
来年度の進捗目標		新聞記事などを利用して学生の関心を持続的に刺激する					
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		日本における災害時の外国人に関するデマ(流言)に関する著書の執筆					
今年度の進捗状況		多少、送れたが2023年6月か7月には出版予定					
来年度の進捗目標		災害時の外国人に関するデマの発生に関し、要因や対策を考察する					
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要			
IV 学会等及び社会における主な活動							
2022年9月		百回忌に誓う、デマの悲劇繰り返さない 関東大震災時の朝鮮人虐殺(朝日新聞)取材協力, 助言・指導, 情報提供					
2022年8月		「遺体から指輪盗まれた」被災地で広がったデマと人々の心理(朝日新聞)取材協力, 助言・指導, 情報提供					
2021年3月～2024年3月		日本解放社会学 編集委員長					
2009年～		日本社会学会 会員					
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							

来年度の進捗目標	
VI 学内における管理運営に関する諸活動	

2022年度							
所属	経済学部 共生社会経済学科	職名	教授	氏名	熊沢 由美	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
ボランティアの紹介		2021年12月～		NPO法人アスイクの学習支援ボランティアを演習生に紹介した。			
アルバイトの紹介		2018年～		仙台銀行でのアルバイト学生に紹介し、金融について理解を深める機会を設けた。			
他大学との合同ゼミ		2003年～		他大学との合同ゼミを2回おこなった。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要			
IV 学会等及び社会における主な活動							
2020年6月～		宮城県後期高齢者医療審査会委員 委員					
2020年4月～		宮城県地域年金事業運営調整会議委員 委員					
2020年4月～		仙台市経営戦略会議委員 委員					
2020年4月～		社会政策学会幹事 会員					
2020年～		第2次多賀城市男女共同参画推進計画策定アドバイザー 委員					
2017年5月～		石巻市男女共同参画推進審議会会長 委員					
2016年6月～		宮城県公益認定等委員会委員 委員					

2016年6月～	宮城県公益認定等委員会委員 委員		
2014年10月～	仙台市民生委員推薦会委員 委員		
2012年7月～	岩沼市男女共同参画審議会副会長 委員		
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	経済学部 共生社会経済学科	職名	教授	氏名	黒坂 愛衣	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
『ハンセン病家族訴訟——裁きへの社会的関与』	共著	2023年2月	世織書房	黒坂愛衣, 福岡安則	pp.1-294		
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要				
科学研究費補助金 基盤研究(B)	2022年度～	共同(研究代表者)					
科学研究費補助金 基盤研究(C)	2017年度～	個別	社会的少数者の家族成員間での体験共有と関係性の(再)構築をめぐる研究				
IV 学会等及び社会における主な活動							
2006年5月～		ハンセン病市民学会会員 会員					
2003年4月～		日本社会学会会員 会員					
2003年3月～		日本解放社会学会会員(理事) 会員					
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等				
現在の課題・目標							

今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	
VI 学内における管理運営に関する諸活動	

2022年度							
所属	経済学部 共生社会経済学科	職名	教授	氏名	佐藤 滋	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
LMSを利活用した授業到達度の確認、成績評価の透明化		2020年4月～		授業の理解度を確保するため、原則として毎回、manabaを通じて小テストを実施している。また、授業内容や小テストに対する質問・疑義については、manabaの掲示板を通じて受け答えを行っている。さらに、LMSを、成績評価の透明性を高めるためにも利用している。			
他大学の学生との交流プログラムの実施		2011年4月～		他大学の複数のゼミと、合同ゼミ合宿、調査研究を実施している。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		LMSを利活用し、授業到達度の確認を行うとともに、成績評価の透明性を高める。					
今年度の進捗状況		授業期間中、成績評価に関については学生からの疑義は提出されなかった。一定の成果があったものと考えられる。					
来年度の進捗目標		継続してLMSの有効活用を行い、授業到達度の確認、成績評価の透明性を高めるために役立てたい。					
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
「新財政社会学の展開とその成果をめぐって—財政学、公共経済学研究との対比から」 「納税者の同意における自己利益と互惠性—所得再分配政策の支持要因をめぐって」『財政社会学とは何か』	編者(編著者)	2022年12月	有斐閣	井手英策, 倉地真太郎, 佐藤 滋, 古市将人, 村松 怜, 茂住政一郎	pp.1-273		
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
何のための成長カーブパリティ、ニュース、財政	単著	2023年2月	青土社, 現代思想, 51(2)	佐藤 滋	pp.40-50		
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
納税者の同意における自己利益と互惠性—所得再分配政策の支持要因をめぐって	単独	2022年10月	第79回日本財政学会(東洋大学白山キャンパス)	佐藤 滋			
Industrialization in Southeast Asia and the Oil-Triangle: the cases of Malaysia and Singapore	単独	2022年7月	World Economic History Congress(Campus Condorcet, Paris)	Shigeru Sato			
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		研究書の刊行予定が三冊ある。論文執筆を進め、これらの著書の刊行を目指す。					
今年度の進捗状況		三冊のうち一冊は出版、ほか二冊は2023年度中に刊行予定である。出版スケジュールは遅れたが、概ね予定通りである。					
来年度の進捗目標		刊行予定の研究書2冊の出版を目指すほか、単著の出版計画を進める。					

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
科学研究費補助金 基盤研究(A)	2017年度～	共同(研究分担者)	<p>1. 1970年代の石油危機により、世界システム・世界経済はいかに変容し、21世紀現代世界の原型が形成されたのか。「広義の東アジア」、南アジア、アフリカの事例を双方向的に比較して考察する。</p> <p>2. 東南アジア諸国を含む「広義の東アジア地域」の工業化を中心とした経済的再興(東アジアの奇跡)はなぜ可能になり、南アジアの農業開発「緑の革命」は成果を挙げる一方で、アフリカの経済開発政策はなぜ失敗して、「南南問題」と呼ばれる新たな経済格差がグローバル・サウス内部で生まれたのか。1960年代末～70年代のアジア・アフリカ諸地域に対する、政府開発援助(ODA)、民間投資の動向と関連付けて分析する。</p> <p>3. 石油危機を通じて国際金融体制は、国際通貨基金(IMF)・世界銀行を中心としたブレトン=ウッズ体制から、「民営化された国際通貨システム」へといかに変容したのか、オイルマネーの行方とユーロダラー市場に着目して考察する。</p>
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動			
2020年4月～		日本地方財政学会 理事	
2012年7月～		総務省「地方分権に関する基本問題についての調査研究会 委員	
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	経済学部 共生社会経済学科	職名	教授	氏名	佐藤 純	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
・学生が理解しやすいスライドの作成・多数のPDF化した資料やテキストの公開・教科書の内容を丁寧に反映した授業の組立て		2020年4月1日～		オンデマンド授業であったこともあり、学生が理解しやすいスライドを100枚以上作成した。また、授業内容の理解を促進するためにPDF化した資料を多数公開した。その結果、学生のアンケートでは、「話がわかりやすかった」「授業内容が興味深かった」等のポジティブな評価を得ることができた。一方、授業と教科書の内容との関連性が希薄であるとの指摘も受けたため、教科書の内容を丁寧に反映した授業の組立てにも鋭意努めている。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		担当科目である「経済史」「西洋経済史」「グローバル経済論」の教材作成					
今年度の進捗状況		パワーポイント資料の作成。					
来年度の進捗目標		パワーポイント資料の完成。					
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
経済のグローバル化と格差－イギリス経済史の視点から－『格差社会論(第3版)』		共著	2023年3月	同文館出版		熊沢由美 佐藤康仁 他	pp.171-194
経済のグローバル化と格差－イギリス経済史の視点から－『格差社会論 第3版』		共著	2023年3月	同文館出版		熊沢由美 佐藤康仁 板明果 阿部裕二 王元 郭基煥 佐藤純 谷達彦	pp.171-194
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		1930年代における世界貿易破綻に関する研究。					
今年度の進捗状況		大恐慌期イギリス通商政策に関する研究を遂行。論文「1930年代イギリスの帝国外諸国に対する通商政策」を作成中。					
来年度の進捗目標		論文「1930年代イギリスの帝国外諸国に対する通商政策」を紀要に発表する。					
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要		
IV 学会等及び社会における主な活動							

V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			
共生社会経済学科長			

2022年度							
所属	経済学部 共生社会経済学科	職名	教授	氏名	佐藤 康仁	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
responの活用		2018年～		ほぼ毎回、授業終了時にresponを利用して、授業内容のポイントや「まとめ」、疑問点などを提出させている(授業内容の記憶への定着と正しい理解の促進)			
manabaの利用		2017年～		2016年度から経済学部で導入されたeラーニング manabaを利用して、授業資料の公開や小テストの実施、質問用掲示板の設置などを行っている(授業内容の記憶への定着と正しい理解の促進)			
ウェブサイトでの授業内容の公開		2016年～		「加齢経済論」等、担当する授業の内容(シラバス、授業配付資料等)をウェブサイト公開している(2016年度後期からは経済学部eラーニング「manaba」に移行)			
学習内容の記憶への定着と授業理解の促進		2013年～		毎回、授業開始時には前回授業内容の復習とその回の授業の概略を説明するとともに、授業終了時にはその回の授業内容のまとめを行っている			
レスポンス・カードの利用		2013年～		毎回、授業終了時に、授業内容のポイントや質問等を書いてもらうことで、その回の授業内容の受講生(学生)の理解度を把握し、それを授業内容の改善につなげるとともに、次回授業時には質問に対する回答を行うことによって、授業内容の理解を深めるようにしている			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
地域におけるフィールドワーク等を通じた教育実践の現状と課題		2022年12月11日		生活経済学会東北部会2022年度研究報告会(2022年12月11日、オンライン開催)			
4. その他教育活動上特記すべき事項							
出張講義(泉松陵高等学校)		2022年11月1日		「高齢社会を経済学で考える」			
ゼミ見学受入れ(東北学院榴ヶ岡高校)		2022年6月24日					
現在の課題・目標		①授業内容の記憶への定着と正しい理解の促進 ②講義における成績評価方法の改善					
今年度の進捗状況		①manabaを利用して、毎回、講義内容に関する小テストを実施することで理解度を確認した。また、次回授業の事前学修課題も課した。加えて、2022年度もCOVID-19感染拡大防止の観点から講義動画のオンデマンド提供を行ったことで、講義動画を繰り返し視聴することで復習に役立てることができる。 ②1回の試験による成績評価ではなく、manabaを活用することで、毎回の小テスト、事前学修課題、最終回(第15回)「まとめ」のテストを行い、総合的に評価することが可能となった。					
来年度の進捗目標		・授業最終回に実施する授業評価アンケートの結果をふまえて見直しを行う ・manaba、responのより効率的、効果的な活用をはかる					
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
格差社会論 第3版『格差社会論 第3版』		共編者(共編著者)	2023年3月	同文館出版		熊沢由美・佐藤康仁(編著)板明果・阿部裕二・王元・郭基煥・佐藤純・谷達彦(著)	pp.1-222
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							

F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)

G. 学会における研究発表

地域におけるフィールドワーク等を通じた教育実践の現状と課題	単独	2022年12月	生活経済学会東北部会2022年度研究報告会(オンライン(Zoom))	佐藤康仁
-------------------------------	----	----------	------------------------------------	------

H. 翻訳(学術書や原典等)

I. 特許

現在の課題・目標	①高齢化と世代間格差に関する研究 ②世代会計による日本の世代間不均衡の計測
今年度の進捗状況	2019年SNAデータを用いて世代会計を推計し、世代間均衡を回復するための政策オプションについて考察した。この研究成果は2023年にSpringer社から出版される書籍に収録される予定となっている。
来年度の進捗目標	より一層の研究の推進をはかる

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
科学研究費補助金 日本学術振興会 科学研究費補助金 基盤研究(C)	2019年度～2023年度	共同(研究分担者)	

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2022年8月～2023年3月	宮城県公衆浴場入浴料金検討会委員 委員
2021年10月～	多賀城市行政不服等審査会 会長
2013年10月～	宮城県消費生活審議会 副会長(2017年～)
2011年12月～	内閣府 経済社会構造に関する有識者会議 財政・社会保障の持続可能性に関する「制度・規範ワーキング・グループ」 世代会計専門チーム 委員
1996年10月～	生活経済学会 会員(2015年6月～2021年5月:理事。2019年6月～2021年5月:東北部会長) 会員

V 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

経済学部長(2021年4月～現在)

2022年度							
所属	経済学部 共生社会経済学科	職名	准教授	氏名	小宮 友根	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
『裁判員裁判の評議を解剖する』	共著	2023年3月	日本評論社	森本郁代, 北村隆憲, 小宮友根, 三島聡, サトウタツヤ, 國井恒志	pp.1-320		
事例の数と知見の一般性の関係——会話分析の場合『質的研究アプローチの再検討』	分担執筆	2023年3月	勁草書房	小宮友根	pp.213-239		
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要				
科学研究費補助金 国際共同研究強化A	2020年度～2024年度	個別(研究代表者)					
IV 学会等及び社会における主な活動							
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等				
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							

VI 学内における管理運営に関する諸活動

2022年度							
所属	経済学部 共生社会経済学科	職名	准教授	氏名	齊藤 康則	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
授業理解の促進のため、リプライムムービーを作成した(社会運動・コミュニティ論、ボランティア・NPO論)		2022年4月1日～		授業理解を促進するため、寄せられた質問・感想に対し、毎回、30分程度のリプライムムービーを作成し、受講者の理解が深まるようにした。			
学生の自発的発言の促進(総合演習、演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、フィールドワークⅠa)		2021年4月1日～		演習やフィールドワークなど、比較的少人数の科目では、グループワークを取り入れることによって、学生が自発的に発言できる雰囲気を作っている。4年次演習の最終報告は、他学年の受講者も聞くことができるようにし、学年を超えた学びの機会を設けてきた。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		①講義では、受講者の理解度を高めるために、授業方法を工夫する。 ②演習(ゼミ)について、受講者の主体性を引き出す。					
今年度の進捗状況		①について、オンライン授業が中心だったこともあり、受講者から寄せられた質問・感想に対する、振り返り動画を作成し、授業内容の補足などを徹底して行った。これについては、オンラインから教室に行こうした後も、継続的に実施した。これによって、理解度は高まったと思われるが、振り返り動画を見る学生、スルーする学生によって、小テストの得点にはばらつきも生じたように思われる。今後の課題である。 ②について、既定の授業時間の2～3倍の時間をとって、サブゼミを実施し、少人数での議論を重ねていった。その結果、とりわけ3～4年生の調査、研究能力は向上したように思われる。とりわけ卒業研究のクオリティが高いものとなった。					
来年度の進捗目標		①について、可能であれば、振り返り動画を作成したい。小テストは継続実施する。 ②について、次年度も3～4年生を中心として、サブゼミを実施し、調査、研究能力の向上に努める。					
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
災害公営住宅におけるコミュニティ形成を再考する——東日本大震災・田子西復興公営住宅へ入居者を迎え入れる主体と論理の展開	単著	2022年5月	地域社会学会年報(34)	齊藤康則	pp.119-134		
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
吉野英岐編『災害公営住宅の社会学』	単著	2022年5月	地域社会学会年報, 34	齊藤康則	pp.187-188		
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
農業ボランティアの登場とその背景——東日本大震災から令和元年東日本台風まで	単独	2023年2月	九州大学社会包摂デザイン研究会「災害と農業・農村」(九州大学大橋キャンパス)	齊藤康則			
被災農地の復旧論——令和元年東日本台風・長野市長沼地区を事例として	単独	2022年5月	地域社会学会第47回大会(オンライン)	齊藤康則			
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							

現在の課題・目標	①仮設住宅、災害公営住宅におけるコミュニティ形成に関する研究 ②災害後の農業ボランティアに関する研究 ③被災農地の復旧・復興に関する研究
今年度の進捗状況	①について、査読論文を1本執筆し、刊行された。 ②について、九州・四国・中部地方における調査研究を実施した。 ③について、九州・四国・中部地方における調査研究を実施した。
来年度の進捗目標	①について、その後の展開をめぐるフォロー調査を実施する。 ②について、共同研究者とともに、著書を出版する。 ③について、引き続き調査研究を実施し、学会報告を行う。

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
競争的資金等の外部資金による研究 環境研究助成	2021年度～	共同(研究分担者)	
競争的資金等の外部資金による研究 人文・社会科学分野・提案研究コース	2021年度～	個別(研究代表者)	

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2021年1月～	青葉区区民協働まちづくり事業評価委員会 委員
----------	------------------------

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

入試委員として、高校、相談会などにおける広報を担うとともに、入試実務を遂行した。 学生相談室兼任カウンセラーとして、学生相談に対応した。

2022年度							
所属	経済学部 共生社会経済学科	職名	准教授	氏名	佐久間 香子	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
視聴覚資料、および学生とのコミュニケーション方法を重視した授業づくり		2020年4月1日～		(1) PowerPointをベースに、概念図、写真資料、短い視聴覚資料を併用することを視覚的にわかりやすく授業内容を伝える。 (2) 毎授業後、受講生にリアクションペーパーの提出を貸すことで授業内容理解度を把握すると同時に、出席状況の確認、そして学生とのコミュニケーションに活用する。 以上を着実に実践することで、学生の授業評価アンケートにおいても高く評価された。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要		
科学研究費補助金 日本学術振興会: 科学研究費補助金(基盤研究(B))		2018年度～2022年度	共同(研究分担者)		研究課題: ボルネオの原生林保護と先住民コミュニティの自律的生存が両立する持続的管理の条件		
IV 学会等及び社会における主な活動							
2023年1月～				東南アジア学会 北海道・東北地区理事			
2022年4月～				日本マレーシア学会 編集委員			
2020年1月～2022年12月				東南アジア学会 北海道・東北地区例会委員			

V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	経済学部 共生社会経済学科	職名	准教授	氏名	谷 達彦	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概 要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
「確認問題」の作成		2020年～		授業内容の理解度を確認するため、毎回の授業資料に確認問題を作成、掲載している。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
授業資料(スライド資料等)の作成		2020年～		授業毎にスライド資料や授業動画資料を作成し、スライドに沿って授業を進めている。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要			
IV 学会等及び社会における主な活動							
2012年4月～			財務省財務総合政策研究所客員研究員 委員				
2006年10月～			日本地方財政学会 会員				
2006年4月～			日本財政学会 会員				
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							

来年度の進捗目標	
VI 学内における管理運営に関する諸活動	

2022年度							
所属	経済学部 共生社会経済学科	職名	准教授	氏名	宮地 克典	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
高校への出張講義		2022年7月15日～2022年7月15日		東北生活文化大学高校において出張講義を行った。			
現在の課題・目標		①オンライン時、受講生各人が授業をきちんと受講できるような工夫。 ②オンラインでの講義から対面での講義に切り替わるなかでの教育の質保証。 ③学生同士の交流促進。					
今年度の進捗状況		①manabaの小テストを原則として毎回実施。フィードバックも実施した。 ②学生アンケートをみる限り、平均スコア以上となっており、ある程度は実現できたと考えられる。 ③総合演習やゼミなどで積極的にグループワークを導入。					
来年度の進捗目標		学科の改組などによって担当科目も変わってくるが、とくに③については引き続き実施したい。					
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
国民年金創設時における支給開始年齢の決定をめぐり一考察		単著	2023年3月	愛知学院大学論叢.経済学研究, 10(2)		宮地克典	pp.255-272
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		国民年金に関する科研の研究課題20K02264に取り組んでいる。					
今年度の進捗状況		上記の研究課題について、招待論文として1本まとめたほか、同研究課題の研究代表者及び研究分担者、研究協力者によって構成される研究会にも毎回出席した。					
来年度の進捗目標		研究内容をさらに精査し、学会・研究会で報告を行いたい。					
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)		個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要	
科学研究費補助金 基盤研究(C)		2020年度～2023年度		共同(研究分担者)			
科学研究費補助金 科学研究費助成事業(若手研究)		2018年度～2021年度		個別		「日本における高齢期生活保障の形成・史的展開—雇用と社会保障の接統—」 課題番号:18K13016	
IV 学会等及び社会における主な活動							
2021年6月～2022年5月				社会政策学会選挙管理委員会 会員			

2020年5月～	社会政策学会査読専門委員 会員		
2009年4月～	社会政策学会 会員		
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	経済学部 共生社会経済学科	職名	講師	氏名	武藤 敦士	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
母子生活支援施設を区分して運営することの課題と可能性：地域に開かれた施設とDV対応の閉鎖した施設の比較から	単著	2022年6月	社会的養護研究(2)	武藤敦士	pp.57-65		
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要				
科学研究費補助金 日本学術振興会 科学研究費助成事業 若手研究	2022年度～2026年度	個別(研究代表者)					
IV 学会等及び社会における主な活動							
2022年6月～		社会政策学会 会員					
2022年4月～		日本自然保育学会 会員					
2010年3月～		日本地域福祉学会 会員					
2009年12月～		日本社会福祉学会 会員					
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等				

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	
VI 学内における管理運営に関する諸活動	

教員業務・活動報告

經 營 学 部

經 營 学 科

2022年度							
所属	経営学部 経営学科	職名	教授	氏名	岡田 耕一郎	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
学習した事項を記憶に定着させ、授業の理解を促進させる。		2021年4月1日～		授業の最後に配付プリントを参照しながら今回のまとめを説明している。			
授業の理解を促進させる。		2021年4月1日～		授業の要点をプリントにまとめて配付している。 液晶プロジェクターを活用して、授業内容に関わる画像をスクリーンに投影している。			
実践的な教育の提供		2021年4月1日～		ゼミにおいて、学生と介護サービス組織の人事考課を研究したのち、考課シートを開発し、介護現場で使用した。			
ゼミレポートの添削		2021年4月1日～		論文作成スキルを向上させるため、演習のレポートを添削して返却した。			
オフィスアワーの実施		2021年4月1日～		学生が講義の内容に関する質問をしたり、勉強方法の指導を受けるための時間を設定し、教育の質の向上に配慮した。			
学習した事項を記憶に定着させ、授業の理解を促進させる。		2021年4月1日～		授業の最初に前回のまとめを説明している。			
学習した事項を記憶に定着させ、授業の理解を促進させる。		2021年4月1日～		授業の最後に配付プリントを参照しながら今回のまとめを説明している。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要			

IV 学会等及び社会における主な活動			
2021年4月～		日本社会福祉学会 会員	
2021年4月～		組織学会 会員	
2021年4月～		日本経営学会 会員	
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	経営学部 経営学科	職名	教授	氏名	折橋 伸哉	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		<ul style="list-style-type: none"> 学生の学修意欲を充足する内容の濃い授業を行う。 学部理念の一つである「理論と実践の融合」のうち、実践にあたる授業を展開する。 					
今年度の進捗状況		コロナ禍でかなりの制約を受けたものの、その環境下で可能なことは概ね達成					
来年度の進捗目標		コロナ禍も収束に近づいたので、実践的な教育の更なる充実を図る。					
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
東北の中小企業が今後の自動車産業にかかわるための条件とは『ESPO』	単著	2023年1月	宮城県中小企業団体中央会, 610	折橋伸哉	pp.12-13		
自動車産業のパラダイムシフトの行方について『ESPO』	単著	2022年11月	宮城県中小企業団体中央会, 609	折橋伸哉	pp.12-13		
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
Is battery electric vehicle the only solution?	単独	2022年6月	Gerpisa colloquium 2022(米国ミシガン州立大学)	Shinya Orihashi			
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		自動車産業の研究を中心に、研究活動を推進する。					
今年度の進捗状況		不十分ながら学会での発表を成功裡に行うことができた。					
来年度の進捗目標		目まぐるしく変わる同産業の行方をしっかりとフォローし、分析を試みていく。					
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要			
IV 学会等及び社会における主な活動							
2002年～		産業学会 会員					
1997年～		国際ビジネス研究学会 会員					
1997年～		組織学会 会員					
1997年～		日本経営学会 会員					
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			
<p>引き続き教務委員として、関連する業務を担当していく。 大学生協の理事として、大学生協の経営に必要な助言を行っていく。</p>			

2022年度							
所属	経営学部 経営学科	職名	教授	氏名	小池 和彰	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
『税理士になろう3』	編者(編著者)	2023年2月	創成社	小池和彰	pp.1-281		
『解説所得税法』	共著	2022年5月	税務経理協会, 6	小池和彰・斎藤真紀	pp.1-218		
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
消費税の軽減税率に関する分類の問題	単著	2022年7月	経営・会計研究(27)	小池和彰	pp.1-9		
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要				
IV 学会等及び社会における主な活動							
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等				
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
VI 学内における管理運営に関する諸活動							



2022年度							
所属	経営学部 経営学科	職名	教授	氏名	齋藤 善之	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
総合講座Ⅳ(おもてなしの経営学)では「みやぎおかみ会」との連携のもと宮城県内の旅館ホテルの女将および観光行政・業界から実務担当者を招聘する講義を実施している。(経営学部の複数の教員と共同で授業運営)		2009年～		2017年度の外部講師は、鈴木緑女将(はまなす海洋館・気仙沼市)、佐藤恵里女将(ホテル華乃湯・秋保温泉)、大沼安希子女将(旅館大沼・東鳴子温泉)、梶村和秀氏(宮城県経済商工観光部観光課長)、古津敬浩氏(JR東日本㈱営業部長)を招聘し講義を実施した。			
演習(3年)では、地域の経営者らから聞き取り調査を実施している。その成果は報告書にまとめて刊行し、さらに市民向け報告会を実施している。		2000年～		学生が主体的に経営者らにマンツーマンで聞き取りを行い、これを活字化して報告書にまとめ、市民向け報告会で報告するアクティブラーニング型のゼミ活動である。			
演習では地域の経営者に直接聞き取りをおこない、その結果を報告書にまとめて刊行している。		1999年～		地域の経営者に対し受講生がマンツーマン形式でライフストーリーを聞き取り報告書にまとめる			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
『齋藤善之ゼミ調査研究報告書・仙台河原町の商いと暮らしの記憶』の刊行		2022年12月					
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
書評・中尾俊介著『横浜開港場と内湾社会』	単著	2022年10月	山川出版社, 都市史研究 9	齋藤善之	pp.1-2		
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要				
IV 学会等及び社会における主な活動							
2021年4月～		文化庁文化財審議会 委員					

2020年～	塩竈市文化財審議会委員 委員
2018年～	宮城歴史資料保全ネットワーク 理事長
2008年～	NPO宮城歴史資料保全ネットワーク 会員
2006年～	東北史学会(理事) 会員
2001年～	海事史学会(理事) 会員

V 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

VI 学内における管理運営に関する諸活動

--

2022年度							
所属	経営学部 経営学科	職名	教授	氏名	佐久間 義浩	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
教員独自の「学生による授業評価」を実施		2020年～		大学で実施する「学生による授業評価」に加えて、授業の効果の測定や改善点を明らかにするため、記名式の授業内容に関するアンケートを、すべての科目で実施している。			
監査論におけるディスカッションの実施		2020年～		近年、発覚した粉飾について、粉飾決算企業の公表した内部調査報告書を題材として、粉飾の概要、粉飾を引き起こす要因、公認会計士のあり方、あるべきガバナンス制度の構築について、参加者全員でディスカッションを行い、監査のあり方や社会情勢に関心をもたせた。			
演習等における新聞記事の報告		2020年～		各受講生が興味を持った日経新聞等の内容について、毎時間、報告をさせるとともに、その記事に関するディスカッションに参加者全員で行うことによって、社会情勢に関心をもたせた。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
『エッセンス簿記会計 第18版』森山書店		2022年4月9日					
『決算書分析の方法と論理 会社決算書アナリスト試験公式テキスト【第4版】』ネットスクール出版		2022年4月2日					
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
監査上の主要な検討事項(KAM)の分析一早期適用企業のKAMの時系列比較一	単著	2022年12月	経営学論集(19)	佐久間義浩	pp.9-24		
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
課題研究委員会 中間報告 中小企業財務報告の透明性改善に向けた多面的研究	共著	2022年11月	中小企業会計学会 第10回全国大会 報告要旨集	越智信仁、蟹江章、金子友裕、坂根純輝、佐久間義浩、関川正、中村元彦、橋上徹、林隆敏、松崎堅太郎、弥永真生	pp.31-32		
The Effect of Female Lead-Signing Partners on Modified Audit Opinions: Evidence from Japan	共著	2022年8月	2022 American Accounting Association Annual Meeting プロシーディング	Tsunogaya N., M. Kusano, Y. Sakuma	pp.---		
The Impacts of Disclosing Key Audit Matters (KAMs): Evidence from Japan	単著	2022年8月	2022 American Accounting Association Annual Meeting プロシーディングス	Sakuma, Y.	pp.---		
日本企業の監査報酬の動向(2022年版)	共著	2022年7月	月刊監査役(737)	林隆敏、町田 祥弘、松本 祥尚、堀古 秀徳、佐久間 義浩、高田 知実	pp.36-51		

D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)					
営業費の記録と管理『エッセンス簿記会計 第18版』	単著	2022年4月	森山書店	佐久間義浩	pp.182-196
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)					
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)					
G. 学会における研究発表					
課題研究委員会中間報告 中小企業財務報告の透明性改善に向けた多面的研究	共同	2022年11月	中小企業会計学会第10回全国大会(明治大学)	越智信仁、佐久間義浩、坂根純輝	
The Effect of Female Lead-Signing Partners on Modified Audit Opinions: Evidence from Japan	共同	2022年8月	2022 American Accounting Association Annual Meeting(virtual)	Tsunogaya N., M. Kusano, Y. Sakuma	
The Impacts of Disclosing Key Audit Matters (KAMs): Evidence from Japan	単独	2022年8月	2022 American Accounting Association Annual Meeting(San Diego)	Sakuma, Y.	
H. 翻訳(学術書や原典等)					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)					
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要		
科学研究費補助金 基盤研究(C)	2021年度～	共同(研究分担者)			
科学研究費補助金 科学研究費補助金(基盤研究C)	2021年度～	個別(研究代表者)			
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動					
2022年9月～		日本監査研究学会 課題別研究部会 構成員 会員			
2021年9月～		中小企業会計学会 課題研究委員会 会員			
2019年12月～		金融庁 公認会計士・監査審査会 公認会計士試験 試験委員			
2016年12月～		総務省東北総合通信局 受信者支援団体の公募及び事業実績に係る評価会 構成員			
V 芸術分野や体育実技等における主な活動					
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等		
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動					

2022年度							
所属	経営学部 経営学科	職名	教授	氏名	佐々木 郁子	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
「Google 課題解決プロジェクト」(マイナビ)への参加		2020年～		演習(4年生)で、マイナビが主催する「Google課題解決プロジェクト」に1チーム3名ずつに分かれ、課題テーマに関する提言・提案を考え、発表し、企画書を提出した。ゼミ内で報告会を行いディスカッションした後、内容をブラッシュアップした上で、企画書を提出した。これによって、課題について深く考え、調査し、提案するという、自発的な学びと、それを表現するという能力を養う事が出来た。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
アスリートの食事の重要性ー硬式野球部と宮城学院女子大学との共同プロジェクト		2021年～		宮城学院女子大学の協力を得て、アスリートにとって食が重要性であることを意識づける取り組みをおこなっている。			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要			
科学研究費補助金 科学研究費・基盤研究(C)		2018年度～2022年度	個別	「原価および収益の構造と顧客関係性の変容に関する研究」(代表)			
IV 学会等及び社会における主な活動							
2020年10月～2026年9月			日本学術会議連携会員 委員				
2019年6月～			日本経営会計専門家研究学会				
2019年～			日本経営会計専門家研究学会				

2014年～		公益財団法人仙台市産業振興事業団非常勤理事 委員	
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	経営学部 経営学科	職名	教授	氏名	菅山 真次	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
経営史の授業方法・評価の工夫		2014年4月～		授業中に毎回小テストを実施するか課題をだし、その結果のみで授業評価を行った。 定期試験は一切実施しなかった。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
経営史 I・IIレジメ(2022年版)		2022年4月1日～2023年3月31日					
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		①研究成果を英語で発表する。 ②戦前期の日立製作所における人的資本形成について考察する。 ③1920-60年代の大企業ホワイトカラーの人材・労働市場について考察する。					
今年度の進捗状況		①について、2018年度に富士コンファレンスで報告したペーパーの出版計画があるが、はかばかしい進捗は見られなかった。 ②について、科研費研究プロジェクトで日立工業専修学校を中心とする研究報告を行った。 ③について、日本毛織の事務社員のキャリアに関するインタビュー調査を行った。					
来年度の進捗目標		①日立製作所の人的資本形成についての論文を作成する。 ②戦前期の日立製作所における女性労働の実態についての研究を進める。 ③日本毛織における事務職員のキャリア・賃金をジェンダーの視点を意識しながら分析して、学会報告を行う。					
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要			

文部省科学研究費基盤研究(B)	2019年度～2022年度	共同(研究分担者)	20世紀を代表する産業である電気機械産業において今まで代表企業であり続けた日米独の総合電機企業を取り上げ、その誕生から今までの期間の、①戦略と組織構造、②人的資本・人的資源、③組織能力、について比較検討する研究プロジェクト。人的資本形成を担当。
文部省科学研究費基盤研究(B)	2018年度～2022年度	共同(研究分担者)	膨大に残されている日本毛織の企業資料を用いて明治期から高度経済成長期までの同社の企業活動を分析し、羊毛工業史の全体像とそこにみられる羊毛工業経営の特徴を明らかにすることを目的とする研究プロジェクト。ホワイトカラー人材の雇用システムの分析を担当。
IV 学会等及び社会における主な活動			
2021年1月～		経営史学会理事	
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	経営学部 経営学科	職名	嘱託教授	氏名	鈴木 好和	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
ライオンズクラブの下位組織としての「翼レオクラブ」の部長としての指導を行った。		2020年4月1日～		ライオンズクラブと共同で社会貢献活動を行う。今年は、海岸の清掃や仙台駅のアルコール消毒などを行った。			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
HRテックと労使関係		単著	2023年2月	東北学院大学経営学論集(20)		鈴木好和	pp.1-13
人的資源と人的資本		単著	2022年12月	東北学院大学経営学論集(19)		鈴木好和	pp.25-33
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
拙書『人的資源管理論 第6版』について		単独	2022年12月	日本労務学会東北部会(アイーナ岩手県民情報交流センター)		鈴木好和	
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要		
IV 学会等及び社会における主な活動							
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場所	開催年月日(西暦)		発表・展示等の内容等		
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							

VI 学内における管理運営に関する諸活動

2022年度							
所属	経営学部 経営学科	職名	教授	氏名	根市 一志	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
独自アンケートの実施		2022年4月1日～		授業の理解度を確保するための独自のアンケートを実施している。			
授業評価の実施		2022年4月1日～		「授業改善のための学生アンケート」を実施している。			
自発的に考えさせる。		2022年4月1日～		学修した基礎知識をどのように使うのか、練習問題等を通じて自発的に考えさせる。			
効果的なプレゼンテーション		2022年4月1日～		人に自分の考えを理解させるための効果的なプレゼンテーションを考えさせる。また、それを指導する。道具としてマルチメディア機器を活用させている。			
基礎知識を理解させ、定着させる。		2022年4月1日～		基礎知識をその科目の体系性を考慮し、できるだけ平易に説明している。さらに、説明後、例を示し、より理解を深めている。前回の講義で説明した内容の概略を講義の初めにもう一度簡潔に説明している。講義の終わりに理解したことをまとめさせている。			
学修の必要性を理解させる		2022年4月1日～		専門体系における当該科目の位置づけと必要性を説明している。			
テーマと目的を理解させる		2022年4月1日～		テーマの内容について、何を明確にしたいのか、目的をはっきりさせる。目的達成までの手順を論理的に考えさせ、それにしがたった問題を解決させる。			
データの分析		2022年4月1日～		客観的な根拠を示すため、何を明らかにしたいのか、明確な目的を理解した上で、データ分析を行う。道具としてデータ分析ソフトウェアを使う。また、それを指導する。			
データと情報の収集		2022年4月1日～		目的を達成させるために必要なデータや情報は何かを考えさせる。また、それを指導する。道具としてインターネットを活用している。			
responの利用		2022年4月1日～		双方向の授業を行うため、responを利用している。			
manabaの利用		2022年4月1日～		講義資料の配布、講義内容の理解度を確保するための小テストにmanabaを利用している。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
統計学概論のテキスト		2022年4月1日～		統計学概論IおよびIIのテキストを作成し、学生に提供している。			
講義用スライドの作成		2022年4月1日～		講義用のスライドを作成して講義内容の説明に十分時間を費やすようにしている。また、一部の講義スライドはWebからダウンロード可能にし、学生に提供している。			
Web教材の作成		2022年4月1日～		講義内容の詳細な説明、講義の補足、教材の提示などを目的に作成している。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		<ul style="list-style-type: none"> ①講義概要に記載した到達目標を達成できることを目標に掲げている。そのためには、なぜ当該科目の学修が必要なのか、講義内容がいかに重要なのか、自分で考える力を身につけることがいかに重要なのかを理解させることに重点を置いている。 ②新しい内容を取り入れる。 ③講義内容を理解するための具体的な例を考える。 ④テキストを改善する。 ⑤講義スライドを改善する。 					

<p>今年度の進捗状況</p>	<p>上記目標①に関しては、その達成度を自己評価すると、授業で説明した内容を理解し、それをもとに自分の意見を述べる事ができている。自分の考えの発展もみられる。例えば、提出させたレポートをみると、内容を考察し、きちんとまとめる事ができている。また、発展的な考えもみられる。ソフトウェア操作だけではなく、結果の評価、考察ができている。小テストなどの成績も概ね良い。</p> <p>上記目標②に関しては、現在の社会的な出来事など、新しい内容を考慮した説明はできていると思う。</p> <p>上記目標③に関しては、具体的な例題の作成はできていると思う。</p> <p>上記目標④に関しては、どのような内容にすれば、より理解が深まるか常に意識して作成しているが、新たな課題も発生するので、その都度改善が必要になっている。また、修得すべき知識として必要と思われる内容を追加をした。来年度、授業内容が変わる科目もあるので、新しいテキストを作成した。</p> <p>上記目標⑤に関しては、どのような内容にすれば、より理解が深まるか常に意識して作成しているが、新たな課題も発生するので、その都度改善が必要になっている。</p>
<p>来年度の進捗目標</p>	<p>上記目標①に関しては、具体的な考え方や可能性を掘り下げて説明するようにここがける。</p> <p>上記目標②に関しては、継続していく。</p> <p>上記目標③に関しては、継続していく。</p> <p>上記目標④に関しては、必要に応じて改善を考える。</p> <p>上記目標⑤に関しては、必要に応じて改善を考える。</p>

II 研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)					
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)					
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳(学術書や原典等)					
I. 特許					
現在の課題・目標	<p>①非線形関数をデータにフィットするための汎用的なソフトウェア開発。</p> <p>②液体アルゴンTime Projection Chamberを用いた素粒子物理学のモンテカルロ・シミュレーション</p>				
今年度の進捗状況	<p>上記目標①に関しては、継続して開発を行っているが、進捗はあまりない。</p> <p>上記目標②に関しては、継続して開発を行っているが、進捗はあまりない。</p>				
来年度の進捗目標	<p>上記目標①に関しては、継続していく。</p> <p>上記目標②に関しては、継続していく。</p>				

III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
----------	----------	------------------------	----

IV 学会等及び社会における主な活動

V 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

VI 学内における管理運営に関する諸活動

経営学部長
 体育会会長
 体育会剣道部部长

2022年度							
所属	経営学部 経営学科	職名	教授	氏名	松岡 孝介	大学院の授業 担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
経営と管理会計の模擬体験		2018年4月～		戦略マネジメント・ゲームあるいはビジネス・ゲーム21という教材を用いて、経営と管理会計を模擬体験できる授業を展開した。この授業では、学生たちは計画とコントロールという管理会計の中核的機能が、企業経営において非常に重要な役割を果たすことを実感することができる。			
manabaを利用した授業資料の共有		2018年4月～		すべての授業で、授業資料をすべてmanabaにアップロードして、受講者が閲覧できるようにしている。また、少人数制の授業では、過去のゼミ活動の資料をGoogle for Educationで共有するようにしている。			
オンラインを活用したリアルタイムの双方向型授業		2014年9月～2022年8月		クリティカルシンキングの授業では、学生が学んだ思考原則を実際に理解できるように、毎回練習問題を実施した。学生はGoogle formsなどで回答を入力し、その場で集計結果についてコメントをつけるようにした。これにより、学生の理解が深まるだけでなく、授業にメリハリがつくようにした。			
身近な日常の事例を持ちいた説明		2014年9月～2022年8月		クリティカルシンキングでは、思考の原則を理解しやすいように、極力学生にとっても身近な日常的な事例を用いて説明した。			
事例を用いた理論と実践の関連付け		2007年4月～		会計学に関わる講義形式の授業では、必要に応じて、現在学んでいる会計技法を用いて実企業を分析するとどのような結果が得られるのかを示すために、事例を用いるようにしている。			
計算方法の習得促進(2015年度以降はmanabaの小テスト機能を活用)		2007年4月～		会計学に関わる講義形式の授業では、書き込み形式の資料を用いて例題を学生と一緒に解くようにしている。その後、学生の力だけで練習問題を解いてもらうようにしている。2015年度以降は、練習問題はmanabaの小テストを活用して採点結果を公開、改善点を授業で毎回説明するようになっている。2020年度以降は、コロナでオンライン授業となったため、毎週の小テストに対する講評を配布するようになった。			
学生自身による事例研究		2007年4月～		少人数制授業では、学生たちによる事例研究を行うようにしている。講義で学んだ内容を実際に用いて様々な企業を分析することで、理論と実践との結びつきを実感してもらうことが狙いである。			
プレゼンテーション能力とディスカッション能力の育成		2007年4月～		少人数制授業では、担当の学生によるプレゼンテーションを行ってもらい、具体的なアドバイスをするようにしている。また、プレゼンテーションの内容について学生同士で質疑応答をするようにして、ディスカッション能力の育成も図っている。			
チーム作業の体験		2007年4月～		少人数制授業では、学生をいくつかのチームに分けて課題に取り組んでもらうようにしている。チームの力を発揮するためにはどのようにすればよいのかを体験してもらうことが狙いである。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
クリティカルシンキングの講義資料		2015年9月～2022年8月		ゼックミスタ、E.B.・ジョンソン J.E.(1996)『クリティカルシンキング 入門篇』北大路書房、およびゼックミスタ、E.B.・ジョンソン J.E.(1997)『クリティカルシンキング 実践篇』北大路書房に基づいて資料を作成し、毎回配布した。			
コストマネジメント論の講義資料		2015年4月～		コストマネジメント論は、できる限り先端の内容を学習するために、Horniglen et al.(2014) Cost Accounting 15th edsの内容をもとに講義資料を作成した。また、版が更新されるたびにその内容を反映させた。さらに、随所に日本企業の事例を盛り込むようにした。			
特別講義(おもてなしの経営学)の講義資料(財務諸表分析、レベニュー・マネジメント、マーケティング・リサーチ)		2011年9月～		2011年度から2018年度までは帝国ホテルの事例を用いた経営分析について講義した。この資料はそれ以降も毎年、必要に応じて更新しながら利用した。2019年度はさらに塩釜の事例を用いたマーケティング・リサーチについて講義資料を作成した。また、2019年度および2020年度は、ホテルチェーンの事例を用いた価格設定についての資料を作成した。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							

現在の課題・目標	<p>今年度は前期だけの担当となる。後期からは在外研修に出る。前期には(1)コストマネジメント論と(2)少人数制授業を担当する。</p> <p>(1) コストマネジメント論は、小テストの解説を充実させることにより得点率の向上を図る。 (2) 少人数制授業ではゲームを通じた実践的な管理会計教育を展開する。</p>				
今年度の進捗状況	<p>(1) コストマネジメント論は、小テストの解説を充実させたところ、得点率が大きく向上した。 (2) 少人数制授業では戦略マネジメントゲームのほか、新たにビジネスゲーム21を展開し、より幅広い管理会計教育を実践できた。</p>				
来年度の進捗目標	<p>(1) コストマネジメント論が戦略管理会計論に名称変更となる。これに伴い、授業でカバーできる範囲が広がる。必要に応じて、授業資料の更新を行う。 (2) 少人数制授業では、ゲームによる管理会計ゲームを継続して実施する。これまでではゲームの補助スタッフとして2名を確保できていたが、財務部による予算削減により1名に減らされた。少ない人員で効果を落とさないような取り組みを進める。</p>				
II 研究活動					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)					
Effects of Revenue Management on Perceived Value, Customer Satisfaction, and Customer Loyalty	単著	2022年9月	Elsevier, Journal of Business Research, 148	Kohsuke Matsuoka	pp.131-148
Tourism Destination Competitiveness: Analysis and Strategy of the Miyagi Zaō Mountains Area, Japan	共著	2022年7月	MDPI, Sustainability, 14(15)	Takatoshi Murayama, Graham Brown, Rob Hallak, Kohsuke Matsuoka	pp.9124
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)					
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)					
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)					
G. 学会における研究発表					
収益センターにおける営業活動の量と質が将来の財務業績に及ぼす影響	共同	2022年9月	日本原価計算研究学会 第48回全国大会(オンライン)	◎松岡孝介, 石井宏宗, 川口あすみ	
マーケティングベースの予算管理: 電子部品サプライヤーにおける発達の軌跡	共同	2022年7月	日本会計研究学会 第100回 東北部会(オンライン)	◎松岡孝介, 石井宏宗, 川口あすみ	
H. 翻訳(学術書や原典等)					
I. 特許					
現在の課題・目標	<p>後期(2022年9月)から取得する予定の在外研修の準備(引っ越しなど)があるため、前期には研究時間の捻出は困難を極めると思われる。在外研修が始まる後期以降、研究に集中することとする。</p> <p>(1) アクターネットワーク理論の研究は、2022年度中にはUniversity of Glasgowを訪問してProf. Wickramasingheと面会し、今後の進捗に弾みをつける。 (2) セールス・マネジメント・コントロール・システムの研究は、データ収集、解析および文献レビューを進める。2022年度中には投稿できるように準備をする。 (3) 観光に関わるカスタマージャーニーの調査結果に基づいて、データ解析を進める。 (4) 国内企業において、顧客調査と従業員調査を継続してデータ収集を行う。</p>				
今年度の進捗状況	<p>(1) アクターネットワーク理論の研究は、2023年2月にUniversity of Glasgowを訪問してProf. Wickramasingheと面会した。多方面にわたる充実した議論を行うことができ、今後の進捗に弾みがついた。 (2) セールス・マネジメント・コントロール・システムの研究は、データ収集、解析および文献レビューを進めた。2023年4月に追加データの収集ができる見込みがたつたため、論文投稿は見送ることとした。 (3) 観光に関わるカスタマージャーニーの調査結果に基づいて、データ解析を完了した。 (4) 国内企業において、顧客調査と従業員調査を継続してデータ収集を行った。</p>				

<p>来年度の進捗目標</p>	<p>(1) アクターネットワーク理論の研究は、Prof. Wickramasingheとの協議内容に基づいて修正を重ねていく。大きな修正となるため、2023年度中の投稿ができるかは不透明である。 (2) セールス・マネジメント・コントロール・システムの研究は、データ収集、解析および文献レビューをさらに進める。2023年度中の投稿を目指したい。 (3) 観光に関わるカスタマージャーニーの文献サーベイを進める。 (4) 国内企業において、顧客調査と従業員調査を継続してデータ収集を行う。</p>		
<p>Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</p>			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
<p>科学研究費補助金 基盤研究(C)</p>	<p>2020年度～2024年度</p>	<p>個別(研究代表者)</p>	<p>本研究では、事例研究を通して「収益管理会計」の構築を行う。収益管理会計は、顧客データを用いて収益分析を行い、マーケティング意思決定に役立てる。本研究は、収益管理会計を支える手法や概念を発展させ、原価計算に立脚する伝統的管理会計を補完することを目指す。具体的には、①収益形成過程の促進要因の分析、②収益パランスが安定成長に与える影響の検証、および③顧客生涯価値に基づく資源配分方法の構築を行う。</p>
<p>Ⅳ 学会等及び社会における主な活動</p>			
<p>2022年10月～</p>	<p>Asia-Pacific Management Accounting Association 会員</p>		
<p>2021年5月～</p>	<p>一般社団法人 ICTマネジメント研究会 理事 理事</p>		
<p>2019年12月～</p>	<p>一般社団法人ICTマネジメント研究会 学生小論文アワード 審査委員 運営参加・支援</p>		
<p>2019年2月～</p>	<p>APMAA (Asian Pacific Management Accounting Association) Japan Director</p>		
<p>2019年1月～</p>	<p>日本戦略MG教育学会 理事</p>		
<p>2019年～2022年</p>	<p>原価計算研究の査読 査読</p>		
<p>2018年12月～</p>	<p>日本戦略MG教育学会 会員</p>		
<p>2017年4月～</p>	<p>APMAA (Asian Pacific Management Accounting Association) Steering Committee</p>		
<p>2016年4月～</p>	<p>余暇ツーリズム学会 会員</p>		
<p>2007年10月～</p>	<p>日本原価計算研究学会 会員</p>		
<p>2005年9月～</p>	<p>日本会計研究学会 会員</p>		
<p>2003年9月～</p>	<p>日本管理会計学会 会員</p>		
<p>Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動</p>			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
<p>現在の課題・目標</p>			
<p>今年度の進捗状況</p>			
<p>来年度の進捗目標</p>			
<p>Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動</p>			
<p>会計経理OA実習室 室長(2022年8月まで)</p>			

2022年度							
所属	経営学部 経営学科	職名	教授	氏名	松村 尚彦	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		<ul style="list-style-type: none"> ゼミにおいて実践的な活動(銘柄選択など)を通して、企業分析、株価分析に対する学生の興味関心を喚起し、より深い研究とプレゼンができるように工夫をする。 講義科目において、よりストーリー性のある組み立てができるようにして、学生の学び意欲を高める。 キャリア形成論において、大教室でもグループワークをしたり、質疑応答ができるように工夫をする。 					
今年度の進捗状況		<ul style="list-style-type: none"> ゼミではギフトHD、カブコン、業務スーパー、ZOZOなど実際の企業を取り上げ、学生たちが自主的に活動しながら研究活動を行うことができた。 講義科目においては、金融市場でディーラーがどのような行動をしているのかをストーリーで紹介するなど、若干ストーリー性のある組み立てをすることができた。 キャリア形成論では、アイスブレイクを取り入れるなどすることで、大教室にも関わらずグループワークをしたり、社会人講師に対して質問することができた。 					
来年度の進捗目標		<ul style="list-style-type: none"> ゼミにおいて実践的な活動(銘柄選択など)を通して、企業分析、株価分析に対する学生の興味関心を喚起し、より深い研究とプレゼンができるように一層の工夫をする。 講義科目において、よりストーリー性のある組み立てができるようにして、学生の学び意欲をより一層高める。 キャリア形成論において、大教室でもグループワークをしたり、質疑応答ができるように更なる工夫をする。 					
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		<ul style="list-style-type: none"> 日銀の出口政策のあり方と日本経済への影響について調査する。 株主価値最大化を目指す資本主義のあり方が行き詰りを見せているなかで、今後資本主義はどのような形で再構築されるべきかを考察する。 					
今年度の進捗状況		関連著書を幾つか読んだがほとんど進捗しなかった。					
来年度の進捗目標		<ul style="list-style-type: none"> 日銀の出口政策のあり方と日本経済への影響について調査し、幾つかの可能性を整理できるようにする。 株主価値最大化を目指す資本主義のあり方が行き詰りを見せているなかで、今後資本主義はどのような形で再構築されるべきかを考察し、幾つかの可能性を整理できるようにする。 					
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分	共同の場合の役割分担	概要			
IV 学会等及び社会における主な活動							
2022年4月～2022年12月				日本証券アナリスト協会主催・仙台地区シンポジウム実行委員 委員			

2021年4月～	世界食料フォーラム・仙台の実行委員 事務局委員
2014年9月～	日本証券アナリスト協会東北地区連絡委員 委員
2013年4月～	世界食料フォーラム仙台運営委員 委員
2004年4月～2023年3月	行動経済学会 会員
2001年4月～	日本金融・証券計量・工学会(JAFEE) 会員
2001年4月～	日本ファイナンス学会 会員
1994年～	日本証券アナリスト協会 会員

V 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

VI 学内における管理運営に関する諸活動

--

2022年度							
所属	経営学部 経営学科	職名	教授	氏名	村山 貴俊	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
LMSを活用した講義の実践		2022年4月1日～		LMSを活用し、学生への資料配布のほか、毎回の出席管理および実力確認小テストの実施			
アクティブラーニングおよびプロジェクト・ベースド・ラーニングに関するFDの実施		2021年～		経営学部のFD活動の一環としてALとPBLに関する実践例の報告。FD会議の主催と報告者の調整。			
ビジネス・ケース研究におけるフィールドワークの実施		2013年6月～2023年3月		戦略立案に向けて学生と共に調査対象企業を訪問し、現地・現場の状況を調査。			
おもてなしの経営学での実践教育の展開		2008年～		宮城県の旅館ホテルと連携した実践教育。			
ビジネスケース研究・実習での実践教育の展開		2008年～2023年3月		外部企業と連携した実践教育の実施。後期＝武田の笹かまぼこへの戦略提案の実施および関連教材の作成。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
ビジネス・ケース研究・実習で使用するケースを作成		2008年4月～2023年3月		ビジネス・ケース研究・実習で用いるケースを作成した。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
経営学部FD会議 LMSを活用した講義の実践 組織デザインでの取組の紹介		2022年		学部内FD活動での発表			
4. その他教育活動上特記すべき事項							
経営学部・研究FD会議の立ち上げと運営		2022年～		経営学部の教育FDに加えて、研究FDの立ち上げと運営も担当			
観光に関する国際的な教育機会の提供		2020年～		南オーストラリア大学の研究者と連携して学生および市民に観光学を英語で学ぶ機会を提供			
経営学部の遠隔授業実施に関するプロジェクトチームでの活動		2020年～					
FD NEWSの記事および活動報告の作成		2016年～		特色ある講義の1つとして経営学部ビジネスケース研究を紹介する記事を作成。ケース・メソッドという広く認められた教育方法の構成要件を挙げ、それらに要件に沿った講義を展開することの重要性を指摘。FD委員として経営学部のFD活動の報告書作成を担当。			
ゼミナールでの観光調査および観光振興策の提案・実施		2015年～		JR小さな旅の企画と実施、塩竈市と共同でのアンケート調査。観光振興策の提案。武田の笹かまぼこことの商品開発。塩竈スイーツマップの作成。石巻圏DMOの調査協力、蔵王町の観光地競争力調査など			
『経営学部生のための学びのガイドブック』を用いた講義の実施		2015年～		「序章 本書の狙いと特徴」「第1章 レポート作成の技法」を用いて、読解・作文の技法、研究・発表の技法の講義を実施。			
地域の企業に対する戦略提案		2008年～		地域企業に対してビジネスケース研究、ビジネスケース実習、ゼミナールなどを通じて戦略提案を行った。また、武田の笹かまぼここと連携して新商品の開発と販売も実施した。			
現在の課題・目標		中小企業の戦略に関する本の出版 英語ジャーナルへの投稿					
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							

Tourism Destination Competitiveness: Analysis and Strategy of the Miyagi Zaō Mountains Area, Japan	共著	2022年7月	MDPI, Sustainability, 14(15)	Takatoshi Murayama, Graham Brown, Rob Hallak, Kohsuke Matsuoka	pp.9124
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
多国籍企業の内部化理論への再考 —The Future of the Multinational Enterprise を改めて読み解く—	単著	2022年12月	東北学院大学経営学論集(19)	村山貴俊	pp.113- 141
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)					
アールシーコア——個性的な「暮らし」を届ける BESSの家	共著	2022年12月	東洋経済新報社, 一橋ビジネスレ ビュー, 70(3)	秋池篤, 吉岡(小林) 徹, 村山貴俊	pp.128- 143
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)					
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳(学術書や原典等)					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)					
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要		
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動					
V 芸術分野や体育実技等における主な活動					
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等		
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動					

2022年度							
所属	経営学部 経営学科	職名	教授	氏名	矢口 義教	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
理論と実践に基づくアクティブラーニング		2020年4月1日～		経営学科講義科目「ビジネス・ケース実習」において、経営学理論の修得に基づく実践的な思考・分析・提案力を養い、地域企業や大手上場企業への実践的戦略提案を行っている。			
復興マインドを形成するアクティブラーニング		2020年4月1日～		演習(3年)・(4年)において、CSRの観点から東日本大震災被災地の復興構想をプランニングする指導を展開している。アクティブラーニングを行うことで、受講生の復興マインドの涵養に努めている。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
『地域を支え、地域を守る責任経営—CSR・SDGs時代の中小企業経営と事業承継—』		単著	2023年3月	創成社		矢口義教	pp.1-336
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
ビジネス・ケース サイト工業株式会社—地域建設業の経営戦略と社会的役割—		単著	2022年12月	東北学院大学経営学論集(19)		矢口義教	pp.155-171
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
ビジネス・ケース さいとう製菓株式会社—大船渡市地域との共生の視点を踏まえて—		単著	2023年2月	東北学院大学経営学論集(20)		矢口 義教	pp.15-32
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要		
IV 学会等及び社会における主な活動							
2015年9月～			日本産業経済学会 会員				

2014年10月～	Society for Business Ethics 会員		
2014年10月～	環境経営学会 会員		
2014年4月～	日本経営倫理学会 会員		
2013年8月～	事業承継学会 会員		
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	経営学部 経営学科	職名	准教授	氏名	秋池 篤	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
動画の活用		2020年4月～		オンデマンド講義に併せてyoutubeにおける企業公式の動画の閲覧などを促すことによって、経営戦略論に関する理解を深めるようにしている。			
図・表を活用しての理論・フレームワークの学習の促進		2019年～		例年通り、引き続き、経営戦略論の理論・フレームワークに関して文字のみならず、図や表を作成し伝えることを心掛けた。			
オープンアクセス論文を活用してのフレームワーク理解の促進		2019年～		例年通り、経営戦略論の理論・フレームワークの学修を促進するため、各自オープンアクセス論文上に記載されているケースを読解し、理論・フレームワークを用いて解釈するという課題をこれまで数回実施した。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		経営戦略論の理論・フレームワークに関する内容理解度の向上					
今年度の進捗状況		今年度もオンデマンド型ではあったものの、例年通り、事前学習・事後学習の実施をmanabaで実施し予習・復習の確認をするようにし、経営戦略論の理論・フレームワークの内容理解の促進をはかった。その際に、予習についてはドリル形式として理解度向上を図るようにした、また、例年通りアンケート結果、コメントへのフィードバックも行うようにした。					
来年度の進捗目標		来年度については、授業形態の変更なども考慮に入れつつ、これまで培ったオンデマンド型授業の蓄積も踏まえ、よりブラッシュアップした形で、事前学習・事後学習の促進を図ると同時にフィードバックの質なども向上させていきたい。					
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
アールシーコア——個性的な「暮らし」を届ける BESSの家	共著	2022年12月	東洋経済新報社、一橋ビジネスレビュー、70(3)	秋池篤, 吉岡(小林) 徹, 村山貴俊	pp.128-143		
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		デザイン戦略に関する研究 技術とデザインの同時追及時のマネジメント及び新奇性の高いデザインの戦略的なマネジメント 自動車産業に関する研究 東北自動車産業に関する現状の理解と効果的なマネジメント方法の検討 観光戦略に関する研究 観光戦略についての定量的・定性的な分析					

<p>今年度の進捗状況</p>	<p>デザイン戦略に関する研究 アンケート調査を実施し、結果の整理を実施中 自動車産業に関する研究 インタビュー調査を再開 観光戦略に関する研究 新型コロナの影響もあり、積極的な調査については進められていない</p>		
<p>来年度の進捗目標</p>	<p>デザイン戦略に関する研究 引き続き現在の調査を論文化し、公刊を目指す。 自動車産業に関する研究 引き続き調査を継続していく。 観光戦略に関する研究 ICTと観光の関係性に関する調査を進めるべく、先行研究のレビューを実施する。</p>		
<p>Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</p>			
<p>競争的資金の名称</p>	<p>採用年度(西暦)</p>	<p>個別・共同の区分 共同の場合の役割分担</p>	<p>概 要</p>
<p>科学研究費補助金 科学研究費補助金基盤研究(B)</p>	<p>2021年度～2024年度</p>	<p>共同(研究分担者)</p>	
<p>Ⅳ 学会等及び社会における主な活動</p>			
<p>2014年3月～</p>		<p>国際ビジネス研究学会 会員</p>	
<p>2013年12月～</p>		<p>研究・技術計画学会(現:研究・イノベーション学会) 会員</p>	
<p>2012年9月～</p>		<p>日本経営学会 会員</p>	
<p>2012年6月～</p>		<p>組織学会 会員</p>	
<p>Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動</p>			
<p>展覧会・演奏会・競技会等の名称</p>	<p>場 所</p>	<p>開催年月日(西暦)</p>	<p>発表・展示等の内容等</p>
<p>現在の課題・目標</p>			
<p>今年度の進捗状況</p>			
<p>来年度の進捗目標</p>			
<p>Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動</p>			
<p>中央図書館委員、全学図書館員</p>			

2022年度							
所属	経営学部 経営学科	職名	准教授	氏名	古賀 裕也	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		①学生の財務会計への理解促進 ②研究課題の発見と調査方法の教授					
今年度の進捗状況		今年度の後期から対面講義で学生に簿記を教えることができるようになった。質問対応など対面でスムーズに行うことができ、また学生のモチベーションも高まったように感じる。 4年生のゼミでは自ら研究課題をみつけて、企業へのアンケート調査を実施し、その成果をまとめた卒業論文を完成することができた。 3年生のゼミでは、日経ストックリーグに参加し、入選することができた。					
来年度の進捗目標		①学生の財務会計への理解促進 ②研究課題の発見と調査方法の教授 - 学生の卒論執筆指導 - 学生の外部大会への参加促進と指導					
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Operating leases and credit assessments: The role of main banks in Japan	共著	2022年	Journal of International Accounting Research, 21(2)	Yuya Koga, Shahrokh M. Saudagaran	pp.101-123		
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
Earnings Management Near Investment- and Speculative-grade Borderline Ratings: Evidence from Japanese Firms with Single or Multiple Ratings	単著	2022年	経営学論集, 19	Yuya Koga	pp.35-70		
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
オペレーティング・リースの認識で経済的影響は生じるのか	単著	2022年	企業会計, 74(5)	古賀裕也	pp.122-123		
財務報告は経営者の近視眼的行動を助長するのか	単著	2022年	中央経済社, 企業会計, 74(6)	古賀裕也	pp.128-129		
四半期開示の経済的帰結に関する先行研究のレビュー	単著	2022年	中央経済社, 企業会計, 74(9)	古賀裕也	pp.55-66		
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		①海外学術誌への論文掲載 ②科研費テーマの課題進行					

今年度の進捗状況	今年度、海外学術誌への論文が掲載された。今後、英語論文をさらに執筆し、海外学術誌への掲載を目指したい。 科研費テーマの進捗が滞っているため、時間を見つけて課題を進行させたい。		
来年度の進捗目標	①海外学術誌への論文投稿 ②海外学会での発表 ③共同研究の進展と科研費テーマの課題進行		
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
科学研究費補助金 若手研究	2021年度～2024年度		本研究課題では、日本の金融業を除く上場企業を対象に、メインバンクによるガバナンスが企業の近視眼的行動(managerial myopia)にどのような影響を与えるかを検証する。メインバンクを中心とする融資やモニタリングは日本の伝統的な制度的特徴としてあげられた。しかしながら、日本企業の所有構造は大きく変化しており、メインバンクの機能が弱体化しているといわれている。本研究では、メインバンク制に着目し、企業の近視眼的行動への影響を時系列で観察する。
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動			
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動			
<ul style="list-style-type: none"> ・会計・経理OA実習室室長(2022年10月より) ・AO委員 ・敬和会幹事 ・科研費申請アドバイザー ・教職員免許更新研修実施委員会 ・入試問題作成委員 			

2022年度							
所属	経営学部 経営学科	職名	准教授	氏名	竹内 真登	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
オンライン授業への対応		2020年～		主に、オンデマンド授業・オンタイム授業に対して適切な授業実施方法を検討し、学生の能動的な学習を促す授業運営及び授業動画の作成。			
実証的研究及び論文作成		2018年～		演習(4年)で、現状調査や資料収集、定性調査などに基づく仮説設定、実証的な調査研究を用いた仮説の検証といった、仮説検証型の実証的調査研究を実施し、研究から得られた内容を論文とする一連の作業をアクティブラーニング方式で行っている。			
演習によるプレゼンテーション能力の向上		2017年～		演習(3年)において多数の個別発表・グループ発表を実施することで、パワーポイントの作成や活用、発表技術の向上を図っている。			
マーケティング理論や概念の復習の促進		2017年～		毎回授業時に前回授業の短時間の復習や解説を実施。反復学習を推進することで忘却を防ぐことを意図している。			
消費者行動を理解するための簡易的な実験の実施		2017年～		概念的、抽象的な内容について授業内で受講者参加型の簡易的な実験を実施している。実験に参加することで、受講者自身が仮想的に消費行動や購買行動を変化させることを体感し、理解を促す。			
マーケティング理論における事例を用いた説明		2017年～		マーケティング理論などの説明において企業の実務事例を用いて説明することで受講者の理解を深める。			
調査・データ分析能力の習得		2017年～		演習(3年)において調査実施・データ解析能力を育成する目的で、学生主体の仮想の商品企画活動を行い、調査票の作成、データ入力、多変量解析の実施をアクティブラーニング方式で行っている。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
ビジネスリサーチ実習Ⅱ向け講義資料(改善)		2021年～		以前作成した講義資料や分析手順書をより分かりやすくするための改善			
マーケティングⅠ講義資料(改善・オンライン対応)		2020年～		マーケティングⅠで使用するマーケティング論に関する投影・配布資料について資料の一部を改善。更にオンライン授業に対応した配布用、授業時用の資料に修正(見やすさ、穴埋め等の変更)を加えた。			
マーケティングⅡ講義資料(改善・オンライン対応)		2020年～		マーケティングⅡで使用する消費者行動に関する投影・配布資料について資料の一部を改善。更にオンライン授業に対応した配布用、授業時用の資料に修正(見やすさ、穴埋め等の変更)を加えた。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
2022年度の東北学院大学オープンキャンパスにて模擬講義		2022年7月30日		「マーケティングって何?ー消費者との関係と企業活動における役割ー」という題目で、オープンキャンパス参加の高校生に対して、マーケティングの定義、経営学の中でのマーケティングの位置づけなどを講義。			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							

E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)					
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)					
G. 学会における研究発表					
短期集中型のゲーム利用が行動的ロイヤルティに及ぼす影響:行動ログ指標を組み合わせた利用行動の分類	共同	2022年10月	第65回消費者行動研究コンファレンス(西南学院大学(ハイブリッド開催))	新美潤一郎, 竹内真登, 星野崇宏	
COVID-19によるメディア利用行動の変化:隠れマルコフモデルによるアプローチ	共同	2022年8月	日本行動計量学会 第50回大会(沖縄県市町村自治会館)	猪狩良介, 竹内真登	
Covid-19前後におけるメディア接触の変化:心理的・行動的要因による説明	共同	2022年5月	第64回消費者行動研究コンファレンス(オンライン)	竹内真登, 猪狩良介	
H. 翻訳(学術書や原典等)					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)					
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要		
科学研究費補助金 科学研究費 挑戦的研究(萌芽)	2021年度～2024年度	共同(研究分担者)			
科学研究費補助金 科学研究費 若手研究	2021年度～2024年度	個別(研究代表者)			
科学研究費補助金 科学研究費 基盤研究B	2019年度～2022年度	共同(研究分担者)	帰属理論に基づく新たな人的資源管理モデルの構築に向けた統合的研究		
科学研究費補助金 科学研究費 若手研究	2018年度～2021年度	個別(研究代表者)	行動経済学や心理学に基づく調査回答と事実の乖離の理解及び低減		
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動					
2021年9月～		日本行動計量学会 和文誌編集委員			
2016年7月～		日本行動計量学会 会員			
2015年6月～		日本商業学会 会員			
2014年12月～		行動経済学会 会員			
2013年6月～		日本消費者行動研究学会 会員			
2013年6月～		日本マーケティング・サイエンス学会 会員			
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動					
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等		
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動					

2022年度							
所属	経営学部 経営学科	職名	准教授	氏名	堀 治彦	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		学部生を中心とした専門教育科目及び基礎科目等の充実。					
今年度の進捗状況		着任年度のため、ベースとなる講義資料等の準備に多くのエフォートを割くことになったが、おおむね専門科目及び基礎科目については遅滞なく講義を進めることができた。 また、各担当科目について、高度専門職や公務員を志望する学生の期待に応答するメニューを提示することができたと感じる。					
来年度の進捗目標		次年度からは大学院も担当する予定であり、幅広い学生のニーズに応答できる専門知識の提示を目標とする。講義資料のブラッシュアップや各履修者の潜在的ニーズをより掘り起こすことができる講義の用意を行う予定である。					
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
「個人年金保険料控除制度改正」にかかる試験-退職所得控除の今日的意味を交えて	共同	2022年12月	2022年度12月保険学セミナー(AP大阪淀屋橋)	堀治彦、宮崎裕士			
WHIRLPOOL事件の分析-CFC税制をめぐるいくつかの考察	単独	2022年12月	国際取引法学会金融税制部会(オンライン(ZOOM))	堀治彦			
令和5年度税制改正に関する租研意見等に関する説明	単独	2022年10月	日本租税研究協会税制基本問題研究会(AP大阪茶屋町)	堀治彦			
租税法分野におけるキャリア形成について	単独	2022年9月	JAAS 研究環境改善WG 人文社会UNIT 勉強会(オンライン(ZOOM))	堀治彦			
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		国際課税の研究及び企業課税に関する研究の推進					
今年度の進捗状況		着任年度のため、すでに抱えていた論文原稿にエフォートを割くことが多かった(2022年度公表の論文等を参照)。この点から述べれば目標はある程度達成したと理解できる。他方で、判例報告やショートペーパーにおいて、既存の研究範囲を拡張する研究にもリーチすることができた。					
来年度の進捗目標		今年度にリーチした研究及び予算の獲得状況に応じて、ベースとなる研究範囲に加えて、新しい研究領域の理論的整理をより深くすすめていく。					
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
IV 学会等及び社会における主な活動			
2022年6月～		日本学術振興協会 理事(財務担当、法務担当)	
2021年～		日本税法学会 会員	
2021年～		租税法学会 会員	
2020年～		国際取引法学会 会員	
2016年～		税務会計研究学会 会員	
2012年～		International Fiscal Association 会員	
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	経営学部 経営学科	職名	講師	氏名	板橋 慶明	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
時事問題や国際情勢の検討も含めて、ミクロとマクロの両面からアプローチ(経営心理学Ⅱ)		2021年9月～		経営心理学Ⅱでは、リーダーシップや意思決定(情報の流れを含む)を主に扱っているが、これらのトピックと関連している時事問題や国際情勢もときどき取り上げ、ミクロ的視点とマクロ的視点の両面からアプローチして理解・考察できるようにサポートしている。			
経営心理学の理論と実践書の内容との関連についての取り組み(経営心理学Ⅰ)		2021年4月～		授業で経営心理に関する理論を扱うとともに、経営や組織の心理などに関係した実践書の内容にも取り組んでもらい、両者の間の関連性などについて検討・考察する機会を提供している。これにより、理論と実践の両面から経営心理を理解できるようになるようサポートしている。			
学生に対する(学習や大学生活に関する)個別相談		2020年9月～		大学における学習や大学生活について相談を必要とする学生に対して(オフィスアワーの枠とは別に)個別相談に応じている。自分が望んでいることと現状を確認し、目的達成の障害となっている事柄がある場合には、それについて共に考え、大学生活について適切な意思決定をし、行動を起こすことができるようサポートしている。			
発表担当グループによる円滑な演習進行を促進するためのサポート		2020年9月～		3,4年向け演習(ゼミ)において発表担当のグループが円滑にゼミを進行させ、ディスカッションを活性化することができるよう、ゼミ時間外に担当グループとのミーティングの時間を設けることによって、アドバイスやサポートを提供している。			
読解・作文の技法及び研究・発表の技法において、人間性の理解に資すると思われる幅広い視野からのアプローチをとった。		2020年5月～		学科共通の内容に加えて、人と組織に関して様々な視点から深く理解できるように、カウンセリング的視点(カウンセリング・マインド)、思春期の子供のコーチング、多様性の理解(異文化理解)といった多彩な内容を取り入れ、現代組織と現代社会において必要とされる人間性の理解と育成に関係した能力を高めることに資する内容とした。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
教育実習生への指導		2022年6月10日～2022年7月25日		教育実習生2名に対して事前指導(6/10、6/13)と訪問指導(7/6)、及び事後指導(7/15、7/25)を行った。訪問指導場所は、宮城県宮城第一高等学校。			
現在の課題・目標		<ul style="list-style-type: none"> ・マネジメントにおける心理的現象に関わる複数の要因に配慮しながら注意深く考える能力を高めてもらえるよう努力する。 ・レポート提出に関して、剽窃・盗用、コピペなどがよくないことを理解してもらい、自分の力で取り組むよう指導する。 ・現代の学生に対応するために必要な理解(学生相談等に必要理解)を深める。 ・コロナ下での授業の効果的なやり方について、模索・検討する。 					

<p>今年度の進捗状況</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・2年配当講義科目の試験を採点する際には、注意深く考える能力に注意しながら評価しているが、今年度も、前期科目(経営心理学Ⅰ)の試験をレポート試験とした。課題本に取り組むことを必須とし、(選択肢の中から選んだ)課題本の内容と授業の内容を結びつけながらレポートを作成するよう要求した。よく考えた内容のものやオリジナリティの見られるレポートもあったが、今年度は、深みのある分析や考察をしているレポートが減ったという点では、質的な低下が少し見られた。遠隔授業の部分では、授業に十分な時間をかけていないと見られる学生の数(比率)はやや減ったと見られる。よい取り組みをした学生については、考える能力と創造性を伸ばすのにある程度役立つものと見られる。後期科目(経営心理学Ⅱ)は、対面授業の形式で行い、試験は、論述の筆記試験として、その中で理論的構造を理解しながら自分の知識や考えをまとめる力を発揮してもらった。極少数の学生が、コロナ感染やその他の事情により筆記試験を受けることができなかったため、レポート試験に取り組んでもらった。レポート試験では、授業で学んだことをリーダーシップや意思決定の事例(事例の資料として、いくつかの動画を指定)に適用して考察し、考えをまとめて提出してもらった。また、社会における情報の偏りや流れの不自なさなどについても検討してもらった。 ・内容が濃い専門科目の単位取得に苦しむ学生もいるので、今後とも専門科目にしっかり取り組む必要性を伝えながら講義を進めることとする。 ・今年度は、前期の経営心理学Ⅰの授業(初期の遠隔授業)において、(ネットからの)剽窃・盗用を含む小レポート(毎回の授業の後に提出)を提出してくる学生の数がかかり減少した。剽窃・盗用については、参考資料や実際の事例なども紹介しながら注意喚起を行ったので、それがある程度効果を発揮したと思われる。学期末のレポート試験においても、剽窃・盗用が(ほぼ)なかった。後期の経営心理学Ⅱでは、基本的に対面授業であったため、欠席者だけが遠隔授業に取り組み小レポートを提出したが、剽窃・盗用は(ほぼ)なかった。 ・新型コロナ対応のための遠隔授業の部分においては、あまり時間をかけずに授業に取り組む方法を見つけ、それを採用する学生はまだ若干見られる。この点、受講の際の安易な姿勢がまだあると考えられる。しかし、剽窃・盗用は、減少したようなので、この点は、意識が高まったと思われる。遠隔授業の形態が続くことによって生じる問題について、対処や注意喚起を行ってきたが、より効果的に対応する方法を模索し続けたい。 				
<p>来年度の進捗目標</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・引き続き複数の重要な概念を結びつけながら注意深く考えたり、実際の状況や事例に理論を適用して考えることができるようになるよう指導する。社会における情報の偏りについても、理論を参考にしながら検討してもらうようにする。 ・剽窃・盗用についての注意喚起を継続し、これらの発生を低く抑える。 ・相談を必要とする学生に積極的に対応し、学生への対応能力を高めていきたい。 ・コロナ下での授業の効果的なやり方(授業への安易な取り組みを減らす方法も含めて)について、模索・検討していきたい。 				
<p>II 研究活動</p>					
<p>著書・論文等の名称</p>	<p>単著・共著の別</p>	<p>発行又は発表の年月(西暦)</p>	<p>発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称</p>	<p>編者・著者名</p>	<p>該当頁数</p>
<p>A. 学術書</p>					
<p>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</p>					
<p>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</p>					
<p>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</p>					
<p>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</p>					
<p>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</p>					
<p>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</p>					
<p>G. 学会における研究発表</p>					
<p>H. 翻訳(学術書や原典等)</p>					
<p>I. 特許</p>					
<p>現在の課題・目標</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・マズローの理論やマズローの理論と関係したマネジメント理論や心理学理論についてリサーチを進める(リサーチを進める環境を整える)。 ・上記と間接的に(直接・間接的に)関係している現代の若者(学生)の心理について理解を深める。 ・リサーチにおいて必要となる英語能力を高い水準に維持する。 ・安定した生活・研究環境の確保や自身の体調管理などに関して、状況を改善する。 				
<p>今年度の進捗状況</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・自身の研究・生活環境がまだ十分に整っていない中、コロナ対応の遠隔授業の部分が若干残り(対面授業になつてからも)、やや疲弊した。また、今年度は体調管理がやや困難となり、授業以外の事柄が、なかなか進展しなかった。自身の体調管理も含めて、何とかリサーチ等のための安定的状態を回復したいところである。 ・学生相談室への関与はなくなったため、それに関係した後援回等から基礎的・周辺の知識を得ることはできなかったが、その他のソースから知識を得ることはある程度できた。時事問題や国際情勢とそれらの背景にある心理的傾向などについては、今年度もある程度調べ続けることができた。 ・リスニングについては、テレビ番組やオンラインサイトなどを利用してブラッシュアップの継続をある程度できた。文献読破については、あまり進めることができなかった。 				

<p>来年度の進捗目標</p>	<p>・安定した生活・研究環境の確保や自身の体調管理などについて、状況を改善し、自身の生活・研究環境の回復を行い、リサーチを前進させる環境を整えたい。 ・現代社会や現代の若者(学生)を理解するための思想や理論について調べることを続けたい。また、時事問題や国際情勢にも目を向け、時代の流れの中での理論の役割について考えて行きたい。また、現代社会における情報の流れと偏りについても検討し(続け)たい。 ・英語のリスニングの機会をふやすとともに、文献読破量もある程度確保したい。</p>		
<p>Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</p>			
<p>競争的資金の名称</p>	<p>採用年度(西暦)</p>	<p>個別・共同の区分 共同の場合の役割分担</p>	<p>概要</p>
<p>Ⅳ 学会等及び社会における主な活動</p>			
<p>1997年9月～</p>		<p>日本経営学会会員 会員</p>	
<p>Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動</p>			
<p>展覧会・演奏会・競技会等の名称</p>	<p>場 所</p>	<p>開催年月日(西暦)</p>	<p>発表・展示等の内容等</p>
<p>現在の課題・目標</p>			
<p>今年度の進捗状況</p>			
<p>来年度の進捗目標</p>			
<p>Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動</p>			

2022年度							
所属	経営学部 経営学科	職名	講師	氏名	荻原 丈男	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概 要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		コロナ禍の影響で研究室でのオフィスワーカーが十分に活用できないと予想されるので、予めシラバスにメールアドレスを明記するのはもちろん、個別指導コレクションも活用して学生の疑問・質問等に対応していくこと。					
今年度の進捗状況		今年度は、個別指導コレクションも大いに活用して学生の疑問・質問等に対応できた。					
来年度の進捗目標		今年度で定年退職のため、来年度の進捗目標はない。					
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		サービス・マーケティング研究の発端として、「戦間期」のサービス・マーケティング研究に焦点を当ててみること。					
今年度の進捗状況		サービス・マーケティング研究前史として、「戦間期」のサービス・マーケティング研究を位置づけ直す予定だったが、コロナ禍等の影響もあって達成できなかった。					
来年度の進捗目標		今年度で定年退職のため、来年度の進捗目標はない。					
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概 要		
IV 学会等及び社会における主な活動							
2010年4月～				日本商品学会会員 会員			
2010年4月～				日本商業学会会員 会員			
2010年4月～				日本経営学会会員 会員			
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場 所	開催年月日(西暦)		発表・展示等の内容等		
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							

VI 学内における管理運営に関する諸活動

2022年度							
所属	経営学部 経営学科	職名	講師	氏名	窪田 嵩哉	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
事例・研究の紹介		2020年～		理論やフレームワークの学修を促すため、理論やフレームワークに対応する事例を紹介した。また、学習した理論が近年の研究でどのように扱われているかを紹介し、より深い学修に触れ、興味を持つことができるよう工夫した。			
学生が主体となってビジネスプランを考えることを中心とした授業の設計		2020年～		学生が主体となり、いちからビジネスプランを作成するよう、授業を設計・運営した。授業では実際に学生がインタビュー調査を行うなど、学生自身が収集した情報をもとにビジネスプランを作っていく過程が体験できるようにした。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
ビジネス・リサーチ実習 授業資料の作成と改善		2020年～					
起業論Ⅱ 授業資料の作成と改善		2020年～					
起業論Ⅰ 授業資料の作成と改善		2020年～					
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		学生からの質問が少ない。					
今年度の進捗状況		授業中に学生からの質問を受け付ける時間を設けた。					
来年度の進捗目標		学生からの積極的な質問を促すため、コミュニケーションや理解度に応じた説明を心がける。					
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
Upper Echelons Perspectiveを用いた管理会計研究の動向——トップ・マネジメント・チームの特性に着目した研究を加えた整理——		単著	2022年12月	東北学院大学経営学論集, 19		窪田嵩哉	pp.71-91
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		国際誌への掲載					
今年度の進捗状況		2本の論文を投稿した。現在査読対応中である。					
来年度の進捗目標		国際誌への投稿。					
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)		個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要	

科学研究費補助金 若手研究	2021年度～2023年度		<p>予算管理などの管理会計システムの導入と利用の状況は、各企業によって様々である。先行研究は、その違いを経営者の年齢や学歴、性格などの特性によって説明することを試みている。しかし、経験的証拠の蓄積には地理的な偏りが存在し、その知見は地域を超えた一般性を持つとは言い難い。そこで本研究は、日本企業を対象に質問紙調査を実施する。日本企業を対象とした質問紙調査から、経営者の特性と管理会計システムの導入・利用との関係を明らかにするのが、本研究の目的である。調査データの統計的解析を通じて、先行研究の理論的基礎について、日本での適用可能性を検証することができる。</p>
IV 学会等及び社会における主な活動			
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標	該当なし		
今年度の進捗状況	該当なし		
来年度の進捗目標	該当なし		
VI 学内における管理運営に関する諸活動			
入試委員を担当した。			

2022年度							
所属	経営学部 経営学科	職名	講師	氏名	宋 元旭	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		私は学生から時間をかけて予習復習が必要であるが、意味がある授業を行うことが目標です。そのため、授業内容の充実さと授業の難易度のバランスを如何にとるかを課題として考えています。					
今年度の進捗状況		今年度は着任1年目であり、新しい授業の立ち上げを行いました。それぞれの授業に明確なメッセージを作ると共に、それがうまく伝わるような授業構成に力を入れました。また、途中で授業形態が対面に切り替わるなど、多くの変化がありましたが、学生の混乱を最小限にできるような授業運営に努めました。					
来年度の進捗目標		来年度は休業になるため、教育活動に直接かわることができません。その代わりに、授業内容を充実させるため、コンテンツを増やしていきたいと思います。					
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		当面の課題は博士論文の提出です。その後は新しい研究テーマを見つけるため、新しいプロジェクトを立ち上げていきます。					
今年度の進捗状況		毎週サポートしてくれた先輩と後輩のおかげで、今年度は博士論文に大きな進展がありました。博士論文に必要な理論の整理と自分の研究の位置づけが明確に定まりました。					
来年度の進捗目標		固まった構成に従い、まずは博士論文の執筆に注力します。また、現在進行・計画中のプロジェクトは以下の通りです。 ①韓国ものづくり研修研究 韓国政府団体が行うものづくり研修について調査を行います。現在は担当者からオブザーバーとしての参加と参加企業調査に許可をもらった状況です。インタビュー調査とアンケート調査を今年度中にできるようにします。 ②スマートフォン開発と企業間関係研究 現在は定量分析のためのデータベース作りに入ったところです。データベースを完成し、仮説を検証した上、論文または学会発表ができるように準備します。 ③自動車産業サプライヤー調査 先行研究の追試とそこから出た疑問をインタビュー調査で解決するつもりです。データベースはできているので、特徴的な企業を洗い出し、インタビュー調査依頼を出してみます。 ④中国のバッテリー産業調査 現在中国企業へのインタビュー調査依頼ができ、夏に調査を行う予定です。ただし、産業に対する理解がまだ不十分なので、産業調査を通じ、問題意識と研究の方向性を固めていきます。					
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
IV 学会等及び社会における主な活動			
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			
知的財産委員会委員、人間対象研究審査委員会委員			

2022年度							
所属	経営学部 経営学科	職名	講師	氏名	棚橋 則子	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
学んだ理論の実践(日経STOCKリーグへの参加)		2016年4月～		演習(3年)では、前期で学んだ理論を実践するために、後期には日本経済新聞社主催・野村ホールディングス特別協賛の株式投資コンテスト「第23回日経STOCKリーグ」に参加している。今年は2チーム参加し、1チームが一次審査を通過した(1,112チーム中166チームが通過)。			
学習意欲のある学生に対する個別対応		2016年4月～		演習を履修している学生から、さらに発展した内容を学びたいという要望があった場合に、授業時間とは別に学習機会を設け、学生の学習機会を失わないようサポートを行っている。また、大学院への進学に関する相談にも応じている。			
知識を定着させるための授業設計		2016年4月～		講義形式の授業では、毎回の授業の冒頭で、前回学んだ分析手法に関するミニテストを実施し、授業後には授業内容確認テストに取り組むことで、知識を定着させる仕組みを構築している。また、授業内で計算演習を行う際には、教室内をくまなく巡回し、悩んでいる学生がいたら声をかけるなど、学生が直面している疑問点をそのままにしないよう即座に対応できるようにしている。また、研究・発表の技法や演習などの少人数授業では、リアクションペーパーを導入し、教員と学生間の双方向のやり取りを行っている。具体的には、毎回の授業の振り返りを行うとともに、学生の疑問点・学習上の悩みなどを即座に把握し、対応している。			
実際に企業が公表している財務諸表を教材として使用		2016年4月～		授業内で行う分析では、計算しやすいように作られた架空の財務諸表を用いるのではなく、実際に公表されている連結財務諸表(2022年度は森永乳業株式会社とキューピー株式会社の連結財務諸表を使用)を用いて行うことで、教科書の内容を抽象的に学ぶのではなく、現実との接点を得ることができるように授業を設計している。			
会計初学者を想定した授業構成とオンデマンド教材の工夫(会計学入門)		2016年4月～		会計学入門(1年次必修科目)受講者のほとんどが会計初学者であるため、簿記を一切使わず、なるべく学生がイメージしやすい身近な話題から話を始め、毎回の学習トピックへと繋げることを意識している。また、前回の授業の内容が身についたどうかを確認するための「ミニテスト(授業の冒頭を実施/期間中は何度でも受験可)」と、授業の内容をしっかりと理解できているかどうかを確認するための「授業内容確認テスト(授業後に実施)」を実施することで、知識の定着を図る仕組みを構築した。さらに、新型コロナウイルスの影響により、授業がオンデマンド方式になったことから、前述の授業の構成に加え、会計上の取引がよりイメージできるように、図やイラストを多く用いた動画を作成した。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		これまで行ってきた様々な改善点に加えて、より柔軟な授業構成や現在の学生に合わせた対応を行うことで、よりブラッシュアップされた教育を実施する。					
今年度の進捗状況		<p>昨年掲げた目標のうち、2と3については概ね達成できたと考えている。</p> <p>1) 演習科目では、問いかけを何度も行い、自分で考えるような環境を構築する。今年度は達成できなかった。</p> <p>2) これまでの授業で使っていた演習問題を新しいものに変更する。今年度、3年次の担当授業においては、演習問題を一新した。</p> <p>3) 新カリキュラムに向けて、授業の構成を考える。</p> <p>来年度から始動する新カリキュラムについて、自身が担当する授業の構成を、他の科目と合わせて考えることができた。実際に行ってみて、不都合が生じたら柔軟に対応していく予定である。</p>					
来年度の進捗目標		<p>1) 演習科目では、受講生に対して問いかけを何度も行い、自らの頭でしっかり考える環境を構築する。</p> <p>2) 新たに担当する授業において、効果的なmanabaの使い方を検討する。</p> <p>3) 1年が終わったら、新たに担当した授業の振り返りを行い、再度、授業構成などを検討する。</p>					
II 研究活動							

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月 (西暦)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)					
ファイナンス分野の理論から見た会計ベータ値研究	単著	2022年12月	東北学院大学経営学論集(19)	棚橋 則子	pp.93-112
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)					
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)					
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳(学術書や原典等)					
I. 特許					
現在の課題・目標	現在取得している科研費の研究を進めるとともに、次の科研費へ応募するためのテーマを見つけ、応募の準備を行う。				
今年度の進捗状況	<p>昨年掲げた目標の半分は達成できたと考えている。</p> <p>1) 現在進めているテーマのサーベイ論文を投稿する。今年度、投稿することができた。</p> <p>2) 科研費の研究を進める。サーベイ論文の執筆が終わったので、データベースを構築し、実証分析を行う予定である。</p> <p>3) 次の科研費へ応募するために、新たな研究テーマを見つける。現在、進行中である。</p>				
来年度の進捗目標	<p>1) 現在取得している科研費の研究を進める。</p> <p>2) 次の研究テーマに関するサーベイ論文を執筆し、投稿する。</p> <p>3) 科研費へ応募する。</p>				
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)					
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要		
科学研究費補助金 若手研究	2021年度～2022年度	個別(研究代表者)	<p>本研究課題の目的は、①日本の会計情報を用いて会計ベータ値を推定し、それがCAPMや3ファクターモデルなどのファクターベータよりもリターンの説明力を有するののか、②会計ベータ値を推定する際、全上場企業の集約利益ではなくマクロ経済指標を用いた場合でもリターンの説明力を有するののか、の2点を明らかにすることである。</p> <p>本研究課題の特徴は、会計ベータ値の推定の際に、①日本特有の経営者予想情報を用いる点、②全上場企業の集約利益の代わりに日本全体のマクロ経済指標を用いる点、である。本研究は、経営者予想利益や実績利益などの会計情報を用いて推定した会計ベータ値の有用性を示すことで、ディスクロージャー制度に対する政策的な含意を有する。また、誰でも入手可能な会計情報を用いた新たなリスク指標を提示することで、証券投資を行う投資者やアナリストに対して有益となる実証的証拠を提示する。</p>		
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動					
2021年9月～	日本会計研究学会機関誌編集委員会 幹事				
2018年9月～	東北防衛局入札監視委員会 委員				
2013年9月～	日本会計研究学会 会員				
2012年6月～	日本経済会計学会(旧 日本ディスクロージャー研究学会) 会員				
V 芸術分野や体育実技等における主な活動					

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			
美術部顧問			

教員業務・活動報告

法 学 部

法 律 学 科

2022年度							
所属	法学部 法律学科	職名	教授	氏名	阿部 未央	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
自主的な学習を促すための工夫		2022年4月1日～		テストのフィードバックとして、択一・論述問題のポイント解説を行うとともに、成績優秀者の論述を参考解答として公表している。			
学生の参加意欲を高める工夫		2022年4月1日～		特に演習では学生の希望を授業内容に反映させているほか、学生同士・学生教員間のコミュニケーションを図る機会を多く設けている。他大学との合同ゼミを通じて、論理的思考力、プレゼンテーション能力、質疑応答への対応力、チームワーク力などを鍛えている。			
授業内容の理解を促すための工夫		2022年4月1日～		毎回の授業の冒頭で、前回の復習を行い知識の定着を図るとともに、大事な点をレジメ・パワーポイントで強調して説明することで、学生の理解を高める工夫を行っている。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		学生の思考力、コミュニケーション能力およびプレゼンテーション能力を高める工夫をする。					
今年度の進捗状況		演習ではグループディスカッションやグループディベートを取り入れることで、学生の主体性・積極性を促すことができた。5大学の合同ゼミを企画・運営した。合同ゼミでは、人数が多いながらも学生たちがチームワークよく、中身の濃い報告・質疑応答を行うことができ、それらをサポートした。					
来年度の進捗目標		来年度も上記目標達成に向け継続して実施する。					
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		非正規雇用についての研究を継続して行う。					
今年度の進捗状況		非正規雇用の「無期転換制度」をはじめとする「雇用の終了」に関して、資料収集、論点の整理、裁判例の検討を行い、東北社会法研究会にて報告し、論文を執筆した。					
来年度の進捗目標		非正規雇用者の雇用の終了に関する論文をブラッシュアップする。また、イギリスの非正規雇用に関する立法状況、裁判例の検討を行い、研究会等での報告、論文の執筆を行う。					
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要		
科学研究費補助金 基盤研究(C)		2020年度～2022年度	(研究代表者)		社会法学関連		
IV 学会等及び社会における主な活動							

2022年11月	東北学院大学法学部 公開講座 講師		
2022年10月	出張講義 石巻高等学校(宮城県) 講師		
2022年4月～2024年3月	仙台市都市計画審議会委員		
2019年12月～	厚生労働省「精神障害の労災認定の基準に関する専門検討会」委員		
2017年6月～	外部講師 きらやかマネジメントスクール「経営と法律」		
2016年4月～	山形県行政不服審査会委員		
2015年3月～	山形県労働委員会公益委員		
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			
<ul style="list-style-type: none"> ・(全学)就職キャリア支援委員 ・(法学部)キャリアアップ支援委員 ・(法学部)広報委員 			

2022年度							
所属	法学部 法律学科	職名	教授	氏名	石垣 茂光	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
小テストの実施		2019年4月1日～		前期は200名前後の受講者に対して、5～6回小テストを行い、採点をした上で解説を付して返却した。 後期も、5回の小テストを実施し、解説をmanabaに掲載するとともに、点数を付して返却した。			
独自の授業評価アンケートの実施		2018年4月1日～		授業効果を図るため、manabaを用いて、理解したこと、いまだ不十分な個所をあげさせ、次回の授業において解説をするなど、授業に反映させている。また、授業感想等を自由記述させることによって、学生がどのようなことを考えているかを知り、それに答えたり、新たな工夫をするなどしている。			
レジュメの配布		2018年4月1日～		毎回分のレジュメを作成し、事前にmanabaに掲載している。また、そのレジュメに記載されている練習問題について事前に考えさせ、授業で解説をし、manabaで今一度解答を書かせ、理解度を確認している。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要			
IV 学会等及び社会における主な活動							
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等			

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	
VI 学内における管理運営に関する諸活動	

2022年度							
所属	法学部 法律学科	職名	嘱託教授	氏名	井上 義比古	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概 要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
学都仙台コンソーシアム サテライトキャンパス公開講座講師(単位互換提供科目)「社会情勢論」			2008年4月1日～				
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要				
IV 学会等及び社会における主な活動							
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等				
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
VI 学内における管理運営に関する諸活動							

2022年度							
所属	法学部 法律学科	職名	教授	氏名	遠藤 隆幸	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
卒論作成とその準備		2022年4月1日～2023年3月1日		卒論作成に向けて、勉強会および合宿を実施した。またその成果を公開の卒論発表会で公表した。			
manabaを介した双方向授業の実践		2020年～		manabaを用いて各種課題の採点基準・講評を示した。またオンライン上の判例・文献情報をmanabaにリンクし収集を指示した。また、適宜チャットツールを用い、課題の提出・講評・採点をおこなうことで、講義時間帯以外でも双方向的やりとりができるよう努めた。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		制度設計論としての民法学のありかた					
今年度の進捗状況		「性的マイノリティと法律学」に関する考察を深める取り組みを行った。理論的含意を学生が十分に受け止めることができたかどうかは、今後の演習により追証する必要があるが、学習効果として一定程度の意義があったのではないかと思う。					
来年度の進捗目標		フィールドワークと文献学習との接合を図る作業を行いたい。					
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
『逐条ガイド相続法：民法882条-1050条』	共著	2022年11月	日本加除出版	本山敦, 青竹美佳, 梅澤彩, 遠藤隆幸, 大島梨沙, 佐々木健, 羽生香織, 松久和彦, 水野貴浩, 宮本誠子	pp.163-214		
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
離婚原因としての精神病	単著	2023年2月	大村敦志＝沖野眞己編『民法判例百選Ⅲ(第3版)』	遠藤隆幸	pp.30-31		
家族法判例総評2022年【第1期】	単著	2022年7月	戸籍時報(827)	遠藤隆幸	pp.15-25		
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		(1)後見制度と児童福祉法の協働 (2)相続選択制度の現代的課題					
今年度の進捗状況		(1)に関する小論を公表することができた以外は、大きな進捗はなかった。(2)は(1)の遅れに伴い、ほとんど成果を出せずにいる。					
来年度の進捗目標		(1)は科研の最終年度でもあるため、比較法研究について何らかの成果を出したい。(2)は長期スパンで研究計画の組みなおしも検討する。					

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
科学研究費補助金 科学研究費基盤研究(c)	2019年度～	個別(研究代表者)	
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動			
2022年4月～		社会福祉法人宮城県社会福祉協議会運営適正化委員会 運営監視合議体委員長代理	
2020年12月～		中国山東省青島市仲裁委員会 外国人仲裁員	
2019年4月～		仙台弁護士会懲戒委員 委員	
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動			
法律学科長			

2022年度							
所属	法学部 法律学科	職名	教授	氏名	大窪 誠	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概 要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		担当する授業科目で使用するレジュメ、授業動画、小テスト問題等の課題を作成する。					
今年度の進捗状況		今年度に担当した民法総則Ⅱ、法曹養成実習Ⅱ、演習一部、演習二部、基礎演習Ⅰ、読解・作文の技法(以上、法学部)、民法Ⅰ、民法Ⅱ(以上、経済学部)のレジュメ、講義科目の授業動画、小テスト問題等の課題を作成した。					
来年度の進捗目標		来年度に担当する債権法各論Ⅰ、法曹養成実習Ⅱ、演習二部、基礎演習Ⅰ、リーガル・リサーチ(以上、法学部)、民法Ⅰ、民法Ⅱ(以上、経済学部)のレジュメ、小テスト問題、オンライン授業の場合にはその科目の講義動画を、それぞれ作成する。					
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
不動産所有者の意思に基づかない賃貸人たる地位の帰属－民法605条の2第1項以外のケースを対象として－	単著	2023年2月	東北学院法学(83)	大窪誠	pp.1-97		
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		・不動産賃貸借に関する諸問題を検討し、論文を完成させる。					
今年度の進捗状況		①論文「不動産所有者の意思に基づかない賃貸人たる地位の帰属－民法605条の2第1項以外のケースを対象として－」を、東北学院法学83号1～97頁(2023年2月)に掲載した。 ②20世紀初頭のドイツにおいて状態債務説が展開し、ライヒ裁判所の判例が形成される過程でパウル・エルトマンが果たした役割について検討する論文を9割程度完成させた(2023年11月に法律文化社から発行予定の記念論文集に掲載する予定)。					
来年度の進捗目標		①日本評論社から出版予定の債権法改正講座に契約上の地位の移転についての論文を掲載する(初校終了)。 ②20世紀初頭のドイツにおいて状態債務説が展開し、ライヒ裁判所の判例が形成される過程でパウル・エルトマンが果たした役割について検討した論文を完成させる(2023年11月に法律文化社から発行予定の記念論文集に掲載する予定)。 ③ドイツにおける「売買は賃貸借を破らず」の原則をめぐる通説である法定効果説の展開をまとめた論文を完成させて、東北学院法学84号に掲載する。					
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要				

IV 学会等及び社会における主な活動			
1989年～		日本私法学会 会員	
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			
①全学関係 ・法学研究科法律学専攻主任 ・学術研究会評議委員会委員 ・教員資格審査委員会委員 ・AO面接委員 ・中央図書館委員会委員 ・全学図書館委員会委員 ②法学部関係 ・法学部点検・評価委員会委員 ・法学部改革FD委員会委員 ・東北学院法学編集委員 ・法学部キャリアアップ支援委員会委員 ・法学部研究会委員会委員 ・法学研究資料室委員 ・卒業試験実施委員会委員			

2022年度							
所属	法学部 法律学科	職名	嘱託教授	氏名	菊地 雄介	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
学習支援システムmanabaのレポート機能を使った各回授業内容の概略レポート提出による学修事項定着の促進		2021年4月1日～					
学習事項の定着確認と全体的な授業計画との関連性の明示		2015年4月1日～		毎回の授業の冒頭に前回の授業内容を要約して説明し、また学期全体の授業計画進行の流れと関連づけて説明することで、各回の授業の位置づけを逐一確認させる。			
異なる授業項目の下で共通する事項を意識化させることによる相互参照的学習の活用		2015年4月1日～		以前の関連する授業回の説明をあえて引き合いに出し、相互参照的な効果を意識させることで、教育項目の多角的な学習を可能にするよう工夫している。			
各学期授業計画の明示と各回授業進行予定の具体的な説明		2013年4月1日～		各学期の冒頭に各回授業計画の進行予定を詳しく順を追って説明し、学生の自主学習が円滑に進捗するよう工夫している。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
『レクチャー会社法[第3版]』(法律文化社)		2022年4月25日		『レクチャー会社法[第3版]』(法律文化社)			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		<p>① 教師として何を教えるかより、受講生が何を学んだかを毎回の授業テーマとして意識する。</p> <p>② 授業の進行について行けない受講生が出ないよう各授業回の連携関係を毎回の冒頭で確認するとともに、manabaのレポート機能を活用して受講生に各回の重要事項まとめを記録させることで、各回の事後学修に繋げさせるようにする。</p> <p>③ 講義形式の授業でも、可能な限り多くの学生に語りかけ、反応を確かめることで、理解度や理解困難な箇所を推し量るよう努める。</p> <p>④ 法律科目の授業で六法を持ち合わせない他学部生のために、スマホやタブレットによる「e-Gov」(電子政府の法令検索)システムの活用を促し、教科書の記述と法令上の根拠とを照らし合わせる習慣の涵養を図る。</p>					
今年度の進捗状況		<p>①② 毎回の授業の冒頭と終了時に、各回の授業内容と前回まで及び次回からの授業内容との接続関係について簡略に説明することで、各授業回の内容理解について連続性を持たせるよう工夫する。</p> <p>③ 受講している学生の表情や動きに目を配り、理解度や疑問点等の把握に努める。</p> <p>④ 授業終了時の簡易レポートに参照条文の情報を盛り込ませ、事後学修の成果を盛り込んだ自習ノートにその内容を貼り付けさせることで、学修事項を視覚的にも意識させるようにしている。</p>					
来年度の進捗目標		<p>①② 教育支援システムmanabaのレポート機能を活用して、各授業回の終了時に小レポート「本日の重要ポイントまとめ」を作成させ、毎回の授業後に行われる事後学修への接続を意識させることで、各自が毎回の授業で得た学修事項について自己確認の機会を与える。</p> <p>③ 従来からの努力を継続する。</p> <p>④ 授業に臨む際にPCやタブレット・スマホ等の情報機器を必須のものと明示して、教科書や参考文献の活字情報と、授業で得た口頭情報、情報検索で得られた電子情報を総合的に活用する習慣を身につけさせる。</p>					
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
レクチャー会社法第3版『レクチャー会社法[第3版]』		共著	2022年4月	法律文化社		菊地雄介 草間秀樹 横田尚昌 吉行幾真 菊田秀雄 黒野葉子	pp.1-67
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							

F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)			
G. 学会における研究発表			
H. 翻訳(学術書や原典等)			
I. 特許			
現在の課題・目標	① 自ら編集と執筆にあたる会社法教科書のアップデート作業に向けた準備を進める。 ② 会社法分野の論文テーマに関する掘り下げを続ける。 ③ 自ら多数の対象条文について執筆を担当した会社法コンメンタールのゲラ出校を待って校正作業を済ませ、刊行にまでこぎ着ける。 ④ 研究者としてのスタート時からの研究テーマである取引決済システムの法について、手形小切手制度がその任を終えた現在において、体系的なシステム再構築の発想を深化させる。		
今年度の進捗状況	① 法改正の状況と判例形成の現状について一定の成果を得た。 ③ 出版社からの校正ゲラ到達が遅れているため、待機を続けている。 ②④ 検討継続中である。		
来年度の進捗目標	① 年度内に改訂作業の大枠と新たな執筆陣および執筆担当の割り振りについて出版社との間で合意を取りまとめる。 ②④ 検討作業を継続する。		
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動			
2022年10月～		社会保険診療報酬支払基金宮城審査運営協議会 委員	
2022年10月～		社会保険診療報酬支払基金宮城審査運営協議会委員 運営参加・支援	
2021年10月～2022年9月		社会保険診療報酬支払基金宮城支部 運営委員	
2021年10月～2022年9月		社会保険診療報酬支払基金宮城支部運営委員 運営参加・支援	
2018年4月～		東北イノベーション人材育成コンソーシアム運営会議 委員	
2018年4月～		東北大学出版会評議員会 評議員	
2014年10月～		日本海法学会理事 会員	
2014年10月～		日本海法学会会員 会員	
2014年10月～		東北地方社会保険医療協議会宮城部会 委員・部長	
2014年10月～		東北地方社会保険医療協議会 委員・会長	
1999年4月～		東北大学商法研究会 会員	
1987年7月～		現代企業法研究会(名古屋大学内) 会員	
1987年7月～		現代企業法研究会会員(名古屋大学内)(現代企業法研究会会員(名古屋大学内))	
1984年10月～		金融法学会会員 会員	
1983年4月～		日本比較法研究所(中央大学内) 嘱託研究所員	
1983年4月～		日本比較法研究所嘱託研究所員(中央大学内)(日本比較法研究所嘱託研究所員(中央大学内))	
1981年10月～		日本私法学会会員 会員	
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動			
学長特別補佐(コンプライアンス担当)、内部質保証委員会委員、大学財政専門委員会小委員会委員、学校法人東北学院公益通報者保護委員会委員、体育会洋弓部顧問として、学内各組織の管理運営に当たった。			

2022年度							
所属	法学部 法律学科	職名	教授	氏名	木下 淑恵	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
授業準備、予習の促進		2022年10月1日～		空欄を設けた授業用レジュメを授業前日までにmanabaを通して配付し、授業の準備と予習を促している。			
学習した事項の整理と記憶への定着、授業理解の促進		2020年9月～		講義科目では、毎回、授業のはじめに、その回の全体の構成と達成目標を明示する。授業の最後には、その回の要点まとめを行い、さらに、その回の復習としてふりかえりの小テストを行う。また、次の回の冒頭で、前の回の小テストについて詳しく解説する。また、配付レジュメには空欄をとるところを設け、意識的な学習と復習を促している。			
学習した事項についての知識の定着		2020年4月～		講義科目では、半期に3～5回、それまでの複数回の講義内容について小テストを行っている。解答時には各自のノートを振り返ることにより、自らの知識を再確認する機会としている。また、小テスト終了後に重要ポイントの解説を行うほか、必要に応じて多くの受講生が間違えた問題について、次の回の冒頭であらためて解説している。			
授業理解の促進		2020年4月～		込み入っていて理解しにくいと考えられる事柄については、その時期のニュースと関連づけて説明するほか、写真や図表を用いたり、また、実例を紹介するなど、できるだけ具体性をもたせた解説を行っている。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
海外法律情報 住宅供給の責任をめぐる動き: スウェーデン	単著	2023年2月	有斐閣, ジュリスト(1580)	木下淑恵	pp.55-55		
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
IV 学会等及び社会における主な活動			
2018年～		北ヨーロッパ学会 理事	
2017年～		宮城県国民健康保険運営協議会 委員	
2016年～		宮城県後期高齢者医療広域連合 情報公開・個人情報保護審査会 委員	
2015年～		宮城県議会 情報公開審査会 委員	
2002年～		北ヨーロッパ学会 会員	
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	法学部 法律学科	職名	教授	氏名	黒田 秀治	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
アクティブラーニングおよび双方向授業の実施		2021年4月～		manabaを用いることによって、工学部でのTGベーシック「市民社会を生きる」では、テーマの設定、予習の励行、グループごとの討論と結論の取り纏めによって、学生の能動的学修を促すように努めた。			
詳細なプリントの作成と論点整理		2020年4月27日～		国際法Ⅰ、同Ⅱの講義では、すでに学習した国内法の知識と関連づけながら、国際法と国内法の異同、国際法の規範的分類および国際先例などを提示したプリントを配付し、授業の進捗と理解の定着という二律背反的な講義課題の調整を図った。			
学生の関心を惹起させるテーマの選択と学内施設の利用		2020年4月27日～		「演習一部」および「演習二部」では、可能な限り受講者の意思を尊重し、先例やテーマの選択は彼らに委ねる一方で、随時相談に乗り、レポートの添削を行うなど、受講生の自主性と適切な指導とのバランスをとることを心がけた。			
学習内容の記憶への定着と授業理解の促進		2020年4月27日～		国際法Ⅰ、同Ⅱ、および国際経済法の講義では、冒頭で前回の復習と概略を説明し、年間を通じた講義のタイムスケジュールの中で、当日の授業の位置づけを理解させるように努めた。			
英米文献を読むための基礎的作法・文献渉猟方法の学習		2020年4月27日～		「外国書購読」では、英米文献を購読する過程で、日本と異なる独特の引用スタイルや文献渉猟方法を教授し、英語・法律学の学習のみならず、英米文献の学習のためのリテラシーの教育に努めた。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
2022年度「地域のための大学公開講座」の講師		2022年6月8日		「国際法からみた第二次世界大戦後の国際経済関係」と題した講演の中で、国際法が国際的経済関係、とりわけ通商関係を中心にどのように対応していたかを歴史的に解説し、現在問題になっている米中経済摩擦を国際法上の論点を素描した。			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							

来年度の進捗目標			
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動			
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	法学部 法律学科	職名	教授	氏名	近藤 雄大	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
ゼミ内模擬裁判の実施		2022年10月13日～2023年1月5日		ゼミ生の学力向上を目的として演習一部で模擬裁判を実施した。ゼミ生に民事の事案を提示し、原告班、被告班、裁判官班に分かれ、それぞれの役割に応じて準備をし、授業日を公判期日として事件ごとに議論を行った。最終日に裁判官班のメンバーが判決文の読み上げ、最終的な勝敗を決することになった。			
レポートの講評とフォローアップ動画の配信		2022年4月11日～		最終レポートの解説動画を作成し配信をした。その際の資料として、「採点基準」と「解答例」を作成した。これらを前提としてレポートの結果に疑問をもった学生や評価に納得がいけない学生に対して詳細に解説した回答書を作成し交付した。			
学習した内容の定着を図る		2022年4月11日～		毎回の授業の初めに、前回の重要点について復習をおこなっている。			
ゼミ内法律討論会の実施		2021年10月21日～2022年11月25日		ゼミ生を4チームに分け、討論会用の問題を配布し、資料収集、立論原稿の作成、質問の検討、質疑応答への対策の準備をチームごとに行い、討論会当日には3人の卒業生を審査員として招き、10分での立論、それに対する質疑応答を実施した。			
学習した内容の定着を図る		2021年4月11日～		毎回の授業の初めに、前回の重要点について復習をおこなっている。			
レポートの講評とフォローアップ動画の配信		2021年4月11日～		2回の小レポートおよび最終レポートの解説動画を作成し配信をした。その際の資料として、「採点基準」と「解答例」を作成した。これらを前提としてレポートの結果に疑問をもった学生や評価に納得がいけない学生に対して詳細に解説した回答書を作成し交付した。			
レポートの講評とフォローアップ動画の配信		2020年5月7日～		最終レポートの解説動画を作成し配信をした。その際の資料として、「採点基準」と「解答例」を作成した。これらを前提としてレポートの結果に疑問をもった学生や評価に納得がいけない学生に対して詳細に解説した回答書を作成し交付した。			
学習した内容の定着を図る		2020年5月7日～		毎回の授業の初めに、前回の重要点について復習をおこなっている。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
授業の補助教材としてのレジュメの作成		2022年4月11日		毎回の授業の初めに、前回の重要点について復習をおこなっている。			
授業の補助教材としてのレジュメの作成		2021年4月11日～		毎回の授業の初めに、前回の重要点について復習をおこなっている。			
授業の補助教材としてのレジュメの作成		2020年5月7日～		授業の内容を理解しやすくするため、毎回補助教材としてレジュメを作成し、配付している。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
公務員試験等対策勉強会の実施		2022年9月30日～2022年12月23日		3年生向けに公務員試験等を目指す学生を対象に勉強会を実施した。後期に実施し、債権法分野を中心とした。将来的な公務員試験や各種資格試験の合格を目標として問題演習および解説を行った。			
ランチョンセミナーの企画および講師		2020年11月25日～		法学部主催のランチョンセミナーを今年も引き続き実施した。内容を企画して他の先生方の協力も仰ぎ開催した。			
現在の課題・目標		<ul style="list-style-type: none"> ・授業の理解を深めるために、イメージしやすい具体例をあげて説明するように心がける。 ・アクティブ・ラーニングの要素をできる限り取り入れる。 ・評価に不満や疑義のある学生に納得してもらうために、採点基準を明確化し、それに基づいて不満や疑義のある学生に対して十分な説明を行う。 ・演習 I・II は連続受講してもらうことにより、卒業までの2年間にわたり単位修得、就職など学生生活全般について相談や指導を行う。 ・将来の目標達成のために意欲ある学生の学習をサポートし、モチベーションの維持を図るため継続的に勉強会を実施する。 					

今年度の進捗状況	<ul style="list-style-type: none"> ・関係図や補足資料を配布するなどして、学生が具体的なイメージを浮かべて考えられるような工夫をした。 ・最終レポートの解説動画を配信し、その上で評価に疑問のある学生については、manabaを利用して採点基準をもとに詳細な解説を記した回答を交付し、その中でなぜその点数なのかを説明した。その結果、ほとんどの学生は納得していた。 ・本年度の卒業生は、全員が演習Ⅰと演習Ⅱを連続受講し、ほとんどの学生が進路を決定して卒業することができた。また、新4年生もほとんどが連続受講する予定であり、単位修得や就職活動の相談に応じている。 ・学生のキャリアアップおよび将来の目標達成に向けた基礎固めとなるように公務員試験対策の実践的な練習として勉強会を開催した。
来年度の進捗目標	<ul style="list-style-type: none"> ・一部の学生からは難しかったとの声もあったので、分かりやすいとの評価が多くなるように、具体例を用いてイメージしやすく、また分かりやすい説明をしていく。 ・次年度以降も、本年度と同様の対応を続けていこうと考えているが、採点基準についてはより明確化し、学生への説明が分かりやすくなるようにする。 ・法学検定試験をはじめ各種資格試験への合格者が増加するように、勉強会の実施のみならず個別の進路相談や学習相談にも応じるようにする。 ・新3年生への履修指導を4月中に実施し、単位修得についての意識を高め、また就職についての具体的なイメージをもたせる。また、新4年生には引き続き単位修得と就職活動についてのフォローをする。

II 研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)					
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)					
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳(学術書や原典等)					
I. 特許					

現在の課題・目標	<ul style="list-style-type: none"> ・法学部での共同研究プロジェクトを進める。 ・一部無効に関する論文を執筆する。
今年度の進捗状況	<ul style="list-style-type: none"> ・先に発表した論文に続く内容の論稿を執筆するために、必要な裁判例や評釈類を収集した。 ・今までに執筆した論文以降について発表された論文などのフォローを始め、資料の収集を始めたので進捗があった。
来年度の進捗目標	<ul style="list-style-type: none"> ・今回の論稿の続きとなる内容についての論文作成を目指し、資料収集や検討をおこなう。 ・年度内に論文を公表できるようにする。

III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
----------	----------	------------------------	----

IV 学会等及び社会における主な活動

2008年1月～	日本消費者法学会 会員
2004年4月～	比較法学会 会員
2004年4月～	日本私法学会 会員

V 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

VI 学内における管理運営に関する諸活動



2022年度							
所属	法学部 法律学科	職名	嘱託教授	氏名	齋藤 誠	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
「東北学院の歴史」の授業内容・方法の改善と「東北学院の歴史 授業ノート(2022年)」の作成		2021年9月1日～2023年1月31日		文学部と教養学部の学科教養科目「東北学院の歴史」について、2021年度の授業をふまえ、授業内容・方法を改善し、授業で使用する「授業ノート」を改訂した。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
「東北学院の歴史 授業ノート(2022年)」		2022年9月		文学部と教養学部の学科教養科目「東北学院の歴史」で使用する「授業ノート」を改訂した。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
『東北学院の歴史』による自校史教育の実践—グループワークを活用した授業とその効果—	共著	2023年3月	東北学院史資料センター年報, 8	齋藤誠, 伊藤大介	pp.1-8		
東北学院大学入試の歴史(1) 1949～1983	単著	2023年3月	東北学院史資料センター年報, 8	齋藤誠	pp.1-8		
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要				
IV 学会等及び社会における主な活動							
2014年4月～		公立大学法人宮城大学外部委員 委員					
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等				
現在の課題・目標							

今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	
VI 学内における管理運営に関する諸活動	

2022年度							
所属	法学部 法律学科	職名	教授	氏名	佐々木 くみ	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概 要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
日評ベーシックシリーズ『憲法Ⅰ[第2版]』『憲法Ⅱ[第2版]』(日本評論社)		2021年～		問題を噛み砕き、平易な語りかけをすることで、憲法の基礎知識について初学者でも理解できることを目指している。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
夫婦同氏制の憲法24条適合性審査に関する覚書		単著	2022年5月	信山社, 憲法研究, 11	佐々木くみ	pp.87-100	
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
憲法		単著	2022年12月	問題演習基本七法2022	佐々木くみ	pp.1-26	
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要			
IV 学会等及び社会における主な活動							
2018年4月～			宮城県労働委員会委員 委員				
2015年10月～			多賀城市情報公開・個人情報保護審査会委員 委員				
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							

来年度の進捗目標	
VI 学内における管理運営に関する諸活動	

2022年度							
所属	法学部 法律学科	職名	教授	氏名	佐藤 英世	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
レジュメの作成と授業評価		2020年4月1日～		講義科目である「行政法総論Ⅰ」、「行政法総論Ⅱ」、「法曹養成実習Ⅲ」、「日本法と外国法」について、学生が理解を深めることができるようにレジュメを作成し、配布している。行政法総論Ⅰ・Ⅱでは、レジュメをWeb上でも公開している。また、法学部の演習科目、大学院の担当科目を含め、すべての担当授業で授業評価を行っている。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
教材の作成と配布		2018年4月～		講義科目については、教材を作成し、学生に配布している。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要		
科学研究費補助金 科学研究費助成事業		2020年度～2022年度	共同(研究分担者)		『公的文書の管理・保存におけるアーキビストとジェネラリストの役割に関する比較研究』		
IV 学会等及び社会における主な活動							
2021年7月～				仙台市個人情報保護審議会 委員			
2021年3月～				多賀城市入札監視委員会 委員長			
2020年8月～				宮城県個人情報保護審査会 委員			
2020年2月～				大崎市都市計画税検討会議 会長			

2017年4月～	亙理町入札監視委員会 委員長
2013年4月～	柴田町固定資産評価審査委員会 委員長
2007年5月～	白石市情報公開・個人情報保護審査会 委員長
2004年4月～	東北弁護士連合会弁護士任官候補者推薦委員会 委員
2003年10月～	大崎市情報公開審査会 委員
1985年4月～	日本公法学会会員 会員

V 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

VI 学内における管理運営に関する諸活動

--

2022年度							
所属	法学部 法律学科	職名	教授	氏名	佐藤 優希	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
ゼミ論文の製作		2020年4月1日～		演習一部では判例研究論文, 演習二部ではゼミ論文の執筆および提出を単位修得の要件としている。とくに演習二部では, 卒業論文としてポリシーある論文を執筆させ, 報告会・討論会をしたうえで, ゼミ論文集にすることで, 法学部で学んだことの集大成ができるよう丁寧な指導を心掛けている。本年度は演習二部ゼミ生12名が論文執筆し, ゼミ論文集「東北学院法学研究第8号」を発行した。			
民事模擬裁判の実践		2020年4月1日～		裁判官, 原告, 被告に分けて, 該当事者のみに証拠等の資料を配布し, 口頭弁論から判決の言渡しまでを行う。法科大学院用の民事裁判DVDを視聴し, 裁判傍聴をした後で, 民事裁判で行われる答弁書の作成, 主張, 証拠の提出, 判決文の作成等を自分たちが行うことにより実践能力が高まることを目的としている。			
演習におけるフィールドワークの導入		2020年4月1日～		裁判傍聴や裁判所見学などを行い, 裁判実務に対する理解を高める助力を行っている。			
演習におけるディベートの実施		2020年4月1日～		演習においては, 時事問題や法律問題について, 報告者のレジュメによる報告に基づき議論を行うことで, 報告の仕方や効果的なプレゼン方法を学び, ディベート力を向上させるための実践練習を行っている。今年度の前期は, zoomで行ない, 後期は対面で行なったが, いつもと変わらないレベルで行うことができた。			
manabaのフル活用		2020年4月1日～		manabaを通じて, 講義動画や視聴させ, レジュメを配布し, 小テスト機能やレポート機能を利用して, 小テストおよび論述形式の課題小テストを実施した。今年度は, manabaなしでは授業を行えなかったこともあり, フル活用して, 学生の便宜を図るように努めた。			
講義ノートの作成		2020年4月1日～		講義および演習では, 毎回講義ノートを作成し, 授業進行速度の適否や学生の理解度などを記録することにより, 授業の改善を図っている。			
小テスト問題による授業理解の定着		2020年4月1日～		毎回の講義の最後に司法試験問題や司法書士問題から授業のまとめとなる問題を作成し, 小テスト問題を実施した。次回の講義動画の冒頭で, 前回の小テスト問題の解答および解説を加えることにより, 学生自身が講義内容をどれだけ理解できたかを確認させ, 知識の定着を図っている。			
板書を講義動画に取り入れた授業理解の促進		2020年4月1日～		通常の講義であれば, 裁判例や重要事項などを体系的に説明するために行う板書を, 手書きで書きPDF化したり, 図や記号などを多用したレジュメを作成して, 文字だけではなく視覚的にも, 学生の授業理解の促進を図った講義動画の作成を心掛けた。			
事例を多用した講義による授業理解の促進		2020年4月1日～		オンデマンドによる授業であるため, より丁寧な授業内容を心がけている。具体的事例を多用し説明することで, 抽象的な法律学を身近に感じさせ, 理解を深める工夫を行っている。			
講義動画と詳細なレジュメの配布による授業理解の促進		2020年4月1日～		オンデマンドでの授業であるため, 講義動画を作成し, アップした。同時に, 講義内容の重要ポイント, 判例の解説, 小テスト問題をまとめた, これまでよりも詳細なレジュメも作成し, アップして, 授業理解の促進を図る工夫を行った。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
市民社会を生きるで利用するレジュメおよび講義動画		2020年4月1日～		毎回の授業で, 学生に考えてもらい, 資料収集してもらい, 考えをまとめてレポート作成および提出してもらうため, 授業の前半は, 問題提起に関する基礎的な解説および資料で作成したレジュメを準備し, それに沿った講義動画で授業を行う。アクティブラーニング科目であるため, 学生へのレスポンスなどの資料を準備して丁寧に対応した。			
民事執行法講義におけるレジュメ		2020年4月1日～		毎回の講義の際に, 講義内容の重要ポイント, 板書の図解をPDF化したもの, 判例, 小テスト問題をA4で10枚ほどにまとめたレジュメを配布し, それらを見ながら講義動画を視聴してもらい, 授業理解の促進を図る工夫を行っている。			

民事訴訟法Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの講義におけるレジュメ	2020年4月1日～	毎回の講義の際に、講義内容の重要ポイント、板書の図解をPDF化したもの、判例、小テスト問題などをB4で10枚ほどにまとめたレジュメを配布し、それらを見ながら講義動画を視聴してもらい、授業理解の促進を図る工夫を行っている。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4. その他教育活動上特記すべき事項					
体育会ライフル射撃部部長としての指導	2020年4月1日～	体育会ライフル射撃部の部長として、サポートおよび教育面での指導を行っている。コロナ禍での活動について、慎重に行うよう学生と連絡をとりながら、平常時より手厚い指導を心がけた。			
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
II 研究活動					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月 (西暦)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)					
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)					
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳(学術書や原典等)					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)					
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要		
IV 学会等及び社会における主な活動					
2013年4月～	民事手続法研究会会員 委員				
2004年4月～	九州法学会会員 会員				
1999年4月～	日本民事訴訟法学会会員 会員				
V 芸術分野や体育実技等における主な活動					
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等		
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
VI 学内における管理運営に関する諸活動					

2022年度							
所属	法学部 法律学科	職名	嘱託教授	氏名	陶久 利彦	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		講義科目については、学生に教授する内容の体系的整理を図る一方、具体的問題解決が可能になるように教材を更に検討する。演習科目については、学年ごとの内容と課題を再検討し、学年が上がるごとに徐々に難易度を上げ、積み重ねの成果を実感できるような課題設定と授業内容を工夫する。					
今年度の進捗状況		コロナ禍への対応が前期途中から徐々に緩和され、対面授業回数が増えた。とはいえ、前期科目に関して言えば依然として殆どがオンライン授業だったようだ。そのため、私の対面授業にあっては可能な限り受講者同士の話し合いや議論の時間を取り、意見交換の機会を増やすように試みた。演習科目についても対面授業の機会が極めて少ない受講生ばかりだったので、教員は課題を投げかける役目だけに専念し、受講生相互の議論が活性化されるのを期待した。功罪相半ばするが、各学年で身につけてほしい基本的力養成機会の提供が幾分おろそかになったかもしれない。					
来年度の進捗目標		①専門科目については、私の学問体系構想にあったような授業内容を精緻化する。受講者数にもよるが、同時にアクティブラーニングの機会を増やすようにする。②演習科目については、受講者数や受講者の関心を見定めながら、各学年で身につけてほしい基本的力の修得機会を適切に提供したい。					
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		①2023年末までに知人の記念論文集への寄稿という宿題があるので、その執筆を最優先にする。②2022年度に予定していた学内紀要への寄稿を、1年遅れで実現する。①とは異なるテーマである。③これまでの論文をまとめ、『出生前診断と中絶』という著書を公刊する準備に取り掛かる。					
今年度の進捗状況		①については、徐々に考えがまとまりつつある。「責任」について論じるべく、準備を進めている。②については、原稿の大枠は既に書き上げているものの、論文の意義自体を今一度見定めたい。③については、一冊の書物にするには尚論ずべき問題が残っているので、その確認と対処法を思案しているところである。					
来年度の進捗目標		上記の①については、2023年待つまでに原稿を書き上げる。②については、「ルールの意義」に関する論考を寄稿する。③については、書物の大枠を埋め、尚欠けている部分の補充方法を見定める。					
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要		
IV 学会等及び社会における主な活動							
1977年11月～			日本法哲学会 会員				
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			
嘱託教授であるため、専任教員たちの学内行政活動を後方から支えるよう努めてきた。			

2022年度							
所属	法学部 法律学科	職名	教授	氏名	辻田 芳幸	大学院の授業 担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概 要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
シラバスの充実		2021年4月1日～		授業で取り扱う項目を箇条書きで記載して、受講者が予習復習をしやすいように工夫している。			
小テストの実施		2021年4月1日～		講義内容に関する知識の定着具合を確認するために、毎回の講義終了時に15分程度の小テストを実施している。			
小テストの講評と追加的解説		2021年4月1日～		小テストにおいてとくに正解者が少なかった設問に関して追加的解説を行い、講義内容を振り返るとともにどのようにして正解に至るかの考え方を示している。			
参考資料の配布		2021年4月1日～		新聞記事や裁判例などを積極的に利用し、受講生が講義内容と具体的紛争とを関連づけて理解できるよう配慮している。			
講義レジメの作成および使用		2021年4月1日～		制度の趣旨、論理の構造や展開に重点を置いた講義レジメを作成し、使用している。			
講義レジメおよび参考資料の事前配布		2021年4月1日～		全ての講義科目において、講義内容をまとめた講義レジメをあらかじめ電子データで配信している。			
manabaの積極的利用		2021年4月1日～		小テストを行う際にASAHI Netのmanabaを積極的に利用し、学生が復習として問題を再検討できるようにしている。また、講義レジメを蔵置して学生が予習や復習を効率的に行えるよう工夫している。			
小テストの実施		2019年4月1日～		講義内容に関する知識の定着具合を確認するために、毎回の講義終了時に15分程度の小テストを実施している。			
小テストの講評と追加的解説		2019年4月1日～		小テストにおいてとくに正解者が少なかった設問に関して追加的解説を行い、講義内容を振り返るとともにどのようにして正解に至るかの考え方を示している。			
参考資料の配布		2019年4月1日～		新聞記事や裁判例などを積極的に利用し、受講生が講義内容と具体的紛争とを関連づけて理解できるよう配慮している。			
講義レジメの作成および使用		2019年4月1日～		制度の趣旨、論理の構造や展開に重点を置いた講義レジメを作成し、使用している。			
講義レジメおよび参考資料の事前配布		2019年4月1日～		全ての講義科目において、講義内容をまとめた講義レジメをあらかじめ電子データで配信している。			
シラバスの充実		2019年4月1日～		授業で取り扱う項目を箇条書きで記載して、受講者が予習復習をしやすいように工夫している。			
manabaの積極的利用		2019年4月1日～		小テストを行う際にASAHI Netのmanabaを積極的に利用し、学生が復習として問題を再検討できるようにしている。また、講義レジメを蔵置して学生が予習や復習を効率的に行えるよう工夫している。			
小テストの実施		2017年4月1日～		講義内容に関する知識の定着具合を確認するために、毎回の講義終了時に15分程度の小テストを実施している。			
小テストの講評と追加的解説		2017年4月1日～		小テストにおいてとくに正解者が少なかった設問に関して追加的解説を行い、講義内容を振り返るとともにどのようにして正解に至るかの考え方を示している。			
参考資料の配布		2017年4月1日～		新聞記事や裁判例などを積極的に利用し、受講生が講義内容と具体的紛争とを関連づけて理解できるよう配慮している。			
講義レジメの作成および使用		2017年4月1日～		制度の趣旨、論理の構造や展開に重点を置いた講義レジメを作成し、使用している。			
講義レジメおよび参考資料の事前配布		2017年4月1日～		全ての講義科目において、講義内容をまとめた講義レジメをあらかじめ電子データで配信している。			
シラバスの充実		2017年4月1日～		授業で取り扱う項目を箇条書きで記載して、受講者が予習復習をしやすいように工夫している。			

manabaの積極的利用	2017年4月1日～	小テストを行う際にASAHI Netのmanabaを積極的に利用し、学生が復習として問題を再検討できるようにしている。また、講義レジメを蔵置して学生が予習や復習を効率的に行えるよう工夫している。			
2. 作成した教科書、教材、参考書					
法学講義レジメ集	2019年4月1日～	講義内容の理解を助けるために作成した補助教材である。制度趣旨や論理構造が理解できるように、図を用いて説明している。また、社会問題をときには数値で理解できるように、統計を示して説明している。さらに、法学初学者である受講生が法学により親しめるように、レジメの一部を空欄にし受講生自身が記入しながら学習できるようにしている。			
知的財産法2講義レジメ集	2019年4月1日～	講義内容の理解を助けるために作成した補助教材である。制度趣旨や論理構造が理解できるように、図を用いて説明している。			
知的財産法1講義レジメ集	2019年4月1日～	講義内容の理解を助けるために作成した補助教材である。制度趣旨や論理構造が理解できるように、図を用いて説明している。			
法学講義レジメ集	2017年4月1日～	講義内容の理解を助けるために作成した補助教材である。制度趣旨や論理構造が理解できるように、図を用いて説明している。また、社会問題をときには数値で理解できるように、統計を示して説明している。さらに、法学初学者である受講生が法学により親しめるように、レジメの一部を空欄にし受講生自身が記入しながら学習できるようにしている。			
知的財産法2講義レジメ集	2017年4月1日～	講義内容の理解を助けるために作成した補助教材である。制度趣旨や論理構造が理解できるように、図を用いて説明している。			
知的財産法1講義レジメ集	2017年4月1日～	講義内容の理解を助けるために作成した補助教材である。制度趣旨や論理構造が理解できるように、図を用いて説明している。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4. その他教育活動上特記すべき事項					
高校生(受験生)向けの模擬講義の実施(山形県立米沢高等学校)	2022年10月19日				
高校生(受験生)向けの模擬講義の実施(静岡理工科大学星陵)	2022年6月15日	オンラインで			
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
II 研究活動					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)					
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)					
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳(学術書や原典等)					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)					

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
IV 学会等及び社会における主な活動			
1996年6月～		工業所有権法学会会員 会員	
1994年10月～		日本私法学会会員 会員	
1992年5月～		著作権法学会会員 会員	
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	法学部 法律学科	職名	教授	氏名	富田 真	大学院の授業 担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概 要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・ 共著 の別	発行又は発表の年月 (西暦)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要			
IV 学会等及び社会における主な活動							
2014年7月～			日本民主法律家協会 理事				
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
VI 学内における管理運営に関する諸活動							

2022年度							
所属	法学部 法律学科	職名	嘱託教授	氏名	中村 雄一	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概 要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
授業レジュメの全面改定(とくに「刑法総論Ⅰ及びⅡ」)		2021年4月1日～		2年ぶりに担当した「刑法総論Ⅰ」及び「同Ⅱ」につき、レジュメを全面改定した。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要			
IV 学会等及び社会における主な活動							
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
VI 学内における管理運営に関する諸活動							

2022年度							
所属	法学部 法律学科	職名	教授	氏名	三須 拓也	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
メールおよびmanabaでの掲示板を通じた授業改善。		2017年4月1日～		講義科目「国際政治論I・II」「現代の政治」「クリティカル・シンキング」「平和学」で実施。講義の際に、学生からの改善要望を募ることを心がけている。数回の小テスト、中間課題を実施し、修学の成果を測るとともに、学生の習熟程度に応じた講義内容の微修正を行った。			
小テスト、リアクション・ペーパーを通じた授業改善。		2017年4月1日～		講義科目「国際政治論I・II」「現代の政治」「クリティカル・シンキング」「平和学」で実施。講義の際に、学生からの改善要望を募ることを心がけている。小テストないし中間課題を課し、講義の効果を測るとともに、学生の習熟程度に応じた講義内容の微修正を行った。			
映像を用いた学習効果の向上		2017年4月1日～		講義科目「国際政治論I・II」「現代の政治」「クリティカル・シンキング」「平和学」において実施。図説だけでは説明しにくい箇所を動画を用いつつ説明したところ、以下の改善がはかれた。(1)学生からのリアクション・ペーパー等で、理解できなかった箇所を具体的に理解できた、とのコメントを貰った。(2)また映像データの一部をインターネットなどで閲覧できるようにし、学生の自学自習に役立たせることができた。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
講義用プリント、パワーポイントデータの作成。		2019年4月1日～		講義科目「国際政治論I・II」「現代の政治」「クリティカル・シンキング」「平和学」において実践。講義で使用するプリントを毎回準備、配布している。また講義で使ったパワーポイントのプレゼンテーション・データをmanaba上にアップロードし、講義内容の復習に役立てて貰えるようにした。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
文章作成、就職活動支援		2017年4月1日～		主に4年生向け演習で実施。希望者に限定されるが、就職活動中の学生の文章力向上の指導を行った。具体的には、エントリーシートや志望理由書などのチェックを行った。狙いは学生が自分の言葉で志望動機などをまとめられるようにすることにある。副次的効果として、教員が学生の就職活動の進捗状況を知ることで、適切な指導を行えた。			
演習での個別研究の実施、指導。		2017年4月1日～		3年生、4年生向け演習科目で実施。東北学院大学学生懸賞論文の応募に向けて、学生が主体となった研究活動を実施した。			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
デタントから新冷戦へ: グローバル化する世界と揺らぐ国際秩序『法律文化社』	共著	2022年4月	法律文化社	益田 実, 齋藤 嘉臣, 三宅 康之, 妹尾 哲志, 橋口 豊, 青野 利彦, 山本 健, 鳥潟 優子, 三須 拓也, 池田 亮, 清水 聡, 細田 晴子, 芝崎 祐典, 小川 浩之	pp.161-183		
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							

D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)					
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)					
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)					
G. 学会における研究発表					
サラ・ロレンツィーニ『グローバル開発史』について	単独	2022年11月	立命館大学人文科学研究所オンライン研究会(京都)	三須拓也, 山本健	
H. 翻訳(学術書や原典等)					
グローバル開発史—もう一つの冷戦—『名古屋大学出版会』	共著	2022年6月	名古屋大学出版会	三須拓也, 山本健	pp.1-384
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)					
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概 要	
科学研究費補助金 基盤研究(A)	2021年度～2024年度	共同(研究分担者)		従来の国際関係史研究では、冷戦期に生じた様々な対立や紛争の大半は、いわゆる「冷戦の終焉」すなわち米ソ対立の解消あるいはソ連の消滅とともに自然に解消したと考える傾向が強い。これに対して本研究は冷戦の終焉を米ソ対立の終焉とのみ同一視するのではなく、様々な次元で生じた「複数の冷戦の終焉」の集合体として捉え、各国の公文書史料を用いたマルチアーカイバル手法に基づく実証的分析によって、「冷戦は世界の異なる場所でいつどのように終焉を迎え、その過程でどのような変化をもたらしたのか」という問いに答えることを目指す。	
IV 学会等及び社会における主な活動					
2004年12月～			日本アメリカ史学会 会員		
1996年6月～			日本国際政治政治学会 会員		
V 芸術分野や体育実技等における主な活動					
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)		発表・展示等の内容等	
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
VI 学内における管理運営に関する諸活動					

2022年度							
所属	法学部 法律学科	職名	教授	氏名	宮川 基	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
特殊詐欺と非行助長行為の禁止	単著	2022年10月	東北学院法学(82)	宮川基	pp.141-186		
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
民主主義と憲法—選挙にみる鈴木義男(講演録)—	単著	2023年2月	東北学院法学(83)	宮川基	pp.99-115		
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
最判令和4年4月18日刑集76巻4号191頁	単独	2022年12月	令和4年度第2回刑事法判例研究会(仙台)	宮川基			
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要			
IV 学会等及び社会における主な活動							
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							

VI 学内における管理運営に関する諸活動

2022年度							
所属	法学部 法律学科	職名	教授	氏名	横田 尚昌	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
出前授業		2022年11月10日～2022年11月10日					
出前授業		2022年8月19日～2022年8月19日					
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
(判批)東京地判平成30年3月20日:保険契約者の未成年後見人である営業職員が被後見人を代理して締結した生命保険契約の効力		単著	2022年8月	公益財団法人 生命保険文化センター, 保険事例研究会レポート(352)	横田尚昌	pp.1-11	
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要			
IV 学会等及び社会における主な活動							
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							

VI 学内における管理運営に関する諸活動

2022年度								
所属	法学部 法律学科	職名	准教授	氏名	三條 秀夫	大学院の授業担当の有無	無	
I 教育活動								
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要				
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)								
専門用語、基礎概念習得の促進		2020年4月1日～		専門用語とその意味内容を理解させるために、その都度概説を加えている。さらに理解を深めるために、受講生に対して自分で専門の辞書やテキストで調べたことを次回の講義出席の際にレポートとして提出することを求めている。				
学習した事項へ記憶の定着と授業内容理解の促進		2020年4月1日～		毎回の講義終了時に、講義まとめとして内容要点を整理しつつ再度説明を加えている。				
2. 作成した教科書、教材、参考書								
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等								
4. その他教育活動上特記すべき事項								
現在の課題・目標		社会事象についての知的関心が薄い受講生が多いので、まずは問題関心を喚起するように努める。そのうえで、知的探求の方法を教授し、多様な見解にふれることができるように多くの学修資料を提示する。						
今年度の進捗状況		コロナ禍にあって遠隔講義を実施することが多くあったが、インターネット上の多様な情報を利用して知的刺激を与えることができた。						
来年度の進捗目標								
II 研究活動								
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)		発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書								
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)								
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)								
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文								
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)								
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)								
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)								
G. 学会における研究発表								
H. 翻訳(学術書や原典等)								
I. 特許								
現在の課題・目標		II 研究活動-現在の課題・目標 ①「法と文化(社会)」との関係について、理論的に整理する。 ②「人間として生きる権利」としての人権について、それが人々の日常生活に関わる事柄であることを理論的に整理する。						
今年度の進捗状況		①については、「法文化論」の講義において、さまざまな社会文化のあり方と法との関係を整合的に捉える試みを継続している。 ②学外より依頼された各種「人権研修会」において、理論的に整理して説明する一定の形を掴みつつある。						
来年度の進捗目標								
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)								
競争的資金の名称		採用年度(西暦)		個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要		
IV 学会等及び社会における主な活動								
2015年4月～				宮城県人権教育指導者研修事業(企画委員、研修講師) 委員				

2015年4月～	宮城県気仙沼市情報公開・個人情報保護審査委員会(会長) 委員		
1996年5月～	宮城県人権教育指導者養成事業・企画推進委員会('97年より委員長) 委員		
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	法学部 法律学科	職名	准教授	氏名	玉井 裕貴	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
学習内容の理解促進と興味関心を高める。		2021年～		報道等で話題となった事件や、教科書事例などを多用し、概念や制度の理解の促進を図っている。また、法技術的側面の強い内容の説明に際しては、ビジュアルでの資料提供の方法を工夫したり、学生がメモをする上での留意点などを説明した上で解説を行うなど、精確に理解することができるよう工夫している。また、各単元終了毎に復習問題を作成・配信し、各自自習できるような工夫を行った。			
入門講義における興味・関心の喚起		2021年～		「法学部生入門」では、法学学習をスタートさせる学生がスムーズに学習を進行させることができるよう、上級生がつまづいている内容についてインタビューを行った上で、それを重点的にフォローする形で、講義を構築した。 「民事手続法入門」では、学問分野の全体像を示すという講義目的に加え、3年次以降の関連科目にスムーズに取り組むことができるよう、言葉の定義などは、特に入念に講義するようにし、多くの受講生が着実にステップを踏むことが出来るよう留意した。また、モデルケースや、訴状サンプル、フローチャートなどを多用し、受講生の興味・関心を喚起することに努めた。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
『法学部生入門—法学学習メソッドを学ぶ[第2版]』(自費出版、2022年)		2022年		本年度担当する「法学部生入門」の教科書を改版した。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
2022年度第1回法学部・法学研究科FD研修会における報告		2022年11月14日		法学部・法学研究科FD研修会において、新科目「リーガル・リサーチ」の運営にかかわる報告を行った。			
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		①学生とのコミュニケーションを充実させ、講義へフィードバックさせる。 ②学生が興味・関心を持つような授業の設計変更を行う。 ③演習科目の実践内容をより充実させる。					
今年度の進捗状況		①多様な学生との交流機会に恵まれ、学生ニーズの把握と講義への反映が大きく進んだ。 ②講義内容の見直しと、教材の更新を行い、一定の成果が出た。 ③専門演習ではやり方を大きく変え、学生のモチベーション向上に向けた枠組み作りを開始できた。					
来年度の進捗目標		①キャンパス移動を好機として、オフィスアワーの充実などを通じて、学生の教育活動に活かす。 ②今年度に引き続き、学習内容の見直しに努め、教材の刷新につなげる。 ③演習科目の新たな枠組みを始動させ、活動の充実を図る。					
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
倒産事件一支払不能における主張立証: 裁判例・学説の現状『一般条項の理論・実務・判例・第2巻・応用編』	共著	2023年2月	勁草書房	玉井裕貴	pp.168-181		
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
破産債権査定手続でビットコイン債権に対する異議の撤回をした管財人が移行後の再生手続において同債権を債権者が有しない旨を主張することの信義則違反該当性 [東京地方裁判所令和3年12月23日判決(LEX/DB25603062)]	単著	2022年9月	新・判例解説Watch, 倒産法(67)	玉井 裕貴	pp.1-4		

日本における暗号資産と倒産法上の問題	単著	2022年4月	法学論文集(법학논문집), 46(1)	玉井裕貴	pp.283
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)					
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)					
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)					
G. 学会における研究発表					
裁判外事業再生への裁判所関与のあり方	単独	2023年1月	東京大学民事訴訟法研究会(東京大学)	玉井 裕貴	
倒産手続における暗号資産の取扱い	単独	2022年7月	日本銀行金融研究所主催セミナー(東京)	玉井 裕貴	
H. 翻訳(学術書や原典等)					
I. 特許					
現在の課題・目標	①主たる研究分野に関する学会報告を行う。 ②対外的な研究者との学術上の交流を進める。 ③研究領域の拡大・強化を図る。				
今年度の進捗状況	①学会報告に向けた複数回の報告を実施し、内容を深化させた。 ②全国規模の研究会に積極的に参加し、研究活動の人的広がりを大きく広げた。 ③主たる研究テーマについて大きな進捗が見られた。別テーマでの研究でも報告機会が増加した。				
来年度の進捗目標	①学会報告を有意義なものとし、成果を論文にまとめる。 ②今年度以上に、研究会に積極的に参加し、研究をすすめる。 ③これまで集積した資料を分析し、成果につながるよう研究を進める。				
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)					
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概 要	
IV 学会等及び社会における主な活動					
2019年4月～		利府町 個人情報保護審査会委員			
2019年4月～		利府町 情報公開審査会委員			
V 芸術分野や体育実技等における主な活動					
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等		
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
VI 学内における管理運営に関する諸活動					
土樋情報処理センター主任					

2022年度							
所属	法学部 法律学科	職名	准教授	氏名	内藤 裕貴	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
授業範囲の明示ならびに学生が自己学習するに際しての配布資料への配慮		2022年4月1日～2023年3月31日		各回の授業の冒頭で、授業で取り扱う範囲を明示するとともに、会社法学の論理的思考を整理する際に一助となるような資料を受講生に配布し、学生が自主学習しやすいように工夫した。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
最新裁判例研究 商法 退職慰労金支給に係る株主総会議題の取締役会への不上程と取締役の対第三者責任[福岡地判令和4.3.1]	単著	2022年12月	法学セミナー, 67(12)	内藤裕貴	pp.122-123		
商事裁判例研究 株主総会決議要件を「出席株主全員の同意」に加重した定款規定の効力[東京高判令和3.4.22]	単著	2022年9月	金融・商事判例(1649)	内藤裕貴	pp.2-7		
ドイツ株式会社法における取締役のリスク早期認識システム構築義務:「2018年度研究助成」助成金給付対象調査研究成果	単著	2022年7月	監査研究, 48(7)	内藤裕貴	pp.7-12		
最新裁判例研究 商法(会社法) 一部の取締役によってなされた互選による代表取締役の選定の効力[東京高判令和3.8.19]	単著	2022年6月	日本評論社, 法学セミナー, 67(6)	内藤裕貴	pp.128-129		
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要			

科学研究費補助金 若手研究	2021年度～2023年度	(研究代表者)	
IV 学会等及び社会における主な活動			
2021年4月～	仙台北税務署 国税モニター		
2019年5月～	日本海法学会会員 会員		
2016年4月～	日本私法学会会員 会員		
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	法学部 法律学科	職名	准教授	氏名	羽田 さゆり	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
ゼミ活動において学習させる工夫		2020年4月1日～		基礎演習ⅠⅡ・演習一部において、学生が発表を行う前に事前に時間をかけて説明をし、レジュメの例を示し模擬発表も行うことによって、発表すべき内容や方法について理解を深めさせるように努めている。			
学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進		2020年4月1日～		レジュメを毎回作成している。授業の冒頭にその回の概略を記載して示し、前回の復習を必ず行い、レジュメの最後には、授業終了後にその回のまとめを自習できるよう穴埋め式の箇所を設けている。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
講義用レジュメ・動画		2020年4月1日～		担当講義のレジュメを作成し、パワーポイントによるスライドを動画にして毎回作成し上映している。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
高校への出張講義		2022年11月12日		会津高等学校1・2年生を相手性、若者のインターネットトラブルの法的解説と対処方法・トラブル予防方法について出張講義を行った。			
公務員講座の講師		2022年9月20日～2023年1月20日		法学部主催「国家試験・公務員試験受験講座」の「フォローアップ講座・民法1」の講師を務めた(全5回)。			
大学説明会の講師		2022年7月14日		東北学院高校2年生を対象に、大学の概要・法学部の学修内容・東北学院大学法学部の特徴や入試について解説した。			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
人権と私法上の成人保護『これからの民法・消費者法(Ⅰ) 河上正二先生古稀記念』		単訳	2023年3月	信山社, 1	羽田さゆり	pp.131-149	
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
IV 学会等及び社会における主な活動			
2021年5月～		仙台市社会福祉協議会・契約締結委員会 委員(学識経験者)	
2021年1月～		宮城県青少年問題協議会 委員	
2019年11月～		日本政治法律学会会員(理事) 会員	
1996年10月～		日本私法学会 会員	
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	法学部 法律学科	職名	准教授	氏名	松浦 陽子	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
英語学習の成果としての翻訳の作成(外国書講読)		2022年4月1日～		「外国書講読」において学生の英語学習の成果を翻訳としてまとめた。			
学習発表の機会を通じた4年間の研究の意識化(演習科目)		2021年4月～		一つの論点や事例研究について、文献講読とプレゼンテーション・ディベート・ディスカッションなどの学習発表を組み合わせることにより、研究を深め、かつ、参加者同士の議論を促している。これらの作業をとおして、基礎演習ⅠおよびⅡでは基本的な専門教育の土台を作り、演習一部では国際法事例研究、演習二部では各自の興味に合わせた国際法研究を進めた。			
演習二部における卒業レポート指導とそのレポート集の作成		2021年4月～		演習二部においては、学生個人々の国際法研究を深めるために、卒業レポートの作成を指導し、完成させた。最終的には卒業レポート集にまとめた。			
学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進(講義科目)		2021年4月～		授業の冒頭で前回の学習とのつながりを確認し、新たな項目へと進むことにより、学習事項の学問的位置づけを明らかにする。その上で学習事項を時事問題や身近な例に例えて説明することで、記憶への定着と理解の促進を図っている。今年度は特に、responの機能を用いて、授業内でアンケートをとり、それについて国際法の視点で解説することで、各回の理解を促進する機会を増やした。			
レジュメ配布による学習事項の確認(講義科目)		2021年4月～		半期の授業内容に関するレジュメをmanaba上にアップロードし、学生がいつでも使用可能な状態にした。レジュメは、参考文献を参照できるように注を付し、学ぶ意欲のある学生が自発的に学習しやすいよう配慮している。また、時事問題を積極的に取り入れ、新たな国際問題を国際法の視点で学習できるよう配慮している。			
授業における小テストによる理解度の確認(講義科目)		2021年4月～		今年度はほぼ対面で実施することができたが、昨年度蓄積した小テストを隔週で実施し、知識の確認と定着を促した。小テストに基づく評価を導入することにより、それぞれの学生の理解度に応じた教育と評価ができるよう配慮している。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
小テストの作成およびその解説動画の作成		2021年4月～		授業科目において知識の確認および定着に寄与するため、小テストを作成した。また、その小テストに関し、動画による解説動画を作成し、manaba上で公開した。学生は随時それを確認でき、自身の知識を確認することができる。			
講義で使用するレジュメ等		2020年4月～		レジュメには毎回の講義概要を掲載し、重要項目を穴埋めにするなどの工夫をしている。また、毎年情報を更新し、脚注を付けて典拠および参考文献を明示することで、学生が主体的に調べやすいよう配慮している。このレジュメはmanaba course上で配布している。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		<ul style="list-style-type: none"> ①授業やゼミでは、わかりやすく、かつ、学術的意味のある説明を心がける。また、一次資料を重視し、資料(客観的事実)と評価の区別を学生に学ばせる機会を多く設ける。 ②学生の学問への主体性を引き出すために、授業方法を工夫する。 ③授業時間外での学生との学習に関するコミュニケーションのため、オフィスアワーにかかわらず学生の相談に乗る。manaba courseの効率的な利用を進める。 					
今年度の進捗状況		<ul style="list-style-type: none"> ①についてはある程度実施できた。 ②については、依然と同様に、時事問題に照らして学生に理解しやすい説明を心掛けた。 ③オフィスアワーにかかわらず、研究室には学生が訪ねてきて、専門書を貸したり、質問に答えたりすることができた。今後もこういう機会を大切にしたい。 					
来年度の進捗目標		<ul style="list-style-type: none"> ①学生に、教科書を始めとして専門書などの書籍を読ませる工夫をしたい。 ②一次資料を重視する授業を実施したい。 					
II 研究活動							

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月 (西暦)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)					
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)					
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)					
書評 木原正樹『国際犯罪の指導者処罰—国際刑事裁判所の理論と実践を中心に』	単著	2022年9月	日本評論社, 法の科学(53)	松浦 陽子	pp.166-170
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳(学術書や原典等)					
I. 特許					
現在の課題・目標	① 国際法における災害支援を研究する。 ② 国際法上の感染症対応における国際人権法の課題を研究する。				
今年度の進捗状況	①については、2023年3月28日に研究会で報告した。今後論文として公表する予定である。 ②については、資料収集と分析を継続している。2023年3月19日に研究ノートとして提出した。				
来年度の進捗目標	①について、論文として公表する。 ②については、研究ノートが2023年度9月頃に公表される予定である。さらに研究を進め、論文として公表する。				
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)					
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要		
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動					
2020年～	日本海洋法研究会 会員				
2018年～	国際法協会日本支部 会員				
2012年～	日本国際経済法学会 会員				
2000年～	世界法学会 会員				
1999年～	民主主義科学者協会 法律部会 会員				
1999年～	国際法学会 会員				
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動					
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等		
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動					
法学部広報委員会委員長 法学部基幹構想委員会委員 法学部改革FD検討委員会委員 法学部共同研究プロジェクトメンバー					

2022年度							
所属	法学部 法律学科	職名	講師	氏名	井坂 正宏	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概 要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要			
IV 学会等及び社会における主な活動							
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
VI 学内における管理運営に関する諸活動							

2022年度							
所属	法学部 法律学科	職名	講師	氏名	松原 俊介	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
学習内容の定着		2021年4月～		毎回の講義で復習問題を掲載し、次の講義の初めに解説を行った。また、manabaを用いて複数回小テストを実施して、記憶の定着を図った。			
講義に関するアンケートの実施		2021年4月～		定期的にmanabaを用いてアンケートを実施して講義に対する要望を聞き、講義に反映させることを心掛けた。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
講義レジュメの作成		2021年4月～		毎回の講義で教科書を補うレジュメを配布した。レジュメには空欄をもうけることでオンデマンド授業への参加を促した。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
平等判例における救済判断の再検討	単著	2022年11月	敬文堂, 憲法理論研究会編『次世代の課題と憲法学(憲法理論叢書30)』	松原俊介	pp.103-115		
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
同性婚問題からみる平等の救済方法	単著	2023年2月	日本評論社, 法学セミナー(818)	松原俊介	pp.18-23		
[最新裁判例研究] 憲法 同性間の婚姻を認めない民法及び戸籍法の諸規定の合憲性 [大阪地判令和4・6・20裁判所ウェブサイト]	単著	2022年10月	日本評論社, 法学セミナー(813)	松原俊介	pp.118-119		
[最新裁判例研究] 憲法 性同一性障害特例法における未成年の子なし要件の合憲性[最三決令和3・11・30裁時1780号1頁]	単著	2022年4月	日本評論社, 法学セミナー(807)	松原俊介	pp.136-137		
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
短答式試験[憲法]解説	単著	2022年10月	日本評論社, 司法試験の問題と解説2022	松原俊介	pp.21-28		
G. 学会における研究発表							
同性婚をめぐる訴訟と憲法上の救済	単独	2023年2月	法政策研究会(第21回)(宮城県, 日本)	松原俊介			
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							

今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
科学研究費補助金 基盤研究(C)	2022年度～2024年度	個別(研究代表者)	
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動			
2023年1月	公民部会講演会 講師		
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動			

教員業務・活動報告

工 学 部

機 械 知 能 工 学 科

電 気 電 子 工 学 科

環 境 建 設 工 学 科

情 報 基 盤 工 学 科

2022年度							
所属	工学部 機械知能工学科	職名	教授	氏名	魚橋 慶子	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
機器運用資料の提示によるシステム制御工学教育		2019年9月20日～		工学部機械知能工学科3年生対象「システム制御工学」の授業において、システム制御理論を実際に利用し機器を動かす様子を説明した資料を、何度か履修者へ提示した。計算や公式の応用を理解できるよう、工夫した。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
工学基礎教育センター相談員		2016年4月～2023年3月		工学基礎教育センター相談員を務めた。数学・物理の質問に応じ、学生の学力を高めた。			
現在の課題・目標		<ul style="list-style-type: none"> ●「常微分方程式」について、教科書・問題集の利用のさせ方をさらに工夫し学力向上を図る。 ●「システム制御工学」の内容応用例を履修者へ紹介しながら、授業を行う。 ●「微分積分学I・II」の予習・復習内容を今年度よりも具体的に提示し、履修者の学力向上を図る 					
今年度の進捗状況		<ul style="list-style-type: none"> ●「常微分方程式」の予習・復習内容を、昨年度よりも具体的に助言し、今年度も毎回の授業時に提出させた。履修者の学習習慣がついた模様である。 ●「システム制御工学」の内容応用例の紹介を行った。日ごろの研究成果や学生相談室業務と関連する応用例に興味を持ってもらえた。 ●「微分積分学I・II」の予習・復習内容を、授業回数分まとめてではなく、昨年度と同様に毎回の授業時に提出させた。履修者の学習習慣がついた模様である。 					
来年度の進捗目標		<ul style="list-style-type: none"> ●本学で初めて担当する「確率統計学」の教材研究と授業展開を行う。 ●「システム制御工学」の内容応用例を履修者へ紹介しながら、授業を行う。 ●「微分積分学I・II」の予習・復習を多くの履修者へ促し、学力向上を図る。 					
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
A Foliation by Deformed Probability Simplexes for Transition of γ -Parameters	単著	2023年3月	Physical Sciences Forum, 5(1)	Uohashi K.	pp.53		
Extended Divergence on a Foliation by Deformed Probability Simplexes	単著	2022年11月	Entropy, 24	Uohashi K.	pp.1736		
The Cause of Vasomotor Symptoms: Resonance Phenomena in the Vascular Bed	単著	2022年5月	Journal of Mid-Life Health, 13(1)	Uohashi K.	pp.15-17		
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
分数階微分を用いたダンパーの振動制御	共同	2023年3月	計測自動制御学会東北支部 第341回研究集会(仙台市), 341	◎飯淵広大, 魚橋慶子	pp.7		
エレキギターの音の周波数解析	共同	2022年11月	第5回 東北地区音響学研究会(多賀城市), 5	◎雨宮賢和, 魚橋慶子	pp.10		

A foliation by deformed probability simplexes for transition of alpha-parameters	単独	2022年7月	The 41th International Conference on Bayesian and Maximum Entropy methods in Science and Engineering(IHP, Paris, France)	Uohashi K.	
H. 翻訳(学術書や原典等)					
I. 特許					
現在の課題・目標	<ul style="list-style-type: none"> ●年度あたり1回は、研究集会で口頭発表を行う。 ●年度あたり1回は、査読付き論文誌へ研究論文を投稿する。 ●昨年度得た成果を今年度の研究へ反映させる。 				
今年度の進捗状況	<ul style="list-style-type: none"> ●口頭発表3件を行った(内1件は国際会議録, 内2件は博士前期課程指導学生と共著)。 ●査読付き論文発表3件を行った(内1件は国際会議録(口頭発表1件と同内容), 他1件は昨年度に掲載決定した論文)。 ●昨年度得た成果を進展させた。 				
来年度の進捗目標	<ul style="list-style-type: none"> ●年度あたり1回は、研究集会で口頭発表を行う。 ●年度あたり1回は、査読付き論文誌へ研究論文を投稿する。 ●今年度得た成果を来年度の研究へ反映させる。 				
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)					
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概 要	
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動					
2021年10月～		日本音響学会 会員			
2021年1月～		計測自動制御学会代議員 会員			
2016年9月～		日本女性医学学会 会員			
2012年3月～		日本数学会幾何学分会拡大幹事 会員			
2007年4月～		システム制御情報学会 会員			
1998年6月～		日本数学会 会員			
1997年4月～		日本応用数理学会 会員			
1996年12月～		計測自動制御学会 会員			
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動					
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等		
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動					
1. 工学基礎教育センター 相談員 2. 学生相談室 兼任カウンセラー 3. 工学部機械知能工学科長					

2022年度							
所属	工学部 機械知能工学科	職名	教授	氏名	小野 憲文	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
「メカノデザイン工作演習I・II」に関するWeb(電子)教材を用いた授業		2020年～		本講義のうち、機械製図の内容をWeb上に掲載した。この電子教材には、3D動画も含まれており、学生は視覚的に対象物を確認することができる。			
「熱流体解析工学」に関するWeb(電子)教材を用いた授業		2020年～		本講義の内容はすべてWeb上に掲載されている。この電子教材には、流れに関する静止画および動画が含まれており、学生は視覚的に流れの計算方法や計算結果を確認することができる。これは、式の誘導・展開を中心とする数値流体工学の講義とは一線を画するものである。また、流れの計算を行うプログラムも本ページに掲載されており、学生は授業中にそれをダウンロードし、動かすことができる。2020年度からはGoogleアプリに対応し、より効果的な学生の自学が期待できる。			
「基礎流体工学」に関するWeb(電子)教材を用いた授業		2020年～		本講義に関するWeb(電子)教材を用いた学習環境は、数値計算・動画生成ソフトが含まれており、これにより学生のより一層の学習効果の向上が見込まれる。また、2020年度から、Googleアプリを利用した学習環境も構築し、学生の自学補助に役立つことが期待できる。			
「情報リテラシー」および「プログラミング基礎」に関するWeb(電子)教材を用いた授業		2020年～		担当している「情報リテラシー」および「プログラミング基礎」は全て自作のWeb(電子)教材を使用して授業を進めている。主な内容はコンピュータリテラシーとC言語の入門に関するものである。2020年度から全項目学外からも閲覧可能となった。また、Googleアプリへの対応を強化した。さらに、今年度は「プログラミング基礎」の学外学習の大幅な強化をはかった。			
卒業研究による総合的成果を担当学科目に反映させる教育研究の実施		2020年～		学科科目「卒業研究I,II」において「流体工学分野における学習環境の開発」に関する指導を行ってきた。これは、学部4年生が開発することによって自分が学びたい部分・未修得な部分をその開発教材に反映できるという特色を持っている。卒研生が主体となって作成した教材を担当科目の授業中に使用し、受講学生への学習効果や学生の声をフィードバックすることによって更なる教育環境・教材の改良をはかる教育研究を実施している。今年度は特に数値熱流体工学の学習環境整備をさらに充実させている。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		1.学生が自主的に予習・復習できる環境に関しWebを中心に構築・進展させ、アクティブラーニングも視野に入れる。 2.演習科目に関して学生の理解度・解答作成速度などに対応できる課題の作成・出題を行う。 3.すべての授業において学生とのコミュニケーション増大の方策を練り実践する。					
今年度の進捗状況		1.1年生の科目「情報リテラシー」「プログラミング基礎」「メカノデザイン工作演習II」について、自作教材を随時改良した。 2.「基礎流体工学」、「熱流体解析工学」においてWebでの学習環境に改良を施した。					
来年度の進捗目標		1.学生からのフィードバック(理解しづらい点)を鑑み授業内容、教材の修正に常に努める。 2.授業形態によっては、学生とのやり取りが不十分であるため、事前事後の来室(電子メールでの問い合わせを含む)等に対応し、さらに発展させる。 3.学生が授業外に学習できる環境をより整備する(Web教材、双方向的)。					
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							

C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文			
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)			
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)			
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)			
G. 学会における研究発表			
H. 翻訳(学術書や原典等)			
I. 特許			
現在の課題・目標	1.産学官連携につながる熱流体機械関連制御技術・環境を整備する。 2.新たな流れの数値解析手法とその結果表示方法、流れの可視化方法についての環境構築を行う。 3.室内の空調および電子機器の冷却に関わる研究について新たな手法および知見を得る。 4.大気圧プラズマの基礎的研究環境を整え、進展させる。		
今年度の進捗状況	1.企業との研究については双方向に更に検討している段階である。 2.新たな熱流体計算・実験環境の構築を整えてきている。 3.最新の結果については、講演会・報告書で発表済または発表予定である。		
来年度の進捗目標	1.産官との連携を継続するとともに新たな領域への拡大を模索する。 2.未公表の技術・開発物を精査し、さらに改良を加えていく。 3.未公開データ・手法について、順次発表するための方法も検討する。		
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動			
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動			
1.大学院工学研究科機械工学専攻主任			

2022年度							
所属	工学部 機械知能工学科	職名	教授	氏名	梶川 伸哉	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
卒業研究ゼミの開催		2020年4月1日～		卒業研究の各学生担当テーマとその進行状況の相互理解、および問題解決策を議論する目的で週一回実施している。(オンラインと対面の併用)			
映像を用いた授業内容の解説		2020年4月1日～		4年次の「ヒューマンマシンインターフェイス」の授業において、映像資料を用いた解説を行い、理解と興味の向上に努めている。また、身近な機器を取り上げ、そのインターフェイスの良し悪しについての調査とプレゼン、ディスカッションの場を設けている。			
学生による相互評価の実施		2020年4月1日～		1年次に開講される「研究・発表の技法」における各自の取組姿勢を学生間相互によって評価する方法を実施し、成績評価にも反映させている。			
Webを利用したレポート課題		2020年4月1日～		3年、4年次に開講される「制御工学」「システム工学」において、Webを利用した課題提示と回収を行ない、学習状況の把握と学習習慣の定着に努めている。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
学生実験資料の作成		2020年4月1日～		機械知能工学実験Ⅰ、Ⅱのテーマである「生体の電気信号の計測」、「ロボットの制御」で使用する解説資料を作成し、使用している。(Web上で公開)			
授業補助資料の作成		2020年4月1日～		「制御工学」「システム工学」「ヒューマンインターフェイス」の授業で使用する補助資料を作成し、使用している。(今年度はWebを介した配布)			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Physical interaction based traveling aid system with depth camera and unevenness detection mechanism	共著	2022年10月	International journal of mechanical engineering and robotics research, 11(10)	S.Kajikawa, I.Watanabe, H.Hoshi	pp.767		
粘弾性負荷を有するジョイスティックを用いた舌運動トレーニング	共著	2022年	日本福祉工学会誌, 24(1)	梶川伸哉・近江大樹	pp.8		
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
視覚障害者の歩行誘導のための頭部回旋装置の開発	共同	2022年6月	日本機械学会ロボティクスメカトロニクス講演会(札幌)	小原田聖和・樋口淳之介・梶川伸哉			

ロボットハンドの手招き動作に対する印象評価	共同	2022年6月	日本機械学会ロボティクスメカトロニクス講演会(札幌)	小池志織・梶川伸哉	
H. 翻訳(学術書や原典等)					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)					
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要		
科学研究費補助金 科学研究費補助金基盤研究(c)	2022年度～	個別(研究代表者)			
IV 学会等及び社会における主な活動					
2020年9月～		東北防衛局入札監視委員会 委員			
2013年～		みやぎ高度電子機械人材育成センター 運営委員			
V 芸術分野や体育実技等における主な活動					
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等		
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
VI 学内における管理運営に関する諸活動					

2022年度							
所属	工学部 機械知能工学科	職名	教授	氏名	加藤 陽子	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
論述式演習問題(レポート課題)の実施		2021年4月1日～		講義に関連する課題について論述する事により、講義内容を多角的に理解する事を目的とする。			
関連研究の紹介		2021年4月1日～					
演習問題の提示による理解度の促進		2021年4月1日～		講義内容のポイントを確認する演習問題に取り組む事により、受講者の理解度を促進する			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Mechanical Environment in the Human Umbilical Cord and Its Contribution to the Fetal Circulation		単著	2022年12月	IntechOpen, Maternal and Child Health [Working Title]	Yoko Kato	pp.1-14	
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要			
IV 学会等及び社会における主な活動							
2021年8月～		一般社団法人 日本キチン・キトサン学会 評議員					
2010年3月～		一般社団法人 日本キチン・キトサン学会 会員					
2010年2月～		CSJ 会員					
2009年12月～		ASME 会員					

2009年12月～	ACS 会員		
2008年7月～	ASCB 会員		
2007年5月～	ISJ 会員		
2002年1月～	SPIE 会員		
2001年5月～	IEEE 会員		
2001年3月～	JSMBE 会員		
1997年7月～	JSME 会員		
1996年6月～	JCA 会員		
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	工学部 機械知能工学科	職名	教授	氏名	城戸 章宏	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
演習プリントの作成による復習効果の向上への取り組み		2006年4月～					
学生フォーミュラ大会, モーターショーへの参加を通じたモノづくり教育の実践		2003年4月～					
2. 作成した教科書、教材、参考書							
自動車関連の最新動向の調査資料		2017年4月～					
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		計算力に難がある学生のレベルアップ					
今年度の進捗状況		計算式の立て方, 解き方を丁寧に解説した結果, ある程度の改善が得られた.					
来年度の進捗目標		これまで以上にmanabaを有効に活用して学生の習熟度改善を図る.					
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		今年度スタートした研究が多いため, 物と金の不足に苦慮している					
今年度の進捗状況		新研究も最低限の成果を上げることができた.					
来年度の進捗目標		外部資金の調達を成功させる.					
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要			
IV 学会等及び社会における主な活動							
2016年4月～		一般社団法人日本雪工学会 会員					
1991年4月～		公益社団法人自動車技術会 会員					
1984年4月～		一般社団法人日本機械学会 会員					
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等			
現在の課題・目標		(公社)自動車技術会主催の学生フォーミュラ大会への参戦を果たすべく, チームを結成し形を整えつつある.					

今年度の進捗状況	2月の参加申請にパスし、8月末に開催される大会への参加が確定した。
来年度の進捗目標	大学や外部スポンサーからの支援を獲得して車検に適合する車体を作成する。さらには大会で実施されるすべての競技への出走を果たし、初参戦の優秀チームに与えられるルーキー賞を獲得する。
VI 学内における管理運営に関する諸活動	
産学連携推進センター副センター長としての職務を全うする。	

2022年度							
所属	工学部 機械知能工学科	職名	教授	氏名	熊谷 正朗	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
オンラインホワイトボードを併用した遠隔授業と事後学習用記録の保存提供		2020年5月1日～		<p>講義の遠隔化にともない、以下のスタイルを採用した。</p> <p>講義の資料はオンラインホワイトボードであるmiro.comのサービス上に構築し(科目よって、従来のスライド資料ベースの配布PDFの貼り付け、従来板書型+講義ノート公開型科目では、ある程度の骨格部分を用意)、講義中(オンタイム)では、この画面をZoomで中継しつつ、そこに書き込みながら解説をするスタイルとした。これは「消えない黒板」であり、講義前から学生が内容を直接見ることができるURLを提示(Zoom画面から消えても、直接開けば任意の場所が講義中にも確認できる)、講義後も年度末まで保存した。また、自分の手元に再構成できるデータの提供もした。アンケートによれば、講義の録画の提供も含め、事後学習にかなり活用されていた。加えて、前回までの内容をコピーして今回の内容のスタートとすることで、複数回にわたる内容でも扱いやすいなど、講義する側にも利点は多い。</p> <p>今後の対面授業でもこの活用を前提として計画している。</p>			
専門科目の必修化に伴う講義内容の抜本的見直し		2015年4月～		<p>カリキュラム改訂に伴い、以前は「ほぼ全員履修」の選択と「2/3程度の学生が履修」の選択だったメカトロニクス2科目が必修となったことから、2015年に抜本的な見直しを行った。コンセプトは「専門科目としてのメカトロニクスから機械の教養としてのメカトロニクスへの移行」であり、全員が学び、かつ全員が必要水準に達することの実現を目指した。そのためには枝葉の理論よりは総合的な知識とセンス獲得を優先した。また講義スタイルも従来の板書主体から変更し、毎回決まったフォーマットでのスライド16枚(A3用紙1枚にカラー縮刷して配付)+重要点などを板書で補足するようにした。配付付きスライド化により、写真を含むビジュアルな資料が提供できるようになったこと、意欲ある学生は板書に気を取られることなく講義内容をメモしていけるなど、狙い通りの効果を得た。上記同様、資料はWEBでも配付している。</p> <p>後述の企業技術者向けのメカトロニクスセミナーとの相互運用で内容の修正は続けている。</p> <p>他の科目への展開については、一部本科目の評価方式を適用しつつ、現状で検討中であり(おもに時間確保が課題)、現在は遠隔授業ともシームレスにした方向で全体的に調整中。</p>			
講義ノートのオンライン化とWEBでの一般公開		2003年9月～		<p>以前の授業評価アンケートにて「字が読めない」「図が書き写せない」との指摘があり、その対応策として講義ノートをWEB上で作成し、公開することとした。復習などの他、病欠などの際の補填にも活用できる。現在、学外からも膨大なアクセスがあり、他大学の教員からも活用されている形跡がある。電子情報化したことで修正も容易となった。</p> <p>※2003年9月～継続</p>			
テスト・レポート電子処理システムの開発および運用		2003年9月～		<p>膨大な量の小テスト、レポート、単位の実質化に伴う復習シートの、試験の答案での集計業務の省力化、ミスの低減、データ保存を目的として、処理システムを開発した。独自のマークシートを開発し、それをスキャン、解析することで集計を行う。これにより、プレゼン系科目の学生同士の相互評価にも対応できた。</p> <p>※2003年9月～継続(2020以降は提出オンライン化で利用停止中)</p>			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
ロボット博士の基礎からのメカトロニクスセミナー		2011年1月18日～		<p>メカトロニクスセミナーの実施のために作成した資料、教材は講演終了後に研究室WEBページで提供しており、一般からも利用できる。現時点で27+1回分、延べ1500ページを超える資料となっている。</p> <p>※2011年1月18日～継続</p>			

オンライン講義ノート	2003年9月～	<p>担当する5講義(および旧担当あわせて11科目)の講義ノートをWEB上で作成し、公開している。これにより受講学生の自習, 病欠に於ける欠損などを穴埋めすることが可能となったほか, 外部からの参照も多く, 社会貢献ともなっている。本報告執筆時点で総計720万回の参照があり, “ロボット工学”“マニピュレータ”“座標変換”などの主要キーワードをネット検索した際にトップクラスの上位に表示される(一般にネットにおける評価が高いことを示す)。そのほかに公開している技術情報も含め, 1日平均500人程度の利用者がある。</p> <p>※2003年9月～継続</p>
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4. その他教育活動上特記すべき事項		
ロボット博士の基礎からのメカトロニクスセミナー(仙台市地域連携フェロー活動)	2011年1月18日～	<p>社会活動である仙台市地域連携フェローの活動の一環として, 地域のエンジニアのためのメカトロニクスの総合セミナーを企画し, 仙台市産業振興事業団を会場に実施している。開発業界においては, 自分の専門性を高めることも重要なが, 幅広く技術的知識をもつことが大事であり, 周囲の分野との連携のためにも「隣も知る」ことが大事である。その観点から, 「技術的雑学」を提供することを目的に様々な講演を行ってきた。本学卒業生も聴講に来ることがある。同内容を地域の企業にも出張講座している(のべ30回以上)。また, ここで確立した講義スタイルを学科科目の講義にも応用している。</p> <p>※2011年1月18日～</p>
ロボット教育特別コースの設置(ロボット研究会)	2005年1月～	<p>機械知能工学科ではロボットに関する講義はいくつかあるが, ロボット関連技術は座学では到底学べず, 実践が必要である。一方で, 卒業研究の時点で学ぼうとしても時間は足りない。そこで, 積極的意欲をもった, 配属前の1～3年生以下の学生を募集し, 研究室への出入り, 工具等の使用を許可し, 消耗品も一部提供することで, 自らロボットを学ぶ機会を提供することとした。これまでに, ロボットコンテストに参加して上位入賞したほか, 希望者が研究室に正式に配属となり, 技術習得の段階をすぐに越えて本題に入るなど, 大きな効果が得られている。このコースを分析し, 教育論文にもまとめた。</p> <p>※2005年1月～継続(コロナ禍で活動低下中)</p>
出前授業の実施	2003年～	<p>高校・高専からの依頼に応じて, 出前授業を行った。テーマは[ロボットをつくる]であり, ロボットの基礎の講義とともに, 高校における科目が如何に意義のあるものかを説いた。</p> <p>(2010年12月: 泉松陵高校, 2011年1月: 一関高専, 2011年2月: 石巻西高校, 2012年2月: 石巻工業高校, 2012年3月: 仙台西高校, 2012年12月: 泉松陵高校)</p>
知能ロボットコンテストの運営	2000年～	<p>毎年仙台市で6月に開催されている知能ロボットコンテストの運営に深く関与している(2011年は震災の影響で10月開催)。過去に実行委員長も4回務めた(直近は2018年)。本コンテストは中学～大学生の参加が多く, ロボット技術教育の効果もある大会であり, 現に, 本大会の参加者の中から優れたエンジニアも育っている。上記ロボット研究会も主たる目標は本大会への参加である。</p> <p>※2000年1月以前より継続</p> <p>※2020,21年度は開催を模索したがコロナ禍で断念</p>
現在の課題・目標	<p>●この20年間の教員としての取り組みを通して, 一通りの技術教育のフォーマットを得るに至ったが, 現状では「ある程度意欲を持つ者」「かなり意欲を持つ者」には効果が認められるものの, 「意欲のない者」「関心のない者」に対しての効果が薄い。担当分野は, 現在では機械技術の必須分野であるため, 興味ある者を伸ばすことだけにとどまらず, 後者に対しても必要知識を身につけさせる必要があり, この改善が必要である。一つには興味をより持ってもらうことであるが, ある程度は強制的に学ばせるための手法の検討も必要と思われる。</p> <p>●単位の実質化に伴う, 予習復習のエビデンスのある実施形態準備。</p> <p>●遠隔授業で導入したオンライン方式の良い点の対面授業への活用(常時ハイブリッド対応・講義映像の提供など)</p> <p>●講義ノートページのインタラクティブ化, 具体的には簡単な練習問題の提示や計算練習を可能とするような改修。</p> <p>●技術的専門知識の普及啓蒙および獲得支援。</p>	

<p>今年度の進捗状況</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●コロナ禍の対応で多くの時間を要したことで本来の目標についての進捗はほぼ無かったが、2年前に遠隔化対応のため新たに導入したオンライン併用型の講義スタイルの完成度をあげ、概ね安定した。全員対面の授業でも遠隔システムを使うことで画面の拡大提供、録画提供などが可能となった。 ●カリキュラム変更に際して、メカトロニクス講義の大幅変更を行い、7年目として継続して様子を見ているが、内容面では安定したと考えられる。他の科目もオンライン化時にコンテンツに修正を加えているが、それも安定を見た。 ●単位の実質化に伴う復習の方式として「講義の中で重要であったと考える図とその説明を3点まとめる」を実施し、理解の促進と苦手な者への学修機会の二つの面で一定の成果を得ている。受講者からは、授業評価アンケートなどでも好評価を受けている。この復習とあわせて予習も行うように誘導しており、本年度は4科目で実施した。ただ、復習に比べて予習の程度が弱く感じられた。 ●サーバの更新作業は始めているが、大きめのソフトウェア開発を行う必要があり、その時間を確保できていない。また、先にレポート類のオンライン提出・採点・閲覧システムの構築が必要と考えている。 ●啓蒙活動については、ここ数年間、仙台市地域連携フェローとしての活動を通して、かなりの成果をあげているほか、主に自治体、産業界に種々の貢献を果たしている。企業への出前も継続して実施している。 				
<p>来年度の進捗目標</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●2023年度特例事項：引越の影響からの立て直し ●2023年度特例事項：2023年度カリキュラムの立ち上げ（総合的、課題探究演習） ●全体の見直し背景：科目内容についてはほぼ安定したが、一体運用していた1科目の担当を下りることになったため、一部内容の引き上げが必要となる。 ●2020年度に導入したオンラインホワイトボード型の講義を対面授業で実施、ハイブリッド化するための効率化を進める。特に教室ハイブリッドする場合の展開・撤収の迅速化を図る。 ●実質化の手法については今年度の方式を継続するほか、予習の実効性向上を検討する。従来は紙での回収であり、昨年度はPDF提出としたがその手段の効率化を図る。 ●上記について、学生諸君の自習を促す教育面のIT支援が必須となるため、その実装を進める。 ●技術的専門知識の啓蒙活動についてはこれまでの水準を維持する。 				
<p>II 研究活動</p>					
<p>著書・論文等の名称</p>	<p>単著・共著の別</p>	<p>発行又は発表の年月 (西暦)</p>	<p>発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称</p>	<p>編者・著者名</p>	<p>該当頁数</p>
<p>A. 学術書</p>					
<p>第II編 ロボット構成要素 9. 制御機器 9.1 ロボット制御系の概要 9.2 組込みシステム 9.3 OS 9.6 入出力ハードウェア・インタフェース『ロボット工学ハンドブック(第3版)』</p>	<p>分担執筆</p>	<p>2023年3月</p>	<p>コロナ社</p>	<p>日本ロボット学会編</p>	<p>pp.379-384, 388-391</p>
<p>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</p>					
<p>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</p>					
<p>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</p>					
<p>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</p>					
<p>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</p>					
<p>身の回りを見つけるメカトロ雑学 第97回～第120回『プラントエンジニア(雑誌)』</p>	<p>その他</p>	<p>2022年</p>	<p>日本プラントメンテナンス協会</p>	<p>熊谷正朗</p>	<p>pp.各号による-各号による</p>
<p>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</p>					
<p>G. 学会における研究発表</p>					
<p>H. 翻訳(学術書や原典等)</p>					
<p>I. 特許</p>					
<p>現在の課題・目標</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●2022年度に採択された科研費の、玉乗りロボットの動特性の測定に関する機器開発と実測を本格化させる。これを通してメカトロニクス関連の技術の発展に貢献すること。現時点では教育および大学運営業務に重点を置いており(置かざるを得ない)、研究とのバランスをどのようにするかは課題である。 ●開発した技術成果の学内外への還元の方法。 				

<p>今年度の進捗状況</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●本年度も学内用務に多くの時間を割かざるを得なかったため、研究に回せる時間が大幅に減り、進捗は芳しくない。 ●学生原案による卒業研究では種はできていないが、それを学術レベルまで育てるには至っていない。 ●現状では学会等での学術発表にとどまっており、広く一般業界向けへの提示が不十分である。技術の総論的な面は地域連携フェロー活動、および学外から依頼の技術講演を通して地域への還元を行っている。 ●研究発表にはつながりにくい、パイプオルガン模型の開発を行っている。 ●研究の根幹に関わる(現時点で公表すべきではない)ものではない、製作した要素技術などについては、SNSを通じて比較的高頻度に紹介し、関心を得ている。
<p>来年度の進捗目標</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●球面誘導モータの開発は科研費の支援期間終了後も効率改善に挑む。 ●科研費研究への取り組み。 ●パイプオルガンの開発は引き続き継続する。 ●教育コンテンツを有するサーバのリプレースとコンテンツ管理の改善を行う。

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
科学研究費補助金 基盤研究(C)	2022年度～2024年度	個別(研究代表者)	

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2022年	宮城県および仙台市のICT、メカトロニクス関連分野の民間企業向け補助金の審査委員(非公開) 補助金申請の評価・審査を行った。
2022年	仙台市各種委員: 第68回仙台市児童・生徒理科作品展 審査員 委員
2022年	知能ロボットコンテスト運営委員 委員
2011年7月～2023年3月	仙台市地域連携フェロー(フェロー)

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

<ul style="list-style-type: none"> ●学務部 副部長(多賀城、工学部) ●課題探究演習(2023年度新規TGベーシック科目)のコーディネータ、立ち上げ作業 ●工学部教務委員長・2023年度工学部カリキュラム検討

2022年度							
所属	工学部 機械知能工学科	職名	教授	氏名	斎藤 修	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		<ul style="list-style-type: none"> ●授業時間以外での学生とのコミュニケーションの時間を大切にし、学生からのさまざまな相談に応じる。 ●すべての授業で、学士課程における必要性という観点から到達目標を見直す。 ●「機械工作学」および「特殊加工学」についての新たな授業テキストをつくる。 					
今年度の進捗状況		<ul style="list-style-type: none"> ●授業時間以外での学生とのコミュニケーションは研究室の学生については取れている。 ●到達目標については授業評価アンケートで「わかりやすい」との回答が有意に増えていることから、ある程度の進捗がみられた。 ●テキスト作成については各分野での資料等を収集中である。 					
来年度の進捗目標		<ul style="list-style-type: none"> ●授業時間以外での学生とのコミュニケーションの時間をさらに大切にし、学生からのさまざまな相談に応じる。 ●すべての授業で、学士課程における必要性という観点から到達目標をさらに見直す。 ●「機械工作学」および「特殊加工学」についての新たな授業テキストのための情報収集に努める。 					
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセイ(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセイ(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		実験装置の整備 新たな研究テーマの検討					
今年度の進捗状況		新たな基礎的加工実験装置等のデータ収集					
来年度の進捗目標		新実験装置での研究を平滑に行うための条件整備					
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要			
IV 学会等及び社会における主な活動							
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							

VI 学内における管理運営に関する諸活動

授業評価委員会委員

授業改善委員会委員

工学部図書館分館長

2022年度							
所属	工学部 機械知能工学科	職名	教授	氏名	星 朗	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概 要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
毎回の講義の内容に関して、復習問題ならびに予習課題などを次週までの宿題として課すことにより、自学自習する習慣を付けるようにしている。		2021年～		「基礎熱力学」、「応用熱力学」、「工学総合演習Ⅰ」において、毎回の講義に関する復習問題ならびに予習課題を、自学自習してもらうようにしている。次週の講義で解答例を解説するとともに、宿題を回収・評価している。			
講義の最後に、その日の講義内容の理解度をチェックする目的でQuiz(小テスト)を実施している。		2021年～		「基礎熱力学」、「応用熱力学」、「工学総合演習Ⅰ」ならびに「応用熱工学特論」において、講義中に説明した内容についてQuizの問題解法を通じて理解度を確認している。「環境エネルギー工学」においては、「eco検定」の受検にも対応できる内容でQuizを実施している。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
その日の講義で扱う例題、Quiz、復習問題ならびに予習課題を、A4用紙1枚の両面に印刷したプリントを毎講義において用意している。また、講義資料をmanaba上に公開している。		2022年4月～		「基礎熱力学」、「工学総合演習Ⅰ」において、講義で扱う例題、Quiz、復習問題ならびに予習課題をA4用紙1枚に纏めて、毎時間に配布するようにしている。「応用熱力学」、「環境エネルギー工学」ならびに「応用熱工学特論」については、講義資料および講義で扱う例題をmanaba上に公開しており、自ら予習・復習できるようにしてある。			
その日の講義で扱う例題、Quiz、復習問題ならびに予習課題を、講義資料としてmanaba上に公開している。		2020年4月～		「基礎熱力学」、「工学総合演習Ⅰ」、「応用熱力学」、「環境エネルギー工学」ならびに「応用熱工学特論」において、講義で扱う例題、Quiz、復習問題ならびに予習課題を講義資料としてmanaba上に公開しており、自ら予習・復習できるようにしてある。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
日本機械学会2022年度技術と社会部門講演会において、「スターリングエンジンを用いる太陽熱の動力化技術の検討」というタイトルで修士論文の成果の一部を講演した。		2022年12月3日					
日本機械学会2022年度技術と社会部門講演会において、「低温度熱源利用スターリングエンジンの試作」というタイトルで修士論文の成果の一部を講演した。		2022年12月3日					
日本機械学会2022年度年次大会において、「低温度差スターリングエンジン高出力化の検討」というタイトルで修士論文の成果の一部を講演した。		2022年9月13日					
4. その他教育活動上特記すべき事項							
日本機械学会 技術と社会部門主催「第15回 新☆エネルギーコンテスト」において学生のアイデアを投稿し、株式会社エナジア賞を受賞した。		2022年10月15日		女鹿 義希「熱音響発電⇔熱音響冷凍機」のアイデアが、株式会社エナジア賞 ブロンズ賞を受賞した。			
The 15th National University Student Social Practice and Science Contest on Energy Saving & Emission Reduction of 2022 においてTHIRD PRIZEを受賞した。		2022年8月3日		Tianjin University, China で開催された The 15th National University Student Social Practice and Science Contest on Energy Saving & Emission Reduction of 2022 において、指導学生が発表した“Temperature difference power generation system”がTHIRD PRIZEを受賞した。なお、本功績により学生は学長表彰された。			
現在の課題・目標		①卓上ミニ実験、測定器などの実物に触れることを通して、体感的に講義内容に興味を持ってもらい、理解度を深めてもらうようにする。 ②毎回の講義で実施するQuiz、自学自習のためのHome Work等を充実させる。					
今年度の進捗状況		上記目標①については、メインの実施科目である「基礎熱力学」が対面授業となったが、コロナ禍であることを考慮して実施には至らず残念な結果であった。大学院講義「応用熱工学特論」では、少人数で対面授業が可能であったため、実物を用いたミニ実験を行うことができた。 上記目標②については、後期より対面授業が実施され、例題、Quiz、復習問題ならびに予習課題を講義資料として配布することで、理解力の向上に繋がったものと思う。さらに、manaba上に講義資料や講義中の例題・解答などを公開したことにより、予習・復習の自学自修ができるようになったものと考えている。					
来年度の進捗目標		上記目標①に関しては、良い成果に繋がることが期待されるので、対面授業に戻った後は大講義室でも実施可能な新しい教材を準備するなどして、内容をさらに充実させていきたい。 上記目標②に関しては、予習・復習も含めた形で自学自習できるHome Workの充実を、さらに図っていきたい。					

II 研究活動					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)					
潜熱エネルギー貯蔵型直接接触熱交換器の研究	共著	2022年11月	日本太陽エネルギー学会誌, Vol.49(No.1)	星 朗, 大久保英敏	pp.53-58
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)					
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)					
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)					
G. 学会における研究発表					
スターリングエンジンを用いる太陽熱の動力化技術の検討	共同	2022年12月	日本機械学会技術と社会部門講演会(沖縄)	◎木村悠人, 星 朗	
低温度熱源利用スターリングエンジンの試作	共同	2022年12月	日本機械学会技術と社会部門講演会(沖縄)	◎本田渉悟, 星 朗	
低温度差スターリングエンジン高出力化の検討	共同	2022年9月	日本機械学会2022年度年次大会(富山)	◎本田渉悟, 星 朗	
H. 翻訳(学術書や原典等)					
I. 特許					
現在の課題・目標	①外部研究者との共同研究, 外部資金の調達などを旨とする。 ②1編/年の学術論文の発表, 1回/年の国際会議発表を目標とする。 ③地域に根ざした研究テーマを模索する。				
今年度の進捗状況	上記目標①については, 残念ながら外部資金の調達には至らなかった。 上記目標②については, 1編の学術論文が採択された。国際会議発表はコロナ禍にあって残念ながらできなかった。 上記目標③については, コロナ禍にあって, 鳴子の温泉旅館との共同研究も中断している。				
来年度の進捗目標	上記目標①に関しては, 企業との共同研究を計画している。 上記目標②に関しては, 学術論文, ならびに国際会議での発表を計画している。 上記目標③に関しては, 新規テーマを開拓していきたい。				
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)					
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要		
IV 学会等及び社会における主な活動					
2017年4月～	日本技術史教育学会 会員				
2017年4月～	日本冷凍空調学会 会員				
2016年12月～	日本機械学会 フェロー				
2016年6月～	宮城県工業高等学校学校評議員(宮城県工業高等学校学校評議員)				
2008年6月～	自動車技術会 フェロー				
1990年4月～	日本太陽エネルギー学会 会員				
1990年4月～	自動車技術会 会員				
1990年4月～	日本伝熱学会 会員				
1990年4月～	日本機械学会 会員				
V 芸術分野や体育実技等における主な活動					
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	
VI 学内における管理運営に関する諸活動	

2022年度							
所属	工学部 機械知能工学科	職名	教授	氏名	松浦 寛	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
LMS(Moodle)を活用したeラーニングシステムの構築(機械設計学, 機構学, 機械知能工学実験1)をおこなった.		2020年4月～		資料の円滑な配布が可能となった. 学内からのアクセスのみ対応できる出席管理を可能とした. 予習復習課題の提出を時間単位で把握でき, 提出内容をソフトでコピー&ペーストチェックソフトを使うことでコピー率を出すようにしたこと成績上位者と下位者で明らかな相関が得られた. これらを教育系学会で発表した.			
2. 作成した教科書, 教材, 参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表, 講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所, 発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
結合材に不織布を用いた砥石開発と研削性能の評価	共同	2023年3月	日本機械学会東北学生会(仙台高専名取キャンパス)	濱高 有輝, 齋 裕大, 井上 慶星, 南條 健人, 相澤 崇史, 松浦 寛			
廃炉での作業を目的とした「全機械駆動ロボットアーム」の開発と性能評価	共同	2023年3月	日本機械学会東北学生会(仙台高専名取キャンパス)	関村 明迪, 千賀 颯斗, 高橋 悠, 松浦 寛			
レーザ援用研削における研削効率の評価	共同	2023年3月	日本機械学会東北学生会(仙台高専名取キャンパス)	菅井 悠人, 菅原 颯斗, 櫻井 風花, 松浦 寛			
レーザ援用研削における除去効率に関する研究	共同	2023年3月	日本機械学会東北学生会(仙台高専名取キャンパス)	佐々木 拓巳, 櫻井 風花, 渡邊 友弥, 松浦 寛			
廃炉作業のための「完全機械駆動のロボットアーム」の改良と性能評価	共同	2023年3月	日本機械学会東北学生会(仙台高専名取キャンパス)	佐久間 大, 高橋 悠, 千賀 颯斗, 松浦 寛			
熱可塑性樹脂砥石を用いたステンレス鋼の研削に関する研究	共同	2023年3月	日本機械学会東北学生会(仙台高専名取キャンパス)	内海 俊祐, 伊澤 空哉, 齋 裕大, 松浦 寛			
レーザ援用研削における熱影響の評価	共同	2023年3月	令和5年若手研究者研究発表会(日本大学工学部)	足達拓光, 菅原颯斗, 櫻井風花, 松浦寛			
レーザ調理器の開発	共同	2023年3月	令和5年若手研究者研究発表会(日本大学工学部)	赤間 洸太, 櫻井 風花, 松浦 寛			

集中度別の不織布砥石による研削性能の比較	共同	2022年8月	砥粒加工学会(神奈川大学)	井上慶星, 齋裕大, 伊澤空哉, 南條健人, 松浦寛
高出力レーザ援用研削加工の有効性に関する研究	共同	2022年8月	砥粒加工学会(神奈川大学)	櫻井風花, 松浦寛
結合剤に不織布を用いた砥石の開発	共同	2022年8月	砥粒加工学会(神奈川大学)	銚建僚祐, 齋裕大, 井上慶星, 伊澤空哉, 南條健人, 松浦寛
LN結晶の自由曲面加工装置の試作	共同	2022年8月	砥粒加工学会(神奈川大学)	櫻田陸人, 銚建僚祐, 松浦寛
熱可塑性樹脂砥石を用いた金属の研削	共同	2022年8月	砥粒加工学会(神奈川大学)	齋裕大, 井上慶星, 伊澤空哉, 南條健人, 松浦寛
廃炉を目的とする砥石搭載を想定した全機械駆動ロボットアームの開発及び性能評価	共同	2022年8月	砥粒加工学会(神奈川大学)	高橋悠, 千賀颯斗, 松浦寛
授業形態の差異とグループ分け方法変更によるアクティブラーニング効果	共同	2022年8月	コンピュータ利用教育学会PCカンファレンス(オンライン開催)	櫻田陸人, 櫻井風花, 高橋悠, 松浦寛, 七海雅人, 佐藤洋志, 高木龍一郎
COVID-19による講義形態の変化に伴う影響	共同	2022年8月	コンピュータ利用教育学会PCカンファレンス(オンライン開催)	鈴木大貴, 銚建僚祐, 阿部柚人, 松浦寛, 七海雅人, 佐藤洋志, 高木龍一郎
講義形態変化と課題難易度による学習成果の影響	共同	2022年8月	コンピュータ利用教育学会PCカンファレンス(オンライン開催)	井上慶星, 佐々木洗斗, 齋裕大, 松浦寛, 七海雅人, 佐藤洋志, 高木龍一郎

H. 翻訳(学術書や原典等)

I. 特許

現在の課題・目標

今年度の進捗状況

来年度の進捗目標

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
科学研究費補助金 基盤研究(B)	2022年度～2024年度	共同(研究代表者)	
その他の補助金・助成金	2021年度～2024年度	共同(研究分担者)	
科学研究費補助金 基盤研究(B)	2021年度～2023年度	共同(研究分担者)	

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2014年～	精密工学会東北支部 商議員
2014年～	精密工学会 精密工学会東北支部 商議員 会員
2011年～	一般社団法人光産業技術振興協会 戦略技術策定委員会委員 委員
2008年～	一般社団法人光産業技術振興協会 JIS規格 光受動部品標準化部会 委員

V 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
学都「仙台・宮城」サイエンス・デイ2022	東北大学川内キャンパス	2022年7月	
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

VI 学内における管理運営に関する諸活動

2022年度							
所属	工学部 機械知能工学科	職名	教授	氏名	矢口 博之	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
Development of a new vibration actuator for inspection of large iron structures	単独	2022年11月	The Eight International Conference on Structure, Engineering & Environment(Yotsukaiti (Japan))	Hiroyuki Yaguchi			
A new type electromagnetic-vibration pump with high efficiency and flow rate	共同	2022年11月	The Eight International Conference on Structure, Engineering & Environment(Yotsukaiti (Japan))	Hiroyuki Yaguchi, Takuya Watanabe and Toshiki Mishina			
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要			
競争的資金等の外部資金による研究		2022年度~2023年度	個別(研究代表者)				
IV 学会等及び社会における主な活動							
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等			
現在の課題・目標							

今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	
VI 学内における管理運営に関する諸活動	

2022年度							
所属	工学部 機械知能工学科	職名	准教授	氏名	岡田 宏成	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
予習レポートのオンライン化と出題方法の改善		2022年					
復習演習のオンライン化と出題方法の改善		2022年					
復習演習のオンライン化		2021年～					
予習レポートのオンライン化		2021年～					
実験課題のオンライン化		2020年～		自然科学実験ファンダメンタルズの物理学実験テーマに関するスライドと動画を作成して、オンタイム/オンデマンドでの受講を可能にした。			
講義ノートのスライド化		2020年～		オンライン授業に対応するために講義ノートのスライド化した。それに伴って図や表も追加してより充実した講義内容に改善した。			
manabaを利用したオンライン学修		2020年～		manabaの小テスト、ドリル機能を利用して講義内容の予習復習を促すための課題の提出を行った。			
工学基礎教育センター利用の促進		2020年～		小テストなどの成績が不振な学生に対し、工学基礎教育センター学習相談コーナーを利用する補習レポートを課した。			
レポートのプレゼンテーション化		2020年～		毎回の講義内容に関するレポート課題を、書画カメラやプロジェクターを用いたプレゼン形式で評価した。そのための課題内容や評価方法を前年度の方法より改善した。			
復習用のパワーポイント資料の作成		2020年～		プロジェクターを使用した復習用パワーポイント資料を作成して、毎回の講義の冒頭で、前回の講義内容を視覚的に復習した。			
予習・復習を促すための講義毎の課題の作成とその評価		2020年～		今回の講義内容に関する復習問題と、次回の講義内容に関する予習問題をレポートの課題として毎回提出した。講義の冒頭で復習問題の解説を行い、予習問題に沿った内容で講義を進めた。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
多賀城市教育委員会との共催事業での講師		2022年8月5日～2022年8月5日					
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							

多元系合金Al-Nb-Ti-V-Zrの相安定性と超伝導特性に対するAl置換効果	共同	2023年3月	日本金属学会(東京都目黒区, 東京大学駒場Iキャンパス)	山内達寛、沼田裕次郎、岡田宏成、淡路智	
V-Nb-Ti合金における超伝導特性の格子体積効果	共同	2022年9月	日本金属学会(福岡県福岡市, 九州工業大学)	山内達寛、岡田宏成、淡路智	
H. 翻訳(学術書や原典等)					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)					
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要		
IV 学会等及び社会における主な活動					
2008年～	日本高学力学会 会員				
2004年～	日本磁気学会 会員				
2003年～	日本物理学会 会員				
1999年～	日本金属学会 会員				
V 芸術分野や体育実技等における主な活動					
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等		
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
VI 学内における管理運営に関する諸活動					

2022年度							
所属	工学部 機械知能工学科	職名	准教授	氏名	佐瀬 一弥	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Automatic assessment of laparoscopic surgical skill competence based on motion metrics	共著	2022年	PLoS one, 17(11)	Koki Ebina, Takashige Abe, Kiyohito Hotta, Madoka Higuchi, Jun Furumido, Naoya Iwahara, Masafumi kon, Kou Miyaji, Sayaka Shibuya, Yan Lingbo, Shunsuke Komizunai, Yo Kurashima, Hiroshi Kikuchi, Ryuji Matsumoto, Takahiro Osawa, Sachiyo Murai, Teppei Tsujita, Kazuya Sase, Xiaoshuai Chen, Atsushi Konno, Nobuo Shinohara	pp.1-13		
Basic Experiments toward Mixed Reality Dynamic Navigation for Laparoscopic Surgery	共著	2022年	Journal of Robotics and Mechatronics, 34(6)	Xiaoshuai Chen, Daisuke Sakai, Hiroaki Fukuoka, Ryosuke Shirai, Koki Ebina, Sayaka Shibuya, Kazuya Sase, Teppei Tsujita, Takashige Abe, Kazuhiko Oka, Atsushi Konno	pp.1253-1267		
Moving Particle Semi-Implicit and Finite Element Method Coupled Analysis for Brain Shift Estimation	共著	2022年	Journal of Robotics and Mechatronics, 34(6)	Akito Ema, Xiaoshuai Chen, Kazuya Sase, Teppei Tsujita, Atsushi Konno	pp.1306-1317		

Objective evaluation of laparoscopic surgical skills in wet lab training based on motion analysis and machine learning	共著	2022年	Langenbeck's Archives of Surgery, 407(5)	Koki Ebina, Takashige Abe, Kiyohito Hotta, Madoka Higuchi, Jun Furumido, Naoya Iwahara, Masafumi Kon, Kou Miyaji, Sayaka Shibuya, Yan Lingbo, Shunsuke Komizunai, Yo Kurashima, Hiroshi Kikuchi, Ryuji Matsumoto, Takahiro Osawa, Sachiyo Murai, Teppei Tsujita, Kazuya Sase, Xiaoshuai Chen, Atsushi Konno, Nobuo Shinohara	pp.2123-2132
Numerical Calculation Method for Brain Shift Based on Hydrostatics and Dynamic FEM	共著	2022年	IEEE Transactions on Medical Robotics and Bionics, 4(2)	Xiaoshuai Chen, Ryosuke Shirai, Ken Masamune, Manabu Tamura, Yoshihiro Muragaki, Kazuya Sase, Teppei Tsujita, Atsushi Konno	pp.368-380
Development and validation of a measurement system for laparoscopic surgical procedures in practical surgery training	共著	2022年	Proceedings of 2023 IEEE/SICE International Symposium on System Integration (SII)	Ebina Koki, Takashige Abe, Kiyohiko Hotta, Madoka Higuchi, Jun Furumido, Naoya Iwahara, Masafumi Kon, Shunsuke Komizunai, Yo Kurashima, Hiroshi Kikuchi, ryuji Matsumoto, Takairo Osawa, Sachiyo Murai, Teppei Tsujita, Kazuya Sase, Xiaoshuai Chen, Nobuo Shinohara, Atsushi Konno	pp.1-6
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)					
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)					
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)					
G. 学会における研究発表					
内視鏡下副鼻腔手術の技量評価手法の検討	共同	2022年12月	第23回計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会(千葉)	山田 海俊, 鈴木 正宣, 宮路 洸, 佐瀬 一弥, 海老名 光希, 辻田 哲平, 陳 曉帥, 安部 崇重, 中丸 裕爾, 妹尾 拓, 小水内 俊介, 本間 明宏, 近野 敦	
仮想空間での血管吻合時の手技再現のための針による血管の変形シミュレーション	共同	2022年12月	第23回計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会(千葉)	須田 智輝, 陳 曉帥, 近野 敦, 佐瀬 一弥, 辻田 哲平, 岡 和彦	
手術ナビゲーションのための臓器重畳表示位置合わせシステムの開発	共同	2022年12月	第23回計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会(千葉)	澁谷 紗也華, 佐瀬 一弥, 陳 曉帥, 辻田 哲平, 小水内 俊介, 妹尾 拓, 近野 敦	

内視鏡下副鼻腔手術の技量評価手法の検討	共同	2022年12月	第23回計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会(千葉)	山田 海俊, 鈴木 正宣, 宮路 洸, 佐瀬 一弥, 海老名 光希, 辻田 哲平, 陳 曉帥, 安部 崇重, 中丸 裕爾, 妹尾 拓, 小水内 俊介, 本間 明宏, 近野 敦	
脳神経外科手術のためのくも膜を考慮した脳モデルを用いた脳変形シミュレーション	共同	2022年12月	第23回計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会(千葉)	高橋 優里, 陳 曉帥, 佐瀬 一弥, 辻田 哲平, 近野 敦, 岡 和彦	
実践的な腹腔鏡手術訓練技量評価のための手技計測システム開発と検証	共同	2022年12月	第23回計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会(千葉)	海老名 光希, 安部 崇重, 堀田 記世彦, 樋口 まどか, 古御堂 純, 岩原 直也, 今 雅史, 小水内 俊介, 倉島 庸, 菊地 央, 松本 隆児, 大澤 崇宏, 村井 祥代, 辻田 哲平, 佐瀬 一弥, 陳 曉帥, 妹尾 拓, 篠原 信雄, 近野 敦	
触覚分布提示のための指変形シミュレーション手法の検討と実験による評価	共同	2022年12月	第23回計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会(千葉)	加藤 明樹, 佐瀬 一弥, 永野 光, 昆陽 雅司	
指腹部高解像吸引触覚ディスプレイによる把持感覚の再現	共同	2022年12月	第23回計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会(千葉)	森田 夏実, 昆陽 雅司, 永野 光, 佐瀬 一弥, 田所 諭	
触覚を付与した影インタフェースによるドラッグ操作	共同	2022年11月	日本バーチャルリアリティ学会ハプティクス研究委員会第29回研究会(福岡)	打矢 峻, 佐瀬 一弥	
触覚分布提示のための実時間指変形シミュレーション手法の検討	共同	2022年11月	日本バーチャルリアリティ学会ハプティクス研究委員会第29回研究会(福岡)	加藤 明樹, 佐瀬 一弥, 永野 光, 昆陽 雅司	
指腹部高解像吸引触覚ディスプレイによる把持感覚の再現 第3報 吸引刺激の知覚とひずみエネルギー分布の関係の調査	共同	2022年9月	第27回日本バーチャルリアリティ学会大会(札幌)	森田 夏実, 昆陽 雅司, 永野 光, 佐瀬 一弥, 田所 諭	
指先への触覚分布レンダリングにおけるバーチャルカップリングの必要性	共同	2022年9月	第27回日本バーチャルリアリティ学会大会(札幌)	佐瀬 一弥, 加藤 明樹, 森田 夏実, 一條 暁生, 永野 光, 昆陽 雅司	
指腹部高解像吸引ディスプレイによる把持感覚の再現 第4報: 1指への力触覚同時提示と硬軟感提示性能の評価	共同	2022年9月	第27回日本バーチャルリアリティ学会大会(札幌)	一條 暁生, 森田 夏実, 永野 光, 佐瀬 一弥, 昆陽 雅司, 田所 諭	
腹腔鏡手術トレーニングのための機械学習を用いた技能別スコア評価システムの開発	共同	2022年9月	第40回日本ロボット学会学術講演会(東京)	海老名 光希, 安部 崇重, 堀田 記世彦, 樋口 まどか, 古御堂 純, 岩原 直也, 今 雅史, 小水内 俊介, 倉島 庸, 菊地 央, 松本 隆児, 大澤 崇宏, 村井 祥代, 辻田 哲平, 佐瀬 一弥, 陳 曉帥, 篠原 信雄, 近野 敦	
HoloLens 2を用いた血管吻合時の手技記録と仮想空間での再現	共同	2022年9月	第40回日本ロボット学会学術講演会(東京)	庄司 大朗, 陳 曉帥, 近野 敦, 辻田 哲平, 佐瀬 一弥, 岡 和彦	
腹腔鏡手術ナビゲーションのための臓器把持・剥離動作の複合現実シミュレーション	共同	2022年6月	ロボティクス・メカトロニクス講演会2022(札幌)	澁谷 紗也華, 佐瀬 一弥, 陳 曉帥, 小水内 俊介, 辻田 哲平, 近野 敦	
指腹部高解像吸引触覚ディスプレイによる把持感覚の再現 第2報: 吸引刺激による2点弁別閾の同定	共同	2022年6月	ロボティクス・メカトロニクス講演会2022(札幌)	森田 夏実, 昆陽 雅司, 永野 光, 佐瀬 一弥, 田所 諭	

指先への6自由度力覚提示のための冗長な受動関節を有するパラレルリンク機構の検討	共同	2022年6月	ロボティクス・メカトロニクス講演会 2022(札幌)	Kang Junhu, 永野 光, 佐瀬 一弥, 昆陽 雅司, 田崎 勇一, 横小路 泰 義	
腹腔鏡下手術支援システムを目指した複合現実技術による肝臓モデルの重畳表示	共同	2022年6月	ロボティクス・メカトロニクス講演会 2022(札幌)	小笠原 健太, 陳 暁帥, 佐瀬 一弥, 辻田 哲平, 近野 敦	

H. 翻訳(学術書や原典等)

I. 特許

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
科学研究費補助金 若手研究	2022年度～2025年度	個別(研究代表者)	
科学研究費補助金 基盤研究(A)	2021年度～2023年度		
科学研究費補助金 科研費 基盤研究(C)	2017年度～2021年度	共同(研究分担者)	新規な脳組織圧排器具の開発

IV 学会等及び社会における主な活動

2023年1月	サイエンスデイ in 多賀城 2022にて体験講座とオンライン講座を出展
2022年8月	エフエム仙台ラジオ番組「Hope for MIYAGI」出演 出演
2022年7月	学都「仙台・宮城」サイエンス・デイ2022にて体験講座を出展
2022年6月～2022年7月	第34回知能ロボットコンテスト2022 運営補助。
2020年1月～	日本バーチャルリアリティ学会 ハプティクス研究委員会 幹事
2018年1月～	計測自動制御学会 触覚部会 委員

V 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

VI 学内における管理運営に関する諸活動

2022年度							
所属	工学部 機械知能工学科	職名	准教授	氏名	濱西 伸治	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
東北文化学園大学 知能情報システム特別講義「スポーツバイオメカニクスの最前線」		2022年6月9日					
現在の課題・目標		コロナ禍での講義方法はオンライン授業であったが、2022年度は主に対面授業となった。そこで、オンラインと対面のそれぞれの長所を活かした講義を展開するための工夫を検討する。					
今年度の進捗状況		コロナ禍以前は毎回の講義のレポート提出は紙媒体であったが、コロナ禍後の対面授業では全てmanabaおよびresponでの提出とした。ただし、15回の講義のうち、2回の「確認テスト」では、評価の公平性の観点から紙媒体とせざるを得なかった。					
来年度の進捗目標		上記の確認テストでも、manabaでの提出を検討する。単に知識や計算能力を問うのではなく、「(答えのない)課題に対するアプローチ」を評価する内容としたい。そのために、ネットや書籍の利用を一律に禁止するのではなく、むしろ積極的にそれらアプローチのための「引き出し」として利用してもらうことを意図・想定している。					
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
剣道難聴予防のための高機能サポーターの提案		単独	2022年9月	第55回 日本武道学会(横浜市)		濱西伸治	
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		<p>「新生児耳疾患スクリーニング装置の開発と新生児外耳・中耳モデルを用いたシミュレーション」 数分間を要していたこれまでの計測時間の短縮化を図る。またこれらの計測結果を検証するための有限要素法外耳・中耳モデルによる動特性シミュレーションを行う。</p> <p>「コンタクトスポーツ難聴予防のための衝撃低減サポーターの提案」 3Dプリンタを用いて衝撃を低減するためのサポーターの試作と試装を行う。</p> <p>「簡易型耳管開放症検出装置の開発」 耳管開放症の患者の計測データを検証するための食道・口腔・鼻腔モデルによるシミュレーションを行う。</p>					

<p>今年度の進捗状況</p>	<p>「新生児耳疾患スクリーニング装置の開発と新生児外耳・中耳モデルを用いたシミュレーション」 音刺激を純音の周波数の掃引から、多くの周波数成分を含んだホワイトノイズに変更することで、計測時間の短縮化に成功した。また有限要素法外耳・中耳モデルによるシミュレーションでは、鼓膜と中耳を覆う「中耳腔」をモデルに組み込んだ。しかし、現状では実際の計測結果とはやや異なる特性となっている。</p> <p>「コンタクトスポーツ難聴予防のための衝撃低減サポーターの提案」 アメフトのヘルメット用のサポーター、および剣道の面防具用のサポーターの試作を行い、打撃実験により、どちらも高い衝撃低減効果を得た。</p> <p>「簡易型耳管開放症検出装置の開発」 食道・口腔・鼻腔モデルによるシミュレーションにより、実際の耳管開放症の患者の嚥下時の音声波形の周波数特性を再現することに成功した。</p>		
<p>来年度の進捗目標</p>	<p>「新生児耳疾患スクリーニング装置の開発と新生児外耳・中耳モデルを用いたシミュレーション」 中耳の各部位のパラメータ(ヤング率や密度など)を変化させて、実際の新生児における動特性と同様の結果となるように解析を行う。</p> <p>「コンタクトスポーツ難聴予防のための衝撃低減サポーターの提案」 アメフト用のサポーターについては、東北大学アメフト部ヘッドコーチの助言・協力を得ながら、ヘルメットに組み込む予定である。また、剣道用のサポーターについては、濱西が発起人となり、強豪大学の監督・指導者とともに『未来の剣道に関する研究懇話会』を立ち上げ、情報交換を行っている。来年度はその規模と頻度を大きくする予定である。(いずれも特許申請予定)</p> <p>「簡易型耳管開放症検出装置の開発」 モデルの各部位のパラメータ(ヤング率・粘性)と耳管開放症の重症度との関係を明らかにする。</p>		
<p>Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)</p>			
<p>競争的資金の名称</p>	<p>採用年度(西暦)</p>	<p>個別・共同の区分 共同の場合の役割分担</p>	<p>概 要</p>
<p>科学研究費補助金 基盤研究(C)</p>	<p>2020年度～</p>	<p>個別(研究代表者)</p>	<p>頭部に繰り返し激しい衝撃が加わるコンタクトスポーツにおいて、多数の難聴患者が報告されている。これまでの私たちの取り組みにより、その原因は長年にわたり頭蓋骨に過大な骨導が伝わることにより発症する可能性が非常に高まってきた。私たちはこのような難聴を「コンタクトスポーツ難聴」として新たに定義・提唱し、その発症メカニズムを打撃実験およびシミュレーションにより解明することを試みる。また、我々が独自に開発した衝撃低減サポーターに、過大な骨導を検知・警告する機能を付加し、練習や試合時にヘルメット等に装着することで脳震盪を未然に予防する次世代型サポーターの開発を試みる。</p>
<p>Ⅳ 学会等及び社会における主な活動</p>			
<p>2021年4月～</p>		<p>日本機械学会 バイオエンジニアリング部門 東北支部 商議員</p>	
<p>2003年4月～</p>		<p>日本機械学会 バイオエンジニアリング部門 会員</p>	
<p>Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動</p>			
<p>展覧会・演奏会・競技会等の名称</p>	<p>場 所</p>	<p>開催年月日(西暦)</p>	<p>発表・展示等の内容等</p>
<p>現在の課題・目標</p>		<p>工学部剣道部の現役員とOBとの交流の促進。 新入部員の確保。</p>	
<p>今年度の進捗状況</p>		<p>工学部60周年(多賀城キャンパス最後の年)を記念し、多賀城キャンパス体育館において工学部剣道部OBとの交流稽古会を開催した。</p>	
<p>来年度の進捗目標</p>		<p>五橋キャンパスへの移転後も工学部剣道部として活動を継続することにしたため、体育会剣道部の協力を得ながら、稽古場所の確保を図る。 2023年4月に剣道7段の受審資格が得られるため、合格を目指す。</p>	
<p>Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動</p>			

入試部副部長

広報・HP委員(「工学部ガイド」とりまとめ)

機械知能工学科3学年グループ主任

工学部学生会 剣道部顧問

工学部学生会 ソフトテニス部顧問

工学部学生会 弓道部顧問

2022年度							
所属	工学部 機械知能工学科	職名	准教授	氏名	李 淵	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概 要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
教育方法の工夫		2022年4月1日		教育内容の特徴に合わせて、少人数履修と多人数履修を分けて対応し、質問・課題・ショットテスト等を介して、学生に興味を持たせることに努力している。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
講義説明資料の改善		2021年4月1日～					
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Dendrite-like Cu-based micro/nanomaterials fabricated on insulators by shielding ion transportation during electrochemical migration	共著	2022年6月	Materials Letters, 324	Takahisa Sugawara, Yasuhiro Kimura, Yuan Li	pp.132737		
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
Fabrication of Metal-based Nanoparticles for Electrically Conductive Fabrics	単独	2022年12月	The 17th Asia-Pacific Conference on Fracture and Strength and the 13th Conference on Structural Integrity and Failure (APCFS 2022 & SIF 2022)(Hybrid (The University of Adelaide, Adelaide, South Australia/Online))	Yuan Li			
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要				

その他の補助金・助成金	2021年度～2022年度	個別(研究代表者)	
IV 学会等及び社会における主な活動			
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	工学部 電気電子工学科	職名	教授	氏名	岩谷 幸雄	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要			
IV 学会等及び社会における主な活動							
2020年5月～			日本音響学会2020年秋季研究発表会 遠隔開催実行委員長 会員				
2020年1月～			Chair of IEEE SPS Sendai chapter 委員				
2019年5月～			日本音響学会理事 会員				
2017年3月～			仙台市環境影響評価審査会委員 委員				
2015年10月～			国際計量研究連絡委員会 音響・超音波・振動分科会委員 委員				
2014年5月～			情報処理学会東北支部運営委員 会員				
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							

来年度の進捗目標	
VI 学内における管理運営に関する諸活動	

2022年度							
所属	工学部 電気電子工学科	職名	教授	氏名	大場 佳文	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要			
IV 学会等及び社会における主な活動							
1996年6月～			電気学会会員 会員				
1987年5月～			電子情報通信学会会員 会員				
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
VI 学内における管理運営に関する諸活動							

2022年度							
所属	工学部 電気電子工学科	職名	教授	氏名	小澤 哲也	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要			
IV 学会等及び社会における主な活動							
2020年4月～			電気学会東北支部役員 会員				
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
VI 学内における管理運営に関する諸活動							

2022年度							
所属	工学部 電気電子工学科	職名	教授	氏名	郭 海蛟	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
演習科目における工夫		2022年4月1日～2023年3月31日		演習科目の場合、課題を出して解いてから解説をする前に、いくつか特徴のある学生達のミスの例について、学生の同意のもとで皆に示す。そのミスの理由とミス避ける方法の説明を加えました。			
学生実験に関する工夫		2022年4月1日～2023年3月31日		学生達により実験について理解させるために、自分の実験だけではなく、他人の実験にミスがある場合にもすべての学生達に集まって、そのミスの原因と解決方法を教えるように工夫した。			
ハイブリッド型授業の工夫		2022年4月1日～2023年3月31日		今年度も引き続きオンデマンドと対面形式の混合型の授業でした。前年度はオンデマンドであれば、資料を公開し、対面形式の場合は資料を公開しないという形でしたが、今年度は対面形式にも資料を公開した。学生達の復習などにも使えるようになった。但し、学生達が授業時にメモが取らなくなる可能性がある。その対応も考える必要があるのではと。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
A Basic Study on the Stability of Discrete Time Repetitive Control Systems		共著	2022年5月	The 13th Asian Control Conference (ASCC2022, Jeju Island, Korea)		Haijiao Guo, Kazuki Otomo, Tadashi Ishihara	pp.2054-2058
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)		個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要	
IV 学会等及び社会における主な活動							

2014年～	計測自動制御学会東北支部運営委員会顧問 会員		
2012年～	SICE エネルギー・環境システム制御技術調査研究会委員 委員		
2010年～	IEEE Senior Member 委員		
1995年～	IEEE		
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	工学部 電気電子工学科	職名	教授	氏名	川又 憲	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
電気電子工学の体系化された講義、演習、さらには実験・実習科目のより効果的な知識定着と、学習効果の向上に向け、当該分野のカリキュラム・マップの整備を継続して行っている。		2022年4月1日～2023年3月31日					
学生の能動的な学習によるアクティブ・ラーニングを推進するため、専門分野の演習課題に対する取り組みの機会、ならびに実験・実習による学びの機会を連携させ、確実な知識定着を図る取り組みを継続して実施している。本年度は製図科目におけるラーニング教材の材料検討を行った。		2022年4月1日～2023年3月31日					
より効果的な知識定着をおこなうため、学生自らの自主学習を促すための授業システムの構築を継続して進めている。本年度は担当が予測される新学科学科目において、予習・復習課題の設定を行った。		2022年4月1日～2023年3月31日					
より効果的な知識定着をおこなうため、学生自らの自主学習を促すための授業システムの構築を継続して進めている。本年度は演習および実験系の科目において、自学による予習・復習課題の設定を行う。		2020年4月1日～		授業における学習内容、課題を持ち帰り、日常的に自主学習が行われるよう、授業システムの整備を継続して進めている。課題は、なるべく学生が取り組みやすいように工夫し、第一段階は昨年度まで自主的な学習機会の定着を目指した。特に自主的な演習問題の取り組みにより確実な実力が定着するための方法について検討した。2020年度においては、動画によるオンデマンド授業資料の作成を行い、本年度ではこれらの資料の改訂を行い、より効果的な自主学習プログラムの構築を行う。			
学生の能動的な学習によるアクティブ・ラーニングを推進するため、専門分野の演習課題に対する取り組みの機会、ならびに実験・実習による学びの機会を連携させ、確実な知識定着を図る。		2020年4月1日～		アクティブラーニングの一環として、演習科目での学生自身の能動的な課題取り組みに加え、板書による解法のプレゼンテーションを行わせ、他の学生に「教え・伝える」プロセスを設けて、より効果的な知識定着を行えるよう務めている。また、実験・実習系科目にける主体的な学習ならびに考察力の向上を進めるための改題設定を行っている。演習科目では、学生の問題解決力を向上させるため、効果的な演習課題の絞り込みを行っている。本年度においては実験の補助資料として学生実験テーマの動画資料を作成し、オンデマンドにて公開した。			
情報工学分野の体系化された講義、演習、さらには実験・実習科目のより効果的な知識定着と、学習効果の向上に向け、情報通信工学分野のカリキュラム・マップの整備を行っている。		2020年4月1日～		体系化された情報通信工学分野において、知識伝達型の講義科目と、基礎問題の解決能力を身につける演習科目、さらには課題解決力を身につける実験・実習科目のカリキュラム体系に従って、各科目の位置づけおよび科目間の連携を意識させるための説明の強化を進めている。本年度は2018年からスタートした通信工学基礎Ⅰ、Ⅱならびに情報通信工学実験のカリキュラム上の連携を再確認し、カリキュラムと内容の整合の確認、改善点の抽出、次回カリキュラム変更に向けた改正点について検討した。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
電気電子工学実験の実験教材整備および指導資料作成		2022年4月1日～2023年3月31日		新たに担当する電気電子工学実験Ⅰの講義資料の整備を行い、実験テーマの理論的ポイントを実験課題によって理解できるよう、実験指針について整備を行った。			
電気機械設計製図科目の講義教材および資料作成		2022年4月1日～2023年3月31日		新たに担当する電気設計製図科目について、非常勤講師と連携して、講義教材及び講義実施計画の整備を行った。さらに、新キャンパスの講義室環境に合わせた資料ディスプレイ方法の整備を進め、効果的に資料を活用し、理解度を向上させる方法について検討を行った。			
情報基盤工学科科目「情報通信工学実験Ⅰ、Ⅱ」に関する実験指導資料の整備と実験テーマの構築		2020年4月1日～		3年生の科目となる「情報通信工学実験Ⅰ」および「情報通信工学実験Ⅱ」において、実験導資料を作成すると共に座学講義との関係整備を行った。さらに、開講一年目にて実験課題の整備、実験指導書の作成、レポートの管理法などについて、授業の構築作業と実施を行った。また、本年度は実験に関する動画資料の作成を行い、実験指導の補助資料を充実させた。			

情報基盤工学科科目「通信工学基礎Ⅰ,Ⅱ」に関する講義資料の整備と改訂	2020年4月1日～	「通信工学基礎Ⅰ」および「通信工学基礎Ⅱ」において、講義資料の整備を行った。さらに、内容の見直しを行い、資料の改定作業を継続して進めている。また、通信工学基礎演習Ⅰについては、演習解法に関する動画資料の作成を行った。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4. その他教育活動上特記すべき事項					
講義科目および実験科目に関する動画資料の作成	2020年4月1日～	感染症予防の観点から実施される遠隔授業に対応するため、各担当科目の動画配信資料の作成を行った。			
ノートPCとバーコードリーダーによる授業出席管理システムの構築と運用	2020年4月1日～	必修等の主要科目への出席を促すため、授業への出席をとることとしている。この際、学生証のバーコードをリーダーで読み取り、PCで出欠状況を管理できるシステムを構築し、運用している。これにより、長期欠席者へのアラームや、出欠状況の把握が容易になった。本システムを継続的に運用している。			
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
II 研究活動					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)					
Improvement of Broadband Folded Long-Hexagon Antenna for EMI Measurements	共著	2022年12月	2022 Asia-Pacific Microwave Conference, TH3-F5	Keita Kobayashi, Shinobu Ishigami, Ken Kawamata, Katsushige Harima, Shingo Inori	pp.426-428
Comparative analysis of electric arc by simulation tests and practical measurements of a simple relay	共著	2022年9月	Proc. of 23rd International conference Computational Problems of Electrical Engineering (CPEE 2022)	Piotr Zych, Konrad Sobolewski, Jan Sroka, Radoslaw Roszczyk, Ken Kawamata	pp.1-4
Distance Characteristics of Field Peak Value of Transient Electric Field Caused by Sphere-Gap ESD Using a Optical E-Field Probe	共著	2022年9月	Proc. of Int'l Symposium on Electromagnetic Compatibility Europe, OS-11-4	Ken Kawamata, Shinobu Ishigami, Osamu Fujiwara	pp.1-4
Measurement of Transient Waveform Caused by ESD Using a Wideband Folded Long-Hexagon Antenna	共著	2022年9月	Proc. of 2022 Asia-Pacific Electromagnetic Compatibility (APEMC 2022), China, SA-AM2-SS09-01/On-Line Hybrid	Ken Kawamata, Shinobu Ishigami, Osamu Fujiwara	pp.SS09-01-1
The Phenomena of Bursts by Opening Low-Voltage Relay	共著	2022年8月	Energies 2022, Volume 15, Issue 17, 6155, 15(17, 6155)	Piotr Zych, Radoslaw Roszczyk, Jan Sroka, Ken Kawamata	pp.1-9
独立成分分析を用いた複数の電磁雑音波形抽出の検討	共著	2022年8月	電子情報通信学会論文誌, J105-B(8)	高橋 直央, 石上 忍, 川又 憲	pp.613-620
放射妨害波測定用超広帯域アンテナの設計・開発	共著	2022年6月	電子情報通信学会論文誌, J105-B(6)	石上 忍, 石崎 利弥, 小林 圭太, 川又 憲, 張間 勝茂, 禰 真悟	pp.458-465
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)					
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)					
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳(学術書や原典等)					

I. 特許			
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
IV 学会等及び社会における主な活動			
2020年4月～		「ESD現象のEMC的解明のための計測・評価技術調査専門委員会」委員 会員	
2020年4月～		電気学会基礎・材料部門 電磁環境技術委員会 会員	
2017年10月～		(公)全日本学生スキー連盟, 教育本部, 専門委員, 運営委員会委員 委員	
2009年4月～		電気学会 基礎・材料・共通部門 電磁環境技術委員会1号委員 会員	
2006年4月～		日本学術会議電気電子工学委員会URSI分科会「電磁波の雑音・障害」小委員会 (URSI-E委員会) 委員	
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	工学部 電気電子工学科	職名	教授	氏名	金 義 鎮	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概 要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要			
科学研究費補助金 基盤研究(C)		2021年度～2023年度	共同(研究代表者)				
IV 学会等及び社会における主な活動							
2017年～		映像情報メディア学会 ※ 東北支部庶務幹事					
2010年4月～		映像情報メディア学会 ※ 会員					
2008年～		コンピュータ利用教育学会 会員					
2006年～		教育システム情報学会 会員					
1998年～		電子情報通信学会 会員					
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							

来年度の進捗目標	
VI 学内における管理運営に関する諸活動	

2022年度							
所属	工学部 電気電子工学科	職名	教授	氏名	呉 国紅	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
学生の科学知識の修得, 良い人格の育成と研究能力の向上の重視		2022年4月1日～2023年3月31日					
英語教材を利用した専門知識の教育		2022年4月1日～2023年3月31日					
学生の授業参加の意欲の促進と独自の授業評価の実施		2022年4月1日～2023年3月31日					
授業の秩序を維持し学生の学習意欲を刺激するインセンティブ		2022年4月1日～2023年3月31日					
学生が分かりやすく, 勉強しやすい授業のやり方の工夫		2022年4月1日～2023年3月31日					
学習した内容の記憶への定着と授業理解の促進		2022年4月1日～2023年3月31日					
学習する内容の明確化と学生を授業に集中させる工夫		2022年4月1日～2023年3月31日					
2. 作成した教科書, 教材, 参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表, 講演等							
第20回東北地域研究交流会 電気系学科における電力・エネルギー分野での教育研究の取り組み		2022年11月29日					
2022年度工学に関わる啓発活動(コラボ授業)		2022年9月					
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		<ul style="list-style-type: none"> ・授業中に学生とのコミュニケーション時間を増やすこと ・授業時間以外で学生とのコミュニケーションの機会をもっと多く作ること ・自分の研究室所属以外の学生達とのコミュニケーションも増やすこと 					
今年度の進捗状況		<ul style="list-style-type: none"> ・特に専門科目のよう対面講義では, 学生がそもそももっていた知識の少ないため, 積極的に質問したり, 発言したりすることが少ない傾向がある。これを考慮して, 授業中に学生が答えやすい質問を用意し, 状況に応じて教員のほうが学生に答えさせる対策などを講じて, 授業の雰囲気を活発させる努力をした。 また, Manabaなどのオンラインツールを活用して, 個別に学生の質問に対応している。 ・食堂や学校活動の場において, 積極的に学生と会話, 交流を行い, 学生の心情, 考えなどを理解することを努力している。 ・Manabaを用いて, 授業に関するアンケートを行い, 学生からのフィードバックを把握し, 今後の授業の改善に利用している 					
来年度の進捗目標		今までに学生に評価された点を継続しつつ, 更に学生との接触する機会を作ることおよび多様な授業方式を積極的に採用すること					
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所, 発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							

G. 学会における研究発表					
5段MMCC構成を用いた6.6[kV]配電用トランスレスSTATCOMの構築に関する研究	共同	2023年3月	2023年度電気学会全国大会(日本名古屋市)	田村 祐介, 呉 国紅	
PMSG発電を用いたDCリンク方式洋上風力送電システムに関する研究	共同	2023年3月	2023年度電気学会全国大会(日本名古屋市)	小室 陸, 呉 国紅	
GAとDEアルゴリズムを用いたマイクログリッドの最適経済運用計画手法に関する研究	共同	2023年3月	2023年度電気学会全国大会(日本名古屋市)	高野 光二, 呉 国紅	
A New PFC Method for Optimal Operation of Distribution System with PV Generations	共同	2022年8月	2022年度電気関係学会東北支部連合大会(日本宮城県)	Yusuke Tamura, Guohong Wu	
直流集電方式による多端子自励式HVDC構成の洋上風力発電の研究	共同	2022年8月	2022年度電気関係学会東北支部連合大会(日本宮城県)	小室 陸, 呉 国紅	
A Study on the Optimal Economic Operation of Microgrids using DEPSO	共同	2022年8月	2022年度電気関係学会東北支部連合大会(日本宮城県)	Kouji Takano, Guohong Wu	
H. 翻訳(学術書や原典等)					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)					
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要		
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動					
2022年4月～		パワーアカデミーPA運営委員 運営参加・支援			
2021年4月～2023年3月		日本電気学会 東北支部役員 監事			
2018年12月～		IEEE Tran. On Smart Grid論文審査委員会 委員			
2018年9月～		IEEE Tran. On Sustainable Energy論文審査委員会 委員			
2017年10月～		IET Generation, Transmission & Distribution論文審査委員会 委員			
2017年4月～		International Tran. on Electrical Energy Systems論文審査委員会 委員			
2016年8月～		東北学院大学工学総合研究所中学校啓発活動 講師, 実演			
2016年8月～		日本電気学会上級会員 会員			
2015年11月～		IEEE Senior Member 会員			
2012年8月～		International Journal of Smart Grid and Clean Energy 委員会 編集委員会委員			
2011年8月～		International Journal of Science and Engineering 委員会 編集委員会委員			
2009年8月～		電気学会東北支部連合大会 パネル司会・セッションチェア等			
2007年11月～		日本電設工業協会と教職員・学生の懇談会 情報提供, 運営参加・支援			
2006年8月～		電気学会電力・エネルギー部門YPC審査委員 会員			
2005年8月～		電気学会電力・エネルギー部門論文誌審査委員 会員			
1996年4月～		日本電気学会 会員			
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動					
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等		
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動					

2022年度							
所属	工学部 電気電子工学科	職名	教授	氏名	佐藤 文博	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概 要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
遠隔講義に関する効果的な手法		2020年～		オンデマンド, オンライン講義における特性を最大限に利用した, 学習意欲を高める工夫を行っている.			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要			
IV 学会等及び社会における主な活動							
2011年4月～			国土交通省宮城ブロック総合委員 委員				
2010年4月～			照明学会東北支部会計幹事 会員				
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
VI 学内における管理運営に関する諸活動							

2022年度							
所属	工学部 電気電子工学科	職名	教授	氏名	嶋 敏之	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進		2021年4月1日～2023年3月31日		毎回の授業の冒頭で、前回の復習とその回の概略を必ず説明し、授業終了時にはその回のまとめを行っている。			
ナノテクノロジー工学に最先端技術を理解するための自学自習時間を取り入れた		2021年4月1日～2023年3月31日		3年生向けの講義において、次世代薄型ディスプレイ(FPD)のスタンダードになりうる薄膜作製技術についての理解を深めるため、Webにより調査させ、分析させた。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		予習・復習を行っていない学生が大半を占めるが、如何に授業の内容を理解させるかの習熟度の向上を目指している。BYODも取り入れ、リアルタイムで学生の反応を感じ講義に活かす工夫を行っている。					
今年度の進捗状況		コロナ禍が収束に向かいつつ有り、対面での講義に移行したが、対面に不慣れな学生の対応も考える必要がある。そのため、BYODにより、双方向コミュニケーションが取れるようクティブラーニングを行った。					
来年度の進捗目標		講義では出来る限り学生とコミュニケーションがとれるように、積極的な姿勢で行い、マンツーマンで常に対応できる研究室の学生には満足度が向上できるようにさらに務める。しかしながら、全学的にオンライン講義も開始することから、工夫して双方向でやり取りが可能なアクティブラーニングを取り入れたい。					
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Coercivity engineering in Sm(Fe _{0.8} Co _{0.2}) ₁₂ B _{0.5} thin films by Si grain boundary diffusion		共著	2022年4月	Acta Materialia, 227		A. Bolyachkin, H. Sepehri Amin, M. Kambayashi, Y. Mori, T. Ohkubo, Y. K. Takahashi, T. Shima, K. Hono	pp.117716
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
Preparation and orientation control of FeMnS thin films with high saturation magnetization		共同	2022年11月	The 67th Annual Conference on Magnetism and Magnetic Materials (MMM 2022) (Minneapolis, USA)		R. Hikichi, M. Doi, T. Shima	
Preparation of probes for high-resolution magnetic force microscopy by orientation control of FePt layer		共同	2022年11月	The 67th Annual Conference on Magnetism and Magnetic Materials (MMM 2022) (Minneapolis, USA)		S. Watanabe, S. Nemoto, M. Doi, T. Shima	
Suppression of the formation of soft magnetic phase for Sm(Fe-Co) thin films by introducing Sm seed layer		共同	2022年11月	The 67th Annual Conference on Magnetism and Magnetic Materials (MMM 2022) (Minneapolis, USA)		Y. Mori, S. Nakatsuka, M. Kambayashi, S. Hatanaka, K., Hirayama, M. Doi, T. Shima	

FeMnS薄膜の作製とそれらの構造及び磁気特性	共同	2022年9月	日本金属学会2022年秋期(第171回)講演大会(福岡工業大学)	引地 諒、土井 正晶、嶋 敏之
Al層拡散によるSm(Fe-Co)-B薄膜の構造と磁気特性	共同	2022年9月	日本金属学会2022年秋期(第171回)講演大会(福岡工業大学)	森 裕一、畑中 辰汰朗、中塚 奏賀、平山 和樹、神林 守人、土井 正晶、嶋 敏之
元素添加によるFeMnGa系合金薄膜の構造と磁気特性	共同	2022年9月	日本金属学会2022年秋期(第171回)講演大会(福岡工業大学)	横江 翼、土井 正、嶋 敏之
人工粒界相導入によるSm(Fe-Co)-B系薄膜の磁気特性の変化	共同	2022年9月	日本金属学会2022年秋期(第171回)講演大会(福岡工業大学)	畑中 辰汰朗、森 裕一、平山 和樹、土井 正晶、嶋 敏之
FePt被覆による高解像度MFMプローブの作製	共同	2022年9月	日本金属学会2022年秋期(第171回)講演大会(福岡工業大学)	渡邊 壯真、根本 壮弥、土井 正晶、嶋 敏之
Sm(Fe-Co)-B 薄膜のAl層拡散による保磁力向上	共同	2022年9月	第46回日本磁気学会学術講演会(信州大学)	森 裕一、神林守人、畑中辰汰朗、中塚奏賀、平山和樹、土井正晶、嶋 敏之
L21-Fe _x MnGa薄膜における磁気特性のFe組成および膜厚依存性	共同	2022年9月	第46回日本磁気学会学術講演会(信州大学)	峯田 陸、渡邊彩恵、嶋 敏之、土井正晶
fcc構造を有するFe ₂ MnGa _x 合金の作製と磁気特性のGa組成依存性	共同	2022年9月	第46回日本磁気学会学術講演会(信州大学)	佐々木嘉葵、嶋 敏之、土井正晶

H. 翻訳(学術書や原典等)

I. 特許

現在の課題・目標	研究活動を行うのに十分な時間を確保するのが非常に難しいと感じている。また、エビデンスを残すための事務手続きが多いと相変わらず感じている。何とか上手に教育活動との両立を目指したい。これまで、大学院生の家計の負担軽減ならびに研究に集中できるように外部資金から出来る限り謝金として学生に拠出している。五橋キャンパスへ移転のためにスクラップ&ビルドを始めとした研究環境の再構築が急務であり、学生の基礎学術レベルを向上させ、出来る限り多くの研究成果を残す努力をする。
今年度の進捗状況	コロナ禍が収束に向かいつつあるが、燃油サーチャージの高騰により容易に国際会議へ出席するのが困難になった。そのため、未だに行動が制限され、体外的な研究アクティビティーの実行には支障があり、多くの研究活動が制限されているが、外部資金確保のために精一杯努力している。
来年度の進捗目標	研究活動の活性化のために、体外的な共同研究活動の再開する。また、注目に値すべき成果が得られるよう努力を継続的に行う予定である。また、継続して移転に向けた研究の再構築を行い、研究環境を整備しつつも出来る限り多くの研究成果を残す努力を引き続き行う。

III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
競争的資金等の外部資金による研究 データ創出・活用型マテリアル研究開発プロジェクト	2022年度～2030年度	共同(研究協力者)	

IV 学会等及び社会における主な活動

V 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標	該当せず。		
今年度の進捗状況	該当せず。		
来年度の進捗目標	該当せず。		

VI 学内における管理運営に関する諸活動

工学研究科長、研究環境改善推進委員会委員、その他各種委員

2022年度							
所属	工学部 電気電子工学科	職名	教授	氏名	土井 正晶	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
Preparation and orientation control of FeMnS thin films with high saturation magnetization	共同	2022年11月	The 67th Annual Conference on Magnetism and Magnetic Materials (MMM 2022) (Minneapolis, USA)	R. Hikichi, M. Doi, T. Shima			
Preparation of probes for high-resolution magnetic force microscopy by orientation control of FePt layer	共同	2022年11月	The 67th Annual Conference on Magnetism and Magnetic Materials (MMM 2022) (Minneapolis, USA)	S. Watanabe, S. Nemoto, M. Doi, T. Shima			
Suppression of the formation of soft magnetic phase for Sm(Fe-Co) thin films by introducing Sm seed layer	共同	2022年11月	The 67th Annual Conference on Magnetism and Magnetic Materials (MMM 2022) (Minneapolis, USA)	Y. Mori, S. Nakatsuka, M. Kambayashi, S. Hatanaka, K., Hirayama, M. Doi, T. Shima			
FeMnS薄膜の作製とそれらの構造及び磁気特性	共同	2022年9月	日本金属学会2022年秋期(第171回)講演大会(福岡工業大学)	引地 諒、土井 正晶、嶋 敏之			
Al層拡散によるSm(Fe-Co)-B薄膜の構造と磁気特性	共同	2022年9月	日本金属学会2022年秋期(第171回)講演大会(福岡工業大学)	森 裕一、畑中 辰汰朗、中塚 奏賀、平山 和樹、神林 守人、土井 正晶、嶋 敏之			
元素添加によるFeMnGa系合金薄膜の構造と磁気特性	共同	2022年9月	日本金属学会2022年秋期(第171回)講演大会(福岡工業大学)	横江 翼、土井 正、嶋 敏之			
人工粒界相導入によるSm(Fe-Co)-B系薄膜の磁気特性の変化	共同	2022年9月	日本金属学会2022年秋期(第171回)講演大会(福岡工業大学)	畑中 辰汰朗、森 裕一、平山 和樹、土井 正晶、嶋 敏之			

FePt被覆による高解像度MFMプローブの作製	共同	2022年9月	日本金属学会2022年秋期(第171回)講演大会(福岡工業大学)	渡邊 壯真、根本 壮弥、土井 正晶、嶋 敏之	
Sm(Fe-Co)-B 薄膜のAl層拡散による保磁力向上	共同	2022年9月	第46回日本磁気学会学術講演会(信州大学)	森 裕一、神林守人、畑中辰汰朗、中塚奏賀、平山和樹、土井正晶、嶋 敏之	
L21-Fe _x MnGa薄膜における磁気特性のFe組成および膜厚依存性	共同	2022年9月	第46回日本磁気学会学術講演会(信州大学)	峯田 陸、渡邊彩恵、嶋 敏之、土井正晶	
fcc構造を有するFe ₂ MnGa _x 合金の作製と磁気特性のGa組成依存性	共同	2022年9月	第46回日本磁気学会学術講演会(信州大学)	佐々木嘉葵、嶋 敏之、土井正晶	
H. 翻訳(学術書や原典等)					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)					
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要		
IV 学会等及び社会における主な活動					
V 芸術分野や体育実技等における主な活動					
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等		
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
VI 学内における管理運営に関する諸活動					

2022年度							
所属	工学部 電気電子工学科	職名	教授	氏名	栢 修一郎	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要			
IV 学会等及び社会における主な活動							
2017年1月～			日本鉄鋼協会 会員				
2009年10月～			IEEE (IEEE Magnetics Society) 会員				
2001年5月～			応用物理学会 会員				
1996年～			日本磁気学会 会員				
1995年7月～			電気学会 会員				
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							

VI 学内における管理運営に関する諸活動

2022年度							
所属	工学部 電気電子工学科	職名	教授	氏名	原 明人	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Evaluation of Polycrystalline-Si1-XGeX Thin-Film Transistors Grown Laterally on a Glass Substrate Using a Continuous-Wave Laser	共著	2022年10月	Electrical Chemical Society, ECS Transactions DOI:10.1149/10906.0059ecst, 109(6)	Akito Hara, Tatsuya Sagawa, Kotaro Kusunoki, Kuninori Kitahara	pp.59-66		
Four-terminal poly-Si thin-film transistors with high-k gate dielectric on glass substrate and its application in CMOS inverters	共著	2022年8月	2022 29th International Workshop on Active-Matrix Flatpanel Displays and Devices (AM-FPD) DOI:10.23919/AM-FPD54920.2022.9851318	Kaisei Nomura, Akihisa Nagayosi, Akito Hara	pp.142-143		
Performance of n- and p-ch self-aligned planar double-gate Cu-MIC poly-Ge TFTs on glass substrates	共著	2022年8月	2022 29th International Workshop on Active-Matrix Flatpanel Displays and Devices (AM-FPD) DOI:10.23919/AM-FPD54920.2022.9851321	Sho Suzuki, Keigo Tomizuka, Akito Hara	pp.140-141		
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
初歩から学ぶ半導体工学『初歩から学ぶ半導体工学』	単著	2022年11月	講談社	原明人	pp.1-295		
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
ガラス基板上の4端子多結晶シリコン薄膜トランジスタのpHセンサ応用	共同	2023年3月	令和4年度生体医歯工学共同研究拠点成果報告会(東京工業大学 すずかけ台)	新田誠英, 原明人, 田部井哲夫			
ガラス基板上の縦型多結晶シリコン薄膜トランジスタの開発	共同	2023年3月	令和5年東北地区若手研究者研究発表会(日本大学 工学部)	鈴木康聖、楠浩太郎、原明人			
ガラス基板上4端子 Ni-SPC 多結晶シリコン薄膜トランジスタの開発	共同	2023年3月	令和5年東北地区若手研究者研究発表会(日本大学 工学部)	伊藤悠人、永吉輝央、原明人			
ガラス基板上的縦型Cu-MIC多結晶ゲルマニウム薄膜トランジスタ	共同	2023年3月	2023年 応用物理学会 春季講演会(上智大学)	楠浩太郎, 鈴木翔, 鈴木康聖, 原明人			

ガラス基板上的多結晶Si _{1-x} Gex薄膜トランジスタ特性の膜厚依存性	共同	2023年3月	2023応用物理学会春季学術講演会(上智大学)	佐川達哉, 原明人	
High-k 4 端子 poly-Si 薄膜トランジスタによるガラス基板上CMOS インバータの低電圧動作	共同	2022年12月	応用物理学会東北支部 第77回学術講演会(東北大学)	野村海成、原明人	
Four-terminal poly-Si TFTs on glass substrates as pH sensors	共同	2022年11月	The 7th International Symposium on Biomedical Engineering(オンライン)	Masahide Nitta, Akito Hara and Tetsuo Tabei	
自己整合ダブルゲート Cu-MIC p-ch poly-Ge TFT の Ge 膜厚による性能変化	共同	2022年11月	2022 薄膜材料デバイス研究会(龍谷大学)	鈴木 翔、原明人	
ガラス基板上的 high-k 4 端子 poly-Si TFT から形成された CMOS インバータ	共同	2022年9月	第83回応用物理学会秋季学術講演会(東北大学)	永吉輝央、野村海成、原明人	
ガラス基板上的多結晶シリコンゲルマニウム薄膜トランジスタの特性	共同	2022年9月	2022年秋季応用物理学会講演会(東北大学)	佐川達哉, 楠浩太郎, 原明人	

H. 翻訳(学術書や原典等)

I. 特許

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
科学研究費補助金 基盤研究C	2022年度～2024年度	共同(研究代表者)	
その他の補助金・助成金	2022年度～2022年度	個別(研究代表者)	

IV 学会等及び社会における主な活動

2017年4月～	応用物理学会 東北支部 幹事
----------	----------------

V 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

VI 学内における管理運営に関する諸活動

--

2022年度							
所属	工学部 電気電子工学科	職名	准教授	氏名	桑野 聡子	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
講義におけるアクティブラーニング的学習方法の試み		2020年5月～		実験実習講義において、実験動画を作成し、さらにmanabaにおける実験内容の振り返りテストを作成した。このことにより受講生に授業として動画を視聴するだけでなく、テストに回答する為に、動画を複数回に渡り確認させることで学習効果を深めさせた。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
自然科学実験ファンダメンタルズ 改訂版第7版(東北学院大学工学部)について、学生が予習・復習しやすくなるように、実験動画に加え、オンラインによる小テスト、講義解説を行った。		2020年5月～		予習・復習テストの課題を出すことで、円滑な修学に繋がった。また、それらのテストの解説を実験内容の解説に加えて、説明した。加えて、基礎化学演習などの他の関連科目の講義において、当実験講義についての内容を解説することで、実験における予習・復習が円滑に進む様にした。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		複数クラスで同時開講される授業に関して、期末課題問題を共通にすることに加え、採点基準についても共通化を図る。また、動画を活用し、予習、復習に役立てる。					
今年度の進捗状況		複数クラスで同時開講される授業に関して、期末課題問題を共通にすることに加え、採点基準についても共通化を図ることが出来た。また、動画を活用し、予習、復習に役立てることが出来た。					
来年度の進捗目標		在外研究の為、海外における教育手法について学び、帰国後に活用出来る様に努める。					
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
イオン置換によるKイオン含有の酸化チタンナノワイヤーの作製		共同	2023年3月	令和4年度日本表面真空学会東北・北海道支部学術講演会(オンライン)	◎桑野聡子, 長門潤哉, 成田圭佑, 遠藤宏大, 藤田健希, 鈴木仁志, 大村和世, 野村明子, 千星聡, 吉年則治		
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		1.Nanoporous Gold膜の作製時および気体中の加熱中における孔の粗大化について詳細な測定を行う。 2.廃棄系バイオマス資源を用いた炭素電極の開発を行う。 3.Nanoporous Gold膜の複合材料の作製を行う。 4.金属酸化物の形成メカニズムについて、組成と形成条件の詳細について研究を進める。					
今年度の進捗状況		1.Nanoporous Gold膜の作製時および気体中の加熱中における孔の粗大化について詳細な測定を行った。 2.東北大と県庁との共同研究により炭素電極の開発を行い、強度に関する新規な特性を得ることが出来た。 4.金属酸化物の形成メカニズムについて、組成と形成条件の詳細について研究を進めた。					
来年度の進捗目標		在外研究先にて透過型電子顕微鏡の操作方法・解析方法の習得に努める。					

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動			
2013年2月～		日本物理学会 会員	
2009年9月～		日本表面科学会会員 会員	
2008年5月～		日本金属学会会員 会員	
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動			
学生委員会委員、東北学院大学工学部工学会評議員長、教職課程センター所員、合気道部副部長(60周年演武会実行員)			

2022年度							
所属	工学部 電気電子工学科	職名	准教授	氏名	佐々木 義卓	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
初年次基礎科目における学習支援		2022年4月～2023年3月		工学部1年生の必修科目である微分積分学や線形代数学の授業において、毎時、授業時間の1/3程度は理解を深めるための演習時間に設定している。この時間を利用して直接指導を行うとともに、学生の理解度の把握にあたった。また、授業時間外にも適時時間を設けて学生の学習サポートを行ったり、復習用の教材を整備することで、学習内容の定着・深化に努めた。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		学生の習熟度把握に努め、とりわけ学習支援が必要な学生に適時指導を行うことで学力向上を図る。					
今年度の進捗状況		対面授業が多くなり、昨年度より演習の時間を通じて、学生の習熟度把握ができるようになってきた。一方で、授業内容と受講生の基礎知識との間のギャップも見えてきており、今後改善する必要がある。					
来年度の進捗目標		授業内容を精査するとともに、学生の学力向上に適う教材作成を作成する。					
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
Youngのゼータ関数と多重ゼータ値について		単著	2023年1月	京都大学数理解析研究所, 数理解析研究所講義録, 2238		佐々木義卓	pp.160-167
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
Annihilation and duality for poly-Bernoulli polynomials		単独	2023年3月	第5回 青葉山ゼータ研究会(東北大学)		佐々木義卓	
On Young's zeta-function and multiple zeta values		単独	2022年5月	多重ゼータ値の諸相(京都大学数理解析研究所)		佐々木義卓	
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		<ul style="list-style-type: none"> 種々の多重ゼータ関数の整数点における特殊値の性質の解明 多重ベルヌーイ数および関連するゼータ値の性質の解明 ゼータMahler測度を通じた多重ゼータ値の性質の解明 					
今年度の進捗状況		<ul style="list-style-type: none"> 荒川-金子型のゼータ関数を応用したYoungの関数に付随するゼータ値の性質を解明した。 多重ベルヌーイ数の双対公式と零化公式を統合する枠組みを解明した。 					
来年度の進捗目標		<ul style="list-style-type: none"> 多重デデキントゼータ関数の明示的な解析接続方法の確立およびその挙動の解明 					
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)		個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要	

IV 学会等及び社会における主な活動			
2006年10月～		日本数学会会員 会員	
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			
<ul style="list-style-type: none"> ・授業評価小委員 ・授業改善のための学生アンケート実施委員 ・全学図書館委員会委員 ・教職課程センター運営委員 ・教務委員 ・カリキュラム委員 ・eポートフォリオ部会 ・学校法人東北学院ブランドデザインプロジェクト主催ワークショップ 			

2022年度							
所属	工学部 電気電子工学科	職名	准教授	氏名	鈴木 仁志	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
21世紀のキーテクノロジーを学ぶIIテキスト		2022年7月21日～		電子顕微鏡で目に見えない物質の形態、構造を調べてみよう ～回折現象を用いた物質の解析～			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
21世紀のキーテクノロジーを学ぶII講師		2022年8月8日～2022年8月8日		多賀城市の教員を対象とした、21世紀のキーテクノロジーを学ぶIIの講師を務めた。			
工学基礎教育センター相談員		2020年4月1日～		講義の分からない学生に対する補助教育業務 週1コマ			
電気電子工学科グループ主任		2019年4月1日～					
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
イオン置換によるKイオン含有の酸化チタンナノワイヤーの作製		共同	2023年3月	令和4年度日本表面真空学会東北・北海道支部学術講演会(オンライン)	◎桑野聡子, 長門潤哉, 成田圭佑, 遠藤宏大, 藤田健希, 鈴木仁志, 大村和世, 野村明子, 千星聡, 吉年則治		
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要			

科学研究費補助金 基盤研究(C)(一般)	2022年度～2023年度	共同(研究分担者)	ガラス基板ではpoly-Si TFTやpoly-Ge TFTが有効である。これらを安価かつ簡単なプロセスで3次元自己整合集積する。本申請では、この課題に対し、代表者が背面露光技術を用いて独自開発してきた4T n-ch poly-Si TFT技術やDG p-ch poly-Ge TFT技術を更に発展させ、背面露光によるゲート自己整合技術により、異種TFTの3次元自己整合集積を実現する。これにより、安価ガラス基板上で低価格・低消費電力・高集積デバイスを実現するための基礎技術を確立する。
IV 学会等及び社会における主な活動			
2022年9月	日本物理学会2022秋季大会領域9学生優秀発表賞審査委員 審査・評価		
2009年2月～	日本地球惑星科学連合会員 委員		
2008年～	中学生対象 工学に関する啓発活動 講師		
2003年6月～	日本結晶成長学会員 会員		
2000年1月～	日本物理学会員 会員		
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	工学部 環境建設工学科	職名	教授	氏名	李 相勲	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要		
科学研究費補助金 国際共同研究加速基金(国際共同研究強化(B))		2019年度～2023年度	共同(研究分担者)		途上国の組積造建物耐震化に向けた滑り免振機構の開発と社会実装基盤の整備		
IV 学会等及び社会における主な活動							
2020年～		建築学会 会員					
2015年10月～		土木技術奨励賞選考委員会委員 委員					
2012年～		コンクリート教会 会員					
2010年4月～		非破壊検査協会 鉄筋コンクリートの非破壊検査試験部門委員会 幹事					
2010年～		非破壊検査協会 会員					
2006年4月～		韓国防災学会 会員					
1999年4月～		土木学会 会員					
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	工学部 環境建設工学科	職名	教授	氏名	井川 望	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概 要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要				
IV 学会等及び社会における主な活動							
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等				
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
VI 学内における管理運営に関する諸活動							

2022年度							
所属	工学部 環境建設工学科	職名	教授	氏名	石川 雅美	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
1) コンピュータプログラミング		2020年4月～		1) 全15回の授業のうち11回の課題を与え、提出状況を確認している。 2) 課題については、授業時間中に20分程度の時間を与えて、学生自身が考え理解する機会を設けた。 3) 授業開始時に、前回の課題の解説を行った。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
インフラメンテナンスのLast One Mile	単著	2022年12月	土木学会, 土木学会誌, 107(12)	石川雅美	pp.15-15		
G. 学会における研究発表							
Performance and Demonstration of 3D FEM Initial Stress Analysis Program JCMAC3	共同	2022年7月	ACI24Hoursof Concrete Knowledge(United States of America)	Masami Ishikawa, Hideaki Nakamura, Yasuaki Ishikawa			
コンクリートの乾燥収縮およびクリープに及ぼす空気量の影響	共同	2022年7月	コンクリート工学年次大会論文集(千葉(オンライン))	石川雅美, 早川健司			
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要				
IV 学会等及び社会における主な活動							
2022年12月			インフラメンテナンス国民会議 市区町村長会議 パネリスト, 講師				

2022年12月	インフラメンテ何国民会議東北フォーラム マッチングイベント in 岩手 編集長, 助言・指導		
2022年11月	インフラメンテナンス国民会議東北フォーラム 白石市における林道舗装の実証実験 助言・指導		
2022年11月	インフラマネジメントシンポジウム(地域を支える地元建設業界の取り組み) 編集長, 助言・指導		
2022年5月	インフラメンテナンス国民会議東北フォーラム マッチングイベント in 仙台 編集長, 助言・指導		
2022年5月～	土木学会 会員		
2022年5月～	土木学会 東北支部副支部長		
2022年3月～	日本コンクリート工学会 コンクリート工学年次大会委員		
2021年4月～	日本コンクリート工学会		
2021年4月～	日本コンクリート工学会 マスコンクリートソフト普及委員会委員長		
2019年4月～	国土交通省東北地方整備局事業評価監視委員会 副委員長 副委員長		
2019年4月～	国土交通省 東北地方整備局 樋門等健全度評価検討委員会 委員 委員		
2019年4月～	国土交通省 東北地方整備局 宮城ブロック総合評価委員会 委員 委員		
2018年5月～	公益社団法人 日本コンクリート工学会 マスコンクリートのひび割れに関する調査委員会 幹事長 会員		
2018年4月～	インフラメンテナンス国民会議 東北フォーラム フォーラムリーダー		
2018年4月～	インフラメンテナンス国民会議 東北フォーラム フォーラムリーダー 委員		
2017年5月～	公益社団法人 日本コンクリート工学会 マスコンクリートソフト普及委員会 幹事 会員		
2017年4月～	ダム工学会 会員 会員		
2016年4月～	公益社団法人 プレストレストコンクリート工学会 会員 会員		
1981年～	公益社団法人 日本コンクリート工学会 フェロー会員 会員		
1981年～	公益社団法人 土木学会 正会員 会員		
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	工学部 環境建設工学科	職名	教授	氏名	櫻井 一弥	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
実施プロジェクトへの学生参加による建築実務教育		2022年4月～		実際に進んでいる建築やまちづくりのプロジェクトに学生を参加させることにより、講義や演習で学んだ内容が実社会でどのように活用されているか学習させる機会を積極的に設けている(主に卒論生や大学院生が対象)。			
少人数対話方式(エスキース)による学生の自主的な建築作品制作の促進		2022年4月～		学生が提案する建築空間(図面や模型)に対して、一対一での対話方式(エスキース)によるデザインの高度化を図るとともに、自主的な制作を促すような指導を行っている。			
施工中の現場見学, 完成した建物の見学による都市・建築の現場感覚の涵養		2022年4月～		施工中の建物や完成した後の建物の見学会などを行い、三次元空間のスケール感を涵養する講義・演習を行っている。			
建築初学者に対する建築教育の効果的な導入に関する工夫		2022年4月～		初等教育で全く触れる機会のない建築やデザインに関する興味と理解を深めるため、画像・映像などのビジュアル資料や模型による講義・演習を心がけている。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
宮城県知事指定建築士技術講習の講師		2022年4月～		宮城県建築士事務所協会の依頼に基づき、建築士に対するCPD事業の一貫として開催された知事指定講習の講師を務めた。			
一級建築士定期講習の講師		2022年4月～		建築士法で3年に一度の受講が義務づけられている一級建築士の定期講習において、建築技術教育普及センターの依頼に基づき年に数回の講師を務めた。			
建築家の講演会等に対する学生の積極的な参加促進		2022年4月～		仙台市内などで開催される、一般向けの建築関連講演会やセミナーに学生を積極的に参加させ、社会との接点を増やすよう指導している。			
現在の課題・目標		<ol style="list-style-type: none"> 1) 図や画像・動画等の補助資料を積極的に用いるなど、学生が興味を持つきっかけを授業に取り入れる。 2) 授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに、個々の課題等の意図を学生に伝える。 3) 授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。 					
今年度の進捗状況		<ol style="list-style-type: none"> 1) 図や画像・動画等の補助資料を積極的に用いるなど、学生が興味を持つきっかけを積極的に導入した。 2) 授業全体の到達目標、個々の課題等の意図を、そのたびごとに学生に説明した。 3) 一方向の解説とならないよう注意して講義を進めた。 					
来年度の進捗目標		<ol style="list-style-type: none"> 1) 来年度も図や画像・動画等の補助資料を積極的に用いるなど、学生が興味を持つきっかけを積極的に導入し理解させるよう努める。 2) 何のために課題をやっているのかなど、詳しく説明しながら授業を進める。 3) 授業内外において学生とのコミュニケーションを図る。 					
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
歴史的建造物の3次元のモデルを作成するための調査方法に関する考察 3Dスキャナと写真測量を用いた内部空間の調査について	共著	2022年12月	日本建築学会情報システム技術委員会、日本建築学会情報システム技術委員会第45回情報・システム・利用・技術シンポジウム論文集	恒松良純, 櫻井一弥	pp.266-271		
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							

D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)					
有限会社SOY source建築設計事務所(紹介記事)『ジャパングランドコレクション2023 宮城・山形版』	その他	2022年12月	サイバーメディア	櫻井一弥, 太田秀俊, 安田直民	pp.86-87
崖の家『美しく暮らす 東北のデザイン住宅 2022 リプラン北海道 2022春夏号 臨時増刊』	共著	2022年4月	札幌社	櫻井一弥, 太田秀俊, 安田直民	pp.68-71
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)					
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳(学術書や原典等)					
I. 特許					
現在の課題・目標	1) 建築家として, 社会的に意義ある建築作品を生み出し, 地域の発展に寄与する。 2) 震災復興にかかる活動を積極的に行う。 3) 地方公共団体の公共施設整備にかかる審査員などを積極的に引き受ける。				
今年度の進捗状況	1) いくつかの建築作品を学会等で口頭発表することができた。 2) 震災復興に関係する活動を継続することができた。 3) 多くの地方公共団体の公共施設に関して, 審査員などを行うことができた。				
来年度の進捗目標	1) 建築作品の設計を積極的に行い, 然るべき方法で発表する。 2) 継続的に震災復興に関わる活動を行い, 東北の復興に寄与する。 3) 引き続き東北地方を中心とした地方公共団体の公共施設整備に積極的に関わる。				
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)					
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概 要	
IV 学会等及び社会における主な活動					
2020年7月～	宮城県収用委員会 委員				
2020年7月～	登米市指定管理者選定委員会 委員				
2019年5月～	宮城県大河原町大規模事業評価委員会 委員				
2015年5月～	NPO法人 とうほくPPP・PFI協会 理事				
2014年10月～	宮城県多賀城跡調査研究委員会 委員				
2014年4月～	日本建築家協会東北支部役員 事業委員会 委員長				
2013年4月～	日本建築学会東北支部 建築デザイン教育部会				
2012年4月～	管理建築士定期講習 講師				
2012年3月～	せんだいデザインリーグ 卒業設計日本一決定戦 審査員(せんだいデザインリーグ 卒業設計日本一決定戦)				
2011年4月～	日本建築家協会東北支部宮城地域会 事業委員会 委員長				
2010年5月～	一級/二級/木造建築士 定期講習 講師				
2010年4月～	仙台建築都市学生会議 アドバイザーボード アドバイザー(仙台建築都市学生会議 アドバイザーボード アドバイザー) 助言・指導				
2009年10月～	公益社団法人 日本建築家協会 会員				
2004年7月～	日本建築学会 司法支援建築会議運営委員会 調査研究部会				
2002年4月～	日本建築学会東北支部 建築デザイン教育部会				
2000年5月～	日本インテリアコーディネーター協会 会員				
2000年4月～	日本建築学会 会員				
V 芸術分野や体育実技等における主な活動					
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)		発表・展示等の内容等	

縦の家	宮城県	2022年10月	日本建築学会東北支部, 東北建築作品集 2022, Vol.32, pp.28-29, 2022.10
みやぎボイス2022	せんだいメディアテーク	2022年7月	シンポジウム
現在の課題・目標	1) 建築家の地位向上と地域の発展のために, 学外活動を積極的に行う。 2) 建築作品の賞には積極的に応募する。		
今年度の進捗状況	1) シンポジウムなどを通して, 学外での活動を十分に行うことができた。 2) いくつかの賞に応募し, 作品集への掲載が決定した(2023年4月刊行予定)。		
来年度の進捗目標	1) シンポジウムや展覧会等には積極的に参加するとともに, 自ら企画を行う。 2) 建築作品に関する賞に積極的に応募する。		
VI 学内における管理運営に関する諸活動			
1) 学校法人東北学院 理事長特別補佐(キャンパス整備担当) 2) 東北学院大学キャンパス整備推進本部 委員 3) デフォレスト館維持管理委員会 委員 4) ラーニングコモンズ運営委員会 委員 5) 博物館運営委員会 委員 6) 東北学院史資料センター 調査研究員			

2022年度							
所属	工学部 環境建設工学科	職名	教授	氏名	鈴木 道哉	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
講義内容を理解できているか確認させる時間・機会を設ける。		2020年～		授業でこまめに小テストを行いこれに伴い毎回の授業の復習の動機付けを行い、学生自身に自分の理解度を確認させる。			
多様な評価方法を採用する。		2019年～		期末試験による評価の比率を下げ、小テスト、レポート課題など多様な評価方法を実施する。			
学習の動機付けを行う。		2019年～		建築分野で当該の知識がなぜ必要となるかを積極的に授業で解説していく。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
建築設備		2021年～		独自に教材を作成し、毎回配布して学習効果を高める工夫をしている。また毎年、最新情報に更新していく。			
建築設備計画		2021年～		独自に授業教材を作成するとともに、設備設計演習課題及び解答を作成して、授業に取り入れ理解度アップを図っている。適宜、最新情報に更新していく。			
建築環境工学		2021年～		独自に教材を作成し、毎回配布して学習効果を高める工夫をしている。また毎年、最新情報に更新していく。			
建築環境計画		2021年～		独自に教材を作成し、毎回配布して学習効果を高める工夫をしている。また毎年、最新情報に更新していく。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		1. 図や画像・動画等の補助資料を積極的に用いるなど、学生が興味を持つきっかけを授業に取り入れる。(継続) 2. 授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに、個々の課題等の意図を学生に伝える。(継続) 3. 授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。					
今年度の進捗状況		1. に関して:ヒートポンプの仕組みなどの解説などに動画を活用した。また配布資料の図をわかりやすく変更するなど理解度向上に努めた。 2. に関して: 初回に到達目標を説明した。また建築士の出題を例題として用いて、どのレベルまで到達すれば良いかを理解させた。 3. に関して: manabaの個別指導機能を活用し、成績が振るわない学生に指導した。またmanabaで学生からの質問に適宜、回答した。					
来年度の進捗目標		1. に関して: 継続して講義内容に関する図や動画を活用して理解度を高めていく。 2. に関して: 継続して授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに、個々の課題等の意図を学生に伝える。 3. に関して: 継続して、manabaの機能を利用して双方向のコミュニケーションに努める。					
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							

G. 学会における研究発表					
東北地方におけるZEBを目指した中規模オフィスの研究 その5 アンケート結果の分析と課題抽出	共同	2022年9月	日本建築学会大会(札幌)	伊藤 千夏, 鈴木 道哉, 川村 聡宏, 成田 政杜, 長谷部 弥, 長田 真一郎	
東北地方におけるZEBを目指した中規模オフィスの研究 その4 アンケート調査の概要と申告結果	共同	2022年9月	日本建築学会大会(札幌)	川村 聡宏, 成田 政杜, 長田 真一郎, 長谷部 弥, 伊藤 千夏, 鈴木 道哉	
東北地方におけるZEBを目指した中規模オフィスの研究 その3: ファン付きパーソナル床吹出口を有した執務室における室内環境の実態調査	共同	2022年9月	日本建築学会大会(札幌)	川村 聡宏, 成田 政杜, 長田 真一郎, 長谷部 弥, 伊藤 千夏, 鈴木 道哉	
H. 翻訳(学術書や原典等)					
I. 特許					
現在の課題・目標	ZEB建築の室内環境の効果的評価方法の確立				
今年度の進捗状況	昨年度から継続して、受託研究により東北地方に建つnearly ZEB建築の評価を行った。(2022年度で完了)				
来年度の進捗目標	複合用途施設のエネルギーシステムの効率的運用によるエネルギーの効率向上の研究を実施する。				
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)					
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要	
IV 学会等及び社会における主な活動					
2019年4月～	日本建築学会東北支部 環境部会 委員				
1996年4月～	日本建築学会LCA評価小委員会委員 会員				
1996年4月～	空気調和衛生工学会会員 会員				
1993年4月～	日本建築学会会員 会員				
V 芸術分野や体育実技等における主な活動					
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等		
現在の課題・目標	なし				
今年度の進捗状況	なし				
来年度の進捗目標	なし				
VI 学内における管理運営に関する諸活動					
シラバス・時間割委員 ハラスメント相談員 広報・大学案内委員					

2022年度							
所属	工学部 環境建設工学科	職名	教授	氏名	武田 三弘	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
実験用の動画や写真撮影を行い、疑似体験できるようなパワーポイントによる講義の実施		2020年4月1日～		今年度は、対面による授業ができなかったため、リアルに実験を経験できるように、TAによる実験方法の動画や写真を撮影し、パワーポイントでまとめ、理解力の向上に努めた。			
zoomによる講義とresponを用いた回答、manabaによる復習演習の実施		2020年4月1日～		新型コロナウイルス感染症によって対面授業ができないが、学生の積極的な参加を促すため、zoomによるパワーポイントの講義と、講義の中に選択形式で出題した問題をresponで回答させ、他の学生がどの様に思っているのかを理解しながら、チャットやresponによる質問を受け付けた。講義後は、manabaによる演習を行い、講義の理解度を確認させた。			
最新の情報を取り入れたパワーポイントの作成		2020年4月～		講義内容については、毎年最新の情報を取り入れてパワーポイントを作成している。			
コンクリート技士試験の問題を用いた小テストの実施		2015年9月～		講義後の小テストを実施すると同時に講義内容や小テストについての質問を受け付け、書かれた内容については次回の講義において回答している。			
一問一答のクイズ形式による学習内容の確認		2010年4月～		講義の冒頭で、前回までの講義の中で重要な事項を質問し、答える形式を繰り返し、記憶に定着させる事を行っている。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
閲覧資料の作成(コンクリートメンテナンス工学)		2020年4月1日～		コンクリートメンテナンス工学においては、内容が特殊すぎて、適当な教科書が無い状況である。その為、自ら講義資料を作成し、それをGoogle上で閲覧できるようにしている。			
講義内容の復習のための課題の作成(コンクリート工学, 課題1～13)		2019年4月6日～		各講義内容の復習として課題を出し、その内容について添削・説明した。			
配付資料の作成(環境建設工学実験)		2018年4月9日～		コンクリート実験における報告書の書き方や実験方法について書かれた教材を作成し、配付した。			
演習問題の作成(14回分, 線形代数学)		2018年4月9日～		講義中に行う演習問題を作成し、不正解の問題は宿題として実施させ、翌週解答を行った。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
JABEEアンケートや講義中に行ったアンケートにおける学生からの意見に対応している。		2018年4月9日～		線形代数学では、「課題の提出時に部屋にいない事が多い」に対して部屋にいる時間帯を知らせたり、コンクリート工学では「計算方法が知りたい」に対しては、講義の前に板書で解答を示すなど対応している。			
JABEEアンケートにおける「分かりやすい講義に努めた教員」のアンケートで一位となり、現在も継続中。		2016年4月13日～		本学科ではJABEEを受審しており、環境建設独自にJABEEアンケートを行っており、その中で、「分かりやすい講義に努めた教員」というアンケートで一位となった。なお、昨年度は二位、一昨年は一位であった。			
現在の課題・目標		<p>-----【2022年度 環境建設工学科 授業改善目標】-----</p> <ol style="list-style-type: none"> 図や画像・動画等の補助資料を積極的に用いるなど、学生が興味を持つきっかけを授業に取り入れる。 授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに、個々の課題等の意図を学生に伝える。 授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。 <p>教育改善アンケートにおいて以下の2項目で達成度を測る。</p> <ol style="list-style-type: none"> 3.1 授業内のやり取りや課題等により学生の理解度を確認しながら授業を進める。 3.2 授業内外いずれにおいても学生の質問機会を確保する。 					
今年度の進捗状況		<ol style="list-style-type: none"> 1.の目標については達成できたものと考えている。 2.の目標については、個々の課題等の意図を学生に伝える点において、満足いく程度まで実施できていない状況である。 3.の目標については、manabaの個別指導機能を使用して対応したが、会議や出張などで対応が遅れることが多少あり、こちらも達成感という意味では十分とは言えない状況である。 					

<p>来年度の進捗目標</p>	<p>-----【2023年度 環境建設工学科 授業改善目標】----- 2022年度の以下の目標次年度も継続して実施する。 1. 図や画像・動画等の補助資料を積極的に用いるなど、学生が興味を持つきっかけを授業に取り入れる。 2. 授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに、個々の課題等の意図を学生に伝える。 3. 授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。</p>				
<p>II 研究活動</p>					
<p>著書・論文等の名称</p>	<p>単著・共著の別</p>	<p>発行又は発表の年月 (西暦)</p>	<p>発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称</p>	<p>編者・著者名</p>	<p>該当頁数</p>
<p>A. 学術書</p>					
<p>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</p>					
<p>X線造影撮影法を用いた強度推定に影響を与える各種要因について</p>	<p>共著</p>	<p>2022年6月</p>	<p>公益社団法人 日本コンクリート工学会, コンクリート工学年次論文集第44巻, Vol.44(No.1)</p>	<p>石井 暉, 嶋 泰幸, 武田 三弘</p>	<p>pp.202-207</p>
<p>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</p>					
<p>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</p>					
<p>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</p>					
<p>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</p>					
<p>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</p>					
<p>G. 学会における研究発表</p>					
<p>RC床板に発生する水平クラックの要因に関する基礎研究</p>	<p>共同</p>	<p>2023年3月</p>	<p>令和4年度土木学会東北支部技術研究発表会講演概要集(オンライン開催)</p>	<p>松田 伸隆, 武田三弘, 大場 峻聖, 小野真英, 釜谷 哲平</p>	<p>pp.2頁</p>
<p>コンクリートのコア穿孔方向がX線造影撮影法による強度推定に及ぼす影響</p>	<p>共同</p>	<p>2023年3月</p>	<p>令和4年度土木学会東北支部技術研究発表会講演概要集(オンライン開催)</p>	<p>嶋 泰幸, 武田三弘, 伊藤混人</p>	<p>pp.2頁</p>
<p>RC床板に発生する水平クラックの要因に関する基礎研究</p>	<p>共同</p>	<p>2023年3月</p>	<p>令和4年度土木学会東北支部技術研究発表会講演概要集(オンライン開催)</p>	<p>高橋 祐樹, 佐々木将哉, 鈴木 玲音, 武田三弘</p>	<p>pp.2頁</p>
<p>コンクリートの二酸化炭素吸収量の測定方法に関する基礎研究</p>	<p>共同</p>	<p>2023年3月</p>	<p>令和4年度土木学会東北支部技術研究発表会講演概要集(オンライン開催)</p>	<p>海沼 飛鳥, 武田三弘, 櫻庭 稜大</p>	<p>pp.2頁</p>
<p>含浸性塗布材がコンクリート表層品質評価結果に及ぼす影響</p>	<p>共同</p>	<p>2023年3月</p>	<p>令和4年度土木学会東北支部技術研究発表会講演概要集(オンライン開催)</p>	<p>佐藤 豊, 武田三弘, 伊藤混人</p>	<p>pp.2頁</p>
<p>X線造影撮影法を用いたコンクリート強度推定結果に影響を及ぼす要因について</p>	<p>共同</p>	<p>2022年9月</p>	<p>令和4年度土木学会全国大会77回年次学術講演会(千葉オンライン)</p>	<p>嶋 泰幸, 石井 暉, 武田 三弘</p>	<p>pp.2頁</p>
<p>鉄筋コンクリート供試体の腐食促進実験における基礎的研究</p>	<p>共同</p>	<p>2022年9月</p>	<p>令和4年度土木学会全国大会77回年次学術講演会(千葉オンライン)</p>	<p>高橋 祐樹, 武田 三弘</p>	<p>pp.2頁</p>
<p>RC床版における水平クラックの発生要因に関する基礎研究</p>	<p>共同</p>	<p>2022年9月</p>	<p>令和4年度土木学会全国大会77回年次学術講演会(千葉オンライン)</p>	<p>松田 伸隆, 武田 三弘</p>	<p>pp.2頁</p>
<p>H. 翻訳(学術書や原典等)</p>					
<p>I. 特許</p>					
<p>現在の課題・目標</p>	<p>今年度の研究は以下の5テーマで実施した。 ・樋門・樋管構造物の鋼材腐食がひび割れ幅および付着応力に及ぼす影響 ・各種非破壊検査によるコンクリート表層品質評価に関する基礎研究 ・RC床版における水平クラック発生要因解明に関する実験的研究 ・コンクリートのco2吸収量の測定方法の確立に関する基礎研究 ・X線造影撮影法による実コンクリート構造物を想定した強度推定に関する基礎研究 これらの研究成果について学会で発表していくことが目標である。</p>				

今年度の進捗状況	目標であった5つの研究について、土木学会全国大会で2テーマ、土木学会東北支部技術研究発表会で5テーマの研究発表を達成できた。		
来年度の進捗目標	来年度の研究は以下のテーマで実施する予定である。 ・各種非破壊検査によるコンクリート表層品質評価に関する基礎研究 ・RC床版における水平クラック発生要因解明に関する実験的研究 ・コンクリートのco2吸収量の測定方法の確立に関する基礎研究 ・X線造影撮影法による実コンクリート構造物を想定した強度推定に関する基礎研究 これらの研究成果について学会で発表していくことが目標である。		
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動			
2022年11月～		一般社団法人 非破壊検査協会 会員	
2022年10月～2024年9月		公益社団法人日本コンクリート工学会 助成金検討委員会委員 委員	
2021年8月～2023年6月		公益社団法人日本コンクリート工学会 学会賞選考委員会委員 委員	
2021年6月～2023年5月		公益社団法人日本コンクリート工学会東北支部 支部長	
2021年6月～2023年5月		公益社団法人日本コンクリート工学会理事会 理事	
2020年8月～		東日本高速道路株式会社東北支社宮城地域技術懇談会委員 委員	
2020年8月～		東日本高速道路株式会社東北支社宮城地域技術懇談会 委員	
2020年4月～		東北地方整備局総合評価委員会専門部会委員 委員	
2018年8月～		高校生橋梁模型コンテスト審査委員長 委員長	
2018年6月～		多賀城市都市計画審議会委員 委員	
2016年7月～		松島町入札監視委員 委員	
2015年9月～		国土交通省東北地方整備局道路ドクター 委員	
2014年3月～		宮城県コンクリート診断士会会長 委員	
1999年9月～		東北学院大学工学部TGしびるの会事務局長 委員	
1989年4月～		公益社団法人 日本コンクリート工学会 会員	
1989年4月～		公益社団法人 土木学会 会員	
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標	五橋移転に伴い、実験室の大型クレーンを使用するため「玉掛け技能」の国家資格を取得する。		
今年度の進捗状況	3月中旬以降の講習会のため結果は分からないが、受講予定である。		
来年度の進捗目標	来年度はクレーン運転技能の資格を取りたいと考えている。		
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	工学部 環境建設工学科	職名	教授	氏名	中沢 正利	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		①図や画像・動画等の補助資料を積極的に用いるなど、学生が興味を持つきっかけを授業に取り入れる。 ②授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに、個々の課題等の意図を学生に伝える。 ③授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。					
今年度の進捗状況		①講義中の機会を見ては実務の話をし、その際には実例写真や参考となる動画を見せるようにしている。 ②計算を要する課題を与えるようにしており、間違えた場合は計算精度を高めるために復習させることにしている。 ③授業の開始時にシラバスのコピーを配付して説明をしている。また、授業時以外にもメールによる質疑応答を推奨し、レポートの再提出などを通して指導を継続している。					
来年度の進捗目標		以下の項目についてより一層努力する。 ①図や画像・動画等の補助資料を積極的に用いるなど、学生が興味を持つきっかけを授業に取り入れる。 ②授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに、個々の課題等の意図を学生に伝える。 ③授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。					
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		①他大学の研究者との共同研究をより一層進める。					
今年度の進捗状況		①学会の研究委員会に顧問として参加し、Zoomによる委員会及び幹事会の運営に協力した。 ②学会活動の成果を論文集に投稿し、シンポジウムで発表する予定である。					
来年度の進捗目標		①他大学の研究者との共同研究をより一層進める。 ②シンポジウムで発表するとともに、引き続き学会の研究委員会に参加する。					
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要		
IV 学会等及び社会における主な活動							
2022年5月～2024年4月			ネクスコエンジ東北支社「更なる耐震補強検討会」コメンテーター, 助言・指導				
2021年5月～2023年3月			土木学会構造工学委員会「災害時の緊急架設を目的とした緊急仮設橋に関する調査研究小委員会」顧問				

2020年9月～	土木学会構造工学委員会 災害時の緊急仮設を目的とした緊急仮設橋に関する調査小委員会顧問 会員		
2020年8月～	日本鋼構造協会 土木鋼構造診断士専門部会委員 委員		
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			
副学長(点検・評価担当)			

2022年度							
所属	工学部 環境建設工学科	職名	教授	氏名	中村 寛治	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
最新の環境問題の情報資料を利用した説明		2020年4月1日～		NHK等で放映される環境問題の内容、および新聞記事を加え、知識と現実問題のリンクを重視した講義を行っている。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
授業の配布資料の改訂		2020年4月1日～		情報リテラシー、環境建設工学実験、環境保全工学、環境工学IIの配布資料を見直し、オンライン授業で理解しやすいように手直しをした。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要			
科学研究費補助金 科学研究費補助金挑戦的研究(萌芽)		2019年度～2021年度	個別	Flectobacillus属の糸状化細菌による捕食環境センシング技術の確立			
IV 学会等及び社会における主な活動							
2017年8月～		多賀城市水道事業運営委員会 委員 委員					
2016年5月～		東北地方整備局新技術活用評価会議 委員 委員					
2005年4月～		環境バイオテクノロジー学会 会員 会員					
2005年4月～		土木学会会員 会員					
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	工学部 環境建設工学科	職名	教授	氏名	韓 連熙	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進		2020年4月1日～		毎回の授業の冒頭で、前回の復習とその回の概略を説明し、授業中は説明した内容を含む問題を提示し、理解の確認を行う。授業終了時にはその回のまとめを行っている。			
「学生による授業評価」と授業進度等に関するアンケートの実施		2020年4月1日～		学部で実施する「学生による授業評価」を担当科目で実施している。さらに、授業の効果を測定するために教員自身が考案したアンケートを、毎年度実施している。			
独自テキストの作成		2020年4月1日～		必要と考えられる教科には、独自の試料を作成し、配布している。			
ビジュアルな授業		2020年4月1日～		授業を円滑に実施するためパワーポイントを利用している。さらに、レポートを提出させ、これを評価することで修学状況を把握し、アドバイスを与える。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
「自然科学実験ファンダメンタルズ」における実験テキスト作成		2020年4月1日～		「化学実験」分野の4テーマの実験テキストを作成した。			
「環境の化学」における教材プリント作成		2020年4月1日～		環境に応用されている化学原理と演習問題を穴埋めの形式の教材プリントを作成した。			
「基礎化学演習」における教材プリント作成		2020年4月1日～		様々な化学原理と演習問題を穴埋めの形式の教材プリントを作成した。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		<ul style="list-style-type: none"> ●作成教材プリント内容(パワーポイント)の改善 ●講義中の学生とのコミュニケーション ●学生の学習(予習・復習)のチェック ●(学科教育目標) <ol style="list-style-type: none"> 1. 図や画像・動画等の補助資料を積極的に用いるなど、学生が興味を持つきっかけを授業に取り入れる。 2. 授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに、個々の課題等の意図を学生に伝える。 3. 授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。 <p>※ 教育改善アンケートにおいて以下の2項目で達成度を測る。</p> <ol style="list-style-type: none"> 3.1 授業内のやり取りや課題等により学生の理解度を確認しながら授業を進める。 3.2 授業内外いずれにおいても学生の質問機会を確保する。 					
今年度の進捗状況		<ul style="list-style-type: none"> ●作成教材プリント内容(パワーポイント)の改善について: 見やすいパワーポイント作成とわかりやすい例題を増やす。 ●講義中の学生とのコミュニケーションについて: 学生への質問と学生からの質問を講義中いつでもできるように積極的に促す。 ●学生の学習(予習・復習)のチェックについて: 開始5分程度に前回の学習内容のまとめを説明、終了前の5分程度に再度講義内容をまとめて説明する。 ●環境の化学では、二酸化チタンを用いた光触媒の有機物分解の過程を説明した。現在に、二酸化チタン系の光触媒の生活用品の利用についても説明を行った。 ●授業中に出た重要スライドを自分でまとめさせる宿題を課し、得た知識を学生自身が確認できるようにした。また、そのとき分からなかった点も書かせ、授業中に回答するようにした。 ●授業毎の重要なポイントを到達目標と関連付けて説明を行い、学生自らは到達目標のみならず、さらに応用可能な部分などについて考えるよう促した。 					
来年度の進捗目標		<ul style="list-style-type: none"> ●作成教材プリント内容(パワーポイント)の改善について: 最新データの追加。 ●講義中の学生とのコミュニケーションについて: 学生への質問と学生からの質問を講義中いつでもできるように積極的に促す。 ●学生の学習(予習・復習)のチェックについて: 開始5分程度に前回の学習内容のまとめの説明と宿題の確認、終了前の5分程度に再度講義内容をまとめて説明すると共に予習・復習の課題を設ける。 					
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数	

A. 学術書			
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)			
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)			
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文			
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)			
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)			
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)			
G. 学会における研究発表			
H. 翻訳(学術書や原典等)			
I. 特許			
現在の課題・目標	<ul style="list-style-type: none"> ●次亜塩素酸ナトリウム水溶液の液中プラズマによる性質変化に関する研究を進める。 ●抗酸化作用に関する研究を進める。 ●上水用の凝集剤を用いた水質実験に関する研究を進める。 ●生物膜製作の基礎的研究を進める。 		
今年度の進捗状況	<ul style="list-style-type: none"> ●次亜塩素酸ナトリウム水溶液の液中プラズマによる性質変化に関する研究について:電圧増幅器を用いて高電圧による水中プラズマを発生させ、次亜塩素酸ナトリウム水溶液のpHや残留塩素濃度などについて検討と測定実験を行った。 ●抗酸化作用に関する研究について:強力な活性酸素除去能力を持っていると言われているピリルピンをを用いて活性酸素反応(フェントン反応やキサンチンオキシダーゼ反応)に添加し、その効果の確認を行った。 ●様々な上水用の凝集剤を用いた水質実験に関する研究について:近年開発された上水用の凝集剤を用いて水質(色度、濁度、アルカリ度など)実験を行った。 ●生物膜製作の基礎的研究について:沖縄県などで火山活動で発生した軽石を用いて生物膜の担体として応用可能かについて基礎的な研究を行った。 		
来年度の進捗目標	<ul style="list-style-type: none"> ●上水用の凝集剤を用いた水質実験に関する研究について:近年開発された高塩基度のポリ塩化アルミニウムを用いて様々な添加物が存在する原水に対しての効果の色度や濁度、アルカリ度などの測定による検討を行う。 ●水中プラズマを用いて水中添加物による水の性質変化に関する研究を行う。 ●抗酸化作用に関する研究について:抗酸化作用の物質(植物由来の抽出物)をフェントン反応やキサンチンオキシダーゼ反応に添加し、その効果について検討を行う。 ●生物膜に関する研究について:軽石以下の吸着性のある様々な材料について基礎的な研究を行う。 		
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
IV 学会等及び社会における主な活動			
2015年4月～		日本水道協会 委員	
2012年4月～		日本環境化学学会 会員	
2009年8月～		日本オゾン協会 委員	
2006年6月～		土木学会 会員	
2003年4月～		電子スピンスサイエンス学会 会員	
1999年4月～		日本水環境学会 会員	
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			
1. 工学部教育の質保証・改善委員会			
2. 環境建設工学科長			

2022年度							
所属	工学部 環境建設工学科	職名	教授	氏名	宮内 啓介	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
予習・復習の時間の設定		2020年～		授業終了後に復習問題をmanabaにて公開し、授業の復習時間を設定した。また、次の授業を受けるための予備知識をつけるための予習問題も同様に公開した。正答率が悪い問題があったときは、考え方の動画をmanabaにて公開した。			
独自の授業アンケートの実施		2019年～		15回の授業の終わりに、全学で実施するアンケートの他に独自のアンケートを実施して授業の効果を確認し、次年度の授業実施の参考にしている。			
授業担当者会議の開催(自然科学実験ファンダメンタルズ)		2019年～		毎学期終了後に、他学科担当の非常勤講師も含めて話し合いの場を持ち、授業の進め方やテキストの改訂について話し合っている。			
学生から質問・感想を集めて回答する		2019年～		毎回の授業終了時にresponを用いて授業の振り返りをおこない、同時に質問・感想を集めて、質問・感想とそれに対する回答のプリントを作成してmanabaで公開し、必要に応じて次の授業でコメントした。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
自然科学実験ファンダメンタルズ		2019年～		1年生の教養科目の教科書。必要に応じて改訂している。			
「先端の科学と技術」プリント		2019年～		1年生の教養科目用プリント			
「生命の科学」プリント		2019年～		1年生の教養科目用プリント			
「環境生物工学」プリント		2019年～		3年生の専門科目用プリント			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		<ol style="list-style-type: none"> 1. 図や画像・動画等の補助資料を積極的に用いるなど、学生が興味を持つきっかけを授業に取り入れる。 2. 授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに、個々の課題等の意図を学生に伝える。 3. 授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。 					
今年度の進捗状況		<ol style="list-style-type: none"> 1. 実験の様子や実験に使う機器の写真、動画を授業中に紹介した。 2. 初めの数回は、評価方法を必ず最初に話した。予習問題で解いてもらった箇所を授業中に学生に伝えて、予習を行うことの重要性を伝えながら授業を行なった。 3. 毎回の授業後に質問や感想を受け付けて、それら全てに対して回答を書いてmanabaを通じて学生に配布した。 					
来年度の進捗目標		<ol style="list-style-type: none"> 1. さらに紹介するものを増やしていきたい 2. レポートに関しては、その意義等の説明が足りなかったので、しっかりと行う。 3. 引き続き行いたい。 					
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Whole-Genome Sequence of an Arsenite-Oxidizing Bacterium, Pandoraea sp. Strain NE5, Isolated from the Rhizosphere of the Arsenic Hyperaccumulator Pteris vittata	単著	2022年11月	Microbiology Resource Announcements, 11	Keisuke Miyauchi	pp.e00609		

Arsenic uptake by <i>Pteris vittata</i> in a subarctic arsenic-contaminated agricultural field in Japan: An 8-year study	共著	2022年7月	Science of The Total Environment, 831	Yi Huang-Takeshi Kohda, Ginro Endo, Nobuyuki Kitajima, Kazuki Sugawara Mei-Fang Chien, Chihiro Inoue, Keisuke Miyauchi	pp.154830
--	----	---------	---------------------------------------	--	-----------

Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)

C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文

D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)

E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)

F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)

G. 学会における研究発表

H. 翻訳(学術書や原典等)

I. 特許

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
科学研究費補助金 基盤研究C	2018年度～	個別	ヒ素高蓄積植物モエジマシダ根圏で亜硫酸酸化活性を担う新規亜硫酸酸化細菌の解析
科学研究費補助金 国際共同研究加速基金(国際共同研究強化(B))	2017年度～	共同(研究代表者)	東南アジア・南アジアにおけるヒ素汚染地下水の生物学的浄化方法の開発

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2013年6月～	環境バイオテクノロジー学会理事 会員
2012年1月～	日本微生物生態学会会員 会員
2012年1月～	Assistant Editor of Microbes and Environments 委員
2011年8月～	日本生物工学会北日本支部委員 会員
2007年3月～	ゲノム微生物学会会員 会員
2006年4月～	土木学会会員 会員
2004年1月～	アメリカ微生物学会会員 会員
2000年4月～	環境バイオテクノロジー学会会員 会員
1996年4月～	日本生物工学会会員 会員
1994年1月～	日本農芸化学学会会員 会員

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

2022年度							
所属	工学部 環境建設工学科	職名	教授	氏名	山口 晶	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
他の授業の閲覧の実施(コンクリート工学)		2022年11月					
試験直前まとめ演習の実施		2014年4月～		期末試験直前にまとめの演習を課し、これまでの講義の復習を行わせている。			
小テストの実施		2005年4月～		複数回小テストを行うことで、学生の理解を促している。			
土木学会東北支部技術研究発表会の学生の参加		2001年3月2日～		土木学会東北支部主催の技術研究発表会に参加し、卒業研究の内容を、学生に発表させている。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
交通工学 オンライン講義資料, 穴埋めノート, 小テスト問題作成		2021年4月～					
測量学I 講義内容の穴埋めノートの作製と配布, パワーポイントによる遠隔講義の実施		2020年4月1日～		講義15回分のパワーポイントの作製と公開, 講義内容の穴埋めノート15回分			
地盤力学I 講義内容の穴埋めノートの作製と配布, パワーポイントによる遠隔講義の実施		2020年4月1日～		講義15回分のパワーポイントの作製と公開, 講義内容の穴埋めノート15回分			
地盤力学I 演習プリント		2014年4月～		演習プリント13回分, まとめプリント1回分			
測量学I 演習プリント		2014年4月～		演習プリント9回分, まとめプリント1回分			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		<p>卒業研究については、昨年度と同様に学生が社会に出た後に困らないように、仕事の進め方を意識しながら指導を行うことを目標とした。特に自分の考えを述べられること、ゴールを意識した研究スケジュールを立てることなどができる学生になるように指導を行った。また、講義については、学科の教育改善目標を意識して講義を行った。</p> <p>今年度の学科の教育目標は、下記の通りであった。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 図や画像・動画等の補助資料を積極的に用いるなど、学生が興味を持つきっかけを授業に取り入れる。 2. 授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに、個々の課題等の意図を学生に伝える。 3. 授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。 <ol style="list-style-type: none"> 3.1 授業内のやり取りや課題等により学生の理解度を確認しながら授業を進める。 3.2 授業内外いずれにおいても学生の質問機会を確保する。 					

<p>今年度の進捗状況</p>	<p>卒業研究においては、実際の仕事を意識しながら指導を行ったが、自分で考えて動ける学生がほとんどであったが、若干物足りない学生がおり、ペアを組んだ学生に迷惑をかけたようである。特に時間については指導を行っていたが、遅刻が続いたようであった。また、講義の成績は良くないが、研究の振興においては、理解度も早く自分で考えて進められる学生もいた。講義の成績で一律に学生の能力が決められないことも確認できた。今年度もほとんどの場合で打ち合わせから実験までスムーズに実施できており、学生の潜在能力の高さがうかがい知れた。</p> <p>1については、遠隔講義用に作成した資料を用いることにより、図や画像を多く使った講義をすることができたので、ある程度達成できたと感じている。また、自治体等の委員会で経験した事例を支障が出ない範囲で実際の事例と下学生に紹介できた。さらに講義資料を改良したい。</p> <p>2についても、学生に説明し、疑義が生じないように注意した。学生から成績に関する問い合わせがなかったもので、とりあえず、達成できていると考えている。</p> <p>3については、授業終了後に質問に来た学生がいるので、ある程度できていると思う。質問や問題等の間違いの指摘などをした学生には、加点することにしており、学生が質問・指摘しやすいように心がけている。今年度は移転の関係もあり、小テストなどで問題点の不備が目立った。反省点である。ただし、ほとんどの場合学生から指摘で期限内に修正ができており、学生が問題点を指摘しやすい関係を気付いていることはよかったと思う。</p>				
<p>来年度の進捗目標</p>	<p>今年度と同様に、上記の学科の教育目標を頭に入れながら講義をおこなってきたい。</p> <p>年度初めに学科の教育改善目標が新たに設定されるので、そちらも引き続き意識しながら講義を行う予定である。</p> <p>今年度は対面講義が中心であったが、来年度も同様になると思われる。遠隔講義で準備した講義資料の利点を使いながら、対面講義の利点を生かすような講義をしたい。ただし、遠隔講義で使用した資料を対面講義で使用すると小テスト等の解説を行う時間が確保できなかった。内容を少し削るなど、改良したい。</p>				
<p>II 研究活動</p>					
<p>著書・論文等の名称</p>	<p>単著・共著の別</p>	<p>発行又は発表の年月 (西暦)</p>	<p>発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称</p>	<p>編者・著者名</p>	<p>該当頁数</p>
<p>A. 学術書</p>					
<p>Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)</p>					
<p>縦型回転式攪拌混合処理工法における改良杭の先端貫入量に関する数値解析的検討</p>	<p>共著</p>	<p>2022年12月</p>	<p>第15回地盤改良シンポジウム論文集</p>	<p>佐山拓海, 山川優樹, 竹田敏彦, 松井倫嗣, 山根行弘, 山口晶</p>	<p>pp.57-62</p>
<p>縦型回転式攪拌混合処理工法における改良体の先端貫入量に関する土槽実験</p>	<p>共著</p>	<p>2022年12月</p>	<p>第15回地盤改良シンポジウム論文集</p>	<p>山口晶, 竹田敏彦, 山根行弘, 蓮香朋宏, 山川優樹, 佐山拓海</p>	<p>pp.23-27</p>
<p>Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)</p>					
<p>C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文</p>					
<p>D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)</p>					
<p>E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)</p>					
<p>F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)</p>					
<p>G. 学会における研究発表</p>					
<p>H. 翻訳(学術書や原典等)</p>					
<p>I. 特許</p>					
<p>現在の課題・目標</p>	<p>今年度は、地盤改良の企業との共同研究として、共回り現象に関する研究・配合試験の標準化に関する研究を実施した。また、レストム工法研究会とも共同研究を開始した。新たに実施した研究が2つあるので、まずはこれらの研究については今後の研究の方向性を決めるヒントとなる成果をえることを目標とした。</p>				
<p>今年度の進捗状況</p>	<p>今年度も、企業との共同研究がメインであり、自分の研究の方向性については明確な方向性を決めることができなかった。</p> <p>攪拌混合工法における共回り現象については、ベーンせん断試験、フォールコーン試験、付着力試験を行い、これらの実験結果と共回りの関係性についてある程度系統的な考察ができたと考えている。</p> <p>配合手順の標準化試験は、液性限界を指標とできる可能性があることを確認できた。レストム工法については、粘土の含水比と改良剤の添加量に相関性があり、これを指標としてレストム工法の効果を検討することができる可能性を示すことができた。引き続き共同研究をおこなっていききたいと考えている。</p>				

来年度の進捗目標	今後も自分の研究の方向性については模索していきたい。配合手順の標準化試験、共回りに関する研究は引き続き実施したい。レストム工法については、まず改良剤の基本的性質を確認できたので、今後どのような方向性で研究を進めるかをレストム工法協会とも相談しながら検討を進めていきたい。		
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動			
2023年1月～2023年3月	亶理町大規模盛土造成地盤の造成地盤に関する有識者としての参考意見 有識者としての助言		
2022年12月～	宮城県環境審議会 委員		
2022年12月～2023年3月	村田町大規模盛土造成地盤の造成地盤に関する有識者としての参考意見 有識者としての助言		
2022年8月	工学総合研究所 工学に関する啓発活動 実演		
2020年4月～	富谷柔道スポーツ少年団 団長		
2019年11月～	スポーツ少年団認定指導員		
2017年～	仙台市宅地保全審議会 技術専門委員会 委員		
2017年～	仙台市宅地保全審議会 委員		
2014年～2023年1月	仙台市環境影響評価審査会 委員		
2007年6月～	地盤工学会 東北支部地盤災害研究委員会		
2001年～	地震工学会 会員		
2000年～	土木学会 会員		
1997年～	地盤工学会 会員		
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標	工学部柔道部については部員の減少とコロナの関係もあり練習に参加できるのが難しい。柔道スポーツ少年団の指導について、できる限り参加したいと考えている。 これらの活動については、柔道の技術的・勝負論的な強さよりも、学生や子供達の人間的成長に重点を置いて指導したいと考えている。		
今年度の進捗状況	工学部柔道部は今年度はコロナの関係で一度も練習ができていない。また理工系大会は個人戦での参加となり同行しなかった。 スポーツ少年団は、概ね練習に参加できた。スポーツ少年団については今年度は4大会に参加することができ、比較的良い成績を取ることができた。子供達の成長が前年度よりも感じる事ができたのが幸いである。柔道についても今後練習方法等の研究を行い、教えていけるようにしたいと考えている。ホームページの更新も引き続き行っているが、見学者が3名ほどいたものの入団には至っていない。スポーツ少年団では、初段1名合格者を出すことができた。昨年度の中学生の卒団生が東北高校の柔道部に入部し、今年度の中学生の卒団生が仙台育英高校の柔道部に入ることが決まっている。子供達に柔道の楽しさを教えることができていると思う。引き続き青少年の健全育成に貢献したい。		
来年度の進捗目標	工学部柔道部は土樋の柔道部との統合の予定であり、向こうの柔道部と調整しながら練習に参加したいと考えている。 富谷柔道スポーツ少年団については、練習の参加とホームページの更新などを引き続き実施する。青少年の健全育成について引き続き貢献していきたい。団員の昇段試験についても積極的に指導していきたい。 練習・試合とも十分にできない状況ではあるが、そのような中でも子供たちには人間的な成長を促していきたいと考えている。		
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	工学部 環境建設工学科	職名	准教授	氏名	崎山 俊雄	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
復習課題(小テスト)と講義録画の提供による学習内容の定着と自主学習の促進		2022年～		「西洋・近代建築史」と「日本建築史」では、毎回の授業後に、講義内容の定着を図るための復習課題を課した(manabaを利用)。また、「西洋・近代建築史」「日本建築史」「建築法規」では、対面授業(スライド+音声)を録画し、自主学習のために提供した。コロナ禍のオンライン授業で修得した効果的な技術は、コロナ以後も継続して活用することになっている。			
地域の建築文化に対する視点の醸成		2022年～		建築やまちづくりの分野では、地域への視点が極めて重要である。そこで「日本建築史」においては、特に仙台市、多賀城市、宮城県、東北地方への視点を重視した事例の紹介等を心がけている。数回のレポート課題では地域的課題を取り入れた。またジュニアセミナーの少人数課題(講座配属学生対象)では、多賀城市内の歴史的建造物の実測調査体験を通して、地域への視点を育てることを意識している。			
解説リクエスト制による自主学習の促進と効果的な演習解説		2022年～		法律を扱う「建築法規」は特に「繰り返し学習」が重要との判断から、毎回20-30問の演習問題を課した上で、授業の前半を演習問題の解説、後半を新たな単元解説に充てる形式で講義を実施した。特に演習問題の解説に際しては、自分が解けなかった問題の解説をリクエストできるようにすることで、自習を促すとともに、受講生が苦手とする問題を把握して、効果的に補足するようにした。同時に少数意見を見過ごすことが無いように、授業時間内で説明できなかったリクエストに対しては、解説を録画してオンデマンドで提供した。演習問題→弱点の把握→補足解説を連動させた講義展開は、学生アンケートにおいて「分からなかった問題を集中的に解説してくれるので理解が進む」との回答が見られるなど、一定の効果を有することが確認されている。			
建築設計教育における初学者向け対話指導の工夫		2022年～		建築設計の初学者に対する指導において、学生個々人の感性や考えを尊重しつつ、より建築的に思考を深め、造形を発展させていくための対話型指導(1対1指導)を実施している。また、意欲的な取り組みを促すため、オフィスアワー以外の時間でも、可能な限り丁寧に1人1人の学生と向き合うことになっている。			
ミニッツペーパーを活用した双方向性の確保とレベル別発展学習の促進		2022年～		ミニッツペーパー(manabaの「アンケート」機能を使用)を活用し、講義内容に対する振り返り、疑問点、授業評価(意見や要望)などを記入してもらい、理解度把握・授業改善・学習意欲向上のために活用している。これらは原則として翌週までに返却しているが、学科専門科目(建築コース)の40名程度の講義ではコメントを付してフィードバックし、学生一人々々に目配りするように心がけている。また、特筆されるべき振り返りや疑問点については成績に反映するとともに翌週の授業において紹介または補足説明することでフィードバックしており、学生の到達レベルに応じた発展的な学習を促すコメントを意識している。個別のフィードバックは学生アンケートでの評価も高く、学生の参加意欲の向上に一定の効果有ることが確認されている。			
クイズ形式等(問いかけ)による学生の授業参加の促進		2022年～		「西洋・近代建築史」および「日本建築史」においては、多くの建築や美術の事例を取り上げるため、著名な建物の名称や所在地、設計者などについて小テスト形式で学生に問いかけたり、学生の反応を見ながら進行する授業方法を意識している。小テストは前の週に範囲を提示して予習を促し、解答の集約にはresponを活用し、結果は成績評価に反映することとしている(総合的な成績評価方法については初回の講義で資料を配布して詳しく説明している)。学生の授業参加を促し、メリハリのある授業を心掛けている。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
「日本建築史」の講義スライド・配布資料(更新)		2022年～		日本建築の、古代から現代に至るまでの歴史に関する講義資料を刷新した。特に宮城県内および東北地方の歴史的建築を多く取り上げ、地域文化を理解することを促す内容を一層増強した。また、昨年度に作成を試みた予習用オンデマンド教材がやや過負荷だったとの自己反省に基づき、要点を明確にして教え過ぎない教材を意識した。授業アンケートの評価は昨年に比べて良好であった。			

「西洋・近代建築史」の講義スライド・配布資料(更新)	2022年～	西洋建築の、古代から現代に至るまでの歴史に関する講義資料を更新した。写真や図面を多用して視覚的に理解できる内容とすることを心がけるとともに、「歴史を学ぶことの意味」や「歴史からの学び方」を意識的に伝え、「歴史を学ぶことの楽しさ」を体験してもらえるような内容に刷新した。
「フレッシュパーソンセミナー」の講義スライド・配布資料(更新)	2022年～	初年次学生に対する導入的専門科目の講義資料を更新した。作成に際しては、関連分野の最新の動向を調べて資料に反映させるとともに、図や写真、時に映像を用いて視覚的に理解できる内容とした。特に「現在の学びが何に役立つのか」の理解を促す内容とすることを心がけた。
「建築法規」の講義スライド・配布資料・ドリル・補足動画教材	2021年～	建築基準法の重要事項を解説する講義資料を更新した。特に難解な法律用語に対し、当該条文が如何なる目的で定められ、何を、どのように規制しているのかの理解を促す内容とした。特に説明と例題を交互に並べ、予習・復習にも活用しやすい資料づくりを目指した。また、受講者が繰り返し自主学習できるようにmanabaのドリル教材を充実させ、学生からのリクエストに応じて補足的な解説動画を作成して事後学習教材として提供した。

3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等

4. その他教育活動上特記すべき事項

現在の課題・目標	<p>【学科で定めた共通の授業改善目標】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 図や画像・動画等の補助資料を積極的に用いるなど、学生が興味を持つきっかけを授業に取り入れる。 2. 授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに、個々の課題等の意図を学生に伝える。 3.1 授業内のやり取りや課題等により学生の理解度を確認しながら授業を進める。 3.2 授業内外いずれにおいても学生の質問機会を確保する。 <p>【さらに個人で定めた授業改善目標】</p> <ol style="list-style-type: none"> 4. 授業内で、授業の目的や重要な点のまとめや振り返りを行い、学生の理解と知識の定着を促すような試みを実施する。 5. 予習・復習時間が適切な分量になるように課題の再検討を行い、学生アンケート等において成果を確認する。 6. 配属学生とのコミュニケーションによる、きめ細かな卒業研究および就職活動の指導を実施する。 				
今年度の進捗状況	<ol style="list-style-type: none"> 1. 全ての担当講義で画像を中心としたスライド教材を作成(更新)した。また、座学系の講義では、授業を録画し事後に復習教材として公開した。授業アンケートからは肯定的な評価が見られ、改善の取り組みは概ね順調に進捗した。 2. 初回の授業で丁寧な説明を行った上で、適時補足した。授業アンケートの結果は概ね良好であったが、特に建築設計演習(作品)に対する評価基準の説明方法には改善の余地を残した。 3.1 学生の反応を見ながら授業を進めることを心がけた。授業アンケートからは肯定的な評価が見られ、改善の取り組みは概ね順調に進捗した。 3.2 manabaの個別指導(コレクション)、対面授業の前後、およびミニッツペーパーを活用した。特にミニッツペーパーを用いた双方向性には学生からも好意的な意見が多く、改善の取り組みは概ね順調に進捗したと言えるが、授業内での質問機会の確保については改善の余地を残した。 4. 授業の冒頭で前回の復習を実施するとともに、当該講義のテーマと全体の中での位置づけを示した上で、その日の講義を行った。復習から始める手法は学生からも好評で、改善の取り組みは概ね順調に進捗した。 5. 前年度の授業アンケートを踏まえて予習課題と復習課題を見直した。授業アンケートの結果は良好で、改善の取り組みは概ね順調に進捗した。ただし、目標とした自主学習時間には及ばず、継続的な改善が必要と考えている。 6. 研究室所属学生の研究・就職活動状況を常に把握し、指導に活かすことを心がけた。 				
来年度の進捗目標	<p>【学科で定めた共通の授業改善目標】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 図や画像・動画等の補助資料を積極的に用いるなど、学生が興味を持つきっかけを授業に取り入れる。(継続) 2. 授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに、個々の課題等の意図を学生に伝える。(継続) 3.1 授業内のやり取りや課題等により学生の理解度を確認しながら授業を進める。(継続) 3.2 授業内外いずれにおいても学生の質問機会を確保する。(継続) <p>【さらに個人で定めた授業改善目標】</p> <ol style="list-style-type: none"> 4. 授業内で、授業の目的や重要な点のまとめや振り返りを行い、学生の理解と知識の定着を促すような試みを実施する。(継続) 5. 予習・復習時間が適切な分量になるように課題の再検討を行い、学生アンケート等において成果を確認する。(継続) 6. 配属学生とのコミュニケーションによる、きめ細かな卒業研究および就職活動の指導を実施する。(継続) 				

II 研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数
-----------	---------	---------------	----------------------	--------	------

A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)					
大正中期～昭和戦後期における宮城県庁の建設技術者について～近代都道府県庁の土木・建築系技術者に関する歴史的研究～	単著	2022年6月	日本建築学会東北支部, 日本建築学会東北支部研究報告集, 計画系(85)	崎山 俊雄	pp.143-146
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)					
建築が語る東北学院の歴史	単著	2022年	水曜通信	崎山 俊雄	pp.17号-25号
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)					
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)					
G. 学会における研究発表					
昭和初期の仙台・宮城における基督教の広がり と教会建築について～東北学院出身の異色建築家・羽生義三郎の動向を中心に～	単独	2023年2月	近代仙台研究会 第8回研究発表会(仙台)	崎山 俊雄	
H. 翻訳(学術書や原典等)					
I. 特許					
現在の課題・目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 審査付きの学術論文誌への継続的な投稿(筆頭著者で年1編以上) 2. 審査無し of 学術論文誌および学会口頭発表への継続的な投稿(筆頭著者で年2編以上) 3. 内外の競争的資金の継続的な獲得(年1件以上) 4. 研究成果および関連分野での積極的な社会・学内貢献(随時) 				
今年度の進捗状況	<ol style="list-style-type: none"> 1. 達成することができなかった。 2. 達成した(2編)。 3. 科研費・基盤(C)での継続課題が1件ある。 4-1. 異分野の研究者や郷土史関係者が多く参加する地域史の研究会に参加して交流を継続した。 4-2. 東北学院宗教センターが発行する『水曜通信』に連載を持った(年7回) 4-3. 県内外3件の歴史的建造物に対し、自治体や建物所有者から委託を受けて調査を実施し、または保存・利活用のための検討委員会に加わった。 				
来年度の進捗目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 審査付きの学術論文誌への継続的な投稿(筆頭著者で年1編以上)(継続) 2. 審査無し of 学術論文誌および学会口頭発表への継続的な投稿(筆頭著者で年2編以上)(継続) 3. 内外の競争的資金の継続的な獲得(年1件以上)(継続) 4. 研究成果および関連分野での積極的な社会・学内貢献(随時)(継続) 				
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)					
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要		
科学研究費補助金 基盤C	2019年度～	個別(研究代表者)			
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動					
2023年3月	旧高島鉄道高島駅舎保存活用計画検討委員会による耐震診断の結果にかかる意見聴取会 委員				
2022年4月～	日本建築学会 文化財建造物防災体制検討特別委員会 委員				
2022年4月～	「ヤマモ味噌醤油醸造元店舗」「旧高橋家住宅」建築調査 助言・指導, 調査担当				
2022年3月～	「岩沼教会」建築調査 助言・指導, 調査担当, 報告書執筆				
2021年5月～	東北建築賞作品賞 選考委員会 委員				
2018年4月～	日本建築家協会				
2011年4月～	日本都市計画学会 会員				
2011年4月～	建築史学会 会員				
2000年8月～	日本建築学会 会員				
V 芸術分野や体育実技等における主な活動					

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			
1) 東北学院史資料センター 運営委員/調査研究員 2) 産学連携推進センター 委員 3) 工学部図書館委員会 委員 4) 工学部オープンキャンパス委員会 委員長 5) 工学部FD小委員会 委員 6) 環境建設工学科4年グループ主任 7) 工学部準硬式野球部 部長 8) 重要文化財 東北学院旧宣教師館 保存活用計画策定委員会 委員(11月～)			

2022年度							
所属	工学部 環境建設工学科	職名	准教授	氏名	千田 知弘	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		<p>1. 図や画像・動画等の補助資料を積極的に用いるなど、学生が興味を持つきっかけを授業に取り入れる。</p> <p>2. 授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに、個々の課題等の意図を学生に伝える。</p> <p>3. 授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。</p> <p>3.1 授業内のやり取りや課題等により学生の理解度を確認しながら授業を進める。</p> <p>3.2 授業内外いずれにおいても学生の質問機会を確保する。</p>					
今年度の進捗状況		<p>1. に関しては、板書の半分近くを図を用いた説明とし、また、ホームページ等で売っている建築資材を用いて手作りの教材を制作し、学生に直接触れさせる機会を作るなどした。</p> <p>2. に関しては、数回の講義に1回の割合で何度も説明し、レポート提出の重要性を示した。また、講義内で企業の方を招聘し、力学を学んだ先にあるものを実感してもらう機会を設けた。</p> <p>3. に関しては、演習時間等で意見を聞くと共に、オフィスアワーの時間を多く設けた。</p>					
来年度の進捗目標		本年度の実施状況を鑑み、適宜最適化を図りながら、上記1.~3.を継続的に行っていく。					
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
砂と丸太の複合試験体の三軸圧縮試験のFEM		共著	2022年	土木構造・材料論文集		千田知弘, 沼田淳紀, 村田拓海, 村上海翔	pp.印刷中
地盤変動時に生じる鋼アーチ橋およびワーレントラス橋の挙動と損傷に関する数値解析的検討		共著	2022年	令和3年東北学院大学工学部研究報告		村上海翔, 関昆竜太郎, 松井友希, 千田知弘	pp.CD-ROM-CD-ROM
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
極限状態のゴム製支承の応力分布に関する超弾性パラメータを用いたFEM解析		共著	2022年	地震工学研究発表会講演論文集		千田知弘, 村上海翔, 寺澤貴裕, 植田健介, 佐藤京	pp.印刷中
アバットが滑動した際に生じ得るワーレントラス橋の損傷に関する数値解析的検討		共著	2022年	地震工学研究発表会講演論文集		千田知弘, 中沢正利, 若槻直暉, 馬越一也, 松井友希	pp.印刷中
積層シェル構造およびファイバー-シェル要素を用いた地盤変動時にワーレントラス橋に生じる損傷の静的評価		共著	2022年	土木学会, 第25回橋梁等の耐震設計シンポジウム講演論文集		吉沢美香, 千田知弘, 馬越一也, 松井友希, 庄司舞人, 村上海翔, 若槻直暉, 荒川弦太郎, 中沢正利	pp.61-66
超弾性パラメータと接着層を考慮したゴムと鋼板の簡易積層モデルの数値解析的検討		共著	2022年	土木学会, 第25回橋梁等の耐震設計シンポジウム講演論文集		村上海翔, 佐藤京, 寺澤貴裕, 千田知弘, 関昆竜太郎, 荒川弦太郎, 若槻直暉	pp.357-364
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							

F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)			
G. 学会における研究発表			
H. 翻訳(学術書や原典等)			
I. 特許			
現在の課題・目標	耐震防災系の論文を2本以上投稿する.		
今年度の進捗状況	査読論文3本受理され, 査読無し論文を5本投稿しており, 目標は達成している.		
来年度の進捗目標	継続的に, 耐震防災系の研究を進めると共に, 論文を2本以上投稿することを目標としたい.		
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
その他の補助金・助成金	2020年度～2021年度	個別(研究代表者)	
その他の補助金・助成金	2020年度～2021年度	個別(研究代表者)	
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動			
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	工学部 環境建設工学科	職名	准教授	氏名	恒松 良純	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		1. 図や画像・動画等の補助資料を積極的に用いるなど、学生が興味を持つきっかけを授業に取り入れる。 2. 授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに、個々の課題等の意図を学生に伝える。 3. 授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。 3.1 授業内のやり取りや課題等により学生の理解度を確認しながら授業を進める。 3.2 授業内外いずれにおいても学生の質問機会を確保する。					
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標		1. 図や画像・動画等の補助資料を積極的に用いるなど、学生が興味を持つきっかけを授業に取り入れる。 2. 授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに、個々の課題等の意図を学生に伝える。 3. 授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。 3.1 授業内のやり取りや課題等により学生の理解度を確認しながら授業を進める。 3.2 授業内外いずれにおいても学生の質問機会を確保する。					
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
アンケートを用いた景観資源と景観特性の抽出に関する手法の考察	共著	2023年2月	日本建築学会技術報告集, 29(71)	アンケートを用いた景観資源と景観特性の抽出に関する手法の考察	pp.357-361		
歴史的建造物の3次元のモデルを作成するための調査方法に関する考察 3D スキャナと写真測量を用いた内部空間の調査について	共著	2022年12月	日本建築学会情報システム技術委員会, 情報・システム・利用・技術シンポジウム論文集, 45	恒松 良純; 櫻井 一弥	pp.266-271		
福島県沖地震(2021年)における図書館閉架書庫の被害調査と地震対策についての一考察	共著	2022年7月	日本建築学会施設計画論文集, 40	小野寺廉, 門倉博之, 大江真帆, 恒松良純	pp.323-328		
東日本大震災における図書館の被害と復旧に向けた取り組みについての調査	共著	2022年7月	日本建築学会施設計画論文集, 40	恒松良純(東北学院大学), 佐藤晴喜, 門倉博之	pp.329-336		
17道府県の公共図書館に対するアンケート調査から得た災害対策についての考察	共著	2022年7月	日本建築学会施設計画論文集, 40	佐藤晴喜, 門倉博之, 恒松良純	pp.317-322		
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
図書館の閉架書庫における経路選択行動に関する実験的研究(その6) 一対比較法を用いた避難時を想定した通路の選択に関する考察	共著	2022年9月	日本建築学会大会学術講演集(北海道), E-1	恒松良純・門倉博之・大江真帆	pp.727-728		
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセイ(専門分野)							
『せんだいデザインリーグ2022 卒業設計日本一決定戦』	分担執筆	2022年9月	建築資料研究所	仙台建築都市学生会議+仙台メディアテーク	pp.0-0		

E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)					
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)					
G. 学会における研究発表					
図書館の閉架書庫における経路選択行動に関する実験的研究(その6) 一対比較法を用いた避難時を想定した通路の選択に関する考察	共同	2022年9月	日本建築学会大会学術講演(北海道)(北海道情報大学)	恒松良純・門倉博之・大江真帆	
東日本大震災における図書館の被害と復旧に向けた取り組みについての調査	共同	2022年7月	第40回地域施設計画研究シンポジウム(建築会館)	恒松良純, 佐藤晴喜, 門倉博之	
H. 翻訳(学術書や原典等)					
I. 特許					
現在の課題・目標	①景観計画における補助制度の実情に関する研究 ②景観まちづくりに関する色彩基準に関する研究 ③図書館建築における空間構成と計画に関する研究 ④土樋キャンパス周辺の街路景観に関する研究 ⑤図書館建築における避難に関する研究				
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)					
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概 要	
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動					
2022年12月～	多賀城市都市計画マスタープラン策定協議会 委員				
2022年12月～	仙台市景観総合審議会 副部長				
2022年12月～	仙台市景観総合審議会 屋外広告物部会 部長				
2022年4月～	日本建築学会 建築計画委員会 計画基礎運営委員会 空間研究小委員会 主査				
2021年10月～	女川町 都市計画審議会 副会長				
2021年4月～	日本建築学会 東北支部 常議員				
2018年12月～	宮城学院女子大学 非常勤講師				
2018年6月～	多賀城市都市計画審議会委員 委員				
2015年4月～	日本建築学会 建築計画委員会 計画基礎運営委員会 委員会 会員				
2014年4月～	日本建築学会 建築計画委員会 計画基礎運営委員会 委員				
2012年4月～	建築計画委員会 空間研究小委員会 委員(2012年4月～2018年3月:幹事・2019年4月～2022年3月:出版WG主査・2022年4月～:小委員会主査)				
2012年4月～	日本建築学会 建築計画委員会 計画基礎運営委員会 委員				
2008年9月～	国土交通省東北地方整備局 東北地方道路研究会				
2008年9月～	国土交通省東北地方整備局 東北地方道路研究会(国土交通省東北地方整備局 東北地方道路研究会)				
2008年4月～	日本建築学会 東北支部 建築計画部会 委員				
2007年4月～	日本建築学会 東北支部 建築計画部会 部会員 会員				
2006年4月～	日本建築学会 建築計画委員会 計画基礎運営委員会 空間研究小委員会 会員				
2002年4月～	日本建築学会 建築計画委員会 空間研究小委員会 委員				
2000年11月～	人間・環境学会会員 会員				
1995年4月～	日本建築学会会員 会員				
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動					
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)		発表・展示等の内容等	

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	
VI 学内における管理運営に関する諸活動	

2022年度							
所属	工学部 環境建設工学科	職名	准教授	氏名	三戸部 佑太	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		<p>以下の学科の授業改善目標に即して授業の改善を目指した。</p> <ol style="list-style-type: none"> 図や画像・動画等の補助資料を積極的に用いるなど、学生が興味を持つきっかけを授業に取り入れる。 授業全体の到達目標および成績評価の基準を明示するとともに、個々の課題等の意図を学生に伝える。 授業内外において学生と教員との双方向コミュニケーションを意識し、学生の理解度の確認や質問機会の確保に努める。 <ol style="list-style-type: none"> 3.1 授業内のやり取りや課題等により学生の理解度を確認しながら授業を進める。 3.2 授業内外いずれにおいても学生の質問機会を確保する。 					
今年度の進捗状況		<p>各目標に対して、以下のように工夫を行った。</p> <ol style="list-style-type: none"> 初回授業のガイダンス時や、これまで授業で出てきていない新たな現象を取り上げる際に、実際の写真・動画を見せるようにした。また、理論の説明の際にも、イメージ図を多用し、数式を持つ物理的な意味合いを直感的に理解しやすくするように意識した。 初回授業時やレポート出題時、さらにテストの前の授業時に成績評価の方法を示した。また、口頭での説明だけでなく、説明資料をmanabaで公開し、後から個々の学生が確認できる形で示しておくようにした。また、授業毎に実施する小課題やレポートの出題時に、どういった点を理解してほしいか、考えてほしいかを補足的に説明するようにした。加えて、小課題やレポートのフィードバックを行う際にも改めて要点を伝えた。 3.1 毎回の授業で小課題を実施し、その解答の様子を確認しながら、随時補足説明を行った。また、最終的な正答率も踏まえて次回授業の冒頭で解説を行うようにした。レポート課題についても、採点後にフィードバックを行い、学生の理解状況に応じた解説を加えるようにした。 3.2 授業内の小課題の時間やその後の時間に質問を受け付けるとともに、manabaの個別指導・掲示板およびメールでの質問を受け付けた。質問機会としては確保できているものの、実際に質問をしてくる学生は多くなく、この点は課題である。 					
来年度の進捗目標		<ol style="list-style-type: none"> 来年度からは新キャンパスの新しい水路が使用可能であり、この水路を使用した実験映像も加えていきたい。また、実際の水の流れを観察できるよう実験の見学をできる機会を取り入れることも検討したい。 基本的には目標通りに進行できたものと考えているが、意図を十分に理解せず、取り組みが不十分な学生も散見されるため、よりわかりやすい説明を工夫し、学生の取り組み状況の改善を目指す。 3.1 現在のやり方で理解度の確認およびその授業内容へのフィードバックはある程度できているものと思われるが、特に専門性の強い授業では理解が不十分のまま計算の手順だけを追っているような学生もいるようである。小課題・レポートの内容を精査し、改良することで、十分に学生の理解度を把握できるように工夫する。 3.2 小課題の時間やmanabaでの質問機会は確保しているものの、実際に質問をしてくる学生は少ないため、より質問をしやすい環境を作れるように努めていきたい。 					
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
地殻変動の水平変位寄与分の考慮方法の違いによる2011年東北地方太平洋沖地震津波の推定波源のすべり量分布の比較	共著	2022年11月	日本地震工学会論文集, 22(5)	道口 陽子, 杉野 英治, 三戸部 佑太, 田中 仁	pp.5_25-5_42		
航空写真からの津波瓦礫判別におけるCNNの適用	共著	2022年11月	土木学会論文集B2(海岸工学), 78(2)	三戸部 佑太, 野村 飛翔, 増田 達男	pp.L1045-L1050		
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							

G. 学会における研究発表			
H. 翻訳(学術書や原典等)			
I. 特許			
現在の課題・目標	1. 開発する基礎技術の高度化を進め、現地のモニタリングや実験における計測に応用することで、種々の現象解明に寄与する 2. 防災教育のためのツール開発を行い、また実際に防災教育へ用いていく 3. 個々の研究の質を高め学術誌への投稿を行う		
今年度の進捗状況	1. UAVを用いた海浜モニタリング手法として、地形観測や波浪観測の検討を行った。いずれについても深層学習を用いた画像判別法を導入し、その適用性・有効性を検討した。 2. 防災教育ゲームの開発を進めるとともに、サイエンスデイや1年生の授業の中で実際に使用した。より多くの子供たちが触れられるように簡単な操作でわかりやすい表示を求めたバージョンと、より詳しく学ぶことを想定したアプリ版の二つの方向で開発を進めた。 3. その他の研究も含め、開発・改良を進め、一定の成果が得られた。津波瓦礫判別の論文の投稿を行い採択された。その他にも論文の投稿に向けて準備をしている状況である。		
来年度の進捗目標	1. 技術的な開発・改良はある程度進んでいるため、フィールドや実験での応用を進めていき、現地状況のモニタリングや現象解明につなげたい。 2. 防災教育ゲームについてもシステム自体の完成度は高まってきたため、より広く普及できるように工夫をすることと、津波以外のテーマについても検討を進めていきたい。 3. これまでは和文の投稿が多いため、英文での投稿も含めて積極的な成果発表を目指したい。		
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動			
2017年10月～		土木学会 減災・防災委員会 緊急対応マネジメント小委員会 委員 会員	
2017年4月～		土木学会東北支部幹事 会員	
2014年～		国際水理学会(IAHR) 会員 会員	
2013年～		自然災害学会 会員 会員	
2008年～		土木学会 会員 会員	
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動			
・環境建設工学科教育改善委員会(FD小委員長)			

2022年度							
所属	工学部 情報基盤工学科	職名	教授	氏名	淡野 照義	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
自然科学実験ファンダメンタルズ物理学分野での自由落下実験の新設準備		2022年9月～2023年3月					
自然科学実験ファンダメンタルズ物理学分野での自由落下実験の新設準備		2021年9月～2022年12月					
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		自然科学実験ファンダメンタルズ「落下実験」の完成 卒業研究における機械学習テーマの遂行					
今年度の進捗状況		自然科学実験ファンダメンタルズ「落下実験」は未完成 卒業研究における機械学習テーマの遂行は第1段階終了					
来年度の進捗目標		自然科学実験ファンダメンタルズ「落下実験」の完成 卒業研究における機械学習テーマの完了					
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
画像解析技術によるブレッドボード上の電子回路配線パターン推定に関する研究		共同	2022年9月	2022 FIT 第21回情報科学技術フォーラム(慶應義塾大学 矢上キャンパス)	太田匠海, 森島佑, 鈴木順, 志子田有光,		
Millimeter Wave Spectroscopy and Molecular Dynamics Simulation of Ionic Liquids		共同	2022年9月	11th International Workshop on Infrared Microscopy and Spectroscopy with Accelerator Based Sources (WIRMS2022) (Hiroshima)	T. Awano, T. Takahashi		
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		機械学習の分光データ解析への応用					
今年度の進捗状況		機械学習の分光データ解析への応用についてはほとんど進捗なし					
来年度の進捗目標		機械学習の分光データ解析への応用を進める					
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要			

IV 学会等及び社会における主な活動			
1983年～		日本物理学会 会員	
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	工学部 情報基盤工学科	職名	教授	氏名	石上 忍	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Improvement of Broadband Folded Long-Hexagon Antenna for EMI Measurements	共著	2022年12月	2022 Asia-Pacific Microwave Conference, TH3-F5	Keita Kobayashi, Shinobu Ishigami, Ken Kawamata, Katsushige Harima, Shingo Inori	pp.426-428		
Distance Characteristics of Field Peak Value of Transient Electric Field Caused by Sphere-Gap ESD Using a Optical E-Field Probe	共著	2022年9月	Proc. of Int'l Symposium on Electromagnetic Compatibility Europe, OS-11-4	Ken Kawamata, Shinobu Ishigami, Osamu Fujiwara	pp.1-4		
FD-TD Analysis of Conical Monopole Antenna with Double-Boltzmann Function Type Taper Line	共著	2022年9月	2022 Asia-Pacific International Symposium on Electromagnetic Compatibility, TU-AM2-SS09-03	Shinobu Ishigami, Masaya Suzuki and Keita Kobayashi, Toshi-ya Ishizaki, Ken Kawamata, Shigeki Minegishi	pp.1		
Measurement of Transient Waveform Caused by ESD Using a Wideband Folded Long-Hexagon Antenna	共著	2022年9月	2022 Asia-Pacific International Symposium on Electromagnetic Compatibility, TU-AM2-SS09-01	Ken Kawamata, Shinobu Ishigami, Osamu Fujiwara	pp.1		
Measurement of Transient Waveform Caused by ESD Using a Wideband Folded Long-Hexagon Antenna	共著	2022年9月	Proc. of 2022 Asia-Pacific Electromagnetic Compatibility (APEMC 2022), China, SA-AM2-SS09-01/On-Line Hybrid	Ken Kawamata, Shinobu Ishigami, Osamu Fujiwara	pp.SS09-01-1		
独立成分分析を用いた複数の電磁雑音波形抽出の検討	共著	2022年8月	電子情報通信学会論文誌, J105-B(8)	高橋 直央, 石上 忍, 川又 憲	pp.613-620		
放射妨害波測定用超広帯域アンテナの設計・開発	共著	2022年6月	電子情報通信学会論文誌, J105-B(6)	石上 忍, 石崎 利弥, 小林 圭太, 川又 憲, 張間 勝茂, 禰 真悟	pp.458-465		
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
二重Boltzmannテーパ線路型コニカルモノポールアンテナの標準電界法による利得測定	共著	2023年1月	電気学会研究会資料, SMF-23-013	石上 忍, 鈴木智絵, 小林圭太, 川又 憲, 嶺岸茂樹	pp.33-36		
短波帯アクティブ電界アンテナの設計・開発	共著	2022年10月	電気学会研究会資料, EMC-22-031	石上 忍, 川又 憲	pp.139-143		

改良型広帯域折返しアンテナの特性測定	共著	2022年10月	電子情報通信学会技術研究報告, EMCJ2022-41	小林 圭太, 山本夢月, 石上 忍, 川又 憲, 張間 勝茂, 袴 真悟	pp.31-36
二重Boltzmannテーパ線路型コニカルモノポールアンテナの利得測定	共著	2022年10月	電子情報通信学会技術研究報告, EMCJ2022-42	鈴木智絵, 小林圭太, 石上 忍, 川又 憲, 嶺岸茂樹	pp.37-41
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)					
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)					
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳(学術書や原典等)					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)					
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要		
IV 学会等及び社会における主な活動					
2020年4月～		情報通信審議会 情報通信技術分科会 CISPR/A作業班 主任			
2019年4月～		情報通信審議会 情報通信技術分科会 電波利用環境委員会 委員			
2017年11月～		電気学会 電磁環境部会 委員			
2017年11月～		IEC SC77B国内委員会 委員長			
2017年4月～2023年3月		電気学会 電磁環境技術委員会 委員			
2016年4月～		国立研究開発法人情報通信研究機構 協力研究員(2018年4月より 特別研究員) 非常勤職員			
2015年9月～		IEC ACEC国際委員 委員			
2015年9月～		IEC ACEC国内分科会 分科会長			
2015年1月～		静電気学会			
2011年8月～		CISPR/A エキスパート 委員			
2006年3月～		IEC TC77 WG13(作業部会) エキスパート 委員			
2006年3月～		電磁環境両立性標準化委員会(IEC TC77国内委員会) 幹事			
2003年1月～		電気学会			
1992年1月～		IEEE(米国電気電子学会)			
1991年4月～		電子情報通信学会			
V 芸術分野や体育実技等における主な活動					
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等		
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
VI 学内における管理運営に関する諸活動					

2022年度							
所属	工学部 情報基盤工学科	職名	教授	氏名	加藤 和夫	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
工学に関わる啓発活動の講師		2022年8月29日		東北学院大学工学総合研究所, および多賀城市教育委員会が主催の工学に関わる啓発活動において「からだの電気をみてみよう」と題したコラボ授業の講師を務めた。			
現在の課題・目標		① 講義受講生の理解度向上に貢献できるよう講義内容の改善を行う。 ② 高校生や中学生を対象した出前授業や工学に関する啓発活動において, 受講者が楽しく, 興味深く体験できる工学実験教材の開発を行う。 ③ 企業の研究員との研究発表やディスカッションを通して実社会との交流を深める教育を行う。					
今年度の進捗状況		① 講義時間外に復習・予習課題を課し, 講義内容の理解の定着を促すなど進捗が見られた。また, 今年度はコロナ感染対策として昨年度から進めていた遠隔講義用のオンデマンド教材の更なる修正・改良を行うなど進捗が見られた。 ② 近隣の中学生を対象した工学に関わる啓発活動において, 中学生が楽しく, 興味深く取り組むことのできる工学実験教材を開発するなど進捗が見られた。 ③ コロナ禍の影響で企業の研究員との交流ができず, 今年度の進捗は見られなかった。					
来年度の進捗目標		① 講義受講生の更なる理解度向上に貢献できるよう講義内容の改善を行う。特に来年度はBYOD科目を担当するため, パソコンを利用した魅力ある講義資料の作成を行う。 ② 今年度に引き続き高校生や中学生を対象した出前授業や工学に関する啓発活動において, 受講者が楽しく, 興味深く体験できる工学実験教材の開発・改良を行う。 ③ 今年度に引き続き企業の研究員との研究発表やディスカッションを通して実社会との交流を深める教育を行う。					
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Evaluation of the optimal averaging number during event-related potential estimation	単著	2023年3月	東北学院大学工学部研究報告, 56(1)	Kazuo KATO	pp.15-18		
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
エラー関連電位に基づく二者択一式ブレイン・マシン・インターフェースの実現可能性の検討	共同	2023年3月	令和5年電気学会全国大会(名古屋)	◎荒翔太, 加藤和夫, 門倉博之, 石川敦雄			
学習時認知活動とFm θ 波の多人数同時計測	共同	2023年3月	令和5年電気学会全国大会(名古屋)	◎上野聡太, 金義鎮, 加藤和夫, 金恵鎮			
動きがある目標刺激に対する視覚探索時の視線応答の評価	共同	2022年9月	生体医工学シンポジウム2022(Online)	◎紺野圭伍, 加藤和夫, 門倉博之, 石川敦雄			
ブレイン・マシン・インタフェースの精度向上を目的としたエラー関連電位の評価	共同	2022年9月	生体医工学シンポジウム2022(Online)	◎荒翔太, 加藤和夫, 門倉博之, 石川敦雄			

脳波測定に基づく背景の空間周波数特性が潜在意識に与える影響の評価	共同	2022年9月	生体医工学シンポジウム 2022(Online)	◎前田蒼日, 加藤和夫, 門倉博之, 石川敦雄	
前頭部の脳波測定に基づく学習時認知状態に関する検討	共同	2022年8月	2022年度電気関係学会東北支部連合大会(Online)	◎上野聡太, 加藤和夫, 金恵鎮, 金義鎮	
H. 翻訳(学術書や原典等)					
I. 特許					
現在の課題・目標	① 生体情報計測に基づく視環境評価に関する研究を実施する。 ② 生体情報計測に基づくヒューマンインターフェースに関する研究の実現可能性を探る。 ③ 生体信号処理方法の開発に関する研究を実施する。				
今年度の進捗状況	① 視空間が観察者の大脳神経活動へ与える影響に関する研究を実施し, 学会発表を行った。また同テーマで論文を執筆し, 査読付き論文として学会への投稿の準備を進めた。 ② ブレイン・マシン・インターフェースのシステム開発を進め, 学会発表を行った。 ③ 加算平均法に基づく誘発脳波のノイズ除去に関する研究を進め, 脳波計測システムのノイズの大きさを同定する方法を開発し, 東北学院大学工学部研究報告に投稿し掲載された。				
来年度の進捗目標	① 生体情報計測に基づく視環境評価に関する研究を継続して実施する。来年度は, 新たな実験タスクを導入・実施することにより, 新しい知見を得ることを試みる。 ② 視覚探索時の視線軌跡の測定を行い, 機械学習の手法を用いて無意識的な探索の有無について検討する。 ③ エラー関連電位を用いたブレイン・マシン・インターフェースのシステム開発を進める。				
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)					
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概 要	
科学研究費補助金 科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)(基盤研究C)	2020年度～2022年度	共同(研究代表者)		空間周波数が潜在的な感覚に与える影響と関連する大脳神経活動の評価を行う。	
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動					
2016年8月～	国際複合医工学会 会員				
2016年8月～	国際複合医工学会 評議員				
2006年～	日本人間工学会 会員				
2001年3月～	電気学会 会員				
2000年5月～	日本生体磁気学会 会員				
1999年～	日本磁気学会 会員				
1994年10月～	電子情報通信学会 会員				
1994年～	生体医工学会 会員				
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動					
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等		
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動					
工学研究科 電子工学専攻 専攻主任					

2022年度							
所属	工学部 情報基盤工学科	職名	教授	氏名	神永 正博	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
工学部向け数学教育の実践		2020年4月1日～		工学を学ぶ上で必要となる数学、数学的な考え方は、標準的な数学のカリキュラムとは異なっている。講義では、理論的に興味深い、応用上不要と思われる部分をカットし、必要な部分に説明を集中している。「情報セキュリティ工学」では、Pythonによる実習に取り組み、「確率統計学」でRによる実習の導入に取り組んだ。今年度は、『Pythonで学ぶフーリエ解析と信号処理』(コロナ社)を出版し、フーリエ解析の講義にPythonと信号処理を導入した。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
『Pythonでしっかり学ぶ線形代数 行列の基礎から特異値分解まで』		単著	2023年2月	講談社		神永正博	pp.1-262
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Improving Genetic Algorithms for Solving the SVP: Focusing on Low Memory Consumption and High Reproducibility		共著	2022年12月	Iran Journal of Computer Science, 5(4)		Masaharu Fukase, Masahiro Kaminaga	pp.359-372
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
格子行列に基づくブロック暗号の提案と解析		共同	2022年8月	2022年度電気関係学会東北支部連合大会 講演論文集(オンライン)		◎大宮 悠暉, 森島 佑, 神永 正博	
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)		個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要	

IV 学会等及び社会における主な活動			
2022年4月～		工学研究科委員会 電気工学専攻専攻主任	
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	工学部 情報基盤工学科	職名	教授	氏名	郷古 学	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進		2020年～		前回の講義で実施した課題のなかから、いくつかの回答を選び紹介することで、前回講義内容の復習を行っている。2022年度はオンライン講義が主だったため、講義動画内で、前回課題の回答の中から、いくつかピックアップして、学生に紹介した。			
講義内容の定着を目的とした課題の実施		2020年～		講義(「情報工学基礎」)において、講義内容の定着を目的とし、講義で扱った内容に関する課題をオンラインで実施し、毎回採点し評価に組み込んでいる。			
講義用ホームページの作成		2020年～		講義や卒業研究で扱った資料や参考文献の情報を確認できるように、講義用のホームページをmanabaで作成し、運用している。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
クリティカル・シンキングの技法テキスト		2020年～		講義内容についてまとめたテキストを作成した。2022年度はオンライン講義が主だったため、manabaの機能を利用して、資料等を配布した。			
読解・作文の技法テキスト		2020年～		講義内容についてまとめたテキストを作成した。また、より理解を深めることを目的として、様々な配布資料を作成し、講義内で使用した。			
卒業研究用の資料		2020年～		卒業研究に必要な知識をまとめた資料(プログラム、文章等)を作成し、PDF化してホームページからダウンロードして利用できるようにした。manabaの掲示板機能やレポート提出機能、slackなどのアプリケーションを用いて、指導を行った。			
講義(情報工学基礎)の配付資料に関する工夫		2020年～		講義(情報工学基礎)では市販のテキストの他、毎回配付資料を用いた講義を行っている。配布資料は、当該回の講義内容をまとめたものに加えて、例題や課題を多く掲載し、学生の理解を深めることができるような工夫をしている。また、講義内の小テスト等をすべてmanaba上で実施可能とし、学生の利便性を上げるとともに、講義運営の効率化を図った。			
講義(ソフトウェア開発演習Ⅰ)演習教材の開発		2020年～		講義(ソフトウェア開発演習Ⅰ)で用いる教材を作成した。教材はマイクロコンピュータ、センサ、プログラム等からなり、円滑な講義運営ができるように、何度も試行&評価を繰り返して作成した。			
講義(ソフトウェア開発演習Ⅰ)配付資料		2020年～		講義(ソフトウェア開発演習Ⅰ)で配布する講義内容をまとめた資料を作成。同資料には学習内容の定着を目的とした課題も記載されている。2020年度はオンライン講義が主だったため、manabaの掲示板機能やレポート提出機能を用いて対応した。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
プレカレッジ(出前講義)		2023年2月16日		東北学院中学高等学校2年生(理系希望者)を対象に、プレカレッジとして大学の講義を行った。			
宮城県泉高等学校PTA研修会		2022年12月5日		宮城県泉高等学校の1学年第2回PTA研修会において、大学での学びについて講演を行った。			
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		(ア)グループワークなど、学生同士が互いに相談し、より積極的に教え合う仕掛けを導入する。 (イ)すべての講義において、その講義の重要性に関して、実例と組み合わせで説明する。 (ウ)講義中の学生とのコミュニケーションを大切にする。					
今年度の進捗状況		<ul style="list-style-type: none"> ・上記目標(ア)について、zoomの機能を用いてグループワーク実施した。 ・上記目標(イ)について、講義の重要性に関する身近な時事問題を加えた。 ・上記目標(ウ)について、manabaの掲示板機能を利用して、活発な議論を実現できるような工夫を取り入れた。 ・対面講義の実施に伴い、学生とコミュニケーションをとるよう心がけ、講義の理解度について、把握するよう努めた。 					
来年度の進捗目標		<ul style="list-style-type: none"> ・上記目標(ア)について、さらにブラッシュアップする。 ・上記目標(イ)について、最新の時事問題に加え、事例紹介を充実させる。 ・上記目標(ウ)について、グループワークの活性化について更に工夫する。 ・次年度は新規担当科目が増え、全体の担当講義数も増加するが、丁寧な講義を心がけたい。 					

II 研究活動					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月 (西暦)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)					
机上の空きスペースの大きさと配置が片付けの知覚に与える影響	単著	2022年8月	日本家政学会誌, 73(8)	郷古 学	pp.525-534
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)					
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)					
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳(学術書や原典等)					
I. 特許					
現在の課題・目標	(ア)感染症予防対策を行い、被験者参加型の実験を計画。 (イ)実験データの解析と、論文の執筆。 (ウ)積極的に学会発表を実施。				
今年度の進捗状況	<ul style="list-style-type: none"> 上記目標(ア)については、実際に被験者に参加してもらい、実験を実施した。 上記目標(イ)については、データを解析し、その内容をまとめて原著論文を発表した 上記目標(ウ)については、研究会に参加して多くの研究者と議論した。 				
来年度の進捗目標	<ul style="list-style-type: none"> より発展的な実験を計画し、実施する。 新たな論文の執筆を行う。 機械学習に関する新しい数理モデルの構築を開始する。 				
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)					
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要		
IV 学会等及び社会における主な活動					
2019年7月～		日本家政学会 会員			
2014年～		日本ロボット学会研究専門委員会 開かれた知能研究専門委員会 委員 会員			
2005年9月～		米国電気電子学会 会員			
V 芸術分野や体育実技等における主な活動					
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等		
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
VI 学内における管理運営に関する諸活動					
1) 広報・ホームページ委員委員長 2) 入試委員 3) 中高大一貫教育実施委員会 4) 大学案内編集委員会 5) ICT教育専門委員会委員委員(委員長)					

2022年度							
所属	工学部 情報基盤工学科	職名	教授	氏名	志子田 有光	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
文部科学省「数理・データサイエンス・AI教育プログラム(リテラシーレベル)」(通称MDASH)申請と認定		2022年4月1日～		TGベーシック「東北学院大学 数理・データサイエンス・AI教育プログラム」を文部科学省「数理・データサイエンス・AI教育プログラム(リテラシーレベル)」(通称MDASH)として申請し認定された。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
画像解析技術によるブレッドボード上の電子回路配線パターン推定に関する研究		共同	2022年9月	2022 FIT 第21回情報科学技術フォーラム(慶應義塾大学 矢上キャンパス)	太田匠海, 森島佑, 鈴木順, 志子田有光,		
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要			

<p>科学研究費補助金 日本学術振興会 科学研究費助成事業 基盤C</p>	<p>2019年度～2022年度</p>	<p>共同(研究分担者)</p>	<p>今後、IoTデバイスは近くのデバイスと通信するため、一つのデバイスのセキュリティが破られることで被害が拡大する可能性がある。ハードウェアリソースが限られたIoTデバイスに暗号を実装するために軽量暗号が考案され、サイドチャネル攻撃とその対策技術が研究されている。電力解析攻撃の観点から見ると軽量暗号の中でもSIMONに代表されるSボックスを持たない論理演算型ブロック暗号への攻撃が困難であることが注目される。論理演算型ブロック暗号のサイドチャネル耐性の解明と格子理論を用いた鍵スケジュールのサイドチャネル攻撃(差分故障解析)に対する安全性解析により耐タンパーブロック暗号の設計原理を解明する。</p>
<p>IV 学会等及び社会における主な活動</p>			
<p>V 芸術分野や体育実技等における主な活動</p>			
<p>展覧会・演奏会・競技会等の名称</p>	<p>場 所</p>	<p>開催年月日(西暦)</p>	<p>発表・展示等の内容等</p>
<p>現在の課題・目標</p>			
<p>今年度の進捗状況</p>			
<p>来年度の進捗目標</p>			
<p>VI 学内における管理運営に関する諸活動</p>			

2022年度							
所属	工学部 情報基盤工学科	職名	教授	氏名	鈴木 利則	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要			
IV 学会等及び社会における主な活動							
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)		発表・展示等の内容等			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
VI 学内における管理運営に関する諸活動							

2022年度							
所属	工学部 情報基盤工学科	職名	教授	氏名	吉川 英機	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
遠隔授業における双方向性の確保		2020年～		2020年度の遠隔授業ではオンデマンドが主となったが、時間割上の時間帯においてはZOOMにて質問対応ができるようにして、双方向性を確保した。			
授業においてManabaを活用して、自作教材を自由に使えるようにした。		2017年～					
2. 作成した教科書、教材、参考書							
授業において自著を使用している。		2019年～		三木、吉川「情報理論」コロナ社			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
学生相談員としての業務		2019年～		学生相談室に来室した学生・保護者の対応を行う。			
多賀城市との連携協定事業の一環として開催する「21世紀のキーテクノロジーを学ぶ」の講師		2013年～		夏季休業中に多賀城市内の小中学校理科教諭に対し、授業に役立つと思われる内容について講習を行った。			
教職課程センター所員としての業務		2010年～		教育課程履修の学生に対して教育実習の支援を行っている。			
工学総合研究所啓発活動コラボ授業の講師		2010年～		夏季休業中に多賀城市立東豊中学校の生徒を対象として、情報通信に関連する講習と実習を行った。			
工学基礎教育センター相談員		2010年～		数学、物理の学習支援を中心として、専門科目の相談も応じている。			
現在の課題・目標		<ul style="list-style-type: none"> ・担当科目に対して興味を引き出させること ・自主的に行うことができる内容の課題を出すこと ・講義内容を応用できるようになること 					
今年度の進捗状況		<ul style="list-style-type: none"> ・担当科目に対して興味を引き出させること ・自主的に行うことができる内容の課題を出すこと ・講義内容を応用できるようになること 					
来年度の進捗目標		<ul style="list-style-type: none"> ・上記の点について授業資料の内容を見直しながら継続する ・評価項目をより明確にする ・新たな教科書の執筆(情報数学) 					
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
ラウンド加算DFAを用いたハッシュ関数への攻撃に関する一報告		単独	2022年12月	第45回情報理論とその応用シンポジウム(SITA2022)(北海道)	伊藤久晃, 吉川英機		
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							

現在の課題・目標	<ul style="list-style-type: none"> ・従来より行っている誤り訂正符号の数学的解析を続けている ・学内において組織しているアタックラボで行っている差分電力解析による共通鍵暗号の解析 ・誤り訂正符号、および暗号システムの実装への応用 ・大学院生の指導 		
今年度の進捗状況	<ul style="list-style-type: none"> ・これまでに国際シンポジウムに投稿した内容の論文投稿の準備をしている。 ・卒業研究において、軽量ブロック暗号や誤り訂正符の性能評価を研究テーマとした。 ・大学院生を指導した 		
来年度の進捗目標	<ul style="list-style-type: none"> ・情報基盤工学科の新設に伴い、新カリキュラムの充実を全てに優先させる。 ・誤り訂正符号の解析テーマに関しては既発表の内容の論文投稿を行う。 ・ブロック暗号だけでなく、ストリーム暗号の攻撃を行う。 ・暗号攻撃にFPGAボードを利用するためのスキルを身につける。 		
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動			
2022年6月～	電子情報通信学会 基礎・境界ソサイエティ 出版委員		
2021年6月～	電子情報通信学会 情報理論とその応用サブソサイエティ 会計担当		
2019年～	計測自動制御学会 会員		
2012年～	電気学会 会員		
2009年～	電子情報通信学会 東北支部 運営委員		
2005年～	電子情報通信学会 論文誌 査読委員		
1992年～	The Institute of Electrical and Electronics Engineers (IEEE) 会員		
1991年～	電子情報通信学会 会員		
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動			
情報基盤工学科 学科長			

2022年度							
所属	工学部 情報基盤工学科	職名	准教授	氏名	門倉 博之	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
授業理解促進のためのオンライン動画の作成配信および資料作成と配布		2022年4月12日～2023年1月6日		授業のオンライン動画の作成と配信, 演習資料および授業内容のポイントをまとめたPDF資料を配布し, 授業理解促進を図った。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
応用線形代数学演習の演習資料と小テストの配布		2022年9月14日～2023年1月4日		1学年後期の授業「応用線形代数学演習」の教材を毎回作成し配布した。			
情報数理演習Ⅲの演習資料と小テストの配布		2022年9月8日～2023年1月5日		1年後期の授業「情報数理演習Ⅲ(微分積分学Ⅱ)」の教材を毎回作成し配布した。			
データサイエンス演習の演習資料の配布		2022年4月15日～2022年7月29日		3年前期の授業「データサイエンス演習」の教材を11回分作成し配信・配布した。			
情報数理演習Ⅱの演習資料と小テストの配布		2022年4月14日～2022年7月28日		1年前期の授業「情報数理演習Ⅱ(微分積分学Ⅰ)」の教材を毎回作成し配布した。			
情報数学演習の演習資料と小テストの配布		2022年4月12日～2022年7月26日		2年前期の授業「情報数学演習」の教材を毎回作成し配布した。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		授業内容が理解しやすいような, わかりやすい説明をする。学習効果が得られるように教材を工夫して作成する。					
今年度の進捗状況		授業内容が理解しやすいように教材を改良するなど, 一定の進捗があったといえる。					
来年度の進捗目標		引き続き, よりわかりやすい説明と教材の工夫を行う。					
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
東日本大震災における図書館の被害と復旧に向けた取り組みについての調査		共著	2022年7月	日本建築学会, 日本建築学会地域施設計画研究, 40	恒松良純, 佐藤晴基, 門倉博之	pp.329-336	
福島県沖地震(2021年)における図書館閉架書庫の被害調査と地震対策についての一考察		共著	2022年7月	日本建築学会, 日本建築学会地域施設計画研究, 40	小野寺廉, 門倉博之, 大江真帆, 恒松良純	pp.323-328	
17道府県の公共図書館に対するアンケート調査から得た災害対策についての考察		共著	2022年7月	日本建築学会, 日本建築学会地域施設計画研究, 40	佐藤晴基, 門倉博之, 恒松良純	pp.317-322	
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
図書館の閉架書庫における経路選択行動に関する実験的研究(その6)		共同	2022年9月	日本建築学会大会(北海道)学術講演会(北海道)	恒松良純, 大江真帆, 門倉博之		
避難シミュレーションを用いた高層事務所ビルにおける全館順次避難シナリオの評価方法の提案		共同	2022年9月	日本建築学会大会(北海道)学術講演会(北海道)	朴聖經, 水野雅之, 藤井皓介, 佐野友紀, 門倉博之, 関澤愛		

高層事務所ビルの全館避難訓練時における階段歩行に関する実測調査とその分析 その22	共同	2022年5月	2022年度日本火災学会研究発表会(オンライン開催)	門倉博之, 水野雅之, 朴聖經, 佐野友紀, 藤井皓介, 関澤愛
高層事務所ビルにおける火災時の順次避難シナリオの評価方法の提案	共同	2022年5月	2022年度日本火災学会研究発表会(オンライン開催)	朴聖經, 水野雅之, 藤井皓介, 佐野友紀
H. 翻訳(学術書や原典等)				
I. 特許				
現在の課題・目標	①同専門領域の研究者との共同研究を進める。 ②高層建築物における避難時の滞留伝播について分析を行う。			
今年度の進捗状況	上記目標①については, 共同研究として図書館の避難実験の実施・分析と学会の報告と学術論文の投稿をすることができた。上記目標②については, 分析と学会の報告を行い, 一定の進捗があったといえる。			
来年度の進捗目標	上記目標①および②について, 引き続き, 学会での報告と学術論文として投稿する。			
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)				
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要	
科学研究費補助金 科学研究費助成金若手研究	2019年度～2022年度	個別(研究代表者)	高層ビルにおける全館避難時の階段室内滞留のモデル化	
科学研究費補助金 科学研究費助成金基盤研究(C)	2019年度～2022年度	共同(研究分担者)	空間周波数が潜在的な感覚に与える影響と関連する大脳神経活動の評価	
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動				
2005年5月～	日本火災学会会員 会員			
2005年4月～	日本建築学会会員 会員			
2002年6月～	情報処理学会会員 会員			
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動				
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等	
現在の課題・目標				
今年度の進捗状況				
来年度の進捗目標				
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動				
教務委員				

2022年度							
所属	工学部 情報基盤工学科	職名	准教授	氏名	木下 勉	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
オンラインにおける課題提出方法の解説動画の作成		2022年		応用線形代数学, 応用線形代数学演習, 工学総合演習IIにおいて, PC操作初心者向けに, 複数枚として撮影された答案をページ順を保ちつつ, 1つのpdfデータにまとめる方法について, 説明する動画および資料を作成しmanabaにて配布した。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
情報数理演習IIの演習資料と小テストを毎回配布		2022年		「情報数理演習II」の教材を毎回作成し配布した。			
応用線形代数学演習の演習資料と小テストを毎回配布		2022年		「応用線形代数学」の教材を毎回作成し配布した。また, 講義の最後に理解度を確認するテストを作成した。			
応用線形代数学の講義資料と理解度確認テストを毎回配布		2022年		「応用線形代数学」の教材を毎回作成し配布した。また, 講義の最後に理解度を確認するテストを作成した。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		オンラインにおいて, 講義内容が理解できるような説明をする。また, 講義資料をブラッシュアップし, 理解しやすいものにする。					
今年度の進捗状況		各種講義資料について, 前年度作成の資料を見直し, 図表の追加および説明の追加を行った。					
来年度の進捗目標		授業評価アンケートの結果を踏まえ, 対面講義に向けて改善すべき項目に対処する。					
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
石器データベースとRGB-D カメラを用いた石器計測点群のマッチングによる石器識別手法		共著 2022年11月		芸術科学会論文誌, 21(4)		澤田佳紀, 木下勉, Amartuvshin Renchin-Ochir, 千葉史, 今野晃市 pp.213-224	
3次元計測点群に基づく土器片の上下方向と高さ位置推定手法に関する検討		共著 2022年6月		芸術科学会論文誌, 21(2)		木下勉, 李春元, 吉川和杜, 今野晃市 pp.87-96	
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
3次元計測点群のB-Spline 曲面近似に基づく縄文土器の文様抽出法の検討		共同 2023年1月		令和4年度芸術科学会東北支部大会(岩手大学)		◎菊池 青空, 游 梦博, 木下 勉, 今野 晃市	
3次元計測点群を用いた埴輪の顔類似度評価のための輪顔パーツ認識手法の検討		共同 2023年1月		令和4年度芸術科学会東北支部大会(岩手大学)		◎浪岡 凌佑, 游 梦博, 木下 勉, 盧 忻, 木村 彰男, 今野 晃市	
石器データと実石器のマッチング手法の効率化の検討		共同 2023年1月		令和4年度芸術科学会東北支部大会(岩手大学)		◎瀬戸 彩花, 木下 勉	
土器組み立て時の土器片姿勢推定に関する研究		共同 2023年1月		令和4年度芸術科学会東北支部大会(岩手大学)		◎川島 大心, 木下 勉	

石器データベースとRGB-Dカメラを用いた石器計測点群のマッチングによる石器識別手法	共同	2022年11月	芸術科学会, NICOGRAPH2022(北陸先端科学技術大学院大学)	◎澤田 佳紀, 木下 勉, 千葉 史, 今野 晃市	
H. 翻訳(学術書や原典等)					
I. 特許					
現在の課題・目標	①研究成果を学術論文, 口頭発表などの形で発表する. ②外部資金等を獲得し, 研究環境を整備する. ③学外の研究者と共同研究を実施する.				
今年度の進捗状況	①査読付き学術論文が採択された. また, 口頭発表もできた. ②科研費は未採択となった, 次年度は採択されるように努力をする. ③岩手大学との共同研究を実施している.				
来年度の進捗目標	①研究成果を学術論文, 口頭発表などの形で発表する. ②研究室の運営に備え, 外部資金獲得を目指す. ③学外の研究者との共同研究により, 研究環境をよりよくする.				
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)					
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要		
IV 学会等及び社会における主な活動					
V 芸術分野や体育実技等における主な活動					
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等		
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
VI 学内における管理運営に関する諸活動					
シラバス・時間割委員					

2022年度							
所属	工学部 情報基盤工学科	職名	准教授	氏名	木村 敏幸	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
3年生と4年生のセミナーの合同開催		2022年9月～2022年12月		3年向けセミナー「ジュニアセミナー」と4年生向けセミナー「卒業研究II」を合同で開催し、3年生に4年生の発表を聴講させることで、3年生に発表の仕方を自主的に学習させている。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
「確率統計学演習」演習問題資料		2022年9月～2022年12月		講義室の後ろだと黒板・スクリーンに表示した文字が読めないという問題を解決するため、演習問題を掲載した資料を後半計6回分作成し、授業開始時にmanabaを通じて配布した。また、演習問題の解答がかった資料を次回授業開始時にmanabaを通じて配布した。			
「情報理論演習」演習問題資料		2022年4月～2022年7月		講義室の後ろだと黒板・スクリーンに表示した文字が読めないという問題を解決するため、演習問題を掲載した資料を計13回分作成・印刷し、授業開始時に配布すると同時にmanabaでも配布した。また、演習問題の解答がかった紙資料を授業の後半に配布すると同時にmanabaでも配布した。			
「情報数理演習 I (線形代数学)」演習問題資料		2022年4月～2022年7月		講義室の後ろだと黒板・スクリーンに表示した文字が読めないという問題を解決するため、演習問題を掲載した資料を計14回分作成・印刷し、授業開始時に配布すると同時にmanabaでも配布した。また、演習問題の解答がかった紙資料を授業の後半に配布すると同時にmanabaでも配布した。			
「研究・発表の技法」講義スライド		2022年4月～2022年7月		組版ソフトウェア(TeX Live)やプレゼンテーションソフト(Microsoft PowerPoint)を用いて発表資料(レジュメ、スライド、ポスター)をどのようにして作成するかについて解説したスライドを計15回分作成し、manabaを通じて配布した。			
「基礎物理演習」演習問題資料		2022年4月～2022年7月		講義室の後ろだと黒板・スクリーンに表示した文字が読めないという問題を解決するため、演習問題を掲載した資料を計5回分作成・印刷し、演習授業開始時に配布すると同時にmanabaでも配布した。また、演習問題の解答がかった紙資料を演習授業の後半に配布すると同時にmanabaでも配布した。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		<ul style="list-style-type: none"> ● 学生が授業内容を容易に理解できるように、授業を分かりやすく説明する。 ● 学生が自信を持って発表できるようにジュニアセミナー、卒業研究及び修士研究を指導する。 ● 学生に研究開発の重要性を理解させ、学生の大学院進学率を向上させる。 					
今年度の進捗状況		<ul style="list-style-type: none"> ● 修士研究指導学生1名が研究成果を外部に発表できた。 ● 就職を希望している修士研究指導学生1名が就職内定を獲得した。 ● 就職を希望している卒業研究指導学生のうち6名が就職内定を獲得した。 					
来年度の進捗目標		<ul style="list-style-type: none"> ● 「分かりやすい」という評価がより多く得られるように授業内容を工夫する。 ● 就職を希望している指導学生全員が就職内定を獲得できるように指導する。 ● できるだけ多くの卒業研究指導学生が進学するように研究開発の重要性を理解させる。 ● 指導学生全員が研究成果を外部に発表できるように研究を指導する。 					
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							

D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)					
調整法を用いた垂直パニングの有効範囲の閾値測定	共著	2023年3月	東北学院大学工学総合研究所紀要, 11	増田光新, 木村敏幸	pp.43-49
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)					
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)					
G. 学会における研究発表					
音の再生手法が音像定位の反応時間に及ぼす影響	共同	2023年3月	日本音響学会春季研究発表会(オンライン), 3-4P-12	増田光新, 木村敏幸	pp.in press
調整法を用いた垂直パニングの有効高さの閾値測定	共同	2022年9月	日本音響学会秋季研究発表会(北海道科学大学), 1-R-3	増田光新, 木村敏幸	pp.391-392
個人用三次元音場再生用収録システムの三次元定位の評価	単独	2022年8月	電子情報通信学会応用音響研究会(東北大学), EA2022-30	木村敏幸	pp.13-18
H. 翻訳(学術書や原典等)					
I. 特許					
現在の課題・目標	<ul style="list-style-type: none"> ●実験装置を構築し, 実験を実施する. ●競争的資金を獲得する. ●研究成果を外部に発表する. 				
今年度の進捗状況	<ul style="list-style-type: none"> ●個人研究費や学内予算により物品を調達し, 実験装置を構築することができた. ●研究成果を外部に発表することができた. 				
来年度の進捗目標	<ul style="list-style-type: none"> ●引き続き実験装置を構築し, 研究成果を得るための実験を実施する. ●指導学生の研究成果を外に発表を経済的に支援する. ●引き続き実験によって得られた成果を外に発表する. 				
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)					
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要	
IV 学会等及び社会における主な活動					
2021年4月～2023年3月		日本音響学会東北支部 会計監査			
2018年6月～2022年5月		電子情報通信学会基礎・境界ソサイエティ和文論文誌編集委員会 編集委員			
2018年6月～2022年5月		電子情報通信学会基礎・境界ソサイエティ英文論文誌編集委員会 編集委員			
2018年6月～2022年5月		電子情報通信学会基礎・境界ソサイエティ英文論文誌編集委員会 会員			
2018年6月～2022年5月		電子情報通信学会基礎・境界ソサイエティ和文論文誌編集委員会 会員			
2017年4月～2023年3月		日本音響学会東北支部 会員			
2012年5月～		電子情報通信学会ソサイエティ論文誌編集委員会 会員			
2012年5月～		電子情報通信学会ソサイエティ論文誌編集委員会 査読委員			
2007年12月～		日本音響学会編集委員会 会員			
2007年12月～		日本音響学会編集委員会 査読委員			
V 芸術分野や体育実技等における主な活動					
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)		発表・展示等の内容等	
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
VI 学内における管理運営に関する諸活動					

2022年度							
所属	工学部 情報基盤工学科	職名	准教授	氏名	物部 寛太郎	大学院の授業 担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概 要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
Zoomの導入		2020年～		担当している授業全てでZoomを導入することで、遠隔授業を実施した。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
VRにおけるピンチ動作を用いたフリック入力手法に関する研究		共同	2022年9月	第27回日本バーチャルリアリティ学会大会(札幌市立大学)	大石真佐貴, 物部寛太郎		
VRを用いた地震体験システムにおける避難支援エージェントの有用性に関する研究		共同	2022年9月	第27回日本バーチャルリアリティ学会大会(札幌市立大学)	千葉あんな, 物部寛太郎		
フェイストラッキングを用いたアバターの親近感を高める手法に関する研究		共同	2022年9月	第27回日本バーチャルリアリティ学会大会(札幌市立大学)	船木烈, 物部寛太郎		
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要			
IV 学会等及び社会における主な活動							
2021年6月～			日本バーチャルリアリティ学会 会員				
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等			
現在の課題・目標							

今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	
VI 学内における管理運営に関する諸活動	

2022年度							
所属	工学部 情報基盤工学科	職名	講師	氏名	深瀬 道晴	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
教育支援システムのmanaba folioを活用し、学生がいつでもどこでも課題等に取り組める仕組みを実施している。		2020年4月～		教育支援システムのmanaba folio上に授業の講義資料と課題・レポートを毎回アップロードし、学生が授業時間外においていつでもどこでも予復習や課題に取り組み、どこからでもレポートを提出できるように工夫している。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
「プログラミング基礎」の講義資料「プログラミング応用」の講義資料		2020年4月～		自身が今年度担当する講義について、独自の講義資料を作成した。それぞれについて、教科書・参考文献と整合性が適切に取れていること、一方で、教科書・参考文献の内容をより分かりやすくなるように学習の流れを整形し、必要な説明を加えながら、教科書・参考文献にはない発展的な内容・課題を取り入れた。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Improving Genetic Algorithms for Solving the SVP: Focusing on Low Memory Consumption and High Reproducibility		共著	2022年12月	Iran Journal of Computer Science, 5(4)	Masaharu Fukase, Masahiro Kaminaga	pp.359-372	
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要		
科学研究費補助金 科学研究費補助金基盤研究(C)		2019年度～2023年度	個別		格子基底簡約アルゴリズムの改良とRSA暗号安全性解析への応用		
科学研究費補助金 科学研究費補助金基盤研究(C)		2019年度～2022年度	共同(研究分担者)		耐タンバー性を持つ論理演算型軽量ブロック暗号の設計原理の研究		

IV 学会等及び社会における主な活動			
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	工学部 情報基盤工学科	職名	講師	氏名	森島 佑	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
画像解析技術によるブレッドボード上の電子回路配線パターン推定に関する研究	共同	2022年9月	2022 FIT 第21回情報科学技術フォーラム(慶應義塾大学 矢上キャンパス)	太田匠海, 森島佑, 鈴木順, 志子田有光,			
格子行列に基づくブロック暗号の提案と解析	共同	2022年8月	2022年度電気関係学会東北支部連合大会 講演論文集(オンライン)	◎大宮 悠暉, 森島 佑, 神永 正博			
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要				

科学研究費補助金 基盤研究(C)	2019年度～2022年度	共同(研究分担者)	近年、情報工学を専門とする大学や高等専門学校の学科では、ICT技術の急激な進歩に伴い新しい知識と技術を修得させるため、情報系専門科目の履修時間を以前に増して充実させる必要が生じているが、特に組み込み開発やIoT分野で重要となる物理学や電子回路学に関連する知識を実体験で確認する実験時間を充分確保することが難しい。そこで本研究では、電子工学系カリキュラム用に開発した教材と、その評価システムを発展させ、グループワークで課外実験を行う教材と環境の開発と、集団活動に心理的抵抗を示す学生へ配慮した遠隔実験環境の開発について、実践的導入と評価を行う。
IV 学会等及び社会における主な活動			
2021年6月～	電子情報通信学会 基礎・境界ソサイエティ 電子広報担当幹事		
2021年6月～	電子情報通信学会 情報理論研究専門委員会 委員		
2013年～	電子情報通信学会 会員		
2013年～	IEEE 会員		
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

教員業務・活動報告

教 養 学 部

人 間 科 学 科

言 語 文 化 学 科

情 報 科 学 科

地 域 構 想 学 科

2022年度							
所属	教養学部 人間科学科	職名	教授	氏名	大迫 章史	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
授業アンケートの実施		2020年4月1日～		授業等の改善のため、manabaのアンケート機能等を活用して学生に授業アンケートを実施している。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要			
IV 学会等及び社会における主な活動							
2020年8月～		日本国際教育学会 理事 会員					
2020年8月～		日本国際教育学会 理事					
2019年9月～		日本カトリック教育学会 紀要編集委員					
2019年4月～		東北教育学会 紀要編集委員					
2019年4月～		仙台白百合女子大学カトリック研究所 客員所員					
2019年～		東北教育学会 紀要編集委員 会員					
2019年～		日本カトリック教育学会 紀要編集委員 会員					
2005年4月～		宮城学院女子大学附属キリスト教文化研究所 客員研究員					

V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	教養学部 人間科学科	職名	教授	氏名	片瀬 一男	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
大学生生活の評価(2):「2013年度卒業生意識調査」より		単著	2023年3月	東北学院大学教育研究所報告集、14, 東北学院大学教育研究所報告集、14		片瀬一男	pp.5-13頁
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要		
IV 学会等及び社会における主な活動							
2019年10月～			日本教育社会学会評議員 会員				
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場所	開催年月日(西暦)		発表・展示等の内容等		
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
VI 学内における管理運営に関する諸活動							

2022年度							
所属	教養学部 人間科学科	職名	教授	氏名	加藤 健二	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
統計授業(心理学統計法)における情報処理センター及び無料統計アプリHADを用いた実習的活動の活用		2020年4月1日～		心理統計に関する専門科目において、エクセル及び統計パッケージを用いた自作の例題実習を取り入れて、理解定着を図っている。			
心理学専門科目のオンデマンド授業における、動画を含めた映像資料、プリント資料、実験実施を活用した動機づけ・理解促進の工夫		2020年4月1日～		オンデマンド授業として、毎時間の授業時に、動画を含めた映像資料とプリント資料を提供し動機づけを高めている。一部授業(知覚・認知心理学)では、学生各自に心理実験を実施させ、その結果を回収してグラフ化してフィードバックしている。			
教養科目におけるクラウド型学習支援システムmanaba course、及びアプリケーションResponを活用したアクティブラーニング型授業の実施		2020年4月1日～		担当している講義授業それぞれにおいて、manaba courseの諸機能を使い、授業進行に伴う情報を提供し、また提出課題の確認ができるようにしている。また、毎授業の最後に振り返りコメントを提出させて、それを一覧にして提供し、学生自らの学習状況について自覚させるよう工夫している。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
各種学内FD研修会に参加		2020年4月1日～		<ul style="list-style-type: none"> ・4月14日 新任教員研修会にて「今年度前期の授業運営について」のタイトルで話した。 ・9月16日 新任教員座談会にて司会を務めた。 ・9月16日 学内FD研修会にて「後期授業に向けて」と題して、教員向けアンケートの結果概要とあわせ、遠隔授業、特にハイブリッド授業実施について話した。 ・10月17日～ SD研修会に参加。オンラインによる「TG Grand Vision 150 第II期中期計画概要及び実行計画作成説明会」。 ・12月10日 FD研修会「コロナ禍での授業運営について」に参加。 			
遠隔授業実施のためのサポートチームを組織し、学生・教員ともに支援している。		2020年3月～					
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							

来年度の進捗目標			
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動			
2001年4月～		日本イメージ心理学会 会員	
1986年4月～		日本教育心理学会 会員	
1985年4月～		日本心理学会 会員	
1979年4月～		東北心理学会 会員	
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	教養学部 人間科学科	職名	教授	氏名	神林 博史	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
オンデマンド授業における動画版/スライド版の同時公開		2021年4月1日～		オンデマンド授業を実施する場合、音声解説付きの授業動画である「動画版」と、音声解説なしでも理解できるよう作成された授業スライドのみの「スライド版」を両方同時に公開し、学生が受講しやすい形態を選択させた。			
manabaおよびresponを用いた学生が能動的に参加できる授業運営		2020年4月1日～		<ul style="list-style-type: none"> ・講義系科目において、学生が能動的に授業に参加できるようResponを積極的に利用した。 ・授業で使用したスライドおよび資料をmanabaで公開し、授業後の学修を効率的に行えるようにした。 ・学習内容の確実な定着のための補助となるよう、一部担当科目でmanabaを用いた小テストを実施した。 ・以上3点について、オンライン授業でも対応できるよう工夫した。 			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
新型コロナウイルス流行後のオンラインパネル調査データの分析(1)パンデミック下における私権制限の賛否		単独	2022年11月	第95回日本社会学会大会(追手門学院大学)		神林博史	
高校卒高所得者の特徴とその時代的変遷		共同	2022年8月	第73回数理社会学会大会(信州大学(オンライン))		◎多喜弘文, 平沢和司, 有田伸, 神林博史, 吉田崇	
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
科学研究費補助金 科学研究費補助金 基盤研究B	2021年度～2023年度	共同(研究分担者)	社会的危機状況下における人びとの意識の変容とその階層差に関する社会学的解明(研究代表: 数土直紀)
科学研究費補助金 科学研究費補助金 基盤研究A	2020年度～2024年度	共同(研究分担者)	「国際調査を通じた報酬格差の受容・正当化メカニズムの比較社会学研究」(研究代表: 有田伸)
科学研究費補助金 科学研究費補助金 基盤研究A	2019年度～2023年度	共同(研究分担者)	「階層意識全国調査の時系列データの収集と標本抽出WEB調査法の確立」(研究代表: 吉川徹)
IV 学会等及び社会における主な活動			
2010年12月～	American Sociological Association 会員		
2005年4月～	International Sociological Association 会員		
1998年4月～	日本社会学会 会員		
1998年4月～	数理社会学会 会員		
1995年7月～	東北社会学会 会員		
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	教養学部 人間科学科	職名	教授	氏名	黒須 憲	大学院の授業 担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概 要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
研究合宿の開催		2020年8月1日～		年1～2回, 3年生4年生それぞれに日帰り及び一泊の合宿を行い, 課題の検討と意見の交換、懇親を行っている。			
発表会の実施		2020年4月1日～		構想発表(対面), 中間発表(対面)と総合研究(zoom)の作成のための公開発表会を前期1回, 後期1回実施した。 その他ゼミでは調査結果や小論文を作成し発表、質疑応答、コメントを行った。前期zoomミーティング、後期対面			
WEBサイトを利用した情報の提供		2020年4月1日～		個人blog, Facebook, Messenger, ラインを利用して, 研究内容の公表や活動報告, 連絡事項等を行った。ゼミ専用のページやグループを作り活用した。manabaを利用しレポートの提出コメントを行った。Googleドライブに動画をやスライドをUPLし視聴してもらった。			
視覚教材によるイメージの確認と定着		2020年4月1日～		体育学基礎論A2回、B15回、スポーツ文化論15回、スポーツ実技15回の授業毎にリモートオンデマンド用のテーマに関する、ビデオ、スライドを作成し提示している。確認の意味で内容の要約と意見をまとめさせ、提出させコメントを返した。			
学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進		2020年4月1日～		毎回の授業の冒頭で前回の復習とその回のテーマを説明し最後にまとめを行い次回の予告をする。レポートを毎回提出させ、コメントを返した			
発表会の実施		2013年1月～		構想発表, 中間発表と総合研究の作成のための公開発表会を前期1回, 後期1回実施した。 またオープンキャンパスにおいて公開ゼミを実施し発表を行った。			
人間科学演習(ゼミ)で実際に調査と経験行って成果をまとめレポート提出させた		2013年1月～		日本武道学会, 日本スポーツ教育学会, 宮城体育学会などに学生と共に参加し, 学習内容についてレポートをまとめ報告させた。			
視覚教材によるイメージの確認と定着		2013年1月～		数回の授業毎にテーマに関する, ビデオ, スライドを提示している。確認の意味で内容の要約と意見をまとめさせ, 提出させている。			
研究合宿の開催		2013年1月～		年1～2回, 3年生4年生それぞれに日帰り, 一泊二日, の合宿を行い, 課題の検討と意見の交換を行っている。			
学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進		2013年1月～		毎回の授業の冒頭で前回の復習とその回のテーマを説明し最後にまとめを行い次回の予告をする			
発表会の実施		2011年4月～		構想発表, 中間発表と総合研究の作成のための公開発表会を前期1回, 後期1回実施した。			
体育学演習で実際に調査実習を行って成果をまとめレポート提出させた		2011年4月～		スポーツ博物館, 国立競技場, スポーツ図書館を訪れ実際に見学説明を受け, オリンピックやスポーツ普及に関する説明を聞き, レポートをまとめた。			
視覚教材によるイメージの確認と定着		2011年4月～		数回の授業毎にテーマに関する, ビデオ, スライドを提示している。確認の意味で内容の要約と意見をまとめさせ, 提出させている。			
研究合宿の開催		2011年4月～		年1～2回, 3年生4年生それぞれに日帰り, 一泊二日, 二泊三日の合宿を行い, 課題の検討と意見の交換を行っている。			
WEBサイトを利用した情報の提供		2011年4月～		個人blog, mixi, Facebookを利用して, 研究内容の公表や活動報告, 連絡事項等を行っている。			
学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進		2010年4月～		毎回の授業の冒頭で前回の復習とその回のテーマを説明し最後にまとめを行い次回の予告をする。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
スポーツ実技(弓道)のオンデマンド用動画を作成した。15回		2020年4月1日～		弓道概論から歴史、技術、道具に関する内容。GoogleドライブにUPLしmanabaを通じて視聴してもらった。			
(スポーツ文化論)授業や講習会で使用するスライド教材を動画などを追加し更新した。		2020年4月1日～		パワーポイント用「スポーツのグローバル化」「スポーツ文化論武道」スライドを更新した。 スポーツ文化論15回のシラバスに合わせて、オンデマンド用の動画を作成した。			

体育学基礎論A B 授業で使用する教材を追加更新した	2020年4月1日～	パワーポイント用「体育学概論」113枚、「運動生活場の整備」「肥満・食事・運動」「トレーニング」のスライドを更新した。 A 武道文化論 B15回ハイブリット授業をおこなった。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4. その他教育活動上特記すべき事項					
本学スケート部の指導を行った	2020年4月1日～	4年連続でインカレに出場することができた			
梨割り弓道場において外国人弓道家を指導した。ニュージーランド、アメリカ	2020年4月1日～	宿泊し技術指導を行った。			
本学スクーバ・ダイビング部員を指導した。	2020年4月1日～	学科と海洋トレーニングを指導しアドバンスの技術認定証を認定した。			
伊達印西派研修会の講師を務めた。	2020年4月1日～	週末を利用し、的的に遠刈田梨割弓道場, 技術練習, 腰矢数矢稽古年30回程度			
ヨーロッパ日置流弓道講習会の講師を務めた	2020年4月1日～	今年はコロナ渦により、メール、ライン、メッセージ、Facebook、blogなどによる質疑応答を行ったPoland、Austria、Finland、Germany、などから質問がきた。			
紅葉会研修会の講師を務めた	2020年4月1日～	年20回、毎回数名の参加者で、技術研修、腰矢組弓、目録解説を行った			
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
II 研究活動					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)					
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)					
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳(学術書や原典等)					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)					
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要		
IV 学会等及び社会における主な活動					
2019年8月～		日本騎射協会 理事 委員			
1980年8月～		ヨーロッパ弓道指導講師 昭和56,60,平成3,7,8,10,13,15,16.17.18.19.20.21,22,23,24,24,25,26,27,28,29,30,令和元年、2委員			
V 芸術分野や体育実技等における主な活動					
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等		

欧州弓道seminar講師		2022年8月～2022年8月	
ドイツ弓道連盟 ゴールドピン賞受賞	ドイツ	2020年12月～	長年のドイツにおける弓道指導の功績を認められ、ドイツ弓道連盟より表彰された。
仙台青葉祭り	仙台市街	2018年5月～	腰矢組弓演武 コロナ渦により中止
スクーバダイビングインストラクター	山形県由良海岸、セブ島、阿嘉島、パラオ、女川	2015年4月～	部員を対象射OWDライセンス講習、レスキュー、CPR等の講習とトレーニングを行った。
一ノ蔵弓道大会	石巻弓道場	2014年10月～	腰矢組弓の演武を行った。コロナ渦により中止
日本文化の海外普及のため1979年よりほぼ毎年夏期及び春期にドイツ、イタリアより招聘され、弓道セミナーの講師を務めている。現在ヨーロッパには数百名の生徒がいる。語学や異文化理解能力が必要である。	ドイツ、イタリア、オーストリア、ハンガリー、スロベニア、フィンランド、ノルウェー、デンマーク	1979年4月～	ドイツ弓道連盟公認トレーナー イタリア弓道連盟公認指導者
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	教養学部 人間科学科	職名	教授	氏名	坂本 譲	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
授業理解の促進(コメントペーパーの利用)		2015年4月～		毎回の授業終了時に指定した内容に対する小レポート及び質問・感想を書かせ提出させることで、授業の要点を受講者自身に確認させた。			
授業内容理解の促進(プレゼンテーションソフトの利用と資料配付)		2015年4月～		授業内容をプレゼンテーションソフトで提示すると共に同様のものを資料として配付し、各自復習できるように配慮した。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		講義内容の理解と学生の考える力を向上させうる効果的な方法についての検討。					
今年度の進捗状況		コメントペーパーを利用した授業理解の促進に関する試行を行っている。					
来年度の進捗目標		現状把握と方法論の検討。					
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Myeloid immune checkpoint ILT3/LILRB4/gp49B tether fibronectin with integrin on macrophages.		共著	2022年8月	International immunology, 34(8)		Itoi S, Takahashi N, Saito H, Miyata Y, Su M, Endo S, Fujii H, Harigae H, Sakamoto Y, Takai T.	pp.435-444
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
運動によるアレルギー予防効果の検討ー好塩基球によるTh2免疫制御の観点からー		単著	2023年3月	北隆館, アレルギーの臨床, 43(4)		坂本 譲	pp.72-75
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
高等学校における体育実技授業の実態調査(教,方)大学生を対象としたアンケート調査から		共同	2022年9月	日本体育・スポーツ・健康学会第72回大会(千葉)		藤本敏彦、中原雄一、坂本 譲、西脇雅人、島本英樹、黒川修行	
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		現在進めている研究課題について成果発表を積極的に行う。					
今年度の進捗状況		現在の研究課題については国内・国際学会において学会発表を行った。					
来年度の進捗目標		現在の研究課題について、特に論文発表を積極的に行っていく。					
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要		
科学研究費補助金 基盤研究(C)		2022年度～2024年度	個別(研究代表者)				

競争的資金等の外部資金による研究 東北大学 加齢医学研究所共同利用・共同研究助成	2022年度～2023年度	個別(研究代表者)	
IV 学会等及び社会における主な活動			
2021年2月～	東北体育・スポーツ学会 監査		
2017年4月～	東北体育・スポーツ学会 会員		
2013年6月～	European College of Sport Science 会員		
2012年6月～	日本発育発達学会 会員		
2010年9月～	日本運動免疫学研究会 運営委員		
2009年4月～	日本学校保健学会 会員		
2009年4月～	日本体育・スポーツ・健康学会 会員		
2005年7月～	日本分子生物学会 会員		
2002年9月～	日本運動免疫学研究会 会員		
2001年7月～	日本公衆衛生学会 会員		
2001年2月～	International Society of Exercise and Immunology 会員		
2000年1月～	日本免疫学会 会員		
1997年10月～	日本体力医学会 会員		
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			
1. 人間対象研究審査委員会 委員 2. 教育研究所 所員			

2022年度							
所属	教養学部 人間科学科	職名	教授	氏名	櫻井 研三	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
三種の心理物理学的測定法でみる精度と確度 (http://psyche.mind.tohoku-gakuin.ac.jp/psy3/psycho/ja/index.html)		2020年4月1日～		コロナ禍での遠隔授業に対応できるよう、従来の心理物理学的測定法学習サイトをHTML5に対応させ、スマートフォンやタブレット等の携帯情報端末でも利用できるように調整して、バージョンアップを継続中。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Body Pitch Together With Translational Body Motion Biases the Subjective Haptic Vertical		共著	2022年12月	Brill, Multisensory Research, 36	Chia-Huei Tseng, Hiu Mei Chow, Lothar Spillmann, Matt Oxner, Kenzo Sakurai	pp.1-29	
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
図形変形錯視を説明する曲線検出器順応モデルの検証		単独	2022年9月	日本視覚学会2022夏季大会(金沢市)	◎櫻井 研三		
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要			
科学研究費補助金 基盤研究(A)一般		2021年度～2024年度	共同(研究分担者)				
科学研究費補助金 基盤研究(C)(一般)		2021年度～2022年度	個別(研究代表者)				
IV 学会等及び社会における主な活動							
2017年3月～			日本心理学会代議員 会員				

V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	教養学部 人間科学科	職名	教授	氏名	宍戸 隆之	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
Google Form振り返りカード		2020年5月7日～		2020年度のオンライン授業における学生の授業後の振り返りカードとして、Google Formを活用して授業時間の振り返りと課題の提出を実施した。新型コロナウイルス感染症予防のため、特に、後期からの対面授業においても、教員と学生相互のソーシャルディスタンスを保つために、プリントアウトした配布物を極力減らし、接触する機会を減らした。スマートフォンやPCを授業に持参させ、対面授業であってもオンラインでの課題提出ができる教材を提供している。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		ICTを活用したスポーツ実技の授業					
今年度の進捗状況		iPadのアプリで、SPLYZA motionを活用する取り組みを始めた。					
来年度の進捗目標		iPadのアプリで、SPLYZA motionを活用して、可視化された身体情報を基に、技能向上を図る。					
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Influence of Parents' Awareness on Preschool Children's Daily Life and Physical Activities during COVID-19 Pandemic		共著	2022年9月	Creative Education, 13(9)		Mao Hashimoto, Takayuki Shishido	pp.2929-2943
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		「体育の授業におけるICTを活用した身体情報可視化の試み」について、大阪府下の小学校で実践授業を行いデータ収集する。					
今年度の進捗状況		「体育の授業におけるICTを活用した身体情報可視化の試み」について、大阪府下の小学校で実践授業を行いデータ収集することができた。					
来年度の進捗目標		「体育の授業におけるICTを活用した身体情報可視化の試み」について、大阪府下の小学校・中学校、北海道の中学校で実践授業を行いデータ収集する。					
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要		
科学研究費補助金 基盤研究(C)		2022年度～2024年度	共同(研究代表者)				
IV 学会等及び社会における主な活動							

2021年6月～	日本学校改善学会 会員		
2018年～	日本CLIL教育学会 会員		
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標	女子バレーボール部の監督に就任。		
今年度の進捗状況	女子バレーボール部の監督に就任して1年目のため、チーム作りの基礎として、新たな目標を持って取り組ませることができた。		
来年度の進捗目標	女子バレーボール部の監督に就任して2年目になるため、試合で勝利できるような練習を定着させる。		
VI 学内における管理運営に関する諸活動			
教養学部人間科学科長			

2022年度							
所属	教養学部 人間科学科	職名	教授	氏名	清水 貴裕	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
体験により理解を深める講義(教育コミュニケーション論)		2018年4月～		コミュニケーションの中で生じる現象を実際に体験し、グループ討議をすることで授業内容に関する知識を深め、関心や学習意欲を持ちやすくするよう工夫している。			
学生との間に双方向性を持たせる講義(健康の科学)		2018年4月～		一方的な講義にならないよう、授業内でスマートフォンを用いたリアルタイム・アンケート(Respon)を活用し、講義内容に関する質問や意見を求め、クラス内の意見を共有することによって双方向型の授業を行っている。			
マルチメディア機器の利用		2018年4月～		パワーポイントやビデオ等によって図表や映像を提示することで視覚的にも理解を深めやすくなるよう努めている。			
シャトルカードの利用(教育の相談と指導Ⅰ・Ⅱ, 教育コミュニケーション論, 教職実践演習)		2018年4月～		比較的少人数の授業においては、シャトルカードを用いて、学生の毎回の授業に対する感想・疑問・質問を求め、一人ひとりに対してコメントを返すことで授業に関するコミュニケーションを取っている。学生はシャトルカードに蓄積される自分と教員のコメントをみることで、授業全体の振り返りや理解の深まりにも役立てることができる。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
第7章 臨床と応用心理学 Topic 2 生物心理社会モデル『応用心理学ハンドブック』	共編者(共編著者)	2022年9月	福村出版	藤田 主一, 古屋 健, 角山 剛, 谷口 泰富, 深澤 伸幸, 他	pp.1-3		
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
IV 学会等及び社会における主な活動			
2019年1月～		日本心理学諸学会連合 心理学検定局常任運営委員 会員	
2018年4月～		日本応用心理学会 機関誌編集委員会委員 会員	
2016年4月～		日本催眠医学心理学会 編集委員会委員 会員	
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	教養学部 人間科学科	職名	教授	氏名	鈴木 努	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
jamoviを用いた統計解析、ネットワーク分析		2022年4月1日～2022年12月31日					
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		コンピュータを用いたデータ分析教育					
今年度の進捗状況		jamoviを用いた分析法について授業を実施し、授業資料をresearchmapで公開した。ネットワーク分析用のjamoviモジュールを開発し、授業資料とともにresearchmapで公開した。					
来年度の進捗目標		情報科学が専門でない大学生のためのプログラミング教育					
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
「サブグループの分割」「ネットワーク上の位置と役割」『数理社会学事典』	分担執筆	2022年8月	丸善出版	鈴木努	pp.218-225		
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Mortality Salience and Mobile Voice Calling: A Case of a Massive Natural Disaster	共著	2022年6月	Communication Research, 49(4)	Takahisa Suzuki, Tetsuro Kobayashi, Jeffrey Boase, Yuko Tanaka, Ryutaro Wakimoto, Tsutomu Suzuki	pp.479-499		
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		ネットワーク分析における中心性概念の整理、フォーマライゼーション					
今年度の進捗状況		社会ネットワーク分析における認識論的基礎について準備的考察を行った。					
来年度の進捗目標		ネットワーク分析とりわけ中心性分析における概念的なフォーマライゼーションを進める					
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要				
科学研究費補助金 基盤研究(C)	2021年度～2023年度	共同(研究分担者)					

科学研究費補助金 基盤研究(C)	2021年度～2023年度	個別(研究代表者)	本研究では、社会ネットワーク分析における中心性指標を、社会学におけるアクターの重要性や影響力の指標としてフォーマルに定式化する数理モデルを構築する。社会ネットワーク分析における中心性指標を、社会学におけるアクターの重要性や影響力の指標として用いることの数理的、理論的根拠はこれまで必ずしも明確ではなかった。従来、日常言語によって記述、解釈されてきた社会ネットワークの中心性指標と社会関係における重要性・影響力の関係をフォーマルに記述することによって、数理的な含意が明確で実際の社会関係における影響力として解釈可能な定式化が可能となる。
IV 学会等及び社会における主な活動			
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標	なし		
今年度の進捗状況	なし		
来年度の進捗目標	なし		
VI 学内における管理運営に関する諸活動			
学生部副部長を務めた			

2022年度							
所属	教養学部 人間科学科	職名	教授	氏名	仙田 幸子	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
非婚女性の妊娠の結果と職業の関連の年次変化—1995年度～2015年度の人口動態職業・産業別統計による—		単独	2022年9月	第31回日本家族社会学会大会(九州大学)	仙田幸子		
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要			
IV 学会等及び社会における主な活動							
2022年6月～			International Journal of Sociology and Anthropology reviewer				
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
VI 学内における管理運営に関する諸活動							

2022年度							
所属	教養学部 人間科学科	職名	教授	氏名	千葉 智則	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
人工環境制御室を利用した運動生理学的研究教育		2021年～		人間科学演習および総合研究では、人工環境制御室および呼吸代謝装置をもちいて、高温多湿、低酸素といった特殊な環境条件下における運動パフォーマンスに関わるユニークな教育研究を試みてきた。体育実験実習Bにおいては、人工環境制御室で運動負荷試験を実施した際のデータ収集法、データ解析、さらには実験結果をプレゼンテーションするまでの方法を体系的に学習する授業を試みてきた。			
運動処方理論を導入したスポーツ実技(フィットネス)		2020年～		従来のスポーツ技能向上型のスポーツ実技授業ではなく、運動処方理論の理解と実践を中心とした授業を試みてきた。授業は有酸素的および無酸素的トレーニングを組み合わせたスーパーサーキットトレーニングさらに軽スポーツで構成される。毎回、受講者が体重、体脂肪率の測定を実施し、授業で実施した運動の総エネルギー消費量を記録しながら、健康関連指標である身体組成、全身持久力および筋力の向上を目的とする試みである。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
スポーツ実技(フィットネス)のための教材		2021年～		健康・体力関連の最新の資料と運動処方の具体的な実践法をまとめた教材である。受講生が毎回身体組成および授業時の総エネルギー消費量を記録しながら、運動処方理論の理解と実践ができるように工夫されている。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要				

IV 学会等及び社会における主な活動			
2016年4月～		日本生理人類学会会員 会員	
2016年4月～		日本体育学会会員 会員	
2016年4月～		日本運動生理学会評議員 会員	
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	教養学部 人間科学科	職名	教授	氏名	萩原 俊彦	大学院の授業 担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
本学「授業改善のための学生アンケート」実施委員会が実施する「授業改善のための学生アンケート」		2020年4月1日～		2020年度前期・後期授業アンケート結果(5点満点中): 心理学基礎論A(総合評価)4.5 発達心理学(総合評価)4.3 教育心理学(総合評価)4.2 心理学(総合評価)4.6 心理学実験実習B(総合評価・複数教員担当)4.6 人間科学演習A・B(総合評価)4.6(A), 4.9(B)			
manabaのresponやGoogleフォームを用いた学生コメントの共有と実験結果の即時提示		2020年4月1日～		無料で大小様々のアンケートフォームをつくり、インターネットを介して回答してもらいmanabaのresponやGoogleフォームを用いて、心理学の簡単な実験や意見調査を実施し、授業で直ちに結果をフィードバックした。学生は自分たちが参加した心理学実験や意識調査の結果をすぐ知ることができ、教授事項への関心を高めることができた。			
心理学の研究技法を効果的に習得させるために、自作マニュアルを用いた実習授業を複数教員により体系的に運営している。		2020年4月1日～		2年生向けの心理学に関する実験実習授業において、担当教員の綿密な打ち合わせの上で作成されたマニュアルを用い、心理学各領域の代表的、基本的なデータ収集・分析技法を体験的に学習させている。授業後、学生が提出したレポートについて、予め公開してある基準に従って丁寧に添削し、コメントをつけて返却する。学生には、修正したレポートの提出を義務付けている。全体をシステム化して運営しているのが特徴である。			
授業内容に関連する視聴覚資料の提示		2020年4月1日～		インターネットを活用し、過去の著名な心理学実験や視聴覚資料を提示した。視聴覚資料を用いることで、心理学の知見が過去の研究の蓄積によって構成されていることを実感させるようにした。			
PowerPointアニメーションを活用した解説		2020年4月1日～		初学者にはイメージしにくい心理学の諸概念について、図表に加えアニメーションを用いて解説した。これによって、抽象的な心理学概念を視覚的にイメージしやすくし、理解を助けるようにした。			
学期終了前の講義総覧		2020年4月1日～		試験前にこれまでの講義内容を総覧することで、授業が共通するいくつかの視点によって構成されていることを再確認させ、学習への動機づけを高めるようにした。また、一定の枠を設けたまとめを行うアドバイスにより、学生の要約力を高めるようにした。			
学生コメントの活用		2020年4月1日～		毎講義時に学生の質問や、授業進行に関するコメントを記入させた。記入内容についてのフィードバックを次回講義時に行い、授業規模にかかわらず受講生と講師の双方向コミュニケーションができるよう配慮した。			
ワークの実施(個人・全体)		2020年4月1日～		授業で取り扱った事項について、自分の場合はどうだったか、受講生が自己省察を行うための短時間のワークを講義時間内に実施した。これによって講義内容への受講生の自我関与を高めるようにした。また、ワークの結果を少人数グループやクラス全体で共有することにより、受講生が他者の経験を理解・受容する機会を提供した。なお、プライバシーには最大限配慮し、発言の自由とともに秘匿の自由を保証した。			
初回講義における履修契約		2020年4月1日～		授業の最初に授業計画とともに、講義時間中に受講生が遵守すべきルールを提示した。これによって、受講生が講義時間内に守るべきルールを自覚できるようにした。			
実証的・批判的検討を経た科学的知見の教授と問題解決能力の育成		2020年4月1日～		実証的・批判的検討を経た科学的知見について、基礎的教養から専門的知見までを教授した。これによって、学生が大学入学までに形成してきた既存概念へのとらわれに自ら気づき、データに基づいた客観的な分析・考察によって、現実の問題を把握し、その解決法を構想し実現できるよう指導した。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
心理実験実習・心理学実験実習Bにおける実験でのマニュアル・プリント類の作成・配布		2020年4月1日～		心理学各領域の代表的、基本的なデータ収集・分析技法を体験的に学習させるために、担当教員の綿密な打ち合わせの上でマニュアルを作成し、配布している。			

授業内容のレジュメ資料を毎回配布	2020年4月1日～	1回の講義で解説する事項を示した自作のレジュメ資料を配布することで、受講生が講義内容の全体像をつかめるようにした。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等					
4. その他教育活動上特記すべき事項					
現在の課題・目標	①学習支援システムのより高度な活用を目指す。対面授業効率化のための学習支援システム活用について検討する。 ②実験・調査のデモデータを活用したり、他の魅力ある資料を収集・更新して教材に取り入れる。 ③現状で使用しているルーブリックを活用しながら改善点を検討していく。				
今年度の進捗状況	①については対面授業がより拡大されたため、オンデマンド時に収録していた実験動画やアプリケーションの説明動画などを対面授業の予・復習用に活用することを試みた。授業時間後も繰り返し視聴できるということで好評であった。 ②については授業の課題などにも活用し教材への取り入れが進んだ。 ③については総合研究ルーブリックについて、評価段階を一部追加することで、細やかな評価をできるようにした。 目標①～③について、以上のような進捗があった。				
来年度の進捗目標	①学習支援システムのより高度な活用を目指す。対面授業効率化のための学習支援システム活用について更に検討する。 ②引き続き実験・調査のデモデータを活用したり、他の魅力ある資料を収集・更新して教材に取り入れる。 ③授業で使用している各種ルーブリックを活用しながら改善点を検討していく。				
II 研究活動					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
『これからの教職論—教職課程コアカリキュラム対応で基礎から学ぼう—』	分担執筆	2022年4月	ナカニシヤ出版	大家まゆみ(編著者), 本田伊克(編著者), 飯高晶子, 河野誠哉, 神林寿幸, 笠井良信, 菅宮恵子, 杉下文子, 鈴木栄, 萩原俊彦, 松本恵美, 宮澤孝子, 山岸利次, 山梨あや	pp.75-83
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)					
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)					
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)					
G. 学会における研究発表					
高等専門学校におけるキャリア教育を内包した科目教育に関する研究(2)—メタ認知方略の進展に注目して—	共同	2022年11月	日本キャリア教育学会第44回大会(公立大学法人 秋田県立大学(オンライン開催))	畔田博文, 小菅清香, 萩原俊彦, 杉本英晴	
H. 翻訳(学術書や原典等)					
I. 特許					
現在の課題・目標	①他機関の研究者と科研の研究課題(「高専教育におけるキャリア教育による内発的動機付けと学ぶ力への効果検証」(基盤研究(C)一般・科研費研究課題番号:22K02879・研究分担者)に取り組む。 ②①の研究進捗状況について年1回以上学会発表する。 ③①の研究に関連するキャリア研究資料を収集し、共著での論文投稿を目指す。				
今年度の進捗状況	①については定期的にZoomで研究打ち合わせを行い、収集したデータの分析や発表のための議論や検討を行った。 ②については①の成果として、日本キャリア教育学会第44回大会にて「高等専門学校におけるキャリア教育を内包した科目教育に関する研究(2)—メタ認知方略の進展に注目して—」と題したポスター発表を行った。 ③については論文化するまでの成果には至らなかったが、②で発表した研究から改善のヒントを収集することができた。 目標①～③について、以上のような進捗があった。				

来年度の進捗目標	①他機関の共同研究者と科研の研究課題(「高専教育におけるキャリア教育による内発的動機付けと学ぶ力への効果検証」(基盤研究(C)一般・科研費研究課題番号:22K02879・研究分担者)に引き続き取り組む。 ②引き続き、①の研究進捗状況について年1回以上学会発表する。 ③今年度の研究成果と問題点を踏まえ、①の研究に関連するキャリア研究資料を収集し、共著での論文投稿を目指す。		
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
科学研究費補助金 基盤研究(C)一般	2022年度～	共同(研究分担者)	
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動			
2021年1月～2024年12月	日本キャリア教育学会 監事		
2017年12月～	日本キャリアデザイン学会会員 会員		
2010年6月～	日本キャリア教育学会会員 会員		
2005年11月～	日本教育心理学会会員 会員		
2005年1月～	日本心理学会会員 会員		
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	教養学部 人間科学科	職名	教授	氏名	原 義彦	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
授業への主体的参加と理解の促進		2022年4月～		授業の終わりにレスポンスから質問や感想を記入してもらい、その結果の一覧を次の授業時に提示する。質問や感想へのコメントを行うとともに、前回授業の復習に役立てている。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
教科書、参考図書の作成		2019年4月～		①『生涯学習概論』(理想社、2019)を共著で作成する。生涯学習概論の教科書として利用した。 ②『生涯学習支援の道具箱』(社会通信教育協会、2019)を共編で作成した。生涯学習概論等の授業の参考図書として利用した。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		①学部学生には、専門科目と資格科目を通じて、生涯学習力、自己学習力、課題解決力の育成を心がける。資格取得希望者には社会教育主事、社会教育士、司書、学芸員に必要な基礎力と実践力の育成向上を目指す。 ②年間を通じて、学部学生の総合研究指導、大学院生の実践研究論文指導を行う。 ③FD活動、SD活動には積極的に取り組み、日常的に教育改善と授業改善を図る。					
今年度の進捗状況		①社会教育実習の授業では、学生が地域の課題とニーズを調査し、その結果に基づいて市民対象の講座を企画し、実施した。これらを通じて、社会教育主事に必要な基礎力と実践力の向上を図った。 ②学部学生の総合研究指導は随時行ったが、集中的に行うこともあった。大学院の授業では研究方法論をテーマとして取り上げて、研究の進め方や論文作成の方法について解説した。 ③全学及び学部のFD活動に参加し、日常的に教育改善と授業改善に繋げた。					
来年度の進捗目標		①社会教育実習の授業では、地域課題の調査と企画講座の連関を一層強められるよう支援する。 ②学部学生の総合研究指導は、長期的な計画を立てて進められるように指導、助言を行う。大学院の講義、演習を通じて、院生の研究方法論の理解と習得を支援する。 ③引き続き、全学及び学部のFD活動、SD活動に参加し、日常的に教育改善と授業改善に努める。					
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
『デンマーク式生涯学習社会の仕組み』		共著	2022年10月	ミツイパブリッシング		坂口緑、佐藤裕紀、原田亜紀子、原義彦、和氣尚美	pp.207-258
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
公民館経営診断におけるリンケージ開発の予備的考察		単著	2023年2月	東北学院大学教養学部論集(192)		原義彦	pp.1-15
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
『フォルケホイスコーレのすすめ』		共著	2022年9月	花伝社		矢野拓洋、松浦早希、松永圭世、真庭伸悟、原義彦他	pp.110-113
公民館の未来像：持続的な地域の発展のために		単著	2022年9月	財団法人日本青年館, 社会教育, 77(9)		原義彦	pp.14-18
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							

H. 翻訳(学術書や原典等)

I. 特許

現在の課題・目標	①個人研究では、公民館の経営診断・評価技法の開発を進める。このうち、公民館経営の改善点を明示する技法の開発等を事例調査、聞き取り調査等により行う。この研究は、科研費による活動としても行う。 ②デンマークを中心に北欧の成人教育施設の評価の実態については、文献収集とリモートによる調査を行う。研究成果は、紀要等に公表する。共同研究では、デンマークにおけるキャリア形成支援に関わる研究(科研費研究分担者)に参加し、調査・分析を行う。また、参加するデンマーク教育研究会を中心にデンマークの教育・生涯学習の研究成果の出版に向けた作業を進める。
----------	---

今年度の進捗状況	①個人研究では、公民館改善事例の調査をもとにして、公民館経営診断のリンケージ開発に関わる論文1編を執筆した。 ②デンマークの成人教育施設(フォルケホイスコーレ)の研究に関しては、これまでの収集資料と分析をまとめて『デンマーク式生涯学習社会の仕組み』(ミツイパブリッシング)、『フォルケホイスコーレのすすめ』(花伝社)を刊行した(いずれも共著)。
----------	---

来年度の進捗目標	①公民館の経営診断・評価技法の研究では、引き続き公民館経営における改善事例の収集と分析を行う。また、諸外国の成人教育施設の評価、質管理の関わる調査と資料の分析を行い、公民館の経営診断・評価技法開発の知見を得る。
----------	---

III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
----------	----------	------------------------	----

IV 学会等及び社会における主な活動

2023年2月	上小・東御公民館職員研修会講師 講師
2022年11月～	国立花山青少年自然の家運営委員会委員 委員
2022年11月～	日本生涯教育学会 会長
2022年10月	東北学院大学教養学部公開講座「大人の教養倶楽部」講師 講師
2022年9月	秋田大学教職大学院 スクール・リーダー研修講座講師 講師
2022年7月	信州大学社会教育主事講習講師 講師
2022年7月	広島県立生涯学習センター 生涯学習振興・社会教育行政関係職員等研修 講師
2022年5月～2022年9月	秋田大学社会教育主事講習運営委員会委員・主任講師 講師, 運営参加・支援
2021年11月～	長野県公民館運営協議会 公民館職員支援講座 パネリスト, 講師
2013年9月～	文部科学省優良公民館審査委員会 委員
2000年8月～	国立教育政策研究所「社会教育主事講習」講師 講師
1991年9月～	日本教育社会学会 会員
1989年5月～	日本生涯教育学会 会員

V 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

VI 学内における管理運営に関する諸活動

全学、学部、学科の各種委員会の活動を計画的に行う。

2022年度							
所属	教養学部 人間科学科	職名	教授	氏名	平野 幹雄	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
学生からの授業評価(全教科)		2020年4月～		第一回の講義開始時に講義への要望について調査し講義内容に反映するよう努力している。加えて、講義内容についての感想や要望をmanaバの「レポート」に毎回書いてもらい、その代表的なもののいくつかを次回講義の開始時にコメントバックしている。			
授業における興味関心の喚起(講義形式の授業)		2020年4月～		今日の課題を取り上げている視聴覚教材・パワーポイントをできるだけ多く提供し、視聴の観点を示してそこから掘り下げて問題を整理するよう指導している。また、タブレット端末の手書き機能を積極的に活用し、手書きで概念図等を作成して理解しやすい工夫をしている。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
海外の資料の訳出		2019年4月～		National Institute of Mental Healthが編集している自閉症スペクトラム障害のガイドの翻訳(人間科学演習で使用)			
海外の資料の訳出		2018年4月2日～		National Dissemination Center for Children with Disabilitiesのwebpageに所収されている障害類型別のガイドの翻訳(人間科学演習で使用)			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
高等学校における発達障害児等に関する教育実践の講演		2022年10月20日					
高等学校における発達障害児等に関する教育実践の講演		2022年8月23日					
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		コロナ禍における講義、演習等での学生とのコミュニケーションのあり方について、より積極的に学生のフィードバックを得て教育機会に反映させること					
今年度の進捗状況		各回の講義、演習において学生にmanaバのレポート機能に感想や質問を書いてもらい、そのうち代表的なものを次回の授業の冒頭で紹介しコメントバックすることを通じて少しでも双方向のやりとりが実現するように努めた。また、個別機能を通じて質問をくれる学生も増えたことから、質問がしやすい環境は一定程度作れたのではないかと考えている。					
来年度の進捗目標		ポストコロナを見据えて、ゼミ活動等を通じて現場におもむき、より実践的な学びができるようにすること					
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
自閉スペクトラム症の理解と支援『障害者・障害児心理学』		共著	2022年4月	ミネルヴァ書房		平野幹雄	pp.36-47
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
学童期における気になる子どもの実態。一東日本大震災から10年後の調査一		共著	2022年4月	宮城学院女子大学発達科学研究, 22		柴田理瑛・足立智昭・平野幹雄	pp.69-76
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							

被災地において長期的な発達支援、支援者支援を展開する中でのニーズの変化について「東日本大震災から10年を経ての現状と課題―被災地における子どもや支援者、地域社会の問題に焦点を当てて―(企画:日本臨床発達心理学会・同災害支援委員会)指定討論」	共同	2023年3月	日本発達心理学会第34回大会 (立命館大学)	平野幹雄	
--	----	---------	---------------------------	------	--

H. 翻訳(学術書や原典等)

I. 特許

現在の課題・目標	子どもの発達支援にかかわる支援者への心理支援について実践的に研究を進めること
今年度の進捗状況	昨年度よりも、定期的な実践をおこなうことができたものと自負している。一方で、それらを時間をかけて論理的に考察しアウトプットする機会を作ることができなかったことが課題として残った。
来年度の進捗目標	次年度は、これまでの支援者支援に加えて、子どもの発達支援そのものについても取り上げ、子どもの特性、特に衝動性や攻撃性に焦点をあてた研究を進めたいと考えている。

III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
----------	----------	------------------------	----

IV 学会等及び社会における主な活動

2018年～	宮城県社会福祉協議会宮城いきいき学園講師 講師
2017年4月～2022年5月	日本臨床発達心理士会災害支援委員会 委員長
2011年～	日本発達心理学会 会員
2007年～	日本発達障害学会 会員
2002年～	アメリカ心理学会 会員
1996年～	日本心理学会 会員
1995年～	日本特殊教育学会 会員

V 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

VI 学内における管理運営に関する諸活動

学部将来構想人事委員会委員
 学科将来構想人事委員会委員
 教学組織改編室副室長

2022年度							
所属	教養学部 人間科学科	職名	教授	氏名	福野 光輝	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
演習活動における統計分析に関する学修メニューの提供		2022年～		統計分析スキルを少しでも養うため、毎回の演習活動時の一部の時間を当て、統計分析教育を行っている。			
LMS manaba による配布資料の配信		2017年～		授業で配布した資料や関連資料、リンクなどをウェブから入手できるようにしている。			
授業ウェブによる配布資料の配信		2016年～		授業で配布した資料や関連資料、リンクなどをウェブから入手できるようにしている。			
ミニットペーパーのオンライン収集		2016年～		講義形式の授業において、Google フォームを利用したミニットペーパーを実施し、すべての回答と質問への返答をまとめた資料を毎回配布している。			
学生による予習課題評価		2016年～		演習の最後に、予習課題の用紙を演習参加者にランダムに配布し、学生自身が他人の予習課題の内容にコメントを書き込ませる。同じ文献を読んでも多様な観点からの読みが可能であることを気づかせるとともに、学生自身にコメントを書かせることで、文献の読み方を考えさせる(その後、予習課題を回収し、教員が再度コメントをつけて返却している)。			
演習における予習の可視化		2016年～		演習参加者全員が文献の該当箇所を事前に読み、要約と疑問点、意見を書いた短いレポートを予習課題として毎回提出する。これにより、予習を可視化するとともに、読む力、書く力、考える力の基礎を身につけさせる。			
演習におけるグループ議論		2016年～		予習課題をもとに、小グループに分かれ、自分なりの読みや疑問点を他者と共有しながら、文献に対する批判的検討を行う。グループ議論を導入することで、全員が学び、また発言することになるため、演習でありながら報告者と教員のための禅問答状態を回避できる。			
メッセージングアプリ Slack を利用した演習活動		2016年～		演習における研究活動を補助するために、2016年度後期から、ビジネス向けチャットツール Slack を導入している。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
公認心理師大学院科目「心理実践実習」における司法犯罪関係施設の実習先開拓と調整		2021年～		「心理実践実習」における実習先として、宮城刑務所、東北少年院、青葉女子学園、仙台少年鑑別所、仙台保護観察所、宮城県警察科学捜査研究所の開拓および日程調整、内容調整、各種書類の作成等を行っている。			
公認心理師学部科目「心理実習」における司法犯罪関係施設の実習先開拓と調整		2019年～		「心理実習」における実習先として、宮城刑務所、東北少年院、青葉女子学園、仙台少年鑑別所、仙台保護観察所、宮城県警察科学捜査研究所の開拓および日程調整、内容調整、各種書類の作成等を行っている。			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							

D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)					
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)					
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)					
G. 学会における研究発表					
対人関与的な感情は婉曲な依頼表現を促進するか	共同	2022年11月	北海道心理学会・東北心理学会第13回合同大会(2022年11月5日)(北海道大学 高等教育推進機構)	◎福野光輝, 岡崎勘造	
幸福概念の活性化が独裁者ゲームの分け手の行動に与える効果	単独	2022年9月	日本心理学会第86回大会(2022年9月8日～11日)(日本大学文学部及びウェブによるハイブリッド開催)	福野光輝	
H. 翻訳(学術書や原典等)					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)					
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概 要	
IV 学会等及び社会における主な活動					
V 芸術分野や体育実技等における主な活動					
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等		
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
VI 学内における管理運営に関する諸活動					

2022年度							
所属	教養学部 人間科学科	職名	准教授	氏名	井川純一	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
学生授業評価及び教員相互評価		2015年4月1日～		各期末に学生授業評価を施行している。授業の分かりやすさ、質問への対応等の10の質問項目からなる授業評価であり、過去担当した全ての科目において5段階評定の4以上を継続している。 また、学内のFD研修の一貫として行われている教員の相互評価においても常に高い評価を得ている。			
マルチメディア機器の活用		2015年4月～		講義は座学と演習、実習形式の内容をバランスよく配置し、manaba、Moodleの利用などマルチメディア機器を使用した講義を展開している。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		1) 講義科目について、manaba等のIC機器を活用し、学生が主体的に学べる講義計画を作成する 2) 演習科目については、学生ともに研究し、その成果を学外に発信する 3) 授業時間以外での学生とのコミュニケーションの時間を大切に、学生からのさまざまな相談に応じる。					
今年度の進捗状況		上記目標すべて、順調に進捗していると考えられる。					
来年度の進捗目標		本年度に引き続き、学生からのアンケートを参考にしつつ、それぞれの目標を改善する。					
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
グリットは安定したパーソナリティ特性か? —Big Fiveとの比較を通じた縦断的検討—	共同	2022年12月	日本パーソナリティ心理学会第31回大会(沖縄)	井川純一, 中西大輔			
主観的報酬が退職及び離職意図に与える影響: 介護福祉士を対象とした3波パネル調査	共同	2022年9月	日本社会心理学会第64回大会(京都橘大学)	井川純一, 徳岡大, 五百竹亮丞, 中西大輔			
成人愛着スタイルが購買意思決定に及ぼす影響	単独	2022年9月	産業・組織心理学会第37回大会(関東学院大学)	井川純一			
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		1) 典型的バーンアウトに関連する実験、調査を行い、学術論文を執筆する。 2) 学外での共同研究をすすめる。					
今年度の進捗状況		上記目標すべて、順調に進捗していると考えられる。					
来年度の進捗目標		昨年度の目標に加え、YouTubeやYahooコメントにおける社会的影響に関連する実験、調査を行う。					
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
科学研究費補助金 基盤研究(C)	2021年度～2023年度	共同(研究分担者)	
科学研究費補助金 基盤研究(C)	2021年度～2024年度		人口減少社会の今後の到来に伴い、財政難に直面する多くの地方公共団体では、現在の公共サービスの水準を維持できず、市民生活にも大きな支障が生じることが予想される。従来から我が国では、この課題に対する有効な地域政策として「自治体の連携と集約」がとられてきた。しかし、国内外の分析結果を見ると両者の効果に必ずしも肯定的でない。この要因は実施する分野や形態で異なるその効果を、総括的に分析しているためと推測する。そこで、本研究では自治体の連携と集約が公共サービスの供給費用と品質に及ぼす効果を分野別と形態別に分析して、持続可能で住民も満足できるそのあり方を効果的な分野と形態を中心に明らかにする。
科学研究費補助金 基盤研究(C)	2020年度～2022年度	共同(研究分担者)	
IV 学会等及び社会における主な活動			
2021年4月～		日本パーソナリティ心理学会経常的研究交流委員会 国際交流企画班・大会外企画班	
2017年4月～		九州心理学会 会員	
2017年4月～		パーソナリティ心理学会 会員	
2015年4月～		セルフヘルプ宝町第三者委員 運営参加・支援	
2011年4月～		産業・組織心理学会 会員	
2009年4月～		中四国心理学会 会員	
2009年4月～		日本心理学会 会員	
2009年4月～		社会心理学会 会員	
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	教養学部 人間科学科	職名	准教授	氏名	泉山 靖人	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
遠隔授業の併用		2022年4月～		一部授業についてその内容を録画し、欠席者に学習機会を提供している。			
出席カードの活用		2017年4月～		講義科目においては、毎回の授業の最後にミニ課題(授業内容の整理、あるいは原則論を講義した際には例外の取り扱いに関する自らの意見の記入)を実施している。			
出席カードの活用		2017年4月～		講義科目においては、毎回の授業の最後にミニ課題(授業内容の整理、あるいは原則論を講義した際には例外の取り扱いに関する自らの意見の記入)を実施している。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
公私協働体制の維持発展における人材の確保・育成の現状と課題 ボランティアとの連携による社会教育施設運営		共同	2023年1月	日本教育制度学会第29回大会(オンライン)		@背戸博史, @吉原美那子, @下村一彦, @泉山靖人, 高瀬淳	
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要		
科学研究費補助金 基盤研究(C)		2021年度～	個別(研究代表者)				
IV 学会等及び社会における主な活動							
2022年6月～2024年			一般社団法人全国私立大学教職課程協会 研究委員会委員				

2022年4月～2024年3月		仙台市社会教育委員の会議 社会教育委員	
2005年～		日本図書館文化史研究会運営委員 委員	
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	教養学部 人間科学科	職名	准教授	氏名	岡崎 勘造	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
宮城県小児肥満対策マニュアルの作成		2021年～		宮城県小児科医会による「宮城県小児肥満対策マニュアル」の作成コアメンバーとして活動している。本マニュアルは、宮城県内の幼稚園を含む学校に配布予定である。宮城県は肥満児が多い県であり、このマニュアルは、子どもの肥満を予防・改善するための一助となるよう学校、一次医療機関(校医)に活用してもらえるマニュアルである。			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
対人関与的な感情は婉曲な依頼表現を促進するか	共同	2022年11月	北海道心理学会・東北心理学会第13回合同大会(2022年11月5日)(北海道大学 高等教育推進機構)	◎福野光輝, 岡崎勘造			
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要				

<p>科学研究費補助金 科学研究費補助金 基盤研究C</p>	<p>2019年度～2021年度</p>	<p>個別(研究代表者)</p>	<p>・子どもの生活習慣を明らかにすることは、健やかな成長を促す基盤づくりに貢献する。申請者は、子どもの生活習慣(活動量計による運動;質問紙による睡眠と朝食)を継続して調査してきた。その調査から、睡眠が子どもの元気に影響する大切な要素としてみられた。さらには睡眠と運動の関わりもみられた。睡眠は、起床・就寝時刻、睡眠時間と一緒に、その質も検討することが望ましい。睡眠は、その量よりも質による元気さへの影響が大きいとされている。近年、科学技術が進歩し、日常生活での子どもの「睡眠の量/質」を機器によって評価できるようになったが、その研究は依然として不十分である。</p> <p>・本研究は、「睡眠の量/質」、「強い/弱い運動」、朝食の生活習慣の現状を明らかとする。さらには、生活リズムを整える起点となる生活習慣を探り、その生活リズムと元気さ(Quality of life, ヘモグロビン推定値)との関わりを明らかにする。本研究の成果は、健やかな子どもの発育発達を促す健康教育の展開に貢献する。</p>
--------------------------------	----------------------	------------------	--

IV 学会等及び社会における主な活動

<p>2022年12月～</p>	<p>仙台市スポーツ推進審議会 副会長</p>
<p>2020年～</p>	<p>仙台市スポーツ推進計画(2022-2031の施策)検討委員会 委員</p>
<p>2020年～</p>	<p>宮城県小児科医会「宮城県小児肥満対策マニュアル」作成委員会コアメンバー 委員</p>
<p>2019年12月～</p>	<p>仙台市スポーツ推進計画検討委員 委員</p>
<p>2018年～</p>	<p>仙台市スポーツ推進審議会 委員</p>
<p>2014年8月～</p>	<p>教育事業 肥満傾向にある子どものための生活習慣向上長期キャンプ「カラダにe イイキャンプ」(独立行政法人 国立青少年教育振興機構 国立花山青少年自然の家)の講師として参加 委員</p>
<p>2012年1月～</p>	<p>日本発育発達学会 会員</p>
<p>2012年～</p>	<p>International Society for Physical Activity and Health 会員</p>
<p>2011年6月～</p>	<p>東北大学バスケットボール連盟 理事</p>
<p>2011年1月～</p>	<p>日本スポーツ産業学会 会員</p>
<p>2011年～</p>	<p>European College of Sport Science 会員</p>
<p>2010年5月～</p>	<p>日本公衆衛生学会 会員</p>
<p>2009年6月～</p>	<p>日本ウォーキング学会 会員</p>
<p>2008年7月～</p>	<p>日本教育工学会 会員</p>
<p>2006年8月～</p>	<p>日本体育学会 会員</p>
<p>2006年6月～</p>	<p>日本体力医学会 会員</p>

V 芸術分野や体育実技等における主な活動

<p>展覧会・演奏会・競技会等の名称</p>	<p>場 所</p>	<p>開催年月日(西暦)</p>	<p>発表・展示等の内容等</p>
<p>東北大学バスケットボールリーグ 1次リーグ (男子)</p>	<p>東北学院大学</p>	<p>2015年9月～2215年9月</p>	<p>2位</p>
<p>現在の課題・目標</p>			
<p>今年度の進捗状況</p>			
<p>来年度の進捗目標</p>			

VI 学内における管理運営に関する諸活動

2022年度							
所属	教養学部 人間科学科	職名	准教授	氏名	金井 嘉宏	大学院の授業 担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
心理学の研究技法を効果的に習得させるために、自作マニュアルを用いた実習授業を複数教員により体系的に運営している。		2021年4月1日～		2年生向けの心理学に関する実験実習授業において、担当教員の綿密な打ち合わせの上で作成されたマニュアルを用い、心理学各領域の代表的・基本的なデータ収集・分析技法を体験的に学習させている。授業後、学生が提出したレポートについて、予め公開してある基準に従って丁寧に添削し、コメントをつけて返却する。学生には、修正したレポートの提出を義務づけている。全体をシステム化して運営しているのが特徴である。			
授業理解の促進と学習内容の記憶への定着を目的とした工夫		2021年4月1日～		講義では、パワーポイントを用いて画像や図表など、情報(資料)の効果的な提示を心がけている。また、重要な部分を空白にしたパワーポイントの資料を配布し、自分で記入することによって記憶にとどめるようにしている。さらに、DVDなどの視聴覚教材や授業時間内での簡単なレポート課題を取り入れ、自分の経験と授業内容を結びつけることによって内容の理解を深められるようにしている。学生同士での議論や教えあう活動を通して能動的な学習の要素を取り入れている。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月 (西暦)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
認知行動療法『人間の許容・適応限界事典』	共著	2022年11月	朝倉書店	金井嘉宏	pp.197-201		
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Antidepressants for social anxiety disorder: A systematic review and meta-analysis.	共著	2022年12月	Neuropsychopharmacology Reports, 42(4)	Mitsui, N., Fujii, Y., Asakura, S., Imai, H., Yamada, H., Yoshinaga, N., Kanai, Y., Inoue, T., & Shimizu, E.	pp.398-409		
Translation and Validation of the Japanese Version of the Trait and State Post-Event Processing Inventory	共著	2022年7月	Japanese Psychological Research, 64(3)	Maeda, S., Sato, T., Kanai, Y., Blackie, R. A., & Kocovski, N. L.	pp.320-332		
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
治療導入と心理教育	単独	2022年11月	BPCNP4学会合同年会(東京都, 日本)	金井嘉宏			

治療導入と心理教育	単独	2022年6月	第118回日本精神神経学会学術総会(福岡県, 日本)	金井嘉宏	
治療導入と心理教育	単独	2022年5月	第14回日本不安症学会学術大会(東京都, 日本)	金井嘉宏	
COVID-19感染への不安と強迫症	単独	2022年5月	第14回日本不安症学会学術大会(東京都, 日本)	金井嘉宏	

H. 翻訳(学術書や原典等)

I. 特許

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
科学研究費補助金 基盤研究(A)	2021年度～2025年度	(研究分担者)	「かわいい」は、日ごろもつとよく見聞きする言葉の1つである。本研究では、対象の属性である「かわいさ」と、対象に接することで個人内に生じる「かわいい感情」とを区別するという枠組みに基づき、(1)かわいい感情に及ぼす認知と身体感覚の役割の検討、(2)「かわいい」もので癒される現象の解明、(3)動きや対象同士の関係性といった新しいかわいさの発見と定量化、(4)かわいい感情を活用した瞑想(メンタルトレーニング)の実践と体系化を目指す。
科学研究費補助金 基盤研究(B)	2021年度～2024年度	(研究代表者)	社交不安症とうつ病に対する認知行動療法(CBT)は、ネガティブな感情を減らすことを主な目的としてきたが、ネガティブ感情(不安や抑うつ)が下がってもポジティブ感情の欠如があると効果は低い。本研究は、これまでの研究でポジティブ感情を高めることが明らかになっている、他者への親切行動や慈悲の瞑想といったコンパッション(思いやり)に基づく介入が、既存のCBTの効果に及ぼす影響と作用機序を明らかにし、CBTの改善率向上を目指す。

IV 学会等及び社会における主な活動

2021年2月～	仙台少年鑑別所 地域援助業務アドバイザー 委員
2020年8月～	一般社団法人 公認心理師の会 専門資格委員会委員長 委員長
2020年6月～	日本認知・行動療学会 公認心理師対応委員会委員長 会員
2020年3月～	日本不安症学会 学術委員会委員 会員
2019年9月～	日本認知療法・認知行動療学会 常任編集委員 会員
2019年8月～	一般社団法人 公認心理師の会 理事 委員
2018年12月～	公認心理師の会 設立委員・運営委員 委員
2017年7月～	日本心理学会「心理学ワールド」編集委員 会員
2016年7月～	日本認知・行動療学会常任編集委員 会員
2016年7月～	日本認知・行動療学会常任編集委員 会員
2016年6月～	日本認知・行動療学会代議員 会員
2016年6月～	日本認知・行動療学会理事 会員
2012年8月～	宮城県薬物乱用対策有識者会議委員 委員
2012年8月～	宮城県薬物乱用対策有識者会議委員 委員
2011年8月～	日本認知療法学会編集委員 会員
2011年8月～	日本認知療法学会編集委員 会員

2010年4月～		日本不安症学会評議員 会員	
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	教養学部 人間科学科	職名	准教授	氏名	小林 信重	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
同人の歴史とその研究		単独	2022年7月	JGS執筆者ワークショップ(オンライン)	小林信重		
「遊びの時代」の「遊び人」——1972年の堀井雄二と早稲田大学漫画研究会		単独	2022年7月	第74回早稲田社会学会大会(東京)	小林信重		
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要		
競争的資金等の外部資金による研究		2022年度～2022年度	個別(研究代表者)				
IV 学会等及び社会における主な活動							
2021年～				Replaying Japan Journal 査読委員			
2020年4月～				国際ゲーム開発者協会(IGDA)日本 同人・インディーゲーム部会 正世話人 委員			
2020年4月～2023年3月				コンテンツ文化史学会 運営委員 会員			
2020年4月～2023年3月				日本デジタルゲーム学会 編集委員・広報委員 会員			
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	教養学部 人間科学科	職名	准教授	氏名	東海林 渉	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
・双方向型授業の実践・アクティブラーニングの積極的活用		2019年4月1日～		健康の科学, 心理学, 健康心理学, 公認心理師の職責の授業において, 知識教授型の講義に加えて, 授業内でICTシステム(manaba, Respon)を使用した双方向型授業を行い, 学生の積極的な授業参加を促す工夫を試みた。また, 授業後に資料をシステム上にアップロードし, 学生が復習しやすい学習環境の整備に努めた。さらに授業内ではミニディスカッション等を取り入れたり, 視聴覚教材を活用して意見交換できるようにするなどアクティブラーニングに相当する活動を頻繁に行い, 学生が自らの知識と理解を用いて考える授業を試みた。加えて, 授業ではICTシステムを活用して聴取した感想や疑問等について, 毎回冒頭で紹介しフィードバックを与えるようにしている。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
・授業スライド教材, 配布教材の作成・視聴覚補助教材の研究と利用・独自の体験型教材の考案と作成		2019年4月1日～		担当した各授業の内容に合わせてスライドおよび学生用のレジュメを作成した。レジュメは学生のレベルに合わせて目標とする学習が適切に進むように情報量を調整した。さらに, 適宜, 授業内容の理解が促進されるよう映画や動画などの視聴覚教材を各授業の補助教材として導入した。また, 独自に体験型の教材(ワーク, エクササイズ)を考案し, 学生に教材を用いて諸現象を実体験してもらうことを通して学習の補助とした。ゼミでは, 学生が著作権を意識しながら授業レポートを適切かつ効率的に執筆できるよう, レポート作成の手引きを作成した。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
IV 学会等及び社会における主な活動			
2021年11月～		日本心理学会 認定心理士資格認定委員	
2021年8月～		日本心理学会『心理学ワールド』編集委員	
2019年9月～		日本認知療法・行動療法学会 非常任編集委員(編集委員会)	
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	教養学部 人間科学科	職名	准教授	氏名	坪田 益美	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要			
科学研究費補助金 基盤研究(C)		2022年度～2023年度	個別(研究代表者)				
科学研究費補助金 科学研究費助成金基盤研究(C)(一般)		2019年度～2021年度	共同(研究分担者)	人口減少社会における多文化的社会科教育に関する国際比較研究			
IV 学会等及び社会における主な活動							
2017年10月～				全国社会科教育学会 JSSEA専門委員 会員			
2016年6月～				東京書籍 教科書編集委員 委員			
2016年6月～				東京書籍 教科書編集委員 編集委員			
2016年4月～				日本社会科教育学会 評議員、学会誌編集委員 会員			
2012年4月～				宮城県教育委員会 入学者選抜試験審議会 委員 委員			
2008年4月～				全国社会科教育学会 学会員 会員			
2007年6月～				日本カナダ学会 学会員 会員			
2007年2月～				日本国際理解教育学会 学会員 会員			

2005年4月～	日本公民教育学会 学会員 会員		
2004年10月～	日本社会科教育学会 学会員 会員		
2004年10月～	日本社会科教育学会 学会員 会員		
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	教養学部 人間科学科	職名	准教授	氏名	吉田 雄大	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		座学および実技、両方の授業において、一方的な授業にならないように心がけている。学生とのコミュニケーションの時間を大切に、学生からのさまざまな相談に応じる。オンライン授業では、学生の不利益が極力ないように心がける。					
今年度の進捗状況		毎回の授業の感想から、responでの質問ならびに回答については好意的な評価を受けているため効果があったと考えている。					
来年度の進捗目標		新キャンパスおよび新カリキュラムでの運営となるので、円滑に運営できるように十分に準備を行う。オンライン授業、対面授業問わずICT教材などを活用して、学生の理解を深める努力をする。					
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
サッカーの位置情報把握における選手目線画像と空撮画像との比較		単独	2022年9月	日本体育・スポーツ・健康学会第72回大会(順天堂大学)		◎吉田雄大	
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		スポーツ技能の評価に関する文献研究および調査を行う。					
今年度の進捗状況		共同研究者と打合せを進め、解析方法を検討することができた。ドローンに関する研究成果を学会で発表することができた。					
来年度の進捗目標		機械学習への理解を深める。機械学習を用いたスポーツ技能評価の研究を進める。					
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要		
IV 学会等及び社会における主な活動							
2020年4月～				宮城県ラグビーフットボール協会 女子委員会委員・コーチ			
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場所	開催年月日(西暦)		発表・展示等の内容等		
現在の課題・目標		体育会ラグビー部監督として、東北北海道地区優勝を目指す。					
今年度の進捗状況		東北では準優勝となつてしまい、目標を達成することができなかった。					

来年度の進捗目標	体育会ラグビー部で東北北海道地区優勝を目指す。
VI 学内における管理運営に関する諸活動	
1. 教養学部学生委員 2. 第63期執行委員(副執行委員長) 3. 体育科目コーディネーター	

2022年度							
所属	教養学部 人間科学科	職名	講師	氏名	白倉 瞳	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
コロナで増える休職・退職—保健師のメンタルヘルスをまもりたい『「地域保健」第53巻第6号』		単著	2022年11月	株式会社東京法規出版		白倉瞳	pp.34-38
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
東日本大震災被災者の余暇の過ごし方と悲嘆の複雑化の関連性		共同	2022年6月	第118回日本精神神経学会学術総会(福岡県)		大野桃香, 白倉瞳, 國井泰人, 富田博秋	
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)		個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要	
科学研究費補助金 若手研究		2022年度~2025年度				トラウマ体験後も心の健康を維持し、社会適応を実現するために役立つ能力として「情動の柔軟性」(状況に応じて感情を表現したり抑制したりする能力)に着目し、18歳以上を対象に、(1) 情動の柔軟性尺度の日本語版を作成し、信頼性・妥当性を検討した上で、(2) 様々な心理社会的適応との関連メカニズムを解明するとともに、(3) 4時点の縦断データに基づき、情動の柔軟性がトラウマ体験後の心の健康の変化パターンに及ぼす影響を検討する。	
IV 学会等及び社会における主な活動							
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	教養学部 言語文化学科	職名	教授	氏名	秋葉 勉	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
manabaを用いて、遠隔授業(オンタイム授業)を行い、課題・小テストを実施した。採点と講評を速やかに学生に配信した。		2020年4月1日～					
英語の資格試験や留学の指導		2020年4月1日～		英語検定、TOEIC、TOEFLなどの英語の資格試験の指導、英語圏の大学への留学について指導している。			
研究室やZoomでの英語指導		2020年4月1日～		研究室やZoomを利用して、希望する学生と英語で会話している。また、学生に英語で日記を書くことを推奨し、添削も行っている。			
英語による授業の実践		2020年4月1日～		言語文化学科の英語のすべての授業において、英語で授業を行っている。学生たちが英語で発言できるように工夫をしている。他学科の英語上位クラスにおいても一部英語を媒介にして授業を実践している。			
英語基礎力の復習と養成		2020年4月1日～		学生の英語習得レベルに合わせて、英語の基礎的な文法・作文問題を授業の前半で毎回行っている。			
英語の辞書の使い方、辞書携帯の実践		2020年4月1日～		英和、和英、英英辞書の効果的な利用方法を教え、学生たちの辞書携帯を習慣付けるため、毎回の授業で辞書をチェックしている。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
英語教育センター委員		2020年4月1日～		英語教育センターの委員として本学の英語教育の改革に参加した。			
中高大一貫教育事業「TG English Academic Forum」		2020年1月～		「英語の効果的な勉強法」と題して講演の予定であったが、コロナ感染の拡大により中止。ただし、ほぼ毎年、東北学院中・高校で実施している。			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動			
1984年4月～		日本アメリカ学会会員 会員	
1984年4月～		日本アメリカ文学会会員 会員	
1984年4月～		日本英文学会会員 会員	
1984年4月～		日本ナサニエル・ホーソーン協会会員 委員	
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	教養学部 言語文化学科	職名	教授	氏名	アンドリュース デール	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
responアプリを使用		2022年4月1日～		授業中に履修者の出席・欠席を計るために、responアプリを使用する。			
対面授業への対応		2022年4月1日～		新型コロナウイルス感染症対策の中にすべての授業開講して、アクティブラーニングの授業に工夫したり、感染による欠席した学生のために対応をしたりする。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
講義に配布する資料の作成		2011年～		パワーポイントに基づいた資料を作成して、受講生に配布することとなっている。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
中高大一貫教育事業「TG English Academic Forum」		2023年2月17日		アメリカ英語について講義した。			
個人ホームページの利用		2019年～		学生のため、個人ホームページにクラス・スケジュールや授業の解説などを公開している。			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
東日本大震災の復興を祈願する絵馬—アニメ聖地巡礼の事例として—『生と死の表象』	単著	2022年4月	岩田書院	アンドリュース・デール	pp.不明		
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
アニメ・ファンと供養絵馬—京都アニメーション放火事件を背景に	単独	2022年10月	日本民俗学会第74回年会(熊本大学)	アンドリュース・デール			
Butchering Cuties: The Violent Religious Symbolism Found on Votive Tablets from Pilgrimage Anime Fans	単独	2022年9月	Japan: Pre-modern, Modern, Contemporary 9th International Conference(Dimitrie Cantemir Christian University, Bucharest)	Dale K. Andrews			
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動			
2023年2月		ポピュラーカルチャーとグローバル化という問題	講師
2023年2月		アメリカ英語への理解(東北学院法人中高大における「English Academic Forum」)	講師
2021年6月～		日本デジタルゲーム学会 (DiGRA JAPAN)	会員
2021年6月～		印度学宗教学	常任理事
2018年6月～2022年6月		日本民俗学会	評議員
2017年10月～		日本宗教民俗学会	会員
2016年6月～		日本民具学会	会員
2016年6月～		現代民俗学会	会員 会員
2013年9月～		日本宗教学会	評議員
2012年6月～		東北民俗の会	常任委員
2012年6月～		印度学宗教学	理事
2010年4月～		日本民俗学会	会員
2009年11月～		Anthropology of Japan in Japan	会員
2008年7月～		American Anthropological Society	会員
2008年6月～		印度学宗教学	評議員
2007年3月～		The American Folklore Society	Lifetime Member
2006年3月～		The American Folklore Society	会員
2005年3月～		国際宗教学宗教史学会	会員
2002年3月～		青森県民俗の会	会員
1999年4月～		東北民俗の会	会員
1998年6月～		日本宗教学会	会員
1998年4月～		印度学宗教学	会員
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	教養学部 言語文化学科	職名	教授	氏名	今井 奈緒子	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
manabaのオンライン小レポート機能の使用		2020年5月7日～		遠隔授業の実施に伴い、従来の出席カードに替わるものとして毎回オンラインによる小レポートの提出を義務づけ、学生に授業内容についての所見、質疑を記すよう求めた。優れた内容の、あるいは他の学生の参考になると思われるコメントを、次週の授業冒頭に(授業進行上その時間が取れないときは、プリントにまとめて配信)紹介し、質問に回答するなどしてフィードバックに役立てている。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
講義科目における各回授業の資料フォルダ(プリント・CD音源・スライドショー)		2020年5月7日～					
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要			
IV 学会等及び社会における主な活動							
2021年5月～		一般社団法人日本オルガニスト協会 会長(代表理事)					
1983年4月～		一般社団法人日本オルガニスト協会 会員					
1978年5月～		日本オルガン研究会 運営委員・年報編集委員					
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
ジング・アカデミー公演	東京都北区北とびあつつじホール	2023年2月～2023年2月	H. シュッツ、H. シヤインの合唱曲を助演
ジング・アカデミー公演	東京立教大学諸聖徒礼拝堂	2023年2月～2023年2月	H. シュッツ、H. シヤインの合唱曲を助演
『時代の音』レクチャーコンサートシリーズ2022 vol.2	本学泉キャンパス礼拝堂	2023年1月～2023年1月	「ヘンデルとオルガン」と題し、レクチャーと演奏を行う。曲目はヘンデル作曲オルガン協奏曲ト短調op.4-1、及びオラトリオ《メサイア》より第1部全曲
霊南坂教会水曜チャペルコンサート	東京赤坂霊南坂教会	2023年1月～2023年1月	
東北学院大学工学部60周年の集い	本学多賀城キャンパス礼拝堂	2022年11月～2022年11月	工学部60周年を祝い30分間の演奏
霊南坂教会水曜チャペルコンサート	東京赤坂霊南坂教会	2022年10月～2022年10月	
清瀬みぎわ教会オルガン奉獻30周年記念コンサート	東京清瀬市日本キリスト教団清瀬みぎわ教会	2022年10月～2022年10月	
コルス・クビクルム演奏会	東京赤坂霊南坂教会	2022年10月～2022年10月	H. シュッツの宗教歌曲、J. S. バッハのモテット等を声楽ソリスト、合唱団と共に演奏。
霊南坂教会水曜チャペルコンサート	東京赤坂霊南坂教会	2022年9月～2022年9月	
水戸芸術館レクチャーコンサート	水戸市水戸芸術館	2022年9月～2022年9月	「オルガニスト セザール・フランクの肖像」と題したレクチャーと演奏。曲目はN.de グリニー《パンジェ・リングア》、C.フランク《コラール第2番》《交響的大作品》
『時代の音』レクチャーコンサートシリーズ2022 vol.1	本学土樋ラーハウザー記念礼拝堂	2022年8月～2022年8月	「オルガンの時代」をテーマに、バッハの教会カンタータBWV35、29よりシンフォニア(オルガンソロ)、管弦楽組曲第3番を演奏
山形交響楽団定期演奏会 ヘンデル《メサイア》	山形市やまぎんホール	2022年8月～2022年8月	
霊南坂教会水曜チャペルコンサート	東京赤坂霊南坂教会	2022年7月～2022年7月	N. de グリニー 賛歌《パンジェ・リングア(舌よ歌え)》、J.S. バッハ トッカータとフーガ へ長調 BWV540
宗教音楽研究所主催 今井奈緒子オルガンリサイタル	東北学院大学泉キャンパス礼拝堂	2022年6月～2022年6月	当礼拝堂での最後のオルガン演奏会。演奏曲目：N.de グリニー 《パンジェ・リングア》、J.S. バッハ トッカータとフーガ へ長調 BWV540、C. フランク《交響的大作品》
霊南坂教会水曜チャペルコンサート	東京赤坂霊南坂教会	2022年6月～2022年6月	C. フランク《6つの作品》より大交響的作品
霊南坂教会水曜チャペルコンサート	東京赤坂霊南坂教会	2022年4月～2022年4月	
『時代の音』レクチャーコンサートシリーズ2021 vol.3(収録配信)	東京赤坂霊南坂教会(収録)	2022年3月～	H. v. ヘルツォーゲンベルク《受難》全曲の収録配信
『時代の音』レクチャーコンサートシリーズ2021 vol.2(収録配信)	本学多賀城礼拝堂	2022年3月～	J. ブラームス《4つの厳粛な歌》op.121, コラール前奏曲po.122 より数曲
霊南坂教会 水曜チャペルコンサート	東京都港区赤坂1-14-3	2021年4月～2022年4月	シャイデマン、J. S. バッハ、メンデルスゾーン、H. ウイランによる受難と復活のオルガン音楽
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	教養学部 言語文化学科	職名	教授	氏名	金 永昊	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		YOUTUBEを活用した初級韓国語教育コンテンツ制作					
今年度の進捗状況		YOUTUBEを活用した初級韓国語教育コンテンツ(ハングル能力検定試験5級)制作					
来年度の進捗目標		YOUTUBEを活用した初級韓国語教育コンテンツ(ハングル能力検定試験4級・3級)制作					
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
近世初期文学からみる怪異認識		単独	2022年12月	韓国日語日文学会2022年度冬季国際学術大会(韓国、ソウル)		金永昊	
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		科研費「日韓両国における中国短編白話小説の受容様相比較研究」の研究まとめ					
今年度の進捗状況		コロナ禍のため、国内及び海外出張が出来ず、なかなか資料を調べることが出来ていない。					
来年度の進捗目標		科研費の研究成果を学術雑誌に掲載したい。					
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)		個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要	
競争的資金等の外部資金による研究 名著翻訳支援(韓国研究財団)		2018年度～		共同		本研究は、韓国研究財団(旧、韓国学術振興会)の支援により、井原西鶴の『武家義理物語』を韓国語で訳注、解説を付けて刊行する作業である。この作品の翻訳・紹介を通して、現在の日本人の考え方を支えている「義理」という概念はいかなるようなものなのか、これは我々韓国人が日本を理解するうえでどのように役に立つかを提示することが出来ると思われ、文学・社会学・思想・宗教などの関連分野において非常に重要な意義を持つと考えられる。	

科学研究費補助金 科研費基盤C	2017年度～	個別	本研究は、日本と韓国における中国短編白話小説の受容様相を比較し、そこから見出せる日本と韓国文学の特質を究明することにその目的がある。これまでは日韓両国における『三国志演義』『水滸伝』などの長編白話小説の受容様相についての研究は活発に行われたが、三言二拍到代表されるいわゆる短編白話小説については十分な研究が行われていなかった。一般的に比較研究といえば、どちらが優秀なのかについて焦点が当てられがちだが、本研究ではバランスの取れた視点から日韓両国の根底にある文化的背景と特質について考察することに目的がある。
IV 学会等及び社会における主な活動			
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			
国際交流部副部長			

2022年度							
所属	教養学部 言語文化学科	職名	教授	氏名	小林 睦	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要			
IV 学会等及び社会における主な活動							
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
VI 学内における管理運営に関する諸活動							

2022年度								
所属	教養学部 言語文化学科	職名	教授	氏名	佐伯 啓	大学院の授業担当の有無	無	
I 教育活動								
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要				
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)								
講義「読解・作文の技法」におけるWeb活用レポート評価システム		2020年9月23日～		大人数の授業を効果的に運営するためのWeb活用を継続して実践。情報科学科松本章代先生のご協力により、Webを活用したレポートの提出・公開システムおよび提出されたレポートの新しい評価方法の試みを行っている。				
2. 作成した教科書、教材、参考書								
学科パラグラフノートの企画、制作		2020年11月～		パラグラフをベースとしたレポート・論文執筆をサポートする教材「Pノート」(言語文化学科新入生用)の改良版を企画、編集、制作。				
『大学生の作文練習帳Ver.3』のオンライン版作成		2020年8月～		読解・作文の技法で用いてきたテキストの全体を見直し、授業での反応と教育的成果を考慮しながら、本文の修正と練習問題等のバージョンアップを行なった。その作業をもとに『大学生の作文練習帳Ver.3』のオンライン版を授業担当者とともに作成した。				
ドイツ語検定3級・4級受験者のための指導		2020年4月～		ドイツ語検定を受験する学生のための予備対策として、過去問を編集して作成した教材で、文法、読解、聴解の指導を行なった。				
授業を補完する練習問題の作成		2020年4月～		教科書を補完するドイツ語文法練習問題や小テストを作成・印刷し、授業時に配付して活用。				
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等								
4. その他教育活動上特記すべき事項								
学科ポートフォリオの制作		2020年11月～		大学生生活の学習記録となるポートフォリオ(言語文化学科新入生用)の2021年版を編集・制作。				
現在の課題・目標		<ol style="list-style-type: none"> 『ドイツ文法A1 Ver.2』を授業で使用しながら、さらなる改善を目指す。 『大学生の作文練習帳 Ver.3』の新しい例文や練習問題を考える。 ドイツ語テキストとして刊行した『ドイツ百科ミニ読本』を中級の授業で使用し、語学的・文化的視点からその教育効果を考える。 						
今年度の進捗状況		<ol style="list-style-type: none"> ドイツ語の授業で使用する中で気づいた改善点を随時リストアップした。 『大学生の作文練習帳』オンライン版の例文、練習問題の改定作業を行なった。 『ドイツ百科ミニ読本』を中級授業(音読では初級でも)で使用し、その教育効果を分析した。 						
来年度の進捗目標		<ol style="list-style-type: none"> 『ドイツ文法A1 Ver.2』の改善点をさらにリストアップする。 『大学生の作文練習帳』の例文、練習問題の改定の準備をする。 『ドイツ百科ミニ読本』をドイツ語中級(総合)とドイツ語IIの授業で使用し、教育効果を分析する。 						
II 研究活動								
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)		発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書								
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)								
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)								
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文								
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)								
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)								
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)								
G. 学会における研究発表								
H. 翻訳(学術書や原典等)								
I. 特許								

現在の課題・目標	1.プロギュムナスマタの研究をさらに深め,古典古代から18世紀のGottsched,そして現代につながる作文教育の系譜を辿る。 2. パラグラフに関する文献資料と佐々政一の作文研究書を精査し,論文にまとめる。 3. Klexikon日本語版制作作業をさらに進める。 4. ドイツ引用句事典の編集史を1冊の研究論文にまとめる。		
今年度の進捗状況	1.昨年度に続き,Gottschedのドイツ語原文資料の日本語訳作業をさらに進めた。 2. 5パラグラフ型と弁証法的対比型の論述分構成に関する文献資料をさらに収集した。 3. Klexikon日本語版制作作業を遂行中。 4. ドイツ引用句事典の編集史をまとめる作業を大幅に進めることができた。		
来年度の進捗目標	1.Gottschedのドイツ語原文資料の日本語訳作業を継続する。 2. パラグラフに関する文献資料の整理をさらに進める。 3. Klexikon日本語版制作作業をさらに進める。 4. ドイツ引用句事典編集史について6月の全国学会で発表し,その後夏までに完成して提出予定。		
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動			
1990年4月～		日本独文学会ドイツ語教育部会会員 会員	
1989年4月～		東北ドイツ文学会会員 会員	
1989年4月～		日本独文学会会員 会員	
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	教養学部 言語文化学科	職名	教授	氏名	信太 光郎	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		(1) 抽象的な哲学的問題をなるべく学生の実感に近いところに戻して理解させる。 (2) 学生への多様な文献・資料の提示。学生による積極的な資料発掘への働きかけ。 (3) 自らの研究と授業との連携 (4) オンデマンド授業の工夫					
今年度の進捗状況		(1) 小テスト、コメントから判断すると、真面目に聴く学生にはそれなりの効果はある。 (2) 小テスト、コメントから判断すると、ビジュアル資料をふくめた多様な文献・資料の提示は学生に興味を起こさせる効果はあったと判断される。他方で学生が自ら積極的に資料を探すとことにはあまりなっていない。 (3) 授業しながら自らも思考を深めるといい循環ができつつある。 (4) オンデマンド授業では学生のコメをフィードバックして授業に活かすようにした。					
来年度の進捗目標		(1) 自身の研究を深めることにより、抽象的な問題と個別の実感的な問題との架橋をいつそうすすめていきたい。 (2) 学生に自ら積極的に関連の文献・資料を探るよう働きかけを強めたい。 (3) 今後は自らの研究の進展をさらに授業にフィードバックしていきたい。 (4) 新たな開講科目(文化の歴史)にむけて準備をすすめたい。					
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		(1) 美学論文の執筆に向けて資料の読解 (2) 学会における戦争論のシンポの準備					
今年度の進捗状況		(1) 鋭意調査研究中 (2) 参考文献の読解中					
来年度の進捗目標		(1) 美学論文の出版 (2) 学会のシンポでの発表					
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要		
IV 学会等及び社会における主な活動							
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場所	開催年月日(西暦)		発表・展示等の内容等		

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	
VI 学内における管理運営に関する諸活動	

2022年度							
所属	教養学部 言語文化学科	職名	教授	氏名	下館 和巳	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		学生が自宅で更なる学習ができるような課題を与える					
今年度の進捗状況		学生の感想(レポート)によればある程度の成果が見られた。					
来年度の進捗目標		課題図書を増やしていくこと					
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		山川ダンテの研究をさらに深めていく					
今年度の進捗状況		アイヌオセロのロンドン上演を実現する					
来年度の進捗目標		共同研究者との連携を深めていきたい					
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要			
IV 学会等及び社会における主な活動							
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等			
現在の課題・目標		アイヌオセロのロンドン上演を実現する					
今年度の進捗状況		アイヌと上演地に関する調査を継続					
来年度の進捗目標		上演に関し、国際的なプロジェクトとの連携を深めていく					
VI 学内における管理運営に関する諸活動							
2021年9月11月12月慶應義塾大学(学術講演)「テーマ:シェイクスピアの翻訳 毎月多賀城自由大学(zoom定期講演会)「テーマ:シェイクスピアの人生と芸術」 2022年1月ICU生涯教育講座 大阪大学大須賀教授 学際zoom講演会(毎月)「テーマ:科学と芸術」							

2022年度							
所属	教養学部 言語文化学科	職名	教授	氏名	津上 誠	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
『総合研究』における「身の回りの事柄の論文トピック化推奨」と「対話型指導の徹底」		1996年4月～		指導学生に対し、身の回りの事柄を論文トピックに立てることを勧めた上で、各人との間で2週に1回、60分以上かけ、資料収集、文献内容把握、論文構想、アウトライン作り、本文執筆の全局面での「ボールの投げ合い」を密接に繰り返し、当該トピックの文化論的探求を支援。指導下の学生全員に出席を求める研究経過報告会も月1回開き、各学生の取り上げる問題が決して個人的関心事で終わるものではなく、私たちが生きる社会で共有されうる問題であることを実感させる。年度にもよるが同趣旨の合宿も実施。			
演習系諸科目における課題提出の恒常化		1996年4月～		例えば『言語文化学演習』においては文化論系の多種多様な良質文献を毎週ひたすら読んでいくのだが、指定範囲を報告者だけでなく全員が毎週読んで来るよう、最低3時間以上の読みを義務づけ、とったメモやノートのコピーの提出を求めている。			
講義系諸科目は板書と口頭のみでの授業にし、対面的状況を確保している		1996年4月～		対面的状況を大切にするため、原則としてパワーポイントもプリントも使わず、板書と口頭のみで授業を行う。(新型コロナウイルス対策でリモート授業を余儀なくされる場合も、大型ホワイトボードをバックに授業を行う姿を映し、板書と口頭のみでの授業に準ずるものとする。)			
文化人類学系講義全般における授業時提出物の徹底を通じた、コミュニケーション双方向化および授業参加促進		1996年4月～		受講生150人位までの講義では毎授業終了前に10分程かけ、設問への解答、授業理解度自己診断、授業への感想質問等を書かせる「小テスト」を実施。書かれたことを授業運営に反映させて受講生とのコミュニケーション双方向化を企てるとともに、「授業に集中していなかったことが明白な答案には極めて低い評価しか与えない」と初回予告しておき、受講生の授業参加促進を図る。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
『論文作成の留意点』(約16,000字、指導学生に対する印刷配布のみ)		1996年4月～		『総合研究』指導用に毎年改訂配布して読み合わせ会を開き、以後1年間学生に手引きとして利用して貰うもの。大きく3部分から成り、第一部分では、論文とは「他者が提示する事実や事実解釈とあなたが見察した事実とを素材にしなが、あなた自身がある結論に向かって構築する物語」である旨を説明、この観点に沿うための技法として、第二部分では論文完成までの作業プロセスを、第三部分では引用表示等の体裁作りを、それぞれできるかぎり平易に解説している。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							

G. 学会における研究発表			
H. 翻訳(学術書や原典等)			
I. 特許			
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
IV 学会等及び社会における主な活動			
2022年12月～2022年12月		家族とは? ～ボルネオ島の異文化研究より～(同友会大学) 講師	
2022年11月～2022年11月		現代日本社会における「家族」の変化と持続(大人の教養倶楽部) 講師	
1985年3月～		日本民族学会(現日本文化人類学会) 会員 会員	
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	教養学部 言語文化学科	職名	教授	氏名	塚本 信也	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概 要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要			
IV 学会等及び社会における主な活動							
2021年4月～			東方学会 会員				
2021年4月～			日本中国学会 会員				
2021年4月～			日本中国語学会 会員				
2017年9月～			宮城テレビ放送番組審議委員会 委員				
2017年～			全日本中国語スピーチコンテスト東北大会審査委員会 委員長				
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							

VI 学内における管理運営に関する諸活動

2022年度							
所属	教養学部 言語文化学科	職名	教授	氏名	坂内 昌徳	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
授業外学習としての英語多読活動の積極的実施		2021年4月1日～		英語授業の評価に授業外の英語多読を組み入れ、学生が受ける英語インプットを格段に増大			
英語の授業における4技能統合型言語活動		2021年4月1日～		受講者全員が90分間を「聞き」「話し」「読み」「書く」ことが求められる授業展開			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
英語多読活動の継続的実施		2021年4月1日～					
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要			
IV 学会等及び社会における主な活動							
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
VI 学内における管理運営に関する諸活動							



2022年度							
所属	教養学部 言語文化学科	職名	教授	氏名	松谷 基和	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
鈴木義男と朝鮮一鄭在允との関係を中心に	単著	2023年3月	東北学院史資料センター年報(8)	松谷基和	pp.NA-NA		
D. 一般著書・論文・エッセイ(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセイ(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
후쿠시마 원전사고 12주년- 한 현지인의 관찰과 소감	単独	2023年1月	국제한국문학문화학회(オンライン)	松谷基和			
Japan-Educated Korean Ministers- a source of Christian liberalism	単独	2022年12月	Korea Colloquim(Cambridge, Massachusettes)	松谷基和			
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要			
IV 学会等及び社会における主な活動							
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
VI 学内における管理運営に関する諸活動							



2022年度							
所属	教養学部 言語文化学科	職名	教授	氏名	楊 世英	大学院の授業 担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
小テストや自己点検など		2021年4月1日～		学生の学習状況を正確的に把握するために、教育方法の改善の根拠となるものである。TGベシク授業「地球社会を生きる」において課題調査をしました。			
小テストや自己点検など		2021年4月1日～		学生の学習状況を正確的に把握するために、教育方法の改善の根拠となるものである。TGベシク授業「地球社会を生きる」においてアンケート調査をしました。			
小テストや自己点検など		2021年4月1日～		学生の学習状況を正確的に把握するために、教育方法の改善の根拠となるものである。			
授業の進め方を工夫、とくに国際涵養に関わる科目(地球社会を生きる)		2021年4月1日～		授業の区切りをよく考えながら、とくに板書の設計を配慮して授業を進める。視聴覚教材を活用している。基礎の弱い生徒に個別指導が行なった。講義者に対して受講者が多く、授業はなるべく細かく区切りして、キーワードを明確化する。			
学習した内容および関連する知識への理解への定着に促進		2021年4月1日～		常に授業の前で、復習を通して知識の定着に努め、授業終了の際にはまとめを行っている。語学授業のみを行われた。			
授業の進め方を工夫		2021年4月1日～		授業の区切りをよく考えながら、とくに板書の設計を配慮して授業を進める。視聴覚教材を活用している。基礎の弱い生徒に個別指導が行なった。			
教員独自の「個別面談による授業評価」を実施している。		2021年4月1日～		とくに語学授業なので、授業の合間や休み時間を利用してヒアリング調査を行っている。2年生会話授業にそれぞれ5分ずつあたる練習を行いました(少人数クラス)			
学習した内容および関連する知識への理解への定着に促進		2021年4月1日～		常に授業の前で、復習を通して知識の定着に努め、授業終了の際にはまとめを行っている。語学授業のみを行われた。			
小テストや自己点検など		2021年4月1日～		学生の学習状況を正確的に把握するために、教育方法の改善の根拠となるものである。TGベシク授業「地球社会を生きる」においてアンケート調査をしました。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
語学教材として自ら作ったプリントテキスト配布		2021年4月1日～		シラバスに基づきだけでなく、小テストや自己点検などによる学生に合う内容に(14回)90分授業の時間配分を着目する。			
語学教材として自ら作ったプリントテキスト配布		2021年4月1日～		シラバスに基づきだけでなく、小テストや自己点検などによる学生に合う内容に(14回)90分授業の時間配分を着目する。現代アジア事情授業			
語学教材として自ら作ったプリントテキスト配布		2021年4月1日～		シラバスに基づきだけでなく、小テストや自己点検などによる学生に合う内容に(14回)90分授業の時間配分を着目する。			
現代アジア事情		2021年4月1日～		現代アジア社会構造の変動について			
授業で使用している補助教材(配布プリント)		2021年4月1日～		語学会話授業で生きる言語を学生に伝えるため、大学生に身近の場面設定で会話教材を作って利用した。(中国語会話Ⅰ、Ⅱ)ほかには講義の授業でもプリントをも使っていた。自ら取ったビデオ(短期語学引率のため中国大学生との語学交流場面)は生の教材として利用した。			
語学教材として自ら作ったプリントテキスト配布		2021年4月1日～		シラバスに基づきだけでなく、小テストや自己点検などによる学生に合う内容に(14回)90分授業の時間配分を着目する。現代アジア事情授業			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							

来年度の進捗目標					
II 研究活動					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月 (西暦)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)					
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)					
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳(学術書や原典等)					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)					
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要		
IV 学会等及び社会における主な活動					
V 芸術分野や体育実技等における主な活動					
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等		
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
VI 学内における管理運営に関する諸活動					

2022年度							
所属	教養学部 言語文化学科	職名	教授	氏名	渡部 友子	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		1. 学生の習熟度に合わせて、教材や指導方法を変える。 2. 言語文化学科で(第二外国語だけでなく)英語を学びたい学生に、英語力をつけさせる。 3. 講義科目において、学生間の学び合いや講義外での学びを促す。 4. 英文を読む時に、自分の知識を使って行間を埋めることが重要であることを学生と教員に伝える。					
今年度の進捗状況		1. 「English Theme Writing A・B」と「英語IIB」のグレードa(上級)クラスにおいて、学生の活動を中心に授業を運営し、活動に困難さがあるグループには助言をした。グループ構成を毎回変えたことで、異なる個性や学力の学生間で学び合いが起りやすくなったように思われる。 2. 話す力がある英語教員志望者数名が、英語で雑談をする会への継続的な参加を通して能力を向上させたが、能力不足の学生が参加しない傾向は、今年度も続いた。 3. 「英文法B」は後期にオンデマンド化され、グループ活動も遠隔となったが、manabaプロジェクトの書き込みを見る限り、授業外での活発な意見交換が昨年度より多くみられた。 4. 英語教員更新講習は実施されず、それ以外の取り組みも行わなかった。					
来年度の進捗目標		1. 「English Theme Writing A・B」において引き続き、学生中心の運営する。 2. 英語力不足の英語教員志望者にどうアプローチすべきか、引き続き考える。 3. 引き続きmanabaプロジェクトを利用してグループ活動をしながら、学び合いを促す。 4. 新規開講される国際学部の英語科目において、理解を自分で構築することを学生に指導する。					
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		1. 「英文法」の本の執筆を目指し、講義を通して内容を精選する。 2. 英語教育に関する活動を、学内外で発表する。					
今年度の進捗状況		1. 「英文法」に関わる英語教員免許更新講習の後半の内容を、本学教養学部論集190号に研究ノートとして発表した。 2. 大学英語学会の東北支部研究会(6月)において、本学の全学英語教育の設計と実態について説明した。					
来年度の進捗目標		1. 「英文法」に関わる原稿は、公開可能な状態にできないと予想する。 2. 国際教養学科における英語教育の特色について、何らかの形で公開する。					
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)		個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要	
IV 学会等及び社会における主な活動							

V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			
英語教育センター長に就任し、全学必修英語の運営を統括した。また全学改組に関わり、教養教育センター外 国語教育部門長、国際学部設置・開設準備委員長を務めた。このほか、言語文化学科の昇任人事1 件において副査を務めた。			

2022年度							
所属	教養学部 言語文化学科	職名	准教授	氏名	井上 正子	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
「ハーレム・ルネサンスという文化社会運動の豊かさ」と語り方の難しさ——人種、階級、ジェンダー、セクシュアリティ、エスニシティや地域差など、運動内部の様々な差異をめぐる問題をもあぶり出す」(松本昇監修『ハーレム・ルネサンス』明石書店・書評)	単著	2022年4月	図書新聞(3541)	井上正子	pp.5-5		
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
『アニマル・スタディーズ 29の基本概念』	共訳	2023年2月	平凡社	井上正子(監訳:大橋洋一)	pp.31-58		
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要				
IV 学会等及び社会における主な活動							
2019年4月～		MLA 会員					
2017年4月～		日本アメリカ文学会 会員					
2016年4月～		日本比較文学会 会員					
2013年4月～		The Society for Caribbean Studies (UK) 会員					

V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	教養学部 言語文化学科	職名	准教授	氏名	巖谷 睦月	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要			
科学研究費補助金 ルーチョ・フォンターナの新しいモノグラフィの為に: 補完研究として		2018年度~2021年度	個別(研究代表者)	日本学術振興会 科学研究費補助金(若手研究)			
IV 学会等及び社会における主な活動							
2019年4月~			イタリア近現代史研究会 会員				
2018年6月~			イタリア学会 会員				
2009年4月~			日伊協会 会員				
2004年4月~			美術史学会 会員				
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							

来年度の進捗目標	
VI 学内における管理運営に関する諸活動	

2022年度							
所属	教養学部 言語文化学科	職名	准教授	氏名	岸 浩介	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
manabaを利用した授業内・授業外課題作成		2020年～		講義科目(「言語基礎論IA」「言語獲得論」「原典講読A, B」)において、オンラインシステムmanabaのレポート機能を用い、授業外課題(振り返り課題)の作成を課した。また、外国語科目(「英語IA, B」「英語IIA, B」)において、同システムの小テスト機能を用い、授業内・外の演習問題解答課題を課した。			
responを利用した双方向形式授業の展開		2020年～		講義科目(「言語基礎論IA」「言語獲得論」「原典講読A, B」)と外国語科目(「英語IA, B」「英語IIA, B」)において、オンラインシステムresponを用い、教員と学生間の双方向の情報伝達を活用した授業を展開した。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
高大連結事業の講師		2020年～		高大連結事業の一環として、2021年1月28日に、東北学院榴ヶ岡高等学校で出張講義を行った。			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
日本語の不変変化詞「の」による叙述的名詞句連結構文の派生について		単著	2022年12月	『東北学院大学教養学部論集』(191)		岸 浩介	pp.19-50
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
ルーブリックを用いた成績評価に関する報告—教養学部「総合研究」の事例—		単著	2023年2月	東北学院大学教育研究所, 『東北学院大学教育研究所報告集』, 23		岸 浩介	pp.45-54
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要		

IV 学会等及び社会における主な活動			
2021年4月～	東北英文学会(日本英文学会東北支部) 編集委員(英語学)		
2005年3月～	高次機能障害学会会員 会員		
2004年4月～	The Formal Linguistics Circle会員 編集委員		
2004年4月～	The Formal Linguistics Circle会員 学会開催責任者		
2000年4月～	日本英語学会会員 会員		
1998年4月～	The Formal Linguistics Circle会員 会員		
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	教養学部 言語文化学科	職名	准教授	氏名	金 亨貞	大学院の授業 担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概 要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・ 共著 の別	発行又は発表の年月 (西暦)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要			
IV 学会等及び社会における主な活動							
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
VI 学内における管理運営に関する諸活動							

2022年度							
所属	教養学部 言語文化学科	職名	准教授	氏名	城山 拓也	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
中国語スピーチコンテストを通じた中国語学習		2022年9月1日～2022年10月31日		中国語教育の一環として、有志の学生を募り、全日本中国語スピーチコンテストへの参加を促している。主に1、2年生を対象に、授業外で中国語作文の添削やスピーチ指導などを自主的に進めた。結果として、2022年度は宮城県大会スピーチの部において、本学の学生が優勝・準優勝を獲得することが出来た。			
専門科目(「言語文化学演習」)の授業方法		2020年4月1日～		ゼミでは、基本的に学生の主体的な発表と議論を促している。発表者1名のほか、別にコメンテーター1名を事前に指名しておき、発表内容についてコメントしてもらう。そのほかのゼミ生にも、質問事項を事前に考えてきてもらい、学生が主体的に発言できる場になるよう努めている。			
外国語科目(「中国語」)の授業方法		2020年4月1日～		外国語科目(「中国語」)については、適宜小テストを行い、学習へのモチベーション維持を図っている。また、1か月半～2か月が過ぎたところで、復習の週を設けた上で、振り返りの中テストを行った。その後、それぞれの学生の理解度に応じて、学習の方法について、きめ細やかに指導するようにしている。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
『中国漫画のモダニズム——葉浅予と王先生の物語』	単著	2023年3月	関西学院大学出版会	城山 拓也	pp.1-384		
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
「把我們的血肉，築成我們新的長城！」	単著	2022年9月	中国文芸研究会会報(491)	城山 拓也	pp.7-9		
馬国亮『良友憶旧』	単著	2022年7月	中国20世紀自伝回想録解題集(『野草』増刊号)	城山 拓也	pp.130-131		
葉浅予『葉浅予自伝』	単著	2022年7月	中国20世紀自伝回想録解題集(『野草』増刊号)	城山 拓也	pp.120-121		
張恨水『写生涯回憶』	単著	2022年7月	中国20世紀自伝回想録解題集(『野草』増刊号)	城山 拓也	pp.36-37		
万籟鳴『我与孫悟空』	単著	2022年7月	中国20世紀自伝回想録解題集(『野草』増刊号)	城山 拓也	pp.60-61		
G. 学会における研究発表							

1940、50年代における葉浅予の中華民族認識	単独	2022年9月	建国初期中国を移動する身体メディア・プロパガンダ第2回ワークショップ(東京大学)	城山 拓也	
H. 翻訳(学術書や原典等)					
I. 特許					
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)					
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概 要	
科学研究費補助金 日本学術振興会 科学研究費助成事業 基盤研究(C)	2019年度～2022年度	共同(研究分担者)		戦火とモダン—日中戦争時期重慶の文化芸術における表現様式の研究	
科学研究費補助金 日本学術振興会 科学研究費助成事業 若手研究	2018年度～2021年度	個別(研究代表者)		中国近代美術における漫画の役割——1940年代の葉浅予を中心に	
科学研究費補助金 日本学術振興会 科学研究費助成事業 基盤研究(A)	2017年度～2021年度	共同(研究分担者)		建国初期中国を移動する身体芸術メディア・プロパガンダ—戦時期からの継承と展開	
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動					
2016年4月～		日本マンガ学会 会員			
2011年4月～		中国人文学会 会員			
2010年4月～		中国モダニズム研究会 会員			
2008年4月～		日本現代中国学会 会員			
2008年4月～		中国文芸研究会 夏合宿幹事			
2005年4月～		中国文芸研究会 会員			
2005年4月～		大阪市立大学中国学会 会員			
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動					
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等		
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動					

2022年度							
所属	教養学部 言語文化学科	職名	准教授	氏名	高橋 直彦	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要			
IV 学会等及び社会における主な活動							
2021年～			JACET 会員				
2021年～			日本言語学会 会員				
2021年～			日本英文学会 会員				
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
VI 学内における管理運営に関する諸活動							

2022年度							
所属	教養学部 言語文化学科	職名	准教授	氏名	原 貴子	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
対面授業における振り返り課題に関する学生の理解度の確認と意欲維持の工夫		2022年4月1日～2023年3月31日		日本文化論特論、日本文学史Ⅰ・Ⅱの講義で少し難しい内容を扱った時に振り返り課題を実施している。その答案をすべて採点して、翌週、優れた答案を書いた学生の氏名を発表している。そして、どこがどのように優れているのかを解説することで、皆と共有するようにしている。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		①小説を論理的に解説する力を養成する。 ②明治期～昭和期までの文学の流れを理解した上で、主要作品に関する知識を身に付けて応用できるようにする。					
今年度の進捗状況		目標①については、学部によって差はあるが、振り返り課題において、学生たちがテキストから証拠を具体的に挙げながら意見を構築できるようになってきたため、少しずつ達成されつつあると捉えている。 目標②については、日本文学史Ⅰ・Ⅱのテストの平均点が昨年度に比べて下がった。興味をもって参考文献などを聞きにくる積極的な学生も見られたが、理解した上で知識を覚えるという基本的な勉強を苦にする学生が比較的多く見られた。					
来年度の進捗目標		目標①については、学部によって達成度に違いが見られるため、引き続き、普段文学になじみのない学生たちにも伝わるように教育方法を工夫する。 目標②については、詳細に説明すべき点とそうではない点を改めてよく考えてめりはりをつけ、全体的な知識量を調節するようにする。					
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		これまで森鷗外の現代小説について対等という観点で分析してきたが、より幅広い視野で鷗外の現代小説が有する意義と価値を追究する。					
今年度の進捗状況		大正4年に発表された森鷗外の小説「余興」についての考察・調査結果をまとめて、『東北学院大学教養学部論集』に論文として発表した。					
来年度の進捗目標		引き続き森鷗外の現代小説、あるいは歴史小説の意義と価値を追究する。					
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要				
IV 学会等及び社会における主な活動							

2022年7月～2022年7月	鷗外、没後100年 いまを生きるヒント 平野啓一郎さんら記念シンポ(朝日新聞)取材協力		
2011年6月～	昭和文学会 会員		
2009年4月～	日本近代文学会 会員		
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	教養学部 言語文化学科	職名	准教授	氏名	房 賢嬉	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
オンデマンド授業における学生間のインタラクション		2021年4月1日～		オンデマンド式の授業では学生間のコミュニケーション機会が損なわれることになるため、少しでも互いの意見や考え方が共有できるように工夫した。具体的には、毎回授業で取り上げた問題に対する受講生からの意見やふり返りを紹介するという方法を取った。この方法は学生に好評で、「受講生の意見共有がしっかりとなされていてよい」との声が聞かれた。次のふり返りで仲間の意見に言及する学習者が増えてきたものの、「仲間の意見が参考になった」、「そのように考える人もいて驚いた」などの浅い感想が多く、さらに深めることはできなかった。その問題点を踏まえ、いくつか対立する意見をピックアップし、それに対する意見をふり返りに述べるように促し、それらを次回の授業で丁寧に取り上げて議論するというサイクルを作ったところ、より多様な意見が飛び交うようになり、オンデマンドという悪条件でも議論を深めることができた。上記の工夫によって、批判的思考や内省の過程を経た自他対立、理解のプロセスを作ることがある程度できたと考えられる。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
학습자의 사실적 응법 「と」「たら」 사용 실태 - 한국인 학습자의 I-JAS 스토리 과제를 중심으로 - (The Usage of Japanese Factual Conditional 'to' 'tara' in I-JAS : Focusing on Korean Learners' Story Telling and Writing Tasks)	共著	2022年12月	동국대학교 일본학연구소(The institute for Japanese Studies Academy of Cultural Studies DONGGUK UNIVERSITY), 일본학(日本学)(58)	房賢嬉・白以然	pp.241-261		
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
IV 学会等及び社会における主な活動			
2020年～		言語文化教育研究学会 会員	
2010年～		協働実践研究会 会員	
2004年～		日本語教育学会 会員	
2002年～		お茶の水女子大学日本言語文化学研究会 会員	
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	教養学部 言語文化学科	職名	准教授	氏名	フリック ウルリッヒ	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
教育環境の整理		2022年4月1日～2023年3月31日		遠隔授業の体制で入学した学生の対面授業への適応のために求められた工夫			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
Flick Ulrich(教養学部言語文化学科)歴史および異文化の間		単著	2023年3月	人間情報学研究, 28	フリック ウルリッヒ	pp.121-122	
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
History education as instrument of colonial rule - The case of Manchuria		単独	2022年11月	Kyushu University ISI Lecture Series(Fukuoka, Jpan)	Flick, Ulrich		
Die Utopie, ein Spiegel der Gegenwart? Yamaguchi Jūjis Aufsatz „30nen-go no Man-Mō“ von 1927		単独	2022年8月	18. Deutschsprachiger Japanologentag(Düsseldorf, Germany (online))	Flick, Ulrich		
Knowledge transfer as an aspect of Japanese colonial education - The case of 'Manchuria'		単独	2022年7月	Asian Studies Conference Japan(Tokyo, Japan (online))	Flick, Ulrich		
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要			
IV 学会等及び社会における主な活動							
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	教養学部 言語文化学科	職名	准教授	氏名	翠川 博之	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
学生の主体性を引き出す外国語教育(フランス語)		2022年4月～		受け身になりがちな外国語学習において、学習者の主体性を引き出し、意欲をもって課題に取り組むことができるよう種々の工夫を行っている。授業内で行う発音練習や会話練習に相互指導やディスカッションを組み合わせるなどアクティブラーニングを充実させるほか、事前・事後学修においても、クラウド型教育支援システム manaba course の諸機能を有効に活用している。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		① 学生の能動性と主体的取り組みの強化 ② 質問や相談に対するきめ細やかな対応 ③ 期末試験の結果に偏らない成績評価方法の工夫					
今年度の進捗状況		上記目標①については、アクティブラーニング導入形態の工夫によって昨年度より大きな成果を得ることができた。グループディスカッション後に「質問の時間」を設け、文法事項、表現方法、文化的背景等に関するいくつかの問いをクラスで共有した。ときには関連する資料や情報も添えてこれに答え、さらに対話を重ねることで、学生の興味と学習意欲を引き出すことができたように思う(目標達成率80%)。②について、manaba course「個別指導」の利用に加え、上記①の工夫に合わせて授業時の巡回時間を増やすよう努めた(目標達成率95%)。③について、初級クラスでは数回の小テスト(動詞活用テスト、復習テスト)を実施して評価に反映させた。講義を含む中級以上のクラスでは事前・事後学修の質と量を評価するため、「ノート」を評価対象に含めた(目標達成率90%)。					
来年度の進捗目標		上記目標①について、学生の学習意欲の向上を学習成果の向上に結びつけるため、自主学習への支援をより充実させることが目標である。manaba courseの「ドリル」機能が有効に活用できないか試みたい。②については良い成果がでているので、引き続き現在の手法を維持したい。③については期末試験の評価に課題が残った。特に年末年始の休み明けに行った後期試験では得点が期待したよりも低く、GP平均目標値(3.0)をかなり下回ってしまった。試験対策課題を作成することは従来通り行いつつ、課題をだすタイミングやその分量にさらなる工夫を加えたい。					
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
サルトル初期戯曲の研究Ⅱ『蠅』における自由		単著	2022年7月	東北学院大学教養学部論集(190)		翠川博之	pp.23-46
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
シンポジウム「ミシュレと語り」歴史を語る手法		単独	2022年11月	日本フランス語フランス文学会 2022年度北海道・東北支部大会(秋田)		翠川博之	
H. 翻訳(学術書や原典等)							
『J. ミシュレ『万物の宴ーすべての生命体はひとつ』』		共訳	2023年2月	藤原書店		大野一道, 翠川博之	pp.1-320

I. 特許			
現在の課題・目標	① J.=P.サルトルの演劇理論と演劇作品に関する研究 ② J.ミシュレの歴史学および思想に関する研究		
今年度の進捗状況	① サルトルの戯曲研究を進め、論文「サルトル初期戯曲の研究Ⅱ『蠅』における自由」を発表した。 ② ミシュレ『万物の宴』の訳書を刊行した。また、「ミシュレと語り」と題するシンポジウムを学会で主催し、「歴史を語る手法」と題する研究発表を行った。		
来年度の進捗目標	① サルトルの戯曲研究をさらに進め、「サルトル初期戯曲の研究Ⅲ」として習作を含む初期戯曲の全体的特徴を考察し、論文にまとめる。また、サルトル哲学に見られる「他者」概念が初期から前期の戯曲においてどのように展開されているかを考察し、論文の構想をかためたい。 ② 歴史と文学が融合するミシュレの「語り」に関する文体研究をさらに進める。また、社会倫理の観点からミシュレにおける「宴」と従来の「歓待」概念の比較考察を進め、論文執筆の準備を進める。		
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動			
1999年4月～		日本サルトル学会 会員	
1997年4月～		日本フランス語フランス文学会 会員	
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動			
学術研究会評議委員 教員業務・活動報告書編集委員			

2022年度							
所属	教養学部 言語文化学科	職名	准教授	氏名	文 景楠	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概 要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		新しく所属する「教養教育センター」で行う授業の準備を進めるとともに、言語文化学科での哲学教育を充実させる。					
今年度の進捗状況		言語文化学科での3年生向け原典講読などを通して、哲学に関心をもつ学生を育てている。					
来年度の進捗目標		教養教育センターが担当する「記号論理学」の内容を整備する作業を進める。					
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
アイティアーのもつれ	単著	2022年4月	日本哲学会, 哲学, 73	文 景楠	pp.363-374		
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
Λ前半部の展開	単著	2023年3月	ギリシャ哲学セミナー論集, 19	文 景楠	pp.1-14		
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
訳者解説	共著	2022年8月	古代哲学入門:分析的アプローチから	松浦 和也; 文 景楠	pp.365-380		
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
「海外論文紹介」(Comay del Junco; Byrne; Julian を担当)	単著	2022年6月	古代哲学研究:Methodos, 54	文 景楠	pp.84-85		
G. 学会における研究発表							
Λ前半部の展開	単独	2022年9月	ギリシャ哲学セミナー第25回共同研究セミナー(桜美林大学)	文 景楠			
H. 翻訳(学術書や原典等)							
『古代哲学入門:分析的アプローチから』	共訳	2022年8月	勁草書房	文 景楠; 松浦和也; 宮崎文典; 三浦太一; 川本愛	pp.179-254		
I. 特許							
現在の課題・目標		1. アリストテレス研究の一環として『形而上学』Λ巻に関する論文をまとめること。 2. アリストテレスの伝記研究を翻訳出版すること。 3. 博士論文をいくつかの単著論文にすること。					
今年度の進捗状況		1. 国内の学会誌に原稿を提出し、受理された。 2. 2名の共訳者とともに作業を進めている。 3. 停滞している。					
来年度の進捗目標		1. 出版をもってこの課題は終了とする。 2. 2024年中の出版を目指している。 3. 2023年度中に1本の翻訳を終えることを目指したい。					

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動			
2017年9月～		ギリシャ哲学セミナー 会員	
2017年6月～		古代哲学会 会員	
2017年5月～		東北哲学会 会員	
2012年12月～		日本哲学会 会員	
2010年10月～		日本西洋古典学会 会員	
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動			
入試関連など			

2022年度							
所属	教養学部 言語文化学科	職名	准教授	氏名	李 承赫	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
英語教育に関する重要課題と目標		2020年4月～		2020年に赴任してから、東北学院大学の教養学部で英語教育を行った。その結果、学生たちが彼らの実際の実力とは別に、自分の英語能力に自信を持っていない場合が多いということが明確になった。学年度の授業が終わった後、目に見える形で自分の英語力が伸びたということはどうすれば気づかせることができるか。これが教員としての主な課題であった。そのため、有名な英語の本、あるいは有名な英語のスピーチを一冊丸ごと完全に読み切り、「推理能力」に基づいた英語読解力で学生が自ら内容を理解できるように指導した。それによって、学年度が終わった時点で、自分の力で英語の本を全部読み切ったという、目に見える形の達成感が学生の自信につながった。			
③ 多文化共生・グローバル化に関心を寄せる英語教育		2020年4月～		国際的・社会的な問題を扱った英文を様々な視点から比較して読むことにより、多様な文化的背景を持つ世界中の人々の文化を理解することが重要であるということを認識させるのを目標とした、グローバルイゼーションに相応しい英語力の養成を目指した。			
② オフィスアワーを使った、英会話講座の実施		2020年4月～		コロナ禍のZoomオフィスアワーの時に、希望する学生を対象に教員と英会話ができる時間を設けた。授業で習った用語と表現を使って自分の意見を簡単な英語で述べるように指導した。			
① 「推理能力」を養う、総合的な英語読解力		2020年4月～		すぐ辞書を引くわけではなく、慣れない単語や表現が出て、まずはわかる範囲で内容の「大きな図」を把握し、そこから細かい内容の理解まで自力でたどり着けるよう、英語読解における「推理能力」の向上を指導した。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
宮城県 東北学院高等学校 出張講義		2022年6月9日		『コロナ後のグローバル世界と英語』というタイトルで、高校生に「国際人のツール」としての英語の重要性について講演を行った。			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							

来年度の進捗目標			
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動			
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	教養学部 言語文化学科	職名	講師	氏名	佐藤 真紀	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
外国につながる子どもの学習支援の実施(LAMP)		2018年9月～		近年増加・多様化している「外国につながる子ども」の学習支援を行う団体(仙台LAMP)を立ち上げ、学生達を組織し、毎週1回90分～120分の学習支援を継続して実践している。2020年度以降は新型コロナウイルス感染症の影響を受け、zoomを用いた遠隔支援を行っている。学生達が多文化共生において自分自身に出来ることを模索する場を提供できている。			
EPA介護福祉候補生への日本語学習支援の実施(みんび)		2018年6月～		名取市の介護施設に勤務するEPA介護福祉候補生への日本語学習支援を行うグループ(みんび)を組織した。言語文化学科佐藤ゼミで日本語教育学を学ぶ学生達と、地域構想学科菅原ゼミで福祉学を学ぶ学生達が協働し、インドネシアのEPA介護福祉候補生10名程度を対象に、毎週1～3回の学習支援を継続して行っている。学生達には多文化共生社会で自身に出来ることを自問自答し、模索する機会を提供できている。			
仙台市内を中心とした地域日本語教育の実施(HANDS)		2015年4月～		地域の外国人に日本語を教えるボランティアサークル“HANDS”の顧問として企画・運営に関わっている。毎週火曜と金曜の19:00-21:00に継続的な活動を実施している。対面活動が可能であった頃は土樋キャンパスにて活動を実施していたが、2020年度～2021年度は新型コロナウイルス感染症の影響を受け、zoomによる遠隔活動を継続して行っている。当該団体に登録し活動をしている日本人学生は50名ほど、地域の外国人参加者も述べ40名ほどである。日本語を共に学び、交流する活動を実践することで、参加者双方に多文化共生について考える機会を提供できている。			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動			
2020年10月～		仙台市「『日本語教育の体制整備』総合調整会議」への参加	
2018年6月～		EPA介護福祉士の日本語学習支援「みんび」運営参加・支援	
2016年7月～		日本語教育学会 審査・運営協力員	
2016年2月～		協働実践研究会 会員	
2015年4月～		地域日本語学習支援サークル「HANDS」助言・指導, 企画, 運営参加・支援	
2004年3月～		特定非営利活動法人「子どもLAMP」企画, 運営参加・支援	
1999年12月～		日本語教育学会 会員	
1999年4月～		日本言語文化学研究会 会員	
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	教養学部 言語文化学科	職名	講師	氏名	宮本 直規	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
・学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進		2020年4月1日～		毎回の授業の冒頭で、前回の復習とその回の概略を必ず説明し、授業終了時にはその回のまとめを行っている。			
・学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進		2020年4月1日～		毎回の授業の冒頭で、前回の復習とその回の概略を必ず説明し、授業終了時にはその回のまとめを行っている。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要			
IV 学会等及び社会における主な活動							
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
VI 学内における管理運営に関する諸活動							

2022年度								
所属	教養学部 言語文化学科	職名	講師	氏名	門間 俊明	大学院の授業担当の有無	無	
I 教育活動								
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要				
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)								
学生の理解度を知るための工夫		2022年4月～2023年3月		講義の内容をどの程度学生が理解したかを知るために、講義の後に毎回ミニレポートを書かせている。				
ドイツ語検定受験指導		2022年4月～2023年3月		希望する学生に、ドイツ語検定の受験指導を行っている。				
ドイツ語の理解、定着のための工夫		2022年4月～2023年3月		ドイツ語の理解、定着のために、小テストや練習問題を課している。				
2. 作成した教科書、教材、参考書								
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等								
4. その他教育活動上特記すべき事項								
体育会「ソフトテニス部」の部長としての活動		2022年4月～2023年3月		体育会ソフトテニス部部長として、部員の部活動、学生生活一般について指導している。				
現在の課題・目標		1.ドイツ語の授業において、プリントの配布や小テストの反復によって、語彙の定着や文法事項の理解の深化をはかる。 英訳: 2.ドイツ語検定向けの指導を強化することによって、4級,3級の合格率のアップを目指す。 3.授業時間以外に時間を設け、学生の質問にきめ細かに答えていきたい。						
今年度の進捗状況		1.上記1について、ある程度実践できたと考えてはいるが、引き続き努力していきたい。2.上記2について、本年度は独検受験者の数が少なく、十分な実績があげられなかった。3.ある程度まで実践できたと考えている。						
来年度の進捗目標		来年度も、上記1.2.3を目標として教育活動を行っていききたいと考えている。						
II 研究活動								
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)		発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書								
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)								
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)								
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文								
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)								
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)								
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)								
G. 学会における研究発表								
H. 翻訳(学術書や原典等)								
I. 特許								
現在の課題・目標		1.ヴィルヘルム・ラーベの後期の作品いずれかについて、作品論を書き上げる。2.ヴィルヘルム・ラーベの『薬局ヴィルデマン』について、翻訳を進捗させる。						
今年度の進捗状況		1.上記1について、資料の収集、読み込みに進捗はあったが、論文作成にはいたらなかった。2.上記2について、下訳は終了したが、すべてを公表するには至っていない。						
来年度の進捗目標		1.上記1について、今年度はぜひとも論文を書き上げたい。2.上記2について、今年度はぜひとも翻訳を完成させ、発表したい。						
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)								
競争的資金の名称		採用年度(西暦)		個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要		
IV 学会等及び社会における主な活動								

1988年4月～	東北ドイツ文学会 会員		
1983年4月～	日本ドイツ文学会 会員		
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	教養学部 情報科学科	職名	教授	氏名	石田 弘隆	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
「代数学II」における添削指導		2022年8月～2023年1月		各回に課したレポートについて、履修者全員に対して提出された解答を添削、フィードバック、再提出を繰り返し、理解および正しく記述できるようになるまで行った。			
「代数学I」における添削指導		2022年4月～2022年8月		各回に課したレポートについて、履修者全員に対して提出された解答を添削、フィードバック、再提出を繰り返し、理解および正しく記述できるようになるまで行った。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
「情報科学基礎演習B」における「数学ソフトウェア入門」の講義資料および事後学習課題の作成		2022年9月～2023年1月		情報科学基礎演習Bにおける数学ソフトウェア入門の講義資料および事後学習課題(全5回)を作成し、manabaコースにコンテンツを作成した。			
「代数学II」におけるmanaba小テストおよびドリル機能を用いた事後学修教材の作成		2022年9月～2023年1月		manaba小テストおよびドリル機能を用いて練習ドリルと確認テストを作成して、「代数学II」における毎回の講義の事後学修の教材とした。			
「線形代数学I」におけるまとめ問題集の作成		2022年9月～2023年1月		線形代数学Iの講義内容に関わる問題演習として、まとめ問題とその解説をmanabaのコースコンテンツに準備した。			
「線形代数学I」におけるmanaba小テストおよびドリル機能を用いた事後学修教材の作成		2022年9月～2023年1月		manaba小テストおよびドリル機能を用いて練習ドリルと確認テストを作成して、「線形代数学I」における毎回の講義の事後学修の教材とした。			
「集合と論理」におけるmanaba小テストおよびドリル機能を用いた事後学修の教材		2022年4月～2022年8月		manaba小テストおよびドリル機能を用いて全13回の練習ドリルと確認テストおよび再テストを作成して、「集合と論理」における毎回の講義の復習教材とした。			
「代数学I」におけるテキストの作成		2022年4月～2022年8月		代数学Iの講義内容に関するテキストを作成し、manabaのコースコンテンツに準備した。			
「線形代数学II」におけるmanaba小テストおよびドリル機能を用いた事後学修教材の作成		2022年4月～2022年8月		manaba小テストおよびドリル機能を用いて練習ドリルと確認テストを作成して、「線形代数学II」における毎回の講義の事後学修の教材とした。			
「代数学II」におけるmanaba小テストおよびドリル機能を用いた事後学修教材の作成		2022年4月～2022年8月		manaba小テストおよびドリル機能を用いて練習ドリルと確認テストを作成して、「代数学II」における毎回の講義の事後学修の教材とした。			
「線形代数学II」におけるまとめ問題集の作成		2022年4月～2022年8月		線形代数学IIの講義内容に関わる問題演習として、まとめ問題とその解説をmanabaのコースコンテンツに準備した。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							

G. 学会における研究発表			
H. 翻訳(学術書や原典等)			
I. 特許			
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
科学研究費補助金 科学研究費補助金基盤研究(C)	2017年度～2021年度	個別	分岐被覆、微分方程式およびモジュライ空間を通じた代数曲線束のジオグラフィーの研究
IV 学会等及び社会における主な活動			
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	教養学部 情報科学科	職名	教授	氏名	伊藤 則之	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
対面授業において、欠席者へのオンデマンド指導の対応を実施		2022年4月1日～		対面授業の「情報化社会の基礎」において、欠席者については要望がある場合は、manabaの個別コレクション経由でオンデマンド教材を提供して指導の対応を実施			
対面とZoomを併用したハイブリッド授業および総合研究指導		2022年4月1日～		「情報システム運用法A」では対面とZoomを併用したハイブリッド授業を実施し、総合研究指導では指導効率を考慮して、適宜、対面とZoomを併用したかたちとした。			
履修者へのBYODパソコンの調査結果をフィードバック		2021年4月1日～		「情報システム運用法A」において、履修者へのBYODパソコンの仕様を詳しくアンケートして、アンケート調査結果を履修者にフィードバックして、自分が持っているBYODパソコン仕様の全体のなかでに位置づけを確認できるようにした。			
Zoomを利用したオンタイム授業および総合研究指導		2020年4月1日～					
授業支援システムmanabaを利用した遠隔授業の実施		2020年4月1日～		授業の連絡、授業資料の配布、小テストやレポートの提出・回収を実施した。			
新聞や雑誌の記事を用いて学生の興味を喚起		2015年4月～		「情報化社会の基礎」において、情報セキュリティなどで実際に発生している問題の事例などを最近の新聞や雑誌から引用して、学生の興味を喚起した。			
ゼミ形式演習におけるデザインパターンベースのプログラミング手法の適用		2015年4月～		スマートフォン用アプリの開発教育に、デザインパターンやアジャイルという手法を適用した。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
「情報科学演習」の教材アップデート		2022年4月1日～					
「情報リテラシー」の教材アップデート		2022年4月1日～					
「プログラミング上級」の教材アップデート		2022年4月1日～					
「情報システム運用法A」の教材アップデート		2022年4月1日～					
「情報システム運用法A」、「現代社会の諸問題」、「情報科学演習」の遠隔授業用講義資料		2020年4月1日～		遠隔授業となり、科目によりオンタイム形式またはオンデマンド形式のいずれかになるため、それぞれの形式に合わせて学生が受講しやすいかたちの講義資料を作成した。			
「情報化社会の基礎」の遠隔授業用講義資料		2020年4月1日～		TGベーシック科目のために複数教員が同じ科目を担当するため、共通教材となる動画教材、前回授業のまとめ資料と確認テストを作成して、担当する先生方に配布した。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
東北学院榴ヶ岡高等学校「TGタイム」出張講義		2023年2月17日～2023年2月17日					
出張模擬講義(宮城県工業高等学校)		2022年8月3日～2022年8月3日					
高校訪問(仙台市・多賀城市・石巻市の高校)		2022年7月27日～2022年7月27日					
東北学院高等学校「プレカレッジ」出張講義		2022年6月30日～2022年6月30日					
現在の課題・目標		<ul style="list-style-type: none"> 対面授業再開により、対面授業での学生の興味を喚起することによる効果的授業の実施 ゼミ形式演習での実践的なデザインパターンを含むプログラミング教育 					
今年度の進捗状況		<ul style="list-style-type: none"> 対面授業では最新の新聞や雑誌の記事の引用などいくつかの新たな取り組みを実施 対面授業ではmanabaを使った複数回の短いレポート提出などアクティブラーニングの導入 ゼミ形式演習では予定通りの教育を実施。より理解度を高めるのが課題 					

来年度の進捗目標	・従来の大教室授業がオンデマンド化するため、授業資料などにおいて新たな手法の実適用 ・ゼミ形式演習では予習・復習の教材を作成して、さらに理解度を高める施策を実施				
II 研究活動					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月 (西暦)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)					
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)					
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)					
G. 学会における研究発表					
H. 翻訳(学術書や原典等)					
I. 特許					
現在の課題・目標	2023年12月までにこの1年間の研究成果を論文化				
今年度の進捗状況	2023年3月時点で論文化するための実験環境を整えている状況				
来年度の進捗目標	・新たに実施した取り組みの論文化 ・「情報リテラシー」や「AI社会の基礎」など新たな科目でのスムーズな授業運営 ・ゼミ学生4年生の研究テーマの論文化とその発表指導				
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)					
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要		
IV 学会等及び社会における主な活動					
2009年4月～	電子情報通信学会会員 会員				
1988年4月～	情報処理学会会員 会員				
V 芸術分野や体育実技等における主な活動					
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等		
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
VI 学内における管理運営に関する諸活動					
情報学部設置準備委員長 情報学部開設準備委員長					

2022年度							
所属	教養学部 情報科学科	職名	教授	氏名	坂本 泰伸	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
情報科教育法		2022年4月1日～2023年3月31日		教科教育用の教材開発の学習過程において、Mentimeterによるアンケートや、COGGLEなどの共有マインドマップなどを用いて、教員並びに学習者間で講義に対する意識を共有すると共に、このような様々なICTツールが高等学校教科情報科の教材として使えること授業で教授している。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
群ロボットシミュレーションに向けたフレームワークの提案-スケジューラーの設計-		共著	2023年1月	2022年度情報処理学会東北支部研究会抄録, 資料番号1-4		佐々木夏輝, 坂本 泰伸, 菅原 研, 高橋 秀幸	pp.1-6
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
中小企業におけるDX化がもたらす効果(下)『ESPO No.611』		単著	2023年3月	宮城県中小企業団体中央会, 611		坂本泰伸	pp.12-13
中小企業におけるDX化がもたらす効果『ESPO Vol.606』		単著	2022年5月	宮城県中小企業団体中央会, 606		坂本泰伸	pp.14-15
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要		

科学研究費補助金 基盤研究(C)	2022年度～2024年度	共同(研究代表者)	我が国の中山間地域では、地域資源や観光コンテンツが乏しく産業の興隆が著しく困難で地域産業のDX化が望むべくもない地域も多い。また、自然災害の発生時に集落が孤立して住民生活が成立しなくなるなどの課題も有する。本研究では、中山間地域の自立型DX化の必要性に着目し、被災後の速やかな復興・復旧(レジリエンス)力の構築を目指し、平時から外部人材との交流を進め当該地域の認知度を向上させる取組を進める。自立型DX化の取組は、活動の成否が地域住民のITリテラシー能力と相関関係にあるので、住民の情報活用能力の測定方法、情報活用能力の醸成方法、外部人材との交流事業による接点増加に関する効果などを明らかにする。
IV 学会等及び社会における主な活動			
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	教養学部 情報科学科	職名	教授	氏名	菅原 研	大学院の授業 担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
「考えて書く」の導入と「飽き」の防止		2020年9月11日～		講義中に適宜問題を課し、考えて書くことを促進した。また、学生が集中できる時間を考慮し、講義に関連するショートブレイク動画を使うことで飽きの防止を図った。			
学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進		2020年9月11日～		毎回の授業の冒頭で、前回の復習と小問の解答、質問・コメント欄に書かれたものへの回答を示し、当日の講義にスムーズに入れるようにした。さらに、授業終了時に振り返りの時間を設け、学習した内容をresponの自由記述でまとめる作業を義務付けた。			
教師役の導入による学習深化		2020年5月7日～		教師役を積極的に割り振ることで学習の深化を図った。			
予習課題による学習効率の向上化		2020年5月7日～		次回の学習に必要な事前学習を可能とするワークシートを配布した。講義・演習ののち、その内容に応じた簡単な確認テストを実施した。			
振り返り小テスト、共同学習による理解の促進		2020年5月7日～		ほぼ毎回、小問を解く形で学習の振り返りを行った。また、学習内容に応じてグループによる学習を実施した。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
科学的思考の基礎		2020年9月11日～		市販されている書籍に教科書として適するものがないこと、受講者の理解度に応じて柔軟な対応が必要であることから独自の細かい教材を作成した			
複雑系の科学		2020年5月7日～		教科書だけでは不十分な内容について補足するための、なるべく直感的に分かるように工夫した教材を作成した。			
プログラミング上級		2020年5月7日～		教科書だけでは不十分な内容について補足するための教材(主にアルゴリズムに関するもの)を作成した。			
メディア表現の技法A		2020年5月7日～		教科書だけでは不十分な内容について補足するための教材(主にマルチメディアに関わる技術的な面を説明するもの)を作成した。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
宮城県視覚支援学校におけるプログラミング授業の実施		2020年～		宮城県視覚支援学校に赴き、視覚障害をもつ小学生(特に2,4年生)を対象としたプログラミングの模擬授業を行った(9/16, 11/5, 2021/1/27)。			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							

視覚支援学校小学部におけるプログラミング教育にカッティングマシンを活用するシステムの開発	共同	2023年3月	INTERACTION 2023 第27回 一般社団法人情報処理学会シンポジウム(学術総合センター内 一橋記念講堂(東京都千代田区))	◎松本章代, 松木李玖, 菅原研
視覚支援学校における低学年児童向けプログラミング授業教材	共同	2023年1月	2022年度 情報処理学会東北支部研究会(東北学院大学(仙台市))	◎羽柴歩夢, 加藤真琴, 高橋凌人, 松本章代, 菅原研
タートルグラフィックスを二次元図形の実体として出力するシステムの開発	共同	2023年1月	2022年度 情報処理学会東北支部研究会(東北学院大学(仙台市))	◎松木李玖, 菅原研, 松本章代
視覚支援学校におけるプログラミング教育に3Dプリンタを活用するシステムの開発	共同	2022年9月	第21回情報科学技術フォーラム(FIT2022)(オンライン)	◎松本章代, 菅原研
視覚障害児のプログラミング授業に3Dプリンタを用いる提案	共同	2022年8月	第47回 教育システム情報学会全国大会(オンライン)	◎松本章代, 菅原研

H. 翻訳(学術書や原典等)

I. 特許

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
科学研究費補助金 科学研究費補助金基盤C	2020年度～	共同(研究分担者)	
科学研究費補助金 科学研究費補助金基盤C	2020年度～	個別(研究代表者)	

IV 学会等及び社会における主な活動

V 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

VI 学内における管理運営に関する諸活動

2022年度							
所属	教養学部 情報科学科	職名	教授	氏名	杉浦 茂樹	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
予習の促進と重要項目に対する知識定着の向上を目的とした小テストの実施		2020年4月1日～		学科専門科目に対しては、予習の促進、および、重要項目に対する知識定着の向上を目的として、毎回の授業の冒頭に小テストを実施し、解答用紙の回収後、解答と解説を行っている。			
学習前の知識状況の把握のための小テストの実施		2020年4月1日～		学科コア科目に対しては、初学者が多いために学習すべき事項が多くなる傾向があるため、学習すべき事項を学習者自身に絞り込ませることを目的として、毎回の授業の冒頭に小テストを実施し、正解を発表し自己採点を行わせている。			
授業資料のインターネットへの公開		2020年4月1日～		効果的に予習・復習に活用できるよう配慮した授業資料をインターネット上で公開している。また、授業を欠席した学生は自主的な授業内容の補完にも使用できる。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
「情報システム基礎論B」「コンピュータシステム論A」「アルゴリズムとデータ構造」「ネットワーク基礎論」講義資料		2020年4月1日～		遠隔授業に対応するため、従来の講義資料での受講方法の明確化と解説の改善を行い、さらに、小テストのオンライン化も行った。			
「情報化社会の基礎」講義資料		2020年4月1日～		TGベーシック科目である本授業をオンデマンド方式に対応させるため、他の担当教員と協力して解説動画を作成した。さらに、知識定着の向上を目的として、前回授業のふり返りのための資料の追加を行い、ふり返りの理解度の確認のためのオンライン小テストの作成を行った。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
公開講座 大人の教養倶楽部(教養学の30年)の講師を務めた		2022年11月5日					
現在の課題・目標		<ul style="list-style-type: none"> ①総合研究でのLMS(Learning Management System)の活用を進める。 ②『ネットワーク基礎論』の講義資料で内容が古くなっている部分の修正を進める。 ③『情報システム基礎論B』の講義資料の問題点の洗い出しと、それにもとづく修正を行う。 ④大学院『プログラム言語論』の講義資料の問題点の洗い出しと、それにもとづく修正を行う。 					
今年度の進捗状況		<ul style="list-style-type: none"> ①研究室独自の研究情報共有システムLISSの活用を進めることができた。しかし、それ以外の活用は進めることができなかった。 ②80%の項目で最新情報への対応が行えた。 ③受講生の理解が困難な項目を調査した。修正は来年度への持ち越しとなった。 ④口頭説明と演習の比率の適正化を行った。 					
来年度の進捗目標		<ul style="list-style-type: none"> ①総合研究でのLMS(Learning Management System)の活用を進捗管理などに広げる。 ②は他の科目への研究課題の再設定を行う。 ③『アルゴリズムとデータ構造』の講義資料の問題点の洗い出しと、それにもとづく修正を行う。 ④学科再編にともない科目名が『コンピュータ科学』となる『情報システム基礎論B』の講義資料を受講生の理解度が高くなるように修正を行う。 ④大学院『プログラム言語論』の講義資料の問題点の洗い出しと、それにもとづく修正を行う。 					
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							

F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)			
G. 学会における研究発表			
H. 翻訳(学術書や原典等)			
I. 特許			
現在の課題・目標	①最悪でも当日中のデータに復旧できるように実際にシステムを構築する。 ②大学の教育・研究に有効活用できるネットワーク構成の概要設計を進める。		
今年度の進捗状況	①キャンパス移転と学部改組を見越した研究室サーバのクラウド化のため、本研究課題の遂行は来年度への持ち越しとなった。 ②本研究課題の遂行は来年度への持ち越しとなった。		
来年度の進捗目標	①最悪でも当日中のデータに復旧できるように実際にシステムを構築する。 ②大学の教育・研究に有効活用できるネットワーク構成の概要設計を進める。		
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
IV 学会等及び社会における主な活動			
2019年～	公益財団法人私立大学情報教育協会理事 委員		
2001年～	電子情報通信学会会員 会員		
1992年～	情報処理学会会員 会員		
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	教養学部 情報科学科	職名	教授	氏名	武田 敦志	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
自律走行するLEGOロボットを使ったソフトウェア開発教育		2020年4月1日～		LEGO社から販売されているLEGO Mindstormsを使ってソフトウェア開発手法に関する教育を行っている。この自律走行ロボットを題材としたソフトウェア開発教育では、現実に役に立つソフトウェアの設計や確実に動作するソフトウェアの開発に関する演習を効果的に行うことができた。			
PowerPointを使った講義資料の配布とWebによる予習・復習のための情報発信		2020年4月1日～		PowerPointを用いて画像やアニメーションを取り入れた資料を作成し、この資料を使って講義を進めることにより、黒板のみを使った講義よりも高い教育効果が得られた。また、講義資料のデータをWebで公開しており、予習・復習を容易に行うことができるようになった。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
プログラミング演習環境の整備		2020年4月1日～		情報科学科の学生を対象としたプログラミング演習環境をプライベートクラウド上に整備した。プログラムの作成から実行までをクラウドサーバで行うため、開発用のソフトウェアをノートPCなどの操作デバイスにインストールする必要がなく、インターネットに接続している様々な端末からプログラミングの課題に取り組めるようになっている。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Detection and Analysis of Intrusion Attacks Using Deep Neural Networks		単著	2022年8月	Lecture Notes in Networks and Systems, 526	Atsushi Takeda	pp.258-266	
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要			

科学研究費補助金 科学研究費補助金 基盤研究(C)	2019年度～2022年度	個別	グリッドニューラルネットワークと転移学習技術を活用することにより、訓練データが小規模であっても高い画像分類性能を有する多層ニューラルネットワークを実現する。
IV 学会等及び社会における主な活動			
2019年4月～	情報処理学会MBL研究会 運営委員 会員		
2018年4月～	ETロボコン東北地区大会 技術委員 委員		
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	教養学部 情報科学科	職名	教授	氏名	牧野 梯也	大学院の授業 担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
「感覚知覚情報論B」の改善		2020年9月～		<ul style="list-style-type: none"> ・manaba, responを用いて、双方向型の授業を可能にした。具体的には、1) 毎回の間をresponで提示し、受講生の解答をリアルタイムで示しながらコメントする、2) 各回の振り返りを翌週まで行い、良いコメントなどを次回の授業で紹介する、ということを実施した。 ・中間テスト、最終テストを廃止し、中間レポート課題、最終レポート課題を実施。さらに、提出課題を受講生自身で評価するようにした。具体的には、レポート課題提出の次の授業で1) 受講生にすべてのレポート課題を見てもらい、各自良いレポートに3つの異なる賞を与える、2) 受講生に4～5名の小グループを作るように促し、それぞれの賞を持ち寄って、グループ賞を3つ決める、この過程では、それぞれの賞に決めた根拠をグループ内で共有するよう議論を促す、3) グループ代表者に3賞とそれを選んだ根拠を発表してもらい、ことを実施した。 また、上記の内容をZoom遠隔オンラインにより実施し、例年の対面授業と同程度の教育効果を上げることができた。 			
4年次総合研究の改善		2020年4月～		<ul style="list-style-type: none"> ・ゼミ生全員での週2回の進捗状況報告会ミーティングをするとともに、議論する機会を増やした。 ・研究テーマの意味を学生自身で掘り下げさせるため、過度の説明はやめ、重要ポイントに関わる問いかけを繰り返し行うようにした。 上記のことを、Zoom遠隔オンラインにより試行錯誤的に実施し、例年の対面と同程度の教育効果を上げることができた。 			
3年次演習の改善		2020年4月～		<ul style="list-style-type: none"> ・読書量の少なさ、議論する機会の少なさを補うため、読解と議論の方法を体験的に学ぶために山田ズーニー著「あなたの話はなぜ「通じない」のか」の輪講を前期冒頭に追加し、読み・書き・議論の演習を交えながら実施した。 ・資格の錯視に関する心理物理実験パートを組み込み、コンピューターシミュレーションのみでなく、より体感できる学びの実践を行った。 また、Zoom遠隔オンラインによる授業を試行錯誤的に実施し、例年の対面と同程度の教育効果を上げることができた。 			
情報科学科1年次授業「情報科学基礎教育」の遂行、講義内容の改善		2020年4月～		<p>2015年度より開始した情報科学科1年生にとっての「大学における勉学」への導入科目としての性格を持つ「情報科学基礎教育」(担当: 石田, 岩田, 菅原, 武田, , 松本)の講義内容の標準化を行った。すなわち、講義は3パートオムニバスのため、受講生への教授内容に不一致がないように、また各パート間の連携が取れるように、綿密に事前打ち合わせを行った。さらに、授業終了後、来年度に向けての改善点の洗い出しを行った。</p> <p>Zoom利用によるオンライン遠隔授業を効果的に行うための工夫を試行錯誤的にを行い、例年の対面授業と同等の教育効果を上げることができた。</p>			
TGベーシック「科学的思考の基礎」: 学生とのインタラクション		2020年4月～		<ul style="list-style-type: none"> ・manaba, responを用いて、双方向型の授業を可能にした。具体的には、1) 毎回の間をresponで提示し、受講生の解答をリアルタイムで示しながらコメントする、2) 各回の振り返りを翌週まで行い、良いコメントなどを次回の授業で紹介する、ということを実施した。 オンデマンド授業教材を作成した。また、オンデマンドによる双方向型授業を可能にするため、manaba, responの活用をはかった。 			
「生命の科学」: 学生とのインタラクション		2020年4月～		<ul style="list-style-type: none"> ・manaba, responを用いて、双方向型の授業を可能にした。具体的には、1) 毎回の間をresponで提示し、受講生の解答をリアルタイムで示しながらコメントする、2) 各回の振り返りを翌週まで行い、良いコメントなどを次回の授業で紹介する、ということを実施した。 オンデマンド教材を作成した。また、オンデマンドによる双方向型の授業を可能にするため、manaba, responの活用をはかった。 			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
「科学的思考の基礎」の教科書化		2020年4月～		<p>TGB「科学的思考の基礎」で利用可能な、文理を問わない大学1年生向けの教科書を、情報科学科菅原, 土原, 村上とともに執筆し、脱稿した。現在出版社で初稿ゲラを作成中。2021年9月出版予定。</p>			

3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等						
4. その他教育活動上特記すべき事項						
現在の課題・目標		講義「生命の科学」に関わる教科書の執筆・出版				
今年度の進捗状況		講義「生命の科学」に関わる教科書、概要の決定				
来年度の進捗目標		講義「生命の科学」に関わる教科書、初稿執筆				
II 研究活動						
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月 (西暦)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書						
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)						
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)						
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文						
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)						
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)						
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)						
G. 学会における研究発表						
H. 翻訳(学術書や原典等)						
I. 特許						
現在の課題・目標		情報処理という視点から見た生物の生存様式の概観と進化論的關係性の解明				
今年度の進捗状況		概観部分の情報収集中				
来年度の進捗目標		「生命の科学」教科書の執筆とともに、情報収集を行う				
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)						
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要		
IV 学会等及び社会における主な活動						
2012年3月～			日本VR学会香りと生体情報研究委員会委員 会員			
V 芸術分野や体育実技等における主な活動						
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等		
現在の課題・目標						
今年度の進捗状況						
来年度の進捗目標						
VI 学内における管理運営に関する諸活動						
入試部長として、入学者選抜に関する企画・実施・広報等の活動						

2022年度							
所属	教養学部 情報科学科	職名	教授	氏名	松尾 行雄	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進		2021年4月1日～		毎回の授業の冒頭で、前回の復習とその回の概要を必ず説明している。加えて、授業途中に重要項目についてresponのアンケート機能を用いて、理解度チェックを行い、講評を含め、コメントしている。授業終了時に授業内容の振り返りを実施している。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要			
科学研究費補助金 科学研究費助成事業 基盤研究(A)		2019年度～2023年度	共同(研究分担者)				
IV 学会等及び社会における主な活動							
2014年5月～			生物音響学会理事 会員				
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							

VI 学内における管理運営に関する諸活動

2022年度							
所属	教養学部 情報科学科	職名	教授	氏名	松本 章代	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
外国語会話訓練システムの構築および運用		2022年		ドイツ語教員からの依頼を受け、外国語会話訓練システムを構築し、授業における運用をサポートした。			
演習授業における学生の意欲を向上させるための取組		2022年		演習の授業において学生の学習意欲向上を図るため、課題の題材を「学生の興味を惹き各自工夫の余地がある内容」にすることを常に心がけている。かつ、制作物をウェブ上にアップして公開するといった取り組みを行っている。			
プログラミング演習授業における作業手順動画の作成・提供		2022年		「コンピュータと論理A」においてプログラミングの作業手順を動画にして授業中に学生が各自閲覧できるようにし、自分のペースで作業が進められるようにした。			
プログラミング演習授業における講義動画のウェブ公開		2022年		演習授業の解説部分を録画し動画にして、講義スライドとともにウェブ上に公開している。			
プログラミング演習授業における掲示板の活用		2022年		オンタイム授業であったため演習に関する質問はZoomで受け付けた。寄せられた質問および回答はオンライン掲示板に掲載し学生間での情報共有を図った。			
プログラミング演習授業において学習者が能動的に学習に臨む仕組みおよび学習した内容が定着するような支援法の実践		2022年		学習者の予習・復習を含めた学習を支援する枠組みを作り、学習効果の実質的な向上を狙っている。			
プログラミングのレポート提出システムの構築および運用		2022年		学生が課題のレポートをウェブブラウザ上で相互評価できる仕組みを構築した。			
オンデマンド型授業におけるzoomとresponの活用		2022年		オンデマンド型授業をZoomでライブ配信し、オンタイムでもオンデマンドでも受講できるようにした。またresponを活用してコミュニケーションを取り飽きさせないよう工夫した。			
「読解・作文の技法」用ネット課題提出システムの構築・運用		2022年		担当教員からの依頼を受け、学生が作文を投稿し、相互評価できるウェブシステムを構築し、授業における運用をサポートした。			
「読解・作文の技法」用コメント・質問提出システムの構築・運用		2022年		担当教員からの依頼を受け、学生からのコメント・質問を受け付けるウェブシステムを構築し、授業における運用をサポートした。			
「コンピュータと論理A」用ウェブサイト作成		2022年		「コンピュータと論理A」のウェブサイトを作成し、公開している。講義資料の閲覧や課題の提出ができるだけでなく、課題のプログラムを提出すると入力ミスを指摘する機能がついている。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
「情報科学基礎教育」講義資料		2022年		講義用スライドを作成した。			
「情報科学基礎演習A」講義資料		2022年		問題解決技法入門の講義スライドを作成した。			
「情報科学演習」講義資料		2022年		演習の説明用スライド、演習に利用する素材を作成した。			
「プログラミング初級」講義資料		2022年		講義用スライドを作成した。			
「プログラミングの基礎」講義資料		2022年		講義用スライドを作成した。			
「コンピュータと論理A」講義資料		2022年		講義用スライドおよび動画を作成した。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
高校生を対象とした出張講義		2023年3月13日		「データサイエンスを学ぶと何ができるようになるか」というテーマで常盤木高校の生徒を対象として出張講義を行った。			
高校生を対象とした模擬授業		2022年12月7日		「プログラミングを学ぶと何ができるようになるか」というテーマで松島高校の生徒を対象として模擬授業を行った。			
高校生を対象とした出張講義		2022年10月25日		「プログラミングを学ぶと何ができるようになるか」というテーマで古川高校の生徒を対象として出張講義を行った。			

高校生を対象とした出張講義	2022年5月20日	「データサイエンスを学ぶと何ができるようになるか」というテーマで榴ヶ岡高校1年生を対象として出張講義を行った。
情報科学科主催公開講座の実施	2022年	情報科学科主催の公開講座「小中学生対象プログラミング体験教室」を企画し講師を務めた。
視覚支援学校でのプログラミング授業	2022年	宮城県立視覚支援学校にて小学部の児童にプログラミングの授業をおこなった。
現在の課題・目標	①「情報科学演習」において学生が主体的にプログラミングに取り組めるだけのスキルを身に付けさせる。 ②1～2年生向け実習科目「コンピュータと論理A」「プログラミング初級」において学生がプログラミングに興味を持つような指導を行う。 ③学生が適切なレポートを作成できるよう指導する。 ④学生に外国語会話を身に付けさせるためのシステムを開発・運用する。 ⑤manabaとresponをより多くの科目で導入し授業改善を図る。	
今年度の進捗状況	①「情報科学演習」では学生一人一人が自ら企画した作品を完成させており、ほぼ達成できた。 ②「コンピュータと論理A」では、スマホアプリという学生に身近な題材によって興味を惹く工夫をした。「初級」は新カリとなって実行結果が視覚化され、意欲的に課題に取り組む学生が増えたと感じた。 ③「情報科学基礎教育」の授業において「読解・作文の基礎」を担当した。少人数教育を実現できていることによって、適切なレポートの書き方を習得できた学生の割合は旧カリの「初年次教育」より大幅に増加した手ごたえを得られた。 ④外国語会話訓練システムは今年度、動画を配信するiPhone用アプリを開発し、言語文化学科のドイツ語の授業において運用を実現した。 ⑤「情報化社会の基礎」「情報科学基礎教育」「コンピュータと論理A」「プログラミングの基礎」「プログラミング初級」「情報科学基礎演習A」「情報科学基礎演習B」の7科目でmanabaとresponを活用し授業改善を図った。	
来年度の進捗目標	①来年度の「情報科学演習」についても目標を達成できるよう引き続き努力する。 ②プログラミングの初期教育において、授業についてこられない学生の割合は確実に減っているが、全体的なレベルの向上につながっているかどうかは不明なので、意識的に取り組む。 ③学生が適切なレポートを作成できるよう、指導をより徹底する。 ④外国語会話訓練を目的とした動画配信アプリはAndroid版の開発をおこなう。 ⑤manabaとresponをより活用し授業改善を図る。	

II 研究活動

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月 (西暦)	発行所、発表雑誌 (及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)					
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
教科横断型のスキルの育成状況を可視化するカリキュラムマネジメントシステムの開発	共著	2023年3月	教育システム情報学会2022年度第6回研究会研究報告集	小笠原歩夢, 松本章代, 後藤康志, 豊田充崇, 泰山裕, 稲垣忠	pp.印刷中
カリキュラムマネジメントシステムを活用した校内研修プログラムの開発	共著	2023年3月	日本教育メディア学会研究会論集, 54	稲垣 忠, 松本章代, 豊田充崇, 後藤康志, 泰山裕	pp.印刷中
教師の指導意図と情報活用カリキュラム	共著	2023年3月	日本教育メディア学会研究会論集, 54	後藤康志, 稲垣忠, 豊田充崇, 松本章代, 泰山裕	pp.印刷中
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)					
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)					
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)					
G. 学会における研究発表					
教科横断型のスキルの育成状況を可視化するカリキュラムマネジメントシステムの開発	共同	2023年3月	教育システム情報学会(JSISE)2022年度第6回研究会(オンライン)	◎小笠原歩夢, 松本章代, 後藤康志, 豊田充崇, 泰山裕, 稲垣忠	
日本語BERTモデルによる近代文の誤り訂正	共同	2023年3月	言語処理学会第29回年次大会(NLP2023)(オンライン)	◎謝素春, 松本章代	

視覚支援学校小学部におけるプログラミング教育にカッティングマシンを活用するシステムの開発	共同	2023年3月	INTERACTION 2023 第27回 一般社団法人情報処理学会シンポジウム(学術総合センター内 一橋記念講堂(東京都千代田区))	◎松本章代, 松木李玖, 菅原研
視覚支援学校における低学年児童向けプログラミング授業教材	共同	2023年1月	2022年度 情報処理学会東北支部研究会(東北学院大学(仙台市))	◎羽柴歩夢, 加藤真琴, 高橋凌人, 松本章代, 菅原研
タートルグラフィックスを二次元図形の実体として出力するシステムの開発	共同	2023年1月	2022年度 情報処理学会東北支部研究会(東北学院大学(仙台市))	◎松木李玖, 菅原研, 松本章代
情報活用能力の育成状況の可視化に関する調査	共同	2022年10月	第48回 全日本教育工学研究協議会全国大会(愛知県春日井市)	◎稲垣忠, 松本章代, 泰山裕, 後藤康志, 豊田充崇
視覚支援学校におけるプログラミング教育に3Dプリンタを活用するシステムの開発	共同	2022年9月	第21回情報科学技術フォーラム(FIT2022)(オンライン)	◎松本章代, 菅原研
視覚障害児のプログラミング授業に3Dプリンタを用いる提案	共同	2022年8月	第47回 教育システム情報学会全国大会(オンライン)	◎松本章代, 菅原研

H. 翻訳(学術書や原典等)

I. 特許

現在の課題・目標	①子どものプログラミング教育に関する研究を進める。 ②文書解析に関する研究を進める。 ③外国語会話教育システムに関する研究を進める。 ④プログラミング教育に関する研究を進める。 ⑤カリキュラムマネジメントシステムに関する研究を進める。
今年度の進捗状況	①については子どものプログラミング経験とプログラミング的思考の関係について分析をおこなった。 ②については近代文書の文字認識における誤り訂正に関する研究を進めた。 ③についてはAndroid用の動画配信アプリを開発し運用した。 ④については子ども向けプログラミング教育のあり方を検討し実践した。視覚障害をもつ子どもに対するプログラミング教育の実践を本格的に始めた。 ⑤についてはカリキュラムマネジメントシステムを完成させ運用した。
来年度の進捗目標	①については視覚障がいをもつ児童・生徒のためのプログラミングシステムを新たに開発する。 ②については近代文書の文字認識における誤り訂正の精度向上を目指す。 ③についてはスマートフォン用の動画配信アプリの完成度を高め安定的な運用ができる状態を目指す。 ④については子ども向けプログラミング教育のあり方を検討し実践する。視覚障害をもつ子どもに対するプログラミング教育を体系化し普及に向けて取り組む。 ⑤についてはカリキュラムマネジメントシステムを改善する。

III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
科学研究費補助金 基盤研究(C)	2019年度～2022年度	共同(研究分担者)	初等中等教育における探究学習を対象としたカリキュラム・マネジメントの支援ツールを開発する。特にカリキュラムに関する研究とそれを運用するためのシステム開発を連携させた上で、学校現場での実証を試みる学際的なアプローチを特色とする。探究スキルの明確化は、高等学校学習指導要領(文部科学省 2018)より新設される「総合的な探究の時間」「古典探究」「地理探究」「理数探究」等の探究に関連する科目において、共通の基盤となるスキルを示し、その育成を小学校段階から系統的に行う手法を提案できる。ウェブ上のシステムについては、探究スキルを中心とした情報活用能力のマネジメントを支援するツールとして提供する。

IV 学会等及び社会における主な活動

2015年11月～	日本教育工学会会員 会員
2009年1月～	教育システム情報学会会員 会員
2008年9月～	日本データベース学会会員 会員
2007年7月～	電子情報通信学会会員 会員

2005年3月～		情報処理学会会員 会員	
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	教養学部 情報科学科	職名	准教授	氏名	岩田 友紀子	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
各回の講義でのresponの活用		2020年4月1日～		講義の終了時に、毎回responによる学生の理解できなかった部分などの感想を書き込んでもらうことをした。講義中に質問できなかった学生の声を拾うことができるようになった。			
ホワイトボード機能を用いた授業		2020年4月1日～		黒板の字よりもPCのホワイトボード機能で記述した字の方が見やすいとのことで、ワコム液タブを用いて講義を行う。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
解析学I, IIにおいてmanabaのドリル機能を用いた小テストを作成した。		2020年4月1日～		manabaのドリル機能を用いて制限時間10分程度で無制限回挑戦できる小テストを課し、学生の講義の『復習』の時間を増やすことを図った。			
確率・統計IIの授業で、Excelによる演習問題を15回分作成した。		2018年4月1日～					
解析学I,IIの講義ノートを作成した。		2017年4月1日～		解析学I,IIでの講義全ての講義ノートを作成した。数IIIを受けていない学生が一人で読んでも理解できる内容にしている。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要			
IV 学会等及び社会における主な活動							
2011年4月～			日本数学会 会員				

V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	教養学部 情報科学科	職名	准教授	氏名	片方 江	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		<ul style="list-style-type: none"> ・分かりやすい授業の実施 ・manabaの小テストおよびドリルの充実 					
今年度の進捗状況		・授業評価アンケートの内容を参考に授業改善計画を立てている					
来年度の進捗目標		<ul style="list-style-type: none"> ・分かりやすい授業の実施 ・manabaの小テストおよびドリルの充実 ・学生とのコミュニケーションを大切にする 					
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
無限個の擬多項式写像を含む超越整関数の構成		単独	2022年12月	「等角写像・値分布論」合同研究会(八戸市美術館)	Koh KATAGATA		
An example of functions of slow growth whose fast escaping set has Hausdorff dimension two		単独	2022年12月	複素力学系と関連分野(京都大学)	Koh KATAGATA		
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		・超越整関数の力学系の研究					
今年度の進捗状況		・超越整関数の力学系特有の現象を考察することができた					
来年度の進捗目標		・研究成果の学会発表					
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要		
科学研究費補助金 若手研究(B)		2017年度～2022年度	個別(研究代表者)				
IV 学会等及び社会における主な活動							
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場所	開催年月日(西暦)		発表・展示等の内容等		
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							

来年度の進捗目標	
VI 学内における管理運営に関する諸活動	

2022年度							
所属	教養学部 情報科学科	職名	准教授	氏名	佐藤 篤	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
授業での数値計算ソフトウェアの活用		2020年9月～		「数理情報学」と「数値解析」の授業において GeoGebra、gnuplot、octave、pari-gp、R を利用したデモを行い、理解する助けとした。			
個人のウェブページの活用		2020年4月～		これまでに書いた文書を公開した。その中には過去の授業等で配布したものも含まれる。また、いくつかの文書については改訂も行った。さらに、「幾何学 I」「幾何学 II」「数理情報学」「数値解析」のページを作成し、配布資料等をダウンロードできるようにした。			
授業での動的数学ソフトウェアの活用		2020年4月～		「幾何学 I」と「幾何学 II」の授業において GeoGebra を利用したデモを行い、定理等の意味を理解する助けとした。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
教材の作成		2020年4月～		「数理的思考の基礎」のオンデマンド授業用の資料を作成した。			
教材の作成		2020年4月～		「情報科学基礎演習 A」の授業において「データ処理の基礎」の教材を作成した。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		(1) 講義全般について、受講者の現状に沿った内容にする。 (2) 演習について、学生とのコミュニケーションを重視し、「数学を理解すること」がどういふことなのかを学んでもらうよう努める。 (3) 数学科以外の学生を対象とした代数学の演習書を執筆する(共著)。 (4) 大学院について、院生(修士2年)の修士論文を完成させ、修了させる。					
今年度の進捗状況		(1) については、改善が見られるが、まだまだ満足できる状況とは言えない。 (2) については、まだ満足できる状況とは言えないが、発表の仕方に進歩が見られる。卒業論文の進捗にも改善が見られた。 (3) については、自分の担当箇所についてはほぼ完成したが、さらなる手直しが必要。 (4) については、満足の行く修士論文を完成させることができた。					
来年度の進捗目標		(1) については、引き続き講義内容の見直しを行う。アンケートでポジティブな回答が多くなるよう努めたい。 (2) については、適当なテキストの探索を続け、知識よりも考え方を重視するような演習を継続的に行えるようにする。 (3) については、共著者と共に早期の完成を目指す。					
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							

現在の課題・目標	<p>(1) 楕円曲線の同種写像を利用して、代数体の不分岐拡大の塔を具体的に構成すること。</p> <p>(2) 二次体上定義された、位数11の有理点をもつ楕円曲線の族を用いて、類数が11で割り切れるような代数体の無限族を構成すること。</p> <p>(3) 楕円曲線上の点の還元に関する振る舞いと、形式群や Tate 曲線との関係を明らかにすること。</p>		
今年度の進捗状況	<p>(1) については、同種写像の核に属する全ての点が良還元をもつような素点の分岐について、一定の成果が得られた。</p> <p>(2) については、コンピュータを利用した計算機を行ったが、計算結果が複雑で扱いかねる状態のままである。</p> <p>(3) については手付かずの状態である。</p>		
来年度の進捗目標	<p>(1) については、引き続き計算を進め、代数体の類数の可除性の話に結び付けたい。また、既に得られている成果について論文に纏めたい。</p> <p>(2) については、あまり進展は見込めないかもしれないが、引き続き突破口を見つけるよう努めたい。</p> <p>(3) については、まずは文献による学習を進め、特に形式群の理解が深くなるよう努力したい。</p>		
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動			
1992年4月～	日本数学会会員 会員		
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	教養学部 情報科学科	職名	准教授	氏名	高橋 秀幸	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
3年生のゼミ生に対して、学生スマートフォンアプリコンテストへの出場の機会を得られるような教育・演習を行い、実際にコンテストへ学生が自主的に応募し、1次審査、2次審査、最終審査の結果、アイデア賞と奨励賞を受賞するなどの成果を得ることができた。		2022年5月1日～2023年11月23日					
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
tbcラジオ「GoGoはみみこいラジオな気分」に学生が出演		2023年1月31日～2023年2月7日		「第10回学生スマートフォンアプリコンテスト」で高橋ゼミの学生チームがアイデア賞と奨励賞を受賞したことが取り上げられた。			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Time Domain Analysis for Extracting Spatial Distribution of Visible Light IDs	共著	2022年10月	Proc. of the 2022 IEEE 11th Global Conference on Consumer Electronics (GCCE 2022)	N. Yokota, H. Yasaka, K. Sugiyasu, H. Takahashi	pp.437-483		
Detection and Manipulation of Laser Projection Pattern for Effective Evacuation Guidance	共著	2022年10月	Proc. of the 2022 IEEE 11th Global Conference on Consumer Electronics (GCCE 2022)	N. Yokota, H. Takahashi, H. Yasaka	pp.160-161		
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
参加型3Dデジタルアーカイブ支援システムの設計と試作	共著	2023年1月	2022年度 情報処理学会東北支部研究会	工藤 智博, 高橋 秀幸, 菅原 研	pp.1-7		
群ロボットシミュレーションに向けたフレームワークの提案-スケジューラーの設計-	共著	2023年1月	2022年度 情報処理学会東北支部研究会	佐々木夏輝, 坂本泰伸, 菅原研, 高橋秀幸	pp.1-6		
防災・減災向けドローンポートの自動運用管理支援システムの設計と試作	共著	2023年1月	2022年度 情報処理学会東北支部研究会	針生有都, 高橋秀幸	pp.1-8		
ルームスケールVRにおけるIoT機器の協調制御機能の設計と試作	共著	2023年1月	2022年度 情報処理学会東北支部研究会	阿部真成斗, 高橋秀幸	pp.1-6		
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
参加型3Dデジタルアーカイブ支援システムの設計と試作	共同	2023年1月	2022年度 情報処理学会東北支部研究会(宮城県仙台市)	工藤 智博, 高橋 秀幸, 菅原 研			

群ロボットシミュレーションに向けたフレームワークの提案-スケジューラーの設計-	共同	2023年1月	2022年度 情報処理学会東北支部研究会(宮城県仙台市)	佐々木夏輝, 坂本泰伸, 菅原研, 高橋秀幸
防災・減災向けドローンポートの自動運用管理支援システムの設計と試作	共同	2023年1月	2022年度 情報処理学会東北支部研究会(宮城県仙台市)	針生有都, 高橋秀幸
ルームスケールVRにおけるIoT機器の協調制御機能の設計と試作	共同	2023年1月	2022年度 情報処理学会東北支部研究会(宮城県仙台市)	阿部真成斗, 高橋秀幸
Time Domain Analysis for Extracting Spatial Distribution of Visible Light IDs	共同	2022年10月	2022 IEEE 11th Global Conference on Consumer Electronics (GCCE 2022)(大阪)	N. Yokota, H. Yasaka, K. Sugiyasu, H. Takahashi
Detection and Manipulation of Laser Projection Pattern for Effective Evacuation Guidance	共同	2022年10月	2022 IEEE 11th Global Conference on Consumer Electronics (GCCE 2022)(大阪)	N. Yokota, H. Takahashi, H. Yasaka,

H. 翻訳(学術書や原典等)

I. 特許

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
その他の補助金・助成金(いわき市まち・未来創造支援事業(まちづくり活動(ソフト[重点]支援事業))	2022年度～2022年度	共同(研究分担者)	

IV 学会等及び社会における主な活動

2023年3月～2023年3月	ドローンが避難誘導・震災から12年・福島県いわき市(日本テレビ・シューイチ)
2023年2月～2023年2月	仙台市立六郷小学校で防災教育の授業を実施 講師
2023年1月～2023年1月	改正航空法施行ドローン住宅街OK(読売新聞)
2023年1月～2023年1月	東日本大震災11年10カ月 津波避難ドローンが誘導 空から「安全通路」示す(公明新聞)
2022年4月～2022年4月	災害から命を守るドローン進化(ミヤギnews every.)
2022年2月～	2021年度電気関係学会東北支部連合大会 2021年度電気関係学会東北支部連合大会実行委員会(一般講演担当)
2022年1月～	COMPSAC 2022 (IEEE Signature Conference on Computers, Software, and Applications) Program committee member
2021年12月～	The 7th Special Session on Intelligent and Contextual Systems (ICxS 2022) in conjunction with the 14th Asian Conference on Intelligent Information and Database Systems (ACIIDS 2022) Program Committee Member
2021年12月～	The 7th International Conference on Communication, Image and Signal Processing (CCISP 2022) Technical Committee Member
2021年4月～	一般社団法人 情報処理学会 コピキタスコンピューティングシステム研究会
2019年4月～2023年3月	一般社団法人 情報処理学会・コンシューマ・デバイス&システム研究会

V 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
令和4年 第7回防災推進国民大会 2022 in 兵庫(HYOGO・KOBÉ 2022 ぼうさいこくたい)		2022年10月～2022年10月	地域住民組織(区会)主導による地区防災計画立案に向けた取り組み
情報処理学会 第10回学生スマートフォンアプリコンテスト	オンライン開催	2022年5月～2022年11月	3年生による2つのチームが出場し、アイデア賞と奨励賞を受賞した。
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			

来年度の進捗目標	
VI 学内における管理運営に関する諸活動	

2022年度							
所属	教養学部 情報科学科	職名	准教授	氏名	土原 和子	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
パワーポイントによる講義と授業用独自プリントの連動・併用、講義データのダウンロード		2020年4月1日～		講義をより効果的にするため、パワーポイントを使用した授業と、独自プリントを併用した。特にパワーポイントには写真や動画を多く採用し、また、プリントはカラーのため、HPをつくってそこにカラーの図表を講義前にアップロードしておき、ダウンロードできるようにした。			
オンデマンド講義における、わかりやすい動画の作成		2020年4月1日～		オンデマンド講義において、学生がわかりやすいように動画を作成した。90分しゃべり続けるのではなく、復習、イントロ、講義内容1、2、3、まとめのように区切って作成した。また、講義前に資料をアップロードし、講義を聴きながら書き込むなど併用できるようにした。			
教員独自のリアクションカードによる授業評価をおこなっている		2016年4月1日～		講義のたびにリアクションカードを配布し、質問事項や講義における改善点を学生に記入してもらい、質問の多かった点や、気づいた点については、次回以降の講義でフィードバックしている。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
独自プリントの作成		2020年4月1日～		学生が書き込める穴埋め式の配布資料も準備して「書いて覚える」ということを徹底した。これにより、学生はその単元のポイントがわかり、そのプリントをコピーして学生が使用し、しっかり復習できるようにした。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
補習授業		2018年4月1日～		正規の授業のほかに、授業が終了した夕方やオフィスアワーの時間を活用して、補習をおこなった。その週の授業ででてきた基礎知識の確認、および授業でわかりにくかった箇所等を学生からつづり、噛み砕いて説明した。これにより、授業の理解が深まり、次の授業へスムーズにはいれるようになった。			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Electrophysiological and Morphological Characterization of Contact Chemosensilla in Adults and Larvae of the Butterfly, <i>Atrophaneura alcinous</i>	共著	2022年9月	Insects, 13(802)	Kazuko Tsuchihara, Takuma Takanashi, Kiyoshi Asaoka	pp.1-13		
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							

今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動			
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	教養学部 情報科学科	職名	准教授	氏名	星野 真樹	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
学習した事項の定着と授業理解の促進		2021年4月1日～		授業内に演習を行うことによって、能動的な学習を促すとともに、その場で自己採点できるように解説を加え、学生にフィードバックできるようにする。			
教員と学生の双方向による授業展開		2021年4月1日～		授業内で適宜学生を指名し、学生を授業に参加させることによって、学生のつまづきやすい点や理解度などを確認する。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Optimal and Sharp Convergence Rate of Solutions for a Semilinear Heat Equation with a Critical Exponent and Exponentially Approaching Initial data		単著	2022年10月	Springer, Journal of Dynamics and Differential Equations, *(*)		Masaki HOSHINO	pp.*-*
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要		
IV 学会等及び社会における主な活動							
2023年1月			東北数学教育学会 会員				
2007年10月～			日本数学会会員 会員				
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	教養学部 情報科学科	職名	准教授	氏名	村上 弘志	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
学習内容の実践による理解の促進		2020年4月1日～		毎回の授業の中で講義に関連したイベントなどを紹介し、実際に体験することで定着を図っている。			
授業への要望のアンケート		2020年4月1日～		毎回の講義に関する質問・意見や感想をオンラインアンケートで尋ねている。			
学習内容の定着と理解の促進		2020年4月1日～		毎回の講義の最後にその回の内容に関わる小問を出し次回以降に解説する。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要			
IV 学会等及び社会における主な活動							
2013年7月～		日本物理学会会員 会員					
2003年7月～		国際天文学連合(IAU)会員 委員					
1999年8月～		高エネルギー宇宙物理学連絡会会員 委員					
1997年7月～		日本天文学会会員 会員					
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	教養学部 地域構想学科	職名	教授	氏名	岩動 志乃夫	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
地域構想学演習B,卒業研究B受講生の地理学会への参加(オンライン)		2021年5月15日～2022年5月16日		学会の学術大会へゼミ所属学生(3年・4年生)がオンライン聴講により参加した。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要			
科学研究費補助金 文科省科研費基盤研究B		2017年度～	共同(研究分担者)	「観光の組織化と地域構造変容のダイナミズムに基づく次世代観光戦略の構築」というテーマのもとで研究を遂行している。			
IV 学会等及び社会における主な活動							
2020年6月～2022年5月			立正地理学会 副会長				
2020年4月～			日本地理学会 代議員6期				
2019年8月～			宮城県特定大規模集客施設立地誘導審議会 委員				
2019年4月～			日本観光研究学会 会員				
2018年4月～			宮城県七ヶ浜町長期総合計画専門部会 委員				
2015年4月～			仙台市泉区区民協同まちづくり事業評価委員 委員長				

2015年4月～	仙台市大規模小売店舗立地法専門委員会 委員長		
2006年4月～	東北都市学会 理事		
1999年4月～	東北都市学会 会員		
1997年4月～	経済地理学会 会員		
1990年4月～	日本都市学会 会員		
1988年4月～	人文地理学会 会員		
1984年4月～	立正地理学会 会員		
1984年4月～	日本地理学会 会員		
1982年10月～	東北地理学会 会員		
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	教養学部 地域構想学科	職名	教授	氏名	伊藤 晶文	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
manabaを用いたオンデマンド授業		2022年4月1日～		「環境の科学」などにおいて、動画および授業資料(アウトラインおよび図表資料)、manabaの小テストおよびレポート機能を用いてオンデマンド授業を行った。また、manabaのコレクション機能を用いて、学生からの質問に回答した。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
授業時の配布資料の作成		2022年4月～		講義については、アウトライン、図表資料(ともにPDF)をmanabaにて事前配布し、授業の流れを前もって把握できるようにしている。演習および実習については、授業計画全体の流れを示すとともに、必要に応じてレジュメ等の資料を作成・配布している。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
奄美大島の沿岸巨礫分布を形成した過去の高波の最大規模の数値的推定		共同	2022年5月	日本地球惑星科学連合2022年大会(ハイブリッド)(幕張メッセ)	◎南館健太, 後藤和久, 菅浩伸, 石澤堯史, 小岩直人, 伊藤晶文		
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要		
科学研究費補助金 基盤研究(C)		2019年度～2022年度	個別(研究代表者)				
IV 学会等及び社会における主な活動							
2022年6月～			国土交通省国土地理院治水地形判定委員会(東北地区) 委員				

2020年4月～	日本地理学会 編集専門委員
2017年1月～	宮城県環境影響評価技術審査会 委員
2003年10月～	日本地形学連合 会員
1997年5月～	日本第四紀学会 会員
1997年5月～	日本地理学会 会員
1995年4月～	東北地理学会 会員

V 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

VI 学内における管理運営に関する諸活動

--

2022年度							
所属	教養学部 地域構想学科	職名	教授	氏名	佐久間 政広	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
学生が主体的に実施する地域調査実習の工夫		2022年4月1日～2022年8月31日		地域構想学科の実習において地域社会の実態を対象として、問題設定から現地調査、データ分析、報告書作成といった一連の過程を学生が主体的におこなう教育を実施した。授業では、JR仙山線沿線沿いの宮城県仙台市青葉区作並地区、山形県山形市山寺地区j、山形県山形市高瀬地区を調査対象地とし、三つの受講生グループそれぞれが作並温泉の盛衰、山寺観光協会の取り組み、高瀬紅花祭りの実施体制をテーマとしてフィールドワーク実習を実施した。この実習の成果は、外部に公開可能な報告書作成しつつある。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要			
IV 学会等及び社会における主な活動							
2010年4月～			仙台銀行まちづくり基金運営委員 運営参加・支援				
2009年10月～			日本村落研究会理事 会員				
1992年9月～			日本村落研究会会員 会員				
1983年9月～			日本社会学会会員 会員				
1981年4月～			東北社会学会会員 会員				

1981年4月～		東北社会学研究会会員 委員	
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	教養学部 地域構想学科	職名	教授	氏名	菅原 真枝	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
ゼミ卒業生を講師とするキャリア形成支援		2022年12月		「地域構想学演習B」および「福祉社会論」において、ゼミ卒業生を招き、自らの就職活動経験や現在の仕事に対する姿勢等を話してもらうことにより、ゼミ生および受講生の就職活動に対する意識を高め、キャリア形成支援をおこなった。			
学外におけるゼミ活動による社会貢献		2022年11月～2022年12月		「地域構想学演習」および「総合研究」において、「笑ってほしい♪スマイルもりもりプロジェクト」を実施した。ゼミ学生が主体となり、小学校児童を対象とする体操教室を企画し、七北田児童センターおよび向陽台児童館に協力をいただくことにより体操教室を実施した。仙台市泉区より「いずみ絆プロジェクト」の助成金を得た。			
学外におけるゼミ活動による社会貢献		2022年6月5日		とっておきの音楽祭 SENDAIに、ゼミとして協賛・参加した。公式グッズの考案と販売、インフォメーションブースの運営、会場の設営や撤収等の手伝いをおこなった。			
教育方法の工夫		2022年4月～2022年7月		「社会福祉論」の授業において、学習支援サイトmanabaを活用し、主体的な学習を促すよう工夫した。responで回収したコメントに対して、manabaの掲示板を活用して回答をおこない、オンデマンド形式であっても教員と学生が双方向的なコミュニケーションがとれるよう工夫した。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
ゼミにおける就職活動支援		2022年12月9日		菅原真枝ゼミ卒業生を招き、現役のゼミ学生と交流した。そのさいゼミ卒業生が勤務する事業所の採用担当者がともに来校することにより、会社説明とともにインターンシップの案内をしていただき、ゼミ学生に対して就職活動に結びつく情報提供をおこなった。			
他学科ゼミとの協働による社会貢献活動		2016年5月～2022年12月		教養学部言語文化学科佐藤真紀ゼミと協働し、インドネシア人介護福祉士候補者に対する日本語教育支援ボランティア活動を計11回にわたり実施した。事前には合同のゼミを実施し、事後には全体の活動をふりかえる合同ゼミを開催した。			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							

現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
科学研究費補助金 科学研究費基盤研究(C)	2019年度～2022年度	共同(研究分担者)	研究題目「社会統合の展開と可能性—外国人ケアワーカーのキャリアと移動の選択に注目して」、 研究代表者 篠原千佳(桃山学院大学)
科学研究費補助金 科学研究費基盤研究(C)	2018年度～2022年度	個別	研究題目 外国人ケアワーカーの来日動機と定住意向を規定する要因に関する社会学的研究 研究代表者 菅原真枝
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動			
2021年7月～		東北社会学会 研究活動委員会委員長 理事	
2021年5月～		みやぎ北ユネスコ協会 理事	
2020年4月～		大崎市男女共同参画推進審議会委員長 委員長	
2020年4月～		公益財団法人仙台市スポーツ振興事業団評議員 委員	
2020年4月～		第36次宮城県社会教育委員会委員 委員	
2019年3月～		日本在宅ケア学会会員 会員	
2017年2月～		特定非営利活動法人とっておきの音楽祭 理事 委員	
2016年9月～		特定非営利活動法人仙台バリアフリーツアーセンター 理事 委員	
2016年4月～		東北学院大学教育研究所 所員 委員	
2006年～		日本福祉文化学会 会員 会員	
2006年～		大崎市男女共同参画推進審議会 委員 委員	
2003年～		福祉社会学会 会員 会員	
1998年～		日本社会学会 会員 会員	
1996年～		東北社会学会 会員 会員	
1996年～		東北社会学研究会 会員 委員	
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	教養学部 地域構想学科	職名	教授	氏名	高野 岳彦	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
松島湾のカキ養殖と漁場利用の変化(1)既存情報の整理	単著	2022年12月	地域構想学研究教育報告(13)	高野岳彦	pp.1-20		
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
「ご当地化粧品」の地域産業としての意義	単独	2022年8月	経済地理学会北東支部会(仙台)	高野岳彦			
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要				
IV 学会等及び社会における主な活動							
2019年6月～			東北地理学会会長 会員				
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等				
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
VI 学内における管理運営に関する諸活動							

2022年度							
所属	教養学部 地域構想学科	職名	教授	氏名	高橋 信二	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要			
IV 学会等及び社会における主な活動							
2013年～			日本体育測定評価学会理事 会員				
2010年～			European College of Sport Science学会員 会員				
2001年～			American College of Sports Medicine学会員 会員				
1999年～			日本体育学会学会員 会員				
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
VI 学内における管理運営に関する諸活動							

2022年度							
所属	教養学部 地域構想学科	職名	教授	氏名	平吹 喜彦	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
東日本大震災と復興に向き合い、活動する学習機会の導入		2020年～		「持続可能な地域の構築」,「健全な生態系・環境の持続を基軸とするSDGsの推進」という視点から,東日本大震災と復興について考え,行動につなげる機会を,すべての授業に導入してきた。また2011年以降,学術団体や市民団体,被災地住民らと協働で学習会やフォーラム,被災地での復興支援活動を企画・運営し,学生教育にも注意深く導入してきた。なお,2020・2021年度は,新型コロナウイルス感染拡大防止を図るため,対面による学習活動のほとんどを断念せざるを得なかったが,2022年度は感染防止対策を講じながら徐々に活動を再開できた。			
「ヒトと自然のかかわり」に対する知的理解とともに,学習者の自己形成が育まれるような教育の創出		2020年～		景観生態学・植生学・ESD(持続を可能にする教育)を専門とする立場から,野生生物の生活史,およびヒト-野生生物-環境間のつながりについて,その多様性や形成史,保全・保護に触れながら学習が深化し,あわせて学習者自身の自然観や人生観,世界観が醸成され得るような教育を心がけてきた。そのための一助として,身近にある自然や暮らしを見つめ直す学習,あるいは地域の児童・生徒や住民と向き合うフィールドワークの開発を積極的に行いながら,実体験と学習者自身による課題解決を重視した取り組みを続けている。なお,2020・2021年度は,新型コロナウイルス感染拡大防止を図るため,対面による学習活動のほとんどを断念せざるを得なかったが,2022年度は感染防止対策を講じながら徐々に活動を再開できた。			
「企画する,段取る,遂行する,分析する,まとめる,表現する,伝える」ことスキルアップ		2020年～		さまざまな学習の内容・形態の中に,「学び」の基本として,このスキームを挿入してきた。なお,2020・2021年度は,新型コロナウイルス感染拡大防止を図るため,対面による学習活動のほとんどを断念せざるを得なかったが,2022年度は感染防止対策を講じながら徐々に活動を再開できた。			
「ローカル(地域)」と「グローバル(地球,世界)」を俯瞰し得る視点の獲得をめざした学習の構築		2020年～		さまざまな学習の内容・形態の中に,「地域と地球・世界」,「多様性の意義」といったテーマや視点を挿入し,持続可能な地域の構築,あるいは地球市民の育成に貢献しうる教育を心がけてきた。また,海外学術調査に赴く際には,国内でフィールドワークを積んだ大学院生や学部学生に同行を促し,異なる自然や風土,文化を体験し得る機会を提供してきた。なお,2020・2021年度は,新型コロナウイルス感染拡大防止を図るため,対面による学習活動のほとんどを断念せざるを得なかったが,2022年度は感染防止対策を講じながら徐々に活動を再開できた。			
導入教育として,「自然に浸る」体験を準備		2020年～		自然科学を志向する学生であっても,入学当初から豊かな自然体験を有する者はごく少数でしかない。そこで,「ヒトと自然のかかわり」を学ぶ際の導入段階にふさわしい,学内や近郊の二次的自然を活用した体験学習プログラムを開発してきた。この学習活動では,五感を働かせて自然を認知することの楽しさを味わうとともに,自然界(生態系)の営みが非日常的なスケールで複雑に展開していることに目を向けることをめざしている。なお,2020・2021年度は,新型コロナウイルス感染拡大防止を図るため,対面による学習活動のほとんどを断念せざるを得なかったが,2022年度は感染防止対策を講じながら徐々に活動を再開できた。			
2. 作成した教科書,教材,参考書							
自然教育・環境教育・ESD(持続を可能にする教育)・SDGs(持続を可能にする開発目標)にかかわる学習素材・教材アーカイブ		2020年～		自然教育・環境教育・ESD・SDGsを推進する任意団体を組織し,体験学習フィールドの開拓・維持や学習プログラムの開発を進めてきた。2020・2021年度は,新型コロナウイルス感染拡大防止を図るため,オンライン学習への対応となったが,2022年度は感染防止対策を講じながら徐々に体験的な取り組みを導入することができた。			
講義・実験・実習で用いる説明文・図解資料(印刷物やパワーポイント映像,動画など),および標本類。2020・2021年度は,新型コロナウイルス感染拡大防止を図るため,オンライン授業の教材開発に努めた。		2020年～		学習者の理解を助け,しかも自立的な学習活動を織り込んだビジュアル教材の作成に努めてきた。2011年以降は,東日本大震災と復興,持続可能な地域づくりに関わる教材づくりにウエイトを置いている。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表,講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							

東日本大震災に伴う大地震・大津波とその後の復興事業によって大きく変遷する海岸エコトーンと沿岸地域に着目して、「南蒲生/砂浜海岸エコトーンモニタリングネットワーク」と「生態系サービスの享受を最大化する‘里浜復興シナリオ’創出プロジェクト」(いずれも世話人代表)、「地域の自然と歴史に学ぶ里浜復興研究会」(世話人)の3つのプラットフォームを運営。現場・地域に根ざした学術調査で収集したデータに基づいて、「ふるさと・里浜復興」に向けた情報やアイデア、実践の発信・分かち合い・学び合いを推進	2020年～	被災地住民や市民団体、学術団体、行政機関などのステークホルダーと協働して、「砂浜海岸エコトーンの構造と恵み、自律的再生に立脚したふるさと・里浜の復興」に関する学び合いを推進した(なお、2020・2021年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止を図るため、対面による学習活動のほとんどを断念せざるを得なかったが、2022年度は感染防止対策を講じながら徐々に活動を再開できた)。それらの活動の骨子は、ホームページ https://sites.google.com/site/ecotonesendai/ (随時不定期更新)などで自主的に公開した。			
宮城県仙台市新浜地区や亶理町吉田浜地区などで、学生が現場で「地域づくり」を体験しうる「地域・市民団体と連携した学習活動」を実施(世話人)	2020年～	住民・市民団体の皆さんの手厚いサポートの下で、「里浜・里地・里山における景観の読み解き、自然環境と伝統的な暮らしの探求、賢い資源利用や災害適応術の考究」を体験活動として織り込み、復興・持続可能な地域づくりのあり方を模索する学び合いを企画・実施した。なお、2020・2021年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止を図るため、対面による学習活動のほとんどを断念せざるを得なかったが、2022年度は感染防止対策を講じながら徐々に活動を再開できた。			
市民団体・学校・学術団体等が主催する講座・自然観察会・環境保全活動を推進(講師・支援者)	2020年～	新浜町内会(仙台市宮城野区)主催の「新浜フットパス」、仙台市高砂市民センター・仙台市立岡田小学校ほか主催の「岡田新浜 花咲く浜辺づくり計画2020/2021/2022」、新浜町内会(仙台市宮城野区)ほか主催の「新浜の自然と歴史の学習会」、東北学院中学校(2020年度)および高等学校(2021・2022年度)「総合的な学習・中高大一貫教育事業」などに参画して、学びの機会を提供した。なお、2020・2021年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止を図るため、対面による学習活動の一部を断念せざるを得なかったが、2022年度は感染防止対策を講じながら徐々に活動を再開できた。			
現在の課題・目標					
今年度の進捗状況					
来年度の進捗目標					
II 研究活動					
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数
A. 学術書					
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)					
小型UAVを活用した津波被災地における海浜植物ケカモノハシの空間分布の評価	共著	2022年	日本緑化工学会誌, 48(1)	栗栖寛和・岡浩平・平吹喜彦・松島肇	pp.68-73
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)					
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文					
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)					
砂浜海岸エコトーンの破壊と再生『岩沼市史第11巻 特別編Ⅲ 震災』	分担執筆	2022年	岩沼市.	平吹喜彦	pp.49-69
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)					
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)					
G. 学会における研究発表					
宮城県レッドデータブックにおける「植物群落」の取組事例と課題	共同	2023年2月	日本大学理工学部駿河台キャンパス・オンライン併用(日本大学理工学部駿河台キャンパス・オンライン併用)	菅野洋・沖田堇・平吹喜彦	
津波と人為変化によって生じた立地における植物の分布と環境要因の関係	共同	2023年2月	自然環境復元学会第23回全国大会(日本大学理工学部駿河台キャンパス・オンライン併用)	田嶋斗夢・富田瑞樹・平山英毅・菅野洋・平吹喜彦・原慶太郎	
津波攪乱跡地と盛土におけるクロマツの樹高と植生指数のUAVによる測定	共同	2023年2月	自然環境復元学会第23回全国大会(日本大学理工学部駿河台キャンパス・オンライン併用)	大垣岳斗・富田瑞樹・平山英毅・平吹喜彦	

仙台湾南部海岸における「粘り強い防潮堤」の砂丘化・生態緑化: 3地点の堆砂・被植状況の比較	共同	2023年2月	自然環境復元学会第23回全国大会(日本大学理工学部駿河台キャンパス・オンライン併用)	齊藤賢治・平吹喜彦・松島肇・岡浩平・富田瑞樹・黒沢高秀・長島康雄
仙台市井土浦における津波 11 年後の塩性湿地の植生分布	共同	2022年10月	植生学会第27回大会(オンライン開催(東京農工大学))	平ひかり・岡浩平・平吹喜彦・松島肇
仙台湾南部海岸の「粘り強い防潮堤」における堆砂・被植の進行様態とその機構	共同	2022年10月	植生学会第27回大会(オンライン開催(東京農工大学))	齊藤賢治・平吹喜彦・松島肇・岡浩平・富田瑞樹・黒沢高秀
津波攪乱から10年間の植物群集の変化—立地間の比較	共同	2022年10月	植生学会第27回大会(オンライン開催(東京農工大学))	富田瑞樹・菅野洋・平吹喜彦・原慶太郎
津波攪乱跡地における人為改変度に着目した植物の種多様性と植生指数の8年間の変化	共同	2022年9月	日本緑化工学会・日本景観生態学会・応用生態工学会3学会合同つくば大会(ELR2022 つくば)(つくば国際会議場・オンライン併用)	田畠斗夢・富田瑞樹・菅野洋・平山英毅・平吹喜彦・原慶太郎
海浜環境の維持管理における地域参画を目指した小学校での環境教育	共同	2022年9月	日本緑化工学会・日本景観生態学会・応用生態工学会3学会合同つくば大会(ELR2022 つくば)(つくば国際会議場・オンライン併用)	植野晴子・松島肇・鈴木玲・平吹喜彦・木村浩二・島田直明・大越陽
海岸砂州における徘徊性節足動物群集に対する人工構造物の影響	共同	2022年9月	日本緑化工学会・日本景観生態学会・応用生態工学会3学会合同つくば大会(ELR2022 つくば)(つくば国際会議場・オンライン併用)	大越陽・松島肇・根岸淳二郎・大原昌宏・内田典子・平吹喜彦・植野晴子
小型 UAV を活用した津波被災地における海浜植物ケカモノハシの空間分布の評価	共同	2022年9月	日本緑化工学会・日本景観生態学会・応用生態工学会3学会合同つくば大会(ELR2022 つくば)(つくば国際会議場・オンライン併用)	栗栖寛和・岡浩平・平吹喜彦・松島肇
UAV を用いた津波攪乱跡地と盛土上に生育するクロマツの樹高推定	共同	2022年9月	日本緑化工学会・日本景観生態学会・応用生態工学会3学会合同つくば大会(ELR2022 つくば)(つくば国際会議場・オンライン併用)	大垣岳斗・富田瑞樹・平山英毅・平吹喜彦
仙台市沿岸部の砂浜域における津波後10年間の植物群集の変化	共同	2022年9月	日本緑化工学会・日本景観生態学会・応用生態工学会3学会合同つくば大会(ELR2022 つくば)(つくば国際会議場・オンライン併用)	富田瑞樹・菅野洋・平吹喜彦・原慶太郎
仙台湾沿岸における津波による低頻度大規模攪乱後10生育期目の植生回復と人為影響	共同	2022年9月	日本緑化工学会・日本景観生態学会・応用生態工学会3学会合同つくば大会(ELR2022 つくば)(つくば国際会議場・オンライン併用)	菅野洋・富田瑞樹・平吹喜彦・原慶太郎
宮城県気仙沼市大谷海岸における海岸防潮堤法面への覆砂と自生種導入効果について	共同	2022年9月	日本緑化工学会・日本景観生態学会・応用生態工学会3学会合同つくば大会(ELR2022 つくば)(つくば国際会議場・オンライン併用)	松島肇・黒沢高秀・島田直明・平吹喜彦・岡浩平・鈴木玲・大越陽・徐夢林

H. 翻訳(学術書や原典等)

I. 特許

現在の課題・目標	
今年度の進捗状況	
来年度の進捗目標	

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
科学研究費補助金 文部科学省科学研究費助成事業 基盤研究(C)(一般)	2019年度～2022年度	共同(研究分担者)	Eco-DRRの視点で自然災害からの学校防災・減災を具現化するための実践的研究(代表者:長島康雄・東北学院大学)
科学研究費補助金 文部科学省科学研究費助成事業 基盤研究(C)(一般)	2019年度～2022年度	共同(研究分担者)	攪乱強度と再生工法の差に着目した植生レジリエンスの空間的評価(研究代表者:富田瑞樹・東京情報大学)
科学研究費補助金 文部科学省科学研究費助成事業 基盤研究(B)(一般)	2018年度～2022年度	共同(研究分担者)	海浜エコトーンの再生を目指した地域主体による「育てる防潮堤」の実証的提案(研究代表者:松島肇・北海道大学)
科学研究費補助金 文部科学省科学研究費助成事業 基盤研究(A)(一般)	2017年度～2022年度	共同(研究分担者)	津波被災地の大規模復旧事業が生態系に与える短・中期的影響の総合的解明(研究代表者:黒沢高秀・福島大学)
IV 学会等及び社会における主な活動			
2022年4月～		自然環境復元学会 会長	
2022年～		多田川圏域河川整備学識者懇談会 委員	
2022年～		みやぎの運河群利活用推進会議 副座長	
2021年～2023年		特別名勝松島保存活用計画策定会議 副座長	
2021年～2022年		仙台市自然環境に関する基礎調査検討会 委員長	
2020年～		亘理町史編纂委員会 委員	
2020年～		植生学会 表彰委員長	
2020年～		植生学会 運営委員	
2020年～2022年		日本景観生態学会 生態系インフラ活用検討委員会	
2019年～		仙台市広瀬川清流保全審議会 副会長	
2018年2月～		環境省自然環境保全基礎調査検討会植生分科会 委員	
2018年～2022年		岩沼市史編集専門部会(震災部会) 委員	
2016年7月～		日本海岸林学会 会員	
2016年～		宮城県土地利用審査会 委員・会長(2019～)	
2015年～		環境省希少野生動植物種保存推進員 助言・指導, 情報提供, 調査担当	
2014年～2022年		仙台市科学館協議会 委員・会長(2016～2018)	
2013年～		宮城県野生動植物調査会植物群落分科会 分科会長	
2013年～		宮城県文化財保護審議会松島部会 副部会長	
2013年～		宮城県希少野生動植物保護対策検討会 委員	
2011年3月～		東日本大震災で被災した海岸域で、「ふるさとの自然環境と調和した持続可能な地域づくり」をめざして, 市民・行政・専門家らと協働で復興支援活動を展開 出演, コメンテーター, 取材協力, インタビュアー, 編集, 講師, 助言・指導, 情報提供, 企画, 運営参加・支援, 調査担当, 報告書執筆	
2011年～		日本景観生態学会 会員	
2009年～		環境省自然環境保全基礎調査植生調査東北ブロック調査会議 委員・東北ブロック統括委員(2019～)	
2009年～		自然環境復元学会 会員	
2008年～		宮城県文化財保護審議会 委員	
2003年～		「仙台市杜々かんきょうレスキュー隊事業」や「子どもゆめ基金」の助成を受けるなどして, 里山や栗駒山などで, 市民を対象とした環境教育活動を実践(ただし2020年度以降は, コロナウイルス感染拡大防止のため, 実質的な活動を控えた) 情報提供, 調査担当	
1990年～		International Association for Vegetation Science 会員	

1987年～	日本森林学会 会員		
1985年～	植生学会 会員		
1980年～	日本生態学会 会員		
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	教養学部 地域構想学科	職名	教授	氏名	増子 正	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
理解度の確認		2022年4月1日～		授業の冒頭で前回の重要事項について振り返りを行って理解度を確認している。			
理解度の確認		2010年4月1日～		授業の冒頭で, 前回の重要項目の確認を行っている。			
フィールドワークによる実体験		2010年4月～		3年生, 4年生の演習にフィールド調査を取り入れて, 実際の現場で様々な人との関わりを持たせ, 現場で起きている課題を知るための活動を実施している。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
令和4年度 セツ浜町地域福祉推進会議アドバイザー業務委託報告書		単著	2023年3月	令和4年度 セツ浜町 地域福祉推進会議アドバイザー業務委託報告書	増子正	pp.1-17	
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要		
科学研究費補助金 令和3年～令和6年 科学研究費補助金基盤研究(C)		2021年度～	共同(研究代表者)				
IV 学会等及び社会における主な活動							
2015年4月～				多賀城市こども子育て会議会長(多賀城市こども子育て会議会長)			

2013年4月～	宮城県共同募金会評議委員 運営参加・支援		
2012年4月～	宮城県社会福祉協議会評議委員 運営参加・支援		
2012年4月～	七ヶ浜町社会福祉協議会地域福祉活動計画策定委員会アドバイザー		
2010年4月～	仙台市社会福祉協議会評議委員 運営参加・支援, 調査担当		
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	教養学部 地域構想学科	職名	教授	氏名	松原 悟	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
アクティブラーニングの活用を工夫した。		2020年4月1日～		講義形態を変え、従来の一方的な講義形態から、学生との双方向的な授業に改善した。毎回の小レポートやテーマに基づいたグループワークを取り入れた。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
担当講義のパワーポイントの作成		2020年4月1日～		担当する専門科目(地域構想学基礎論、スポーツ指導論)において、最新の情報をもとにパワーポイントを作成し、講義において提供した。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
実習系科目の改善		2020年4月1日～		地域調査の集団での活動が困難なため、地域構想学発展実習(2年)演習(3年)の授業では、各自が暮らしている地域について、個別に調査を行い、よりよい街づくりに対して成果を報告させた。			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要		
IV 学会等及び社会における主な活動							
2016年4月～			仙台市クラブリーグ連盟会長 委員				
2001年4月～			日本サッカー協会マッチコミッショナーとして日本フットボールリーグの運営を補助 2019年からはJリーグも担当している 委員				
1980年4月～			日本体育学会会員 会員				

V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	教養学部 地域構想学科	職名	教授	氏名	柳井 雅也	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
少人数(20人以下)授業で感想文の共有化		2020年4月1日～		少人数(20人以下)授業では、毎回感想文を学生に書いてもらい、名前を伏してPDFに集約して学生に配布している。これにより、私の講義に関する課題を発見するだけでなく、学生同士の「気づき、考える視点、理解の深さ」を「見える化」している。			
地域調査を行う教育		2020年4月1日～		ゼミや発展実習では経済地理学的に学習効果のある地域の調査(主に商工業)を行っている。今年度はゼミ生と土湯温泉こけし工人調査、石巻水産加工工業調査、防災集団移転跡地における企画考案等)の調査・実習を行った。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要			
IV 学会等及び社会における主な活動							
2020年4月～			宮城県土木部ランドビジョン策定委員会 委員 委員				
2020年4月～			総務省「日本ふるさとづくり審査委員会」委員 委員				
2020年4月～			復興庁「令和元年度被災地における先事例収集業務」監修委員会 会長 委員				
2019年4月～			多賀城市長期総合計画策定委員会 会長 委員				

2019年～	復興庁「東日本大震災復興の教訓・ノウハウ集の作成に向けた調査分析事業」有識者会議委員 委員
2019年～	塩釜市長期総合計画策定委員会 会長 委員
2019年～	北陸港湾ビジョン委員会 会長 委員
2018年4月～	仙台市郊外住宅地西部地区プロジェクトの審査会 会長 委員
2018年4月～	復興庁「東日本大震災復興の事例収集・調査分析事業」委員長 委員長
2018年4月～	復興庁「ハンズオン支援事業委員会」委員長 委員長
2018年～	経済地理学会評議員 会員
2009年4月～	富県宮城推進会議幹事 委員

V 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			

VI 学内における管理運営に関する諸活動

--

2022年度							
所属	教養学部 地域構想学科	職名	教授	氏名	和田 正春	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
オンライン講義への対応と講義の質の確保		2020年4月1日～		<p>COVID-19感染症への対応として、オンライン講義が導入されたが、導入科目を数多く担当していることから、講義の質を低下させることなく、オンラインのメリットを拡大することで、新しい講義の手法の創造を目指した。受講者数が多い講義が大半であるため、動画配信のスタイルを取らざるを得なかったが、manabaを通じて質問を受け付け、それに丁寧に回答する(全て動画にし、自由に閲覧できるようにした)ことで、それぞれの疑問に答えるとともに、他者の考えを理解する機会にもなり、オンラインで失われがちな他者意見を知り、自分の考えと比較するきっかけにもなった。個別対応を進めたことが、受講意欲にも反映され、極めて負担の多い講義ではあったが、学生の満足度はとても高かった(学部内でも最高の評価を得た)。</p> <p>個別対応重視は以前から取り組んできたことではあるが、オンラインにおいても継続することができた。対面が復活しても、この手法の成果を活かして、教育効果の向上を図りたい。</p>			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
東北学院榴ヶ岡高校との長期課題探求プロジェクトの実施		2020年4月1日～		<p>今年度、榴ヶ岡高校の2年生を対象に、課題探求プロジェクトを実施している。内容は、仙台市交通局から依頼された自転車の交通安全という課題に対し、チームで提案を行うというものであるが、1年をかけた長期的なものであることや大学生がファシリテーターとして関わることなど、新しい要素を含んでいる。ありきたりな内容でなく、様々な調査や実験を行ったり、それを踏まえて提案を作成していくことで、高校生には示唆に富んだ内容になったが、大学生にとってもコミュニケーション面での学びが大きく、大きな成果が得られるものになった。次年度も継続していきたいと考えている。</p>			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数		
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
『市民活動論』	分担執筆	2022年9月	三恵社	藤井かし子	pp.89-91		
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							

今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)			
競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概要
Ⅳ 学会等及び社会における主な活動			
2022年11月～		河北新報社 河北経済研究所シニアフェロー	
Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	教養学部 地域構想学科	職名	准教授	氏名	天野 和彦	大学院の授業担当の有無	無
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概 要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要			
IV 学会等及び社会における主な活動							
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
VI 学内における管理運営に関する諸活動							

2022年度							
所属	教養学部 地域構想学科	職名	准教授	氏名	遠藤 尚	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
オンデマンド授業における双方向授業の取り組み		2022年4月1日～		オンデマンド授業の「地理学」において、responのアンケートを活用し、動画による授業内容に関する質疑やコメントを回答してもらい、次回の授業動画でそれについて解説するという形でできる限りの双方向授業の実現に取り組んだ。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標		オンデマンドの授業においても、できる限り学生の意見を取り入れた双方向の講義を行う。学生が主体的に取り組めるオンデマンド授業の実施。					
今年度の進捗状況		ほとんどの授業において、responを利用したクイズやアンケート、ミニレポートを毎回実施し、またそれらに対して回答、解説、授業改善などを行った。「ハザードマップポータルサイト」「地理院地図」を用いた実習を取り入れた。					
来年度の進捗目標		対面およびオンデマンド授業における双方向授業の実現を引き続き目指す。新キャンパス周辺に関する実習テーマや授業資料を開発する。					
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標		2017～2019年度に実施した現地調査の結果の分析を進め、学会発表と論文執筆を行う。また、2020年度～2022年度に行った先行研究の分析を元に展望論文を執筆する。2022年度に実施した予備調査の結果を元に、2023年度以降に現地調査の準備を進める。					
今年度の進捗状況		インドネシア、西ジャワ州バンドゥン市近郊の農家と企業を対象に予備調査を実施した。					
来年度の進捗目標		調査結果を元に学術論文を執筆、投稿する。執筆した展望論文を投稿する。2023年度8月に本調査を実施し、その結果の分析、学会による成果報告、論文執筆を進める。					
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)		個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要	

科学研究費補助金 基盤研究(C)	2020年度～2022年度	個別(研究代表者)	本研究の最終目的は、インドネシアを事例に、発展途上国における経済成長に伴うフードチェーンの変化による農村社会と農村世帯生計の変動について明らかにすることである。この点について考察するために、国内での商品調達が必要な生鮮野菜に注目して、外資系大型スーパーに至るフードチェーンの実態を捉える。そして、外資系大型スーパー向け生鮮野菜産地における生産状況、スーパー向け野菜導入による世帯や農村社会への影響を明らかにする。これら2点について検討するために、外資系大型スーパーや中間業者等に対する聞き取り調査と生産地における世帯調査を実施する。
IV 学会等及び社会における主な活動			
2022年11月～2022年11月	公開講座 みやぎ県民大学「地域の食」を愛でる」(公開講座 みやぎ県民大学「愛でるこころの教養学」) 講師		
2019年4月～	東北地理学会 評議員		
2018年9月～	東北地理学会 幹事		
2005年5月～	アジア政経学会 会員		
2003年12月～	東北地理学会 会員		
2002年8月～	人文地理学会 会員		
V 芸術分野や体育実技等における主な活動			
展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
現在の課題・目標			
今年度の進捗状況			
来年度の進捗目標			
VI 学内における管理運営に関する諸活動			

2022年度							
所属	教養学部 地域構想学科	職名	准教授	氏名	大澤 史伸	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
地域構想学演習でのフィールドワークを実施及び成果の製本		2011年4月～		3年生地域構想学演習(ゼミ)において、これまで北海道、愛知県、大阪府、東京都、神奈川県をフィールドに、各都市の企業、福祉施設、学校、NPO等における事例研究を行い、その研究成果として報告書を作成した。			
地域構想学発展実習の報告書作成		2011年4月～		2年生向けの実習において仙台YMCAが運営する幼稚園、保育園、児童館、スポーツクラブ、学童クラブ、NPO法人等でのフィールドワークを行い、報告書を作成する。			
地域構想学発展実習でのフィールドワークの実習及び成果の製本		2011年4月～		2年生選択科目における仙台YMCAでのフィールドワークの実施及びその成果を『「NPOを学ぶ」仙台YMCAをフィールドとして』と題する報告書にまとめた。			
講義内容の理解促進		2011年4月～		毎回、講義の最初に前回の講義の復習を行い、学生の理解度を高めた。			
学習した事項の記憶への定着と授業理解の促進		2011年4月～		毎回の授業の冒頭で、前回の復習とその回の概略を必ず説明し、授業終了時にはその回のまとめを行っている。			
リアクションペーパーの導入		2011年4月～		授業時にリアクションペーパーを配布・収集し、次回授業時の冒頭で質問・コメントに回答し、授業内容の理解の促進を図っている。			
2. 作成した教科書、教材、参考書							
『反福祉論－新時代のセーフティネットを求めて』(ちくま新書)		2014年9月～		福祉が持っていた意義とその限界を見極めつつ、さらに発展させていくための方法を不法占拠者や生活困窮者、災害被災者、ホームレスなど、福祉の制度から漏れてきた人々が、公助に頼らず自助・共助によって展開する暮らしを検証している。本書は、地域構想学科1年時の地域構想学基礎購読のテキストとして使用している。			
『福祉サービス論－ボランティア・NPO・CSR－』(学文社)		2014年3月～		本書は、著者が所属する東北学院大学教養学部で行っている「福祉サービス論」、および、大学院人間情報学研究科の講義科目「福祉市民活動論特講」、演習科目「福祉市民活動論演習Ⅰ」、「福祉市民活動論演習Ⅱ」の講義資料に基づいて、できるだけ平易で分かりやすく「ボランティア」、「NPO(非営利組織)」、「CSR(企業の社会貢献活動)」に興味を持ってもらえることを期待して執筆したものである。			
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
大学における建学の精神に基づく自校教育の現状と課題－「敬愛大学」(千葉県)、「実践女子大学」(東京都)の事例－		単著	2023年3月	総合人間科学, 13(8)	大澤 史伸	pp.21-36	
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							

『市民活動論－ボランティア・NPO・CSR』	単著	2022年4月	学文社	大澤史伸	pp.1-216
------------------------	----	---------	-----	------	----------

E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)

F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)

G. 学会における研究発表

H. 翻訳(学術書や原典等)

I. 特許

現在の課題・目標	
----------	--

今年度の進捗状況	
----------	--

来年度の進捗目標	
----------	--

Ⅲ 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)

競争的資金の名称	採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要
----------	----------	------------------------	-----

Ⅳ 学会等及び社会における主な活動

2020年4月～	東京富士大学経営学研究所客員研究員 助言・指導, 調査担当, 報告書執筆
----------	--------------------------------------

2020年4月～	一般財団法人滋慶教育科学研究所特別研究員 助言・指導, 調査担当, 報告書執筆
----------	---

2019年4月～	学校法人正則学院(東京都港区)評議員(学校法人正則学院(東京都港区)評議員)
----------	--

2012年4月～	一般社団法人北海道地域農業研究所協力研究員(一般社団法人北海道地域農業研究所協力研究員)
----------	--

Ⅴ 芸術分野や体育実技等における主な活動

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等
-----------------	-----	-----------	------------

現在の課題・目標	
----------	--

今年度の進捗状況	
----------	--

来年度の進捗目標	
----------	--

Ⅵ 学内における管理運営に関する諸活動

2022年度							
所属	教養学部 地域構想学科	職名	准教授	氏名	目代 邦康	大学院の授業担当の有無	有
I 教育活動							
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概 要			
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)							
2. 作成した教科書、教材、参考書							
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等							
4. その他教育活動上特記すべき事項							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
II 研究活動							
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)	発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称	編者・著者名	該当頁数	
A. 学術書							
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)							
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)							
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文							
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)							
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)							
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)							
G. 学会における研究発表							
H. 翻訳(学術書や原典等)							
I. 特許							
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)							
競争的資金の名称		採用年度(西暦)	個別・共同の区分 共同の場合の役割分担	概 要			
IV 学会等及び社会における主な活動							
V 芸術分野や体育実技等における主な活動							
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場 所	開催年月日(西暦)	発表・展示等の内容等			
現在の課題・目標							
今年度の進捗状況							
来年度の進捗目標							
VI 学内における管理運営に関する諸活動							

2022年度								
所属	教養学部 地域構想学科	職名	准教授	氏名	柳澤 英明	大学院の授業担当の有無	無	
I 教育活動								
教育実践上の主な業績		年月日(西暦)		概要				
1. 教育内容・方法の工夫(授業評価等を含む)								
オンライン講義型の授業でもできる限り、実習形式の課題を出す。		2020年4月1日～		作図や簡易的な模型など作成する実習型の課題を出す。				
2. 作成した教科書、教材、参考書								
独自のプリントをオンライン配布する。		2020年4月1日～		授業に沿ったプリントを作成し、メモができるようにしている。また学生が授業内容を復習できるように、PPTをホームページにアップロードしている。				
3. 教育方法・教育実践に関する発表、講演等								
4. その他教育活動上特記すべき事項								
建築研究所講師		2020年4月1日～		建築研究所にて海外の研修生に対し、津波シミュレーションについて講義している。				
現在の課題・目標								
今年度の進捗状況								
来年度の進捗目標								
II 研究活動								
著書・論文等の名称		単著・共著の別	発行又は発表の年月(西暦)		発行所、発表雑誌(及び巻・号数)等の名称		編者・著者名	該当頁数
A. 学術書								
Ba. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度あり)								
Bb. 学術誌に掲載した学術論文(審査制度なし)								
C. Bに順ずる発表機関誌に掲載した学術論文								
D. 一般著書・論文・エッセー(専門分野)								
E. 一般著書・論文・エッセー(専門分野に関連する領域)								
F. 書評・論評(専門分野及び専門分野に隣接する分野の著書・論文等)								
G. 学会における研究発表								
H. 翻訳(学術書や原典等)								
I. 特許								
現在の課題・目標								
今年度の進捗状況								
来年度の進捗目標								
III 学内外の競争的資金の獲得(採択されたものに限る)								
競争的資金の名称		採用年度(西暦)		個別・共同の区分 共同の場合の役割分担		概要		
IV 学会等及び社会における主な活動								
2018年～				日本地理学会会員 会員				
V 芸術分野や体育実技等における主な活動								
展覧会・演奏会・競技会等の名称		場所		開催年月日(西暦)		発表・展示等の内容等		
現在の課題・目標								
今年度の進捗状況								

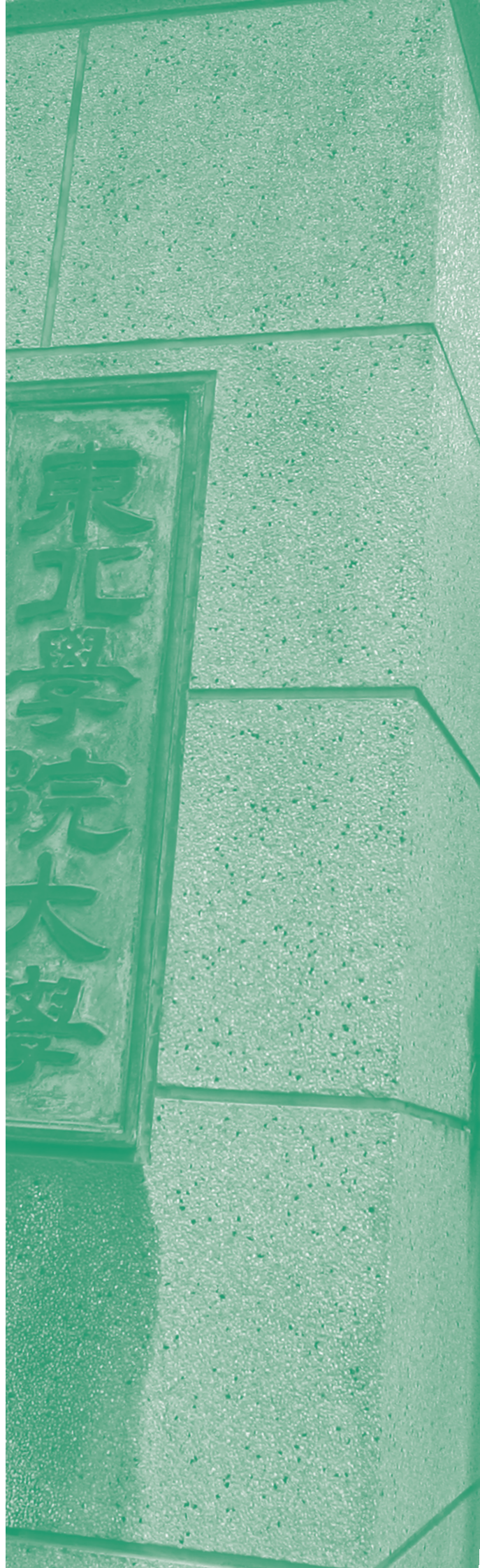
来年度の進捗目標	
VI 学内における管理運営に関する諸活動	

東北学院大学教員業務・活動報告書 2022

発行日 2023(令和5)年8月31日
編集 東北学院大学点検・評価委員会 教育・研究業績編集委員会
発行 東北学院大学
問い合わせ先 東北学院大学学務部教務課
〒980-8511 仙台市青葉区土樋一丁目3番1号
TEL. 022 (264) 6461 / FAX. 022 (264) 6480
E-mail : gakuji@mail.tohoku-gakuin.ac.jp
印刷 ハリウ コミュニケーションズ株式会社



東北学院大学
TOHOKU GAKUIN UNIVERSITY





東北学院大学
TOHOKU GAKUIN UNIVERSITY

